

---

# チートじゃ済まない

雨季

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チートじゃ済まない

### 【Nコード】

N2102L

### 【作者名】

雨季

### 【あらすじ】

ある日目が覚めるとそこには神が！そして叶えて貰った願いとは！リリカル世界でそこそこがんばる物語。これが自分の処女作となっております。気になること、言いたいことがございました感想下さい。

本編終了しました。

## プロローグ（前書き）

駄文なうえに厨二設定になっています。ついでに言つと携帯投稿なので短いです。ご了承ください。

## プロローグ

ある日、目が覚めるとそこには

「おはよう。目が覚めたかい？」

金髪のイケメソがいた。

「おい、てめえ誰だ」

「誰って神様だよ」

神だど？だとしたらもしかして俺は

「うん。死んでるよ」

心読みやがったこの野郎。

いや待てよ。まだコイツが神だという保証はない。もしかしたらドツキリということも。だとしたら。

「カメラは何処だ！」

「落ち着きなよ。そもそも此処君の部屋じゃないだろう？」

確かに此処は何もない白い空間。というより何故気付かなかった俺  
(泣)。

「落ち着いたようだから本題に入るよ」

君には転生してもらいます」

「だろうね」

「へー、気付いてたんだ」

「死んで神様に会ったら転生するのは常識だろ？」

「常識じゃないと思うけど……」

そうだろうか？まあそれは置いて

「なんで俺死んだの？そんでもってなんで俺が転生するの？」

誰だって疑問に思う事を聞いた。

「まず一つ目だけど、君は心臓発作で死んだよ。そして二つ目はクジで当たったからだよ」

心臓発作って……

しかもクジって……

「まあショックなのは解るけど、転生するとき特典あげるから」

「何でも願い叶えてくれるのか？」

定番だからな。

「うん、それ。でも叶えられるのーっただけだからね。あと記憶もそのままだからね。」

「何かセコくない。普通三つとか五つじゃない？」

「そんな事ないよ。普通記憶がそのままなんて事もないよ」

まあ願い叶えて貰えるだけいいか。

「ーっただからじっくり考えてね」

さてーっついでどれだけチートになれるか。

・・・・・・・・あれ出来るかな？

「なあ、自分の肉体そのままに他の生物の力全て取り込むって出来るかな？」

「出来るけど？」

よし、なら。

「タイプ・マアキュリーの力くれないか？」

「・・・・・・・・・・は？」

「いやだからタイプ・マアキュリー。型月の奴でO R Tとも言うわねの」

「いや分かるけど、本気？」そりゃ俺もそこそこチートだと思うけど。」

「そこそこじゃないよ。まあ叶えてあげるよ」

そう神が言った瞬間俺の体に力が満ち溢れた……気がした。

「ホントにタイプ・マアキュリーの力くれた？」

「うん、しっかりと。それじゃ行ってらっしゃい」

その瞬間俺の下に穴が開いた。

「ちよっ!!待て!!」

そして俺の意識は途切れた。

神 side

始めは心配だったけど、あれだけの力を与えれば大丈夫か。

「それにしてもなあ」

まさかタイプ・マアキュリーにするとはい、考えたなあ。これだけの発想力がある人間だったとは。

「ゼウス様。何処ですか」

「ハイハイ。今行くよ」

魔法少女の世界を楽しみなさい。

一条 要君。

## プロローグ（後書き）

えー、此処までご覧いただきありがとうございます。  
もっと精進してより良い小説にしたいので、これからもよろしくお  
願いします。

次回は主人公の設定でも書きたいと思います。  
これからも是非見てください。

## 無印版設定（前書き）

今回も、というかこれからも携帯投稿するので短いです。

5月15日更新

## 無印版設定

雨「みなさん、おはよう。こんにちは。こんばんは。作者の雨季です」

要「主人公の要です」

雨「今回は要のステータスを紹介したいと思います」

要「にしてもよ作者」

雨「なにかな要くん」

要「いやさ、よくO R Tなんてもんに手を出したな」

雨「とにかくチートにしたかった。ただそれだけ」

要「ふーん。まあそれはいいとしても、お前リリカルなのはよく知らないだろ」

雨「まあそうなんだけど、ウィキペディア使って頑張ろうと思う」

要「無謀だな」

雨「自分でもそう思う。それは置いといてお前のステータス発表するぞ」

名前  
いちじょう  
一条 要 かなめ

年齢

23 12

Fate風ステータス表

筋力 B+(EX)

耐久 A+(EX)

敏捷 B+(EX)

魔力 A++(EX)

幸運 C+

宝具 EX

( ) ORT状態時

スキル

アルティメットワン B(EX)・・・Bクラス以下の攻撃の無力化、Bクラスの魔力放出、高速再生、直感のスキルが付く。発動は一瞬。

武術 D・・・生前習っていたもの。武器を持った素人くらい簡単に倒せる。

状況把握 D・・・戦闘において自分の置かれている状況を瞬時に理解し、最善の一手を見つけ出す。日常では発動しない。

( ) ORT状態時

宝具

「侵食固有結界・水晶渓谷」・・・世界をORTの住んでいた空間に作り替える。正確には固有結界ではなく、ORTの異能。ORTが敵と認識したものの能力をワンランクダウン。

レアスキル  
形態変化・・・既に完成された魔法の形を変える。魔力の消費はほとんどない。

要「チートだな」

雨「チートだね」

要「おい作者」

雨「なにかな要くん」

要「FateのBクラスってなのはにおける何クラスなんだ？」  
雨「俺がイメージしてるのは

Fate

なのは

E

C

D

B+

C

A+

B

A A A

A

S+

くらいだな」

要「リリカル勢は俺にダメージ与えるには、AAAより上の攻撃しなきゃならないのか」

雨「そういう事」

要「酷いな」

雨「あらためてみるとね」

要「まあ、こんな厨設定がこれからも出て来るかもしれないが」

雨「チートじゃ済まないを」

要・雨「「よろしくお願いします」「」

## 無印版設定（後書き）

今回もこのような駄文をご覧いただきありがとうございます。  
何か意見がありましたら感想下さい。  
これからの執筆に役立てたいと思います。

## 第一話（前書き）

今回はちょっと頑張りました。

## 第一話

要side

「知らない天井だ」

何でか言わなきゃいけない気がしたし、ホントに知らない天井だ。

「何処だ此処」

（確か神に力を貰って、穴に落とされたんだったよな。とりあえず此処が何処か把握しないと。）  
ガチャ

そんなことを考えていると部屋のドアが開いた。そこに立っていたのは

「あつ！目が覚めたんだね。よかつた」

高町なのはだった。

なのはside

あの子大丈夫かな？

私は水と手ぬぐいの入ったバケツを持ちながら、そんなことを考えていた。

朝、家の前に倒れていた男の子。始めは綺麗な青っぱい白髪の長髪を見て女の子と思ったけど、顔立ちは男の子だった。

家の家族は私も含めてお人よしだから、すぐ空き部屋の布団に寝かせてあげた。

早く起きてくれないかな。色々話したいな。

そんなことを考えながらあの子の寝ている部屋のドアを開けると、あの子が目を覚ましていた。

「あつ！目が覚めたんだね。よかった〜」

要side

（ちよつと待て。何故未来の魔王が此処にいる）

そんな事を考えていたが、所詮は現実逃避。結論は出ていた。

（まさかりリカルなのはとは）

とらハの可能性もあったが、なのはから感じる膨大な魔力。以前の俺なら分らなかっただろうが、タイプ・マアキュリーの力を手に入れた今なら分かる。っていうかホントに力手に入ったんだな。

「ねえ、私は高町なのはって言うんだけど、貴方の名前教えて」

「ん？ああ、俺は一条要だ。よろしくなのはちゃん」

「うん！」

それから10分程度たわいもない話をしたあとなのはちゃんが

「お父さんとお母さん呼んでくるね」

と行って部屋を出ていった。

少なくとも最低限の情報は会話中に手に入れた。 ・ 原作前であること

・ 体が若返りしていること

・ 体の変化していること

・ なのはちゃん可愛いこと (重要)

さてこれからどうするか。

士郎 side

なのはが興奮しながらあの子の部屋から戻って来た。 どうやら目が覚めたらしい。

(さてどうするか)

あの子について軽く調べてみたが、名前や住所どころか、戸籍すらみつからなかった。

(これは直接聞くしかないな)

「士郎さん。 あの子様子見に行きましょう」

「そうだね。 行こうか」

どうなるかな。

要 side

ガチャ

再びドアが開いたと思ったら、若い男女が立っていた。

(この見た目で三児の親かよ)

実際見てみるとあらためてそう思った。

「こんにちは要くん。俺はなのはの親の高町士郎。こっちは妻の桃子だ」

「よろしくね。要くん」

「一条要です。なのはちゃんからご家族のことは伺ってます。この度は助けていただきありがとうございます」

「あらあら、礼儀正しいのね。でもそんなに固くならなくていいのよ」

「そうだぞ要くん。俺達が勝手にやったことだからかな」

（まったくお人よしだなあ。）

そう思ってもしかたないと思う。こんなこと言う人実際にはどれだけいるか。

だが挨拶も此処までだ。そろそろ本題に入るはず。

「いきなりで悪いんだが君に聞きたいことがあるんだ」

ほらきた。

「何でしょう」

「君について調べさせてもらったんだが、全く情報が出てこなくてな。君が何者か教えて欲しい」

随分直球できたな。さてどうするか。

・  
・  
・

よし、こつちも直球でいこう。下手にバレルよりマシだ。

「……これから話す事を信じるかはそちら次第です。それでもいいなら」

「構わないよ」

「私もよ」

そして俺は話した。元々この世界の住民じゃないこと。とある理由から飛ばされて来たこと。特殊な力があること。もちろん飛ばされた理由や力については言わなかったけど。

「成る程、違う世界か」

「凄いわねえ」

「随分あっさり信じましたね」

「その話ならつじつまが合うし、なにより君の目が嘘を言っていない。まあ隠し事は有るようだがね」

「参ったな。そこまでお見通しですか」

高町士郎を嘗めてたな。

「その隠し事もいつか教えてくれるとうれしいわね」

「そうだね。さて……………その三人そろそろ出て来きたらどうだ！」

えっ、三人てまさか。

ガチャ

「アハハ。ばれちゃった」

「気付かれるとは思ってたけどな」

「にはははは」

高町三兄妹がそこにいた。

「要くん。家の家族全員に知られちゃったな」

知られちゃったな、じゃねーよ。確信犯のくせに。

「なあ要くん。一つ提案が有るんだが」

「何でしょうか（怒）」

「そう怒らないでくれ。それで提案なんだが……………家の家族の一員にならないか？」

「お断りします……………と言っても無駄な努力になりそうですからね。」

これからよろしくお願いします。」

こうして俺は高町家の一員となった。

それにしても三人の気配に気付けないなんて、原作までには力を使  
いこなせるようにしよう。

## 第一話（後書き）

このような駄文ご覧いただきありがとうございます。

次は原作までの主人公の生活を書こうと思います。そしてとら八からあのキャラを出そうと思っています。

## 第二話（前書き）

初めはなんとなくやってみよう。と始めたこれですが、今では楽しくなってきました。

## 第二話

要side

高町家の一員になって一ヶ月、原作開始まであと半年を切った。  
俺の生活について紹介しようと思う。

朝

朝はだいたい恭也兄さんたちとの鍛練から始まる。この鍛練のおかげでかなり力を抑えることができるようになったんだけど……

「どうした！動きが鈍いぞ！」

「ちよっ！恭也兄さんタンマ！」

始めの頃、まだ力のコントロールがきかなかったとき殴り飛ばしてしまっただけを恨んでるのか、俺に切り掛かるときは全力でないにしろ本気だ。俺なんて所詮身体能力以外は、簡単な武術ぐらいしかないのに。最初は剣術を習おうと思ったけど

「要には剣の才能がないな」

と土郎さんに一日目にはっさり切られてしまった。  
土郎さんいわく

「要には基本的に戦闘系の才能は少ないな。まだそのよく分からな

い武術を伸ばした方がいい」

らしい。ちなみによく分からない武術とは俺が親父かはら習ったもので、空手、合気道、ムエタイ、さらに何処かの民族の武術など、世界中の武術を組み合わせたものらしい。そういえば親父にも凡才って言われたな。

鍛練が終わると朝食、の前になのはちゃんを起こさないといけない。どうせソックをしても起きるわけないので、無断で侵入。気持ち良さ気に寝ているのはちゃんを起こすのはちよっぴり罪悪感があるけど

「起きろなのはちゃん。朝だぞ」体を揺すりながら名前を呼んでみるけど

「.....」

無反応。しかたない、いつものやりますか

「あつ、あそこに怒った桃子母さんが」

「にゃ〜〜！！起きてる！！起きてるよ〜〜！！！！ってお母さんは「？」

「おはよう。なのはちゃん」

「また騙されたの〜」

毎回騙されるなのはちゃんが悪いと思うが、俺も怒った桃子母さんは怖い。

朝食を食べてなのはちゃん達を学校へ送り出したら、昼まで日課のランニングである。お前は学校どうしたって？戸籍もない人間ですよ俺。入学には最低半年掛かるらしい。

それはともかくそろそろ目的地に着きそうだ。そこは神社。とら八を知っている人ならご存知の八束神社です。なぜ此処まで来たかというと

「クー」

そうこの子、久遠が目当てだ。ランニングを始めて最初の頃、此処で休んでいたとき会ったんだよね。まさかりリカル世界に久遠がいるとは思わなかったけど。

「ク〜？」

「ん？ああ、ちょっと考え込んだな。」

なに言ってるか分かるのかって？俺の中にいる奴のおかげでなんとなく分かるんだよね。

「要。遊ぼう」

「おう」

いつの間にか人型になった久遠が目の前に居た。

いや〜、ホント久遠は癒されるよね。妖狐だから俺の中にある奴に気付いて怯えないか心配だったけど、気付いても懐いてくれた。久遠はいい子だよ。

「要？」

「ゴメン、ゴメン。そんなじゃ遊ぼうか」

「うん！」

持ち帰りOK？

昼

今日はなのはちゃんが昼までなので、家族＋で昼食だ。」

「ちょっと何で＋なのよ」

「アリサちゃん落ち着いて」

おっと口に出ていたようだ。そう＋というのはなのはちゃんの友人であり、俺の方が年上なのに呼び捨てする失礼なアリサちゃんとおしとやかで可愛いすずかちゃんだ」

「あなたわざと口に出してるでしょ？」

「可愛い／＼／」

アリサちゃんは面白いこと言うな。

「当然じゃないか」

「要のくせにー!」

今日のお昼は騒がしくなりそうだ。

夜

夜は基本的に眠気がくるまで瞑想をしている。力のコントロールを上手くやる為にはこういう些細な努力が必要なのだ。

コンコン

「要くんちよつといいかな？」

おや、なのはちゃんが来たようだ。

「入っていいぞ」

「エへへ、お邪魔しまーす」

「どうしたのさ突然」

「えっとね、要くんが家族になって一ヶ月だよね」

そうなんだよな。思ったより早かったな。

「それでね。私のこと、そろそろちゃん付け止めてほしいなと思って」

「ふむ。それもそうだな。だったらなのはちゃんも俺のことをお兄ちゃんと呼んで貰おうか」

さてどんな反応するかな。

「ふえ！？え、えつと要お兄ちゃん？／＼／」

何この可愛い生き物。久遠と同等かそれ以上じゃね？

「ハッハッハ。冗談だよ冗談。これからもよろしくね。なのは」

「うん！ー！」

さっさと強くなって、この日常を守るようにならないとな。

## 第二話（後書き）

久遠出してしまいました。どうしましょう。これからも出してレギュラー化したいと思うのですが。みなさんの意見待っています。

## 第三話（前書き）

英語は赤点クラスなので、デバイスは日本語にさせてもらいました。

## 第三話

要side

なんだか今朝のなのはの様子がおかしい。

「どうかした？なのは」

「えっとね。なんか変な夢見ちゃったの」

今日だったか、原作スタートは。力抑えてたから念話届かなかったのかな。しかしとりあえずは今晚魔法少女の誕生か。

「どうかしたの？要くん」

「今日から俺も学生だなあ。って思ってね」

「うん。そうだね」

そう、今日から俺も聖祥に通うのである。

「「行つてきまーす」」

「気をつけてな」

士郎父さんに見送られながら俺となのははバスに向かった。バスに乗ってすぐアリサとすずかの隣に座った。

「おはよう。なのは、要」

「おはよう。なのはちゃん、要くん」

「うん。おはよう。アリサちゃん、すずかちゃん」

「おう。おはよう二人共」

「それにしても要もようやく学生ね」

などとアリサが言うものだから

(少し弄ってやるっ)

ついつい俺はそんなことを思ってしまったわけで

「そうだな。ただアリサと学年が違うのが残念だな」

なんて言ってみた。

「なっ！………何言ってるのよ！！／＼／」

おお、これはいい。

「ま、まあそこまで言うならなるべく一緒にいてあげてもいいけど  
／＼／」

このままほっといてもいいんだが、二人の視線が痛いから現実に戻してやるか。

「今のは冗談だ。だから戻ってこい」

「なっ！乙女の純情を弄んだのねー!!」  
俺はアリサに首を絞められて

「ちよっ!.....ア.....リサ.....あっ!」

墮とされた。

「あー、酷い目にあつた」

「流石にさっきのはやり過ぎだと思つな」

「そうなの。要くんは反省すべきなの」

「フンッ!」

まあ、俺もちよっぴり罪悪感あるけど。

「あっ!俺、職員室行かないといけないから」

「わかつたの」

「それじゃあ帰り待ってるね」

「.....」

嫌われちゃったかな。

「それじゃあ私が合図したら入って来て下さいね」

「はい。わかりました」

あー、緊張するな。転入なんて初めてだからな。何て言おう。

「要くん。入って来て下さい」

っと。出番だ。

教壇の前に立って無難に自己紹介をした。

「一条要です。好きな食べ物はカレー。嫌いな食べ物は特にありません。早く学校に馴染みたいので仲良くしてください」

パチパチパチ

（さて、ここからが本番だな）

そう、ここからがよくある質問攻めである。

「はい。よろしく申し上げます。それじゃあみんなの中に質問ある人」

ハイ ハイ ハイ ハイ

クラスのほとんどが手を挙げた。頑張つて答えるのでしょうか。

放課後、三人娘は校門の前で待っていてくれた。

「待った？」

「ううん。私達も今来たところ」

となのはが応えてくれた。

それにしてもアリサまだ怒ってるかな？

「アリサ。朝ゴメンな。ちよっぴりやり過ぎた」

「別にいいわよ。あんたの冗談にも馴れてきたし」

よかつた。嫌われてなくて。

「アリサちゃんと要くんも仲直りしたことだし、帰ろうか？」

あつ、そういえば今日は……

「帰り途中で抜けるけどいいかな？」

「ふえ？何でなの？」

「ちよつと神社に」

そう、今日は久遠に餌をやる日なのだ。ちなみに、ここにいる三人には久遠を紹介している。

「久遠に会いに行くの？うらやましいわねあんた。」

「いいなあ」

「ハツハツハ。二人は塾だろう？また会わせてやる。あとなのはは二人と一緒に行け」

「えー！何でなの！」

「いいから。また会わせてやるから。なっ？」

「うう。わかったの」

ユーノイベントを無くすわけにはいかないからな。

さて所変わって神社なわけだが。

「ポリポリ」

ポッキー食べる久遠（人型）可愛いな。

「ねえ、要」

「なんだ、久遠」

お持ち帰りしたいな。

「昨日よく分からないものが、街に落ちてきた」

「！……………ああ、そうだな」

流石妖狐というべきか。ジュエルシールドに気付いていたとは。

「気をつけて。あれ、よくないもの」

「わかった。気をつけるよ」

今夜が実戦本番だ。

やはり夕飯時、なのはからフェレットの話題がでた。というか父さん、フェレットくらい知っとけよ。

夜になったとき、ユーノからの念話があった。内容は別として、力がある程度解放していれば受信が出来ることがわかった。さてなのはも家を出て行ったし、こっちも動くのでしょうか。

「何処にいくんだ。要」

「……………士郎父さん」

気付かれるのは分かってたけど、まさか話しかけられるとは。

「なのは追いに」

この人に嘘は通用しないからな。

「そつか………気をつけるよ」

「………いいの？」

「ああ。ただしお前もなのはも怪我をするなよ？」

「了解」

そして俺はすぐに、なのはの後を追った。

士郎 side

まったく。こんな時間に外に出て行くとはな。だが俺の勘が、自分が行っても無力だと言ってる。だったら要に、俺の息子に任すしかない。あいつならきっと、何とかしてくれる。

初めて恭也と試合をしたとき、あいつが使ったのはただの正拳だった。いや、型はただの正拳だったが、その疾さと威力は異常だった。本人が一番驚いていたようだったが、これがあいつの言っていた力かと思ったが、本能的にこれはその一部だと思った。

ともかくあれだけの力があれば、なのはを助けることもたやすいだろう。

「なのはを頼んだぞ。要」

なのはside

夢と下校中に聞いた声に呼ばれて、私は夜の街を走っていた。普段ならすぐにバテてしまうのに、今は走り続けることが出来た。

あのフェレットさんがいる動物病院に着いたとき、そこにいたのは走り回るフェレットさんと

大きな怪物だった

「ふえ〜！？何なのこれー！？」

そんな混乱している私のところにフェレットさんが来た。

「よかった！来てくれたんですね！」

「やー！！フェレットさんが喋ったー！！  
もう嫌〜！」

「助けて！要く〜ん！」

要side

「ハックション！」

誰か噂でもしてるかな？つと、そろそろ着くかな？  
俺が屋根から見下ろすとそこには

「レイジングハート！！セット・アップー！！」

《了解しました。セット・アップ》

ちょうど変身したなのはがいた。だがその瞬間、怪物がなのはに向かっていった。それとほぼ同時に俺も怪物に向かって跳んだ。

（身体能力30%解放、魔力10%解放）

俺は跳ぶと同時に力をコントロールし、そして

「ぶっ飛ばす！！」

怪物を蹴り飛ばした。

パン

怪物は碎け散った。って

「脆っ！！」

びっくりした。脆過ぎだろ。今の筋力せいぜいE+とD+くらいなのに。

「だっ、誰ですか！？貴方は！？」

「要くん！？」

「よっ！助けに来たけど、殺っちゃった」

「殺っちゃった。じゃないよ！！粉々だよ！！」

「あゝ。なのはさんの知り合いですか？」

「うん。私の家族だよ」

「よろしくな。獣」

「酷っ！！僕はユーノ・スクライアです」

ふむ。なかなか弄りがいがあるが、とりあえず

「あれ、だいじょうぶ……ぶ？」

粉碎した元怪物を見たら、再生してるよ！ぐっちよぐっちよって  
るよ！？

「にゃー！気持ち悪い！！」

「早く封印しないと！なのはさん封印してください！」

おいおい。初心者いきなりそんなこと言っなよ。

「封印でどうするの！？」

「心を澄ませて下さい。そうすれば貴女だけの呪文が思い浮かぶは  
ずです」

「私だけの呪文……」

早くしろよ。もうすぐ再生が

「……」

「終わったー！！」

ちっ！今度は魔力増やしてジュエルシード以外塵にして………

「リリカルマジカル」

「封印すべきは忌まわしき器、ジュエルシード！」

おっ、ようやくか。

「ジュエルシード封印！」

《了解しました》

その時、杖の先からピンクのリボンが伸び怪物を捕らえた。

「………！」

怪物の額にXXEIという文字が浮かぶ。

《準備完了》

「リリカルマジカル ジュエルシードシリアルXXEI 封印」  
《封印》

リボンが怪物を貫き、怪物を消滅させた。

怪物が消滅したあとにその場にはジュエルシードが転がっていた。

「それがジュエルシードだよ。レイジンググハートで触ってみて」

ユーノがなのはに言う。なのはが言われたとおりにするとレイジンググハートにジュエルシードが取り込まれた。

「あれ？・・・終わったの・・・？？」

「はい、貴女のおかげで・・・ありがとうございます」

「っと」

倒れそうになったユーノを受け止める。

「要くん。その子大丈夫？」

「ん〜。疲れが出たんだろ」

さてそれよりも。

「なのは逃げるぞ」

「何で？」

「周りを見る」

そう。さっきの怪物のせいで周りが壊れているのだ。

「じゃははは」

「さあ、公園にでも行こうか」

警察が来る前にね。

ユノ side

「……………う、うーん」

えっと確か僕は。

「やっと起きたか」

「怪我、大丈夫？」

そっだ、この二人に助けってもらったんだ。とりあえず御礼を言わないと。

「ありがとうございます。お二人のおかげで助かりました。怪我も残った魔力を治癒に使ったので大丈夫です」

「気にするな」

「よかつた」

親切な人たちだな。

「ねえ、自己紹介しない。私は高町なのはだよ」

「俺はなのはの家族の一条要だ」

「僕はユーノ・スクライア。ユーノが名前で、スクライアが部族名です」

「ユーノくんか。可愛い名前だね」

か、可愛い……か。まあよく言われたけど、やっぱりへこむな。僕、男なのに。

「おいおい、なのは。男に可愛いはないだろう」

「にはは、そうだね。ゴメンね。」

「いえ、気にしてませんから」

それにしても、こんなにいい人たちを巻き込んでしまった。こんなではダメだ。この先は自分で回収しないと。

「なのはさん」

「なに？ユーノくん」

「レイジングハートを返して下さい」

「えっ！？何で!？」

「お二人には本当にお世話になりました。だからこそ、これ以上巻き込みたくないんです。ですから、レイジングハートをかえ」馬鹿

かお前は!!」「えっ?」

何で怒っているんだ?

「お前さ、自分一人じゃ封印どころか、あの怪物を退けることも出来なかったの、もう忘れたのか?それともあれか?魔力も体力も全快でレイジングハートがあれば、あんな怪物簡単に倒せます。とても言つつもりか?」

ぐっ!.....確かに彼の言う通りだ。いくら体調が万全でレイジングハートがあっても、ジュエルシード一つ封印出来ればいいほうだ。でも

「でも!貴方たちを巻き込むわけにはいかないんです」

「ねえ、ユーノくん。私たちもう巻き込まれてると思っつよ?」

「その通り。まったく、お前もなのはも人に頼るということを知らなさすぎる」

「にゃっ!何でなのはもなの!?!」

「自覚してなかったのか!?!」

「酷いの〜!!!」

ああ、この人たちは本当にいい人過ぎる。

「.....あり.....がとう」

僕はいつの間にか涙を流していた。

要side

何故かユ一ノが泣いていたが、それはいいとして

「そろそろ帰ろう、なのは」

「うん！」

暢気だなあ。ここからが大変なのに。

「あの、本当にお世話になっていいんですか？」

「も〜。気にしないでいいよ」

「そうそう。しつこいと嫌われるぞ。どうせ紹介するときにはペットとしてだし。あっ！そうだ。敬語は禁止ね。あと、さん付けも」

堅苦しいの嫌いなんだよね。

「……………ペット……………分かりました。じゃなくて、分かった」

よしよし。

「要くん。早く帰ろう」

「……………おっ」

さて、帰るか……………地獄に。

玄関前

「お前たちは、俺たちがどれだけ心配したか分かっているのか!!」  
「！」

「「ごめんなさい」「」

ただいま恭也兄さんに説教されています。 土郎父さんは恭也兄さんたちには何も言わなかったようだ。

「要!!!!聞いているのか!?!」

「はい!!!!聞いております!!!!」

早く終わらないかな(泣)

ちなみに、ユーノはあっさりペットとして認められました。  
ユーノ自身はちょっとショックだったみたいだけど。

### 第三話（後書き）

今回もこのような駄文をご覧いただきありがとうございます。  
どこかおかしい所がありましたら教えてください。

## 第四話

要side

恭也兄さんの地獄の説教から一夜開けた朝。とても調子が悪いです。昨晚の力の解放が筋肉痛として襲って来るとは……魔力を使って回復してもいいんだけど、それだと筋肉付かない気がするんだよな。

とりあえずいつも通りなのは起こそう。

「なのは〜。起きてるか〜」

まあ、起きてるわけ「起きてるよ〜」なん……だど？俺は急いでドアを開け、なのはに尋ねた。

「なのは！病気か!？」

「にゃっ!?!いきなり入ってきて酷いの!!!」

なにやら話を聞くと早くに起きてユーノと話していたらしい。

「ねえ、要。聞きたいことがあるんだけど?」

ユーノが話しかけてきた。

「スリーサイズと体重以外なら答えよう」

「誰も興味ないと思うの……」

なのはのくせに生意気だな。

「なのはから聞いたんだけど、要も異世界から来たって」

ユーノも異世界出身だから何処から来たか興味あるのも当然か。だが

「少し違つぞユーノ。俺は異世界じゃなくて、並行世界から来たんだ」

「並行世界？どう違つの？」

「その疑問には学校で、念話を使って答えてやるよ。なのは」  
今話してたら確実に遅刻だからな。

ということまで現在学校にいる。

『それじゃ、異世界と、並行世界の違いを説明するぞ』

『・・・・・・・・授業中なのに・・・・・・・・』

並列思考・・・・・・・・だったか？とりあえずその練習にもなるから何も問題ないだろう。

『さて、二つの違いは根っこが同じか違つかなんだ』

『えっと・・・・・・・・どういふことっ？』

『異世界はまったく違うもの。並行世界はよく似たもしもの世界なんだ』

『成る程』

ユーノは理解したようだが、なのははというと

『……………えつと?』

ダメみたいだな。

『いいか、なのは。具体的にいうと、異世界ってのは地球と同じ歴史がまったくないもの。並行世界ってのは、そうだな。なのはが魔法を知らない世界だったり、俺がいない世界だったりするものだ』

『でもそれありえない話じゃないの?』

そうなんだが……………

『それが実際にありえているのが、並行世界なんだよ』

『そーなのかー』

ルー アか……………

下校中ジュエルシードの発動を感知したので、今神社にいるわけで

すが

「！！！」

犬の化け物がいます。

「ユーノくん何あれ!?!」

「ジュエルシードが原住生物を取り込んだんだ!?!」

たいへんだ〜(棒読み)

「今回パス」

「何で!?!?!」

みなさんは知ってると思うが、俺筋肉痛なんだよね〜。

「というわけで頼んだ!」

「だから何で!?!?!」

「俺はいいからさっさと封印しなさい」

「えっと………どうするんだっけ?」

「我は使命からのパスワードを!」

「えー!あんなに長いの覚えてないよ」

そりゃそうだ。いくらなのはが頭いい方だからって、一回で覚えられるわけない。

「もう一回言うからそれに続けて!!」

ダメだな。もう間に合わない。

《スタンバイレディ セット・アップ》

そのとき、レイジングハートが勝手に起動した。

「えっ!?!」

「すごい」

流石なのはだな。才能の塊だな。

「なのは。バリアジャケットの装着を」

「うん!」

《バリアジャケット》

その瞬間化け犬が突っ込んだ。だが、なのはのバリアジャケットにぶつかって吹き飛んだ。原作ならここで終了なのだが

「!!」

ぴんぴんしていた。

あれ?何で?まあ、とりあえず。

「なのは大丈夫か？」

「うん。ありがとう。」

にしてもどうするか。昨日みたいにぶっ飛ばすか。だがそのとき、化け犬に雷が落ちてきた。

(雷？フェイトでも来たか？)

だとしたら早過ぎる。俺の存在で流れが変わったかと思ったが、出てきたのは

「要！大丈夫？」

久遠だった。

「……………要くん。誰その娘」

なんかなのはが怖いよ？

「後でね。今は封印してくれ」

「そ、そうだよなのは」

ユーノも恐ろしいらしい。

「レイジングハート封印」

《イ、イエス。マスター》

レイジングハートもか。

「リリカルマジカルジュエルシードXVII封印」

《封印》

封印が終わったそこにいたのは成犬だった。成る程、原作よりしづとかったのは子犬じゃなかったからか。

「なのはお疲れ様」

「よくやったな」

「それであの娘……誰？」

恐っ！魔王降臨！？

「要、恐い」

くお〜ん！俺の後ろに隠れないで〜！！

「なのは、落ち着いて聞けよ。この娘は久遠だ」

「……………へっ？」混乱……………するよな

「でも久遠ちゃんて、狐でしょ？」

「そうなんだが、人にもなれるんだよ。久遠。狐になってくれ」

「うん」

そう言うと久遠は子狐になった。  
なのはもユーノも目を丸くしていた。それもそうか。

「ちょっと！なんなんですかその娘！？」

「久遠ちゃんも魔法使えたの！？」

「正確に言えばまったく別物だけどな。とりあえず家に帰ろう。」

まだボー然としてるな。この二人。

久遠連れて家に帰ってきたのだが、

「かーわーいー！！」

「クー！！」

しまった。久遠を家に連れてくるべきじゃなかった。美由紀姉さんがこつなることぐらいわかってたのに。

「こら美由紀！いい加減にしなさい！」

おお、流石桃子母さん。

「さあ久遠ちゃん。こっちで私と遊びましょうね」

「クー!？」

母さん!あんたもかい!!

その日以降、久遠は家族の一員となった。

#### 第四話（後書き）

いつも通りこのような駄文をご覧いただきありがとうございます。  
久遠レギュラー化しちいました。みなさんの意見がくれば参考に  
したのですが、今だに感想がないので勝手にやりました。  
それにしても感想がないなんて、才能ないのかな……  
まあ所詮自己満足の小説ですから気にしませんけどね。

## オマケ1 (前書き)

一万アクセスありがとう

## オマケ1

雨「ヤッター!!」

要「うおっ！なんだいきなりマシオ　みたいな声だしやがって」

雨「聞いて驚け！なんと一万アクセス突破したんだぜ!!」

要「型月とリリカルなのはのネームバリューのおかげだろ」

雨「それ禁句」

要「まあいいか。で？ゲストでも来るのか？」

雨「その通りではどうぞ！」

美「どうも高町美由紀です」

桃「高町桃子です」

要「ちよっ！なんで美由紀姉さんと桃子母さんなんだよ！！普通なのはとか久遠とかだろ！」

美「うう、要ちゃんが酷い」

桃「あらあら、お仕置きが必要かしら？」

要「ひいっ！ごめんなさい、ごめんなさい。」

雨「あそこで桃子さんの覇気にやられてる主人公は置いて、お二人には要のことをどう思っているか聞きたいと思います。では始めに美由紀さんどうぞ！」

美「要ちゃんはイタズラ好きかな。やったあとちゃんと謝るんだけどね。それと努力家だよ。どんなことがあっても一日の終わりに瞑想を忘れないしね」

桃「要はいい子よ。いつもお手伝いしてくれるのよ。それと料理は野菜炒めしか作れないんだけど、この子を作る野菜炒め以上に美味しいもの食べたことがないわ。気もきくし、是非なのはお嬢さんになってほしいわ」

雨「ほうほう、なかなか好印象ですな。しかし野菜炒めとは・・・・まあ男は一つのことにごだわるのが多いですからね。どうせ転生前、一人生活のときに極めたんでしょう」

要「オイコラ。なに家族の前で転生だのなんだの言ってるんだよ」

雨「要くん、ここはオマケ空間ですよ。そんな細かいこと気にしちゃ、ダメダメ」

要「身体能力90%解放、魔力90%解放、アルティメットワン発動！！」

雨「えっ？ちょっと」

要「塵にする！！」

雨「タンマタンマ！！俺が悪かった！！」

要「黙れ！！キモいんだよ！！」

雨「アッー！！！」

パアン

要「キモイ作者も消えたことだし、桃子母さん、美由紀姉さん締めお願い」

桃「一万アクセスありがとうございました。」

美「これからも『チートじゃ済まない』を応援して下さい」

## オマケ1（後書き）

いつもの如く駄文をご覧いただきありがとうございます。

今回は一万アクセス記念のオマケとしてちゃっっちゃと書いたものです。

次は五万アクセスのときに書きたいと思います。

これからも応援よろしくお願いします。

## 第五話（前書き）

所々おかしいところがあると思いますが、見てもうええねばつれしいです。

## 第五話

要side

神社でジュエルシードをゲットしてから俺となのはは何度か深夜にも探索に行った。

そして今俺は

「ヘイ、パス！」

サッカーをやっている。

「要、頼みがあるんだが」

「土郎父さんが珍しいね。どうしたのさ」

「今日翠屋FCの試合があるだろうっ？」

「そっだね。応援頑張るよ」

「いや、今日は応援は応援でも選手として参加してほしいんだ」

「へっ？なんでさ？」

ちなみに俺はサッカーより野球の方が好きだ。さらにいうとツバメ

の球団のファンだ。

「いやね。レギュラー選手が怪我をしちゃってな。お前に参加してほしいんだ」

「補欠は？」

「補欠もレギュラーも満場一致でお前がいいとなってな」

働け補欠。

「わかった。頑張るよ」

「すまん」

という訳で俺はサッカーをやっているのだが

「要くん頑張つて〜！」

「負けんじゃないわよ〜！」

「そこでシュートなの〜！」

「クー〜！」

三人娘＋1が俺を中心に応援してくれているため、敵味方、はては観客からの視線が痛い。世間一般のオリ主の気持ちがあった。

「つと、危ね」

そんなこと考えてるとスライディングされた。いつも試合してる恭也兄さんに比べたらスローモーションみたいなものだから簡単に避けられるけど。とりあえずボール持っていると狙われるからさっさとパスしよう。「よつと」

ちよつと高めに蹴ったボールを見事にヘディングで決めてくれた。スゲー。

そんなこんなで4・0で圧勝した。凄いな翠屋FC。

「凄かったぞ要」

「なにがさ？土郎父さん」

「なにがって。ゴールすべてアシストしてたじゃないか」

「そうだったけ？」

気付かなかった。

「まあいいか。よしみんな、店で打ち上げるぞ！！」

「「「「「ワッー！！」「」「」」

「要くん凄かったの!!」

「あれでシユート入れたら文句無しなんだけどね」

なのはもアリサもそんなこと言うので

「どうだった？すずか」

あえてすずかに聞いた。

「その、かつこよかったよ／＼」

なんか顔を赤められた。フラグいつ建てた？  
そして殺気が強まった。

「なのは。要を取られないように頑張りなさい。アリサちゃんもね」

「にゃっ!？お母さんなに言ってるの!？」

「もっ、桃子さん!？」

「向こう騒がしいな。久遠」

「クー」

今日も癒されるな。

「……ん？今ジュエルシードの気配がしたよう  
な。あっ！そういえば今日大樹事件だったけ？どうするべきか。こ  
こでジュエルシード手に入れてもいいんだけど、なのはが覚悟を持  
つようになる大切なイベントの一つなんだよね。ここはスルーする  
か。」

原作通り事件を発生させてなのはジュエルシードを封印できたわ  
けだが、はつきり言ってさっきまでの俺を殴ってやりたい。なにが  
なのはの覚悟のためだ。自分も覚悟を持ってなかったじゃないか。

「……要くん。ユーノくん私気付いてたのに気のせいだと  
思っちゃった」

「なのは……別になのはのせいじゃないよ」

ユーノがそんなことを言うが、その通りだ。

「なのは、ユーノの言う通りだ。なのはに責任はない。全部……  
……俺の責任だ」

「えっ？」

「要……どっしりして？」

「俺もジュエルシードには気付いてた。いや、核心していた。けどなのは成長のためとかそんな理由で無視したんだ。本当に成長しなくちゃいけないのは自分なのに……」

「要……」

「要くん……」

ああ、失望してるんだろうな。

だがなのは口から出たのは意外な言葉だった。

「ありがとう」

「……えっ？」

理解できなかった。俺があの時ジュエルシードの存在をなのはに伝えていれば街は壊れなかったのに。何故感謝されるのかわからなかった。

「なんで」

「だって要くん、私のことを思ってたんでしょ？それに私が気付いてたら防げたことなんだし、次からは気をつけよう」

「そうだよ。それに被害も最小限に抑えれたし、これが終わりじゃない。まだジュエルシードはたくさんあるんだから、こんなところでメソメソしてる暇はないよ」

優しいな、優し過ぎるよ二人とも。

「あり………がとう」

俺は泣きながらそう言った。

「あーあ、やつちまったな」

俺は夜、部屋でそう呟いた。元々俺に覚悟なんてあるわけなかったんだ。ただ異常な力を手に入れただけで、心は過保護な日本で育った人間のままだから。

『要、どうかしたの？』

久遠から念話が来た。ちなみに久遠は念話を一発で習得した。

『いやね。ただ俺は情けないなと思ってね』

『?????』

久遠はなんのことか分かってないみたいだけど、まあいい。

さてそろそろフェイト戦か………

頑張らないとな。なのはのためにも、ユーノのためにも、そして俺自身のためにも。

## 第五話（後書き）

えー、今までで一番酷いのではないかと思えます。

この先どうなるかわかりませんが、それでも見てもらうとつれい  
です。

## 第六話（前書き）

厨二設定があります。

## 第六話

なのはside

今日はジュエルシード探しはちょっと休憩で、すずかちゃんの家遊びに来ています。

こんなことしていいのかなって思うけど、要くんにもユーノくんにもたまには休憩が必要って言われちゃったの。そんなに疲れてないのにな。それにしても

「要くん、なんでキョロキョロしてるの？」

「いつどこからトラップが襲って来るかわからんからな。久遠も気をつける」

「クー！」

久遠ちゃんが手を挙げて返事してるのが可愛いけど

「もう大丈夫だよ」

「否！油断したところに襲って来るのがトラップなのだ！！」

一回すずかちゃんの家トラップに掛かってから、すずかちゃんの近くに安心しないようになっちゃったんだよね。すずかちゃんが妬ましい。

ブルッ

「すずか、どうしたの」

「なっ、何でもないよ。アリサちゃん」

（何だろう、今の寒気）

要くんが警戒し過ぎるから結構時間かかったけど、ようやくすずかちゃんのいる部屋に着いたの。

「ようやく安心できる」

そんなに怖かったのかな。

「なのはちゃん、要くん、いらっしやい」

「随分と遅かったわね」

文句は要くんに言ってほしいの。あれ？

「お兄ちゃんと忍さんは？」

「あー、あの二人ね」

「お姉ちゃんたちなら別の部屋にいるよ」

「そうなんだ」

きつといちゃついているんだろ。そのうち私も………って  
何考えてるんだろ。私。

「お飲み物どうぞ」

「ありがとうございます」

ノエルさんの紅茶美味しいんだよね。

「要くんはいつものでいいですか？」

「はい、お願いします」

要くんのいつものっていうのはブラックコーヒーなんだけど

「あんたよくそんなの飲めるわね」

「ブラックコーヒーくらい飲めるだろ？」

「あたしの知ってるブラックコーヒーはそんな泥みたいな物質じゃないわよ」

そう要くんが飲むブラックコーヒーとは、泥のような粘度がある通称「この世全ての苦味」である。

「でも本当にそんなのよく飲めるね」

「これ飲むと体調がいいからな。すずかも一口どうぞだ?」

「……………いらない」

ちなみにこのコーヒ―はファリンさんが間違えて作ったのを要くんが飲んだのが始まり。こんなコーヒ―作るファリンさんもファリンさんだけど、飲む要くんも要くんだよな。

そんな風に楽しく会話しているとき、ジュエルシードの発動を感知した。

『なのは!要!』

『うん!』

『分かっている』

とりあえず怪しまれないように抜け出すため、逃げたユーノくんを私が追い掛けることになった。

『ちよつとしたら俺も行く。ただそれまでに終わらせてくれるとうれしいな』

『にやはは、頑張るよ』

『そうか。じゃあ作戦開始!』

それと同時にユーノくんは逃げ出し

「私、ユーノくん探してくる!」

「気をつけてね」

「無理しちゃダメよ」

私もうまく抜け出した。

要 side

「やとと」

俺も行くとしますか。

「あれ、要くんも行くの？」

「なのはが行ったから別にいいんじゃない？」

普通ならそうなんだが、そういう訳にもいかないんだよな。

「じゃあ、なのは一人で大丈夫だと思う人」

「「.....」」

よし、黙らせることに成功。

「二人とも、久遠置いていってやるから」

『要、私についていけないの？』

『久遠はこの二人を抑えてくれ。帰りにお菓子買ってやるから』

『うーん……わかった!!』

『いい子だ』

「じゃ、行ってきます」

「」「」「いってらっしゃい」

そろそろ着くはずだが。ん？あの金色の光。もう戦闘始まってたか。

「身体能力20%解放」

急いで着くために少し力を解放した。

「よう、遅れたか？」

「そんなことないよ」

「新手!？」

フェイトは驚いてるみたいだな。

「おいお前。ここは引き揚げな。二対一じゃ分が悪いだろ」

だが俺は失念していた。二対一ではないことを。

「グハツ!？」

突然横から来た何かに吹き飛ばされた。

「要くん!？」

「なのは！俺は大丈夫だから目の前の敵に集中しろ!!」

俺のいた所には赤い狼がいた。アルフのことすっかり忘れてたぜ。

「へー、アドバイスなんて余裕だね」

「それでもねえよ。まあいい来なワンコ、相手してやるよ」

「あたしは狼だよ!!」

そういうとアルフは突っ込んで来た。流石は獣。凄まじい速さで攻撃を繰り出してきた。始めは捌けていたものの、だんだんと捌けなくなり再び吹き飛ばされた。

(ちっ、まずいな)

このままでは確実に負ける。身体能力解放すればいいのだが、20%以上は一秒のタイムラグがあり、パーセンテージが上がることにタイムラグも長くなる。相手はそんな時間与えてくれない。

(しかたない。このスキルはチート過ぎて使いたくなかったが)

もうアルフは目の前に迫っている。俺は

「アルティメットワン発動」

そう呟いた。その直後、アルフの爪が俺の顔面に直撃した。

アルフ s i d e

はっきり言ってよくわからない奴だった。

魔力はあるけどデバイスを持ってなくて、素手であたしと殴り合った。所詮ただのガキだと思ったら、予想以上に頑張ったから驚いた。でも狼が素体であるあたしに勝てる訳なかったんだけどね。

(これで決める!!)

そう思ってあいつの顔面に爪を叩き付けようとした直前

「.....」

あいつが何か呟いた。アル.....なんたらとか言ってたけど、いまさらなにやっただって間に合いつこない。そしてあたしは爪を叩き付けた。

(決まった!!)

そう思った。いやそう思うのが当たり前だった。だって相手はデバイスを持ってないどころか、魔法の一つも使わなかったんだから。だがあたしの耳に入ってきた言葉は信じられないものだった。

「よう。終わりか？」

要 side

ふー、危ない危ない。

あと少し遅かったら顔面血祭りだったな。だがこれでもう負けることはありえない。

俺が発動したスキル、アルティメットワンはBクラス以下、魔導師のAAAランク以下の攻撃の無力化。さらにBクラス相当の直感・魔力放出・高速再生が同時に発動するチートスキルだ。

「なっ、なんで効かないんだよ!? バリアジャケットを着ている訳でもない、シールド系やプロテクション系の魔法を使った訳でもない! なのになんで!?!」

そりゃ混乱するよな。今までダメージ与えてた人間が突然攻撃が効かなくなるんだから。だがこのアルティメットワンのスキルはそういうものだからしょうがない。本来なら上位宝具の真名解放すら効かないからな。いくら人に押し込められて効果が弱くなったとはいえ、獣の攻撃でどうこうなるようなスキルじゃない。

「さて今度はこちらの番だ」

今回はどうするか。

「身体能力40%解放、魔力40%解放」

「11のー!」

アルフが力の解放中に殴ってきたけど効かない。

「！？魔力が一気に増えた！？」

力の解放が終わると同時に魔力が増えたことに驚いていたが、

「魔力だけじゃないぞ」

そう言うと俺はアルフに殴り掛かった。

「動きも良くなってる！？」

身体能力も20%から40%、倍になったんだから、良くなってなければおかしい。それにさっきまでの殴り合いからしてアルフの能力は俺の30%〜40%の間、さらに魔力もこちらが多く攻撃も効かない。アルフが勝てる要素はゼロになった訳だ。

「さあ、反撃の開始だ！」

アルフside

本当になんなんだいこいつは！？いきなり攻撃が効かなくなったと思ったら魔力もAAランクぐらいになるし、動きも格段に良くなった。

「あんた今まで本気じゃなかったのかい！？」

「本気ではあつたさ。ただ全力じゃなかっただけ」

ちっ！でも攻撃が効かなくなるなんてありえない。なにか弱点があるはず。

「隙あり！」

「しまっ！」

ドンッ

「っ!？」

何をされたかわからなかった。あいつがあたしに触った瞬間吹き飛ばされた。

「ありやりや倒せなかったか」

「何したんだい」

吹き飛ばされて逆に冷静になれたあたしは聞いた。

「何したと思う？」

随分と苛々させてくれるね。まあいい。

「絶対にフェイトの所へ行かせない!!」

要side

なかなかしぶといな。魔力放出のスキルの実用で吹き飛ばしてみたけど、びんびんしてるとは。

「きゃあああ!」

「なのはー！ー！」

「……………負けた……………か。」

「どつやらどつちの勝ちみたいだね」

「ああ、そうみたいだな。……………もう止めない？」

「はっ？どついうことだい？」

「だってどつちの大將がやられたんだから、これい以上やる意味ないからな」

そう言つて俺は能力を停止させた。

「……………どつやら本当みたいだね」

アルフも納得したし、なのはを迎えに行くか。

「おーい、大丈夫か？」

「要……………って何で敵といっしょにいるのさー!？」

「アルフ？」

あー、ユーノもフェイトも混乱してるな。

「フェイトく、なんかこいつもう戦う気ないんだって」

「何だよ。要！なのはがやられたんだよ！？」

「だからだよ。もしここで俺が勝ってジュエルシールド手に入れても、なのはは納得すると思うか？」

「うっ！それは……………」

つと向こうは帰るみたいだな。

「おい、その二人」

「？」

「なんか用かい？」

「名前聞いてもいいかい？俺は一条要、こっちはユーノ。そんで君が倒したこの子は高町なのはだ」「……………フェイト・テスト  
ロッサ」

「アルフだよ」

「フェイトにアルフか。……………いい名だな。次は絶対に負けないからな！」

「……………うん」

「今度は倒してやるからね！」

俺はなのはを背負って月村家に向かった。

なのはside

「うっ」

「……………あれっ？何で私やくんに背負われてるの？」

「やっと起きたか」

「なのは大丈夫？」

「そうか、私」

「負けたん……………だよね」

「そうだな」

「……………」

「そっかぁ負けたんだ。」

「次は勝ちたいな」

「そうだな」

うん。それにあの子ともお話したいし。

「私強くなりたい。だから手伝ってくれる?」

「ああ」

「もちろんだよ!」

「………なんか要くん元気ないな。」

「要くんどうしたの?」

「結構時間掛かっちゃまったよな?」

「そうだね、思ったよりね」

「………今、月村家に誰がいる」

えくと、すずかちゃんとアリサちゃんと忍さんと………  
………お兄ちゃん

「気付いたか?」

「………うん」

憂鬱だなあ。

「お前たちは前言ったことをもう忘れたのか!!?」

「「ごめんなさい……………」」

やっぱりこうなったの。

「まあまあ恭也、そのくらいにしたら」

忍さんそれは嬉しいけど

「ダメだ。甘やかしたらこいつらのためにならん」

……………ハア

「なのは……………何かいいことでもあるのか?」

「何もありません!」

心のため息くらい見逃してほしいの。

## 第六話（後書き）

いつも通りこのような駄文をご覧いただきありがとうございます。  
恭也くんはもう説教キヤラになっていますが、これも恭也くんが二  
人を愛してるからなんです。  
次回は幕間でも書いてみようかなと思います。

## 幕間1（前書き）

今回は修業編です。

## 幕間 1

要side

今日はなのはとユーノ、久遠もいつしよに修業する予定だ。

「何で久遠ちゃんもいるの」

「久遠に頼まれたからだ」

「要は久遠に甘いからね」

むっ、まあその通りだが、

「久遠に助けられたのは誰だったけ？」

「「うっ！」」

ざまあみる。

「要、なのはとユーノいじめちゃダメ」

「むむっ」

久遠に叱られてしまった。

「悪かったな二人共、そろそろ修業しようか。ユーノ結界頼む」

「うん」

「わかった」

さてと、

「久遠やるうか。準備しろよ」

「わかった」

「あれ？久遠ちゃんとやるの？」

「ああ、ユーノはなのはに新しい魔法でも教えてやってくれ」

「いいよ。じゃあなのは始めるよ」

「要、準備できたよ」

と久遠の方から聞こえたので振り向くと、大人な久遠がいた。

「「ええっ!?!」」

なんか二人は驚いていた。

「要くん、何で久遠ちゃん大人になってるの!?!」

「そうだよ！久遠は狐と子供になるだけじゃなかったの！？」

「誰がそんなこと言った」

知らないからしょうがないといえばしょうがないのだが、

「身体能力40%解放、魔力40%解放」

とりあえず力の解放をして準備を整える。

「試合するぞ、久遠」

「わかった。いくよ、要」

想像以上に久遠は強かった。パワー、スタミナはアルフの方が上だが、スピード、テクニックは久遠の方が圧倒的に上だ。

こちらが攻撃を仕掛ければ簡単に避けられ反撃され、向こうが攻撃を仕掛ければ受け流すしかない。スタミナはこちらが上だから、普通はこのままいけば疲れた久遠に一撃、という戦法で勝てるのだがそうはいかない。何故なら

「ハアツ！」

バチバチ

久遠が爪に雷を纏わせるからだ。これでは受け流すうちにこちらの体が参ってしまふ。どうするか。その時、久遠が勝負を決めようとしたのか。腕を大きく振り上げた。

「やあああ！！！」

「そこだ！！！」

俺はその隙を逃すまいと、最も使い慣れて、最も速い正拳を叩き込んだ。

それとほぼ同時に雷撃が俺に落ちた。

「ガハツ！？」

「あうつ！？」

腕を振り上げたのは直接攻撃するためでなく、雷を喚ぶ為だったか。これじゃしばらく痺れて動けないな。だが俺の一撃をあごにくらつた久遠も動けないだろう。

「大丈夫か？久遠」

「うん、頭がぐらぐらするけど」

「そうか、しばらく休憩だな」

「わかった」

あゝ、疲れた。

「ちょっと要！」

「何だユーノ。俺は休みたいんだが」

「あつ、……………ゴメン。って違う！何で二人共そんなに強い  
のさ！？」

「にやはは、凄いね二人共」

ユーノは何でそんなに気にするかな。

「なのはみたいに気楽ならいいのに」

「なんかいきなり馬鹿にされたの！！」

「違うぞなのは。俺はなのはは素晴らしいという意味で言った  
んだ」

「そうなんだ。エへへ」

「なのは！騙されてるよ！」

「で、ユーノ。何で俺と久遠が強いかだっけ？」

「……………そうだ、忘れてた」

忘れるなよ。

「理由はな、俺は特殊な力があるから、久遠は長年生きてきた妖狐だから。それ以上は言わん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・わかったよ」

おや？

「駄々こねないんだな」

「君がそんな風に言ったら絶対に言わないからね」

俺のこと分かってきたな。

「なのは、魔法の習得うまくいったか？」

「うん、いろいろ覚えたよ」

「なのはは才能があるからすぐ覚えたよ」

「それじゃ、いいこと教えてやるっ」

俺が教えたことは簡単なこと。

一つ、常に温存しろ

二つ、大技は確実に当てれる状況を作る

三つ、相手の動きをよく見る

どれも出来るようでは出来ないことである。

「フェイトは速いがその速さを制御出来てる訳ではない。高速移動し終わった瞬間が隙だ」

「わかった、頑張るよ！」

体も動けるようになったし、帰るか。

「おい、久遠。そろそろ「クー、クー」ってあら？」

「寝てるね」

まあ、子狐状態だし連れて帰るのも楽でいいか。

これがとある日の俺たちの修業風景。

## 幕間1（後書き）

このような駄文をご覧いただきありがとうございます。

久遠が妙に強くなってしまうた。まあ本編の戦闘には参加させず、マスコットとして登場ぐらいしかしないから問題ありませんよね？

第七話（前書き）

戦闘シーンなんて大嫌いだ！

## 第七話

要side

今俺たちは車に乗って温泉へ向かっている。車内は俺、なのは、すずか、アリサと運転手のノエルさん、それと久遠、ユーノもいっしよだ。ちなみに俺は助手席に座つてのんびりと久遠を撫でている。

「おとなしい、いい子ですね」

とノエルが言ってくれた。

「そりやおそらく世界一、頭のいい狐ですから」

最近久遠が娘の様に思えて褒められると嬉しくてしかたない。これがペットを溺愛する人の気持ちなんだろうな。

「ちょっと要、久遠そろそろ渡しなさいよ」

「ダメ。久遠今寝てるんだぞ」

「む〜」

「温泉では渡してやるから、そのかわりユーノ渡してもらつて」

「んー、わかつたわ」

『これで女風呂に入ることは無くなったぞユーノ』

『ありがとう要、助かつたよ』

同じ男として羨ましいが、可哀相でもあるからな。

旅館に着いた。とりあえずトレーニングの為に

「お前ら荷物渡せ」

「別にいいよそんなの」

「無理しなくていいよ?」

「じゃあ頼むわ」

「なのは、すずか別に気にするな。アリサは遠慮しろ」

「遠慮したってどうせ持つてくれるんでしょ?」

まあそうなんだが、そうしたほうが可愛いというのに気付かないのかねえ。もったいない」

「可愛い／＼／」

「………要くん?」

「……………何言ってるの?」

ん?

「どうかしたか?なのは、さすが」

「また無意識なの」

「そんなのだから女泣かせて言われるんだよ」

今のはわざとでした。と言えない感じになってしまった、というか俺そんな風に言われてたのか?

そんなこともあったがようやく温泉だ。

『ユーノ行くか』

『うん』

「じゃあ久遠頼むな」

「うん」

「わかったわ」

「またね要くん」

「いつしよに風呂なんて初めてじゃないか？」

「そうだね、恭也兄さん」

「ふむ、よく考えたら親子なのに裸の付き合いがなかったな」

「しかたないよ土郎父さん。俺12だよ？」

「だけど、たまにはこういうのも悪くない。」

「」「あー」「」

『きみたちオッサン？』

ユ一ノがなんか言っているが気にしない。

「恭也」

「どうした父さん？」

「忍ちゃんとはどこまでいった？」

「ブッ!？」

「あっ、それ俺も気になる」

「要!?!」

「二対一だぞ。諦めて言ったらどうだ?さあ、さあ、さあ、さあ!」

「ハリー、ハリー、ハリー!?!」

「二人共テンションがおかしいぞ!?!そうだよ、お前には彼女はいないのか!?!」

何ですと?

「そういえばそうだな。なのは、アリサちゃん、すずかちゃん、もしくは別の誰かか?俺と母さんはなのはがオススメだぞ」

ちっ!敵に回ったな、士郎父さん!!

「ほう、なのはに手を出したのか?これは話し合わないといかな」

恭也兄さんが暴走し始めた!というか高町家の話し合いは「OHANA S I」が基本なのか!?

「か………彼女なんていないよ!?!というかまだ早いでしょ!?!」

「そうか?お前なら四人や五人いても問題ないと思うが?」

「そこは一人か二人でしょ!?!」

だが彼は知らない。10年後、四人や五人じゃ済まなくなってることを……………

「何！？いまのナレーション！！？」

いろいろあったが、無事温泉から出ることが出来た。死ぬかと思っただが。今はのんびり休憩し「要！卓球するわよ！！」ほづ。

「アリサ、俺がご近所で有名なテニス少年と知っての発言か？」

「知らないわよ」

「確かに卓球はテーブルテニスだけど……………」

「……………まったく関係ないの」

ノリ悪いなあ。

「まあいい、ここで打ち倒して見せよう。アリサ・バニングス！！」

「返り討ちにしてあげるわ。一条要！！」

「ノリノリだねえ」

「ノリノリなの」

ということまで試合が始まった。

俺は実は転生前は卓球部に所属しており、負けることはないと思っ  
ていたが、

「やるな、アリサ！」

「あんたもね！」

ここまでアリサが頑張るとは思わなかった。現在のセットは2・0  
で負けている。だがここからが俺の番。俺は守りのカットマンでス  
タミナもハンパない。対するアリサは常に攻め続けたいうえ、左右に  
振られ続けてスタミナ切れ。むしろよく2セット取れたな。

「……………ハアハア」

「どうした？バテたか？」

「馬鹿言っじゃないわよ……………まだまだこれからよ」

これからはこちらのセリフなんだが、決めさせてもらいますか。

さて結果は3 - 2で俺が負けた。まさか最終セットで一気に爆発するとは。

「ゼエゼエ」

「アリサちゃん大丈夫？」

「どっちも凄かったの」

「いや、まさか負けるとは」

「……………ざまあ……………みなさい」

こうして卓球勝負は幕を閉じた。

今俺は罰ゲームとしてジューズを買って三人娘の所へ向かっている。ジューズ代は自腹だ。むっ？三人娘が絡まれてるな。あれはアルフか？しかたない。

「家の連れに何か用かい？お姉さん？」

「！？……………ごめんね、お嬢ちゃん。よく見たら人違いだったよ」

「あっ、そうですか」

そしてアルフは立ち上がりどこか入行こうとしたとき念話を飛ばしてきた。

『今はあいさつだけどね。お家でいい子にしてな。あんまりお痛がすぎるとガブツといくよ?』

『!?!?』

『そんなこと言うのは俺を倒してからにするんだな』

『.....フンッ!』

「何よ、あの人!」

「落ちて着けアリサ。外人が日本人を間違えるなんてよくあることだろ? ほらジューズ」

「.....ありがとう」

なのはside

夜になって私は昼間のことを考えていた。アリサちゃんもすずかちゃんも寝てるし、でも念のためユーノくんにも念話で話し掛けた。

『ユーノくん起きてる?』

『どうしたの?なのは』

『……………昼間の人ってあの子の関係者だよね』

『……………多分』

『やっぱり……………』

『なのは、やっぱり』ストップ』えっ?』

『その先言ったら怒るよ。この先はなのはを巻き込めない。とか言うつもりだったんでしょ?』

『……………』

『あのね、ユーノくん。始めはユーノくんの為にジュエルシードを集めようと思ったの。でも今はね私の為っていうのもあるの。あの子のことを知りたい、なにより私自身が強くなりたい。』

そう強くなりたい。要くんが守らなくてもよくなるようになるように。

『……………なのは……………あっ、そういえば要はどうしたんだろっ?』

ユーノくんが言う通り要くんはここにいない。久遠ちゃんはいるけど。

『確か散歩に行った筈だよ』

そう散歩のはず。1時間くらいいないけど、要くんだから問題ないの。

要side

「ハツクション!!」

外で瞑想してたけど、誰かが噂でもしたのかくしゃみが出た。

「さてそろそろジュエルシードが発動するかな？」

原作ではフェイトたちが発動させる筈だ……!!  
そんなことを考えていたら膨大な魔力を感知した。

『要くん!!』

『すぐに行くから先に行つててくれ!』

準備するか。

「身体能力40%解放、魔力50%解放」

前回よりも魔力を10%増やしたのは、もしも何かあった時の為だ。  
俺は走ってなのは所へ向かった。

俺が着いた時にはもう戦闘が始まっていた。

「すまんなユーノ、遅れた」

「要！遅いよ！」

「あんたも来たのか！！」

警戒されてるな。

「俺は戦つつもりはないぞ」

「なっ！？」

「はっ！？」

何で驚く。

「要！君何言ってるのさ！！」

「じゃあ何の為に来たのさ！？」

「怒るなよ。これはなのはとフェイトの戦いだからな。まあ手を出されたら反撃するし、ジユエルシードが暴走したら止めるよ」

そう言うと俺は座ってなのはとフェイトの戦いを見た。

なのはside

「どうして話し合わないの!？」

「話したって何も伝わらない」

「そんなのやってみないとわからない!！」

《《ダイバインシューター》》

私は三発の魔力弾を放つがフェイトちゃんの魔力弾に掻き消され、さらにフェイトちゃんの魔力弾が飛んで来る。

「くっ!！」

私はそれを必死に避ける。そしてまた魔力弾を放つ。だが今度はフェイトちゃんは高速移動魔法で避けて私に切り掛かる。その瞬間私は笑った。

フェイトside

私が白い魔導師の攻撃を避けて切り掛かった瞬間、彼女は笑った。正直不気味だったが、攻撃が間に合うことはない。彼女の攻撃である魔力弾は3発同時に撃つと次を撃つのにタイムラグがある。魔力砲にはタメが必要。だから間に合わない。そう思っていた、だが

「デイバインシューター、シュート!!」

「えっ!?!」

《プロテクション》

バルディッシュが防いでくれなかったら危なかった。まさか四発目が撃てるとは。!?!魔力が集まるこの感じは!

「バルディッシュ!!」

《イエス、サー》

「デイバイン!!」

《バスター》

あの子の魔力砲が飛んで来る。

「サンダー!!」

《スマッシュ》

それを私も砲撃で打ち落とす。

要side

ズドーン

「凄まじいな」

実際に見てみると迫力が違うな。煙の中でも視力強化したからよく見える。ユーノもアルフも心配しているみたいだし、安心させてやるか。

「二人共安心しろ。どっちも無事だ」

「……………ほっ」

「本当かい？」

「アルフ、本当だ。ただ」

「「ただ？」」

「なのは……………負けだ」

煙が晴れるとそこには……………フェイトにデバイスを突き付けられたのがいた。

「やった！」

「そんな……………」

なのはside

砲撃を撃ったあと気がつくフェイトちゃんにデバイスを突き付けられていた。するとレイジングハートはジュエルシードを出した。

「レイジングハート!?!」

「きつと主人思いのいい子なんだよ」

また……負けちゃった……

「アルフ帰ろう」

「さっすがあたしのご主人様」

フェイトちゃんが帰っちゃう。でもその前にあれだけは絶対に聞いておきたい。

「待って!?!」

「もう私の前に出て来ないで、次は止められないかもしれない」

「あなたの名前聞かせて!?!」

「もう知ってるはず」

「あなたの口から聞かせて!」

「……フェイト・テストロッサ」

「!私は……」

私が名乗ろうとしたとき、フェイトちゃんは飛んで行ってしまった。私が呆然としているとユーノくんと要くんがやって来た。

「・・・・・・・・・・なのは、あんまり気にしないで」

「惜しかったな」

「・・・・・・・・・・うん」

慰めてくれたのは嬉しかった。でも私の心は悔しさでいっぱいだった。

こんな気持ちを引きずりながら温泉旅行は過ぎていった。

## 第七話（後書き）

はい、このような駄文をご覧いただきありがとうございます。

前書きでも書きましたが、戦闘シーンは嫌いです。見る分にはいいんですが、自分が書くと酷いことになります。上手い人が妬ましい！

オマケ2 (前書き)

五万アクセスありがとう

## オマケ2

雨「どうしよう要」

要「何が」

雨「もう五万アクセス達成しちゃったよ」

要「ありがたいことじゃないか。流石リリカルなのはと型月」

雨「だからそれ禁句」

要「んで？何困ってるんだ？」

雨「あまりに早くてどうすればいいか混乱してるんだ」

要「笑えばいいと思うよ」

雨「エヴァ乙、ってそんなことじゃなくて」

要「読者に聞いてみたらどうだ？返信が来るとは限らんが」

雨「それだ。流石我がオリ主」

要「んで、何を聞くんだ？」

雨「どんな企画をやって欲しいか、かな。要をこんな世界に飛ばして欲しいとか、逆に誰かを要のいる世界に飛ばして欲しいとか、要を誰かと戦わせて欲しいとか」

要「どんな企画にしる俺は苦勞しそうだな」

雨「そうだな。これがオリ主の運命だと思って諦める」

要「ちっ！まあいい、それで今回はどうするんだ？」

雨「女性陣から見た一条要というのをやってみようと思う。ちなみに桃子さんと美由紀は前回のオマケで出演したためなしだ」

要「それではご覧下さい」

なのは・・・優しくて、かっこよくて、頼りになるけど、将来支えてあげたい人。

久遠・・・大好き。ただ内側にいるタイプ・マアキュリーがちょっと気になる。

アリサ・・・いたずら好き。でもたまに見せる優しさにドキッ。

すずか・・・誰とでも普通に接することが出来る凄い人。初めての身近にいる歳の近い男なので気になる。

フェイト・・・アルフの話しを聞く限り、要注意人物。でもいつも戦闘に介入しようとしないのでよくわからない。

アルフ・・・理解不能な能力を持つ危険じゃない要注意人物。友人  
だったら面白そう。

雨「こんな感じかな」

要「成る程、悪くないな」

雨「そのうち評価もうなぎ登りになるんだが」

要「ん？何か言ったか？」

雨「別に」

要「??」

雨「さあ最後に挨拶だ」

要「わかった。ここまで『チートじゃ済まない』をご覧いただきありがとうございます。これからも精進して参りますので応援よろしくお願いします。そして企画の方も考えて頂けたら是非感想の方にお願いします。それではみなさん」

雨・要「」さようなら「」

## オマケ2 (後書き)

駄文をご覧いただきありがとうございます。

ネタがなくわずか10分程度で書き上げたものです。

企画の方ですが、是非お願いします。もちろん企画以外の意見、感想もお待ちしております。

## 第八話

アリサ aside

最近なのはの様子がおかしい。何を話しても上の空、どう見ても悩んでいるのは分かる。なのに私たちにそれを話してくれない。それがどうしようもなく悔しい。親友の筈なのに。

「いい加減にしなさいよ!!」

「!!ア……アリサちゃん」

「何を話しても上の空、そんなに私たちの話しがつまらない!? だったら一人でずっとボーっとしてなさい!! 行こう、すずか」

分かっている。こんなのただの八つ当たりだということを、教室を出て歩いているとすずかが着いてきた。

「アリサちゃん、いくら何でも言い過ぎだよ」

「分かっているわよ。でも悔しいじゃない、あんなに悩んでるのに力になれないなんて」

「……アリサちゃん」

「……要の所行くわよ」

「えっ!?!」

「あいつなら何か知ってる筈よ」

そう、いつもなのはと一緒のあいつなら何か関係がある筈だ。突然現れてなのはの家族になったあいつなら……

要 side

「要殿、起きるでござるよ」

うるさい、せつかく人が寝てるのに……zzz

「後藤、そんなんじゃ起きねーよ。こうしないと……な！」

その瞬間俺の机がズレて床に落とされた。

「いつて〜なおい!!何しやがる後藤、有彦!!」

俺を起こしたのは、後藤 効ガイ以と乾 有彦だ。

「お客でござるよ」

「美少女だぜ」

「何?……成る程サンキュ」

何でアリサとすずかがいるかねえ。

今俺たちは屋上にいる。

「で？何のようだ」

「何のようだ、じゃないわよ！！なのはのことよ！！」

「なのはちゃんが最近悩んでるんだけど、何か知らないかな？」

間違えなくフェイトのことだろうな。だが魔法のことを伝えるわけにはいかないし、これはなのはが解決すべきことだ。

「知ってる、と言ったら？」

「そんなの一緒に悩んでることを解決してあげるに決まってるでしょ！」

「・・・・・・・・・・はあ」

「何よそのため息は！？」

「なのはが何で悩み事を言わないか分かるか？」

「・・・・・・・・・・迷惑をかけたくないから？」

「そうだ、すずか。なのはは人に迷惑をかけることを特に嫌うからな」

「それでも」だがな」!？」

「いくらなのはでもただの悩み程度なら聞かれれば答える筈だ。特に親友であるお前らならな」

「なら………何で答えてくれないのよ!？」

「お前らじゃどうしようもないからだよ。わかるだろ？」

「………でも」

「………どうにか出来ないんですか？」

アリサとすずかが泣きそうになる………やっぱりこういうのは苦手だ。女の子を泣かせることは出来ん。俺は二人の頭を撫でながら言った。

「アリサちゃん、すずかちゃん、なのはのことを待っててやってくれないか？全部が終わった後、なのはを暖かく向かえてやってくれ出来るね？」

以前、二人に初めて会ったときのような口調で言った。

「………うん」

「………はい」

「そうか、分かってくれて嬉しいよ」

さて次はなのはか………

コンコン

「なのはいるか？入るぞ」

俺は学校から帰ってからなのはの部屋の戸を叩いた。

「うん、どつぞ」

俺は部屋に入ってすぐ話しをした。

「アリサとすずかとケンカしたんだって？」

「……………うん、だけどそれは私が悪いから」

うーん、これはどうするか……………

「実はその後二人が俺の所に来たんだ」

「えっ？」

「二人共心配してたぞ、なのははどうしたんだ。ってな」

「……………」

「だから早くジュエルシード集めて、フェイトの事知って、二人を安心させてやらないとな」

「……………うん！」

夜になってジュエルシード探してるけど

「なかなか見つからないな」

「そんな簡単に見つからないの」

「そうだよ、要」

「いや、わかってるんだけどね」

ほらこういう時、何か言いたくなるだろ？

「うーん、だけど本当に見つからないね」

「仕方ないよ」

そんなこと話していると、魔法の発動を感知した。

「……まさかジュエルシードを強制発動させるつもりか!？」

「ちっ！！ユーノは広域結界を、なのははセットアップを！！」

「うん！」

「わかった！」

確か今日はジュエルシードの暴走か！！

「レイジングハート、セットアップ！！」

《スタンバイレディ、セットアップ》

「ふう」

(身体能力90%解放、魔力70%解放、アルティメットワン発動)  
俺たちが準備をしているうちにユーノも結界を張った。

「準備できたな二人共！！」

「大丈夫だよ！」

「要、何でそんなに魔力あるの？」

「いちいち気にするな。多くて困るもんでもないし」

「……………うん、そっだね」

現場に到着した時にはフェイトが封印しようとしていた。

『なのは、封印処理をして』

『わかった。いくよ』

ユーノが指示を飛ばし、なのはが実行する。

「リリカルマジカル」

「ジュエルシードシリアルXEX」

「「封印!」」

二人の封印によってジュエルシードが鎮静化される。

「要くん、ユーノくん行ってくる」

《フライヤーフィン》

そう言うとなのはは飛んで行った。

「あの時言えなかったから言うけど、私は高町なのは!」

それを合図に戦闘が始まった。魔力弾が飛び交う中なのはがフェイトの名を呼んで言った。

「何で話しを聞いてくれないの!」

「話したって意味がない」

「そんなのわからないよ！私がジュエルシードを集める理由は始めはユーノくんの手伝いのためだった。でも今は自分の意思で、街を壊さないために集めるの！！」

「……………私は「フエイト」、言わなくていい！！」「！」

アルフが叫んで言う。

「そんな優しい人の所でぬくぬく育った奴に言わなくていい！！今はジュエルシードを集めることが先だよ！！」

そこからまた戦闘が始まる。さて、そろそろ俺も働くか。

「じゃあやるか？アルフ」

「へー、やっと戦う気になったんだ。……………それにしても随分と魔力が増えてるね」

「そんなものどうでもいいだろ？」

「それもそうだね、今度こそあんたを倒す！！」

そしてアルフが突っ込んで来たが

「ふんっ！ー！」

「うわあああー！！！？」

アルフの腕を掴んで放り投げた。流石90%解放状態、見事に飛んで言った。

「ふう、いい仕事した」

「はあはあ……何がいい仕事だよ!!何だよさっきのパワーは!?!?……いや、違うね。パワーだけじゃない能力全部が上がってる」

「帰って来るの速かったな。つか、何で能力上昇に気付いた?」

「気付くに決まってるだろ!!殴ったと思ったら飛んでたんだから!!」

んー。やっぱり投げ飛ばしちゃダメじゃないか。でも殴ったらくゾクツ>っ!?!?何だ!?!?

今の感覚は!!まさか!!  
俺が振り向くとそこには  
暴走したジュエルシードと

「「きやああああ」

吹き飛ばされるのはとフェイトがいた。

「「なのは!!!!」

「フェイト!!!!」

俺とユーノはなのはの所へ、アルフはフェイトの所へ向かった。

「大丈夫！？なのは！！」

「怪我はないか！？」

「う、うん。でもレイジングハートが」

なのはの手には壊れたレイジングハートがあつたが、俺はそんなものはどうでもいい。

「そうか、よかった」

次はフェイトだが、その時すでにフェイトはジュエルシールドへ向かつていた。だが

「！！まずい」

フェイトが向かっているとき、ジュエルシールドが魔力を放った。それがフェイトにぶつかる前に、俺はフェイトの前に立ち塞がって盾になった。

「えっ！？何で！？」

「いつっ〜」

魔力波はBクラスより上だったようで俺の肉体にダメージを与えたが、高速再生で一瞬で治った。ただ痛みは取れないけど。

「あ、あの〜」

「向こうに行ってる」

俺はフェイトを追っ払ってジュエルシールドへ向かった。

(どう鎮めるか)

一瞬考えたが、俺はジュエルシールドの前で手を突き出し

「全魔力放出!!」

今の魔力、解放された70%を一気に放出した。魔力が放出し終わるとそこには鎮静化されたジュエルシールドがあった。だが突然飛んで来たフェイトに取られた。

「あっ!」

「助けてもらった事は感謝しますが、勝負ですから」

「そうだな、勝負じゃしょうがない」

「」「納得した!?!」「」

なんかツツコミがあったけど気にしない。

「アルフ、行こう」

「あっ、うん」

「なのは、ユーノ帰るぞ」

「ちょっと、要!?!」

「要くん!?!」

ああ、そうだ。

「フェイト、残りのジュエルシードは全部頂く。そしてお前らの持っているものも貰ってやる」

「……………ふふっ、それはこちらのセリフです」

そう言うとフェイトたちは飛んで行った。楽しみだな、この先。

「要くん、何であんなこと言ったの?」

「そりゃ、なのはもう負けませんよ。っていう宣言だよ」

「にゃっ!?! 私なの」

当然だろう。何を言ってるのか。いや、この場合俺が何言ってるになるのか。

「さて、全能力停止」

バターン!!!

「要、どうしたの!?!」

「要くん、大丈夫?」

「力……使い……過ぎた」

流石にあれだけの魔力放出をすると反動がでかいな。

「身体……能力10%解……放……魔  
力……10%解放」

これで何とか動けるな。

「じゃあ……帰るか」

今日は疲れた。

## 第八話（後書き）

駄文をご覧いただき……もういつかこれ。

やっぱり戦闘シーンは難しい。それ以前にもう設定とか原作とかめ  
ちゃめちやな気がする。

次からさらにより良くなるよう頑張ります。

## 幕間2（前書き）

キャラ崩壊が起こっています。

## 幕間 2

要side

俺は前回の戦闘でやり過ぎたために朝起きると

「動………かない？」

体が動かなくなっていた。もちろん能力をちよつと解放すれば問題なく動けるけど、今日は学校を休ませてもらう事にした。そして今はというと、何故か学校が休校の美由紀姉さんに湿布を貼ってもらっている。だが

「はい、次貼るよ。………えい！」

ぺちん

「ぬおおおー!!」

いつものいたずらの恨みん晴らすかの如く、かるーく叩くように貼ってくる。今の俺にはそのかるーくがきついんだが。

「フフーン、これからは姉をもっと敬いなさい」

「く………そ。覚え………てる」

「あつ、まだここにも貼らないとね………えい」

ぺちん

「ぎいやあああー!!」

なのは、助けて……

<ピキーン>

ガタン

「……………」

「なのは？」

「どうしたの？なのはちゃん」

「要くんが助けを求めているのー！ー！」

「高町さん！？どうしたの！？」

「誰か止めるー！ー！」

学校でこんなことがあったとか、なかったとか。

昼になって、飯も食って、体もほとんど治して暇になった俺はユーノ、久遠、レイジングハートと話す事にした。

「ということで、第一回座談会 in 高町家」

「ワイ」

《ぱちぱちぱち》

「二人(?) 共ノリがいいね……………」

「何だユーノ、ノリ悪いな」

「こつという初めてだから」

そうなのか。

「ならしょうがない、だがそんなの気にせずだべるぞ」

「《おー》」

「ハハハ……………」

「じゃあまず、レイハっていつ出来たんだ？」

《レイハとは私の事ですか？》

「レイジングハートは長いからな、嫌だったか？」

《いえ、そのようなことはありません。ただ……そのように呼ばれたのは初めてでしたので》

「そうか」

《私がいつ出来たかでしたか……申し訳ありませんが、記録がありません》

「何？ユーノどういうことだ？」

「えっと、レイジングハートは僕が見つけたんだけど、全部初期化された状態で見つけたんだ」

「何処で見つけたの？」

「集落の近くの森だよ」

「ふーん」

《私から質問してもよろしいですか？》

「おう」

《要様はどれほどの力があるのですか？》

俺の力が……

「それ僕も気になるな」

「久遠も」

なんて言うか

「全力では、魔力はなのは以上、身体能力は比較になるのが近くに  
いないな」

「恭也や士郎より上？」

「上」

あの二人も人としては凄まじいけど、人外の身体能力には敵わない。

「凄いね。でもそれだけの力だと負担が大きんじゃないの？あつ、  
だから普段押さえてるのか」

「残念、不正解。力は解放し続けられるし、そっちの方が楽。でも  
鍛える為に押さえてるんだ」

そりゃ常に強大な力を使ってる方が楽だけど、何かの拍子で力が使  
えなくなった時大変だからな。そんな確率、万が一にもないんだ  
だけ。

「そうなんだ」

《努力家なのですな》

「そつでもねえよ」

照れるじゃねえか。

「じゃあじゃあ、次久遠ね」

「八八八、言え言え」

「要の中にいるの何？」

ちよっ!？

「久遠!!それはダメ!!」

「????」

「要、中にあるのって？」

《教えてもらえませんか?》

どうするよ、俺!

「あー、多分そのうち見せることになると思うから、今は力の源と  
思ってくれ」

久遠だけには今度教えとこつ。またこついつことになるともわから  
ん。

「.....うん」

《今はそういう事にしましょう》

レイハが厳しい。

「最後ユーノだぞ」

「えっ？僕もやるの？」

「一人一問だからな」

「そうだよ」

《当然です》

「何かレイジングハートが違う……」

大丈夫。きつとみんなそう思ってる。

「うーん、それじゃ久遠ちゃんはどっやって術を使ってるの？」

「久遠？」

そっぴや久遠は魔力無しに術を使うからな。魔導師として気になるんだらう。

「えつとね、こう、バーン！！って雷出したり、人になれ！！って思っぴや人になつたりするよ」

「いや、そんな抽象的に言われても……」

「ユーノ、久遠は感覚で術を使うからな。理論的に説明しろって言っても無理だぞ」

「気になるのに……………」

「さあさあ座談会はお開きだ。昼寝でもするか」

「久遠もする〜」

《では私もスリープモードに入ります》

「僕は修理が一段落ついたら休むよ」

なかなか愉快で有意義な座談会だったな。今度はなのはも混ぜてやりたいな。フェイトやアルフも一緒だとおもしろいな。そんなことを思いながら俺は眠りについた。

## 幕間2（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。この度はチートじゃ済まない  
をご覧くださいありがとうございます。

今回は幕間ですのでキャラをちょっと暴走させてみました。ちよっ  
とどころかかなりですけど。

不快に思われたなら申し訳ありません。

次はみんな大好き(?) クロスケの出番です。

## 第九話（前書き）

いろいろ原作はしょってます。

## 第九話

要 side

「要、起きて。要」

何だ？人が寝てたのに。

「ふあゝ。何か用か？ユーノ」

「レイジングハートの修理が終わったからなのはに届けに行くんだけど、さっきなのはから念話があって、元気なら要も連れて来てくれって」

なのはがねえ。

「きつと、要が心配なんだよ」

そりゃ分かるけど………まあいつか。

「んゝ、要？どうしたの？」

ありゃ、久遠が起きちまった。

「これからなのは迎えに行くんだ」

「………久遠も行くゝ」

「ならみんなで行こう。構わないだろ、要」

「そうだな。行くか」

それにしても眠い。

「要くん、ユートくん。あつ、久遠ちゃんもいるんだ」

なのはが俺たちを見つけて走って来た。内心転ばないかハラハラドキドキだった。

「要くん。何か失礼な事考えなかった？」

「なんだと？俺はなのはが走ったら転ばないか心配しただけだ」

「それが失礼なの！！」

何が失礼なのだろうか？なのはを知ってる人なら当然の心配だと思っただけが……

「も〜。そうだ、レイジングハート大丈夫？」

《問題ありません。心配おかけしました。マスター》

「そうなの。よかった」

うんうん、よかったなあ。……！この感覚は。

「ジュエルシールドが発動した!!」

やっぱりね。ならやることは一つ。

「なのは、準備しろ。今度こそフェイトに勝つぞ」

「うん！レイジングハート、セットアップ!!」

《スタンバイレディ、セットアップ》

「身体能力60%解放、魔力50%解放」

昨日の今日だが頑張りますか。

俺たちがジュエルシールドのある公園に着いた時には、既にフェイトが暴走体と戦闘していた。

しかしなかなか強いな、あの木。今までの暴走体とはレベルが違う。

「またあんた達か」

アルフがこっちに来て言った。

ふむ、一つ提案でもするか。

「アルフ、ちょっと手を組まないか」

「要くん?」

「どういうことだい?」

「アレはなかなか強い。だからジュエルシード封印まで協力して、その後なのはとフェイトの一騎打ちで決める」

「ちょっと待ちな……………構わないってさ」

いよっし。ならば

「俺が突っ込んでバリアを破壊する。そこになのはとフェイトの砲撃を叩きこんでくれ」

「うん」

「わかりました」

いよっし突撃するか。

俺は走りだした。すると木の暴走体は俺に向かって根っこで攻撃してきたが、鈍い。簡単に避けられる。さらに

「やあ!」

ドカーン!!

久遠が雷撃で根っこを焼き払うため難易度はさらに下がった。

「決めてやる!!」

俺は木の前に辿り着くと右手に魔力を込めて

「ぶち抜く!!」

右ストレートを叩き込んだ。一瞬バリアと拮抗したが、すぐにバリアは砕け散った。

「今だ!!」

俺がそう言って下がった瞬間、後ろで収束されていた魔力が解放された。

「撃ち抜いて、デイバイン!!」

《バスター》

「貫け豪雷!!」

《サンダースマッシュャー》

二つの砲撃が木とジュエルシードを貫いた。

「ジュエルシードリアルXII封印」

とりあえず封印し終わったみたいだな。するとフェイトが始めに話した。

「ジュエルシードには衝撃を与えないほうがいいみたいだ」

「うん、この前みたいになっちゃったらレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュもかわいそうだもんね」

「でも譲れない」

「……………本当はお話して解決したいけど」

なのはがレイジングハートを構えて言った。

「私が勝ったら、甘ったれた子じゃないって分かっってお話聞かせてもらうよー!!」

「……………」

フェイトは頷く事でそれに答えた。  
さてはて

「ユーノ、アルフ、どっちが勝つと思う?」

何となく聞いてみる事にした。

「なのはに勝ってほしいけどな」

「フェイトが勝つに決まってるだろ」

まあそう答えるよな。だけどそういかないのが世の中だよな。  
なのはとフェイトがぶつかりそうになった時、光が現れ、そこから出てきた少年がレイジングハートを素手で、バルディッシュを杖で受け止めた。

「ストップだ！！ここでの戦闘は危険過ぎる」

やっぱり出てきたな。そんなだからKYなんて言われるんだ。

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ。話を聞かせてもらおうか」

「フェイトここは……………」

うーん、ここでフェイトがジュエルシードを取りに無茶するからな。よし！

(アルティメットワン発動)

俺はスキルを発動して

「ゲッー！ト！！！！」

「……………へっ？」「……………」

魔力放出で跳んで、ジュエルシードを掴んだ。突然の事で全員ア然とした中、俺はフェイトとアルフに念話した。

《さっさと逃げる。今のお前たちに捕まってもらったら困る》

《《ツー！！》》

今捕まったらなのはは、いつ「OHANASSI」すればいいんだ。

「アルフ！！」

「ぐっ、わかった!!」

「あっ！待て!!」

「これよし。」

「おい！君、何してくれる!!」

「何が？」

「ここはとぼけと」。

「君のせいで逃げられただろ!!」

怒られていると久遠が俺の前に立って言った。

「要いじめちゃだめ!!」

「い、いや別に虐めてるわけじゃ」

おお、久遠なんていい子なんだ。俺はうれしいよ。そんなこと考えているとディスプレイが空中に現れた。

「お疲れ様、クロノ」

「艦長」

この人がリンディさんか。桃子母さん並に若いな。

「ロストログアの確保には成功しましたが、もう一人の魔導師には

逃げられてしまいました」

「構わないわ。被害が無かっただけいいわ。それでそちらの方々」

「はい」

なのはとユーノが返事をする。

「何か用か？」

俺はちょっと反抗的に言ってみた。

「そんなに警戒しなくていいわ。ちょっとアースラで話しを聞きた  
いだけだから」

「………とりあえず一つ聞きたい」

なのはと久遠のために。

「何かしら？」

「時空管理局って何？」

「へっ？………そういうえば、あなた達は現地民だったわね。  
そうね、簡単に言えば、いろいろな世界を警備する魔法を使う警察  
機関といったところかしら」

「へっ」

「ガッテン」

上はなのはと久遠、下は俺だ。

「何かおかしかった気もするが、まあいい転移するぞ」

ということで現在アースラ内部を歩いてます。

「そうだ。バリアジャケットとデバイスを解除していいぞ。いつまでもそのままだと窮屈だろう」

「そっか」

なのははバリアジャケットを解除し、レイジングハートを待機状態にした。

「君も元に戻っていいぞ」

クロノがそういうと

「そうですね」

ユーノは人に戻った。

「ええっ！？ユーノくんて人だったの！？」

そういえばなのは知らなかったっけ？

「えっ？えっ？言ってなかった？」

「聞いてないよ〜!？」

ダチ○ウ倶楽部が思い浮かんでしまった。

しばらくアースラ内部を歩いてようやくリンディさん達に会った。

「初めまして、リンディ・ハラウンよ」

「エイミィ・リミエッタだよ」

「高町なのはです」

「ユーノ・スクライアです」

「一条要だ。そんでこっちが」

「久遠だよ」

「それじゃあ、自己紹介も終わったことですし、別室で話しましょうか」

そういうと場所を和室っぽい所に移動した。さあ、交渉頑張るぞ。

「さて今回の経緯を聞かせてもらえるかしら？」

めんどいから

「ユーノ、任せる」

「わかった」

ユーノはジュエルシードを集める事になった理由や俺たちと協力している理由を言った。

「立派なのね」

「だが危険過ぎる。始めから管理局に連絡すればよかつただろう」

「別にいいだろう？これまでたいしたこと無かつたんだから」

「それは結果論だ」

「はあ、頑固だねえ。そんなんじゃエイミィさんに嫌われるぞ」

「なっ、何でそこでエイミィが出るー!!」

「あら、やっぱりそう思うっ？」

「母さ……………艦長まで……………」

おもしれー。

「さて、次はこちらからいいかしら？」

そういうとリンディさんはロストログアについてや次元振について語り出した。

「ここからは管理局が全権を持ちます」

「「えっ!?!」」

なのはとユーノが驚く。

「一般人である君達がこれ以上関わるのは危険だ」

「いきなり言われてもアレですから、一晩ゆっくり話してみてください」

もうじきかな。

「断る」

「「なっ!?!」」

「「えっ!?!」」

「君は何を言ってるんだ!?!」

そう言われてもね。

「管理局に任せるのは不安だ」

「何故か聞いてもいいかしら？」

流石艦長、冷静だ。

「いくつかあるが、一つはあの時クロノしか来なかった点。普通は危険物処理にはもつと大勢来てもいい。だがクロノしか来なかったということは、ジュエルシードに対応出来るのはクロノだけだったということじゃないか？」

「……………」

図星……………か。

「もう一つは対応の遅さ。いくら忙しいからって、次元震発生してから行動してちや遅いんじゃないか？」

「それは次元震発生によって初めてロストロギアに気付いたから……………」

そんなこと百も承知。

「だからこそ、現地の魔導師に協力してもらった方がいいだろう。そっちの方がより迅速に行動出来る」

「だが民間人にやらせるなど……………」

クロノの堅物、これだからクロノはいかんだよ。クロノは

「……………なら協力してもらえますか？」

「っ！艦長!？」

これは俺が決めることじゃないな。

「なのはどつするっ？」

「やらせて下さい」

即答、流石なのは。

「では、よろしくお」ちよい待て!!」「？」

さあ、ここからだ。

「誰が無償でやると言った？」

「っ!!!!?」

「君は!!!!」

「要くん!?!」

フッフ、混乱してるな。

「なあに、簡単な事だ。条件二つと報酬二つでいいんだから」

「………内容にもよります」

「じゃあ言つぞ。」

条件1、そちらに協力するにあたって、一度だけ自由に行動できる権利がほしい。

条件2、俺と久遠の力の内容について聞かない。調べるのは自由だ。

報酬1、先払いでストレージデバイス一つ欲しい。

報酬2、全てが終わった後、俺専用のデバイスが欲しい。出来ればストレージで。

以上だ。」

「一つ目の条件がこちらと対立する事でなければ」

「当然」

誰が管理局とわざわざ対立するか。

「わかりました。その条件全て叶えましょう。それでは改めてよろしく願います」

「「「はい!」「」」

「うん!」

さあ物語も終盤に入ってきたぞ。

## 第九話（後書き）

やっぱり難しい。小説なんで始めたんだろう。すみません愚痴りました。

自分のなんか楽しみにしてる人いるのかな、なんて思うとつい。後、安西先生、感想が欲しいです。どんなものでもいいです。作者のモチベーションがべらぼうに上がる。かもしれない。

## 第十話（前書き）

主人公は魔法はほとんど使えません。そのかわりレアスキル持たせました。

## 第十話

要side

管理局と手を組んでから数日、ジュエルシールド探索は実に順調に進んでいる。やはり個人では難しい探索も団体がいると楽だ。

ジュエルシールド封印をやるのはなのはだ。たまに発動するジュエルシールドもあるけど、ほとんど一人で終わらせてしまう。凄い成長速度だ。流石は天才。

さて、今俺は何をしているかというと、クロノにデバイス使用の手ほどきを受けているのだが………

「何で君はバリアジャケットも張れないんだ………」

「何でだろ？」

何故かバリアジャケットが張れない。いやバリアジャケットだけでなく、魔力弾もバインドも出来ない。ただ

「何でシールドだけ出来るんだ？」

「僕に聞かないでくれ」

そう、シールドだけは出来るのだ。しかも異常に硬い。クロノのブレイクインパルスでも、何かシールド破壊が付属された魔法でもびくともしなかった。まあ、シールドなら足場にもなるし、バリアジャケットよりアルティメットワンの方が優秀だし、戦闘は格闘だし、問題ない。

「クロノ、デバイスはグローブ型のシールド特化がいいな」

「ああ、だがストレージよりインテリジェントの方が君にはいいな」

「へっ？何でさ？」

インテリジェントって得意じゃないんだよね。武器に意思があると無駄に愛着湧いて使いずらいんだよね。

「インテリジェントなら魔力があれば、デバイスの意思である程度魔法が使える。勿論君が使えない魔法もだ」

成る程、それならインテリジェントの方がいいか。多少とはいえ補助があつた方がいいに決まつてる。

「わかった。それで頼めるか？」

「ああ、いいだろう」

そんな話をしていたとき  
ビーツ、ビーツ

「「！」「」」

「ジュエルシードが見つかったか？」

「いや、それだけでは警報は鳴らない。とにかくブリッジに行こう」

ブリッジにあるモニターを見るとフェイトとアルフが竜巻相手に戦っていた。報告によると発動したジュエルシードは六個らしい。

「早く助けに行かないと!!」

「その必要はない、放っておけば自滅する。自滅しなくても疲労している所を叩けばいい」

んー、組織としては正しいんだろうな。でも

「悪いが俺たちはそんな風に考えられなくてな。リンディさん転送準備を」

「駄目よ。危険だわ」

「自由権」

「だとしても」

譲らないな。

「ただ、ジュエルシードが早く手に入るか、遅く手に入るかの違いでしょ?」

「……………無茶しない?」

「勿論」

「ならば許可します」

「よし！なのは、ユーノ準備しろ。今回は空だから久遠はお休み」

「うん！！」

「わかった！！」

「はい」

(身体能力70%解放、魔力70%解放、アルティメットワン発動)

そして俺たちはフェイトの所へ転移した。

リンディ side

はあ、押し切られちゃったわね。でもこれで彼の条件の一つは無くなったし、彼の力を解析するチャンスね。

「要くんの解析準備を」

「はい！」

それにしても、転移する前に魔力量が跳ね上がったわね。Sランクに届くんじゃないかしら。

「艦長……………」

「何かしら？クロノ」

「よろしかったのですか」

クロノも心配症ね。

「大丈夫よ。それにあなたにもすぐ行ってもらってから準備しなさい」

「はい、了解しました!!」

要side

俺たちはフェイトたちの側に転移した。

「!?!」

「あなたたち!!」

「フェイトちゃん、助けに来たよ!」

「遊びに来たよ」

「「帰れ」」

ユーノとアルフが酷い……

「ジョークだよ、ジョーク」

「こんな状況でジョークを言うのはどうかと思います」

おっ!フェイトがツッコミした。

「……………何であんたシールドに乗ってるんだい？」

アルフがようやく気付いてくれた。

「聞いて驚け！！なんと俺はシールド以外バリアジャケットも張れないのだ！！」

「……………頑張って下さい」

「……………ドンマイ」

ああ！二人の同情の視線が痛い！

「要くん、真面目にやるの」

「すまない」

遊び過ぎた。だがどうしようか。

「フェイトちゃん、協力して。それでジュエルシールドは半分こ、ね」

「……………(コクン)」

フェイトも協力してくれるようだし、フォローを頑張りますか。

「ユーノ！アルフ！二人のフォローするぞ。手伝え！！」

「わかった！」

「しょうがないね」

俺はシールドを足場に竜巻の近くまで跳んだ。

（近くだと迫力あるな）

まあ六本も竜巻がある光景なんて映画ぐらいでしかお目にかかれな  
いからな。

俺は新たなシールドを足場にし、魔力を込めた右足で回し蹴りをし  
た。

「おらあ！！！」

それと同時に魔力放出をした。すると魔力波が発生した。以前の暴  
走ジュエルシールドの魔力波と比べると見劣りするが、十分な威力だ  
ったのか、竜巻の勢いは弱まった。

「「バインド！！」」

さらにそこへユーノとアルフのバインドが追加された。ステージは  
完成した、次は二人の番だ。

「デイバイン」

「サンダー」

膨大な魔力を感じる。

「バスター！！！！」

「レイジ!!!」

「危ねっ!!!」

逃げるタイミングが遅かったのか掠りかけた。あんなもん直撃したら非殺傷とか関係なく即死じゃね？

煙が晴れた後には六個のジュエルシードが浮いていた。

「エへへ、じゃあ半分こだね」

「.....うん」

「それでね、フェイトちゃん.....友達になりたいの」

「.....あ.....」

なのほらしいな。全部終わった訳じゃないけど、とりあえずよかったよ「悪いがジュエルシードを渡す訳にはいかない」くなかった。

「管理局!?!」

「あんたたち、騙したのかい」

「別に君達は騙されてはいない。この行動は彼らの独断だからなあれ?クロノってこんなこと言うキャラだっけ?ともかく止めないと。」

「まあまあ、クロノ落ちつくゾクツ>全員防御!!!いや、逃げる!!!」

理由はわからないが俺の直感がそう言わせた。

「何を言つて『別次元からアースラと戦闘区域への攻撃を確認! あ、あと六秒!?』何だつて!?」

すっかり忘れてたぜプレシア・テストロッサ。どうする。よく考える。

避ける、可能。一番いい案。だがもしも避けられなかったら?

シールドで防御、論外。敵の攻撃はアースラにダメージを与えるほど、いくらシールド強度が異常とはいえ個人に、しかもデバイスを使つて数日の初心者に防げるものではない。

そのまま受け止める、可能。しかしリンディさんに無茶しないと約束してしまった。いくら高速再生で治つても、この先出動させてもえなくなるかもしれない。

シールドで受け流す、空中では不可能。俺が一度に作れるシールドは二枚。一枚は足場になっているため、もう一枚で受け流した場合間違ひなく防げない部分が出る。二枚使えば屋根の様にして防げるのに………

「ん?」

一枚のシールドを曲げればいいんじゃないか?

「来るぞ!」

クロノが叫ぶ。すると雷撃が現れる。

『わああああ!』

どうやらアースラに当たつたらしい。久遠が心配だ。

「きゃああああ!?!」

「フェイトちゃん!!きゃっ!!」

フェイトにも当たったのか!?無差別過ぎるだろ。俺の所にも来たな。一発や二発なら避けれたんだが……七発。何?俺嫌い?

「シールド!!」

俺はかなりの魔力を込めてシールドを張った。ここからが賭けだ。うまくいけばいいが、いかなければ……駄目だそんなこと考えてたら……よし!!

「曲がれ!!」

するとシールドが折れ曲がり雷撃を受け流した。ひび割れたが成功だ。

「っしゃあ!!」

「何だ今のは!?!」

「折れ曲がった?」

クロノとユーノが驚いているが、俺はホッとして聞いていなかったが……

「あれ?」

突然足場のシールドが無くなった。おかしいぞ。魔力はまだ残っているのに……そう思いデバイスを見てみたら

プスンプスン

「オーバーヒートオオ!？」

デバイスも壊れるとプスンプスンてなるんだね。そんな事を思いながら海に落ちた。

ザッバーン

「要く〜ん!？」

クロノside

何をしたんだあいつは!？

要の所に大量の雷撃が落ちた時、あいつはシールドを張った。あいつのシールド強度は異常なのは認める。だが防げるものではない。それをあいつはシールドを屋根の様に折り曲げることによって受け流した。しかしそれにデバイスが耐え切れなかったのか、足場が消えて海に落ちた。

「ユーノ、あいつがレアスキル持ってるのは知ってたか？」

「知らないよ。第一デバイス使った実戦が初めてというのは君も知ってるだろ？」

「だよな」

そういえばフェイトに逃げられてしまったな。

『クロノ大丈夫』

「はい、しかしジュエルシードは取られましたし、彼女にも逃げられてしまいました」

『今回は仕方ないは、三個ジュエルシードが手に入っただけでもよしとしましょう。それじゃ引きあげてきて』

「引き上げるんですか？引き揚げるんですか？」

『両方よ』

「了解」

僕は早速要を引き揚げるに行った。

プレシア side

「信じられない」

あの子供はシールドを折り曲げるなんてとんでもないことをして、管理局の船ですらダメージを与える雷撃を防ぎきった。

人形のデバイスのデータを見た時からめっちゃめっちゃだとは思っていた。

生身で使い魔の攻撃を受けても無傷だったり、ジュエルシードの魔力波を受けても一瞬で治ったり、暴走したジュエルシードを魔力を放出することで停止させたりと。今回も蹴りで魔力波を起こすなんて芸当を試してみた。

「あれだけの力があれば」

もしかしたらアルハザードに行くのに使えるかもしれない。いや、あの再生能力はアリシアを生き返らせるのにも使える可能性がある。

「ふふふ」

必ず捕まえてあげるわ。そしてアリシアの糧となりなさい。

## 第十話（後書き）

主人公にレアスキル持たせたのでその説明したいと思います。

レアスキル名・・・形態変化

すでに完成された魔法の形を変える。形を変えるだけなので消費魔力はほとんどない。しかし魔法自体の本質は変わらない。

といった感じです。このレアスキルは元々主人公が持っていたものです。

急に思いついたものですので、気に入らなければ教えて下さい。

オマケ3 (前書き)

十万アクセスありがとう

### オマケ3

雨「十万アクセスだよ。ユニーク一万も突破だよ」

要「よかったな」

雨「予想以上に早くて読者の方からの企画アイデアが来てないよ」

要「人気ないだけじゃねーの？」

雨「それなら十万アクセス突破しないよ」

要「その語尾止める、うざい」

雨「そうだな」

要「にしてもどうするんだ？やることないだろ？」

雨「こんなこともあるつかと大学の講義中に妄想したネタだすぜ」

要「授業しろよ。つーか妄想で、メモとかは」

雨「そんなものない。いつも書く時はその場で考えて書いている。

だから書いている途中に設定や会話が変わることもしばしばあるぞ」

要「真面目に書いている方々に謝れ」

雨「サーセン。じゃあ今回は『もし要がりリカルの次にTOAの世  
界に飛んだら』です。どうぞ」

目を覚ますとそこには

俺に潰された赤髪の青年と

それに驚く茶髪の少女がいた

……つかルクティアじゃね。

「要、俺……人を殺した」

「ああ、大丈夫だ。俺が守ってやる」

タルタロスでの生まれる友情

「貴方は本当にルークに甘いのね」

「お前は少し厳しすぎる」

保護者としての教育方針の違い

「いや、貴方の力には興味がそそられますねえ」

「止める、気持ち悪い」

研究者とモルモット(？)

「要る、その宝石欲しいな」

「誰が相棒をやるか！」

狙われるデバイス

「あら、少し料理を失敗してしまいましたわ」

「シヤマル料理怖い、美由紀姉さん料理怖い」

蘇る恐怖

「俺は女性恐怖症なんだよ」

「なら治った時の為にためになる話をしてやる」

長時間に渡る拷問（惚気話）

そして

「最後にいいものを見せてやるよヴァン。

起きるO R T、破壊しろ」

テイルズ・オブ・ジ・アビス<イレギュラー>

雨「はい、おしまい」

要「随分と簡単に終わったな」

雨「正直めんどい」

要「ダラダラ書かれるよりはいいか。確か始めはTOD2に飛ばされる予定だったんだよな俺」

雨「うん。神とORTの戦いを書きたかったからね。でもそうするとORTの出番が一度しかないからさ」

要「リリカルでも多くて三回だろ」

雨「もしかしたらもっと多いかもよ」

要「ふーん」

雨「さあ終わりの挨拶だ」

要「ここまで「チートじゃ済まない」をご覧いただきありがとうございます  
ぞいます」

雨「これからも是非見てください」

要・雨」「」「  
「ひなひな

### オマケ3 (後書き)

十万アクセス突破)

こんな早くくるとは思いませんでした。みなさんありがとう。

企画アイデアこの小説が続く限り募集しております。

もしコラボしたいという方がおられましたら、喜んでお返事させていただきます。

それではこれからも頑張ります。

第十一話（前書き）

今回は短めです。

## 第十一話

要side

「お疲れ様四人共」

「大丈夫？要、なのは」

リンデイさんがにこやかな笑顔で出迎えてくれた。しかし怒っている目が決して笑っていない。心配するより助けて久遠……………

「要くんは何であんなことをしたのかしら？」

「あんなことと言いますと？」

「シールドを折り曲げるなんて出来るかどうか分からないことよ」

えっ？あれ魔導師なら出来ることじゃないの？」

「そんなわけないだろう。あれは……………レアスキルだ」

「クロノに心読まれた!？」

「君が口に出していただけた!!」

それにしてもレアスキルとは……………ORTの力じゃないっばいし、もしかして俺自身の力か？

「あれは形態変化っていうレアスキルだね」

エイミーさんが言った。聞いたことないな。

「僕初めて聞くんですけど」

「ユーノくんが知らないのも当然だよ。過去一人しかいなかったんだから。私たちも調べて初めて知ったんだから」

「ふーん」

俺は興味ないな、自分のことだけど……

「凄いね、要」

訂正、久遠が褒めてくれるならあってよかった。

その後、俺たちは家に帰ることになった。リンディさんが士郎父さんたちに説明するのを手伝ってくれるそうだけど。俺はもう全てを話そうと思っている。

士郎 side

なのはと要が帰って来た。一緒にきたリンディという女性がこれま  
でのなのはと要の事を説明してくれた。所々話を隠しているようだが

「そうですね、家の子がお世話になりました」

「いえいえ、私たちも助かりましたし」

「もし良ければまた使ってやって下さい」

「ふふふ」

「土郎父さん少しいい？」

リンディさんが帰ってから要が話を切り出してきた。恐らく話されなかつたことだろう。

「何だ要？」

「俺たちが今までやってきた事について話そうと思って」

「………桃子も連れてこよう」

「一体どんなことを話してくれるのか………」

要 side

「はあ、切り出したはいいけど何て説明しよう。」

「要」

「一体何の話なの？」

「……………土郎父さん、桃子母さん……………これから話」とは本当の事だから信じてほしい」

「当然だろう」

「子供の事を信じない親はいないわよ」

「ありがとう」

俺は一から全部話した。魔法の事も、ジュエルシードの事も、心配させることになるかもしれない。反対されるかもしれない。でも今言うっておこうと思った。

「これから危険な事もあるかもしれない。でも、なのはは絶対に守るし、俺も絶対帰ってくる。だから我が儘を聞いてほしい」

「……………ダメよ」

「桃子母さん！」

「そんな危険な事、子供にやらせられると思っているの？そういう事専門の機関もあるのですよ？」

「だけど自分から首を突っ込んだことだから、最後まで関わりたいんだ！！」

その時、ドアが開いてなのはが入って来た。

「お母さん、私からもお願い!!」

「なのは……………」

「……………俺たちの負けだな」

「そうね。二人が私たちに反抗してまで我が儘言っなんて初めてだしね」

「それじゃあ……………」

「ただし、絶対に無事に帰ってこいよ」

「「はい!!」」

よかつた。

「そういえば、要」

「何？桃子母さん」

「それよ」

それ？

「あなた、私たちを呼ぶとき名前を付けてから母さんや父さんって言うでしょ。それをやめなさい」

あー、そういえば無意識の内やってたな。

「わかったよ、母さん。これでいい」

「ええ」

それなら恭也兄さんたちもそうしないな。

「そういえば、なのは何であんな所にいたんだ？」

「……………何でだっけ？」

「……………忘れるような事ならどうでもいい事だ」

「そうかなあ」

次の日、二人は宿題を忘れて先生にこっぴどく叱られました。

叱られた日の放課後、アリサが保護した犬を見に行くとアルフがいた。

『アルフさん!?!』

『ついに狼からペットに成り下がったか。いや、フエイトの側にいたときからそうか』

『黙りな!?!』

「あんだ、何かした？物凄い威嚇してるけど」

「さあ？」

「冗談はこのくらいにして」

『その怪我は何だ？』

プレシアの仕業だろうけど

『プレシア……………フェイトの母親にやられたよ』

『フェイトちゃんのお母さん？』

『あんなものが母親なんて思いたくないけどね』

『フェイトは無事なのか？』

『多分……………でもジュエルシードを集めたら……………』

捨てられるな……………

「あんたたちさつきからぼーっとして、どづしたのよ」

あっ、アリサの事忘れてた。

「少しこいつと一緒にいたいんだ。懐いてほしいからな」

「ふーん、なら席を外すわ」

「すまん」

アリサは物分かりがいいな。

『アルフ、フェイトを助けたくないか？』

『方法があるのかい！？』

俺はなのはとの決戦を提案した。あれの後なら疲弊したフェイトの保護はたやすい。管理局も親の命令でやらされていたフェイトに厳しい罰は与えないだろう。と言って

『……………うまくいくかね』

『うまくいかせる』

『そうだよ！私だってフェイトちゃんを助きたい』

『何で……………そこまでしてくれるんだい？』

『アルフさん、二人の人助けは本能みたいなものですから』

やっと喋ったと思ったら、とんでもないこと言ってくれんな、ユーノ。後でお仕置きだ。

<ゾクツ>

『何だ今の寒気！？』

『？ どうかしたかい？』

『さあさあ、もうお開きにしよう。アルフ、約束は守るから安心しろ』

『そうじゃないと困るよ』

最後の決戦、どうフォローにまわろうか。そしてプレシア戦はどうするか。力を100%解放は当然として、場合によっちゃORTも考えないとな。

## 第十一話（後書き）

- ・ はい、次は俺の苦手な決戦シーンです。なので期待しないでね？  
しかしプレシアどうしよう。改心させるつもりはないけど……

第十二話(前書き)

決戦シーンはやっぱりムズイ

## 第十二話

なのはside

ようやく、フェイトちゃんとの決戦の日がきた。

今まではずっと負けてきた。だけど今回だけは絶対に負けない。ジュエルシードを渡さないためにも、応援してくれる要くんやユノくんのためにも。

「なのは、力み過ぎだぞ」

「にははは、やっぱり緊張しちゃっね」

「あまり無理するなよ？管理局の目的はジュエルシードかもしれないが、俺たちの目的はフェイトなんだから」

「うん、ありがとう」

要くんは優しいなあ。だから好きなんだけど……

「なのは、がんばれ」

「ありがとう、久遠ちゃん」

久遠ちゃんも魔法に関わらなかつたら会えなかつたんだよね。

《マスター、来ます》

「わかった。レイジングハート、よろしくね」

《もちろんです。マスター》

私はこの事件のおかげで成長することができた。新しい友達も出来た。その全てをぶつける！！

「勝負だよ！フェイトちゃん！！」

私は目の前にいるフェイトちゃんに向かって言った。

「うん。でも私は負けない。母さんの為にも、ジュエルシードとあの男の人は貰います」

「ええ！？何で要くんもなの！？」

「母さんが連れて来いって言ったから」

「絶対にダメ！！」

ジュエルシードはともかく、要くんは絶対に渡さないの！！  
そして私たちの決戦は始まった。

要 side

いい目をしてるな。魔法に関わる前は女の子だったのに、今となつては戦士の目だな。

ジュエルシードのおかげでなのは俺も成長できた。覚悟も持った。なにより力を手に入れた。力の本質自体は壊すことだ。だが使いようによっては守ることだってできる。

「要、フェイトが来た」

俺の腕に抱かれてる狐形態の久遠が言った。

「じゃあ、下がってるか」

さあ、なのは。お前の力を、覚悟を見せてやれ。

ん？何か言い争ってるな。どうしたんだろう。あっ、戦闘が始まった。

《フォトンランサー》

《デイベインシューター》

「ファイヤ！」

「シュート！」

二種類の魔力弾が飛び交う。なのははうまく避けながらフェイトとの間合いを詰める。逆にフェイトはうまく避けられず防御をする。なのははその隙を見逃さず追加の魔力弾を放つ。

「シュート！」

だが、フェイトも甘くはない。

《サイスフォーム》

デバイスを鎌にし、なのはの攻撃を切り裂く。さらになのはに斬撃を加える。リボンを斬られながらもなのははなんとか避ける。

「上手いな」

つい口に出てしまったが仕方がないだろう。何故なら、なのはが避けた先には既に設置型の魔力弾が用意されていたのだから。

「ファイヤー!!」

「!? くっ!!」

なのははなんとかシールドで防ぐ。

フェイトは驚いているだろうな。この間まで魔力が多いただけだったのはが、自分と同等に戦えてるんだから。これが高町の血がなせる技か……。っとフェイトが仕掛けるようだな。魔方阵が現れたり、消えたりしている。なのは何かされる前に攻撃しようとしたが、バインドに捕まった。

『なのは、フェイトのそれはヤバイよ!!』

フェイトの側に居続けたアルフが言う程だ。本当にヤバイのだろう。

『大丈夫だよ。三人共、手は出さないでね』

『わかった』

『ちよつと要!~!』

『要!なのはが負けるかもしれないんだよ!~?』

『負けたらそこまで、第一これはなのはとフェイトの決戦だ。俺たちが手を出していいものじゃない』

『ありがとう、要くん』

フェイトの準備が整ったようだ。無数の魔力弾が浮いている。

「フォトンランサー・フアランクスシフト　ファイヤ!~!」

魔力弾が一気になのはに襲い掛かる。一発一発はたいした威力じゃない。だがそれを脅威としているのは、圧倒的なまでの物量である。

「はあはあはあ……」

攻撃が終わったフェイトの息は切れていた。当然だ。あれだけの魔力を一気に放出したのだから。

「エへへ、バインドって攻撃が終わると無くなるんだね……」

「

煙の中からはのはの音が聞こえ、煙が晴れたそこには、ボロボロながらもしっかりと立っているのがいた。

「次はこっちの番だよ!!」

《ダイバインバスター》

なのはの攻撃がフェイトを襲う。先程の攻撃の疲れもあり、攻撃はフェイトに直撃した。直撃したフェイトはボロボロになっていたが、なのはは更に畳み掛ける。

「これがダイバインバスターのバリエーション」

周りの魔力、先程のフランクスシフトの魔力すらかき集め、魔力が収束していく。

「!?!」

フェイトは避けようとしたが、バインドに捕まっていた。先程とは逆のシュチュエーション。違う事があるとすれば、フェイトがダメージを受けていること、なのはの攻撃の魔力が異常なこと。っておいおい集め過ぎだろ。

「全力全開!!!スターライト・ブレイカー!!!」

膨大な魔力に飲み込まれ、海に落ちるフェイトを俺はキャッチした。

「フェイトちゃん大丈夫?」

「やり過ぎだ。バカチン」

ポカリ

「にゃっ!!」

全く全力全開にもほどがある。加減というものを教えんな……  
・おや、フェイトが目を覚ました。素晴らしい回復力だな。

「大丈夫？」

「……………うん」

「……………私の勝ちだね。ようやく」

するとバルディシュはジュエルシールドを吐き出した。

「飛べる？」

「……………うん」

そんなやり取りをしていると突然、雷撃が俺たちの所に落ちてきた。数は三つ。俺一人なら避けるが、今のなのはとフェイトが一緒じゃ無理だ。

「ちっ！ルーフシールド!!」

とりあえずシールドを張って防ぐ。ちなみにルーフシールドはこの間のシールドの事だ。その際にジュエルシールドは取られてしまったが、どうやらプレシアの居場所が判明したようだ。

「なのは、アースラに戻るぞ。フェイトも着いてこい」

もうすぐ終わりか……プレシアの奴どつしてやるっか。  
そんな事を考えながらアースラへと戻った。

## 第十二話（後書き）

次はついにプレミア戦です。

これまでとにかくハイスピードで書いてきましたが、どうなんでしょう？ もっとじっくり考えて書いた方がいいのでしょうか？

第十三話（前書き）

此処までで最長です。

## 第十三話

要side

俺たちがアースラに到着した時には、既に武装局員たちが時の庭園に侵入している映像がモニターに映し出されていた。

「初めましてフェイトさん」

リンディさんがフェイトに挨拶をしていた。そのリンディさんから俺となのはに念話があった。

『母親が逮捕されるのを見せるのは忍びないわ。フェイトさんを別の部屋へ連れてってくれる?』

『はい』

『了解した』

だが

『目標確認しました!』

実にタイミングが悪い。管理局にはKYが多いらしい。

『プレシア・テストロツサ、時空管理局法違反であなたを逮捕する。速やかに武装解除しなさい』

『……………』

そんなもので済むのならこの事件はとうの昔に終わっている。まあそんなこと全員わかってるだろうが……

『な、何だ……ここは』

そんな中誰かが部屋を見つけた。培養ポットが大量にある部屋の奥にあるポットにフェイトによく似た少女が入っているのを。

『アリシアに近づかないで！』

『グアツ！！』

その局員はプレシアの魔法で吹き飛ばされた。

『そ、総員撃てー！！』

隊長の命令でプレシアに魔力弾が飛んでいく。だが相手は大魔導師、その程度では効かない。逆に反撃を受けた。

『全員、防いで！！』

リンディさんが言うが無意味だろう。あの中にクロノクラスがいればともかく、そうでないから全滅だ。

『局員の回収を！早く！！』

アースラ内が騒然とするなか、プレシアが語りだした。

『もう終わりね。九個のジュエルシードではアルハザードに行ける可能性はほとんどないけど……その子供がいれば結果は

変わったかもしれないけど……もう疲れたわ。あんなアリスアを見続けるのも、人形の母親役をやるのも』

「……………えっ？」

フェイトは本能的に理解したのだろう。人形とは何かを……………

『フェイト、聞こえるかしら？あなたは私がアリスアの代わりに作った人形なの。アリスアのクローンなのよ』

「……………プレシア・テストロッサには一人娘がいた。でも昔事故で……………」

『よく調べたわね。そうよ、その通り。私はその事件の悲しみから逃れる為にあなたを作った……………でも出来たのは姿形だけよく似た別物だった』

「やめて……………」

なのはが言う。まったく、聞いてることちがイライラする。

「だから私はあなたを作った技術、プロジェクトF・A・T・Eから名前をとってフェイトと名付けた」

「やめてよ……………」

ああ、イライラする。

「本当によく働いてくれたは、でも私を母さんなんて呼ぶのにはイライラさせられたわ。」

アリシアと同じ見た目をしながらまったく違うあなたが母さんと呼ぶのはね」

イライラするイライラするイライラする。

「だからねいいこと教えてあげるわ、フェイト。私はあなたのこと  
が………作った時から嫌いだったのよ……！」

「もう、やめて……！」

「………あつ」

バルディシュは碎け、フェイトは崩れ落ちた。

「なのは、フェイトを連れていく」

「………！」

「………！」

後ろで何か言っているが、全て無視する。俺はフェイトを運びながら、どうプレシアを潰すか考えていた。

「・・・・・・・・フェイト・・・・・・・・」

アルフがフェイトを呼ぶ。しかし放心状態のフェイトには聞こえない。

「なあ、フェイト。お前は何なんだろうな？」

俺はフェイトに聞いてみた。

「・・・・・・・・私は・・・・・・・・クローン」

「そうだな、お前はアリシア・テストロッサのクローンだ」

「!?!? あんた!?!」

アルフが俺に掴み掛かってきた。

「黙ってる、アルフ」

睨みながら俺は言った。

「くっ」

アルフは俺を放してくれた。これでフェイトと話ができる。

「いいか、フェイト。お前はアリシアのクローンだ。アリシアと同じ肉体を持ち、アリシアの記憶を写されたクローンだ」

「っ!!」

「だけどな。俺やなのはが戦い、ジュエルシードを奪いあったのはフェイト・テストロッサという人間だ」

「え?」

「聞こえなかったか?俺たちはフェイト・テストロッサという人間と戦ったって言ったんだ」

「でも私はアリシアのクローンで……」

「そうだな。でもいくらアリシアのクローンで記憶が写されたとしても、俺たちと戦った記憶はフェイトのものじゃないのか?」

「……うん」

「ならお前はフェイト・テストロッサだ。ちょっと他人の記憶があるだけだ」

「そうだよ!フェイトはフェイトだよ!!」

アルフもフェイトを元気付けるのを手伝ってくれた。もう一息だ。俺はフェイトを抱きしめながら言った。こうした方が安心出来ると思っただけだ。

「フェイト。お前は自分のやりたい事をやればいい。何がやりたい?」

「母さんにあつて話をしたい……私の思いを伝えたい!!」

するとバルディッシュがそれに応えるように元に戻った。よし、ようやく鬼ババ退治に行けるな。

「……………あの、そろそろ放してもらっても／＼」

「おお、スマンスマン。よく知らない男に抱かれてたら嫌だよな」

「い、いえ……………そんな事は」

さて行くか。部屋を出ると久遠が待っていた。

「要、行くの？」

「おう。リンディさん、転送よろしく」

「わかったわ、転送準備を」

あっ、聞き忘れてた。

「久遠も来るのか？」

「うん！」

駄目って言っても聞かないだろうな。

「気をつけるんだぞ」

「わかってる！」

そして俺たちは時の庭園に転送された。

時の庭園に着くとフェイトはバルディシュを起動させ、久遠は大人の姿になった。

「あなた「久遠だよ」久遠は使い魔だったの？」

「違うよ」

「じゃあ何で「ストップ」？」

「久遠の力については秘密だから聞かないでくれ」

「うん、わかったよ。えつと「要、一条要だ」「要」

管理局に聞かれてたらマズイからな。今は変身魔法という事にしておかないと。

「おーい、行くよ」

アルフが言う。俺も準備するか。

「ふう〜」

「要？どうしたの？」

「身体能力100%解放」

全身に力が満ち溢れる。

「魔力100%解放」

「「!？」」

膨大過ぎる魔力にフェイトとアルフが驚く。

『嘘!?!SSSランク以上!?!』

アースラの方も驚いているらしい。

「アルティメットワン発動」

………初めて全開にしたけど凄まじいな。これはあまり使わないほうがいいな。

「か、要？」

「どうした?フェイト」

「その魔力は？」

「俺の全力だよ」

人の状態でだけどな。

「俺は先に行く」

そうやって俺は走り出した。

フェイス side

要がもの凄い速度で走って行った。

「久遠、要って何者だい？」

アルフの疑問ももつともだ。

「わかんない。それよりなのはの所に行こう」

そうだ。早くあの子の所に行かないと。

「久遠しっかり着いて来て」

「わかった」

私たちも出発した。

しばらく行くと、あの子と執務官の人がいた。

「サンダーレイジ！」

私は魔法で傀儡兵を吹き飛ばした。

「フェイトちゃん!!」

「来たのか!」

「あたしもいるよ」

「私も」

「ちょうどいい。なのは、フェイトは駆動炉を、僕とアルフ、久遠はプレシアの所へ行く」

流石は執務官。確かにそれが一番効率がいいだろう。

「じゃあ行こう、フェイトちゃん」

「うん。二人で力を合わせればすぐだよ」

フフツ。まさか協力するなんて思わなかったな。

「気をつけてね、フェイト」

「アルフも」

そうして私たちは二手に分かれた。

駆動炉に行くまでにはたくさん の 傀儡兵がいたけど、二人なら簡単に蹴散らせた。だけど、今日の前に立ち塞がる相手はそう簡単にはきそつにない。大型の傀儡兵。バリアも強力だ。

「……………フェイトちゃん」

「大丈夫」

此処までも大丈夫だった。なら

「レイジングハート」

《わかっていきます。マスター》

「バルディッシュいけるね」

《もちろんです》

「やるよフェイトちゃん！」

「うん！」

二人の魔力が収束する。

「デイベイン……………バスター！！！！」

「サンダー……………スマッシャー！！！！」

私たちの攻撃は傀儡兵どころか床をも砕き、虚数空間を剥き出しに

した。

「フェイトちゃん、私は駆動炉に行く。だからフェイトちゃんは……」

言いたい事は分かる。ならそれに甘えよう。

「ありがとう」

私は母さんの所へ向かった。

母さんの所に着いた私が見たものは

呆然とするアルフと執務官。  
応援している久遠。そして  
母さんと戦う要だった。

要side

俺はフェイトたちと別れるとプレシアの所へ向かった。途中邪魔な物は全て砕いて一直線に走った。

「よう、おばさん」

「あら、アリシアの糧になりに来たの？」

何言ってやがる。

「頭に蛆でも湧いたかい？いや、死人が生き返るなんて思ってる時点でもう駄目か」

「わざわざそれを言いに来たのかしら？」

「まさか、生け捕りに来たのさ」

「そう」

プレシアは突然魔力弾を撃ってきた。だが俺はそれを弾いた。

「効かねえよ」

「ならこれはどうかしら」

さらに無数の魔力弾を撃ってきた。数も威力もフェイトのフアランクスシフト以上だろう。しかし今の俺のステータスは最上級サーヴァント並。音速を越える攻撃でもない限り当たらない。俺は自分に当たる弾だけを弾いた。全て弾く意味はないからな。プレシアはそれを見て驚いていた。

「あなた………何なの」

「教える必要はない」

再び魔力弾が飛んでくる。弾く。飛んでくる。また弾く。そんなことをしているうちにクロノ、アルフ、久遠が来て、それから少ししてフェイトが来た。そういえば、次元震が収まってるな。リンディ

さんか……………

「やっと来たかフェイト。さあ、言いたい事言っただれ」

俺がそう言つと、フェイトがプレシアに向かって言った。

「母さん」

「何しに来たの。消えなさい」

「私はアリシア・テストロッサのクローンで、母さんからすればフェイト・テストロッサという人形かもしれませぬ」

「……………」

「でもフェイト・テストロッサは、あなたにここまで育ててもらいました。」

「……………それで、私にあなたを娘と思えと？」

「あなたが望むなら。でも私はあなたの味方です。あなたを助けない。私があるの娘だからでなく、あなたが私の母親だから！！」

「くだらないわ」

そう言つとプレシアは杖で地面を叩いた。すると魔方陣が現れ、地面に亀裂が走った。

『艦長！庭園が崩落します！幸い次元震は起こりそうにありません』

アースラから連絡が届く。

「わかったわ！みんな逃げるわよ！！」

みんなが逃げ出す中、俺は動かなかった。

「要！早く！」

フェイトが言う。が

「先行つててくれ」

「そんな！駄目だよ」

でもやることあるからな。そしたら思わぬ所から助けが来た。

「フェイトさん行くわよ」

「行こう。フェイト」

リンディさんと久遠だった。久遠はともかくリンディさんとは・・・

「彼なら大丈夫よ」

「要を信じて」

「・・・・・・・・わかった。必ず戻って来てね！！」

俺は手を振ってそれに応えた。

「何故行かなかったの？」

プレシアが聞いてくる。

「言っただろ。あんたを生け捕りにするって」

「アハハ、虚数空間に落ちたら意味無いでしょう！まあいいわ。アルハザードに着いたらモルモットにしてあげる」

「着いたら………な」

そして俺たちの足元は崩れた。

どうやらプレシアは気絶したらしい。さて、脱出の為に『世界』を作りますか。

「O R T 解放」

フエイトside

アースラに戻ってからののはと合流した。久遠がなのはに要の事を話したら

「要くんならしょうがない」

ちなみに近くにいたユーノって人も

「要なら大丈夫じゃない？」

要って何者なんだろう。

ビーツ、ビーツ

突然警報がなった。

「庭園を監視していた機器が全て異常値を示し破損!?な……  
・なんだこれは!?!」

アースラのスタッフの人が驚いている。

「どうした……の?」

リンディさんまで、一体どうしたかとモニターを見ると

庭園が

水晶の世界に飲み込まれていた。

「何なんだこれは!？」

執務官の人が混乱している。当然だ。こんな現象私も知らない。虚数空間すら飲み込むような現象。

「ねえ、ユーノくん。アレ何？」

「えっ?あつ……何だアレ」

なのはとユーノが何かに気付いた。水晶の世界の中心にソレはいた。青白い脚を瓦礫から突き出している何か。そして

「G y u a a a a a a ! ! !」

ソレの咆哮が周囲の物を吹き飛ばした。

「バ、バケモノ……」

誰かがそう言った。その言葉ほどアレに相応しい言葉はないだろう。40Mはあるかという巨大な肉体。青白い蜘蛛のような姿。モニター越しでも感じる圧倒的なまでの脅威。だが私は場違いな事を考えていた。

美しい

手の届かない空を美しいと思うように、何かを極めたものを美しいと思うように。魔導師、いや次元世界中全てのものが手の届かないであろうソレを、異常の極みともいえるソレを、私は美しいと思った。

「侵食されていた空間が元に戻ります!!」

その報告の通り水晶の世界は小さくなっていき、アレの足元ですべて消えた時、アレは光に包まれて、光が収まったそこには

肩に母さんを担いで、こっちにピースサインをする要がいた。

### 第十三話（後書き）

なんとか終わらせました。

次は別れのシーンうまく……何だお前たち、うわっ！？何を！？ギヤアアア！！

????「うまく殺ったぞ、……」

????「ご苦労様……。次回は外伝《異世界より来たる者たち》  
ごっご期待」

無印エピソード(前書き)

何とかエピソードです。

## 無印エピソード

要side

プレシアを担いでアースラに戻ってくると変な目で見られた。

「要、おかえり〜」

「ただいま、久遠」

「要くん、さっきのは何？」

リンディさんが聞いてくるが

「条件1」

「うっ」

そう俺が最初に突き付けた条件1は、俺や久遠の力について聞かないというものだ。

「まあ何も教えないというのもなんですから、名前くらい教えましょう。」  
「ORT」です」

「ORT……」

「それよりもプレシアをお願いします」

「……わかったわ」

あー終わった終わった。

「要くん、お疲れ様」

「要、母さんを助けてくれてありがとう」

「おう」

それにしても疲れ・・・・・・・・た・・・・・・・・な

バターン

「要くん!？」

「・・・・・・・・寝てる?」

「ZZZZ」

俺は爆睡した。

起きるとなんか表彰されたが、寝ぼけて覚えていない。それより

「リンディさん、フェイトはどうなるんです?」

「いくら母親の命令とはいえ彼女の罪は消えないわ。でも主犯が捕まったことと彼女の意志じゃないことを考えるとほぼ無罪ね」

「そうですか。よかった」

原作より罪は軽くなりそうだ。

「私たちとしてはあなたの事も知りたいけどね」

「インテリジェントデバイスをくれるならもう少し教えますよ」

そう、デバイスをストレージからインテリジェントにしてもらう代わりにO R Tについて教えることになっている。

「それにしても明日別れだな」

「そうだな」

おや？

「クロノも寂しいのか？」

「一応君は僕の弟子だぞ」

「そうでした」

クロノは魔法を覚えてくれた師匠だったな。

「じゃあまた明日な」

「ああ」

俺となのはは朝早く待ち合わせ場所に向かった。  
おっ！いたいた。なのははフェイトの所へ、俺はクロノの所へ向かった。

「よう、クロノお疲れ様」

「ん？そんなことないぞ。むしろ君専用デバイスの方が大変だ」

「そりやしません」

まったく失礼な……… おや？

「君と友達になりたいんだけど、どうすればいいかわからないんだ」

「簡単だよ。お互いの目を見て名前を呼び合えばいいんだよ。……  
……私は高町なのは」

「なのは………」

「うん」

「なの、は」

「……………うん！」

よかったな、なのは、フエイト。

「君も挨拶くらいしてきたらどうだ？」

「……………時間はいいのか？」

「別に凶悪犯を護送する訳でも、事件が起こってる訳でもない。多  
少遅れたって構わないさ」

クロノがKYじゃない。でもその好意に甘えさせてもらおう。

「サンキュ」

「おーい、フエイト」

「あつ、要」

「よかったな」

「……………うん。それで、要とも友達になりたいんだ」

「俺はもう友達と思っていたんだが」

「えっ？」

「友達でもない奴を抱きしめてまで慰めるかっての」

「あっ、あっ／＼／」

「要くん、何の事？」

黒なのは降・臨！って待てい！！

「なのは今は落ち着け、フェイトとの別れなんだから」

「む」

何とか落ち着いてくれた。

「か、要。目を閉じて」

「ん？おっ」

何なんだろう。そう思ったが、すぐにこのシュチュエーションから起こることを思い出したが………

チュッ

その時には頬に湿った、柔らかい感触がした。ああ、キスされたんだな。

「ああー！！！」

「ごめんなのは。でもしばらく会えなくなるんだから許してね」  
何でこんなことになった？なのはが好意を持つてるのは何となく知  
ってるけど、いつフェイトフラグ建てた？

「フェイト、そろそろ時間だ」

クロノ！ナイスタイミング！！もう誰もお前をKYなんて言わせね  
え！

「何か失礼な事言われた気がするが……」

「じゃあね、要。なのは、時間が空くけど負けないよ」

「私だって絶対に負けないからね！フェイトちゃんがない間に要  
くんをメロメロにするの！！」

「二人共、白熱するのはいいが、どうせ要はまたすぐにフェイトと  
会うぞ」

「……へっ？」「」

あっ、そういえば……

「要のデバイスは何処で作るんだ？」

「「あっ」

ククク

「アハハハハハ!!」

「要くん笑うなんて酷いの!!」

「そっだよ!!」

「そういうことはさっきまでの自分の行動を思い出してから言え」

「」「」「」「」

俺たちの一時の別れはこんな風に終わった。

## 無印エピソード（後書き）

雨「ふうー、終わった終わった。ASまでどんな話書こつ」

アルフ「あたしを出せー！ー！」

ユーノ「僕も忘れるなー！ー！」

久遠「久遠もー！ー！」

雨「あべしっ！ー！」

雨「・・・・・・・・予定ではデバイス作製・・・・・・・・要の修業です。  
ガクッ」

外伝〈異世界より来たる者たち〉（前書き）

秋代様の作品とのコラボです。

## 外伝〈異世界より来たる者たち〉

要side

ジュエルシード事件から半月たった休日。俺は久しぶりに公園のベンチで寝ていた。

（今日は珍しく誰もいないから、寝放題だな）

いつもならゲートボールしている爺さん婆さんがいるんだが……  
……まあいいか。

????side

「ねえ……、本当にあの男子と戦うの？」

どう見てもただの子供だ。

「うむ、なかなか良い経験になると思っぞ」

どうやら……はあの子の戦いを見たらしいけど、

「でもこの世界の魔術師、確か魔導師は守護者よりも弱いんですよ」

「つべこべ言わず戦ってみろ」

「わかったよ」

要side

<ゾクッ! !>

何だ! ? 直感を発動していないのに感じた異常過ぎる感覚。間違いなくプレシアの比ではない。

「こんにちは」

「.....」

そこには一組の男女がいた。

男は黒髪に深紅の瞳、黒いマントに赤と黒の鎧。どう見ても職務質問される恰好だ。

女は紫の長髪に同じく深紅の瞳、そして紫のドレス。こちらはモデルとしてスカウトされそうだ。

「何者だ.....あんたたち」

普通なら変わった二人でいいだろう。だが、ただの変わった二人ならこんな感覚はしない。

「僕はアキラ・シュヴァイアー。こっちは」

「the dark six」

なっ! ?

「六王権だ?! !?」

ここリリカルだぞ。

「あれ？何で君はsixを知っているんだ？」

「さーて、何ででしょー！」

（身体能力100%解放！魔力100%解放！アルティメットワン発動！！）

「！へえ」

俺が能力解放したのを感じたようだが、余裕の表情を浮かべている。逆に能力解放した俺の方が絶望した表情になっているだろう。何故なら能力解放して改めてわかった。相手は死徒、さらに格が違い過ぎると……

「アキラ、一応固有結界を張っておけ。管理局とやらにはれないようにな」

「わかった」

これだけの力があって、さらに固有結界持ちかよ！？

次の瞬間、世界は漆黒の森といびつな黒い塔の建つ世界に塗り替えられた。森からは魔獣の気配が、塔からは死徒の気配がした。どれも特上のだ。

「ウオオオオオオ！！」

迷っていても仕方がない。とにかく目の前の敵を倒す！例え格上でも！！だが

「勇気と無謀は別物だよ」

男の持っている剣を見た時、そんな気は失せた。

（斬られる!!）

「魔力放出!!」

俺は両手を前に向けて魔力放出をして、ブレーキを掛けた。

「へえ、魔力放出をそうやって使うんだ。でもそこはもう僕の間合いだ」

男は俺に切り掛かってきた。凄まじい疾さと鋭さだ。だが俺は両足から魔力放出をし、あえて突撃した。間合いを詰めて殴ろうとしたが

「残念」

ドゴッ!!

ザンッ!!

「グアッ!!」

相手はさらに上手だった。間合いを詰めた瞬間、蹴り飛ばされ、斬られた。

（何だこの傷、再生が遅い!?!）

それもそうだ。アキラの剣「魔皇剣」は抑止を斬る剣。抑止の中には様々なものがあり、もちろん再生する相手もいるのだ。

(・・・・・・・・畜生)

アキラside

「six、結局弱い者いじめじゃないか」

まあ、この歳にしたらよく頑張ったけど。

「アキラ、後ろを見てみよ」

あれ？立てたんだ。

「無理したらダメだよ」

流石にこれ以上戦うのは忍びない。

「ハアハア・・・・・・・・いやね、名乗るの・・・・・・・・忘れてた・・・・・・・・から・・・・・・・・俺・・・・・・・・は一条要・・・・・・・・としてコイツが・・・・・・・・相棒」

名乗るのはいいとして、相棒なんてどこに・・・・・・・・

「ORT・・・・・・・・解放」

その時、彼は光に包まれ、そこには

「冗談だろう・・・・・・・・」

過去一度、僕が敗北したORTがいた。

要side

まさか半月でまたORTを使うことになるとは……………

「Gyuaaaaaaaaaa!?!」

(潰す!!!)

俺は脚を振り落とした。

「くっ!」

相手は避けるが、そこに向かって地面をえぐり、岩盤を投げつける。

「何だつて!?!」

相手は驚いて、その隙に岩盤がクリーンヒット。とはいかず岩盤は斬られた。だがその隙があればいい。俺は一瞬で近寄り、何度も何度も脚を叩きつけた。

「Guuu」

(これでどうだ)

倒したと思ったが、甘かったようだ。

「ゼエゼエゼエ」

なら今度こそ

アキラside

「ゼエゼエゼエ」

予想外過ぎる。あんな子供がORTになった上に、自我を持っているのだから……。しかも前に戦って、もう一人の僕が眷属にしたORTは使わなかった固有結界を使ってきた。

また脚を振り上げてトドメを刺そうとしている。その時、意識が暗転した。

「此処は……………」

「もう一人の我よ」

「もう一人の僕」

そこには白い僕がいた。

「今のもう一人の我では、自我のないORTならともかく、自我のあるORTなどきついだらう？代われ」

仕方がないかな。

「任せるよ」

s i x   s i d e

まさか自我の有無でここまで違うとは……………

「ちと、きつかったか」

以前ORTと戦ったことがあるからいいかと思っただが……  
それにアキラは気付いておらぬようだが、あのORTの固有結界「  
水晶渓谷」はORTのいた環境を作るもの。そのせいで体が少し鈍  
るというのに。

だが突然、脚を振り落とそうとしていたORTが跳びのいた。そこ  
には魔王がいた。

要side

トドメを刺そうとしたが、突然異常な恐怖感に襲われて跳びのいた。  
そこには髪もマントも白くなり、鎧は青と白といった真逆の色の男  
がいた。服装だけでなく、剣も黒い柄に赤い刀身から白い柄に蒼い  
刀身になっていて、さらには固有結界ですら、深紅の森にいびつな  
白い塔になっていた。

(何だコイツ、さっきまでとは違い過ぎる)

「ふむ、跳びのいたのは良い判断だが」

男は走り出し

「遅いぞ」

もう目の前にいた。いや、もう俺に剣を突き刺していた。

「GYUOOOOO!?!」

(グアアアアア!?)

痛い、痛い、痛い！何でORTを傷付けられる!?!だが

「む！抜けん」

俺は筋肉を収縮させる事により剣を抜けないようにした。これで潰せる！！そう思ったが相手は反則過ぎた。

「ふっ！！」

ドゴン！！

「Giiii!？」

(蹴り飛ばされた!?)

ありえない。人が40MはあるORTを蹴り飛ばすなど……………

「悪かったな。私の能力の中には、眷属の力を我にプラスするというものがある。そしてその中にはORT……………貴様と同じ存在もおる」

そんな……………勝てる訳ない。ORT相手なら勝てる自信がある。同じ力を持つ者同士なら自我のある俺が勝つ。だがほぼ全てが劣っていて、唯一のアドバンテージだったORTでさえ相手は持っているなんて……………だけどせめて一撃与えたい。

「Gyuaaaaaa!!」

(ウオオオオオオ!!)

「貴様は悪くない」

相手は後ろに回り俺を切り刻んだ。

「我が強すぎた」

ああ、確かに強すぎる。だが油断はいただけないな。俺は崩れ落ち  
そうになったが踏ん張り、後ろのバケモノに殴り掛かった。が・・・

「残念だったな」

外れた。

「Gi……………」

(なっ……………)

俺はバケモノに一撃を与えられなかった。

s i x s i d e

まさか、最後の最後にあそこまで根性をみせるとは……………た  
いした奴だ。

「終わったよ、s i x。今度こそ」

アキラに戻ったようだな。むっ！頬に傷が……………

「アキラ、その頬は」

「あー、もう一人の僕が言うには最後の一撃が掠ったみたい」

なんと……訂正しよう。たいした奴などではない、凄まじい奴だ。

「そういえばsix。前みたいに助けに来なかったね」

「ああそのことか。あの者からは殺意の類は感じなかったからな殺す気でないなら良いのだ。」

「ふーん、じゃああの子を治して帰ろうか」

「むむ」

要side

目が覚めるとベンチに寝ていた。あれは夢だったのか、いや、あの感覚が夢なわけではない。

「強く……なりてえ」

最強と思っていたORTでさえ届かなかった。ならば俺自身が強くないと、ORTの力を全て引き出せるように……何者にも負けないように……

外伝〈異世界より来たる者たち〉（後書き）

むずい。戦闘シーンが苦手なのに人様のキャラが加わるところまでとは……

秋代様こんなの家のキャラじゃねえ。ということなら教えて下さい。そしてコラボして下さいありがとうございます。

日常へデバイスを造るついで（前書き）

主人公専用デバイス登場です。

## 日常へデバイスを造るつゝ

要side

事件から一ヶ月たったある日、ようやく俺専用のデバイスが出来た。長かったな。

開発開始日

「とりあえず要くんを調べるよ」

エイミーさんが言ってきた。

「キヤー、ヘンターイ」

「グツヘツへ、おとなしくなさい」

「何をしているんだ君たちは」

「「ノリが悪いなクロノ（くん）は」「

「何で君たちはそんなに息が合っんだ!！」

同じ波長の人間だからだろう。

「準備終わりました」

局員Aが言う。

「ハイハイ、要くん。あの部屋に入って」

なんか真っ白な部屋に入れられた。

「それじゃデバイス起動して」

「了解」

俺はデバイスを起動させた。やっぱりバリアジャケットは展開されない。

「もういいよ」

早っ!!一瞬じゃん。俺が部屋を出ると早速報告を聞かされた。

「要くんがバリアジャケットを展開できないのは、体質みたいなものだね」

そんな体質あるのか。

「数百万人に一人くらいの確率でいるんだ。一種の奇病みたいなものだね」

ククロノが答えてくれた。しかし、そうしたらどうすればいいんだ？

「バリアジャケット機能は廃除したほうがいいね。要くんはバリアジャケットなくても大丈夫だし」

それは褒められているのか？

「何か要望はある？」

「一般的な魔法はデバイスだけで使えるようにしてくれ。あとAIは寡黙な男性人格で」

「わかったよ」

楽しみだ。

現在

そんなこともあったり、他のこともあったりしたがついに完成した。

「おめでとー、要」

「あんたもようやく魔導師だね」

「サンキュ、フェイト、アルフ」

さあご対面だ。

そこにはクリスタルのような玉があった。

《はじめまして、主》

「おう、よろしくな」

なかなか渋い声だな。

「まだその子には名前が無いから付けてあげてね」

エイミィさんがそう言う。うん、どうしよう。

「そう、だな。アリストテレスなんてどうだ？」 《アリストテレス。了解しました》

分かんと思うが、アリストテレスというのはアルティメットワンのちの総称だ。

「要、模擬戦しよう」

「魔導師としてならこっちが上って教えてあげるよ」

フェイト・アルフコンビはやる気まんまん。

「要、頑張つて！」

「おう、って久遠はやらないのか!？」

「うん。クロノがダメって」

ちっ!あくまで俺の実力で二人を倒せってことか。

「よし!やってやる!」

そして模擬戦は始まった。

「アリストテレス      セットアップ」

《スタンバイレディ      セットアップ》

バリアジャケットが無いから服は変わらないけど、手に白いグローブがはまっている。

「来な、フェイト」

「うん」

そう言うとフェイトは高速移動魔法で切り掛かってきた。だがそれをシールドで防ぐ。

「ハアアアア！」

アルフが殴り掛かってくるが、受け流す。その隙にフェイトは魔力弾を撃ってくるが、防ぐ。しばらく同じような攻防が続いたが、先に動いたのは俺だった。アリストテレスが高速移動魔法を使い後ろに下がる。

「シールド」

《了解》

俺は作ったシールドを改造し始めた。

（薄く鋭く）

実はこれは、レイジングハートを借りて魔法の練習をしている時に思いついたものだ。改造が終わったシールドを俺はアルフに投げ付けた。

「シールドスライサー!!!」

「!?!? プロテクション!!!」

シールドを投げると思っていたいなかったのか、一瞬動揺したがすぐにプロテクションを張った。だが

ザン！

「なあ！？」

俺のシールドスライサーはアルフをプロテクションごと切り裂いた。

「アルフ！？」

「キュー」

よっしゃ、うまくいった。

「要！何アレ！？」

「シールドスライサー」

「そんなこと聞いてるんじゃないよ！！」

んなこと言われてもな。ただシールドを薄くしてエッジを付けただけだからな。

「要！リンデイが来たよ」

久遠から報告があつた。模擬戦はもう終わりだな。

「今度は決着付けるからね」

返り討ちにしてくれる。

「デバイスが出来たみたいね。おめでとう」

「ども」

「それじゃ、OR Tについて教えてもらえるかしら？」  
「忘れてないよな。」

「わかりました。OR Tは、攻性生物としては最強です」

「最強……ならあの世界は」

「水晶溪谷という異能です」

「なら」そこまでです「ケチね」

何がケチか、これだけの情報を与えたのに……

「残りは自分たちで調べて下さい」

「……わかったわ」

まあ、情報が出てくるわけないけど……

《主》

突然アリストテレスが話し掛けてきた。

「何だ？」

《これからよろしくお願いします》

こういうところは人間臭いな。だが嫌いじゃない。

「おう、頼むぜ相棒」

《了解！》

こうして俺は相棒を手に入れた。

## 日常へデバイス造るつゝ（後書き）

デバイスの性能を紹介したいと思います。

デバイス名・・・アリストテレス

待機時・・・宝石

発動時・・・グローブ

説明・・・要の馬鹿魔力に耐えられるようにしたデバイス。シールドに特化しているが、一般的な魔法も魔力があればデバイス単体で使える。

## 戦場（前書き）

オリジナルストーリーです。テキストに考えた話なのでテキストな仕上がりです  
オリキャラも出ます。

## 戦場

士郎side

「父さん、俺を戦場に連れていってくれ」

夏休みになって突然要がそんなことを言い出した。もちろん認められるわけがない。

「駄目だ。そんな所へお前を連れていけん。分かっているのか？戦場とは誰でも死ぬ可能性がある場所だぞ」

「分かっている。でも俺は強くなりたいんだ」

「何故だ？」

今の要の力でも十分に強い。さらにデバイスとやらも手に入れたというのに……

「俺は絶対的に技術が足りない、経験が足りない、覚悟はあるにはあるが足りない。ならそれを補うためには戦場が一番いいんだ」

「そんな理由では駄目だ。第一それらは全て時間を掛ければ解決するだろう？」

「……この前、俺の全てを使っても勝てない相手にあった。なっ！？全てということとは俺に隠している力もあるのだろうか、おそらくとてつもない力のはず。それでも勝てない相手だと！？」

「あんなのが何人もいるとは思わない。でももしもの事があつた時、時間を掛けて強くなつていては、なのはたちを守れない。だから・・・お願いします!!」

・・・ハア

「わかった。そのかわり向こうでは俺の友人の指示に従ってもらうからな」

「ありがとう! 父さん」

俺も息子に甘いな。俺は早速友人に電話することにした。

「ミックか? 俺だ、士郎だ。頼みたい事があつてな。内容は・・・」

270

## 要side

父さんに許可をもらってから一週間後、俺はとある国の空港にいた。ここに父さんの友人がいるはずだけど・・・

「お前が要かい？」

俺に声を掛けてきたのは、身長190cmはあろうかという黒人男性だった。

「あなたがミック・アストンさんですか？」

「ああそうだ。それにしても随分と英語が流暢だな」

実は今話している言語は英語なのだが、デバイスの翻訳魔法のおかげで話せている。もちろん戦場では、緊急時を除いてデバイスや力を使うつもりはない。

「勉強しましたから」

とりあえず適当なことを言っておく。

「そうか。要、お前の实力を知りたい。俺のアジトで見せてみる」

「わかりました」

そうして俺たちは空港から車で二時間ほどの所にあるミックさんのアジトに着いた。

「よし、要。かかってこい」

「いきます」

俺は拳を突き出すのが軽く捌かれる。ならばと蹴りを放つがこれまた防がれる。そんな攻防が5分ほど続いた。

「OK。お前の実力はわかった」

「どうですか？」

やはりプロの傭兵の評価は気になる。

「その歳にしたら立派な実力だ。だが戦場では役に立たん」

「……………やっぱりですか」

分かってはいたが、こつもはつきりと言われるとショックだ。

「なあ、その武術どうにかしたらどうだ？技の種類が多いのはいいことだが、多過ぎると極めれん。数を減らすというのも手だぞ」

「それは……………すみません。できないです」

この武術は唯一前世から受け継いだものだ。そうやすやすと手放せない。

「そうか、ならしょうがない。期間は一ヶ月なんだ、早速戦場に行くぞ」

「はい！」

この一ヶ月のことは省かせてもらうが、凄まじいの一言だった。普段はテレビの向こうの世界である戦場。いざ目の前にすると、大量の死が蔓延する世界だった。助けようとしたら死んでしまった人もいた。殺されそうになったこともあった。逆にこの手で殺した人もいた。初めて人を殺した時の感覚は今も覚えている。いや、一生忘れないし、忘れてはいけない。

「要、お前はこの一ヶ月でありえない程成長した、特に心がな。もうほとんど一人前だ」

「ありがとうございます。先生」

「それでお前に卒業試験を与える。これから言うミッションを一人でクリアしろ」

「わかりました」

ミッションの内容はこうだ。とあるマフィアの大富豪の一人娘が誘拐されたため救出と、できればマフィアの壊滅まですること。

「早くしねえとお嬢様が犯されるかもしれねえぞ」

「分かってますって」

戦場にいるといやがおつでもそういうものを見る。誘拐された子供が人身売買されるなんて日常茶飯事だ。俺はいろいろと装備して出発した。

このビルか、案外小さいな。だが見張りはしっかりいる。表に三人、裏に二人か……よし。

俺はなるべくボロイ、現地の子供のような格好をして裏に回った。俺の作戦は現地の子供のふりをして近付き、気絶させるというシンブルなものだった。ただ表の方向には時限式のダイナマイトを用意しておき、爆発にきを取られたところを気絶させるつもりだ。

作戦開始。

「ご飯……下さい」

「んだあ？ガキ、何のようだ」

「ご飯……下さい」

「てめえにやれるくドカーン>何だ!？」

ヤベツ！早かった！

「俺はあっちに行く!ここは頼むぞ!」

「おう!」

あら？一人になった。結果オーライかな。

「おいガキ、さっさとくズドン>ぐふう」

よし成功。侵入開始。

俺はさっきまでとは違い真っ黒な格好をしている。

（お嬢様はどつちかな？）

「おい、さっきの爆発聞いたか？」

つと、見回りか。

「ああ、でも何もなかったんだろ？」

「俺はてっきり誰かが地下のガキを奪いに来たと思ったぜ」

「そんな派手なことしねえだろ」

成る程、地下か……悪かったな派手で。

地下の入口にも一人か……お嬢様の救出が先だから、気絶させるか。

俺は自分とは逆の方向に石を投げた。

カラン

「ん？」

今だ！

「……………ガッ!？」

ふう、成功。こいつの持ってる鍵を貰ってくか。

地下牢には身なりの整った九歳ぐらいの金髪の女の子がいた。

「誰ですか!？」

「しー、お静かに。貴女を助けに来た者です」

「あなたのような子供がですか？」

お前も子供だろ。

とりあえず俺は鍵を開けて出してあげたが、ここからが本番だ。ボンボンのお嬢様をどうやって出口まで連れて行くか……<ゾツ>

「誰だ!!」

「へえ、まさか私に気付くとはね」

そこには一人の白人女性が立っていた。

強いな、先生や父さんほどではないけど……俺一人ならどうにかなるかもしれないけど、お嬢様（お荷物）がいる状態でどうにかなる相手じゃない。

「私に勝てたら見逃してやろうか？」

……は？

「何言ってるんだ、あんた」

「ボーヤの力が見ただけさ」

ちっ！バトルジャンキーめ……だがよかった。これで勝率は上がる。

「下がってな、お嬢様」

「……………絶対に負けてはなりませんよ」

もちろん。

「いくぞー!!」

俺は近付き、正拳を放つ。だがかわされナイフで反撃を受ける。それを下がって避け、ナイフを投げる。相手はナイフで弾く。そこを掴みに掛かるが避けられる。

「なかなかやるじゃないか」

「ちっ!!」

守りが堅すぎる。

「どうした、その程度が本気？」

ナイフを振るってくるが、兄さんほど早くないので避けられる。だが避けてるだけでは勝てない。

「ほらほらほら!!」

とりあえず避け続け、そして相手の動きを観察する。観察しているうちにわかったことがある。相手は突きをしたの瞬間懐が開く。俺はその隙をついて殴った。

「オラア！」

「・・・・・・・・」

効いていない！？いや、服の中に何か着込んでやる！

「何を着てやる」

「何ってただの防弾・防刃チョッキだよ」

厄介な・・・・・・・・ならあれでやるしかない。

「隙ありだよ！！」

「つつ！？」

考え事していたらナイフで少し切られた。何しているんだ俺は！戦いの最中に考え事するなんて！！

「そこ！」

「当たるか！」

だが長期戦になるとマズイ。とにかく一撃与えないと勝ち目はない。

「ふう」

「覚悟は決まっただかい？」

「ああ」

「なら終わりにするよ!!」

相手は俺に切り掛かって来た……

俺の作つた隙に

「!?!」

「残念だったな」

俺は相手の攻撃を避け、相手の懐に浸透勁を叩き込んだ。

「ぐう!!」

俺の未熟な浸透勁では倒すまではいかなかったが、怯ませた。それで十分。俺は後ろに回り込んで抱き着き、持ち上げる!!

「ウオオオオ!!」

「ガッ!!」

綺麗にジャーマンスープレックスが決まった。そして俺はナイフを突き付けた。

「俺の……勝ちだ」

「アハハ、いや強いねボーヤ。流石旦那が認めたことはある」

．．．．．なん．．．．．だって？旦那？もしかしてこの人は．．．．．

「気付いたかい？あたしはカレン・アストン。ミック・アストンの妻だよ。旦那に頼まれてね、ボーヤの腕試しをね」

「．．．．．大丈夫ですか？」

「おばさん首痛めちゃったな」

「すみませんでしたー！！」

先生に殺されるかもしれん。

「ジョークだよ、ジョーク。それより脱出するよ」

そうだ！逃げないと。

「お嬢様失礼します」

「へっ？きゃあー！！」

俺はお姫様抱っこをして走りだした。

「侵入者だ！」

「撃てー！」

パン　　パン

「ほーら、速く走らないと撃たれるよ」

「カレンさんは何でそんなに余裕なんですかー!!」

「速くして下さい！私は撃たれたくありません!!」

「俺もですよ!!」

「よく逃げれたね」

「ゼエゼエゼエ」

死ぬかと思った。

「おい。カレン、要。無事か？」

あっ、先生。

「シエリル〜!!」

「お父様〜!!」

あれがお嬢様の親父さんか。ていつかシェリルって名前だったんだ。

「任務完了だな」

「そうですね」

マフィアは潰してないけど……

「あのマフィアは俺が潰しておこう」

「……すみません。未熟で」

「気にするな。カレンに勝っただけ十分だ」

「あ、あの〜」

ん？お嬢様と親父さんが何か用らしい。

「何ですか？」

「ありがとうございます。」

「私からも礼を言わせてほしい。ありがとう。」

「いえ、任務でしたから」

むしろ謝らせてほしい。卒業試験にしまったのだから。

「そつだ、言ってなかったな。合格だ」

「ありがとうございます」

こうして卒業試験は終わった。

今日は日本に帰る日だ。アストン夫妻とお嬢様が見送りに来てくれた。

「あなたがいなくなると、つまらなくなるわね」

「……………そうですか」

あれから俺で遊びまくったもんな……………

「士郎の息子にしとくにはもったいないな。どうだ、うちの子になる気はないか？」

「ハハハ、すみません」

俺は苗字は変えなくても俺はあそこの息子だ。

「また来て下さいね。」

「ええ、是非」

このお嬢様には随分と懐かれたな。

「それではさようなら」

「おいおい、こつこついう場合はまたね、とでも言えよ」

「………そうですね、ではまた」

日本に帰ってきた。長かったようで短い一ヶ月だったな。

「要くん！お帰り！！」

「おう！ただいま」

## 戦場（後書き）

はい、要くん強化です。

今回の話で強化された能力はまた今度書くA S版設定に書くつもりです。

日常〈修学旅行〉に行こう (前書き)

A5までの繋ぎのラストです。

## 日常へ修学旅行に行く

なのはside

今日から三日間、要くんは修学旅行で京都に行くの。

「要くん大丈夫？ハンカチ持った？ティッシュは？」

「お前は母親か……」

だって心配だし、しばらく会えないし……

「あつ！これ私とすずかちゃんとアリサちゃんとフェイトちゃんがそれぞれ作ったお守りね」

「なのは、すずか、アリサはわかるが、何故フェイトの分まである」

「クロノくんに頼んで届けてもらったの」

結構時間掛かったけど……

「第一何故お守りだ」

「要くんは女の子が近寄らないように」

「なんだ……それ」

何もおかしくないと思うけど……

「要っ、もうすぐ時間よっ」

お母さんが要くんを呼んでいる。

「はいよっ」

「気をつけてね」

「修学旅行で気をつけることなんてないと思うが」

要くんは絶対何かに巻き込まれるの。

要side

初日

今俺は新幹線の中にいるのだが………

「何故俺の班の女子は全滅なんだ」

「畜生！俺の修学旅行でのハーレム計画がっ！！」

「有彦殿、拙者がいる時点でその計画は不可能でござるよ」

その時、なのはたちから貰ったお守りが目に入った。まさか……  
・・な。

「おい、要。どうした？」

「なんでもねえよ」

「それにしても要殿。その鞆には何が入っているのござるか？」

「何って………何？」

俺の鞆がモゾモゾ動いていた。何が入っているんだ？

「開けるぞ」

「「ゴクリ」」

そんなとんでもないものが入ってるようなリアクションを……

そして鞆を開けると

「クー」

「久遠？」

何故久遠が入って「キヤーカワイイ！！」見つかった！？

「おいおい、狐よりも俺くボカツ>グハツ！！」

「お、落ち着くでくボカツ>へブツ!!」

女子が暴走している!?!久遠を守らないと!

「あなたたち!!何やってるの!?!」

おお!先生!

「……………一条くん、旅館に着いてからちよつと話があります」

「……………はい」

「まったく次からは気をつけなさいよ」

「すみません」

「ク〜」

久遠も反省しているようだ。

「ふう」

『ゴメンね、要』

『気にするな』

「おー、戻って来たか」

「お疲れ様でござる」

部屋に戻るとちよつとボロくなった二人がいた。

「クー？」

久遠が二人を心配していた。

「おう、大丈夫だ」

「心配無用でござるよ」

「お前ら久遠の言うことわかるのか？」

「別に」

そうか。

「ちと」

「どつしたでござる？有彦殿」

「覗きにでも行くのか」

有彦ならやりかねん。

「それも魅力的だが、旅館に掛け軸があればまず裏の確認しろ」

お札でも期待してるのか？そして有彦は掛け軸の裏を確認して固まった。

「どうしたでござる？お札が実際にあっただでござるか？」

「宝があった」

「「はっ？」」

「クゥ？」

宝？何言ってるんだ？

「見る！」

有彦が掛け軸の裏を俺たちに見せる。そこには無数の

エロ本

があった。

俺は有彦を取り押さえた。

「後藤、先生を呼んできてくれ。久遠は見ちゃ駄目だぞ」

「御意」

「クー！」

「ちよっ！」

その後有彦は先生にしょっぴかれた。ちなみにあのエロ本は旅館の館長のものだった。まさか本当に掛け軸の裏を確認する奴がいるとは思わなかったらしい。

俺たちと久遠は今温泉いる。ハア〜気持ち良いわ〜。

「オッサン臭いでござるよ」

「気にすんなよ後藤」

「そーそー、有彦の言う通り」

ちなみに初日はよくあるクラスで京都観光だ。

『要、私は入っでいいの?』

『いいんだよ、バレなきや』

それにしても、俺たちの班しか風呂に入っでないのはどうしてだろ  
う。

「そろそろ出るか」

「おう」

「そっでいぢわるな」

## 二日目

今日は班で自由行動だ。京都といえは

「銀閣寺だ(でいぢわる)な」

「お前ら地味過ぎ」

何を言うか、こんなに輝いているのに。

「いやいや輝いてねえよ。輝いてるのは金閣寺だ」

「有彦（殿）は子供だ（でござる）な」

「お前らも子供だろ！！」

心の問題だよ。

「あつたでござる！木刀」

「おいおい、後藤。没収されるぜ。要も何か言ってやれ……………  
つてどうした？」

「ブツブツ」

どうする。なのはたちに下手な土産は買っていけん。食べ物でもいいが、やはりここは形に残るものが、だがキーホルダーは安っぽい……………

「おい、要？要くん……………駄目だこりゃ。お前も大変だな、久遠」

「クー」

これなら・・・いや駄目だ・・・

なんだかんだあつてそろそろ時間だ。

「意外と楽しんだな」

「機会があれば、映画村にも行きたいものではないな」

「それもいいな・・・先に行っててくれ」

「また厄介事でも見つけたか？」

何が厄介事か。

「人助けでござろう。教諭には言っておくでござるよ」

ありがたい。・・・そうだ。

「久遠も頼めるか？」

「了解。ほら、久遠来い」

『・・・要』

『なんだ？』

『頑張って』

『頑張るほどのことじゃねえよ』

「いっちょやりますか。」

草むらの向こうには綺麗な女性と巨漢な男、小柄な男の三人がいて、巨漢の方が女性を引っ張っていた。

「嫌！放して下さい！」

「暴れるなよ、ねーちゃん」

「そつだぜ。綺麗な顔に傷付けたくないだろ？」

「まあこれから汚すけどな！」

「」「はっはっはー！」

うわー、実際にこんなにいるんだ。痛々しいな。

「そこまでだ」

「誰だ!！」

ここまでお約束とは、逆に尊敬するね。

「なんだ、ガキじゃねーか」

「ほら、子供は帰りな」

うわ、うぜー。さっさと潰して帰ろ。

「フッ」

「ブハッ!？」

まず巨漢を殴り気絶させる。

「ア、アニキ」よっ」「へブッ!？」

次に小柄に回し蹴りをして終わり。よえー。

「えっ!？あっ………ありがとうございました!何かお礼を」

「別にそんな………じゃあ一つお願いを」

「よっ、遅れた？」

「いや、ちよつどだけ」

「何でござるか？その紙袋は」

「土産」

さっきの女性にいい物教えてもらったからな。

『お帰り、要』

『ただいま、久遠』

最終日

今日の行動も主にクラス行動。みんな二日間の疲れがあるのか怠そ  
うだ。

「みんな疲れてるでござるな」

「こりゃ新幹線じゃ爆睡だな」

「そういうお前らは余裕だな」

「要（殿）と付き合ってるから」

そーなのかー。

案の定、新幹線ではみんな爆睡だった。そんな中俺たちは話してい  
た。

「なかなか有意義だったな」

「今度は三人で旅行するのはどうでござるか？」

「悪くねえな」

「有彦の場合、姉から逃げれりゃ何でもいいだろ？」

「ハハハ、違いねえ」

こうして修学旅行は終わりを告げた。

さあ、帰って来ました高町家。

「ただいまー」

「おかえり」「」

父さんと母さんが迎えてくれた。

「はい、お土産」

「あら、美味しそう」

「後でいただきます」

二人への土産は京菓子とお茶だ。

「兄さん、姉さんただいま」

「おかえり」

「これ、お土産ね」

「へえ、お箸とお椀か」

「これは漆器か、大事に使わせてもらおう」

二人への土産は京漆器の箸とお椀だ。

「なのは、ただいま」

「おかえりなさい、要くん」

「クー」

「久遠ちゃん、何処行つてたの？」

「あー、実はな」

久遠が鞆に入って俺と一緒にいたことを説明した。

「そうだったんだ」

「ああ。そうだ、なのは。土産は明日すずかとアリサと一緒に渡すのでいいかな？」

「うんいいよ」

なのは s i d e

要くんが帰ってきた次の日の昼休み中、要くんはお土産を出してくれた。

「なかなかいい物が見つからなくてな、こんなので喜んでもらえればいいのだが」

「わあ」

「綺麗」

「へえ」

要くんが出したのは扇子だった。私は白、すずかちゃんは紫、アリサちゃんは赤だった。

「凄くいいよ要くん」

「私ことうの好きだよ」

「うん、いいセンスしてるわ」

「……………アリサ、それギャグ？」

「へっ？……………ち、違うわよ！！」

「センスのいい扇子……………か」

「だから違ーうー！！」

「にははは、要くん相変わらずだなあ。まあ三日で変わられても困るけど……………」

フエイトside

「フエイトちゃん、入るよ」

「どござ」

エイミィが部屋に入ってきた。どうしたんだろう。

「はい、これ。要くんからだよ」

「要から？そういえば旅行に行くってなのはから聞いてお守り作ったっけ。」

「日本の伝統的な扇子っていうのだった」

「へえー、いいねこれ」

要がくれた扇子というのは黄色を主に使った色遣いのもだった。

「なのはちゃんたちも色違いのお揃いだった」

「そうなんだ」

エへへ、大事にしよう。

## 日常へ修学旅行に行く《（後書き）

次はA S版設定でパワーアップしたスキルを書きます。

## AS版設定(前書き)

ASからはこの設定でいきます。

## A S 版設定

雨「はいどうも。ここでは戦場でパワーアップした要のスキルを紹介します」

要「またチートに磨きがかかったな」

雨「そう言わない。では早速紹介します。ちなみに筋力などの基本ステータスは変わってません。そうだ、魔導師としての能力も書こう」

## 強化スキル

武術 D C

状況把握 D C+

## 追加スキル

心眼（真） D+・・・戦場で培った洞察力。危機的な状況でも勝機を見出だす戦闘理論。本来はDクラスだが、状況把握のスキルのおかげで+補正がついた。

気配察知 D+・・・相手の気配を感じる。同クラス以下の気配遮

断は見破れる。

現代兵器 C・・・一般的な銃火器はほとんど扱える。

魔導師ランク A-

魔力ランク D-〈SSS以上

魔力光 青紫

雨「こんな感じかな」

要「思った以上に強化されてないな」

雨「一ヶ月でこれだけ強化されれば十分だと思っけど」

要「それもそうか」

雨「そういうこと」

要「それではみなさん次回で会いましょう」

雨「短すぎたな、ちょっと裏話を

実はAsからもう一人オリキャラを投入するつもりでした。キャラ設定としては要の妹でブラコンの「楔くわく」というキャラで、これまたチートにする予定でした。

しかし扱いきれる自信が無かったのと、想像してみたらあまりに暴走すぎて收拾がつかなくなりそうだったため中止となりました。

もしかしたら番外で出すかもしれません。お願いします」

## AS版設定（後書き）

要くんパワーアップ！

もしStSまでいけばさらにパワーアップする予定です。

## ASブローグ(前書き)

ブローグなので短いです。

## A S プロローグ

はやて side

こんにちは、八神はやて입니다。明日は私の誕生日。私は親がないし、足が悪いから祝ってくれる人は通ってる病院の石田先生しかいない。

「はあ、家族が欲しいなあ」

まあ叶うわけないんやけど。あつ！流れ星！

「家族欲しい！家族欲しい！家族欲しい！」

って何やっとなるんや私は……………

「もう寝よ」

私は寝室に行った。

アカン、この本面白くて寝るの忘れてたわ。ちなみに本のタイトルは

○ツキー 総集編

あの名作○ツキーをまとめて一つの小説にした作品や。なんか微妙に伏せ字の意味無い気もするけど、まあええわ。ってもうこんな時間にはよう寝よ。

その時、本棚が光だした。違う、光つとんのは一冊の本やった。

「闇の書の起動を確認しました」

「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にごぞいます」

「夜天の主の元に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」

本から人が出てきて私を主とか言ったり、命令とか言ったり……  
・・もうアカン、おやすみなさい。

「きゅー」

私は意識を手放した。

今朝はなのはと二人で魔法の練習をしている。なのはは魔力弾で空き缶を打ち上げ続けている。俺はというと……

「うーむ、加工失敗」

新しく魔法の加工をしている。

《主、シールド以外は加工しないのですか？》

アリストテレスに作ってもらった魔法は、加工がうまくいかないんだよな。やっぱり自分の力で作れるものの方が加工しやすい。でもやってみるか。

「アリストテレス、魔力弾頼む」

《了解》

俺の手の平に青紫の魔力弾が出来る。

「どろしよつかな。そつだ針にしよつ」

（細く、鋭く）

やっぱり加工しにくい。他人が作ったようなものだからな。

《主、もう少しです》

「じつはじつして……いや、じつか？おっ……うまくいきやつ……」

「出来た！」

《おめでとじつございます》

俺の手の平には青紫の鋭い針があった。試し撃ちは何にしよう。

見回すとなのはの方の練習が終わりそうだった。あの空き缶狙おう。

「シユートー！」

なのはの魔力弾が空き缶を弾き、ごみ箱に飛んでいったが、入らなかった。それを狙い俺は針を撃った。

「シヨット」

針は空き缶を貫いた。いい出来だ。

「今の要くん？」

「おう」

「ふえ〜、何て魔法？」

名前か……

「ニードルガン」

「テキストだね」

うっさい、俺も分かってるわ。

今から下校なんだが、今日はアリサン家の車に乗せてもらっている。

「いつもありがとうございます、鮫島さん」

「いえ、お気になさらず」

「あつ、今日は図書館に寄って行っていい？」

「もちろんよ、すずか。鮫島」

「了解しました」

「それじゃあね、アリサちゃん、なのはちゃん、要くん」

「「じゃあね」」

「またな」

「すずかは勤勉だなあ。」

「なのはとアリサも見習えよ」

「「何が!?!」」

さて夜になりました。

「アリストテレス、魔力弾を」

《了解》

せつかく今朝うまくいったんだから練習しないとな。

(細く、鋭く)

「ふう」

《お見事です》

もうほとんど完璧だな。後は実戦で使えるように早く作れるようにしないとな。

「そろそろ寝るか……………!?」

結界!?

《主!》

「分かってる!」

一体何なんだよ!こちらは無印以降知らねえのに!

## A Sプロローグ(後書き)

次は対ヴォルケンリッター戦です。

## AS 第一話

要side

何なんだ！この結界は！原作知識無印までしかないから対処法知らないぞ。

『要くん！結界が！』

『分かってる！準備するから先に行っててくれ』

『わかった！』

さてとアレとコレと、ついでにコレも持って……よし！

「身体能力50%解放、魔力50%解放、アリストテレス セットアップ」

《スタンバイレディ セットアップ》

俺はアリストテレスを起動させ、なのはの所へと跳んだ。

見つけた。もう戦闘は始まっていた。なのはと戦っているのは、赤いバリアジャケットを着たハンマーを持った女の子だった。

「いつも遅れて済まないな」

「要くん！」

「ちっ！味方か！？」

「おとなしくしな」

あの子がいくら強くても二対一じゃ・・・・・・・・新しい気配が三つ  
・・・・・・・・増援か。

「なのは、そいつは頼んだ」

「えっ？・・・・・・・・わかった」

呼び出してみるか。

「おい！隠れてる奴ら、出て来い！」

すると犬耳の付いた男が出て来た。

「俺は奴らと言ったが？」

「お前は俺一人で十分だ」

そうですか

「なら潰してやるよ」

「そうか、ザフィーラ。参る」

「一条要。いくぜ」

ザフィーラside

一条と言ったか、この少年かなり出来る。魔力もなかなかの量があるし、さらには火薬の匂いもする。ただの魔導師と考えるはいけな  
いだろう。するといきなり拳銃を撃ってきた。

「フン」

だが予想出来ていれば恐れるものでもない。俺はシールドで防いだ。

「防ぐとは思ってたけど、動揺くらいしてくれよ」

「火薬の匂いがしたからな」

「成る程、狼を素体とした使い魔か」

ミッドチルダ式の魔導師では間違えるか……

「否、守護獣だ」

「守護獣？まあいい、倒して話を聞いただけだ」

「やってみせろ！」

要side

不意打ちの拳銃は効かなかったし、どうするか。

「キヤアアアア!!」

「……なのはがやられたか。」

「仲間がやられたのに、冷静だな」

「戦場じゃ一秒前まで元気だった奴が死ぬなんて、日常茶飯事だからな」

「うーむ、なのはがやられたとなると、面倒だな。さっさと終わらせるか。」

《主、転移反応があります》

この魔力は……フェイトにユーノ、アルフもか。

「こっちの増援が来たみたいだぜ?どうする?」

「お前を倒して、そちらも倒す」

そうかい。

「オラア!」

「シッ!」

拳と拳がぶつかり合う。相手が蹴りを繰り返すが、シールドで防ぐ。さらに俺はそのシールドを加工する。

「シールドスライサー!!」

「むっ!？」

相手はジャンプして避けるが、俺はそこにある物を投げる。

「パイナップルは好きか？」

「何？」

すると俺の投げた物、手榴弾が爆発する。

ドガン!

「ちつとは効いたか？」

そこには所々焦げた相手、ザフィーラがいた。

「俺はウェルダンにするつもりだったんだが」

「・・・・・・・・」

《主!足元から魔力反応が!》

俺の足元から鎖のようなものが出て来て、俺を拘束した。バインドか!

「なかなか見事な戦法だったがまだまだだ」

「・・・・・・・・能力上げて抜け出すか。しかし

『主』

『ああ、フェイトもヤバイな』

まさかフェイトもここまで追い詰められるとは、あの剣士強いな。とりあえず俺は抜け出すか。

(身体能力70%解放)

「フンッ!」

「何だと!」

俺は無理矢理バインドを引きちぎった。流石に身体能力だけで抜け出すとは思ってなかったのか、かなり驚いている。

「隙あり!」

「しまっ!」

俺は足払いをし、殴り飛ばした。思ったよりよく飛んで、ビルに突っ込んだ。

そしてなのはの方を見ると、スターライト・ブレイカーを撃とうとしていたなのはの胸から腕が出ていた。……なんてホラー!

「ってそんなこと考えてる場合じゃない!」

おそらく隠れているもう一人の仕業だろう。

「アリストテレス!敵は何処だ!」

《申し訳ありません。主。探知できません》

ちっ！やっぱり自分の感覚に頼るか………見つけた！！

俺は見つけた気配の一直線上に立った。ビルの上には鏡に手を入れる女性がいた。

「シールド！出来るだけ大きく！」

《了解》

出来たシールドは直径3Mはあるつかという巨大なものだった。そんな巨大なものが出てきたため、みんな注目した。俺はそれを加工した。

「切り裂け！シールドスライサー！！」

「マズイ！！」

剣士が反応する。

「レヴァンティン！カートリッジロード！！」

《ロードカートリッジ》

いきなり剣士の魔力が増える。

「飛竜・一閃！！」

剣士の放った斬撃がシールドスライサーを撃ち落とす。シールドスライサーの欠点は強度の弱さ。たいていのは切り裂ける代わり

に、攻撃されると一発で破壊される。  
だがこれでいい。俺は準備していたもう一つの魔法を撃った。魔法は青紫の軌跡を残し、なのはに手を突っ込んでいる女性の首を穿った。

「あつ」

「シャマル!!」

俺が撃つたのはニードルガン。スピードと貫通性に優れ、小さいコ  
レを避けるのは難しい。ただ作るのにまだ5秒ほど掛かるが・・・

「テメエー!!」

赤い少女が飛んでくる。俺はハンマーを受け流し、カウンターを決  
めた。

「グツ!?!」

冷静さを失った奴を倒すのはたやすい。

「ヴィータ、下がれ!!」

「シグナム!?!」

「今のお前では勝てん」

「.....」

おとなしく赤い少女、ヴィータは下がった。  
その時

「スター……ライ……ト・ブレイカー!!」  
なのはがスターライト・ブレイカーを撃って結界を破壊した。なん  
て無茶を、父さんと母さんに叱ってもらおう。

「少年」

「何だ？ 剣士のねーちゃん」

「私はシグナム、ヴォルケンリッターの将だ。名を聞こう」

「一条要」

「一条……か、覚えておこう」

そう言うとシグナムたちは飛んでいった。俺はなのはの所に跳んだ。

「フェイト、ユーノ、アルフ、久しぶりだな。ユーノ、なのはの状  
態は？」

「リンカーコアから直接魔力を取られてるけど、休めば大丈夫」

「そうか。フェイト、バルディッシュは？」

「フレームが斬られたから修理しないと」

「アルフは大丈夫か？ ヴィータとかいろいろの相手してたが」

「ん、大丈夫。ユーノも一緒だったから怪我もないよ」

なのは以外は全員ほぼ無事か………よかった。

「大丈夫か？君達」

「よう、クロノ。久しぶり。早速だがなのはを頼む」

「わかった。こちらもいろいろ聞きたいこともある」

「了解、転移頼んだ」

さてこれからどうなることやら………あつ、質  
量兵器持ったままだ。

## AS 第一話（後書き）

えー、特に書く事もないので一言感想を下さい。

AS 第二話（前書き）

今回は戦闘はありません。

## AS 第二話

要side

今はアースラ艦内、俺はクロノとお茶を飲んでいる。

「君はなのはの近くにいなくていいのか？」

「別に大丈夫さ。しばらく魔法が使えなくなるだけだろ？第一あの状態でSLBを撃つあいつが悪い」

自分のリンカーコアが摘出されているのにあんな大規模な魔法撃つ奴が何処にいる。あつ、この艦内にいたか。

「……………クロノ、本題に入る前に聞きたい事がある」

「……………プレシア・テストロッサについてか？」

「……………」

俺は無言で頷く。ジュエルシード事件の後、プレシアは錯乱状態に陥った。アリシアを生き返らせれず、自分一人が生き残ってしまった為と思われる。今では心を完全に閉ざし、何も語ろうとしない。時折アリシアと呟くぐらいだ。

「進展はないよ。食事も最低限しか取らない」

「……………そうか」

もしかしたら助けられない方がよかったのかもな。

「……………一ついいか？」

「ん？何だ？」

「母さんがフェイトを養子にしたいと言い出してね」

「ハア？何言ってるんだ、リンディさんは。」

「俺にそんな事言われてもね。決めるのはフェイトだろ？」

「まあそうなんだが」

「……………ハア」

リンディさんには呆れるよ、ホントに……………

「クロノ、要、いる」

「おっ、フェイトが戻ってきた。」

「入っていいぞ」

するとフェイト、ユーノ、アルフ、そしてなのはがいた。

「なのは、君はもう大丈夫なのか？」

「うん、ちょっとぶらぶらするけど」

「よかったな、なのは。その調子なら父さんと母さんのお叱りにも耐えられそうだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やっぱり駄目かも」

往生際の悪い子ですこと。

「安心しろ、父さんと母さんにはもう連絡した。なのはがとんでもない無茶をしました。とな」

「じゃあああ！要くんなんてことしてくれるのー!!」

うんうん、元気だな。

「ねえクロノ、あの人たちが使ってた魔法って私たちのと違うよね」

「あれは、ベルカ式だな」

「・・・・・・・・ベルカ式？」「」「」

俺、なのは、フェイト、アルフが聞く。

「昔ミッドチルダ式と二分した魔法で、遠・中距離よりも近距離戦を得意とするんだ。ちなみに優れたベルカ式の使い手は騎士と呼ばれるよ」

ユーノが解説してくれた。

「よく知ってるな」

「遺跡を探索してるとそういう文献も多いからね」

成る程……今度一緒に行ってみようかな、遺跡。

「ユーノの説明した通りだ。そしてベルカ式の一番の特徴はカートリッジシステムだ」

「魔力がいきなり増えたアレの事かい？」

「そうだ、アルフ。カートリッジシステムはカートリッジというものに魔力を込め、その魔力を解放することによって一時的に魔力を増やすことが出来る。必殺技と言っても過言ではない」

ふーむ、便利だが使いにくそうなシステムだな。

「……クロノくん、私たちもそれ使えないかな」

なのは、また無茶するのか？

「……残念だが僕もそこまでベルカ式に詳しいわけじゃないんだ」

「ユーノはどうなんだい？」

「僕も知識だけだから……」

まっ、そうそう上手くないかないな。

『主……』

『必要ない』

『!?!? 何故です?』

『未知の技術はリスクがデカイ。それに魔力は十分の筈だ。違うか?』

『……その通りです』

『まあ、心配してくれたことは感謝するよ』

ホントにアリストテレスは心配症だ。

「お前ら、二人はデバイス技師じゃないんだぞ。無茶言つな。それに直してもらっただけよかったと思え」

「……はい」

「それにフェイトは学校の準備もあるだろ?」

「うん」

「えっ!?!? そうなの?」

そっぴやなのは知らないか。俺も以前アリストテレスの調整にア  
ーストラに来た時に聞いたからな。

「そうそう、多分なのは同じクラスになるからな」

「……何で?」

「多分……だよ」

言えない、父さんや母さんがそうなるように学校に交渉してるなんて……

今日はフェイトの入学の日、ちなみに今は昼休みだ。

「初めての学校はどうだ？フェイト」

「うん、楽しいよ」

「フェイトちゃん質問攻めで大変だったの」

まあ転校生なんてそんなもんさ。それにフェイトは美少女だからな」

「……美少女／＼」

「気にしちゃ駄目よ、フェイト。わざと口に出してるから」

酷いなアリサは、その通りだが……. . . . . だけどフェイトが美少女というのは本当だ。

「フッフ、これから楽しくなりそうだね」

「すずかは大人だなあ。」

「それにしても……………」

「あそこにいる奴らは何だ？」

「俺が指差した方には男女問わず、大量にいた。」

「転校生が珍しいんでしょ？」

「にゃははは」

「凄い人気だねえ」

「そうなのかな？」

「違うぞお前ら。どう見ても男はお前ら、女は俺を見てるぞ。というより俺はいつそんな人気者になった……………」

「俺たちは今翠屋でお茶をしている。」

「要、ハーレムだな」

「何を言い出す父さん」

いきなりびっくりするじゃないか。

「美少女を四人連れていてだけで十分ハーレムだろうか？」

「兄さん……あなたまで……ってなのはが俺に取られてもいいのか!？」

あんたシスコンだろ。

「お前なら任せられる」

「いやいや、要くんにはさすが似合うよ」

「忍さん!？」

「何を言う! 要くんにはバニングス家を継いでもらわねばいかん!」

「デビットさん!？あんたいつの間に!？」

「う  
あらあら、要くんならフェイトさんを選ぶに決まってるでしょ」

「リンディさんまで!？」

いったいどうなってるんだー!?!?!?

「め……………ん、かな……………くん、要くん！」

「んあ？」

「あんた何寝てるのよ！」

……………俺は寝てたのか……………そうだよな、あんなことある訳ない。

「要、うなされてたけど大丈夫？」

「ああ、問題ない。あまりにありえない夢を見ただけだ」

そつだありえないのだ……………多分。

数日してレイジングハートとバルディッシュの修理が終わったという報告があった。アースラに行くと言ったら久遠もついてきた。

「クロノ、エイミー、久しぶり！」

「ああ、久しぶりだな」

「久遠ちゃん、久しぶり〜」

「エイミー、マリーさんがレイハとバルディッシュにカートリッジシステム付けたって？」

クロノからそういう報告を受けたのだが……………

「そっだよ」

「……………リスクは？」

「……………今の時点ではよくわからないけど……………でもそこまで危ないものじゃないよ。マリーを信用して」

「……………そうか」

そっだな、マリーさんの技術を信用するか。

ピーッ、ピーッ

警報？

「ヴォルケンリッターか？」

「そうみたいだ。要、行けるか？」

「問題ない。行くか、クロノ」

「なのはちゃんとフェイトちゃんも後で送るね」

あつ、久遠どうしよう………

「久遠、一緒に行くか？」

「うん！」

だよな。

「ということだ。エイミィ転移頼む」

「了解、頑張ってるね」

今回はどうなることやら………とりあえずなのはとフェイトが無茶しないようにしないと。

## AS 第二話（後書き）

今度の戦闘シーンが面倒だ。久遠連れてこない方がよかったかな。でもそろそろ出したいし……でも次回が多分30万アクセス記念を書くと思います。企画ネタはまだまだ募集し続けます。

オマケ4 (前書き)

30万アクセスありがとう

## オマケ4

雨「30万アクセス&3万ユニーク突破」

要「みなさん、ありがとう」

雨「ハア」

要「どうした？いきなりため息ついて」

雨「俺、小説書いてていいのかな。って思ってさ」

要「何でそんなことを」

雨「ほら、俺の長所って無駄に早く書く事じゃん」

要「そうだな、他の作者様に比べればな」

雨「そんな適当に考えた妄言を人様に見せていいのかな」

要「いいんじゃないね。もし駄目なら批判の一つや二つあるし、感想もこない。それに30万アクセスもない筈だ」

雨「そうだな、頑張るよ」

要「で、今回は何をやるんだ？」

雨「久しぶりに対談でもしようか」

要「おっ！いいね」

雨「ということでお二方、どうぞ！」

ア「お邪魔するよ」

ユ「失礼します」

要「何で、ユーノとアルフ？」

ア「あたしたち出番ないだろう？」

ユ「だからこの機会に出させてもらっただ」

要「ふーん、じゃあ対談テーマ頼む」

雨「OK、今回のテーマは……………アルフとユーノの出番を増やすには！！」

要「な……………なんという無理難題」

ア「どういう事だい！！」

ユ「要！怒るよー！！」

雨「落ち着け、それをこれから考えるんだから」

要「しかし、どうするんだ？」

雨「ユーノに関しては決めてある」

ユ「えっ？ホントに？」

雨「ああ、ユーノには要と一緒に遺跡に行くイベントが用意してある」

要「マジか」

雨「お前遺跡に行きたいって言ったから」

ア「ちょっと、それじゃああたしはどうなるんだい」

雨「アルフは………日常編でちょこちょこ出すように努力する」

ア「努力じゃなくて、ユーノみたいに外伝作れ〜!!」

雨「ぐるじい、首絞めないで」

要「アルフ、止める。流石に殺しては駄目だ」

ア「でも〜」

雨「ハアハア、死ぬかと思った。………じゃあこうしよう。なるべく外伝は考える。そして読者のみなさんにも考えてもらおう」

要「以前そんな感じで読者に考えてもらおう企画やって、今でも続いてるだろ。しかも今だに一つもない」

雨「うるへー、来なかったら自分で考えるからいいんだい」

ア「ならしつかり考えてくれよ」

ユ「僕のもちちゃんと書いてよ」

雨「任せとけ、それじゃそろそろ終わりにするか」

ユ「ここまで『チートじゃ済まない』をご覧いただきありがとうございます」

ア「これからも見てよね」

雨・要「それでほそよつなら〜」

#### オマケ4 (後書き)

最初の愚痴は作者の本音です。

だけど書いたら少しすつきりしました。

これからも応援よろしくお願いします。

## AS 第三話（前書き）

なのはたちの戦いの描写がありません。

## AS 第三話

要side

転送された俺たちが見たものは、局員たちに囲まれているヴィータとザフィーラだった。

「僕は援護に向かう。君達は準備していてくれ」

「あいよ。久遠、変化」

「わかった！」

クロノは局員たちの援護に行き、久遠は大人の姿になった。俺はどうするか。魔力は前回と同じでいいとして、身体能力は70%から始めるか。

「身体能力70%解放、魔力50%解放」

「ステインガープレイド・エクセキューションシフト!!」

初っ端から全開だな、クロノも。

《主、アースラからの転送を確認》

「OK、なのはたちか」

するとビルの上になのは、フェイト、ユーノ、アルフが現れた。

「レイジングハート・エクセリオン セットアップ!!」

「バルディッシュ・アサルト セットアップ!!」

あれが新しいあいつらのデバイスか……

「何でこんなことするの!」

「話を聞いて欲しい」

なのはたちがそんなことを言っている。

「お前らさ、ベルカの諺にはこんな言葉があるんだよ。和平の使者は槍を持たない」

「?」

何となくわかったぞ。なのはたちはわかってないが……

「交渉するのに武器持ってくる奴がいるか!っていうことだよ、バ  
ーカ!」

「にゃ!?!いきなり襲ってきたあなたがそれを言う!?!」

「それにそれは諺ではなく小話のオチだ」

へー、ベルカにも小話つてあるのか。いつ、どの世界にもそういう  
事考える人はいるもんだ。

「うっせー!別にいいんだよ、そんなこと」

「今だ!!」

「オラッ!」

「危ねっ!!」

「なっ!?!」

奇襲失敗、残念。

「テメー、あの時の!!」

「一条………要!!」

「よー、ヴィータとザフィーラ………だったか?」

「今度こそぶっ飛ばしてやる!!」

「今回は負けん!!」

「元気だね。」

『久遠、雷撃』

『わかった、いくよ』

するとヴィータとザフィーラの上に雷撃が落ちてきた。

「当たるか!!」

「甘い!!」

防いだか、流石に奇襲二連続は駄目か。その時、結界に穴が開き、シグナムが入ってきた。

「……………一条か」

「厄介なのが来たな」

だが戦力はこっちが圧倒している。全員で掛ければ「要くん!!」……………ハア。

「お願い、その子と」一騎打ちでやらせて……………だろ?」「うん」

「フェイトもだろ」

「うん」

まったくこいつらは……………

「好きにしろ」

「「ありがとう!」」

甘いね、俺も……………

『アルフ』

『なんだい？いきなり』

『ザフィーラと戦え』

『えっ？』

どうせならシャマルとかいうの捜した方が有意義だからな。狼の相手は狼だろ。

『わかったよ』

「いよっし！頼むぞ！！」

俺は駆け出した。

「逃がすか！！」

「させないよ！！」

ザフィーラが追って来ようとしたのをアルフが止めた。

「久遠、乗れ」

「うん！」

狐になった久遠を肩に乗せ、クロノとユーノに念話する。

『これから闇の書を探す』

『わかった。手伝おう』

『任せて』

クロノside

要が闇の書を探すと言うので、僕とユーノも手伝うことになった。まあ、三人で探せばすぐだろう。しかし

「相変わらず凄まじいな、なのはとフェイトは」

まったく、あの二人の才能には驚かされてばかりだ。手に入れたばかりの新しい力をもうほとんど使いこなしている。なのはのアクセルシューターも、フェイトのプラズマランサーも精度も威力も上がっている。あれがカートリッジシステムの力が……

「僕も負けていけないな」

年齢も魔導師歴も僕の方が上なんだ。そう簡単に抜かれるわけにはいかない。カートリッジシステムなんかなくても……いた!!

「そこまでだ、闇の書を渡してもらおうか」

「!?!」

僕は闇の書を持っている女性にデバイスを突き付けた。だがここで油断してしまった。

「ガハッ!?!」

僕は何者かに吹き飛ばされてフェンスにぶつかりそうになったが

「大丈夫か？クロノ」

要に受け止められた。

要 side

「大丈夫か？クロノ」

俺は吹き飛ばされてきたクロノを受け止めた。しかし油断があった  
とはいえクロノに奇襲を与えると……あの仮面やるな。

「済まない。油断した」

「気にするな、次気をつければいいさ。それより久遠頼むぞ」

「ああ」

「要、頑張って」

負けないように頑張るか。ビルの上で向かい合った。

「悪いが相手してもらっせ」

「ふん！」

おお、いきなり殴ってきたやつだ。まあ簡単に避けれるけどね。俺  
はカウンターを入れた。

「甘いよ」

「ぐっ!?!」

なかなか強いが、先生や父さんたちに比べると技術がない。俺と同じ位だな。それなら身体能力が上で技の種類が多い俺が勝つ。

「まだまだいくぜ!!」

「クソッ!」

俺の技に対応しきれてないな。地球の武術はやっぱり次元世界の中でも上位なんだな。クロノにもそう言われたし。少しするとデカイ隙が出来た。

「そこお!!」

俺はその隙に一撃を入れようとした。だが

「!?! 何だ………と?」

俺の胸から腕が生えていた。なのはと同じ様に………

「「「要!?!」」」

クロノ、久遠、ユーノが叫ぶ。つかユーノいつ来た。

俺の後ろにはもう一人仮面の男がいた。

「おい、早くリンカーコアを蒐集しろ」

「えっ！？あなたは？」

「そんなことはどうでもいい。早くしろ！！」

「・・・・・・・・はい」

「アアアア！？」

シヤマル蒐集をした途端痛みが走った。なのははこんな状態でS L Bを撃つたのか。とにかく魔力を止めないと。

「魔・・・・・・・・力・・・・・・・・停止」

すると仮面の男の手にあつたリンカーコアは消えた。

「ちっ」

クソッ！30%はもっていかれたぞ。俺は膝から崩れ落ちた。

「早く闇の書で脱出しろ」

仮面の男がシヤマルに指示を出している。そこに大人になった久遠が飛び掛かってきた。

「よくも要を！！」

「・・・・・・・・」

久遠の爪が仮面の男に当たる寸前、シールドで防がれた。そこにさつきまで戦っていたもう一人が殴り掛かってきた。久遠を助けない

と！

（魔力20%解放！アルティメットワン発動！）

俺は最速で出来る最善の状態になり、久遠を襲おうとしている仮面の男、仮面Aに魔力放出を使って飛び掛かった。

「久遠に何しようとしてやる！」

「ぐっ！？」

うまく押さえ込んだが、仮面Bが魔力弾を撃ってきたため、久遠を担いで下がった。アルティメットワンを発動しているからあの程度は効かないが、久遠が巻き込まれたら嫌だからな。

「要！無事か！？」

「要！大丈夫！？」

「クロノにユーノか。大丈夫だ」

《主！上空に強大な魔力反応を確認！！》

「何！？」

確かに上空には紫の魔力が集まっていた。

「撃って、破壊の雷！！」

しまった！闇の書の力か！！

上空の魔力が解放され、紫の雷となって落ちてきた。

「全員俺の後ろに!!! アリストテレス、シールド二枚準備!!!」

《了解》

俺の目の前に二枚のシールドが出る。俺はそれを加工する。

「ルフシールド!!!」

落ちた雷の余波が飛んできたが、二重にしたルフシールドは全てを受け流した。

なのはたちは大丈夫だろうか……

「なのは、フェイト、アルフ無事か!?!」

「私は大丈夫だよ」

「私も……問題ない」

「あたしも怪我一つないよ」

よかった。街の方はどうだろう。

「クロノ、街の被害は?」

「結界のおかげで被害らしい被害はなかったらしい。局員も重傷者はいないようだ」

ヴォルケンリッターには逃げられたけど、まあ今回は良しとするか。それにしてもあの仮面A & Bは何だったんだろ。あっちの反応からして仲間っぽい感じしないし……。今度は捕まえるか。こうしてヴォルケンリッターとの二度目の戦いは、予想外の乱入者もあつたりしたが無事に終了した。

## AS 第三話（後書き）

なのはとフェイトのファンのみなさんごめんなさい。でもみんな本編知ってるからいいよね？  
さあ次回も頑張るぞ。

## AS 第四話

要side

俺たちは今ハラオウン家で反省会を行っている。

「申し訳ありません。力及ばず逃がしてしまいました」

クロノが暗い。まあ、あそこまで追い詰めながらも逃がしたんだ。こうなるのかもしれない。

「あー、クロノ。次捕まえればいいんだよ。まだ闇の書は発動しないんだろ？」

「そうね。要くんの言う通りよ、クロノ。それに敵戦力も確認出来たし」

敵戦力……か。あの仮面は何だったんだろっ。

「一ついいですか？」

「いいわよ、言ってみて」

「今回戦って思ったことなのですが、なんというか、思っていたのと印象が違いました。守護騎士は闇の書に創られた存在。人間とも使い魔とも違い、主に従うだけのプログラムだと思っていたのですが……」

成る程、クロノは感情も何もない人形みたいのを想像していたのか。

「……………人間とも使い魔とも違う存在……………それって私と「馬鹿！」イタツ!？」

何を言い出すのかこの子は。

「いいか？フエイト。確かにお前は人に創られた存在だ。けどどな人に創られただけで、お前は人なんだ。フエイト・テストタロツサなんだ。次馬鹿なこと言ったら、殴るぞ」

「もう殴ったじゃないか……………」

「何か言ったか？アルフ」

「何も言っていないよ!!」

「そうよ。それに検査でも人って出たじゃない」

「……………うん」

まあ、最終的には本人の心の問題になるんだが……………

「そついえば要くん」

「何ですか？リンディさん」

「グレாம்提督があなたと面会したいと言っているの」

グレாம்？誰だっけ？聞いた覚えはあるんだが……………

「要くん。この間、私がやられた後、私とフェイトちゃんたちが面会したんだよ」

そうだ思い出した。面倒で俺帰ったんだった。

「で？何でそんなお偉いさんが俺に用なんですか？」

ORTか？ORTなのか？

「さあ？とにかく面会してもらえないかしら？」

どうでもいいんだよな。

「まあ、いいですよ」

「そうかそれはよかった。では早速アースラに行こうか」

クロノ！？いつの間に!？

「さつきからだ。ユーノ、君も来てくれ」

「なんでさ」

「闇の書について無限書庫で調べてほしい。グレアム提督にも協力を要請したいし」

「……………わかった。やらせてもらうよ」

「なら行くか」

「久遠も行く」

「クロノ」

「別に構わないと思うぞ」

「やった」

それにしてもグレアムか。どんな人だろう。

グレアム side

クロノから彼を連れて来るとの連絡があった。

「お父様」

「何故あんなバケモノに会うのですか？」

バケモノ……か。確かに彼の力、特にあの「ORT」という存在は異常だ。だがあれほどの力があればもしかしたら……

「お父様、過度な期待はしない方が……」

「そうだな」

あの力の詳細がわからんというのに期待するなど愚の骨頂だな。

「しかし、あの力は何なんでしょう」

「あんな気持ち悪いバケモノ見たことないもんね」

「……ふむ」

私、いや管理局がいくら調べてもまったく出てこなかったもの。彼と融合している何かか、もしくは彼自身のものかもわからなかったからな。

「失礼します。クロノ・ハラオウンです」

来たようだな。

「入りたまえ」

クロノが連れて来た二人の少年。あの長髪の子が一条要か。

「はじめまして、ギル・グレアムだ」

「はじめまして、一条要といいます。そちらの女性は？」

「私の使い魔のリーゼロッテとリーゼアリアだ」

「よろしく」

「よろしくお願いします」

彼の肩に乗っている子狐、あの子が彼の使い魔だろうか？

「その子は君の使い魔かい？」

「久遠は使い魔じゃないよ」

「ハハハ、よく間違えられるんですよ。久遠は話せるし、変身も出来るけど使い魔じゃないんですよ」

なんと、そんな生物が地球にいるとは……

「グレアム提督よろしいですか？」

「なにかな？」

「ロツテとアリアを貸してほしいのですが……」

ロツテとアリアを？

「何をするんだ？」

「ユーノ、彼が無限書庫で闇の書について調べるのを手伝ってほしいのです」

成る程な。まあ、構わないだろう。

「いいだろう。ロツテ、アリア手伝ってあげなさい」

「ねえねえ、クロ助！終わったらこの子食べていい？」

「ええ！？」

「ああ」

「ちよっ！クロノ！？」

「ほら、行きましょう」

「待つて！助けてー！！」

ユ一ノくんはロツテとアリアが連れられて行ってしまった。これでようやく要くんと話せる。

「あの二人、なかなか強いですね。動きに隙が殆どない」

「そうかね？」

二人の実力をこんな短い間に見抜くとは。

「それもそうだ。二人は僕の師でもあるからな。アリアからは魔法、ロツテからは近接戦闘を学んだよ」

「へ」

「さて、本題に入ってもいいかな？」

「どうぞ」

そして私は話を切り出した。

「要くん、君の力について聞きたい」

「駄目です」

きっぱりとそう言われた。

「そうか……だが一つ聞かせてほしい。君の力で人を救えるか？」

「どう救うかわかりませんが、どんなものでも使いようによっては人は救えます。ニトログリセリンだって狭心症の薬になりますしね」

なかなか手ごわいな。

「こちらからも質問があります」

「なにかな？」

「闇の書について何か知っていますか？」

「……何故それを私に聞くのかな？」

「あなたは長い闇管理局にいますでしょうか？ならこれまで闇の書の事件について聞いたことがあるか、もしくは実際に体験したことが

あると思ひまして」

本当に鋭い子だ。まるで大人と話しているようだ。

「……………過去に一度だけ、闇の書事件に関わったことがある」

クロノが唇を噛み締めている。それもそうだろう。父を失った事件なのだから。

「クロノもおじさんも悲しそうな目をしてる。大丈夫？」

久遠ちゃんだったか。優しい子だな。

「何でもないよ。グラム提督、話を続けてください」

「いいのかね？」

「はい」

「では話をしよう。11年前クロノの父、クライドが闇の書の輸送をしていた。だが輸送中に闇の書の防衛プログラムが暴走をした。そして私はクライドに言われ輸送艦ごと……………破壊した」

「闇の書は破壊しきれなかったのですか？」

「残念だが、闇の書には自動回復機能と転生機能がある。もしどうにかするなら直接コアを破壊するか、闇の書の主ごと永久封印するしかない」

そう主ごと封印しなければ……………

「そうですね。すみません。悲しいことを思い出させてしまって」

「君が気にすることではない」

「…………お詫びになるとは思いませんが、ORTについて少し話しましょう」

ほう、それは聞き逃せんな。

「ORTに人を救う力はありません。単なる暴力です。守るわけでもなく、癒すわけでもなく、ただ破壊するだけです」

……………それでは彼女は救えないか……………

「それではお邪魔しました」

「おじさん、またね」

「グレアム提督、失礼しました」

「ああ、また来てくれたまえ」

要side

いい人だった。ただ何かひっかかるな。あの後悔しているような目は何だったんだろう。

「ORT……………か。確かにあれは暴力の塊だな」

「おいおい、失礼な事言うなよ」

まったく、魔法だって種類によっては暴力だろう。SLBみたいに。それにしても、クロノにも悪いことしたな」

「何だ、突然」

「……………知らなかったとはいえ、過去を無理矢理掘り起こしてすまなかった」

「……………気にしないでくれ。僕もあまり覚えていない事だから」

暗い空気になったな。

「えっと、えっと」

ん？久遠はどうしたんだ？  
すると久遠は人型になり、俺とクロノの頬に

チュ　チュ

キスをした。　っておい！？

「な、な、何するの！久遠さん！？」

「は？へ？ハア！？」

上は俺、下はクロノ。二人は大混乱です。

「？ エイミィが、元気がない男の人にはキスすれば元気が出るっ  
て」

「「ほう」」

（これは制裁が必要だなあ）

（そうだな。無垢な子にこんなこと教えるエイミィにはなあ）

俺とクロノはアイコンタクトで一瞬の会話をかわした。

「「エイミィ、待ってる」」

「みぎやあああ！！」

その日エイミィの悲鳴がご近所に響き渡った。

## AS 第四話（後書き）

ご覧いただきありがとうございます。  
次回も見てくださいね。

AS 第五話（前書き）

戦闘シーンは疲れる。

前も言ったっけ？

## AS 第五話

なのはside

今日はフェイトちゃんが携帯電話持ってないから、みんなで購入に行くの。

「ケータイっているいろいろあるんだね」

「まあ、これだけ種類があると迷うわよね」

私もいざ買うとなったら一時間くらい迷ってたな。

「そういえば要はどんなケータイ持ってるの？」

「……………フェイトちゃん」

「参考にならないわよ」

「にはははは……………」

「失礼な奴らだな。俺のは通話、メールとかの機能は最低限で、見た目も地味だが、とにかく丈夫だ。落としても、濡らしても、燃やしても大丈夫！がキャッチコピーだ」

燃やしたら流石に駄目だと思うの。

「じゃあそれにする」

「『えええええ！！？』」

フェイトちゃん！？何でいきなり！！  
私はびっくりし過ぎて声が出なかった。女の子が選ぶようなものじゃないの。

「どうしたのよ！フェイト！！」

「フェイトちゃん！！考え直して！！」

「えっ？丈夫なのはいいことだよ。それに……………」

フェイトちゃんは要くんの方をちらちら見ていた。

「要と同じのがいい／＼／」

「『！！！！！』」

ムムム、フェイトちゃん。完全に要くんを狙ってるの。でも私も負けないからね。  
ちなみにその要くんは

「ほうほう、今度は雷、深海、液体窒素、象が踏んでも大丈夫か」

同じ機種の新作を見ていた。というか強度重視し過ぎなの。

結局フェイトちゃんは要くんと同じケータイを買ったの。その後私と要くんはフェイトちゃんのお家に行って、フェイトちゃんとお話してるの。

「へー、アリサとすずかっつてバイオリン習ってるんだ」

「そうなんだよ」

「あの二人は大変だよな」

私たち習い事してないもんね。

「ただいま」

あつ、エイミイさんが帰ってきた。

「なのはちゃんと要くん、来てたんだ」

「「お邪魔してまっす」」

「艦長たちは？」

「アースラに行ってるよ。なんでも武装を付けたんだって」

「アルカンシエルか」

アルカンシエル？何だろう、それ。

「アルカンシエルって何だ？」

要くんも気になったみたい。

「えつとね。発射地点を中心に、百数十キロメートル範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲、だったかな」

ふえく、なんだか凄そう。

「……………」

「？ 要くん、どうしたの？」

何か考え込んでるけど……………

「……………ん？どうした、なのは」

「何考えてたの？」

「なんでもないよ」

「そついえばエイミィ、指揮もしばらく任せろって」

「えー、でもそんなに緊急事態も起こらな」「ピーッ、ピーッ……………」

「起こったな」

エイミィさんかわいそう。

要 Side

今モニターに砂漠でワームと戦っているシグナムが写っている。局員が結界を張るまで時間もかなりある。

「エイミィ、私とアルフが行く」

フェイトがそんなことを言い出した。

「……………わかった。気をつけてね」

「うん、じゃあ行ってきます」

そしてフェイトは転送された。少しするとモニターにはワームを倒すフェイトと、ザフィーラと対峙するアルフが写っていた。

「頑張ってるな二人共」

特にフェイト。あそこまで速くなってるとは……………

「えっ！？嘘！？」

「どっしたの？エイミィさん」

「別の世界に守護騎士の反応が」

ふーむ、俺が行こうかな。

「エイミィ、俺が私が行ってくるー！！」行ってらっしゅい

畜生。

「うん、それじゃ転送するよ」

別のモニターにはなのはとヴィータの姿が写った。ヴィータが魔法で目くらましをして転移魔法を使うとする。そこになのははディ  
バインバスターを叩き込んだ。

「凄まじいね」

「フェイトに撃ったSLBに比べればマシだ」

煙が晴れると仮面の男が防いでいた。

「おいおい」

よく防いだな。アレを。

さらに仮面の男はバインドでなのはを抑えた。

「エイミィ」

「何？」

「フェイトの所へ送ってくれ」

「何で？」

なのはには悪いが、なのはが襲われることはないだろう。ヴィータ  
はなのはを見て逃げたからな。だったらフェイトの応援に行ったほ

うがいい。そうエイミーに伝えた。

「そうだ。フェイトたちの戦闘区域から500mくらい離れた所に転送してくれ」

「？ わかった」

俺は戦場に飛んだ。

つとそろそろ終わりそうだったか。一応準備しておくか。

「アリストテレス、魔力弾」

《了解》

俺の手に青紫の魔力弾が出来る。

(細く、鋭く)

俺はニードルガンを作る。フェイトとシグナムは向かいあって勝負を決めようとしているのが見える。ちなみにアリストテレスのおかげで500m先も見える。

「さて、撃つか」

そう言っつて撃とうとした瞬間、仮面の男の腕がフェイトを貫いた。

「出たか！」

仮面の男はシグナムにリンカーコアの蒐集を促しているようだ。しかしあれだけ長距離でフェイトに近いと、フェイトも危ないな。

《主、この程度よくやったでしょう。それに今は私の補助もあるのですよ》

「そうだな」

そうだ、先生との特訓でもよくやったじゃないか。

「穿て、ニードルガン」

俺はニードルガンを発射した。ニードルガンは閃光となり、仮面の男の首を穿った。

「よし！！」

成功！ありがとう、先生！！

そして仮面の男は崩れ……落ちなかった。

「なんだと！？」

首を貫通したんだぞ！いくら非殺傷で俺自身の魔法だからって、ど

んな精神力だよ！！ならもう一発！！

「アリストテレス！！」

《駄目です。今からでは間に合いません》

そしてフェイトのリンカーコアは蒐集されてしまった。

『エイミイ、転送を頼む』

『……………うん』

こうして戦いはフェイトのリンカーコアを取られるという敗北に終わった。

## AS 第五話（後書き）

ようやくここまで来ました。

そろそろ本編書くのも疲れたから幕間や外伝でも書こうかな。

### 幕間3 (前書き)

アルフメインの話です。

### 幕間3

アルフside

フェイトを守れなかった。フェイトがやられてからその思いがあたしの中でずっと渦巻いていた。

「アルフ?どうしたの?」

「なんでもないよ」

「なんでもないわけないでしょ。見ればわかるよ」

うーん。フェイトには隠せないか。

「ちょっと気が沈んでてね」

「じゃあ散歩にでも行くこうか?」

「そんなのいいよ!第一フェイトはまだ休まないと駄目だろ?」

フェイトはまだ本調子じゃないのに……

「散歩くらいならいいよ」

「そうだけど……」

やっぱりフェイトにはしっかりと休んでほしい。

ピンポーン

その時インターホンが鳴った。

「今行くよー」

私が玄関に行きドアを開けると、要がいた。

「よっ！アルフ。フェイトの調子はどうだ？」

そうだ！要に頼めばいいんだ。

「あっ、要来たんだ」

「調子は良さそうだな、フェイト」

「ねえフェイト。散歩なら要と行ってくるよ」

「えっ？要はいいの？」

「ん？俺はかまわんぞ」

作戦成功！私はリードを持ってきて子犬モードになった。

「なら行くよ！ほら早く、早く」

「お、おう」

あたしたちは今公園にいる。

「いきなりどうしたんだ？アルフ」

やっぱり聞いてくるよね……………

「ちょっとフエイトに気を遣ってさ」

「ふーん。ホントにフエイトに気を遣ったのか？自分の為じゃないのか？」

うっ！流石に鋭いね。

「実は……………」

あたしは素直に自分の気持ち話を話した。

「成る程ね……………とりあえず遊ぶか」

「はっ？」

相談をしたのに遊び？

「よし行くぞ！ー！」

「ちょっとー！？」

何考えてるのさ!?

『商店街です!』

『誰に言ってるのね』

まったくいきなり引っ張ってきたと思ったら、普通に商店街じゃないか。

『ここにはお前の好きそうな店があるんだぞ』

『どんなのね』

『行ってからのお楽しみ』

そしてちょっと歩いた所にあつたのは

『喫茶店?』

『そっ』

でも喫茶店ってあたしみたいなの入っちゃ駄目なんじゃ……

『アルフ、よく看板を見る』

看板？

『ペット喫茶・ワンニヤフル？』

どんなネーミングセンスしてるんだいこの店……それより  
ペット喫茶って？

『まあ、ネーミングセンスはアレだがペット同伴OKの店だ』

そんな店あるんだね。

『じゃあ入るか』

『うん』

カラン、カラン

『いらっしやいませ』

そこにはいろいろな動物の耳を付けてメイド服を着た女性は何人も  
いた。

『この店って、俗に言うメイド喫茶とかいうのじゃないのか？』

『初めての人はみんなそう言うよ。でも元々はただのペット喫茶だ  
よ。ほら、動物がいっぱいいるだろ？』

確かに周りには犬、猫を始め、様々な種類の動物がいた。てか元々はって、今は違っつて言ってるようなものじゃないか。

「あら、要くん。今日は久遠ちゃんじゃないのね」

「ええ、今日は友人のペットを替わりに」

「そうなの。アリサちゃんとすずかちゃんも来てるけど案内しようか？」

「お願いします」

へへ、アリサもすずかも来てるんだ。

『二人にこの店を紹介したのは俺でな。普段は久遠と来てる』

案内された先はVIPと書かれた部屋だった。

『ここって』

『VIPルーム。この店でも僅かな人しか入れない』

要ってこの店じゃ凄いな。

「アリサ、すずか、俺だ。入るぞ」

「「どっぞ」」

中から二人の声が聞こえて、中に入ると部屋に驚いた。けしてきらびやかなわけじゃないけど、細かい所に手が込んで、動物にも人間にも優しい造りになっている。

「あら、今日はアルフと一緒になのね」

「フェイトちゃんは？」

「ちょっと散歩を頼まれてな」

アリサは犬、すずかは猫を撫でている。

「さて、何を頼むかな」

『おいしいのを頼むよ』

『はいはい』

「それじゃドッグセット・スペシャルを」

「はい」

あれ？要の分はどうしたんだろう。

『要、あんたの分は？』

『ん？ああ、ドッグセットは人と犬の料理が両方出てくるんだよ』

へ〜。

「お待たせしました〜」

早っ！！さっき頼んだばかりだよ！？

「ほらアルフ。ご飯だぞ」

……とりあえず食べよう。……  
ッ！！  
……ウマ

『要！！これ凄く美味しいよ！』

『そりゃよかった』

「アルフよく食べるわね」

「やっぱり美味しいのかな」

ぱくぱく

「そうだな。人の料理も美味いからな」

もぐもぐ

「この料理は美味しいもんね」

「そうだね。ノエルが作る料理くらい美味しいよ」

けぷっ

『あー、美味しかった』

『そうか。少ししたら運動するか』

『そんな施設もあるのかい？』

凄いだね、ここは。

「ほらっ！」

「わんっ！」

あたしは今、要の投げたフリスビーを追っている。

「わふっ！」

「わっ」

ぱちぱち

あたしはフリスビーをキャッチする。意外と楽しいんだね、これ。

「次、私ね！」

「その次、私もいい？」

「別にいいだろ？アルフ」

「わんつ！」

「おっ、もうこんな時間か」

要がそう言うので時計を見ると5時だった。

「そろそろ帰りますか」

「そうね」

「それじゃあ、また明日だね」

要が会計を済ませて、あたしたちは商店街を歩いた。アリサとすずかは車で帰っていった。

『よかっただろう。こういうのも』

『そうだね。たまにはいいかな』

『悩み事も忘れてたたる？』

そういえば、すっかり忘れてた。

『フェイトを心配するのはいい。だが自分の事も気にしないとな。みんな仲間なんだから相談もしろよ』

『……………うん』

あーあ、まさかこんな風に励ますなんて流石は要かな。妙に大人っぽいだけあるよ。

「おかえり。アルフ、要」

「ただいま。フェイト」

「ただいま」

「あれ？アルフなんだかすっきりしてるね」

「そうかい？」

まあ実際すつきりしてるからね。

「それじゃ、俺帰るわ」

「うん、また明日」

「またね」

今日はホントに楽しかった。また、闇の書をどっにかしたら行きたいな。

「アルフ、今日は何してきたの？」

「そうだね、まず……………」

### 幕間3 (後書き)

やっぱり幕間はオリジナルストーリーだからスムーズに考えることができませんね。

これですっきりしたし、次回も頑張るぞ。

AS 第六話（前書き）

やっとはやてと要が出会います。

## AS 第六話

### 要side

「あのね、今日私の友達のお見舞いに行きたいんだけど、みんなも一緒に行かない？」

さすががそんなことを言い出した。

「私はいいわよ」

「私もいいよ」

「私も大丈夫」

「俺も」

全員問題ないみたいだ。

「よかった。それじゃあ、みんなで写真を撮って送ろうと思うの」ということで俺たちは写真を撮る際の幕を作ることになった。

「そつえば友達の名前は何だ？」

「八神はやてちゃんだよ」

俺たちは今、海鳴総合病院にいる。

「えっと、病室は……ここだ」

「……おじゃまします」「」「」

「どつぞー」

聞こえてきた声は関西地方のイントネーションだった。

「すずかちゃんは久しぶり。他のみなさんははじめまして。八神はやていいます」

「はやてちゃん、久しぶり」

「はじめまして。高町なのはだよ」

「アリサ・バニングスよ。よろしくね」

「フエイト・テストロッサです。よろしく」

「一条要だ。一応最年長の12歳だ。よろしく」

病室のベットにいたのは、茶髪で短めの髪をした美少女だった」

「いややわ〜。美少女なんて。この美少年君」

受け流した!?やるな、この娘。

「「<sup>くん</sup>要?」「」

「ん?どうした、なのは、フェイト……………って痛い、痛い。つねらないで」

なのはに右頬、フェイトに左頬をつねられた。

「アハハ、モテる男は辛いなあ」

「笑うな、子狸」

「なっ!?!誰が子狸や!」

「お前だ。お・ま・え」

「やるんか!?!」

「やってやるつか!?!」

衝突が起ころうとしたその時

「いい加減にしろー!」

スパーン スパーン

アリサのハリセンが炸裂した。

「酷いじゃないか」

「そやで〜。ただのスキンシップやったのに。でもええツッコミや  
ったよ」

アリサのツッコミは関西人も認めた。流石はアリサ。なんでもでき  
る天才少女。

「とりあえず、お土産どうするの?」

フェイトがそう言う。すっかり忘れてた。

「はい、これ私から」

「わ〜、美味しそうなケーキ」

「当然。俺となのはの家は喫茶店だからな」

母さんの料理がマズイわけがない。

「要くんとなのはちゃんと同じ家に住んどるの?」

苗字が違うから疑問に思うか。

「そうだよ。でも家族だよ」

その後はみんなで雑談をして家路に着いた。くだらない事ばかりだ  
ったが楽しかった。はやくとも仲良くなれたしな。ただ、途中部屋

の外に気配を感じた。ここ最近よく感じた守護騎士の一人、シヤマルの気配だった。俺たちを狙いにきたのかと始めは思った。だがメリットが少ないし、リスクも高い。ならば可能性は一つ。

「はやて……か」

「どうしたの？要くん」

「なんでもない」

だがはやてから魔導師としての気配はなかった。……わか  
らないことを考えてみましょうがないか。

帰ってから俺は自分の部屋でクロノと通信してた。

「クロノ。闇の書について何かわかったか？」

『ああ、ユーノが頑張ってくれてね。何かから聞きたい？』

「全て」

もしかしたらはやてと守護騎士、闇の書、そして仮面の男について

の関係が結び付くかもしれない。

『わかった。まず闇の書は元々、夜天の書という各地の魔導師の魔法を蒐集し、研究するためのものだったんだ』

成る程、だからリンカーコアを回収するのか。

『だが誰かが改悪した。破壊の為にな』

「改悪された能力は？」

『いろいろとある。無限再生や転生、一番酷いのは主に対してだな。一定期間蒐集がないと主の魔力資質を奪う。完成したらしたで、主を吸収してしまう』

これではやてと守護騎士は繋がった。はやては闇の書に魔力資質を吸収されたんだ。

「クロノ。魔力資質を吸収された場合、体に不調はでるのか？」

『そうだな……成熟されたリンカーコアならまだしも、未成熟、もしくは活性もしていないリンカーコアならありえるかもな』

「その負担を軽減するには」

『……多分蒐集だと思う』

だから守護騎士は蒐集をしているんだ。ザフィーラがアルフに言った、自分たちの独断でやっていて主は知らない。という言葉は事実だな。だがこれでは、まだ仮面の男との繋がりが見えない。

「闇の書を封印するには？」

『前にグラム提督が話したように主ごとの永久封印ぐらいだ』

「仮面の男についてわかったことは？」

『残念だが、片方は近接戦闘が得意で、もう片方は魔法が得意というところらしいか』

だよな。そんな簡単にわかるわけないか………  
待てよ。確かリーゼロッテとリーゼアリアはそれぞれクロノの近接戦闘と魔法の師匠。それに内部関係者だ。フェイトがやられた戦闘の時、確かいろいろとハッキングされたんだっただ。セキユリテイは全て素通りで………

「クロノ。グラムさんとリーゼロッテさん、リーゼアリアさんについて調べてくれ」

「どうした突然」

「俺の推理が正しいならあの人たちは関係者だ」

動機もある。クロノの父、クライドさんの敵討ちだとしたら……  
・・それに今日の話では、はやては両親がいない。はやてがいないくなっても悲しむ人は少ない。

『わかった。調べてみよう』

どうかこの推理は間違えであってほしい。

グレアムさんがそんなことをする人でないでほしい。

## AS第六話（後書き）

最後はかなり無茶しました。

批判を受けてもしかたないと思っています。

でもよければ次回も見てくださいね。

オマケ5 (前書き)

40万アクセスありがとう

## オマケ5

ユ「みなさん40万アクセスと4万ユニークありがとうございます」

要「あれ？なんでユーノなんだ？」

ユ「作者さんが、今回ユーノメインだから俺の代わりに出ろって」

要「よかったな」

ユ「うん。それじゃ早速始めようか」

要「どうぞ」

ユノside

こんにちは、みなさん。僕と要は今、地球のエチオピアにいます。

「ユーノ、こんな所に何の用なんだ？」

「そう言わないの。管理局がここで異様な魔力反応があったから、

僕ら二人で調べるんじゃないか」

それは先日のこと。管理局がエチオピアで魔力を感知した。それがあまりに普通とは違ったため僕らが調査に来たのだ。

「俺らじゃなくても局員を出せばいいのに」

「………ハハハ」

確かにそうだけど今回行くのは遺跡。だからスクライアである僕と、感知されたものと同じく異様な力を持つ要が選ばれたのだ。

「にしてもしょぼい遺跡だな」

「そうだね」

普通、地球の遺跡といったら観光地とかになったり、調査の為に保存されたりするけど、ここはボロボロで小さい。人の気配もない。

「とりあえず入ってみようよ」

「おー」

やる気ないなあ。

「中はしっかりしてるね」

「まったくだ。外見からは想像できないな」

中は保存状態がとてもいい。まるで何かが整備しているみたいだ。ただ外見通り狭い。

「何もないな」

「そっだね」

一時間くらい調べたけど何も見つからない。

《主》

「どうした、アリストテレス」

《その壁が少しへこんでいます》

「……………ユーノ」

「わかった」

調べてみると確かに数cm他の壁に比べてへこんでいる。普通なら古い遺跡だからよくあることで無視するけど、この遺跡はここまで壁も床も平らだった。少し解析魔法を使ってみる。

「当たりだよ、要」

「よくやった。アリストテレス」

《いえ》

壁を押すと壁は倒れた。その先には階段が下へと続いていた。

「行くか」

「うん」

足を踏み入れると階段の壁が光りだした。

「イルミネーションだな。まるで」

「……………」

要はそんなこと言ってるけどこれは魔法だ。ミッドでもベルカでもない。例えるなら久遠ちゃんの雷撃に近い。しばらく階段を下ると、長い廊下があった。

「少し下り坂になってるな」

「そうだけど、どうかした？」

「いやね、こついう場合ってよく岩が転がってくるんだよな」

映画の影響か、要がそんなことを言い出した。でも実際には遺跡を壊すからそんな畏はくゴトン>>……………へ？

「逃げるぞ！ユーノ！！」

「ホントに来たー!?!」

いやいや!映画じゃないんだから!何で岩が転がってくるのさ!!

「身体能力60%解放!抱えるぞ、ユーノ!」

「えっ?うひゃあ!?!」

要がいきなり僕を抱えて走り出した。確かにこっちの方が速いけど・  
・  
・

《主!この先に広い部屋があります!》

「よし!」

広い部屋は確かにあった。でも

「床が槍じゃないかー!?!」

なんだよ、この前近代的な畏は!!

「しっかり掴まれ、ユーノ!跳ぶぞ!」

「うわあああ!?!」

要は僕を抱えたまま跳んで、部屋の向こう側にあった道に着陸した。

「成功」

「成功じゃないよ！」

死ぬかと思った。

《主、ユーノ、この先に異常な魔力が》

「はっ？」

確かに感じる。何だろう。

先にあつた部屋を覗くと、そこには異様な光景が広がっていた。

「何……アレ」

そこにいたのはコウモリの羽にサソリの尻尾を付けた人面のライオンに、コウモリの羽に頭が尻尾にもあり、口から紫の煙を出している蛇がいた。どちらもかなり大きい。

「マンティコアにアンフィスバエナ……スゲエ」

「何なのさ!？」

凄いのは見れば分かるけど……

「絶対に手を出すなよ。死ぬからな」

「……うん」

要の言う事は本当だろう。というかあの怪物二体を見ていればそんな気は無くなる。

「アリストテレス。映像は撮ったか？」

《はい。確かに》

「じゃ、帰るぞ」

「そつだね」

あの蛇が口から出しているのはおそらく毒。これ以上ここにいたら危ないだろう。

「出れた！」

「要、アレは何だったの？」

僕は早速聞いた。

「人面ライオンはマンティコア。蛇はアンフィスバエナ。どっちも空想上の怪物とされたものだ」

空想上の怪物……ならどうしているのだろう。

「次元世界にもドラゴンとかいるだろ？」

まあ、そうだけど。ドラゴンは生態系に組み込まれた存在。でもア  
しは違う。

「まっ、手を出さなければいいさ。流石の局も映像を見せれば黙る  
だろ」

それもそうだ。わざわざあんな怪物に手を出す必要はない。

「よし、帰るか」

「そうだね」

やることもやったし……。そうだ。帰ったら地球の怪物につ  
いて調べてみよう。また、あんなのに遭遇したら嫌だからね。

ユ「大変だったね」

要「でも神話の戦いを見れるなんてそうそうないぞ」

ユ「そうだけど……」

要「文句言つな。全部ユーノsideだったんだから」

ユ「また出番が無くなるのかな」

要「……………ここまで『チートじゃ済まない』を  
ご覧いただきありがとうございます。これからは是非見て下さい」

ユ「ちょっと、要!?!無視しないで!?!」

## オマケ5 (後書き)

これを書いてわかったことが一つ・・・・・・・・・・・・ユーノ  
は書きにくい。

第一これユーノいる必要なくね？

まあ、それは置いといて。Asが終わったら誰かの作品とクロスし  
たいな。って思ってたリ・・・・・・・・

AS 第七話（前書き）

そろそろ終盤戦です。

## AS第七話

要side

明日はクリスマス・イヴ。今晚は高町家は一足早いクリスマス会だ。フェイトとアルフも参加している。

「今日は豪華だな」

「フェイトちゃんもいっぱい食べてね」

父さんと母さんが言う。

「明日は大変だよな」

「クリスマスの翠屋って初めてなんだよな。俺」

「そつえばそうだね」

どんなくらい忙しいのか知らないんだよな。

「要にも頑張ってもらうからな」

「わかってるよ、兄さん」

「今年は注文が多いからな。リンディさんからも来てるからフェイトちゃんは期待しててな」

「はい！」

ちなみにアルフと久遠は机の下で肉を食べている。

食後、姉さんはフェイトとアルフを家まで送った。俺は部屋でのんびりしていると、すずかからメールが来た。

『明日のサプライズの件なんだけど……………』

そういえば明日ははやての所にサプライズお見舞いするんだったな。しかしサプライズだ。もしかしたら守護騎士と鉢合わせするかもしれない。

「えっと…………俺は別にいいと思うぞ。プレゼントも用意しておいたし。っと送信」

まあ、遭遇したらしたでその時対応すればいいか。今はプレゼントの仕上げをしよう。

さて、今ははやての病室の前だ。中からする気配は四つ。一つははやてだから、あとの三つは……

「こんにちは」

すずかが言う。

「入ってええよ」

どうなるんだろうな。とりあえず今は戦闘のことは考えないでおこう。

「……失礼します」

「……!?」

やっぱりいたな守護騎士。ザフィーラがないのは病院だからか？

「あ!」

なのはとフェイトも気付いた。守護騎士たちも警戒している。

「あれ?もしかしてお邪魔だった」

すずかが不穏な空気を感じて言った。

「いえ、そんなことはありません。少し驚いただけ」

シグナムがフォローする。

「それでみんなは今日何しに来たん？」

「今日はクリスマス・イヴでしょ？だからプレゼント持って来たのよ」

「はい、これ」

「わゝ、ありがとな」

「これは俺から」

「要くんもくれるん？ありがと………ってなにこれ」

「野菜炒め」

「なんでこんなんがクリスマスプレゼントやねん！！」

スパーン

流石関西人。ナイスなツツコミだ。

「冗談だよ。ホントはこっち」

そう言っ取り出したのは小さなぬいぐるみ。ちなみに狸だ。

「………狸」

「手作りなんだ。我慢してくれ」

「ええよ。その気持ちがうれしいよ……って手作り!？」

何かおかしいだろうか。

「器用なんやね」

「まあな」

家庭科の成績は5です。

俺たちは軽く話して帰った。流石に睨まれてる状態で居座り続けるほど肝が据わってない。

俺は一人走って家に帰った。武器を準備するためだ。おそらかなのはとフェイトはすでに守護騎士と対峙しているだろう。俺が家を出てなのはたちの所へ向かおうとした時、俺はバインドに縛られた。

「なっ!？」

普通のバインド八重にチェーンバインドまで!?!しかもケージまで三つも出来やがった!!

「これだけやればバケモノの貴様でも動けまい」

そこには仮面の男がいた。

「どづいつつもりです？………リリースエリアさ  
ん」

「!?!?」

当たってほしくない可能性が当たったか………

「何故こんなことを」

「答える必要はない」

そう言って転移して行ってしまった。

「アリストテレス、魔法破壊を」

《主、すぐには無理かと》

だよな。こんな状態。しかたない、100%やるか。

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン  
発動」

「うおおお!!」

俺は無理矢理バインドとケージを破壊した。早く行かないと!

俺が到着して見たものは

倒れるザフィーラ

ぐったりとして宙に浮されているヴィータ

シグナムとシャマルが着ていたコート

絶望の表情を浮かべるはやて

なのはとフェイト………の偽物

ここまでやるか？プログラムだからって、人じゃないからって、家族を奪っていい理由にはならない。俺は久しぶりにキレた。

「今更何しに来「黙れ」ガハッ！！？」

俺はなのはの偽物に一撃入れてやる。なのはの偽物は吹き飛び、ビ

ルに埋まった。浸透効も使った。普段の俺の浸透効ならたいしたところにはならないだろうが、100%状態なのだ。威力は抑えたが肋骨の粉碎と、運が悪ければ内臓破裂ぐらいは覚悟してほしい。

「貴様!!」

フェイトの偽物が攻撃してくるが、遅い。俺は手に手榴弾を持ち、相手の右肩に押し付けた。そして手榴弾は爆発した。

「ぐああ!!」

普通なら俺の手もヤバイがアルティメットワンを発動しているのだ。手榴弾がBランクに届くはずもなく無傷。逆に相手はバリアジャケットを着ていても、密着状態での爆発。腕が使い物にならなくなってもおかしくない。俺はさらに蹴り飛ばした。

「ガッ!!」

骨何本か持っていったな。

「要くん……………」

「要……………」

気が付くと本物のフェイトとなのはが後ろにいた。

「軽蔑してもいいんだぞ」

俺は殺してもおかしくないことをやったからな。

「・・・・・・・・」

二人は俯いてしまった。その時

<ゾクツ>

「二人共！俺の後ろにいる！！いや、逃げる！！」

「ど、どうしたの？要くん」

「何・・・・・・・・あれ」

フェイトが何かに驚いている。俺たちがはやての方を見るとフェイトの驚きも理解できた。はやての体が光に包まれ急激に成長、いや、変質していたのだ。変質が終わると、そこには黒い翼を持った銀髪の女性がいた。

「また終わってしまった」

何だと？終わった？

「主、あなたの願いを叶えます。あなたの愛おしい守護騎士を奪ったものを壊します」

マズイ！！こいつ、なのはとフェイトを狙ってやがる！！

「お前ら！さっさと逃げろ！！アリストテレス！！」

《了解、シールド》

俺の前にシールドが出来た瞬間。俺たちは光に巻き込まれた。

## AS 第七話（後書き）

猫姉妹を殺りました。

生きてますよ。重体ですけど。

猫姉妹のファンの人すみません。

## AS 第八話

クロノside

僕は要に言われた後、グレアム提督についての調査をした。すると一人の少女が浮かび上がった。

「八神はやて」

グレアム提督が資金援助をしている一般人の少女だった。その少女は両親がおらず、足も不自由だ。ただその足の病気は不明、いや、僕たちから見ればそれは闇の書の侵食症状だった。ということは彼女が闇の書の主ということになる。ここで僕は要が至ったであろう結論が見えた。

「グレアム提督、よろしいですか？」

僕は今、グレアム提督の部屋の前にいる。

「入りたまえ」

「失礼します」

「何の用かね？クロノ」

「単刀直入に申します。あなたは、今回の事件の全てを知っていますね？」

「!? 何を根拠にそんな事を?」

この動揺の仕方。間違いないか……………

「……………八神はやてです」

「何故君が彼女を知っている!?!」

「要ですよ。あいつは誰よりも早くこの結論に至り、僕にヒントを与えた」

「……………そうか。では隠す必要もないな」

グレアム提督は全てを話してくれた。仮面の男がロツテとアリアであった事、闇の書を八神はやてごと封印するつもりだった事、その全てが自分の復讐の為であった事。

「……………何故」

「私は悔しかったんだ。クライドを守れず、この手で殺してしまった事が……………ならばこの手をどんなに汚してでも、この身がどんな罪を背負おうとも、闇の書を封印しようと思った」

「グレアム提督……………あなたは」

もしグレアム提督が誰かに協力を求めたら、グレアム提督が過去を振り切ることができたなら、こんなことにはならなかっただろうに……………

「クロノ、私を……………!!! ロツテ!? アリア!?!」

「どろしたのです」

「二人が……やられた」

なっ！？ いったい誰が！？

ビーツ ビーツ

警報！？

「クロノ、大変だよ！！」

「どろした！？ エイミィ」

「闇の書が覚醒しちゃった！！」

「なんだと！？」

なんてタイミングの悪い。

「今、なのはちゃんたちが戦ってる！」

「わかった！ すぐに行く！」

「グレアム提督。話は終わってからしましょう。では」

そう言って僕は部屋を去ろうとした。

「待ちたまえ！ 君自身はともかく、そのデバイスでは分が悪い。こ

れを持っていきたまえ」

「これは？」

渡されたのはカード型の待機状態のデバイスだった。

「氷結の杖 デュランダル。私の計画で使う予定だったものだが、もう必要ない。君に譲ろう」

「……………ありがとうございます」

そして僕は走り出した。

要side

「きつっ」

俺は光をなんとか防ぎ切った。とはいえシールドは途中で壊れて、作った二枚目も壊れたけど。俺もなのはたちと一緒に逃げればよかった。

「……………一条要か」

「へ〜、俺を知ってるのか」

「データがある」

成る程、俺のリンカーコアからの情報が。まあ、いい。足場がある所は俺のホームだ。例えばビルの屋上でも。

「オラア！！」

俺は殴り掛かったが………

「フツ！」

「うわっ！？」

投げられた。うまく着地したが、今は合気道？なんでこいつが………。まてよ。データがある。つまり俺の技のデータもあるってことか！！

「穿て、ニードルガン」

「マジか！？」

俺はかろうじて避けた。

ニードルガンは俺のレアスキルがあるから出来る代物だぞ！！反則め！！

「いい魔法だ。範囲は狭いが、貫通性、スピード、なにより消費魔力が少ないから隠密性も高い」

「どーも」

人に使われるとこんな嫌なものとは思わなかったよ。

「要くん！大丈夫！？」

「要、怪我は無い？」

「大丈夫だぞ。なのは、フェイト」

やっと来たか。オマケも二人いるし。

「誰がオマケだ！」

「噛むよ！」

「心を読むな。ユーノ、アルフ」

だがこれで大分楽になる。

「気をつける。あいつ、蒐集したリンカーコアの持ち主の技や魔法を使うぞ」

「つまり、要の技も使うんだね」

「要くんのニードルガンなんて撃たれたくないの」

俺撃たれました。

「来るよ!!」

つと遊んでる場合じゃないか。

俺は向かってきたあいつ……閻女(仮)に蹴りを入れた。しかし避けられる。

「アクセルシューター シュート!!」

「フォトンランサー ファイア!!」

そこへなのはとフェイトの攻撃が叩き込まれる。煙が晴れたそこには、無傷の閻女(仮)がいた。あいつは空を飛ばうとした。戦場を移す気か!

「逃がすか!アリストテレス!!」

《シールド》

加工する!!

(薄く、鋭く)

「シールドスライサー!!」

「穿て、ブラッディダガー」

見事に撃ち落とされてしまった。畜生。空中戦は苦手なのに……  
・・・そう思った時アルフとユーノが動いた。

「「チェーンバインド!!」」

二人のバインドは閻女（仮）を捕まえた。

「いくよ。レイジングハート!!」

《ダイバインバスター・エクステンション》

「バルディッシュュ!!」

《プラズマスマッシュャー》

二人の砲撃が当たる寸前、バインドは解かれ、防がれた。だがまだ俺がいる。

「受け取れ!!」

「くっ!!」

相手はさらにシールドを張り防ごうとしたが、流石に防ぎきれず吹き飛んだ。相手は体制を整え、詠唱を始めた。

「咎人達に、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ」

これは!!

「スターライトブレイカー!?!」

「逃げるぞ!なのは、フェイト、アルフ、ユーノ!!」

「くっくっ!!」

とにかく遠くへ逃げないと、撃ち抜かれたら大変だ!!

「こんなに逃げなくても……」

なのはがそんなことを言う。

「自分の魔法の威力くらい理解しろ!!」

『みんな！近くに一般人の反応が!!』

なんですと!?

「捜せー!!」

全員それを合図に散った。

何処だ?

「そこの人ー。危ないから動かないで下さい!!」

なのはが見つけたよ!!「なのは(ちゃん)にフェイト(ちゃん)!!?」「なんでアリサとすずか?」

《主、そろそろ撃たれます》

「あー、もう!!」

こんな忙しいのは初めてだ!!

「お前ら、動くなよ!!」

「「要<sup>くん</sup>!?!」」

「アリストテレス! シールド、二重に重ねて作れ!」

《了解です》

よし、これで丈夫になった。加工もして……

「ルフシールド!」

おそらくあのスターライトブレイカーはノーマル。威力はAAA。これで十分のはず。

「来るよ!」

フェイトの言葉と同時に桃色の奔流が俺たちを飲み込んだ。

「セーフ」

意外と楽に防げたな。

「ぶっ飛ばしてやる!！」

こんなに怖い思いをさせやがって!

俺が走り出すと、フェイトもついてきた。

「主は永遠の眠りの中にいる。お前たちも眠れ」

俺の蹴りもフェイトの斬撃も防がれた。そして

「えっ!?!」

「なんだこれ!?!」

俺たちの体は光に包まれて、本に吸い込まれた。

## AS 第八話（後書き）

要くん次回夢の世界へ！

そしてみんな大好きフルボッコタイム！！

以上、大まかな次回予告でした。

後書きで書くこともないから質問コーナーでもやらさうと思います。  
みんな、どんな質問でもしてね

常識の範囲で

AS 第九話（前書き）

いじもよじちやうとていふ。

## AS 第九話

要side

えっと、ここは何処だ？確か俺は………どうしたっけ？

「お兄様、お兄様」

「う………ん」

五月蠅いな。人が考え事しているのに。

「起きて下さい。お兄様」

にしても聞き覚えがある声だな。でもここ最近聞いてないような………

「……あら、楔くわその程度じゃ駄目よ。こっじゃない………  
……と……！」

ゴチッ

「又オオオ!!?」

この懐かしい痛みは！

「何しやがる！お袋!!」

「久しぶりに帰って来たのに惰眠を貪ってる息子への制裁よ」「

久しぶりに帰って来た？体を見ると以前の、転生前の黒髪短髪の2歳の子体になっていた。いや、今までののが夢だったのか？

「お兄様、どうかなさいましたか」

「ん？なんでもないよ楔」

俺は妹の頭を撫でてやる。紹介が遅れたが、この娘は俺の妹の「一条 楔」黒髪長髪の大和撫子だ。俺とはまったく似ていない。ちなみに俺を殴って起こしたのはお袋の「一条 茜<sup>あかね</sup>」楔と同じ黒髪長髪の大和撫子だが、鋼の拳の持ち主だ。

「そういえば、楔。お前受験生だろ？こんなことしてていいのか？」

「大丈夫です。会社をクビになったお兄様に比べれば余裕です」

「うっ！」

こいつめ、言うようになったな。

「そうそう、お父さんが呼んでたわよ」

「親父が？」

親父の名は「一条<sup>めいば</sup>」黒髪短髪で俺によく似ている。俺の武術の師匠でもある。

俺は二階の自分の部屋から親父のいる和室に行った。

「親父。入るぞ」

「お。入れ、入れ」

俺が襖を開けると拳が飛んできた。

「うお！」

「ほう」

俺はその拳を受け止めた。

「何する」

「………ついでに」

そう言うと親父は庭に出ていった。

「強くなったな、要。これからお前に奥義を教えようと思う」

「ハア！？ちよつと待て親父！武術の奥義は一つ一つの極めた技で言っただろ！？」

俺がガキの頃、そう教わった。

「お前に奥義があるなんて言ったら、教えるまで五月蠅そうだからな」

「うう！ー！」

間違いない。ガキの頃の俺なら間違いない。

「早速だが実演するぞ」

そう言つて親父は俺の肩を軽く叩いた。

コキッ

俺の肩から軽い音がした。

「！？ 外れてる！？」

そう、俺の肩の関節が外れていたのだ。

「治すぞ〜」

「痛っ」

親父は俺の肩を治した。しかし今のはなんだ？

「親父、今のは関節を外す技か？」

「そつだ。傷付けずに相手を倒す為に作られた技だ。名前はないけどな」

「へ〜」

対生物には最強の技だな。

「習得にはどれくらい掛かるんだ？」

「10分」

「早っ!!」

いくらなんでも早過ぎだろ。

「基礎は全て出来てるからな。才能がないお前でも出来る」

「……………才能がないか」

昔からよく言われたな。悔しかったな、あの頃は……………

「おう、所詮一流にしかねんさ」

「……………はっ?」

いやいや、もしかして親父の言う才能って。

「残念だなあ。お前に超一流の才能があれば歴代一になれたのに」

「ふざけるなー!!」

「グハッ!!」

俺は親父を思いつきり殴った。このクソ親父め。

「ほら、さつさと起きて奥義教える」

「この親不孝め」

10分後、ホントに出来た。

「言っただろう。基礎は全て出来てるからって」

だからってホントに出来るなんて思わねえよ。

「じゃっ、そろそろ目を覚ませ、要」

はっ？何を言って……………

「気付いているだろ？此処が夢の中だって」

「……………あぁ」

そうだ。親父は俺が18の時に死んだ。だが夢ならおかしい。

「なんで親父は俺の知らない奥義を知っているんだ？夢の中なら親父は俺の記憶から出来た存在だろ？」

「そりやお前。俺が幽霊だからに決まってるだろ」

「幽霊？幽霊って夢に入れるのか？」

「俺だからな」

ああ、成る程。親父だからか。説得力あるな。

「ほら、さつさと起きて戦ってこい。待ってる奴らがいるんだろ？」

「わかった。行ってくる。……ありがとう、親父」

「よせやい。気味悪い」

俺は親父の指差した門へ歩き出した。

「お兄様」

「要」

「楔、お袋」

「………いってらっしゃい」

「行ってきます」

さて、懐かしい思い出も終わりだ。闇の書に終止符を打ってやる。俺が門を通ると、俺はその場から消えた。

一条 side

行ったか……しばらく見ないうちに大きな男になったな。要が出て行った後、白い空間になった。

「やあ、久しぶりの息子との再会。どうだった？」

俺に話し掛けてきたのは金髪のイケメン、神様だ。

「このような機会をいただきありがとうございます」

「気にしないでくれよ。あの子には面白いもの見させてもらってるからね」

「そうですね」

俺が生きてる間にやりたかったハーレムを徐々に作ってやがるしな。

「そろそろ時間だよ」

「わかりました」

早く孫の顔が見たいな。俺はそんなことを考えながら天国に行った。

やっと出れた。長かったな。

「「要<sup>くん</sup>!!!」」

「よっ。なのは、フェイト」

二人共ちよつとボロボロになってるな。何があつたんだろ。

「要くん。大丈夫やった?」

「おう。大丈夫だぞ、はや………て?」

「なんやその反応」

いやだって、目の色も髪の色も違うし。

「要。無事だったか」

「要、大丈夫?」

クロノが久遠を連れていた。なんで久遠がいる。

「嫌な気がしたから来たの」

そうなんだ。俺は保護者として喜ぶべきか、叱るべきか。

「君はなかなか出て来ないから心配したぞ」

「マジか」

長かったけどそんなに時間掛かったかな？

「まあいい。今はあれをどうするかだ」

「うわっ！何あれ」

そこには巨大な半球があった。周りには触手がうごめいている。

「闇の書の防衛プログラムだ」

へー、あれが。

「アルカンシエル使えば？」

せっかく付けたんだから。

「バカヤロー！はやての家が壊れるだろ」

「いやいや、誰が地球に向けて撃てと言った。宇宙で撃てばいいだろ」

「……………エイミィ出来るか？」

『……………理論上、計算上でも問題ないよ』

「……………ということだ」

あれ？もしかしてみんな気付かなかった？何でみんな目をそらすの？そつえば……………

「エイミィ、リーゼ姉妹はどうなった？」

『二人共、意識不明の重体。でも命は大丈夫だよ』

やり過ぎたな。後で謝ろう。

「時間だ!!」

クロノが言う。準備しないと。何故か能力停止してるからな。

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン発動」

「くくくくなっ!?!」「くくく」

はやて組が驚いている。どうしてだ？

「君の全力を見るのが初めてだからだろう」

成る程。でも、そんなことは置いておこう。今はあそこにいる防衛プログラムを潰すことが先だ。

「チェーンバインド!!」

「ストラグルバインド!!」

「鋼の輓!!」

アルフ、ユーノ、ザフィーラの魔法が触手を破壊する。

「轟天爆砕！！ギガントシュラーク！！」

そこへヴィータの巨大ハンマーが叩き込まれ、バリアを破壊する。

「レイジングハート！！エクセリオンバスター！！・・・シ  
ュート！！」

なのはの砲撃が二枚目のバリアを破壊する。

「次！シグナム、テストロツサちゃん！！」

「炎の魔剣レヴァンティン。刃、連結刃に次ぐもう一つの姿」

シグナムがレヴァンティンを弓にする。

「翔けよ隼！！」

《シュツルムファルケン》

シグナムの矢が三枚目のバリアを破壊する。

「バルディッシュ・ザンバー 疾風迅雷！！」

《ジェットザンバー》

フェイトの斬撃が四枚目のバリアを破壊するが、まだもう一枚あつた。

「バリアは四枚じゃなかったの！？はやてちゃん」

「おつかしいなー」

なんか予定外だったらしいが、まあいい。

「俺が破壊する。久遠アレ頼む」

「アレだね。わかった!!」

そう言う久遠は俺の拳に雷を纏わせた。

「行ってくる」

俺はシールドを足場に跳び回り、バリアに向かって拳を突き出した。

「喰らえ!!」

バリアにぶつかりると同時に雷は解放され、さらに魔力放出の追加でバリアは砕けた。

「見たか!!サンダーインパクト!!」

久遠と隠れて練習した技はどうだ!!

「スゲエけどさ」

「ネーミングセンスが……ちょっと」

「グッ!」

気にしていたことをヴィータとシャマルに言われた。

「よっしゃ、次私の番や！」

はやてが魔法の準備を始める。防衛プログラムはそこへ砲撃を撃とうとしていた。

「盾の守護獣ザフィーラ！砲撃なぞ撃たせん！！」

「久遠も頑張るよ！！」

ザフィーラの魔法と久遠の雷撃が、砲撃をしようとしていた触手を攻撃する。

「石化の槍 ミストルテイン！！」

はやての魔法が防衛プログラムを石にしたが、内側から脱皮のように再生しやがった。

『やっぱり攻撃したすぐから再生されちゃうよ』

「弱気な事言うなよ、エイミィ！攻撃は通るんだ！！」

「要の言う通りだ！！」

クロノが魔法を発動させる。

「凍てつけ！！」

《エターナルコフィン》

クロノの魔法は周囲の海ごと防衛プログラムを凍らせたが、時間稼ぎぐらいにしかならなかった。だがそれで十分。

「いくよ。フェイトちゃん、はやてちゃん!!」

「うん!!」

「全力全開! スターライト」

「雷光一閃! プラズマザンバー」

「ごめんな……響け! 終焉の笛! ラグナロク」

「ブレイカー」

三人の同時攻撃。流石にこれならコアも露出する<ゾクツ>何で寒気が!? 倒したはずじゃ……

「えっ!? 嘘!?!」

「どうしたのだ、シャマル」

「攻撃が……効いていません」

全員が驚きの表情を浮かべる。あれを喰らって効いていない? そして攻撃が終わり、煙が晴れたそこには……

「何だよ……アレ」

「あんなもの見たことないぞ」

「なんとなく威圧感だ」

「………怖い」

守護騎士たちは驚いているが当然だろう。俺たちも驚いているのだから。

「要！何でアレがいる」

「まさか………ありえない………こんなことが」

「一条知っているのか？」

シグナムが聞いてくる。知っているも何も無い。

「何でORTになれるんだよー!!」

「G Y U i i i i i ! ! ! !」

そこには漆黒のORTがいた。

## AS第九話（後書き）

要、新技習得！！

ラスボス、黒ORT！！

雨「さて、ここから質問コーナー！！」

要・久「わく、ぱちぱち」

雨「記念すべき一つ目の質問。久遠、よろしく！！」

久「はい。Arishia様からの質問で『Strikers』って質問です」

要「一応作者は続けるつもりですよ」

雨「ということでは終わります」

要「一つだけだよ」

雨「まあ、いきなりだったしな」

久「みんな、まだまだ質問してね」

AS 第十話 (前書き)

ORT 対黒ORT

## AS 第十話

要side

「ちょっと、要くん！ORTってなんなん!？」

「バケモノだ!!」

それを内包してるのは俺だけど……

「とにかく止める!!鋼の輓!!」

ザフィーラが魔法を使い、黒ORTを止めようとする。だが

「Giii!!」

脚の一振りで払われる。

「デイバインバスター!!」

「トライデントスマッシュャー!!」

なのはとフェイトの砲撃が当たるも止まらない。って何で俺の方に  
来るの!？

「Gi!!」

「危ねっ!!」

なんとか攻撃を避ける。しかし避けきれず、掠ってしまった。

「いってー」

掠っただけで脇腹が少しえぐられた。すぐ再生したんだが。

「エターナルコフィン!!」

クロノの氷結魔法が発動する。

「Gii!?!」

一瞬だが動きが止まる。

「ラケーテンハンマー!!」

ヴィータのハンマーが当たる。さらにそこへシグナムが追撃する。

「紫電一閃!!」

だがやはり効いた気配はない。

「くそっ!!一瞬で回復しやがる!!」

「.....なんだって?」

「ヴィータ!攻撃が通ったのか!?!」

「あっ?でも回復するから」

「そんなことは聞いてない！！攻撃が通ったんだな！！」

「あ、ああ」

攻撃が通る。つまり外皮がそこまで硬くないということか。しかし ORT の外皮はなによりも硬く、柔らかく、そして鋭いというのに・・・いや、それ以前に俺はどうして攻撃を避けれた？・・・成る程。

「所詮はコピー。しかも30%の」

俺から奪ったリンカーコアは30%、その中からORTをコピーしたんだ。劣化が激しく、弱体化するのも当然だ。それにプログラムごときがアルティメットワンを真似できるはずもない。

「要。どうにかなるの」

「下がってる、久遠」

超劣化コピーといってもORTだ。ならこっちもORTで対応するしかない。

「Gyuiiii!!」

黒ORTが脚を振り落としてくる。

「ORT解放」

だがその瞬間、俺は光に包まれた。そして

「Gii」

(効かねえな)

俺もO R Tになった。

「もう一体出おったー!?つか何!?この空間!?!」

はやてがいいリアクションをしている。この空間とは水晶溪谷のこ  
とだろう。

『はやて、俺だ。要だ』

「へっ?要くん」

そりゃ混乱するよな。いきなりバケモノの変身すれば。

『そつ。これは俺の能力とでも思え』

そんな念話をしていたら黒O R Tが攻撃してきた。軽く防げるけど  
ね。

『ユーノ、アルフ。俺ごとこいつを転送しろ』

「「へ?」

『せ・れ』

「「はい!」」

まったく、早くしないと地球が大変だろう。

「転送!!」

ユーノとアルフが俺と黒ORTを転送する。ちなみに転送中でも戦いは続いた。

(ここが宇宙か……地球は青かった)

軌道に着いてそんなことを最初にそんなことを考えた。

「Gii」

(さて、潰してやるよ)

「Gyuaaa!!」

黒ORTが魔力を集めた。次の瞬間、無数の金色の魔力弾が俺に襲い掛かってきた。

(フェイトのファランクスシフトか。数も威力も桁違いだが)

数は視界全てが金色に染まるほど、威力は一発一発がダイバインバスター並。だが俺は全て無視をし、水晶渓谷を創り直す。これで足場は出来たし、あいつの能力も下がる。

「Gyuiiii!!」

(オラオラオラ!!)

ちんたらやっつたら再生されるからな。とにかく攻撃を続ける。黒ORTも同じような連撃をやってきたが、水晶渓谷で能力の下がっている超劣化コピーとオリジナルでは格が違う。だがよく頑張る。俺がいなければ敵う奴はいなかっただろう。……いや、俺がいなければ生まれなかったか。

「Gi……i……」

黒ORTはもう虫の息だった。だが攻撃は止めない。

「Gyuaa!!」

(まだまだまだ!!)

すると突然念話があった。

『要くん。リンディだけねど』

『何ですか?』

『そろそろアルカンシエルを撃ちたいのだけねど』

成る程、俺が邪魔っていうことか。

『わかりました。俺ごと撃って下さい』

『何言ってるの!?!』

まあ、キチガイの言うことに聞こえるだろうな。だけどきつと大丈夫だろう。

『こいつは攻撃し続けないと再生します。俺なら大丈夫ですから』

『………わかったわ。アルカンシエルの準備を』

『艦長！？』

さて、攻撃を続けるか。もうほとんどコアだけだ。

しかし相手もただでは終わらせない。辺り一帯の魔力が集まる。魔力はなのはたちの同時砲撃以上だろう。それが一本のレーザーとして飛んできた。だが

「Gii」

(残念)

俺はそのレーザーを避けた。そこへアースラからアルカンシエルが飛んできた。

リンデイside

「艦長。本当に撃つのですか？」

「ええ」

これは彼が決めたこと。なら私たちは実行するだけ。

「艦長！アルカンシエル準備整いました！」

「わかったわ。アルカンシエル発射！！」

私は発射キーを回した。その時、防衛プログラムが何か撃ったが外れたようだ。そしてアルカンシエルが直撃した。

「アルカンシエル直撃を確認」

「目標は？」

「えっと、嘘！？生体反応を確認！！」

生体反応？ということとは……

アルカンシエルの余波が消えた跡。そこには所々傷があるが、青白い蜘蛛型の生物がいた。

要side

いってー、とんでもない威力だな。まあ、それを受けきったORTの方がとんでもないが。

俺は撃たれる瞬間、全魔力を防御と再生に回した。そのおかげか、ちよつと傷付く程度で済んだ。

『要くん！大丈夫なの！？』

『エイミーか。元気だよ』

『……………規格外どころじゃないね』

俺もそう思う。それにしても

『俺、どうやって帰ろう』

『安心して、転送するから』

ありがたい。流石に大気圏突破は嫌だ。

そのあとすぐ俺は地球に転送された。転送中、人に戻ることが出来てよかった。ORTのまま地球に戻るのもあれだしな。っとそろそろ着くか。着いたらあれ言わないとな。

「ただいま」

AS 第十話（後書き）

やっとここまで来ました。

AS は残すはエピソード。頑張るぞ。

## ASエピソード(前書き)

AS完結。

応援して下さったみなさんありがとうございます。

## Asエビローグ

要side

俺は戦いの後すぐ寝た。流石にORT同士の戦いは精神的にきたな。

「ふわぁ。よく寝た」

「あつ、要くん起きたんだ。」

「ん？エイミイさんか。おはよう」

「おはよう。よく寝たね。久遠ちゃんはまだ寝てるけど」

いやまったく。疲れたからな。ちなみに久遠は俺の上に乗って寝てる。

「起きたばかりで悪いけど会ってほしい人がいるの」

誰だろう。……………グレアムさんかな？

「失礼する」

「あつ、ちょうど来たみたい」

聞こえてきたのは女性の声だった。

「はじめまして……………でいいか？」

「ああ、はじめまして」

誰だ？どっかで見たことあるような。

「リインフォースだ。闇の書の暴走体として戦ったな」

ああ、成る程。雰囲気の違い過ぎるからわからなかった。ていうかリインフォースって名前だったんだ。

「早速で悪いが頼みがある」

「俺に出来ることなら」

リインフォースが言ったことはとんでもないことだった。

「つまり、お前がいると闇の書の闇が復活する。だからお前を消滅させる……………こついうことか？」

「ああ」

「はやての意思は？」

リインフォースは首を横に振った。ふざけたことだ。

「断る。もしやらせたいならばはやての承諾を得てからにしろ」

「……………そうか」

そう言ってリインフォースは部屋を出ていった。

「エイミー」

「何？」

「あいつを救う。手伝ってくれ」

「えっ!？」

どうなるかはわからない。だがやらないよりはマシだ。

「ここはここいっつのはどこかな？」

「時間がないからな。要らない部分は省いてくれ。俺はここいっつのはわからないからな。エイミーに任せる」

「うん。あっ、それ取って」

「了解」

俺たちは今リインフォースを救うための物を作っている。これで本当に救えるかはやってみないとわからない。

「ここはここで………出来た!!」

「何をしているんだ？君たちは」

完成と同時にクロノが入ってきた。

「クロノ！リインフォースたちは!？」

「もう行ってしまったが」

早過ぎだろ！

「要くん！」

「ああ、行ってくる!!」

俺は走って部屋から出た。リインフォースたちの所へ行く途中はやてがいた。

「はやて！何している？」

「要くん。リインフォースが!!」

主としての繋がりで気付いたか。

「ちょうど同じ相手に用があるみたいだな。ちょっと失礼」

「へっ？それってどういうって、キャア!？」

俺ははやてに横抱き、所謂お姫様抱っこをした。

(身体能力30%解放)

「急ぐぞー！」

「はっ、早過ぎやー！ー！」

見えた！！儀式はもう始まっているか！

「リインフォース！！！」

「お前ら、ちょっと待て！！！」

全員がこちらに気付いて動こうとするが、リインフォースが止めた。

「もう儀式は始まっている。動いては駄目だ」

「アカン！！勝手に消えるなんて許さへん！！聞きわけのない子は嫌いやー！！」

「主はやて。駄々をこねては嫌われてしまいますよ」

「はやての言う通りだ。お前ら勝手に何やっている」

「……………要くん」

「でも……………これは」

はあ、なんで他の可能性を探そうとしないかね。

「はやて。俺の腰のポーチに入っているのを出してくれ」

「わかった」

俺ははやてを抱っこしてて出せないから、はやてに出してもらった。

「何なん？これ」

はやての手には、一辺が3cmほどの黒い箱があった。

「リインフォースを救う物だ」

「なっ！？不可能だ！！」

リインフォースが言う。なんでそんなに諦めるかね。

「不可能じゃない。これは夜天の書からお前の精神だけを取り出す物だ。お前の全てを救うとなると、根本からどうにかしないといけない。だが一部、精神だけならどうにかなる」

「本当に出来るん？」

「出来る。だがチャンスは一回。この儀式が終わる時、つまりリインフォースが消える瞬間だ」

リインフォースが消える瞬間、夜天の書との繋がりが無くなる。その瞬間を狙うのだ。

「リインフォース。これを持っててくれ」

「ああ」

そして儀式は再開された。

「要くん、うまく……いくよね？」

「お前が信じないでどうする。はやて」

「うん。そやね」

うまくいってくれよ。失敗なんて見たくないからな。

儀式はもうすぐ終わる。リインフォースの体と夜天の書が光だした。そして……消えた。

はやての手には十字架が落ちてきた。さあ、どうなった。

「リインフォース。聞こえたら返事しろ」

「リインフォース!!」

《……………》

箱からは声が聞こえない。失敗か？

《……不思議なものだな。体が無いというのも》

「リイン……フォース？」

《はい。主はやて》

「……いよっしゃー!!」

成功だ!! 完璧にうまくいった!!

「要くん!!」

「はやて!!」

「よかったー!!」

俺たちはそう言って抱き合った。周りから視線を感じるが気にしない。

《主はやて》

「何？リインフォース」

《リインフォースという名はあなたの新しいパートナーに使ってあげて下さい》

「どっして?」

《元々主はやてにはそう伝えるつもりでした。消えるはずでしたか

ら。だからその名は使えません。そのかわり、一条。お前が私の新しい名を付けてくれ。新しい人生をくれたのはお前だからな》

俺が？

「いいのか？はやて」

「うん。それがその子の願いなら」

うーん。どごじょじょ。

『なあ、なのは』

『何？ヴィータちゃん』

『あいつのネーミングセンスって』

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・どんな名前付けると思っっ？』

『銀髪だったから・・・・・・・・銀子、とか』

『お前ら黙れ』

『『ヒイイイ！！』』

なんかこそこそしてると思ったら、やっぱり念話してたか。後で何言ってたか問い詰めてやるっ。

にしても名前か・・・・・・・・夜天、天、空

「ディオネ」

《ディオネ？》

「ああ、どうかな」

《ディオネ……か。いい名だ。気に入った》

「じゃあ改めて、これからもよろしくな！ディオネ」

《はい。主はやて》

一件落着だな。さて、俺はあの人の所に行くか。

「どーも、グレアムさん」

「要くんか」

そう、あの人はグレアムさんのことだ。

「すみませんでした。あなたの使い魔を殺しかけて」

「気にしないでくれ。二人共生きているのだから。それに感謝しているのだよ、君たちには」

「感謝……ですか？」

「ああ。よく聞の、いや、夜天の書を止めて、はやてくんまで助けてくれた。本当にありがとう」

「いえ、俺たちはやりたいことをやっただけですから。そういえば、これからグレアムさんはどうするのですか？」

これは単純に俺が気になることだ。

「管理局を辞めて、故郷で暮らすよ。はやてくんへの援助は続けるがね」

「そうですね。……リーゼ姉妹の目が覚めたら呼んで下さい。謝りたいですから」

あくまでただの自己満足だが……

「そうか。わかった」

「では、失礼します」

そうしてグレアムさんの部屋を後にした。そうだ。どうせ局に来たんだから面会でもしていくか。

「面会時間は10分です」

「わかりました。……さて、久しぶりだな。プレシア」

面会するのはプレシア・テストロッサだ。

「何かしら。バケモノ」

あれ？何話しても口を開かなかったのに。まあいいか。

「報告と聞きたいことがあってな」

「……」

「フェイトがリンディさんの養子になるそうだ。よかったな、親離れして」

まあ、確定ではないが。

「……そう」

やっぱり「う」反応か。

「聞きたいことは……俺はあんたを救わなかった方がよか

「ったか？」

俺はフェイトに謝罪させたくて、生きて罪を償わせたくて救った。だが意味はなかった。これなら救わない方がよかったのかもしれない。

「……そうね。少なくとも私にとってこの生活は苦痛よ。アリシアのいないこの生活は」

「なら死んだらどうだ。アリシアに会えるかもしれないぞ」

「死後の世界なんてないわ」

「そうかい」

実際はあるんだが……

「そろそろ時間です」

「わかりました。じゃあな、プレシア。もう会うことはないよ」

「じゃあね、バケモノ。私もそう思うわ」

プレシアはこの一ヶ月後、病気で死んだ。

全部が終わった後は大変だった。はやてが無断外出で怒られたり、アリサとすずかに魔法の存在を教えたり、シグナムに試合申し込まれたり。

まあ、とにかく全てが終わった。しばらくはのんびりしたいな。温泉旅行なんていいな。

??? side

「ドクター。一条要の資料です」

「ありがとう。下がってくれ」

「わかりました」

素晴らしい。人としてはありえない身体能力。異常な魔力。AAAクラスの魔法を受けても無傷の肉体。凄まじい再生力。そしてなにより

「ORT」

どんなデータを調べても出てこなかった異常の中の異常。バケモノ。アルカンシエルの直撃でも多少傷付いた程度。

「欲しいな」

一条要。早く来てくれないかな。

## Asエピソード(後書き)

さて、StSまで何しよう。

日常編でも書こうかな。

そうそう、コラボしたい人や質問がある人はじゃんじゃん感想に書いて下さい。いつでも待ってます。

オマケ6 (前書き)

50万アクセスありがとう

## オマケ6

久「みんな、久遠だよ。今回は50万アクセス記念のオマケだよ」

要「よく出来ました。偉いぞ、久遠」

久「エヘヘ」

雨「ということで今回のスタートは久遠でした」

要「今回はどんなことを書くんだ？」

雨「俺は本編にマテリアル娘たちは出すつもりはないんだ」

要「成る程、だからここで出すと」

雨「まあ、今回出すのは娘じゃないんだが」

要「何？」

雨「もしも一条要のマテリアルがいたら」

久「じゃあ、みんな見てね」

要side

「せいっ!」

「グアッ!」

俺たちは、街にいる闇の書の闇の残滓を片付けている。今倒したのはザフィーラの偽物だ。これで守護騎士の偽物は全て潰したかな。

「要くん、大丈夫?」

「ああ、弱すぎる」

ちなみに今は60%解放状態だ。

「あのね、私たちの偽物もいるみたいで、さっき私の偽物を倒したんだ」

「へ」

「ただ、色も性格も全然違うの。その子が「異能の拳闘士」っていうのが残ってるって」

異能の拳闘士ねえ。

「了解した。引き続き探索を行う」

はやて side

さつき私は「闇統べる王」っちゅう私の偽物を倒した。

「異能の拳闘士か」

私の偽物が最後に言った言葉、なのはちゃんやフェイトちゃんの偽物も同じことを言ったらしい。

『はやてさん。聞こえるかしら？リンディよ』

「はい。なんでしょう」

『あなたのいる場所から西へ200m地点に残滓を確認したわ』  
きつと異能の拳闘士やる。

「わかりました。すぐ行きます」

飛んですぐの場所。ビルの上には

黒髪長髪の男の子が、ビール片手に、相撲観戦をしていた。

なんで？あつ、朝○龍勝った。

「ちよつとええか？あんたが異能の拳闘士やね」

「いかにも、儂が異能の拳闘士じゃ」

爺臭い喋り方やな。

振り向いたその顔は

「要くん？」

「要？ああ、儂のオリジナルのことが」

オリジナルって、今までの残滓は全部自分が本物って感じやったの  
に。

「まあええ、おとなしく消えてもらつて」

私はデバイスを構えて言った。

「もちろんじゃ」

・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？

「ええの？」

「その代わりにオリジナルに会わせてくれんかのお」

その程度なら・・・・・・・・

『もしもし、要くんか？ちょっとええか？実はな……』

要side

ということ目の前に俺の偽物がいる。

「お前さんが俺のオリジナルか。俺に似ていい男じゃの」

「そんなことはいい。で？何をするんだ？」

「試合をしてほしい」

試合？変わった奴だな。

「残滓である俺が、オリジナルにどれだけ近いか確かめたいだけじゃ」

「まあ、そういうことなら」

「要くん、頑張って！」

「要、勝ってね」

「力の差を見せてやりい」

三人娘が応援してくれている。

「ハハハ、モテモテじゃの。……さて、やるか」

「一撃だ」

そう、こいつが確かめたいのは俺の実力。なら一撃見せてやれば引  
つ込むはず。

「いくぞー!!」

異能の拳闘士の拳が俺の腹に入る。この感覚は………浸透  
勁か。

「効かねえ」

「何じゃと!?!」

俺は顎にアッパーを入れてやった。見事に相手は吹っ飛び、立てな  
くなくなった。

「強いのお」

「本気の戦いならどうなるかわからなかったさ」

そう、今のはお互いが一撃を入れることだけを考えたせいだ。避ける気もなく、受け止める気もなかった。だからこんな結果になった。

「いや、俺はもう満足じゃ。ではのオリジナル」

「ああ、じゃあな」

異能の拳闘士は消えた。それと同時に俺は腹を押さえて悶えた。

「痛い、痛い、痛いー!!」

「要くん！大丈夫!?!」

大丈夫なわけがない。浸透勁をまともに喰らったのだから。

《まったく、一条らしい》

ディオネ、黙らっしやい。

久「要、カツコ悪い」

要「ぐっ」

雨「まあまあ、久遠。これはしょうがないから」  
要「お前のやったことだろ！！」

雨「五月蠅いのはほつといて。久遠、終わりの挨拶」

久「わかった！ここまで『チートじゃ済まない』をご覧いただきありがとうございます。これからも見てね」

雨「バイバイ」

## オマケ6 (後書き)

雨「質問コーナー!」

要「今回の質問はJAM様の『なのはの撃墜事件は掘り下げるんですか?』だ」

雨「解答は……俺はその場その場で考えるタイプですのでわかりません!」

要「そういえばORT対黒ORTも七伏様の地球がヤバい発言で、急遽宇宙戦にしたもんな」

雨「そうそう。地球がヤバい?よく考えたらそうだな。よし、宇宙戦にしよう。こうやって決まったからな」

要「ですので、どうなるかは作者次第です」

雨「それでは次回の質問コーナーで会いましょう」

要「質問はどんなものでもOKです」

外伝く俺らのウォーゲーム！> (前書き)

ライ様のリリカルなのは〜黒い聖騎士〜とのコラボです。

外伝<俺らのウォーゲーム！>

神（チートじゃ済まない） side

「うーん、今日は何しよう」

最高神クラスとなると逆に仕事がないんだよね。

「そつだ！要くんの様子でも見よう」

彼最近メキメキ力を付けているからな。

「ん？なんだこれ」

彼の世界に異物が混ざったみたいだな。しかもここは

「ネットワークじゃORTでも手を出せないな」

そついえば最近デジモンの力を持った転生者が生まれたって聞いたな。その子の担当に相談してみよう。

神（黒い聖騎士） side

おめでとう。シードラモンは、メガシードラモンに進化した。

「よくやった！儂のシードラモン！」

「神様」

「なんじゃ。今いい所なんじゃが」

「それが……最高神様が」

「なに！？」

最高神様じゃと！？儂何かしたか？

「やあ、こんにちは」

「この度はどのような御用で？」

「君の担当転生者を貸してほしい」

「一真を？いったい何故。」

「僕の担当転生者のネットワークにデジモンが現れてね。退治を手伝ってほしい」

「わかりました」

「一真と連絡をとらんと。」

『「一真かの？」』

『「あれ？神、どうした？」』

『「実はの……」』

儂は簡潔に事情を説明した。

『わかった。やるよ』

『向こうにも転生者がある。名は一条要じゃ。それと向こうにおねるのは3時間じゃ。では飛ばすぞ』

「お疲れ様」

「いえ」

しかしネットワークにデジモン。まさかあいつかの。

要 side

「要、遊ぼう」

「悪い、久遠。無理」

今日は朝から雪が降っている。俺は寒いのが大の苦手なのだ。

『おい、要くん。元気かい？』

『神様！？』

びっくりだ。いきなり交信をしてくるなんて。

『どうかしたのですか？』

『それがね。君の世界に異物が入ったんだ』

異物……以前のバケモノが思い出される。

『そいつがいるのがネットワークなんだ。サポーターと一緒に退治してくれ』

『はあ、わかりました』

サポーターって誰だろう。強いんだろうな。

「ギヤアアア！！あの糞じじいめー！！」

ドーン

「……………回収に行くか」

一真 side

「ありがとう。助かった」

俺が神に落とされたのを助けてくれたのは、青白い髪の子だった。  
「ここ、翠屋だよな。」

「気にするな。これから協力するんだから」

協力するってことは。

「あんたが一条要か」

「ああ、そういえばお前の名前は聞いてないな」

あつ、忘れてた。

「俺は御剣一真。こいつはデバイスのゼロデバイス」

《よろしくな》

「じゃあこつちも改めて、俺は一条要。こいつが相棒のアリストテレスだ」

《よろしくお願いします》

うわー、礼儀正しいデバイスだな。ゼロにも見習ってほしい。

「いきなりだが、今回の敵について何か聞いたか？」

「いや、まったく。せつちは」

「ネットワークというキーワードしかないな」

ネットワーク………だから俺なのか。

「早くしないと。3時間しかいれないのに」

「………短いな」

そうだよな。一日くらいいいのだ。

「要くん」

………この声は。

「あれ？どちらさま？」

やっぱりなのはだ。ここが翠屋だから当たり前か。

「俺の知り合いだ。それでどうしたんだ」

「そうそう。今世界中で謎のウイルスが広まってて、私のパソコンにも出たの」

謎のウイルス？まさか……！

「なのはちゃん。ちょっと見せてもらってもいいか？」

「いいですけど」

「もしどうにかできるなら、静かに作業したいから部屋の外にいてくれるか？」

「わかりました」

そして、なのはのパソコンにいたのはやはりあいつだった。

「……………クラモン」

「なんだそれ」

要は知らないのか。

「デジモンって知ってるか？」

「ああ、ちょっとは」

「その映画の『ぼくらのウォーゲーム』に出てきた奴でな。異常な繁殖力があって、遊びで核ミサイルを撃つような奴だ」

「なんだと!?!どうすればいい!」

でもネット世界にどうやって入るか。

《何悩んでやがる》

「こいつを倒すにはパソコンの中に入らないと駄目なんだよ」

《入れるぞ》

はっ？何言ってるのこいつ。

《神が今回そういう機能を付けたんだよ》

マジか！！でも要はどつしよう。

《大丈夫だったの。二人入れるからよ》

なら安心だ。

「よくわからないが、ネットの世界に入るんだな？」

「そういうこと」

《アリストテレス。俺にアクセスしろ》

《わかりました》

《・・・・・・・・・・・・・・・・よし。これで入れるぜ》

なら始めようか。

「俺らのウォーゲームを！！」

要side

まさかネットに入ることになるとはな。

「いくぞ！」

一真の声に合わせるようにデバイスが光だして、俺たちはネットの中に入った。

「ここがネットか」

俺たちは今、デジタル的なトンネルを飛んでいる。

「今のうちにセットアップしようぜ」

「そうだな」

「ゼロデヴァイス」

「アリストテレス」

「「セットアップ！」」

《《セットアップ》》

一真は黒い騎士の姿になった。あれが一真のバリアジャケットか。

「あれ？要のバリアジャケットは？」

「俺は体質で張れないんだ」

「《それどんな体質だよ》」

知るか。っと到着かな？

「げっ、もうツメモンになってやがる」

進化したのか。確かに早いな。ダーウィンもびっくりだ。

「面倒だから、始めから全開だ！身体能力100%解放！！魔力100%解放！！アルティメットワン発動！！」

「スゲー魔力」

《お前よりあるじゃねえか》

俺は無数にいるツメモンの中で、集まっている奴らを殴った。

「喰らえ！」

魔力放出も使ったその一撃はツメモンの塊を吹き飛ばした。

「やるな。ならこつちもへブンズナックル！！」

一真の放った光の拳がツメモンたちを吹き飛ばす。

「アリストテレス！シールド二枚！」

《了解》

俺の両手にシールドが現れる。

「？ シールドで何するんだ？」

「まあ、見てな」

(薄く、鋭く)

「シールドスライサー！二連！！」

俺は二枚のシールドスライサーを投げた。スライサーはツメモンたちを切り裂いて飛んでいった。

「シールドを武器にするか？普通」

「なら俺は普通じゃないんだろ」

《おい、もう進化してやがるぜ！》

「うわ、ホントだ」

「早っ！」

ゼロデヴァイスの言う通り、先程までのツメモンとはまた違う姿になっているのがたくさんいた。

「ケラモンだ」

「成る程」

だがまだ弱そうだ。さっさと消滅させてやる。

一真side

おかしい。いくらなんでも進化と増殖のスピードが早く過ぎる。

《一真！なにぼーつとしてやがる！！》

「すまねえ」

とにかく数を減らさないで。

「ガイアフォース！！」

俺のガイアフォースが一気に数を減らす。

「オラオラオラ！！」

要が物凄い速さでパンチを打ち続ける。一発一発にかなりの魔力が籠っているのか、打つ度に大量のケラモンが消滅していく。だがあいつらの増殖スピードはそれ以上だ。

「おい！一真！なんか蜘蛛みたいのが出てきたぞ！」

何！？まさかもうインフェルモンになったのか！？

「うわ！魔力弾撃ってきやがった！」

「ヘルズグレネードだ！気をつける！！」

ん？魔力弾？

「ゼロ、今のは魔力弾なのか？」

《なんだよいきなり。そうだけ》

ということは……

「要！魔力を使うな！多分こいつら魔力を食って成長してやがる」

「んだと！？つと危ね！」

俺はグレイソードで切り裂く。要は魔力を使わず殴り続ける。あいつ、よく完全体を魔力も武器も無しで殺せるな。

「ちょっと済まないが、連絡したい相手がいる。一人で頑張ってくれ」

そう言つて要は戦線離脱した。誰に連絡してるんだ？

《一真！上を見る！》

ゼロがそう言うので上を見ると

「もう登場かよ」

細い腕に巨大な爪。金色の毛に黒っぽい肉体。人型のそれは

「ディアボロモン」

もう魔力うんぬん言っただけねえ。

「オメガモンX抗体!!」

《了解だ!》

俺の両手にグレイソードとガルルキャノンが装着される。

「喰らえ!ガルルキャノン!!」

俺は何発もガルルキャノンを叩き込む。原作ではこれでほとんど倒せた。だが

「嘘だろう」

原作より強化されているのか、増殖スピードがアップしたのか知らないが、まだ半分ほど残っていた。

「ならもういっちょ!!」

俺がガルルキャノンを撃とうとした時、上から無数のディアボロモンが降ってきた。

「チィ!」

これは流石に避けるしかない。

「大丈夫か！？一真！」

要が戻ってきたか。

「遅い！」

「済まない。だがそろそろのはずだ」

そろそろ？いったい何が……するといくらかのディアボロモンが苦しみだした。

「エイミィに増殖が遅くなるプログラムを作ってもらったんだ」  
こんな短時間にか。

「さあ、終わりにするぞ。ORT解放」

要がそう言うと、突然要の体が光だした。そして光が収まるとそこには……………

「何だこいつ！！ゼロ！！何だこいつ！！」

《俺が知るか！！》

40m程の巨大な青白い蜘蛛のような生物(?)がおり、そいつを中心に水晶が広がっていた。

要side

ORTになったら、めっちゃ驚かれた。

『さつさと片付けるぞ』

「要……………か？」

俺以外誰がいるというんだ。

「G y u a a a a ! ! !」

(潰してやるよ! ! !)

俺は一瞬で何度も脚を払った。それにより無数のディアボロモン？は消滅した。

「……………はっ！ゼロ、俺たちもやるぞ! ! !」

《……………おう! ! !》

一真も腕のキャノンを乱射する。大分数も減った。

「要！締めは俺にやらせてくれるかな! ?」

『いいとも』

「いくぜ! ! アルファイノース! ! !」

その瞬間、何があったかわからなかった。ORTである俺がだ。わかったのは最後の一体にトドメを刺している一真の姿だけだった。

「終わったな」

『……………ああ』

最後のは何だったんだ？俺は人に戻りながら考えた。

「おお、戻った」

俺が戻ったことがそんなに意外か？

「今の何だよ」

「そうだな。一真の最後のを教えてくれたら教えよう」

「あー、駄目」

「俺もだ。じゃあ帰るか」

「そうだな」

俺たちは再び部屋に戻ってきた。

「要くん。入るよ」

「ああ」

「今ね、ウィルスが消えたってニュースでやってるよ」  
「そんなことは知ってる。当事者だからな。」

「そうだな。一真のおかげだな」

「ええっ!?!」

「お前も協力してくれたから出来たんだぜ」

「要くんも!?!」

「なのは驚き過ぎ。いや、これが当たり前か？」

「そうだ、一真。あとどれくらいいられるんだ？」

「2時間くらいかな」

「結構あるな。」

「なら三人で遊ぼうぜ。どうせ暇だし」

「クー!!!」

「つと忘れてた。久遠もいるんだった。」

「それじゃ何するよ。ちよつと雪降ってるし雪合戦とか」

「かまくら造れるかな」

「寒いから外出たくない」

「「ええっ!?!言い出しっぺなのに!?!」」

楽しい時間はすぐに過ぎる。

「もうさよならか」

「しょうがない。元々ディアボロン倒す為に喚ばれたんだから」

《でも楽しかったぜ。今度は試合ってみたらどうだ?》

「「だが断る」」

一真の体が光に包まれる。

「っと時間だ。またな要。今度会えたらまた遊ぼうな」

「またな一真。今度は夏に来てくれ」

「出来たらな」

そう言って一真は消えた。

《主》

「また会えるわ」

そう、きつぷ。

外伝く俺らのウォーゲーム！>（後書き）

今回は戦わせませんでした。だって理由がないもん。  
そのかわり協力プレイ！

ライ様、こんなもんでどうでしょう？

外伝く戦場の空想使い(うそつき) > (前書き)

黎音様の魔法少女リリカルなのは〜輝く月の滴〜とのコラボです。

外伝く戦場の空想使い(うそつき) >

要side

今日は久しぶりにアストン夫妻の所にいる。

「だー だー」

「よしよし、いい子だな」

この子は夫妻の娘のミア・アストンだ。産まれたのは4月だ。つまり俺が初めてこっちに来た時あたりにはお腹の中にいたんだな。

あの時カレンさんにジャーマンスープレックス決めただけど……

「よく懐いてるね」

「カレンさん」

「どうだい。その子が16になったら嫁に貰うつもりはないかい？」

「ハハハ……」

この子が16の時には俺28だぞ。

「たった一回り違うだけじゃないかい」

「心を読まないで下さい……」

まったくこの人は。

「要、いるか？」

「いますよ。なんですか？先生」

「ここ最近ある噂があつてな」

先生の話はこうだ。

ある時、一人の女のような男が現れた。そいつは不思議な力を使い、人助けをする。だが全てを救える訳もなく九を救い一を切り捨てる戦いをしていると。まるで衛宮士郎だな。

「目的がさっぱりわからんのだ。殺した者の墓を作ったりするしな」

「で、俺に調査をしてこいと」

「お前なら死なんだろ」

まあ、いざとなったらORITになればいい。しかし不思議な力か……  
……魔導師なのかな？

「こちら辺に出ると聞いてたが……<ゾクツ>来たな。」

「少年、こんな所で何をしている」

銀色の長髪に中性的な顔立ち。間違いないな。

「あんたを捜していたんだ」

「私を？何故？」

「あんたの戦場での行動はあまりに不審すぎる。人助けをするのはいい。だが全てを助けようとする行動は異常極まりない。しかもそんなこと無理と気付いている」

「……私はこの理想を貫かねばならない。邪魔をするのなら、容赦はしないぞ」

止まらないな、こいつは。

「そつかよ。ならやるか？俺の名は一条要だ」

「……ゼフィリス。来い！」

（身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン発動）

「戦場でそんなのんびりしていたら死ぬぞ」

能力の解放が済んでいないが、相手、ゼフィリスは剣で切り掛かってきた。だがまあ、アルティメットワンは発動しているから斬られ

ることはないだろう。

ガキン

「何!？」

「解放完了。さあ始めようか」

俺は殴り掛かったが、ゼフィリスは軽く避けた。そして持っていた剣を投げた。

「壊れた幻想」  
ブローケン・ファンタズム

「なっ!？」

壊れた幻想だと!?!?こいつの行動といい、衛宮士郎の記憶と能力を持った転生者じゃないのか!?!?だがこの程度の威力ではアルティメットワンは抜けない。

「なめるな!」

「くっ!?!」

俺の拳が当たった。ガードされてしまったが、今のは障壁か。

「まだまだ!?!」

俺は再び殴り掛かった。

ゼフィリス side

戦場にいた少年。初めはただの子供だと思った。だがその考えは大きく間違っていた。こいつは強大な壁だ。私が理想を突き進むのを邪魔する。

「オラオラオラ!!」

少年、要は何度も何度も拳を突き出してくる。先程の一撃でわかったが、身体能力、魔力共に上位サーヴァント並にある。しかもランクの低い攻撃は効かない。

一番から三十番まで解放。一つに束ねて撃ち出す!!

「いけ!!」

「ぐう!!」

私のレーザーは要の脇腹を貫いた。どうやら一定以上のランクの攻撃は効くらしい。だがまるで死徒のような再生力で再生した。

「何者だ、お前」

どうやら考えることは同じらしい。しかしこのままでは、じり貧だ。ならば空想で世界を支配するのみ!!

「これでも喰らえ!!」

「鎖!?!」

私は地面から鎖を出し、要を捕らえる。

「この程度!!」

鎖は引きちぎられるが想定内。私は絶世の名剣デュランダルを創りだし、斬ろうとした。

「ふざけるな!!」

しかし要は手から膨大な魔力を放出することによって、斬撃を避けた。

「やるな」

「なにがやるな、だ。空想具現化マイブル・ファンタズムに宝具の創造なんて」

まさか、空想具現化マイブル・ファンタズムに宝具を知っているのがあるとは……

「アリストテレス、シールド」

《了解》

要の手に障壁が現れる。あれで何をする気だ？

「せいぜい驚け。シールドスライサー!」

これは、当たるとマズイな。伏せることによって避けたが、後ろにあった岩が真っ二つに切れていた。恐ろしい技だ。

「何ぼーっとしてやがる。まだ俺の攻撃は終わらんぞ」

その言葉とほぼ同時に青紫の閃光が私の膝を打ち抜いた。私の障壁を貫通して、だ。

「ちっ！」

私は即座に障壁を張り直し、魔力弾を生成する。

「一番から八番、いけ！」

その全てが顔に向かって飛んでいく。

「いまさらこんなm「弾ける」うわっ!?目が！」

今のは攻撃ではなく閃光弾。この隙にあれを叩き込む！

「偽りの力にて狩られよ!!!偽りの月よ!!!」

本物と同等の物を創りだす！

「プルト・ディ・シュヴェスタア」

「何だ………と?」

目が見えるようになったらしいが、もう遅い。  
空想くそによって創りだされた月は要に直撃した。

要side

おいおい、目が見えるようになったと思ったら月落としかよ!!!し  
かたない。

「ORT解放」

ここ最近、よく解放してるな。そんな現実逃避をしながらなんとか耐えた。

「Gii」

(きっつ)

「馬鹿な……タイプ・マアキュリーだと」

驚いてる、驚いてる。今までの攻撃からして型月世界出身っぽいし、他の奴らに比べて驚くのも当然か。

「プルート・デイ・シュヴェスタア!!」

おいおいもう一発撃てるのかよ。

「GYUiiiiiii!!」

(破壊する!!)

俺の脚と偽りの月がぶつかり合う。

「Giiiiiii!!」

(うおおおお!!)

「はあああ!!」

そして決着はついた。偽りの月は壊れ、代償として脚が2本もっていかれた。

ゼフィリスside

勝てる自信はなかった。本物が偽物かわからないが、あのタイプ・マアキュリーが相手なのだ。だが引けない。

「プルート・デイ・シュヴェスタア!!」

私はもう一度、月を創りだす。その精度は今まででトップクラスの空想うつつだろう。

「Gyuuuuuu!!!」

タイプ・マアキュリーが月に立ち向かう。

「Giiiiiii!!!」

「はああああ!!!」

落ちろ、落ちろ、落ちろ、落ちろ!!!

.....だがやはり、タイプ・マアキュリーはバケモノだった。奪えたのは脚2本だけ、いかに優れた空想うつつでも絶対的な暴力には敵わなかった。

「ハア.....ハア.....」

私は倒れた。

要side

脚を再生してから俺は人に戻った。それと同時に凄まじい疲労が襲ってきた。

「ゼエ……………ゼエ……………」

やはりORTといえども二度も月落としが直撃してはキツイな。

「……………さて、どうするか」

俺の前にはゼフィリスが倒れている。ダメージはほとんど与えていないから、月落としの反動だろう。

「……………帰る」

俺が命じられたのはあくまで調査。倒すことでも捕まえることでもない。

ああ、早く帰って寝たい。

外伝く戦場の空想使い(うそつき) > (後書き)

黎音様、こんなもんでどうぞでしょう。

性格や口調がおかしいかもしれませんし、所々オリジナル設定が入っているのでここをこうしてほしい、というのがありましたら連絡下さい。

外伝く万能チートの暴走録く(前書き)

Arishia様の神様の力で異世界へくチートってありますか？  
くとのコラボです。

外伝<万能チートの暴走録>

要side

俺は今、アースラの訓練室でシグナムと試合中である。

「そこ!!」

シグナムが斬撃を放つ。

「甘い!!」

俺が受け流し、シグナムの肩を叩く。

「抜骨!!」

ゴキッ

「くっ!!」

シグナムの肩の関節を外し、蹴りを入れる。

「らあっ!!」

「うわあ!!」

シグナムは見事に吹き飛んだ。

「大丈夫か?」

「ああ、問題ない。それにしても反則だな、その技」

「まあ、奥義だからな」

さっきの抜骨は夢で親父から習ったあの技だ。名前は俺が付けた。

「シグナムも強くなったよな。70%でもキツイ」

「だがお前はまだまだ成長するからな。私が追い付くのは何時になるやら」

そう簡単には抜かれねえ。

「お疲れ様、二人共」

「おう」

はやてが入ってきた。ずっと見てたのか。

《惜しかったな、シグナム》

「まだまだ鍛練が足りんようだ」

「ディオネ、お前から見てどうだった？」

他人の意見は聞いておきたい。

《シグナムの動きの無駄が無くなってきているな。だが一条はデバイスを使っていない。追い付くのはまだ先だな》

流石に的確な判断が出来るな。

<ゾワワ>

「うひゃあ!?!」

「『『?』』」

何だ今の気配は!?!強いんだが、なんていうか………こっつ、とてもふざけた感じだ。すると目の前にピンクのドアが現れた。これは………

「要くん!ど○でもドアや!写メ撮ろ!」

やっぱりそうだよな。っーかはやてはしゃぎ過ぎ。………ドアが開いた。中から男とちっこい女の子が出て来た。

「何者だ、お前ら」

「オッス、俺レイ。よろしくな」

「私はユニゾンデバイスのヴィードです」

………いや、そんな正直に答えられても………

Leiside

暇だな。面白いこと来ないかな。

「そつだー！来ないなら行けばいい！」

「いきなりなんですか、マスター」

「グイド、準備しろ！どこもドア！どこかチートな奴の所へ」

「ということだ」

「………馬鹿か？」失礼な奴だな。俺は頭がいいのに。

「マスター、そういう問題ではないかと」

「いいんだよ。では早速勝負だ！」

「断る」

えー、ノリ悪いな。だがこちらにも手がある。

「ちょっと、狸とおっぱい魔人。こっち来い」

「誰が狸や！！」

「貴様!!」

さあ、来い。……………今だ!!

「封・印!」

「「なっ!?!」」

人質確保。

「あんた!ここから出しい!」

「卑怯だぞ!」

「まあ、待て。かくかくしかじか……………」

「かなめくん、たすけて!」

「いちじょー、かってくれ!」

「何言われた!?!」

買収も終わった。これで邪魔者はいなくなった。

「ここでやると迷惑だから移動するぞ」

ワープ

「なっ!?!」

驚いてるな。それにしても見事に何も無い荒野だな。そうなるように設定したけど。

「お互い準備したらスタートな」

「………わかった」

どんなチートかな、こいつは。

要Side

準備なしで結界を創りだしたり、転移したり、とんでもない奴だな。

「アリストテレス、セットアップ」

《セットアップ》

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン発動」

今は倒すことだけ考えるか。

「おー、結構な魔力じゃん」

せいぜい魔力だけと思っておけ。そういえば、はやてたちがいないな。

「おい、はやてたちは？」

「置いてきた」

成る程。

「グイード」

「はい、マスター」

「ユニゾン・イン」

あれがユニゾンデバイスの力か。

「桜井怜、もしくはレイ・ツアibelだ。行くぞ」

「一条要だ。こい！」

レイは間合いを詰めてきた。かなり速い。

トレース・オン  
「投影開始」

投影魔術！？しかもあの剣は！！

「喰らえ！勝利すべき黄金の剣！！」  
カリバーン

「危ねっ！！」

もう少しで斬られるところだった。つーかいきなりA+宝具使うか！？

「逃がすか！スタープラチナ！オラオラオラ！！」

「なんの！無駄無駄無駄！！」

俺たちは殴り合いをする。こいつ、どれだけの能力持つてるんだ!?

「やるな、生身でスタンドとやり合うなんて。だけどまだ全力じゃないだろ」

「そう簡単に全力なんて出せるか!」

「なら出させるだけ!」

そう言うとレイは手を突き出した。

「スターライトブレイカー!!!」

「二重ルーフシールド!!」

よく見馴れた代物だったから咄嗟に防ぐことが出来たが……

「本当に全力ださないとこれは防げないぜ」

スターライトブレイカーが終わった後、レイの手には三つの筒が組み合わさったような物があった。

「乖離剣エア!?!」

「その通り!!天地乖離す開闢の星!!」  
エヌマ・エリシユ

はあ、なんで最近こんなのばかり……

「ORT解放」

レィs i d e

「殺ったか？」

『殺したら駄目でしょう』

まあ、そうなんだが。当たる直前、急に魔力が上がったから全力出したんだろ。

すると砂煙りの中から巨大な蜘蛛のような生物が飛び出してきた。

「ヴィード、なんでO R Tがいるの？」

『知りませんよ！！何ですか、それ！！』

知らないのか。しかしあいつが出て来ると同時に出来た世界。これが水晶渓谷か。体がだるいな、能力が下げられたか。

「G i i i i ! ! !」

「うわっ！」

あの巨体でこの俊敏性。流星水星のアルティメットワン。

「だけど負けねえ！クレイジーコメット！トウインクルスター！ミックスマスター！プリンセスオブマーメイド！！」

俺はT O D 2最強技を叩き込む。

「G y u a a a ! ! !」

『効いてませんよ!!』

そのようで。

「ならばこれ!溶かしきれ!虹の極光!」

宝石剣ゼルレッチによる魔力斬撃。月落としを押し返したこれなら  
!!

「Gyuiiii!?!」

『やりました!脚を切り落としました……よっ!』

ヴィードの言う通り確かに切り落とした。けど

「再生早過ぎ!!」

切り落とした瞬間に再生した。ああ、もう目の前に。

「Gyuaaa!!」

「ザ・ワールド!!」

あっぶね。もう少しでミンチになってたぞ。

『マスター。謝ったほうが』

「嫌だ!!」

絶対に負けたくない。でも………そうだ!!

「か〜め〜は〜め〜」

『マスター。もしかして』

その時、ザ・ワールドの時間が切れる。俺がいないと気付いたORTはすぐこっちを向いた。だがもう遅い！！

「波ー！ー！！」

俺のかめはめ波が直撃する。だがORTは踏み止まっている。いや、徐々にだが前進してる。

『マスター！』

「わかってる！なら、界王拳10倍だー！！」

ORTは威力の上がったかめはめ波に飲み込まれた。

「やったか？」

『ぶっでしょっ』

かめはめ波の通り過ぎたそこには

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

人に戻った要が倒れていた。

「あー、終わった。もうやりたくない」

『そつですな』

「よし！帰るじー！」

はやてたちにお礼渡さないといけないしな。

要side

「……………うっ」

「要くん大丈夫か？」

ここは……………医務室か。はやてとシグナムがいる。

「レイくんが連れてきてくれたんよ」

レイがか。負けたな、俺。

「ハハハ」

あれだけのチートを見せられたら怒る気も失せる。

「そういえば、迷惑掛けたからってディオネをカスタマイズしていったよ」

《まさかホログラムとはいえ、再び体を得る事ができるとはな》

いきなり、ディオネの姿が現れる。凄いな、箱から映写されてるのか。そういえば

「はやて、シグナム。何を貰った？」

「……………なんのことや？」

「……………しらんな」

ほうほう、言おうとしないか。

「なら後ろに隠している物はなんだ？」

「「ギクウ！」」

こいつらは……………

「身体能力80%解放」

「要くん！落ち着いて！」

「そつだぞ、一条！」

俺が気絶してたというのに……………

「ふざけるなー!!」

ちなみに二人が貰ったのは、いくら食べても太らない薬といろいろな剣だった。

外伝＜万能チートの暴走録＞（後書き）

A r i s h i a様の作品では出ていない漫画の技を使ってしまいました。

というかこれでいいんでしょうか？

何か言いたいことがございましたら、感想までお願いします。

外伝＜異能と異常の輪舞（ロンド）＞（前書き）

秋代様の魔法先生ネギま！〜三人の転生者〜とのコラボです。

外伝＜異能と異常の輪舞（ロンド）＞

神side

「今日も紅茶が美味しい。このお菓子は新作だね」

「はい、その通りです」

「うん、美味しい」

「ありがとうございます」

<ピキーン>

むっ！？なんだ今の感覚は。

「どうなされました」

「ちょっと要くんの世界を見る」

そう侍女に伝えて部屋に戻る。要くんの世界は・・・・・・・・・・・・・・・・  
・・なんだこれは！！

「七夜志貴に尾獣、それに朱い月のブリュンスタッドだと!?!」

流石に要くん一人ではキツイな。天界から応援でも・・・・・・・・こ  
れは。

「別世界からの転移」

かなり強力だ。しかもこの力はアクスレピオス。

「………ストレンジヤー任せてみるか」  
頼むよ、異邦人。

## 要side

今俺は夜の散歩中だ。たまには一人のんびりしたいのだ。

《主、そろそろ》

「もうそんな時間か」

腕時計で確かめると11時、確かにそろそろ帰った方がいい。

「んじゃ、帰る！？　なんだこれは」

《結界ですね》

まったく誰だいったい。とりあえずなのはあたりに念話するか。

『なのは、聞こえるか?』

……おかしい。返事がない。

「アリストテレス。局に連絡してくれ」

《……》

「どうした」

《繋がりません》

成る程、通信系は全て妨害されているのか。

「仕方ない、結界の基点でも《シールド》!？」

アリストテレスが突然上にシールドを張る。そこへ斬撃が一発降ってきた。

「助かった」

《いえ》

「真逆<sup>まひが</sup>、そんな玩具に吾の一撃が防がれるとはな」

なっ!?!?こいつは!?!

「七夜……志貴」

なんでこいつがここにいる!?!?

「吾の事を知っているか、なら話は早い。さあ、殺し合おう」

「アリストテレス！防げ！」

《了解、シールド》

七夜の斬撃をアリストテレスが防ぐ。俺はその間に準備をする。

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン発動」

「おいおい、玩具に頼らず自分で戦ったらどうだい？」

閃鞘・八点衝

無数の斬撃がシールドに襲い掛かる。だが一発も通らなかった。

「アリストテレス、もういい」

《了解》

アリストテレスはシールドを解除する。

「やっと観念したか？ならば………斬る！」

閃鞘・七夜

突進しながらの斬撃。だがその刃は俺を斬り裂くことはなかった。

「!？」

「悪いが、それでは俺は斬れない」

俺は七夜の手を掴み、首を叩く。

「終わりだ。抜骨」

ゴキッ

俺は七夜の首の関節を外した。全身麻痺は間違いないだろう。そして崩れ落ちた七夜は砂のように消えた。

「幻？」

《いえ、確かに実体が存在しました。》

だよな。ならいったい何だったんだ？

《主、巨大な生体反応が九つ。一つこちらに來ます》

巨大な生体反応？今度は怪獣か？

ズーン　ズーン

大きな足音を響かせながらやってきたそれは……………

「亀？」

何と言うか、まんま亀だった。でもどこかで見たとような……………

「おっと」

亀が水を吐いてきた。とりあえず安全そうな甲羅の上に乗ろうと飛び上がった。その時、亀に三本の尻尾が見えた。

「思い出した!!」

こいつNARUTOの尾獣だ!ということは一尾から九尾かよ!!

俺は甲羅の上に乗って攻撃をした。

「シールドスライサー!!」

お馴染みシールドスライサーだが

「硬っ!!」

甲羅を削ることしか出来なかった。

「ならば!!」

頭に叩き込むのみ!

俺は亀、三尾の目の前に立った。するといきなり噛み付いてきたが、遅い。

「シールドスライサー!!」

俺は横に避けて首にシールドスライサーを叩き込んだ。三尾は首から血飛沫を出して絶命……しなかった。

「ちっ！」

三尾は再び俺に水を吹き出してきた。だがそれが最後の一撃だったらしく、今度こそ絶命し、砂のように消えた。

「こんなのがまだ八体いるのか」

おそらくこいつは、その中でもかなり弱い部類に入るだろう。ほとんど本能で動いていたからな。

ニャー

猫の鳴き声が聞こえた。

こんな所に猫なんて………二尾か!!

「フー」

後ろを振り向くと威嚇しながら歩いて来た。するといきなり火を吐いてきやがった。

「ルーフシールド!!」

なのはのSLBに比べたら楽に防げるが………

「アツチイ!!」

魔法じゃ熱は防げませうん。

ブーン

羽音？今度はいったい何だ！！

そこにはカブトムシのような巨大な虫がいた。確か七尾かな？二尾の火炎放射が終わると同時に羽を高速で動かした。

ブーン

嫌な予感がする。俺は二尾の足元を通過して、二尾の後ろに回った。

ドゴッ

「ニャー！？」

何かがぶつかる音と同時に二尾が苦しがあった。ソニックブームか！！

「フリー！！」

ブーン

ありゃ？二尾が攻撃対象を七尾にしちまった。自滅してくれるからいいけど。

<ゾクッ>

《主！》

「わかってる！！」

俺は走った。とにかく走った。そして先程までいた辺りに強力な砲

撃が叩き込まれた。二尾と七尾は死んだか？

『今のを避けるか、ガキ』

「……………九尾」

いや、九尾だけでない。残りの尾獣全てが出てきやがった。……………  
…ORTを出すか。

「ORT解「ああああー！！」はっ？」

空から突然人が降ってきた。漫画じゃよくある光景だが実際に見たのは二回目だ。

「だー！あの馬鹿作者！！寝るって言ったのに無理矢理飛ばしやがって！！！」

メタな発言はこの際無視だ。

「おい、あんた」

「おっ！要じゃん」

「なんで俺の名前を……………」

「あれって、尾獣じゃね？」

無視か。しかも俺を知っている上に尾獣も知っているのか。何者だ。まあいい。

「あれをどうにかするの手伝ってくれ。終わったたらなんで俺を知っているか教えてもらおうぞ」

「いいぞ、なかなか楽しくなりそうだ。そうだ！ORT見せてくれよ！！」

「……もう驚かないぞ。」

「わかった。ORT解放」

「スゲエ、これがORTか」

『おい、あんた。一、四、五、六、八、九。どれがいい』

ちなみに数字は残っている尾獣の尾の数だ。

「じゃあ後ろ三つで」

『わかった。負けるなよ……えーと』

「南武貴史だ」

『じゃ、負けるなよ。貴史』

「お前もな」

さあ、尾獣がどれだけのものか知らないが、ORTに勝てるかな？

貴史side

あいつが要か。作sゴホン、アキラから聞いてはいたが面白い奴だな。

『なにぼーっとしてやがる!!』

「ひょいっと」

八尾が殴り掛かってきた。俺があいてにするのは原作に出た妖狐の九尾と牛と人とタコが合わさったような八尾、そして原作に出なかったナメクジのような六尾だ。

「スネークバイト  
蛇咬」

八尾の腕をちよつと攻撃してみる。すると意外とえぐれた。ただデカイんだよなこいつら。

『があああ!!』

九尾まで攻撃してきた。簡単に避けれるけど。

「来い!海星剣皇!」

俺は神獣騎を召喚する。

「斬罪魔法 黙示録大霊剣!!」

突貫しながらの斬撃。モブ尾獣、六尾と、八尾の一部を吹き飛ばす。あと二!!

「もういっちょ!突神魔法 蒼光彗星!!」

八尾が跡形もなく吹き飛ぶ。これで再生出来ないから、あと一！  
だが九尾はしぶといな、絶対。そういえば、要はどうだろう。

要side

凄いなあいつ。人か？今はとりあえず尾獣をやるか。

俺が相手にするのは一尾、四尾、五尾だ。一尾は有名な砂の狸。四尾は赤いゴリラ。五尾は最もデカイ、イルカと馬が合わさったようなものだ。面倒だし水晶溪谷を発動している。

「Gyuaaaaa!!」

(さあ、行くぜ!!)

四尾が溶岩を吐いて、一尾が風弾を撃ってくるが、無視。一番デカイ五尾を狙う。

「Gyuuuuuu!!」

(オラアア!!)

五尾は避けようとするが、間に合わない。俺の脚が首を撥ねる。四尾の溶岩が俺に思い切りかかる。効かないが目潰しにはなった。まあ、気配でわかるから問題ないが。

「Gyuuuuuu!!」

(喰らえ!!)

四尾は受け止めようとしたが耐え切れず吹き飛んだ。そこへ追撃しようとする、先程の比ではない風弾が飛んできた。

「Giii」

(おっと)

少しよろめいてしまった。四尾はその間に体制を整えた。だが関係ない。今度は一撃だ。

(ギアを上げるぜ)

俺は先程よりさらに速く動き、四尾の心臓を貫いた。そして一尾にも攻撃を加えた。一尾は砂の盾で防ごうとする。だが

「Gyuaaaaa!!」

(甘いんだよ!!)

砂の盾を引き裂き、一尾の腕を落とした。

貴史side

「向こうもそろそろ終わりだな。こっちも終わりにするか。なあ、九尾」

『ふざけるな!!ガキが!!』

そういう九尾の肉体は既にボロボロ、傷がない所などない。

「行くぞ」

俺は瞬時に九尾の下に潜り攻撃を繰り返した。

「ブラッディ・クロス  
赤い十字!!」

『ガハツ!!』

九尾の腹を十字に切り裂く。俺はさらに追撃をする為に手を切る。

「ブラッディ・ランス  
じゃーな、赤い槍!!」

俺の血で出来た槍を傷口に投げ付ける。槍は九尾のどてっ腹に穴を開けた。そして九尾は砂となって消えた。

「終了!!」

「G y u a a a a ! !」

どうやら要も終わったらしい。一尾は細切れになっていた。

「お疲れ」

「ああ、ホントに疲れた」

俺は人に戻った要に声を掛けた。

「……………助かった。俺一人じゃきつかった」

「きつなくても一人で勝てただろ？」

あれだけの力があれば十分勝てただろう。試合ってみてえ。

「さっさと基点壊すか」

「頑張れ〜」

その時だった。

<ゾクツ>

「誰だ!?!」

とてつもない威圧感。尾獣とは比べ物にならない。

「面白い見世物であったぞ。褒めて遣わす」

ビルの上、そこには金色の長髪で白いドレスを着た女がいた。

要side

何なんだあいつは!?!バケモノじゃないか!?!

「そうだな、お前たちに褒美をやるう。土地なぞどうだ?」

ふざけた事を言いやがって。

「ほら、受け取れ」

プルート・デイ・シュヴェスタア」

「これは!？」

「月落とし!？」

「やっぱりか!貴史!壊すぞ!！」

「おう!！」

「ORT解放!！」

「フラッシュ・エア  
赤い乖離剣」

エアまで持つてるのか。色は赤いけど。

「G y u a a a a !！」

（うおおお!！」）

「エヌマ・エリシュ  
天地乖離す開闢の星!！」

俺と貴史の同時攻撃が月にぶつかる。

「G i i i i i !！」

（オラアアア!！」）

「ハアアアア!！」

月は粉々に碎け散った。

「お前、朱い月のブリュンスタッドか？」

貴史が問う。

「いかにも、我が朱い月のブリュンスタッドだ。それにしてもお前たちは本当に面白い」

面白いでかたずけるんじゃないよ。こっちは苦労してんのに。

『貴史、全力を出せ。それまで俺があいつを引き付ける』

「気付かれてたか」

当たり前だ。尾獣三体相手にして息一つ切らせてなかったくせに。

「G y u i i i i ! ! !」

(潰してやるよ！朱い月！！)

「ふむ、タイプ・マアキュリーが相手か。いいだろう、来い」

調子に乗るのもここまでだ！

貴史 s i d e

正直あんまり使いたくなかったけど、要なら大丈夫だろ。

「今こそ・・汝が右手に

その呪わしき命運尽き果てるまで

高き銀河より

下りたもつ蛇遣い座を宿すものなり

されば、我は求め、訴えたり、

喰らえ・・・その毒蛇の牙を以て!!」

「Gyu a a a a!?!」

「ちい!?!」

どうやら相打ちでもあつたらしい。だが今は気にしてられない。呪文を唱える。

「汝が神に、我が身を、捧げん!!」

最後の呪を読み上げると、俺の右手の悪魔の腕が解放された。

「要、大丈夫か?」

『ああ、たいしたことない。それが貴史の力か?』

「まあな」

『凄いな。それなら勝てる』

「貴様、その腕は・・・・・・なんだ?」

こいつの疑問に答えるなら

「お前を倒すものだよ!!」

要side

正直、俺一人だとほぼ同等の力だったからきつかったが、貴史のおかげで楽に済みそうだ。

「喰らえ！蛇咬スネークバイト！！」

「Gyuaaaa!!」

（潰れる！！）

「ぐうつ！！」

流石の朱い月も俺たちの猛攻には耐え切れない。

「貴様ら！星のいぶ」させるか！！」「くつ！！」

今は貴史のフォローに回るか。

「Gyuuuuuu!!」

（オラオラオラ！！）

俺は足元を狙って動きを止める。

「今だ！！蛇殺スネークジエノサイド！！」

「カハツ！！」

貴史の一撃が決まる。さらに俺は追撃する。

「Gii!!」

(そこ!!)

「ゴフツ!!」

俺の脚が朱い月を貫通する。

『貴史!エアを放て!!』

「了解!!赤い乖離剣!!」  
フラッディ・エア

「な……めるな!!」

ビキビキ

こいつ!素手で俺の脚を破壊しようとしてやがる!!

『早く!!』

「もう準備完了だ。喰らえ!天地乖離す開闢の星!!」  
エヌム・エリシュ

「アアアア……」

エアは俺の脚ごと朱い月を飲み込んだ。俺は吹き飛んだ脚を再生させ、人に戻った。

「本当に終わったな」

「疲れ・・・・・・・・た」

もう嫌だ。一ヶ月くらい寝たい。そういえば・・・・・・・・

「貴史、あれ本当の全力か？」

「ぎくう！」

やっぱりか。何となくそんな気がしたんだよな。それに何で俺を知っているかも聞いてないな。

「いろいろ聞かせて」「そろそろ時間だ！帰らないと！！」「あっ！待て！！追い掛けてでも聞いてやる！！！」

だが貴史は赤い槍を使って、空間に穴を開けて逃げた。

「ホントに何だったんだあいつは」

《さあ？》

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「帰るか」

《そうですね》

今度会ったらいろいろ聞いてみよう。会えるかわからないけど・・・

外伝＜異能と異常の輪舞（ロンド）＞（後書き）

秋代様！なんてお題をくれるんだ！！

キャラがどうこう考える余裕がなかったよ！！

ですがまあ、楽しかったですけどね。

俺には貴史は扱いきれません。なので秋代様が要を使ってみませんか？

日常くお薬パニックく(前書き)

レイくんの薬が事件を巻き起こす!!!

## 日常くお薬パニック

はやてside

ん〜。今日もいい天気や。さてと朝ごはんの準備でもしよかね。あれ？なんやこのビン。こんなもんキッチンにあったかな？あつ、手紙が付いとる。なににな

〜この間は迷惑かけてゴメンね。お詫びとしてこの薬をあげるよ。赤いラベルのビンに入ったカプセルは、飲むと見た目が十歳上がる。青いラベルのビンに入ったカプセルは、飲むと見た目が十歳下がる。黄色いラベルのビンと緑のラベルのビンに入った液体は要に飲ませ  
てね

レイ〜

ふえ〜、こらまた凄いものくれたな。早速みんなを呼んでみよ。あつ、要くん用のお薬は隠しとかんとな。

要side

なにやらはやてが面白いものを手に入れたというので、全員集合することになった。

「何だろうね」

「危ないものじゃないといいけど」

「フェイト、あんた何想像してるのよ」

「フェイトちゃんは心配症だね」

「クー」

「流石のはやても危険物を面白いものとは言わんだろ」

そうは言ったものの、俺の嫌な予感は一瞬ビンビンきてる。

「」「」「お邪魔します」「」「」

「クー」

「みんな、いらっしやい。ほな、中入って」

中に通してもらった俺たちはリビングに着いた。リビングには守護騎士たちもいた。

「いらっしやい。みんな」

「オース」

「ヴィータ。ちゃんとしないか」

《全員よく来てくれたな》

「おう、お前ら元気だな」

いやホントに元気有り余ってんな。

「ザフィーラも元気か？」

「うむ」

「一応挨拶しとかないとな。忘れる人もいるかもしれん。」

「それでは、みんなに集まってもらった理由を發表します」

「」「」「くり」「」

「いやいや緊張し過ぎ」

そんな気持ちになるのはわかるが。

「これや!」

はやてが出したのは、赤と青のラベルがついた二つのビンだった。中にはカプセル型の薬が入っている。

「はやて、なにそれ」

「久遠ちゃん、ええ質問や。なんとこれは見た目年齢を十歳変える薬なんや!」

「はやてちゃん、エイプリルフルはもう終わったよ」「流石の私でも騙されないよ」

「はやて、病院行きましょ」

「ゴメン、はやてちゃん。フォロー出来ない」

「みんな酷い!!」

年齢を変える薬?もしそんなものがあるとするれば.....

「はやて。それはレイが作ったのか?」

「ん?そうみたいだよ」

やっぱりか。あの万能チートめ。

「要くん。レイって誰?」

「とんでも野郎。俺なんか比べものにならないくらい」

「そんな人、いるの?」

「いるの」

もう戦いたくない。遊ぶのはいいけどな。

「ほら!要くんもこう言っとなるんやし」

「まあ、要が言うなら」

「そうだね、アリサちゃん」

「それで、どっちがどっちなの?」

「赤が上がって、青が下がるで」

それにしても見た目年齢が変わるのってそんなに面白いかね。

「それじゃ、早速シグナムとシャマルと要くん。青の方飲んでみて」

「ちょっと待て」

俺が青を飲んだら2歳ぐらいになるだろ。

「私、ちっちゃい要くん見たいな」

「私も」

「そうね、面白そうよね」

「かわいいと思うよ」

「久遠も見たい」

こいつらは人の苦労も知らないで。

「まず、シグナムとシャマルが飲め。それからだ」

「ええよ。ほな、二人共飲んでみて」

「わかりました」

「いきます」

ボンッ

飲んだ二人が一瞬煙に包まれたあと、小さくなった二人がいた。

「…………お…………」

「流石レイ」

完全に成功だ。にしても美人ってのは小さくなくても綺麗だな。

「ほな、次やで」

「ちっ」

しょうがないから俺も飲むか。すると俺はさっきのシグナムたちのように煙に包まれて、見事に2歳児になった。

「……………か…………」

マズいこのパターンは!!

「……………かわいい…………」

「助けてヴィータ」

「はっ!?!なんであたしなんだよ!?!」

いや、だってヴィータが一番安全っぽいし。

「要くん、ほらこっち来て」

嫌です。なのはさん。

「大丈夫。なぐんも怖ないよ」

その血走った目が怖いんです。はやてさん。

「ほら、いい子でちゅから」

何故赤ちゃん言葉なんです。アリサさん。

「ジュルリ」

お腹がくつくう鳴りましたか？すずかさん。

「ハアハアハアハアハアハアハアハアハアハア」

怖っ！！フェイトさん怖っ！！すでに変質者じゃん！！

「要、かわいいね」

久遠はまともだね。

「おい！いい加減離れる！！あたしが怖いだろ！！」

「いやーだー！助けてよヴィーター！！」

「くっ……あたしの後ろから出るなよ」

おおーヴィータカッコイイ！！

30分後

ようやく元に戻った。今度ヴィータには30アイスクリームのファミリーパックを奢ってやるわ。

「さあ次やで。今度は大きくなるから問題ないやろ」

まあ確かに。さっきみたいな事にはならんだろ。

「はやく！あたしも！！」

「わかつとるで。ほな、いっせーので」

ボンッ

ほう、やっぱりみんな美人になったな。ヴィータも背が伸びて大人っぽくなったし、フェイトは胸大きすぎだし。

「要………くん？」

「何を言っている、なのは。成長して目が悪くなったか？」

「カッコイイ／＼／」

「あなた一回鏡見なさい」

そうアリサに言われて鏡を見たのだが

「フェイトが言うほどカッコイイか？こんなによくいるだろう」

青白い長髪に185cmくらいの身長。確かに身長は高い方だが、  
今のご時世よくいる。

「そんなことないよ！凄く………カッコイイ／／」

「そやで、フェイトちゃんやすずかちゃんの言う通りや」

そうかな。

「ならばやてはカッコイイと思うか？」

敢えて顔を近付けて聞く。

「う、うん。カッコイイと思うよ／／」

「そうか、はやても綺麗だぞ」

「／／／」

いいね。はやてのこんな反応は新鮮で………はっ！殺気！

「」「」「要<sup>く</sup>？」「」

「ど、どうした。なのは、フエイト、すすか」

「「「少し、頭冷やそうか」「」」

ア—ッ

30分後

「酷い目にあつた」

「要くんが悪いの」

確かにちよつと遊びが過ぎたかな。

「はい、お茶やで」

「ありがとう。そういうえばヴィータと久遠は？」

「さっきのお薬持って何処かに行ったよ」

外で自分の姿を見せびらかしたいんだろ。普段子供じゃないって言うても、やっぱり子供だな。久遠は付き添いかな？そんな事を考え

ながら俺はお茶を飲んだ。

「ぐっ!?!」

なんだ!?!いきなり体の調子が……

「ハア……ハア……」

治まったか。何だったんだ今は。

「……要<sup>くん</sup>……」

「どうし……た?」

なんか怖いよ?目のハイライトがないよ?

「……好き……」

好きって言つて武器構える人間が何処にいる!!

「逃げる!!」

ここは危険だ!

「身体能力50%解放!」

……あれ?

「アリストテレス!セットアップ!」

《主。魔力供給がありません》

何！？こんなことが出来るのは

「レイめ！！」

はっ！シグナム発見！

「シグナム助けて！！」

「……………一条」

あれ？

「その首だけでいい。私と共に過ごそう」

そう言ってシグナムはレヴァンティンを振りかぶった。

「セイツ！！」

「なんの！！」

八神家は危険だ！外に出ないと！！

「アクセルシューター」

「プラズマランサー」

「シュート！！」

「ファイア!!」

あいつら本気で攻撃してきやがった!

チュン チュン

掠ってる! 掠ってる!

「許せよ!!」

俺は懐からあるものを出して投げた。

カッ

投げたものが光った。俺が投げたのはスタングレネード。これで時間稼ぎは出来た。

俺が急いで逃げた先にあつたのは公園だった。そこには大人なヴェータと子供に変化した久遠がいた。

「何してんだ、要」

「要、疲れてるね」

この二人は大丈夫か？

「要くん。何処なの？」

「げっ！」

もう来やがった。早いなあい。

「要、こっちこい！！」

突然ヴィータが俺を引っ張った。そしてそのまま路地裏に逃げ込んだ。

「ここなら来ないだろ」

「久遠置いてきたけどいいのか？」

「要はそんなの気にしなくていい」

「どっついうこくチュ>ん!？」

ヴィータにキスされた!？なんかクチュとかチュパとかいってるし  
!!

「ぶはっ、要はあたしのものなんだ。だから他の女の事なんて気に  
しないでもいい」

「お前!!いきなりどうした!!」

「どうしたもこうしたも、あたしは前からこうだ」

嘘だ！！誰か助けて！（性的に）食べられる！！

バチイン

「あつ」

今は、雷？なら……

「要！大丈夫！？」

久遠！来てくれた……あれ？目のハイライトが……

「とんだ泥棒猫だね。私の要に手を出すなんて」

嫌だ！こんな久遠嫌だ！夢なら醒めて！！

「もう大丈夫だよ、要。私が守ってあげくドゴツ>クー！」

何かが飛んできて久遠にぶつかり、久遠は気絶した。

「要様！大丈夫ですか！？」

「ノエルさん！？」

何でここに、でも油断するなよ俺。もしかしたらノエルさんも……

「安心して下さい、要様。私は人ではありませんので」

あっ、そうか。

「これを」

ノエルさんから渡されたものは一つのビンだった。

「何ですか？これ」

「忍様がお作りになつた解毒剤です」

忍さんスゲエ！！ってなんでそんなものを。

「先程、すずかお嬢様から要様を捜している、との電話がありました。ただその時のお嬢様の様子がおかしかったものですから。はやて様の御自宅へ調査に参りまして、そこにあつた薬品から作りました」

「その薬品っていつのは？」

「飲んだ人物を見た異性を惚れさせるものと、異性を狂化させるものです」

レイ！！！テメエ！！！ぶん殴る！！！とりあえず解毒剤を飲むか。

こうしてなんとか薬事件は終わった。

後日談

「ようつヴィータ、おはよう」

「っ!!!!／／／」

あっ、逃げられた。

「ヴィータも大変やね。いくら自分の意思やないからってキスして、その記憶が残っとるんやから」

「お前の責任だろー!!」

「痛い痛い!!!!ぐりぐりはやめてー!!!!」

日常くお薬パニック>(後書き)

要「疲れた」

雨「お疲れ様」

要「レイの奴とんでもないもの送りやがって」

雨「ちなみに次回もレイの薬だぞ」

要「なんだと!?!」

雨「なんと被害者は・・・・・・・・次回を見て下さい」

ロザリニールの薬が再び問題を起こす！

レイの薬が再び問題を起こす！

## 日常くザフィーラの憂鬱

はやてside

ふー、この間は大変やったな。なるべくああいうものは気をつけんな。

ん？また机の上にビンが置いてある。

「この間の薬はどうだった。今回は以前作らなかったけど送らなかった薬を送るよ。」

効果は性転換。持続時間は一日。面白く使ってね。

レイ

「どないしよう、これ」

効果がわかつとる分、楽やけど。

「主、どうかされましたか？」

「ザフィーラ」

「！！そや！ザフィーラに飲ませよう。誰にも迷惑かからんしな。」

ザフィーラside

何やら主が悩んでおられる。先日の惚れ薬事件の事だろうか。あれはシヤマルと共に散歩に行った後に起こった事だからな。

「大丈夫だよ。そや！お茶でも飲もか」

「いただきます」

まあ、女性には女性の悩みがあるのだろう。

「はい」

「ありがとうございます」

ふう、今日も主のお茶はうま！？

「ぐう！？」

「ザフィーラ！大丈夫！？」

はあはあ、何だったのだ今のは。

「ええ、問題ありません」

むっ？何やら声の調子が………主は呆然としているな。何故だ？

はやてside

ザフィーラが苦しみだしたら、ザフィーラの姿が変化しだした。そして見事な美人に変化した。

褐色の肌に白い長髪。締まった四肢にシグナムと比べても謙遜ない胸  
ザフィーラ、恐ろしい子!!

「なっ!?!なんだこの体は!?!」

ああ、揉んでみたい。

「主! いったいこれはくむにゅくうわあ!?!」

凄いわこれ。大きいのにこんなにしっかり張りがある。

「あ、主! やめ、あっ! いけま、ひっ!」

ふう、満足や。

「はあはあ」

「最高やったでザフィーラ!!」

「何がです!!」

その胸に決まっつとるやる。

「五月蠅いな。って誰だお前!」

「ヴィータ、みんなを連れ来てくれへん?」

「? わかった」

ザフィーラ side

家族全員集まったの会議が始まった。

「なあ、はやて。こいつホントにザフィーラか？」

「うん。レイくんの薬だな」

「彼の薬ですか」

《ザフィーラ、運が悪かったな》

前回から主たちが言っているレイとは何者なのだろう。

「シヤマル、診断結果はどうだ？」

俺はさつきから診断をしてきているシヤマルに尋ねた。

「完全に女性の体ね。犬耳や尻尾は無くなって、動物型にはなれないけど」

「そうか」

何故こんな事に……

「ザフィーラ」

「……何です、主」

「そつ怒らんと」

こんな事されれば誰でも怒ります。

「でなザフィーラ、ちょっと要くんの所に行つとつてくれん？」

「何故です？」

「要くんならいろいろ知つとるやろ？」

確かにあいつなら何か知っているかもしれないな。

「私たちは私たちが調べるから、な」

「わかりました。では行ってきます」

どうなるのだろうか、俺は。

シグナムの服を借りて街を歩いているが、周りから視線を感じるな。  
シグナムも普段着ているものだからおかしくはないと思つが・・・

「ちょっと姉ちゃん、暇そうだね」

「俺たちと遊ぼうぜ」

これがナンパとやらか。要はもう絶滅危惧種とっていたが。

「悪いが貴様らに付き合っている暇はない」

「ヒュー、カツコイイ」

「大丈夫だつて楽しいからさ」

成る程確かに絶滅危惧種になるはずだ。

「失せる」

「姉ちゃん、あんまり調子に乗っていると」何してんだ「あ、っ!?!?」

「一条」

「どちらさん?」

「ああ、これではわからんか」

今は女だったな。

「無視すんじゃないねえ!?!」

向こうから仕掛けてきたのだ。正当防衛だろう。

「オラァ!?!」

「フッ」

「へっ？」

殴り掛かってきた男を投げ捨てる。

「ぐえ！」

要も終わったようだな。

「まったく、何やってんだ。ザフィーラ」

「！？ わかるのか！？」

「戦った仲だぞ。動きを見ればわかる」

ふむ、確かにその通りだな。

俺たちは喫茶店に場所を移して俺の事情を話した。

「またレイか」

「それでどうにか出来るか？」

「無理。俺は補助系はさっぱりだもん」

「そうか」

何となく予想はついたがここまできっぱり言われるとな。

「まあ、今日一日だけなら楽しめよ。普段ははやての護衛してるん

だから、たまの休日とでも思ってたさ」

「そう、だな」

少し変わった休日とでも思うか。いや、少しではなくかなり、か。

「なら行くか」

「そうだな」

こんなにもいろいろな事をしたのは初めてだな。特にジムはよかった。今後も通うことにしよう。

「たまにはいいだろ？」

「そうだな。これで男だったら最高だったろう」

「ハハハ」

「そうだ。家に来てくれ」

「何でだ？」

「主を叱ってくれ」

主は今回も前回は後先考えなさすぎだからな。

「了解」

「ごめんなさーい！ー！」

「許す訳ないだろうが！ー！」

日常くザフィーラの憂鬱 (後書き)

今回はザフィーラ女体化というとんでもジャンルに手を出しました。  
正直うまくいきませんでした。

まあ、次回頑張りますか。

外伝<究極と聖騎士と合成>(前書き)

ライ様からの頼まれもの(?)です。

外伝<究極と聖騎士と合成>

神side

おや？この感じは……

「あっちゃー、また異物が入ったな」

今回は要くん一人でも何とかかなりそうだけど。

「そうだ」

どうせだからまた彼を連れてこよう。

「こんにちは」

「誰だ！？」

「神です」

「神？でも俺の知ってる神と声が違うけど」

そりゃ神だって一人じゃないからね。

「神は神かみ□1156万人だよ」

「多っ！ー！」

「君には要くんの所へ行ってもらおうよ」

『また?』

そつえば彼の世界じゃこつちほど時間が進んでないんだつた。

『頼むよ』

『まあ、また友人に会えるなら』

よかつた。

『じゃあ送るね』

『えつ?まだ準備が』

そんなの気にしなうい。

『えい!』

『馬鹿ヤロー!!--』

要side

「要く〜ん、早くやる〜」

「今行く」

高町家は今、海に遊びに来ている。やっぱり夏は海だな。

「いくぞ」

「こい、兄さん」

現在はビーチバレー中、チームは俺となのは対兄さんと姉さんだ。

「要くん、頑張つて！」

「恭ちゃん！そこだよ！」

まあ、基本的に俺対兄さんなんだが。

「隙あ」あの馬鹿神めー！！」「りゃ？」

ドッポーン

「」「」「」

あれー真だよな。

「拾ってくる」

「」「」「」

何でまた降ってくるかね。

ー真side

「助かった」

「どうした。また落ちてきて」

「大丈夫ですか？」

こっちだつてまた落とされるとは思わなかった。

「はあ、今回の敵の情報何かあるか？」

とりあえず聞いてみるか。

「いや、情報どころかお前が来ることさえ知らなかった」

神め、仕事サボったな。

「要くん。敵つて何？」

「前回のウィルスみたいな奴だ」

「へ〜」

まっ、とりあえず。友人に会えた事を喜ぶか。

「遅くなつたが、久しぶりだな」

「ああ、久しぶりだ」

「みんな〜。お昼御飯よ〜」

「「はい」」

これってお呼ばれしていいのか？

「ほら、一真くんも行い」

この家族は遠慮してもは駄目だしな。

「じゃ、お邪魔します」

「一真くんはこの前の冬に遊びに来てたんだ」

「一日だけですけど」

あれは大変だったな。あんな奴もう相手にしたくないな。

「一真くんは鍛えているのか？」

恭也さんが聞いてくる。

「まあ少し」

「一真、ちよつといいか？」

「ん？いいぞ」

どうしたんだろう。俺と要は別の場所に移動した。なのはもついできてるな。

「はあ、なのは。こっちかい」

「にははは、やっぱり気付いてた？」

「当たり前だ」

この世界のなのははべったりじゃないから、無理矢理ついでこよう  
としないよな。

今はとりあえず要の話を聞かか。

要 side

「要、それで何の話だ？」

「ああ、実はさっき神様から連絡があつてな」

俺もいきなりで驚いた。しかも俺の知ってる神様じゃなかったから  
な。

『聞こえるかの』

突然頭の中に声が響く。

『！？ 誰だ』

『神じゃ』

『へっ！？』

神様！？でも俺の知ってる神様じゃないんだが……

『これから今回の敵について教えようと思っただけ』

『本当ですか！？』

よかった。情報無しだとキツイからな。

『今回の敵の名は「ミレニアモン」合成型のデジモンじゃ』

またデジモンか。

『何か対処法は？』

『特にないの』

マジか！？

『まあ、おぬしらなら大丈夫じゃろ。頑張ってくれ』

「という感じだな」

「それ多分俺の方の神だわ」

成る程、だから違ったのか。

「しかしミレニアモンか」

「強いのか？」

「よく知らないけど無敵の力を持つてるとか」

無敵、ねえ。無敵なんて言葉じゃ表せない相手と戦ってきたからな。

「ねえ、要くん。デジモンって何？」

「ん、何て言うか」

俺がなのはに説明しようとしたその時

「「「結界!?!?!」」」

突然張られた結界。いったい誰が……

「要くん!あれ!?!」

なのはが指差す先。そこには一本の大砲を背負ったよくわからない生物がいた。

「あれがミレニアモンだ！」

「あれがか」

確かに合成だ。あれは。

「ゼロデヴァイス！」

『やっと出番かよ』

「アリストテレス！」

『いつでもいけます』

「レイジングハート！」

『はい、マスター』

「『『『セットアップ！』』』」

『『『『セットアップ』』』』

全員がデバイスを起動させた。

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン発動」

俺は能力を解放する。

「一真！」

「おう！」

俺と一真は攻撃を開始する。

「シールドスライサー二連！！」

二枚のシールドスライサーが飛んでいくが、表面を切り裂いただけだった。

「俺はこれだ！ブリットハンマー！！」

一真がりボルバーのようなハンマーで殴り付ける。巨大な爆発が起こったが、こちらもたいしたダメージはなさそうだった。

「グオオオオ！！」

ミレニアモンが大砲にエネルギーを集め、発射する。そのエネルギー砲が俺に飛んでくるが、遅い。

「当たるか！」

避けた俺は再び攻撃を始めた。

なのはside

二人共凄い。要くんは闇の書事件以来戦ってるのを見るのは初めてだけど、あの時より強くなってるし、一真くんも凄く強い。

「崩拳、喰らえ!!」

「ギガブラスター!!」

《マスター、私たちも負けていられませんよ》

「そうだね!」

よし、頑張るぞ。

「アクセルシューター、シュート!!」

8発の魔力弾が飛んでいくけど全部弾かれる。そしてあの怪物は泡のようなものをだす。

「タイムアンリミテッドだ!!それに触るな!!」

とりあえず空に飛んで逃げよう。すると怪物は私に大砲を向ける。

「させるか!!」

要くんが怪物を蹴り飛ばしたおかげで狙いがずれて、私の横を砲撃が飛んでいった。私、邪魔かも。

一真side

「ゼロ!神槍グングニル!!」

『わかったぜ!』

喰らえ、デュークモン クリムゾンモードの必殺技!!

「クオ・ヴァデイス!!」

俺は神槍グングニルを投げ付けるが、これでも倒せない。

「ニードルガン!!」

要も針のようなものでミレニアモンの目を狙い撃つが効かない。

「要、あの蜘蛛みたいなのは」

前回、ディアボロモンを蹴散らしたあれだ。

「なるべく使いたくない」

そうなのか。まあ、仕方ないか。

「一真、あれ合成体なんだろう？」

「そうだけど」

「合成前に戻すとか出来ないのか？」

そんなこと………待て、あれなら。

「ちょっと待っててくれ!」

「おっ」

俺はエルダーサインを使い神と交信する。

『どうしたかの』

『ラプラスの魔を使わせる』

『しかしミレニアモンじゃろ?』

『近くになのはもいるんだよ』

もし俺と要だけなら使わなかっただろうが、なのはがいるなら別だ。怪我をされたら困る。

『うーむ……………わかった。許可しよう』

よし!それじゃあ早速

「ラプラスの魔!」

アカシックレコードに接続!過去を書き換える!

するとミレニアモンの体が光だし、2体のデジモンに別れた。

「成功!ムゲンドラモンとキメラモンになった!」

「よくやった、一真!」

「俺はムゲンドラモン、機械の方をやる。要はキメラモンを頼む!」

「了解！」

さて、時間もないしさっさと終わらせるか。

「ドラゴンキラー！」

ウォーグレイモンの対ドラゴン最強技を放つ。それによりムゲンドラモンは一撃で沈んだ。

要side

何やったかはわからないが、一真がうまくやったんだ。俺も頑張るか。そうだ、なのはにも出番をやるう。

『なのは、スターライトブレイカーを撃て。殺傷設定でだ』

『えっ！？でも』

『安心しろ。死んでも消えるだけだ』

『………わかった！』

よし、なら時間稼ぎか。

「オラアー！！」

俺が殴ると外皮が割れた。俺はどんどん殴り続ける。

『要くん、どいて』

俺はそれを合図に後ろに走る。

「スターライトブレイカー!!!」

そして放たれた桃色の砲撃が敵を跡形もなく飲み込んだ。

「お疲れ様、一真」

「お疲れ様、要」

あーめんどかった。

「要くんはいつもあんなのと戦ってるの?」

「別にいつもじゃないけど、さっきの以上と何度も戦ってるな。ゼ  
フィリスもさっきのと比較にならん強さだぞ」

「あの人も?」

「いるんだな、そんなの」

その時、一真の体が光だした。

「もう、か」

「一真くん！どうしたの！？」

あっ、なのはは見るのは初めてか。

「一真は帰るんだよ。元の場所に」

「……………また会える？」

「大丈夫。今回も会えたる！」

「うん！」

そっだな。今度は何かあるかわからないが、また会えるだろう。

「またな！二人共！」

「ああ！」

「またね！」

こうして事件は解決した。

外伝<究極と聖騎士と合成>(後書き)

ミレニアモンってよくわからなかったんだよね。情報も少ないし。しかも今回ミレニアモンに必殺技を使わせれなかった。まだまだ自分には未熟だな。

ライ様とりあえずこんなもんでご勘弁を。

外伝＜要の苦行＞（前書き）

A r i s s i a様とのメールのやり取りから始まる物語

## 外伝<要の苦行>

要side

あー！もう！何でこんなことしなくちゃいけないんだ！！  
俺は今とはある龍と戦っている。龍の名は

ミラボレアス

ミラバルカン

ミラアンセンス

モンスターハンターを知っている人なら知っているラスボスのモンスターだ。

「キユオオオオ！！」

アンセンスが雷球撃ってきた！こんなことになったのもArisia様とこっちの作者のせいだ！！

簡単に経緯を説明するところだ。

前にあった二つの薬事件を覚えているだろうか。あの時、うちの作者がちよつと俺の装備作製依頼もレイにした。すると流石万能チート、来るわ来るわとんでも装備が。ただ俺はそれらを使えない。するとレイ、いや、ドSレイ様が俺を鍛えると言い出し、これは卒業試験ということだ。

試験の制限は

ORT禁止

シールドのみで一枚は足場専用

一撃で倒す

無理じゃね？

「これなら朱い月の方がマシだー!!」

いくら能力100%解放状態だからって無理は無理!!

「ギユアアア!!」

あっ、雷撃と隕石。

「アリストテレス」

《シールド》

この程度なら軽いか。ボレアスの噛み付き攻撃もきた。

「遅いな」

「なんだか逃げ回るうちに余裕も出来てきたぞ。でもどうしよう。撃で倒すなら頭かな、やっぱり。」

「グオオオオ!!」

三体同時攻撃がきた。連携取れてるなこいつら。

「ルーフシールド！」

俺は火球やら雷球やらを受け流し、すぐに跳んだ。シールドを作っては消し、作っては消し、そうして空中を跳び回る。幸い相手の動きは遅い。俺はその間に武器を作る。

「アリストテレス」

《シールド》

「薄く、鋭く」

普段ならこれでシールドスライサーの完成だが、まだこれでは足りない。

「さらに薄く、さらに鋭く」

これでいい。強度は凄まじく脆くなったが、切れ味は凄まじく上がった。例えるなら日本刀だな。まずはボレアス。

「喰らえ」

俺はボレアスの頭に近付き、シールドスライサーを押し当てる。確実に倒すには投げるより自分の手だ。

「ギユアアアア!?!」

ボレアスは頭を振るが、俺はしっかり掴まっている。そう簡単には落ちない。

「ギ・・・・・・・・ア・・・・・・・・」

ズーン

まずは一匹。

「グオオオオ!!」「」

バルカンとアンセンスは再び隕石と雷撃を落としてくる。落ちる所が光るので避けるのは容易だ。しかし俺の自力も大分上がったな。あの一週間の拷問、修行もドSレイ様の趣味じゃなかったというところか。

さあ後はやることは同じだ。俺はもう一度シールドスライサー（改）を作る。

「ほらよ!」「」

「グオオオオ!?!」「」

俺はシールドスライサー（改）を頭に叩き込む。少しするとバルカンの動きは鈍くなり、そして

「グ・・・・・・・・ア・・・・・・・・」

ズーン

二匹目もこれで終わり。ラス1だ。

俺はさっきまでと同じ様にアンセンスの頭に掴まったが

バチィ

「いつつ!」

こいつ、全身に電気を纏わせやがった!

「アリストテレス、どうする?」

《主がバリアジャケットを纏えばよかったです、投げるしかないかと》

そうだよな。でもボレアスもバルカンも押し当て続けたから倒せたんだよな。一撃で倒すためには押し当てないと。でもそのためには乗らないと……シールド。俺のレアスキルは……形態変化。……よし。

俺はアンセンスの上に移動して足場のシールドを加工した。

「柔軟に」

するとシールドは布の様になり、アンセンスの首にかかった。俺はその上に乗り、頭にシールドスライサー(改)を叩き込んだ。

「グオオオオ!」

「終わりだ」

「グ……オ……」

ズーン

終わった。これでようやく拷問、修行から解放される。新しい魔法  
く名付けるとすれば「ベールシールド」くも出来たからな。そうい  
えば

「どつやって帰るっ」

その後しばらくしてから神様が拾いに来た。

外伝＜要の苦行＞（後書き）

要パワーアップ！

次は日常編です。

日帯く管理局を見学しよじつゝ(前書き)

入局の前に要くんが見学します。

## 日常く管理局を見学しよう

要side

闇の書事件から半年。俺は局にいる。

「クロノ、久しぶり」

「ああ、久しぶりだな。元気だったか」

「ぼちぼち」

いきなりだが俺は局に入ることにした。どうせなのはも入るから先に下見をしておこうと思ってな。

「君の戦い方では陸に所属する事になるだろうな」

「まあ、どこでもいいさ。マイペースに頑張るさ」

どの部署に所属してもやることは同じようなもんだからな。

「そうか。ではまず何処から見る」

「任せる」

やっぱり職場の事は職場の人間に任せるのが一番だ。

「なら武装隊から見るか」

「おう」

「武装隊は主に戦闘をするからな。君にはピッタリだろ」

「まあな」

すると誰かが近付いてきた。

「要、どうしたの？」

「珍しいねこんな所で」

「フェイトにアルフか。ちょっと見学にな」

そういえば二人がいるのは当然か。クロノの家族なんだから。

「要、ここが訓練施設だ」

へー、ここがね。結構広いな。すると責任者っぽい人が話し掛けてきた。

「ハラオウン執務官、どうなさいましたか？」

「今度局に入る僕の知り合いの見学だが、いいかい？」

「よろしくお願いします」

「そうですか。どうぞ見ていって下さい」

軽く訓練を見させてもらったが、随分と質が低いな。

「フエイト、どう思うっ？」

「どつって、頑張ってると思うよ」

うーん、この一年で俺の実力が上がったって事かな。

「この中で一番強い新人は？」

「あそこにいるジャック・マクラーレンです」

あの程度が、か。これならなのはたちの方が上だ。

「クロノ、もう行こう」

「もういいのか？」

「見ても意味がない」

さて、この挑発に乗ってくるかな。

「どついついことですか？」

きたー！

「俺の為にならない」

「なら戦ってみますか？」

これである程度、局の教育レベルがわかるかな。

「おい、要」

「ねえ、要」

「なんだ？クロノ、フェイト」

「やり過ぎるなよ」

「いじめちゃ駄目だよ」

こいつらこんな性格だったっけ？つーか俺の心配は？

「あんたより相手が心配だよ」

アルフまで……………

「ふん、君が僕を倒すというのか」

俺が戦うジャック・マクラーレンは典型的なモブ天才キャラだ。

「はいはい、御託はいいからやろうぜ」

俺は構える。

「君はデバイスはどうした」

「必要ない」

「……………なら使わせてやろう!」

《主、いけません》

ん？アリストテレスが反論とは珍しい。

《弱い者いじめはいけません》

アリストテレス、お前もか……………

「いくぞ!」

相手が持っているのは剣型デバイスだが、まったくくなってない。俺は振り下ろされる剣を避け、右肩と右膝を叩く。

「抜骨」

ゴキ ゴキ

「ギヤアアア!!!」

うるさいな。関節を外しただけなのに。

「クロノ、終わったぞ」

『やり過ぎるなと言ったる』

「関節を外しただけだ」

『それがやり過ぎだ』

そんなことないだろうに。

「要、ジュース飲む？」

「ありがとう。フェイト」

「圧倒的だったね」

「そりゃそうだよ、アルフ」

あいつには圧倒的に経験が足りない。訓練じゃ一番強くても、実戦じゃ役に立たない。

「次何処行こうか、クロノ」

「無限書庫にでも行くか」

無限書庫？確かユーノがいる所だっけ。

「フェイトとアルフもくるか？」

「うん」

「やることないしね」

とついでに無限書庫にいるのだが

「忙しそうだな」

「普段からこんな感じさ」

向こうから誰か飛んでくる。あれはユーノか。

「いらっしやい。要、フェイト、アルフ」

「元気そうだな。ユーノ」

「そうでもないよ。クロノのせいで無駄に仕事が多いからな」

「そう言っつな。仕事があるのはいいことだぞ」

俺なんて前世でクビになったからな。

「そういえば要は何処に所属するの?」

「さあ、クロノが言うには陸だろうって」

「妥当だろ?ユーノ」

「そうだね」

あれ?フェイト、なんか考え込んでるな。

「どっした?フェイト」

「陸って厳しいって聞くよ?」

厳しい、ね。厳しいのレベルがわからんが、ドSレイ様レベルじゃないだろ。

「そうだな。だが要なら大丈夫だろ」

クロノ、よくわかってる。

この後いろいろな場所を見て回った。なんか武装隊の新人最強を倒したということであるいろいろな所から勧誘された。

「面倒だったな」

「君が悪い」

違う！弱いあいつが悪い！

「まあ、君のような戦力が来てくれるのは心強いよ」

「そうか、ありがとう」

この後、俺となのはは入局する。

日常く管理局を見学しよう。(後書き)

次何しようかな。

テキストに入局後の日常でも書くかな。

## 日常＜入局後の日々＞（前書き）

イベントをおおざっぱに進めていきます。

## 日常＜入局後の日々＞

要side

入局から半年、それぞれが自分の分野で成果を挙げている。俺は陸曹長になっていた。早過ぎなきもするが、理由がある。

「一条曹長、仕事です」

「あいよ、ターゲットは？」

「龍2体です」

これが俺の主な仕事。暴走したものを鎮静化させるのだ。まあほとんどが龍とかの魔法生物だけど。なのはたちみたいに資格を取れば曹長までになる余裕はなかったろう。あとクロノたちの推薦のおかげもあるな。

「グオオオオ！！」

めんどくさいな竜、しぶといからな。

「みんな！一条曹長が来てくれたぞ！！」

『うおおおお！！！』

凄い声援だな。

「とりあえずやりますか」

《そうですね》

俺はシールドを三枚作る。

「ルーフシールド」

竜どもの火炎を受け流しながら、残り二枚を加工する。

「切り裂け、シールドスライサー（改）二連」

火炎が終わった瞬間、シールドスライサー（改）を竜の首に投げる。

「ギヤアアア!？」

むっ！一体しか当たらなかったか。

「グオオオオ!!!」

残った一体が再び火炎を吐いてくるが、遅い。

「身体能力30%解放」

俺は竜に近付き、竜の顎に浸透勁を入れた。

「グア……………」

竜は脳震盪を起こし倒れた。

「終わったな」

「お疲れ様です」

この程度疲れた内に入らんけどな。

こんな感じが普段の俺の仕事だ。

今日ははやての新しい家族が出来るそうだな。

「よう、ヴィータ。久しぶりだな」

「要！元気か？」

「ああ、ヴィータも元気そうだな」

俺はヴィータの頭を撫でる。以前は撫でると怒られたものだが、今では嬉しそうにしている。よく懐かれたな、俺。

《よく来てくれた。一条》

「ディオネか。今回の家族はお前の妹だった？」

《ああ、その通りだ》

ということはいんぷおースを受け継ぐんだな。

俺たちははやての邪魔をしないように部屋の外にいる。

「それでなのはがな……………」

《主ははやてはいつも……………》

「そうなのか」

俺は二人の話、というかほとんど愚痴を聞いている。

「なあ、要」

「どうした？ヴィータ」

「……………やっぱりいい」

「？」

何を言いたかったのか。ディオネはクスクス笑ってるし。

「みんな、入ってええよ」

ようやくか。俺たちは部屋の中に入る。

「みなさん、はじめまして。いんぷおース・ツヴァイです」

そこには水色の髪をしたちっさい女の子がいた。

「あなたが一条さんですか？」

「知ってるのか？」

「ハイ！先程マイスターはやてに聞きました」

へへ、はやてが俺の事をね。

「どんなことだ？」

「ヴィータちゃんの大S「ああー！！」もう！いきなりなんで  
すかヴィータちゃん」

いや、まさか……

「ヴィータが大好きって言いたかったのか？」

「そうです！」

「なななっ！？／／／」

まったく気が付かなかったな。

「なあヴィータ、いつ「うるせー！！／／／」ブハッ！？」

殴られた！？おもいつきり殴られた！！

「要くんは鋭いんやけど、そついう所は鈍感やな」

はやて、いたのか。

「酷いなあ、始めからおったよ」

「地の文を読むな」

それにしてもヴィータが俺の事をね。

「いったい、いつから」

「前の薬事件の時、キスしたやろ。意識し始めたのはその時かららしいで」

あの時か。にしても本人がいないのにそんなこと話していいのか？

「せっかくやから、これからもヴィータをよろしくな」

何をよろしくと？

なのはside

最近は仕事が多くてちょっと疲れが溜まってる。でも頑張らないと。

「よう、なのは。元気か？」

「あれ？要くん、珍しいね。どうしたの？」

要くんは普段は仕事が多いから、私の所に来る時は何かあった時だ。

「なのはに頼みがあつてな」

「要くんが！？」

「何故驚く」

だって要くんは自分に出来ない事しかやらないから頼み事なんて滅多にしない。でもここはポイントアップのチャンスだよな。

「私に出来る事なら何でもいいよ」

「そうか、よかった。なら明日デートしよう」

「……………へ？」

「デ、デデデ、デート！！？」

いくらなんでもいきなり過ぎるの！ど、どうしよう。お洋服とかいろいろ準備しないとー！！

「OKか？」

「もも、もちろんだよー！！」

ふふふ、デートか。ようやく私の思いが届いたんだ。フエイトちゃん、私の勝ちだよ。

次の日

要くと公園で待ち合わせをしている。予定より30分も早く来ちゃった。

「あれ？もう来てたのか」

「ふえ」

要くんももう来たんだ。ふふふ、待ちきれなかったのかな。

「早いならそれでいい。じゃあ行くっか」

「うん！」

何処に連れていってくれるのかな。

「あれ？翠屋だよな、こじ」

「すまん、騙してた。本当の目的はデートじゃない」

「……………へっ？」

「わ、私の純情を裏切ったの！？」

「そもそもお前が悪いんだぞ。みんなを心配させるから」

「私がみんなを？いつ？」

「お前は休まな過ぎる。今回だって満場一致で決まったぞ」

「うっ！確かに最近休んでないけど。」

「理解したなら入るぞ」

「そう言っつて要くんはお店に入っつていった。」

要side

さて、俺は父さんに腕のいいマッサージ師を頼んだのだが。

「何故カレンさんがいるのですか？」

「あたしがいちや悪いかい」

「いえ、そんなこと」かなめ「ミリアちゃん久しぶり」

カラン カラン

あつ、なのはが入ってきた。

「あの子が今回の患者だね」

「はい」

患者って、病人じゃないんだから。

「職業病って立派な病気じゃないか」

「成る程って地の文読まないで下さい！！」

まったく、はやてもこの人も。

「ねえ、要くん。この人は？」

「俺の先生の奥さん」

「ほら、あんた。さっさとここに寝な」

カレンさんはいつの間にか簡易ベットを用意していた。なのははそのベットの上に寝る。

「それじゃ始めるよ。ほっ！」

バキバキ

「みぎやあああ！？」

うわゝ、痛そゝ。

なのはの悲鳴を聞いて久遠が来た。

「どつしたの？」

「なのはがマッサージを受けるの」

「うけてるのゝ」

ミアは無邪気だな。

「俺たちは向こうにいったらどうか」

「わかった」

「はい」

「酷く疲れが溜まってるね。せいっ！」

ゴキゴキ

「にゃああああ！…！」

なのはがマッサージを受けてる間、俺は久遠とミアと遊んでいた。

「なのは、体の調子はどうだ？」

「すっごく楽だよ」

何と言うか、たれなのは？そんなのは置いといて、騙したお詫びをしないとな。

「なのは」

「んっ、なにっ？」

「お詫びにデートに行く？」

「行く！！」

反応が早いな。普段からこれくらいの反応してくれればいいのに。

「なら今度こそホントに行くか」

「うん！」

いろいろと回ったな。ウィンドウショッピングしたり、スイーツ食べたり、最後は公園か。

「ねえ、要くん。お願いがあるんだ」

「どうした？」

「キス……して」

普通こっぴつ雰囲気だとそんな気にもなるけど。

「無理」

「なんで！？私のこと嫌い！？」

「そんなことはない。ただ」

俺は茂みを指差して言った。

「あそこにはやてたちいるもん」

「へっ？」

そう言った途端、茂みがガサガサ動いた。

「へっ、そうなんだ。レイジングハート、セットアップ」

《セットアップ》

なのはは飛んでいった。

「デイバインバスター！！」

『ギャアアア！！』

あっ、しっかり結界が張ってある。なのはも成長したな。

今回の任務はなのはとヴィータとその他多数と一緒にロストロギアの調査だ。

「やっむー」

雪が降っているため寒い。帰りたい。

「大丈夫か？コート着るか」

「ありがとう。ヴィータ」

にしても今回の調査はあっさり終わったな。……むっ！？  
何かいる？

「君！危ない！！」

なのはがレイジングハートのおかげかその何かに気付き、新人を守る。あれじゃなのはがやられる。

「ベールシールド」

俺はなのはたちの上からベールシールドをかけてやる。何かの刃はベールシールドに防がれる。

「無茶するな」

「要くん、ありがとう」

「この野郎！ラケーテン・ハンマー！！」

ヴィータが何かに攻撃をする。壊れた何かの正体はステルス機能を持った機械だった。なのははよく気付いたな。他には………  
………いないか。

「なのは、よく新人を守ったな。だが、自分も守れないと駄目だぞ」

「うん」

「ヴィータは咄嗟の事に反応して、よくあれを壊してくれたな」

「えへへ」

さて、もうやることもないし、帰るか。

「撤収！帰ったら俺の奢りで飯だ！」

『フーー！...！』

?????side

一条要、本当に興味深い。彼がこれまでやってきた任務はほとんどAAA以上の難易度のものばかり。彼自身は陸戦A-だというのに。

「ドクター、彼の最新データです」

「ありがとう」

ふむ、以前のデータよりもさらに強くなっているな。彼の対応はど

うしようか。

「ククク」

彼と僕の作品が戦う時を早く見たいな。

日常＜入局後の日々＞（後書き）

はい、ヴィータ陥落。

ハーレムなんだからあと二人くらい欲しいな。

**70万アクセス特別企画（前書き）**

70万アクセスありがとうございます

今回はコロナボ座談会。

台本形式で会話のみです。

キャラ崩壊しているのもいます。

## 70万アクセス特別企画

雨「さあ、要くん始まりましたよ。70万アクセス特別企画」

要「まさかこの小説が70万アクセスまでいくとは」

雨「そうだね。始めはただ妄想を書いてみようから始まったのに」

要「俺の他にもいろいろ案があっただろ？」

雨「まあね。ゼロの使い魔でオリ主の使い魔がバロールとか、三國無双世界に行ったオリ主が恋姫無双世界にいくとか」

ピンポン

要「誰か来たぞ」

雨「よし、後は任せた」

要「おう。今行きまーす」

ガチャ

ゼ「70万アクセスおめでとっ、要」

要「ゼフィリスか。入ってくれ」

ゼ「ではお邪魔する。ああ、そうだ。久遠はいるか？」

要「いるぞ。久遠！ちよつと来てくれ」

久「何？要」

ゼ「モフモフ」

久「クー！？」

ゼ「気持ちいいよ」

久「か、要！」

要「少し我慢してくれ」

ピンポーン

要「はい」

ガチャ

百「こんにちは」

鈴「はじめまして」

要「どうも、はじめまして。御神百合姫さんと夫の神北鈴さんですね」

百「うん、そうだよ」

鈴「君は一条要くんではないんだよね」

要「はい、とりあえず中に入ってて下さい」

百・鈴「お邪魔します」

百「むむっ！あれは久遠！」

要「久遠が何か？」

百「私にもモフモフさせて〜」

久「え、え〜！？」

鈴「ユリほどほどにね」

ピンポーン

要「もう来たんだ」

ガチャ

貴「よう要。70万アクセスおめでとう」

要「貴史！お前も来てくれたか」

ぜ・百「モフモフ〜」

久「ク、クー！？」

貴「なんか久遠が大変なことになってるな」

要「何とかしてくれ」

貴「無理だ。無敵キャラの俺でもモフモフ補正には勝てん」

要「なんだよ、モフモフ補正って」

ピンポーン

要「今度は誰だ？」

ガチャ

シ「はじめまして、一条要さん。私わたくしシルフという者ですわ。この度は70万アクセスおめでとございます」

要「これはこれはご丁寧にも。シルフといいますと風邪の精霊ですか？」

シ「『邪』は余計ですわ！」

要「ちよつとしたボケです」

貴「そんなくだらない」

要「酷いな」

ピンポーン

要「はいはい」

ガチャ

レ「来たぜ、要」

要「帰れ」

レ「いきなり!?!」

要「お前の薬のせいで俺らがどれだけ苦労したと思っている!?!」

レ「そつちの作者の頼みだろ!?!」

要「うるせー!?!」

久「要! お客さんに失礼な事言っちゃダメ!?! 桃子が言ってたよ!?!」

要「うっ!」

レ「ふっ」

ゼ・百「モフモフ」

鈴「久遠ちゃんも馴れたな。それじゃそろそろ俺も参加するかな」

久「へっ!?!」

鈴「ユリ、交代して」

百「うーん、わかった」

要「ほら、ゼフィリスも離れて」

ゼ「まだ堪能していないんだ〜!!」

鈴「ほら久遠ちゃん、よしよし」

久「クー」

貴「なあ、要。これで全員か？」

要「いや、あと一人いるん「またかー!!」来たな」

ひゅー

ドゴーン

要「よう、一真。今回は屋根に落ちたが、大丈夫か？」

一「なんでいつも」

要「ここではお前は落ちキャラなんだよ」

一「くしくす」

要「さて、みなさん。お集まりいただき、誠にありがとうございます」

貴「硬いぞー」

レ「似合わないぞー」

要「黙れバグども！コホン、初めての顔もいると思うので自己紹介をしていただきます。じゃあ、来た順に頼む」

ゼ「では私からだな。魔法少女リリカルなのは〜輝く月の滴〜の主人公をやっているゼフィリスだ」

百「次は私たちだね。転生夫婦の並行世界旅行の主人公、御神百合姫だよ」

鈴「同じく主人公でユリの旦那の神北鈴だ」

貴「俺は魔法先生ネギま〜三人の転生者〜の主人公のうちの一人、南武貴史だ」

シ「それでは私も、リリカルなのはStrikers〜天を撃ち抜く烈風〜に出演しているシルフですわ」

レ「次は俺だな。神様の力で異世界へ〜チートってありですか？〜の主人公、桜井怜、もう一つの名はレイ・ツアイベル。まあ、レイ

って呼んでくれ」

一「最後は俺か。魔法少女リリカルなのは、黒い聖騎士の主人公、御剣一真だ。よろしく」

要「みんなご苦労様。それじゃ座談会を始めようか」

』おー』

要「まず最初の質問は……趣味！」

一「普通だな」

貴「つまらん」

要「どんなの期待してたんだよ」

百「女の子のどんな仕種がグツとくるかとか」

要「あなた、女でしょう」

鈴「ユリが目指すのはハーレムだからね」

要「いや、だから女でしょう！」

ゼ「まあ、話を進めよう。趣味だったな、私は読書と歌、あと料理を振る舞うのも好きだな」

シ「ゼフィリスさんも歌がお好きなのですね。私もなのですよ」

ぜ「ほう、どのような歌を？」

シ「静かな夜ですわ」

貴「俺は読書と剣道かな」

要「お前、剣使えたのか？」

貴「まあ趣味の範囲だが」

百「私は読書と格ゲーの技コピー」

鈴「俺は読書と新技開発、あと強い者イジメ」

一「なんだよ、強い者イジメって」

鈴「世間一般で強いって調子乗ってる奴をイジめる」

要「こつやってみると読書が趣味の人が多いな。一真とレイは？」

一「俺は鍛練だ」

要「わかるな。俺たちこの中じゃ絶対たいしたことないぞ」

一「だよな」

レ「俺は薬作ったり？宝具レベルのもん創って」  
O H A N A  
S H I「したり？」

要「何で疑問系なんだ！やってること、はた迷惑だし！！」

貴「そういう要はどうなんだ？」

要「俺は鍛練と魔法加工だよ」

久「次はみんなの好きなこと・得意なことだよ」

要「久遠！？何で俺の仕事を！？」

レ「久遠モフモフ」

久「クー」

百「かぁいいものが好きだよ」

鈴「同じく！かぁいいものは正義」

ゼ「二人共、よくわかってるな！」

一「昼寝が好きで、個人競技が得意だな」

レ「寂しい奴だな」

一「なんでだ！そういうレイはどうなんだ」

レ「俺はとにかく楽しいことだ。いつでも自分の楽しさをまず優先する」

一「迷惑だな」

貴「ハハハ、流石はレイだな。俺は好きなことはダチとはしゃぐ」と、得意なことは誰でも飲めるブラックコーヒーを入れること」

要「なら一杯貰おうか」

貴「いいぜ。……………ほい、出来た」

要「うん、旨い。だが粘度が足りん」

シ「粘度！？何故コーヒーに粘度を求めるのです!？」

要「体調が良くなるです。飲んでみます?」

シ「結構ですわ」

要「そうですね。そくだシルフさんの好きなこととかは?」

シ「私は趣味と同じく歌ですわ。一曲歌いましょうか?」

要「是非」

シ「では……………」

『……………』

「……………終わりですわ」

百「綺麗な歌声」

鈴「流石は精霊」

「さっきまでの自分が馬鹿みてえ」

貴「久しぶりにいいもん聞いたな」

ゼ「お見事だな」

レ「こっちの学祭で歌ってほしかった」

要「言葉が出んな」

久「お姉ちゃん凄かった!!」

シ「ふふっ、みなさんありがとうございます」

レ「ああ、そうだ。要のも聞いてないな」

要「俺の特技は野菜炒めだ。これだけは負けない」

「俺並に地味だな」

久「次はフリートークだよ」

「悩みがあるんだけど」

要「どんな」

「最近、修羅場率が上がって」

百・鈴「リア充乙」

「「こちらとら真面目なんだが」

ゼ「女性とは難しいものだ。相手が複数ならばしつかりと一人に絞ってやることだ。選択肢が多いのはいいことだ。しかしそのままの状態では相手も自分も傷付けるぞ」

「「おお」

要「流石は200歳」

レ「あつ、話つていうか報告なんだけど」

要「何だよ」

レ「ザッファイ専用性の性転換薬が出来ました。犬にもちゃんとなれるし、効果も長い」

要「帰れ!!」

レ「せつかく作ったのに。誰かいらない?」

ゼ「そんな趣味はないな」

シ「ザファイラさんに悪いですし」

「「会ったことがない」

貴・百・鈴「「そもそもいない」」

レ「ちえ〜。サモン・サーヴァントでもして呼んでやる」

要「お前は……………」

久「要、そろそろ時間」

要「もうか、じゃあみなさん。最後に今後の目標でも言ってお下さい」

ゼ「理不尽な人の死を防ぐ」

百「ハーレムを作る!!」

鈴「マイペースに生きたいな」

貴「戦闘経験を積むことだな」

シ「ヒスイの手助けをします」

レ「悠々自適に過ごす!!」

一「なのはの侵入に気付きたいな……………」

要「最後に、俺は強くなること……………ああ、みんなにプレゼントがある」

鈴「これは」

百「タリスマンだね」

要「今まで俺が倒した奴の素材で創ったんだ。まあ、みんなにはい

らないと思っけど」

シ「そんなことはありません」

ゼ「その通りだ。こういうものは気持ちの問題だ」

レ「それにこれくらゐの道具並だぞ」

貴「大切にさせてもらっよ」

一「サンキュー、要」

要「ありがとう、みんな。またな」

『またな（ね）』

久「いつちゃったね。質問まだあったけどいいの？」

雨「それについては俺が答えよう」

要「帰ってきたのか作者」

雨「おう。質問についてだが、こんなめでたい場で嫌いなこと・苦手なことを聞くのはどうかと思ってさ。アンケート取っておいて勝手なだけだ」

要「大丈夫じゃないか？これ見てる人は心の広い人ばかりだし」

雨「そうだね。じゃあ締め挨拶だ」

久「ここまで「チートじゃ済まない」を見て下さったみなさん」

要「今回の企画に参加して下さい。たみなさん」

雨「これからも是非とも」

雨・要・久「よろしくお願いします」

## 70万アクセス特別企画（後書き）

みなさんありがとう!!

これからも「チートじゃ済まない」は頑張ります。

応援よろしく願いします。

日常？くすずかといっしょく（前書き）

軽く書くつもりが思った以上に書いてしまった。

日常？<すずかといっしょ>

要side

今日は局の仕事を休んで家でんびりしている。

「久遠、よしよし」

「クー」

はぁー癒される。

「要、電話だぞ」

「今行くよ」

珍しいな、誰だろう。

俺は兄さんから受話器を受け取り電話に出る。

「はい、要です」

『あつ、要くん？忍だよ』

「忍さん？」

俺に何の用なんだろうつか。

『実はね、明日一日すずかと一緒についてほしいの』

「はあ」

「すずかだね。というか明日が暇ってよく知ってたな。」

「わかりました」

『ありがとー！それじゃ恭也と変わって』

「はい。兄さん、交代」

「わかった。もう部屋に戻ってていいぞ」

「ん〜」

「明日の事でも考えとしますか。」

恭也 side

「忍、よかったのか？」

『うん、要くんなら信用出来るから』

「確かに最近のあいつはかなり強くなった。俺でも戦ったら負けるだろうな。」

『私たちは氷室を倒すことを考えよう』

「そうだな」

次の日

すずか side

「ようすずか、今日は一日よろしく」

「うん／＼／」

今日は一日中要くんといられる。もしかしたらあんなことやこんなことになったり………キヤー／＼／

「どうかしたか？」

「な、なんでもないよー!!」

いけないいけない。何を考えてるんだらう私。

「まあ二人ですっと家の中にいるのもあれだし、出かけるか」

「へっ?」

二人で一緒に出かけるって、デ、デ、デート!?

「ん？嫌だったか？」

「そんなことないよ！早く行こう！すぐ行こう！」

「お、おう」

えへへへ 要くんとデート

要side

すずかの機嫌が凄くいい。やっぱり中にいるより、外に出た方がいいよな。ただ

「要くん！次あれ見よう」

「はいはい」

ファンシーショップはやめてほしかった。

「ねえ要くん、この人形可愛いね」

「ああ、可愛い』はやて』の人形だな」

「狸だよ!?!」

「えっくし!?!」

《どうしました、主はやて。カトちゃんのようになくしゃみをして》

「誰か噂でもしとんのかな」

なにか今あったような。

「あつ、このぬいぐるみ可愛い」

猫のぬいぐるみを見つけたさすが、俺の方をチラチラ見ながら言う。さて、なんと言うか。

1・そうだな

2・買ってやるうか？

3・すずかの方が可愛いよ

・・・3は却下。1か2だが

「買ってやるうか？」

ここは2を選ぶことにした。

「えっ！？でも、悪いよ」

「気にするな、もう働いてるんだぞ。ぬいぐるみの二つや二つ問題ない」

「じゃあ、買ってもらおうかな」

値段は5千円か。意外と高いな。まあ買えるけど。

「ありがとうございました」

店を出てすぐにすずかが聞いてきた。

「本当によかったの？」

「いいんだよ。次俺の行きたい所について来てもらっから」

「？ うん」

あそこは俺一人だと行きにくいんだよな。

「此処ってデザートバイキングのお店だよな」

「男一人だと行きにくくてな」

俺は普段ブラックコーヒーを飲んでるせいか勘違いされるが、甘いものは嫌いじゃない。むしろ好きだ。一人じゃ入りにくかったが、すずかがいるおかげでようやく入れる。

すずか side

「うまうま」

「そんなに急がなくてもまだ時間はあるよ」

「あと30分しかないんだぞ！」

しか、じゃなくて。も、だよ。

それにしても要くんは本当に変わってる。突然なのはちゃんの所に現れたと思ったら、すぐに家族になって、私たちとも友達となった。そして2年前のあの時、魔法使いだって教えてもらった。

でも私は秘密を隠したままだ。聞いた話では魔法使いは職業になる位なれる人が多いものだ。しかし私のは違う。生れつきの異常、化け物なのだ。こんなこと話たらみんなが離れるかもしれない。だから言えない。

「どうした？すずか。あと25分しかないぞ」

「十分でしょ」

「あー食った食った」

「本当によく食べたね」

店員さんびっくりしてたよ。ケーキ2ホール半食べるから。

「さすが、ちよつと来い」

「えっ!?!何なの!?!」

要くんが突然私の手を引っ張った。そして着いたのは路地裏。ま、まさか!まだ夕方なのに!?!でも要くんが求めてくれるならノノノ

「さすが、俺の後ろにいろよ。出てこい!ストーカー!」

ストーカー?もしかして誰かついて来てたの!?

「酷いな、ストーカーなんて。氷室遊という名があるんだが」

「えっ?」

何でこの人がいるの?お姉ちゃんが昔から危ないって言ってた人が・  
・・・・

「月村さすが。いつまでその劣等種と一緒にいる」

「劣等種?俺のことか?」

やめて

「その通りだよ。僕らは君たち劣等種とは違う」

「面白い事を言うな。見た目は同じ人間のようだが？」

やめて、やめて

「ああ、言っていないのか。なら教えてあげよう」

やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめて

「僕とそいつは吸血鬼、化け物なんだよ」

「やめて————！！！！！！」

恭也 side

「フッ」

「ぐあっ」

こいつで最後か。氷室遊は何処へ行った？

「恭也！」

「忍、そっちはどつだ？」

「それが、氷室遊は一人すずかの所へ行っただって!!」  
.....  
.....そうだったか。やられたな。

「恭也?..どうしたの?」

「いや、やられたな。っと思ってな」

「ちよつと!何でそんなに冷静なの!?」

「すずかちゃんの護衛は要だろっ?なら問題ない」

「でも.....」

忍が心配する気持ちはわかる。だが今すずかちゃんの近くにいるのは、そんじょそこらのボディガードではない。一条要なのだ。

「大丈夫だ。要は負けない。俺の弟だぞ」

「.....そうだね。すずかのお婿さん候補なんだから頑張ってもらわないとね!」

頼んだぞ、要。

要side

「すずか！大丈夫か！？」

すずかが吸血鬼と言われた瞬間、すずかは崩れ落ちた。

「ハハハ、そいつが化け物とわかっててもそんな態度がとれるか。いや、理解出来ていないのかな？」

「てめえ」

今はこんな奴は無視だ。すずかの方が大切だ。

「私、私………」

「すずか、よく聞け。お前はお前だ。例え吸血鬼だとしても、お前は月村すずかという人間だ」

フェイトにも同じようなことを言ったが、例えどんな存在であろうとも、そいつの心だけはそいつのものだ。

「待ってる。今あの肩をぶちのめす」

「面白い事を言うな、劣等種。僕をぶちのめす？出来るならやっくパン　パン>ぐうっ！？」

ちっ、不意打ちで銃を撃ったが防いだか。まあ、これでちょっとダ

メージを喰らったろって再生してる!?

「劣等種」のときが!!

「うおっ!」

危ない危ない。もう少しで殴られるところだった。

(身体能力50%解放)

これで十分だろう。

「喰らえ!」

「当たらねえよ」

動きは確かに速いし、威力もある。だが技がない。おそらく今までその身体能力と再生力にあぐらをかいていたのだろう。

「次はこっちだ」

まずは

「シッ!」

「ガッ!」?

顔面に高速ジャブを入れてやる。

「フッ!」

「グウツ!？」

次にレバーにフックを入れる。

「ラスト!!」

「ガハア!!」

最後にストレートを顔面に叩き込む。これで近接戦は終わりだ。次は遠距離戦だぜ。すずかがいるからあまりやりたくないが、あの再生力なら死なないだろ。

パンパンパンパンパン

俺は吹き飛んだ氷室に銃撃を叩き込んだ。

「ひっ!」

やっぱりすずかを怖がらせちゃったか。

「終わったか？」

まったく動く気配がない。やり過ぎたか？流石に死なれると後味悪い。だがその心配はなかったようだ。

「劣等種」のときが!!俺に傷を付けるなど!!」

うわっ、キレてる。つーか傷もかなり治ってるな。

「凄い再生力だな。とび職でもやったらどうだ？お前なら落ちても死なないぞ」

「黙れ！！殺してやる！！」

そう言っつて殴り掛かってきたが、やはりダメージがデカイのだろう。動きが鈍い。

「ハアアアア！！！！」

「よっ、ふっ、ほい」

俺は攻撃を受け流す。そして両肩を叩く。

「抜骨」

ゴキゴキ

「ぐあああ！？」

これで殴ることは出来なくなった。

「関節を外した。自然治癒の延長線上にある再生じゃ外れた関節を治すことは出来ん。そして両肩を外してしまえば関節を嵌めることも無理だ。お前の負けだよ。氷室遊」

「ふざけるな！！」

すると氷室は壁に自分の肩をぶっつけたした。

ドン ドン ゴキン

「なっ!?!」

壁にぶつかって関節を嵌めやがった!!

「ハアハア」

ゴキン

治した方の腕でもう片方の肩を治した。

「よくやるな」

「殺してやる!殺してやる!!殺してやる!!!!」

しかしどうするか。頭でも潰さん限り倒せん。流石は吸血鬼。しかし人の頭が飛ぶ光景だけは見せたくない。しかたない。あれを使うか。あれもあまり見せたくないけど……

「お前、本物のバケモノをみたことあるか?」

「なに?」

「ORT部分解放」

俺の背中から出た巨大な脚が氷室を文字通り粉碎した。  
はあ、殺しだけはしたくなかったな。  
俺はすぐに脚を消した。

「要くん……………今のこと」

そういえば闇の書事件の時にORTを見たんだっけ？

「ああ、あのバケモノは俺なんだ。氷室とかよりよっぽどバケモノだろ？」

俺は笑いながら言った。

すずか side

はつきり言っただけだった。要くんの力がじゃない。氷室を殺したことででもない。あれを見られても笑っていられた要くんが怖かった。

「何で笑っていられたの？あんなのを見られて」

「ん、特に考えたことなかったな。望んで手に入れた力だし」

「どういふこと」

「あつ」

あんな力を望んだっていうの？わざわざ。

「要くんがわからないよ」

「そうか？」

そういえば要くんは力を知られたんだ。あの契約しないと駄目だよ。

「あのね要くん。私たちの一族、夜の一族は力の存在を知られたら契約をしないと駄目なの」

「契約？」

「うん。一つは私たちの秘密をばらさないこと。もう一つは……」

「もう一つは？」

「うう、うう、どうやって言おう。」

「ずっと一緒にいるって約束するの」

「ああ、成る程」

「要くん、今のでわかったのかな？ だったらもしかして……」

「以下すずかの妄想です」

「すずか、君の夫として君とずっと一緒にいるよ」

「で、でも要くんにはなのはちゃんたちが」

「いいんだよ。なのはたちもきつと祝福してくれるさ。新居は何処にしようか。子供は何人欲しい?」

「そんな気が早いよ／＼」

なんてことになったりして、ジュルリ／＼

「おい、すずか?」

「はっ!何?要くん」

「いや、ぼーっとしてたから」

「大丈夫だよ、うん。それじゃあ要くんの言葉で言ってみて」

「? おう。俺、一条要は月村すずかの友として人生を共に歩むことを誓います」

「それだけ?」

「なにか問題が?」

「大アリだよ!」

なんで友達としてなの！普通ここは恋人になるとか結婚するとかでしょ！？

「まあ今回は助けてくれたし許してあげる」

「そうか」

「じゃあ帰ろうー」

「そうだな」

## 後日談

「すずか！要くんとはどうなったの！？」

「それが……」

私は簡単に今回のことを話した。

「あー、もう！駄目よそこはもっと押さないよ。なのはちゃんたち  
に取られちゃっわよ」

「うっ!」

なのはちゃんたちは要くんと同じ所で働いてるんだった。・・・  
・そうだ!!

「お姉ちゃん!出かけてくる!」

「行ってらっしやい」

ピンポーン

「はい。あら、すずかさん。どうしたの」

「リンディさん!デバイスマスターっていうのになりたいんです  
!」

「はい?」

いきなり過ぎてリンディさんは混乱してるらしい。

「デバイスマスターって魔法使いじゃなくてもなれるんでしょう  
?」

「ええ、そうだけど」

「ならお願いします!!」

すずかはこの数年後デバイスマイスターの資格を取得する。

日常?<すずかといっしょ>(後書き)

すずかはデバイスマイスターに転職した。  
STSでは機動六課に入る予定です。

日常＜久遠頑張る＞（前書き）

久遠の出番を増やすため！

日常<久遠頑張る>

久遠side

要が管理局に入ってからあまり会えていない。お仕事が大切なのはわかるけど、やっぱり要と一緒にいたい。

「ただいま」

「要、おかえり」

「おう、ただいま。久遠元気だったか？」

「うん！」

要は優しいな。……………そうだ！あれなら要と一緒にいれるかも！

「ねえ、要」

「何だ？久遠」

「私も魔導師になれるかな？」

「はい？魔導師？」

「うん」

魔導師になれば管理局に入れて要と一緒にいられる。

「うーん。そう言われても俺は何も出来んからな」

「じゃあリンディに聞く」

「そうだな。一緒に聞いてやる」

ということではリンディのお家にいる。

「リンディさん。久遠は魔導師になれますかね」

「なれないことはないわ。ちょっと検査を受けてもらわないと駄目  
だけど」

検査か。怖くないかな。

「大丈夫だぞ、久遠」

「ん」

私の考えがわかるように、要は私の頭を撫でてくれた。要のこっぴ  
う所が好きだ。

「久遠ちゃん。検査はリンカーコアを調べるだけだから長くても10分くらいで終わる簡単な検査よ」

エイミーが私を検査してくれている。知らない人よりも知ってる人の方がやっぱりいい。

「エイミー。久遠の検査結果は？」

「素質十分だよ。リンカーコアはまだ未成熟だけど成長すればなのはちゃん並になるよ」

なのは並って、あんな砲撃、撃てるのかな？

「凄いな久遠は」

「そうかな？」

「そうだよ。久遠ちゃんは才野あるよ」

褒められると嬉しいな。

「じゃあ久遠、デバイスはどうする？」

あつ、そうだ。デバイスを考えないと駄目なんだ。どうしようかな。

「羽衣がいい」

「成る程な」

「変わったのにするんだね」

「まあ出来るまではストレージで我慢しろよ」

「うん」

どんなのになるのかな？

「じゃあフェイト。久遠の練習相手頼むぞ」

「うん、任せて」

「よろしくお願いします」

私はフェイトに魔法の練習をしてもらうことになった。

「デバイスの起動は出来てるみたいだから、魔力弾の練習してみようか」

「うん！いくよ！」

私は銀色の魔力弾を作ってみた。五つ。

「……………要、久遠って本当に初めてなの？」

「……………そのはず」

なにかおかしかったかな？

「な、なら砲撃は撃てるかな？」

「うん、いくよ。デイベインバスター！！」

「……………」

「久遠」

「なに？フェイト」

「私から教えることは何もない」

「ふえ？」

どうしたんだろう？二人共。

今日は私のデバイスが完成する日だ。

「エイミー！出来た？」

「出来てる出来てる」

エイミーから手渡されたのは白いカードだった。

「これがデバイス？」

「そつだよ」

「よかったな」

《マスター久遠、名前を付けて》

うーん、名前か。

「じゃあ………姐「己」ね」

《わかったよ、マスター久遠》

「マスターはいらないよ」

《わかったよ》

うん、いい子だな。この子は。

「大層な名前を付けたな」

「そうかな？」

《いい名前だと思うよ》

姐己もこう言ってるのにな。

「別に悪いわけじゃないさ」

「《ふーん》」

「もう仲良しだね。じゃあ性能テストに入ろうか。要くん手伝って」

「わかった」

よーし、頑張るぞ。

要side

さて、久遠はデバイスをどれほど使いこなせるかな。

「身体能力30%解放、魔力30%解放」

とりあえず、こんなもんでいいか。

「要、いくよ！」

「いつでも来い」

「姐己」

「アリストテレス」

「「セットアップ！」」

《《セットアップ》》

久遠のバリアジャケットはまさに天女という感じだな。

「いつけー！」

久遠が魔力弾を撃ってくる。俺は全て避ける。

「シールドスライサー」

俺は一枚、シールドスライサーを投げてみる。久遠はあっさりと避けるが

「ターン」

久遠の後ろで飛んでいったシールドスライサーが戻ってくる。久遠は気付いていない。このままでは当たるといふ瞬間

《無駄だよ》

「なっ!?!」

羽衣によって防がれた。オートガードか!

「喰らえ!地雷矢!」

久遠が地面に手を置く。すると俺の下から雷の矢が出てきた。

「危ねっ!」

まさか地面から雷とは、やるな。

「今度はこっちだ!」

俺は連続で殴るが全て防がれる。

《これでも喰らえ!》

羽衣がドリル状になり、雷を纏って襲ってくる。俺は後ろに下がり

久遠の方を見ると、久遠が砲撃準備をしていた。

「いくよ！要！」

《トライデントスマツシャー》

銀色の雷撃が飛んでくる。

「ちっ！アリストテレス！」

《了解。シールド》

俺はすぐにシールドを加工する。

「ルーフシールド！」

危ね〜。もう少しで飲み込まれるところだった。

『二人共。もういいよ』

「終わるか」

「うんー！」

「久遠ちゃんは全然問題ないね」

「えへん」

《私のマスターだよ。当然だよ》

「これなら魔導師試験を受けても大丈夫だね」

大丈夫どころじゃねえよ。こいつら、かなり上までいくぞ。

その予想通り、久遠は一発で魔導師試験に合格。魔導師ランクはA Aになった。俺はまだA - なのに。

日常く久遠頑張る> (後書き)

久遠がデバイスを手に入れた。

StSへの準備もどんどん進んできたぞ。

日常くそつだ温泉に行こう（前書き）

かなりの難産でした。

## 日常くそつだ温泉に行く

要side

「曹長仕事です」

「一条曹長、これやっといて」

「一条曹長お願いします」

何でこんなに仕事が多いんだろう。俺まだ中三だぞ。ああ、温泉に行きてえ。

ヴィータside

「ヴィータ、これあげるわ」

はやてがいきなり渡してきたのは、一組のチケットだった。

「一泊二日温泉ペアチケット？」

「そやで、貰ったんやけど私には使い道ないからヴィータにと思ってな。要くんと一緒に行つてき」

「要と……」

以下ヴィータの妄想です。

「ふう、いい湯だな」

「よう、グイータ」

「か、か、要！？何で此処に！？」

「此処は混浴だぞ」

「えっ！？そうだったか！？」

「なあ、グイータ。俺はお前が好きだ。お前の全てが知りたい」

「な………！？」

「幸い此処は温泉だ。汚れても大丈夫だ。さあ、愛し合おう」

「駄目だ！要！こんな所で………ああ／／／」

なんてことになったりして、デヘヘ／＼／

「おい、ヴィータ。帰ってきい」

「はっ！」

早く要の所に行かないと！

「はやて！行ってくる！」

「気いつけや」

フエイトside

「フエイト、これをあげるよ」

クロノがくれたのは一泊二日の温泉のペアチケットだった。

「何でくれるの？エイミィと行ったら？」

「生憎仕事があつてね。それにフェイトにはちょつどいいかなつて。要と行ってきな」

「要と……………」

以下フェイトの妄想です。

「フェイト、温泉はどうだった？」

「気持ちよかつたよ」

「風呂上がりのフェイトは色っぽいな」

「そ、そんな／＼」

「フェイト、俺はお前の事がずっと好きだった」

「……………私も／＼」

「そうか、よかつた。じゃあキスするぞ」

「ん／＼」

どういことになったりして、エへへ／＼／

「フェイト？どうした？」

「はっ！」

「こうしちゃいられない！早く要の所へ行こう！」

「クロノ、行ってきます！」

「あ、ああ」

なのはside

私は要くんに騙された日からなるべく休むようにしている。今は久しぶりに家のリビングでのんびりしている。するとお父さんがやってきた。

「なのは、これをやるう」

お父さんが渡してくれたのは一泊二日の温泉のチケットだった。

「どうしたの？これ」

「商店街の福引きで当たってな。なのは、どうせだから要と一緒に行ってきなさい」

「要くん・・・・・・・・・・・・・・・・」

以下はなのはの妄想です。

「要くん、おやすみ」

「ちょっと待ってくれ」

「えっ？ど、どうしたの！？顔近いよ！」

「なのは、愛してる」

「そんな、いきなり／＼／」

「あの時出来なかったキスをしよう。その続きも」

「……………うん／＼／」

なんてことになったりして、にゃあああ／＼／

「なのは、そろそろ帰ってきなさい」

「はっ！」

要くんの所に早く行って誘わないと！

「行ってきますー！」

「頑張れよ」

今私は要くんの部屋にいるのだけど……

「なんでフェイトちゃんとヴィータちゃんがいるの？」

「なのはだって、今日は休みじゃないの」

「フェイトだって仕事があっただろ」

むむっ、これじゃ話が進まないの。

「要くん！」

「しまった」

私たちは部屋に入っという。

「ねえ」

「要」

「あたしと」

「「温泉に行こう！つてええ！？」」

見事に私たちの言うことは重なった。

要side

いきなりなのはたちが入ってきたと思ったら、同時に温泉に誘われた。

「「要誰にするの（んだ）！」」

「みんな一緒じゃ駄目なのか？」

「「駄目！」」

三人の話を聞くと、どうやらそれぞれペアチケットを持っているらしい。つまり一人じゃ駄目だから俺を誘いにきたということか。ふむ、どうしたもんか。

「そつだ！全員が行ける方法があった」

「どんなの？」

「足りないなら増やせばいい」

ちょうどあの二人がいるしな。

「あたしは要と一緒にいいんだ！」

「私もだよ！」

ヴィータとフェイトが言うが、そんな我が儘は駄目だ。

「そんなこと言うなら行かないぞ」

「「うっ！」」

今度が楽しみだ。

温泉に行く日になった。なのはたちはいるが、残りの二人がきていない。

「「おい」「」

「来たな」

「温泉旅行なんて初めてだぜ、俺」

「この度は誘ってくれて感謝するでござる」

俺が誘ったのは有彦と後藤だ。

「今回の件はわかってるよな」

「流石に邪魔はしねえよ」

「拙者らは拙者らで楽しむでござるよ」

空気が読める二人でよかった。

「なら行くつか」

「「「「「おー！」「」「」」

とこのことで温泉旅館に到着した。

「じゃあ俺たちは向こうにでも行ってくるわ」

「温泉饅頭に温泉卵、楽しみでござるな」

そう言って二人は歩いていった。ありがとう親友二人よ。

「私たちは何処に行く」

「私は要の行きたい所でいいよ」

「あたしも温泉は初めてだしな」

そういえばフェイトはあの時以来温泉にはきてないだろうし、ヴィー  
ータなんて行く時間もなかっただろう。

「なら温泉にでも入るか？」

ちよつと早いけど

「」「」「」

「ああ、気持ちいい」

温泉はやはりいい。心まで癒される。

「おっ、あれはサウナか」

いいね。気持ちよく汗でも流すか。

「.....」

サウナってしゃべることなくなるよね。それにしてもさっきから誰も見てないな。早いからか？

「そろそろ出るか」

俺はサウナを出た後、すぐに水風呂に入った。

「くっくっく」

このなんとも言えない感覚がいいね。体にいいのかは知らんが。

「あー！こんな所にいたのか」

「ヴィータ？」

ここ男湯だぞ、おい。

「知らないのか？10歳以下はどっちに入ってもいいんだぞ」

「いや、お前10歳以上だろ」

確かに見た目は10歳以下だが、ヴィータはこっぴどい子供扱いは嫌ってたはずなのに。

「要と一緒にいるために我慢する」

いや、我慢するって。

「ほら、そんな水の中じゃなくて湯の中に入ろっぜ」

「お、おい！」

俺はヴィータに引つ張られて湯の中に入った。

「気持ちいいな」

「……………そうだな」

諦めよう。今のヴィータは何も聞かない。

「なあ、要。あたしとフェイトとなのは。誰が好きだ？」

「……………そろそろ出るか！」

俺は逃げ出した。ヘタレだな、俺。

「要、卓球やる」

温泉を出るとフェイトがそう言ってきた。

「ああ、いいぜ」

正直さっきのことを忘れたいからな。

「いくよ。……やっ!」

「ハイ!」

俺とフェイトのリレーが続く。意外と上手いなフェイト。

「そこ!」

フェイトがスマッシュを撃とうとした瞬間、浴衣がちょっとズレて……言わなくてもわかるだろ?

「キャツ!」

フェイトが気が付いて隠すが、もうすっかりと見てしまった。

「……見た?」

「……スマン」

「ここは素直に謝ろっ。」

「……見たなら責任を取って私と付き合っ」

「はい?」

何を言ってるんだフェイトは。フェイトの目を見ると笑っていた。やられた!

「責任、取ってくれ」「何やってるの!」「きゃん!?!」

おお、まさかなのはがフェイトの頭を叩いて助けてくれるとは。

「フェイトちゃん。抜け駆けするとSLBだよ」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

フェイトのトラウマが発動してしまった。

もう夜か。さっさと寝るか。

「要くん。ちょっといい?」

「なのはか?いいぞ」

なのはは部屋に入ってくるなり言った。

「要くん。好きです」

「うん、そうだな」

それは知っている。それが恋愛感情であることも。

「なら要くん。キスして」

「何故そうなる」

「・・・・・・・・・・・・・・・・要くんがしてくれないなら私がする」

すると俺の手足がバインドで縛られた。

「おい！なのは！？」

「大丈夫。要くんはそのままでもいいの。私がキスするから、その先も私がやるから」

ちよつと待て。キスの先つて！ああ、なのはの顔が近付いてくる。そして

ゴチン

「いってー！！ってあれ？」

此処は俺の仕事部屋？

「大丈夫ですか？一条曹長。椅子から落ちましたが」

成る程、今のは椅子から落ちた衝撃か。

「俺、寝てた？」

「はい、寝てました」

ハハハ、なのはたちの視点や妄想まであるって

「なんて夢才子だよ」

日常くそつだ温泉に行こう。(後書き)

ハイ、まさかの夢オチ。ありえませんが、すみません。

今度辺り、空港火災でもやろうかな。

任務<空港火災>(前書き)

ようやく本編のイベントをやった気がする。

## 任務<空港火災>

要side

普段戦闘任務ばかりの俺がまさか火災現場に駆り出されるとは、それもこれも隣で頭を抱えてるオッサンのせいだ。

「ああ！ギンガ、スバル！無事でいてくれ！！」

「落ち着いて下さいゲンヤさん」

「娘が火災現場にいるのだぞ！！」

この人はゲンヤ・ナカジマさん。とある部隊の部隊長だ。

「娘を助けてくれ！一条！」

「了解」

ちなみに俺の階級は三尉になったよ。

「とりあえず、アリストテレス。セットアップだ」

《了解。セットアップ》

「身体能力60%解放、魔力30%解放」

魔力がたくさんあっても使うわけじゃないからな。30%あたりでいいだろ。

「アリストテレス、探索」

《了解》

さて捜すのでしょうか。

つてうわ、なにこれ。

《此処が火元ではないでしょうか》

「ふむ、ロストログアの暴走だったか？」

凄まじい爆発の跡だな。壁や床が溶けてるぞ。輸送中だった局員は蒸発したかな。

《主、生存者を発見。2時の方向です》

ゲンヤさんの娘かな？それとも別の誰かな？

「よじきた。つとこの現場の写真撮っとけよ」

《了解》

そろそろかな。

「いた！」

巨大な像の近くに青髪の女の子。何度もゲンヤさんに写真を見せられたから覚えている。

スバルちゃんだ。

「大丈夫か？お嬢ちゃん」

「誰？」

「君のお父さんの知り合いだよ。君を助けにきた」

「本当！？」

「ああ、本当。おんぶしてあげるから背中に乗って」

「うん！」

もう一人はどうだろう。なのはとフェイトに連絡してみるか。

『聞こえるか？要だ。俺は要救護者一人確保したぞ』

『わかったよ』

『私も一人助けたよ』

『了解』

これで姉妹二人共助かったか。

《主、像がこちらに倒れてきます》

「なに？」

あつ、ホントだ。危ないな。

「お兄ちゃん！」

「大丈夫、大丈夫。アリストテレス」

《シールド》

倒れてきた像は俺のシールドに止められる。

「すごい」

スバルちゃんが驚いている。そんなに驚くことでもないのに。

「帰るぞ。アリストテレス、どっから出る？」

《壁の破壊が手っ取り早いかと》

わかりやすいやり方ですこと。

「よし、この壁にするか。スバルちゃん、ちょっと降りてくれ」

「うん」

蹴り砕くか。

「うあっ！ー！」

俺の蹴りが壁に当たると壁は砕け散った。やっぱり脆くなってるな。早く脱出しよう。

「スバルちゃん、しっかり掴まれよ」

「……………」

なんでぼーっとしてるんだ？

《主が魔法も使わず壁を粉碎するからでしょ》

そーなのかー。

「「スバル〜!!!」」

「お父さん！ギン姉！！」

よかった、よかった。

「要、お疲れ様」

「フェイトもな」

「火消したんわ私やけどな」

あー、そういえばそうだな。ということとは……………

「なのはは何もしてない訳だ」

「にゃっ！？私だって頑張ったよ！！」

成果が無ければ意味はないのだよ。

「お兄ちゃん」

スバルちゃんがこっちにきた。

「なんだい？スバルちゃん」

「私、大きくなったらお兄ちゃんみたいな管理局員になる！」

「そうか、頑張れ」

俺はそう言っただけで頭を撫でてやる。

「エへへ」

「少しいいか？」

「なんでしよう、ゲンヤさん」

真剣な顔をしている。かなり重要な話だろう。

「一条、いや、要くん。君になら娘を任せられる。さあ！スバルがギンガ、どちらがいい！」

「はやく、任務が終わったら話があるんだよな」

「うん。でも此処で話すのもなんやし、ホテルで話すわ」

「じゃあ早く行こう」

「そうだね、休みたいしね」

幼なじみ四人による見事なスルー攻撃！！ゲンヤさんは硬直した！！

「……………って無視をするなー！！」

娘をいきなり任せようとするあんたが悪い。

俺たちは予定通りホテルで話をしている。

「で？どんな考えだ？」

「実はな、部隊を作ろうと思ってねん」

部隊？随分といきなりだな。

「それでな、要くと久遠ちゃんにも参加してほしいんよ」

「いいぞ」

「即答！？」

「ダチの頼みだからな」

「要くんらしいね」

「うん、要はこうだよな」

「こいつらの俺の評価はどんなものだろう。」

《主、電話です》

「ん？誰からだ？」

「ちよっと待ってくれ。……はい、一条です」

電話から聞こえてきた声は技術部の部長のものだった。

『出るのが遅いぞ。あれが完成したぞ』

「マジですか！すぐ行きます」

「やっとか、長かった。」

「悪い用事出来た」

「」「」「」「」「」「」「」

「すみません、一条ですけど」

「あつ、来たね。はいこれ」

俺が技術部の人から渡されたのは一丁のコルトパイソンだった。

「なかなか苦労したよ。その『魔導式ハンドガン』は」

「すみません。無理言って」

「いいんだよ。いい経験になった」

魔導式ハンドガンというのは、ミッドでも銃を使ったかった俺が開発を依頼したもの。見た目は普通のコルトパイソンと変わらず、撃ち出される弾が非殺傷の魔力弾となっている。中には簡易カートリッジが入っており、誰でも使える。

技術部の人が苦労したのはおそらく中身ではなく、外見だろう。俺が細かく頼んだからな。

「試し撃ち出来ます？」

「大丈夫だよ。あそこの的に撃つてくれ」

それじゃ、撃ってみますか。

パンパンパン

いい仕事してるな。音も反動も完璧。

「ありがとうございます。大切に使います」

「故障したら来てくれ。すぐに直すから。あとサイレンサーモードも付けておいたよ」

ありがたいな、ホント。早くもう一丁出来ないかな。

任務<空港火災>(後書き)

要くんニューアイテムゲット!  
全ては要の我が儘です。

外伝<烈風の弓使い>(前書き)

バルディツシユ様の魔法少女リリカルなのはStrikerS}天  
を撃ち抜く烈風}とのコラボです。

外伝<烈風の弓使い>

要side

「久遠、そつちは頼む！」

「わかった！」

俺は久遠と一緒に竜退治をしている。俺は赤い竜、久遠は青い竜と戦っている。

「シールドスライサー三連！！」

「ギユアアアア！？」

俺の攻撃が竜を切り裂き、竜は倒れる。さて、久遠はどうかな？  
久遠の敵である青い竜はバインドに縛られている。四重のライトニングバインドはいくら竜でも抜けられないか。つーかやり過ぎ。久遠は羽衣を手に巻いて砲撃の準備をしている。

「悪しき竜を滅せし雷よ」

《我らの敵を撃ち碎け》

「《ヴァジュラ！！》」

「ギユアアアア！？」

極大の雷撃が竜を飲み込んだ。

「アリストテレス、今のどんくらい？」

《Sランク程かと》

魔法に妖術を混ぜたな。久遠には手加減というものを教えんな。  
・  
・  
・  
・  
ん？

《結界ですね》

「だな」

すると俺の前方に光が現れた。

「うおっ!？」

「キャッ!？」

そして光の中から一組の男女が現れた。ってあの人は……………

「シルフさん？」

「お姉ちゃんだ!！」

「要さんに久遠さん？」

なんでこの人がいるんだ？それに隣の男は誰だ？彼氏か？

「シルフ、知り合いか？」

「ええ」

「そっちの人誰？」

久遠が聞く。

「ん？ああ、ヒスイ・ハーツだ」

「私は久遠だよ！」

「一条要です」

この人たちと結界は関係してるんだろっとな、絶対。

「お二人はなんで此処に？」

「別にそんな喋り方しなくていいぞ」

「じゃあ、そうさせてもらっつ」

「さて、俺たちが此処にいる理由だったな」

そしてヒスイは語りだした。

ヒスイside

「ヒスイ、また鍛練ですか？」

俺が一人鍛練をしているとシルフが話し掛けてきた。

「ああ」

俺はまだまだ弱いからな。強くないと。

『だったら手伝ってあげようか？』

「「！？ 誰だ（です）！！」」

突然何処かから声が聞こえた。念話でもない。

『おっと、失礼。僕は神様だよ』

「神………だと？」

「本当にですか？」

信じられんな。神がいきなり話し掛けてくるなど。

『君にいい鍛練相手がいるんだ。ちょっとチャレンジしてみない』

嘘を言っているようには聞こえんし、なによりこいつにメリットがない。

「……………いいだろう」

「ヒスイ、信じるのですか？」

とりあえずはやってみないと。それに鍛練相手といつのも気になる。

『いいんだね？じゃあ送るよ』

そして俺たちは光に包まれた。

「お疲れ様」

「いや、そんな大層なことじゃない」

しかしあいつと戦うのか。はたしてどれほど強いのか。

「じゃあ、試合ますか」

「そうだな。二人は下がってくれ」

シルフと久遠という子を下がらせる。

「準備はいいか？」

そう言いながらあいつ、要は拳銃を取り出した。

「お前は魔導師ではないのか？」

「試合前に情報を話す奴がいるか？」

それもそうか。

「いくぞ！ゲイルアーク、セットアップ！」

《セットアップ》

「さあ、始めようか」

要side

両手にボウガン、あれがヒスイのデバイスか。

「いくぞ！唸れ、風念ー！」

《ストリームアロー》

風の弾丸が十発飛んでくる。俺はそれを魔導式ハンドガンで撃ち落とす。

「やるな！それがお前のデバイスか！」

「さて、どうだろね」

(身体能力100%解放、魔力100%解放)

相手の実力がわからん以上は気をつけないとな。しかし100%解放はまだ三秒かかる。

「隙だらけだぞ！ぶちまける水念！」

《アイスニードル》

氷の弾丸が飛んでくる。しかし俺にはアリストテレスがいる。

《シールド》

アリストテレスが張ったシールドが氷の弾丸を防ぐ。能力の解放も終わった。反撃開始だ。

《マスター！気をつけて下さい！凄い魔力です！！》

「ああ、わかってる！！」

俺は魔導式ハンドガンを懐にしまい、一気に間合いを詰める。

「速い！？」

「オラッ！！」

《ウインディシールド》

俺は拳を突き出すものの、シールドによって受け流される。風を纏ったシールドか。

「甘い!!」

俺は連続で拳を振るう。そしてシールドは砕けた。

「なに!?!」

「隙あり!」

俺はハイキックを繰り出す。

《ウインディムーブ》

しかし高速移動魔法によって避けられ、後ろに回られる。

「喰らえ! 風凰天駆!!」

成る程、上空から風を纏った蹴りを叩き込む技。といったところか。俺はその足を掴み、投げ飛ばした。

「なっ!?!」

《ウインディフィン》

ちっ、空中で踏み止まったか。

ヒスィside

なんて身体能力だ。迂闊に近付くとやられるな。やっぱりここは俺の得意な間合いで戦うのが一番だな。

「針雀！」

右手のボウガンから矢を三連射する。

「シールド」

だが要はそれを防ぐ。なんて硬いシールドだ。

「なら、荒鷹！！」

多重弾核とシールドブレイクの付いたこれならシールドごと貫くだろう。そう思っていた。

ビシッ

「「なっ！？」」

「貫けなかっただと！？」

「輝が入っただと！？」

俺は貫くと、要は防げると思っていた為どちらにも驚きがあった。

「ゲイルアーク！カートリッジ《マスター！右に動いて！！》くっ！？」

俺がゲイルアークの忠告に従い動くと、さっきまで首があった所を青紫の閃光が飛んでいった。危なかった。動かなければ、確実にやられていた。

「今度こそ！カートリッジロード！」

《ロードカートリッジ！》

「槍荒鷗！！！」

両手のボウガンから三発ずつ計六発の矢が飛ぶ。矢の一本一本には多重弾核とシールドブレイクがついている。一発の威力は荒鷹に劣るが、これなら倒せる。

「シールド、三重！！！」

向こうもシールドの数を増やしたか！

一発目が一枚目のシールドに当たり、シールドに輝が入る。二発目でシールドが砕け、二枚目のシールドまで当たる。三発目が二枚目のシールドに当たり、先程より大きな輝が入る。四発目が二枚目を砕き三枚目に当たる。五発目が三枚目を砕くのと一緒に消滅し、ついに六発目が要の腹を穿った。

「よし！！！」

「いっつ〜」

あれ？効いてるのか？

「ナメんな！シールドスライサー三連！！！」

「危ねっ!!」

あいつシールドを投げやがった。非常識な。

《マスター！後ろです!》

「ちっ！風刃脚」

さつき飛んでいったシールドが戻ってきた。それを蹴りによる鎌鼬で落とす。

「ケリがつかんな」

砲撃を叩き込むか。

要side

「殴るか」

遠距離戦では負けんが勝てん。それなら直接殴るのみ。

「アリストテレス、足場は頼む」

《了解》

俺は飛んでいるヒスイに向かって跳んだ。途中何発か矢が飛んできたが、全て殴って叩き落とす。そしてヒスイの目の前まで来た。

「終わりだ!!」

俺は殴ろうとする。だが

「今だ！カートリッジロード！！」

《ロードカートリッジ！》

「《ゲイルバスター！！》」

砲撃が叩き込まれた。

ヒスィside

ゲイルバスターを近距離から喰らったんだ。もう終わっただろう。

《マスター！！まだです！！》

「………馬鹿な！」

そこにはシールドに立っている要がいた。ダメージを受けている様子はなかった。

「残念でした！！」

《ウインディシールド！！》

ゲイルアークがシールドを張ってくれたが、要の拳に砕かれ、俺は叩き落とされた。

要side

俺は落ちたヒスイに言った。

「俺の勝ちだ」

「……………何をした？」

そりゃ気になるよな。でも教えるつもりはない。

「秘密だ」

「ちっ」

「ヒスイ、大丈夫ですか？」

「要、お疲れ様」

観客二人がこっちにきた。

『お疲れ様、それじゃ二人には帰ってもらおうよ』

神様が。まったくこの人は。

「早過ぎませんか？終わったばかりですよ」

『結界張ってるのがめんどい』

……………殴ったるか。

「ヒスイ、シルフさん。そういうことです」

「またね」

「少し話してみたかったが仕方ない」

「また会いましょう」

そう言っつて二人は消えた。

「にしても危ない戦いだつたな」

「そうなの？」

「そうなの」

もしヒスイがもっと近接戦が出来て、魔法が上手かったら勝率はぐつと下がったろう。最後までアルティメットワンを発動して無力化出来たものの、砲撃がAAA+以上だったらやられていた。

「もっと強くなるう」

オマケ

久遠とシルフ

「あつ、始まった」

「久遠ちゃんはどっちが勝つと思いますの？」

「要！」

「そうですか」

「ヒスイ、投げられたね」

「要くんはよく風凰天駆を掴みましたわね」

「要はチートだもん」

「チートですか」

「要が撃たれた！」

「でもぴんぴんしてますわね」

「丈夫だね」

「丈夫ですわね」

「ヒスイが負けましたか」

「お姉ちゃんは手伝わなくてよかったの？」

「ヒスイの戦いでもの」

「ふーん」

外伝<烈風の弓使い>(後書き)

終わった!

バルディツシユ様、いかがだったでしょうか?ヒスイはこんなもんでよろしいですか?

次回は要となのはが訓練校に行きます。

最後に……………久遠テラチート。

日常く訓練校からの依頼く(前書き)

今回はなんとなく書きました。

## 日常＜訓練校からの依頼＞

要side

みなさんに報告、最近二尉になりました。

「一条二尉、依頼がきています」

「依頼？」

仕事ならともかく依頼ってのは初めてだな。

「内容は？」

「高町教導官とともに訓練校の特別講師として来てほしいと」

なのはと俺を特別講師に？

「訓練校を潰す気か？」

「そこに久遠曹長がいれば間違いない」

言うようになったね、君も。  
まあいいか。どうせ暇だし。

「その依頼、引き受けた」

「了解しました」

ということとで訓練校に来ました。

「この度はお越しくださりありがとうございます」

「いえいえ」

腰の低い校長だな。

「まさか本当にエース・オブ・エース、高町なのはさんと地上の覇者、一条要さんに来ていただけるとは」

ん？『地上の覇者』？何だそれ。

「なのは」

「何？」

「地上の覇者って何だ？」

「えっ!？」

何この反応、校長まで。世間の常識なの？

「要くんの二つ名だよ」

二つ名？そんなもの俺にあったのか？つーか厨っばいな。

「要くんが以前、竜を三体、素手で倒したでしょ？」

あー、あの時か。アリストテレスがメンテの時に仕事が入ったんだよな。仕方ないから身体能力80%まで解放して倒したけど。

「その光景が凄まじいからそんな二つ名が付いたんだよ」

へへ。まああの時はやり過ぎたかなって思ったけど。

「では出番は10分後ですので」

「はい」

〈10分後〉

『ワー！ワー！』

「凄いね」

「学祭に呼ばれた有名人の気分だな」

本当に凄い声援だ。耳が痛い。

「では登場していただきましょう!!高町教導官と一条二尉です!!」

『ウワー!!』

出にくいな、これ。

「いごっか」

「ああ」

出ないと始まらない。とりあえず出よう。

『ウオー!!』

『キヤー!!』

なにこれ、パンダ?コアラ?これから動物園の動物に敬意を持つ。

「お静かに!!お二人から挨拶をいただきます!!」

えー、めんどくさい。まずはなのほか。

「みなさん、今日はよろしくお願ひします」

『ウオーー!!』

男どもがうるさい。たかが挨拶一つで。ん？あそこで手を振ってるのスバルちゃんじゃねえか。一応こつちも軽く手振るか。

『キヤーー!!』

えっ！？手振っただけでこれ？マジで有名人じゃん。

「次は一条二尉、お願いします」

俺の番か。

「えーと、人を指導するのは初めてなので、こちらも勉強させてもらうつもりで頑張ります」

『キヤーー!!』

無難に優等生っぽくしたつもりだけど、これでいいんだ。

「お前ら！もう自分の持ち場に戻れ!!」

あっ、あの人がここの教師かな。やっぱり迫力あるな。

「初めまして、高町教導官、一条二尉。ここの指導員をやっている者です。今日はよろしくお願いします」

「」  
「」  
「よろしくお願いします」

どんな風に教導しようかな。

「それでは一条二尉の好きなようにしてください」

それが一番困るんだよな。料理の時でもなんでもいいは駄目だよ。お母さんを困らせる。

「んじゃ、適当に攻撃してこい」

『はい！』

元気がいいな。これがいつまで続くか。

「いきます！！」

一人目殴り掛かってきたのを投げる。

「わあああ！？」

「次！」

「はい！！」

二人目、蹴りをしてきた足を掴み、また投げる。とにかくその後も投げ続けた。たまに悪い部分を指摘しながら投げる。

「お久しぶりです。一条二尉」

「あの時みたいにお兄ちゃん、もしくは要でいいんだぞ、スバルちゃん」

「私もちゃんはもういませんよ、要さん。そうだ、一ついいですか？」

なんだろな。まあどんなものでも受け入れるが。

「言ってみろ」

「パートナーと一緒に戦っていいですか？」

成る程、一人じゃ勝てないとみたか。いや、そういう感じはしないな。

「いいぞ」

「いって、ティア！」

「すみません、うちの相方が」

「気にするな。……えっと」

「ティアナ・ランスターです」

「そうか。よろしくな、ティアナちゃん」

「私もちゃんはいりません」

「そうか」

二人共訓練生にしてはなかなか強そうだな。楽しみだ。

「さあこい」

スバルside

憧れの人の教導。よし頑張るぞ。

「ティア、いくよ!!」

「わかってるわよ!!」

私は要さんを攻撃するが、私の拳は受け流され反撃される。しかしその寸前、ティアが魔力弾を撃ってくれた。

「おっと」

「勝手に突っ込むんじゃないわよ!!」

「ゴメン」

アハハ、怒られちゃった。でもやっぱり要さんは凄いな。デバイス

も使っていないのにあんな動きが出来るなんて。

『スバル、私が隙を作るからそこに一撃入れなさい』

『わかった』

そしてティアナは魔力弾を連射した。要さんはその全てを弾く。だけど弾いてるうちに隙が出来てきた。……今だ!!

「うおおお!!」

私は拳を繰り出す。上手く入ったと思ったが、私の腕は掴まれていた。

「残念。身体能力20%解放」

その言葉の意味はよくわからなかったけど、私はティアナに向かって投げ飛ばされた。

「わあっ!?!」

「くっ!?!」

ティアアが私を受け止めてくれたけど、要さんは私たちの額に銃を突き付けた。

「はい、終わり」

あーあ、負けちゃった。

能力解放は使うつつもりなかったのにな。あそこでスバルをティアナに投げなかつたら、間違いなく反撃受けたからしょうがないか。

「あの一条二尉？」

「なんだ？」

「この銃って……質量兵器じゃ」

そういえば、これを初めて見た人はみんな勘違いするんだよな。

「違う違う。これは魔力弾が撃てない俺の為の魔法銃。見た目は俺の趣味」

「えっ！？一条二尉は魔力弾が撃てないんですか!？」

「ああ。普段はデバイスが作ってくれるけど、俺一人じゃシールドしか作れない。体質でバリアジャケットも張れない」

「そうなんですか、すみません」

なんで謝るんだろう。俺なんか謝らせることでも言ったかな？

《主が魔法を使えないことに気を使ってるのでは?》

「そうなのか？」

「……」

ティアナは無言で頷いた。なんだそんなことか。

「確かに俺に魔法の才はない。でも他で十二分に補える。だから気にするな」

「……………はい！」

うん、いい返事だ。

「さあ、次！」

「いきます!!」

残りの教導を頑張りますか。

日程も全て終わり、俺はなのはと話していた。

「どうだった？なのは」

「みんな将来有望だよ」

「そうか。こっちは二人ほど期待の新人がいたぞ」

「へえ、要くんが言うなら本物だね」

おっ、あれは。噂をすればなんとやらってか。

「おい、スバル、ティアナ」

俺が呼ぶと二人は走ってきた。

「なんですか？要さん」

「あの、要さん。そちらの方って」

「紹介しよう、なのは。こいつらが期待の新人、スバル・ナカジマとティアナ・ランスターだ」

「「ええっ!?!」」

まさかそんな紹介をされるなんて思っていなかったよつで驚いている。

「あなたたちが……知ってると思うけど私は高町なのは。スバルは久しぶりかな？」

「はい!?!」

「……………」

緊張してるな。ティアナなんて口パクパクしてるし。

「そうだ。二人にいい物をやろう」

「「いい物？」」

俺が二人に渡したのは一つのメモリーカードだ。

「要くん、確かそれって」

「俺が今まで集めた戦闘資料だ」

「ええっ!?!」

「そんなの貰っていいんですか!?!」

「いいんだよ、コピーだし。将来への投資だ。期待してるぞ、二人共」

「「はい!」」

ちよっとプレッシャーをかけちゃったかな?だがそれくらいで駄目にはならないだろう。

「んじゃ、行こうか」

「うん。じゃあね、二人共」

「「さよなら!」」

この先が楽しみだな。

スバルside

「やったねティア！私たち期待の新人だつて！」

「……………そうね」

あれ？あんまり嬉しそうじゃない。なんでだろ？

「正直、あの期待に応える自信がないわ」

うーん、これは話題を変えないと。

「アハハ……………とりあえず、この資料見てみようよ！」

「そうね」

「この砲撃魔法。私にも使えるかな」

「銃でこんな格闘が出来るんだ」

「こんな技もあるんだ。シューティングアーツ以外もチャレンジしてみよう」

「成る程、こうすれば魔力効率も良くなるのね」

資料は物凄いわいになって、内容も濃いから一晩中見ちゃった。それで次の日の訓練に遅れちゃったけど、その日から資料を見て、それを参考に自主訓練をするのが私たちの日課になった。

日常く訓練校からの依頼く（後書き）

雨「さあ終わった終わった。そろそろ本編に入るかな」

フェ「作者さん」

雨「どうしたフェイト。珍しい」

フェ「最近私の出番少ないですよね」

雨「そう?」

フェ「そうです。次私を出してくれないと、ザンバーですよ?」

雨「わ、わかったからバルディッシュを首に押し付けるな!」

フェ「約束ですよ」

雨「はい。ということなのでみなさん。次回はフェイトの話です」

日常く遊びに行こう (前書き)

フェイトの話だよ。短いけど。

## 日常く遊びに行こう

要 side

今日は地球のフェイトの家にお呼ばれた。珍しいよな、フェイトから誘ってくるなんて。

ピンポーン

「はい」

「フェイト、要だが」

ガチャ

「いらっしゃい、要。入って」

「お邪魔します」

リビングまで行くと二人の少年、少女がいた。

「よう、エリオにキャロ。久しぶり」

「こんにちは、兄さん」

「お久しぶりです。お兄ちゃん」

こいつらとは結構前からちよくちよく会ってるうちに、兄と慕われるようになった。

「兄さんも一緒に遊園地に行くんですね」

何？遊園地？一切聞いていないのだが。

「ゴメンね、要。言うの忘れてたんだ」

「このうっかりめ」

まあ今日一日暇だからいいけど。

「お兄ちゃんと一緒に行けるんですね！」

「そうだな」

俺はキャラの頭を撫でながら言う。癒されるな。

「それじゃ行こうか」

「俺の車で行くか？」

最近免許を取ったからな。先日車も買ったし。

「ん、お願いしようかな」

「よしきた」

着いたぞ遊園地。此処は遊園地の他にも動物園も併設されている。

「何処から見るか」

「兄さん。僕ジェットコースターに乗りたいです!」

「私はメリーゴーランドがいいな」

男の子と女の子らしい意見だな。

「まあまあ、時間はいっぱいあるしどっちも乗ろうね」

フェイトもお母さんやってるな。

「そう言うつフェイトは何に乗りたいんだ?」

「ジェットコースター!」

即答かよ。スピード狂だな。

「ハハハ、じゃあジェットコースターから行くか」

「「キヤー!!」」

「「ワー!!」」

何故ジェットコースターに乗ると楽しいのに悲鳴を上げるのだろうか。  
楽しいからか。

「あー、楽しかった」

「もう一回乗ろうよ兄さん!!」

「要!あと一回!!」

いや、エリオはわかるがフェイト、お前はもう少し大人らしくな  
さい。

「駄目、次はキャラの番」

「「えー」」

まあ、えーなんて言っても言うこと聞いてくれるんだが、こいつら  
は。

「なら行くか、キャラ」

「はい！」

）  
）

よく考えたらメリーゴーランドに乗るの前世も含めて初めてだな。

「楽しいか？」

「はい！」

キャラは俺と一緒に、エリオはフェイトと一緒に馬に乗っている。

）  
）

あつ、終わった。終わる時はあつさりだな。

「楽しかったです！」

「そうかそうか」

子供はこつというのが好きなんだな。

「ねえ要。要は何処に行きたい？」

「俺？」

あんまり遊園地って来たことないんだよな。だからよく知らないし・

・・・

「動物園の方に行こうか」

どうせ動物園も併設されてるんだ。行ったほうがお得だろう。

「うんいいよ」

「兄さんの行きたい所でいいですよ」

「私も地球の動物をいろいろ見たいです」

満場一致で決定だな。

「じゃあ行くか」

動物園は久しぶりだな。昔は遊園地と違ってよく行ったからな。

「意外と広いね」

「そうだな」

遊園地のオマケみたいなもんだと思っていたら、こっちだけでも十分経営出来るんじゃないか？

「要、あっち見てみよう」

「おう」

フェイトに引っ張られている見回る。エリオとキャロもしっかりついて来てる。

「兄さん、あのライオン白いですね」

「………なんでホワイトライオンがいるの？」

あれ絶滅危惧種だろ？ すぎえなこの動物園。

「お兄ちゃん！ あそこでイベントやってますよ！」

「なら見に行くか」

やっていたのは動物サーカスだった。虎の輪くぐりだったり、熊の玉乗りだったり、猿まわしだったりいろいろとやっていた。

「凄いね」

「そつだな」

こういつ芸を教えるのってどんくらい掛かるんだろ。

「なんだか兄さんとフェイトさんて恋人みたいですね」

「エ、エリオ!？」

いきなりエリオがそんなことを言った為、フェイトが慌てた。

「エリオとキャラも恋人みたいだぞ」

「えっ!？」

「お兄ちゃん!!」

子供がませたことを言うからだ。キャラは完全にとぼっちりだが。

「要と………恋人///」

「おい、フェイトさん？」

「恋人///」

駄目だ。完全にトリップしてらっしゃる。

「よし、次行くぞー」

「「「おー」」」

ノリがいいねこの二人は。お兄さんそういつの大好きだよ。

「……………はっ!……………要?エリオ?キヤロ?あっ!みんな待って〜!」

いろいろ見たり、乗ったりして、今は帰りの車の中だ。エリオとキヤロは後部座席で寝てる。

「要、運転交代しようか?」

「問題ない。フェイトこそ寝てていいんだぞ」

「ううん、私は大丈夫」

「そうか」

「……………」

しばらく沈黙の時間が流れる。するとフェイトが話を切り出してきた。

「今日は楽しかったよ」

「ああ、俺もだ」

「……………あのイベントの時、エリオが恋人みたいって言ったでしょ？」

「ああ、言ったな」

あんなの何処で覚えてくるんだか。今度問いただしてみようかな。

「でもあくまで、みたいであって本物じゃないんだよ。だから私……………」

「本物になりたいか？」

「……………うん」

「駄目だ」

「なんで!?!」

……………言った方がいいよな。

「俺の中にはバケモノがいるだろ?」

「……………もしかして、暴走とか」

「違う。あの力は完全に制御出来る。だから暴走なんかで傷付けることはない。だけど俺と付き合うことで周りから傷付けられるかもしれないんだ」

「どづいづこと?」

「あの女はバケモノと付き合っている。頭がおかしい。脅されて付き合っている。あの女もバケモノを持つてるんじゃないか。とにかくいろいろなることを言われるんじゃないかって思うんだ」

世間とはそういうものだ。異常を廃除しようとする。その近くにいるものも例外ではない。

「あのね、要。私はそんなこと気にしないよ。なのはもヴィータもすずかもきつと同じ」

「……………つかなんで、なのはたちが出てくる」

「だって要を奪い合うライバルだもん」

いや、ライバルならフォローをするな。

「だから要はそんなの気にしなくていいよ」

「……………じゃあそつさせてもらおう」

なんか気が楽になったな。

「あっ！要、車止めて！」

「おっ」

いきなりどろしたんだろう。そう思い車を止め、フェイトの方を見た。

チュ

・・・・・・・・はっ？

「エへへ、キスしちゃったノノノ」

「ハ、ハハハ・・・・・・・・」

俺は笑うしかなかった。フェイトってこんなに積極的だったっけ？

日常く遊びに行こう（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「さあ今回から始まりました<アリシヤの部屋>司会は私アリサと」

シヤ「この作品ではザフィーラより目立っていないシヤマルです」

ア「シヤマルさん、それ言って悲しくない？」

シヤ「仕方ないわ、事実だもの。だから此処で目立つのよ!!」

ア「さて今回は要が何故付き合わないかの理由がわかりましたね」

シヤ「作者の未熟な脳ではこのくらいしか考えられなかったの」

ア「さあ次回はついにSttS突入ですね！」

シヤ「でもその前にSttS版設定があるから、みんな見てね」

ア・シヤ「ではバイバイ」

## StS版設定（前書き）

本編に入る前に設定です。

## S t S 版設定

雨「みんな、設定だよ」

要「楽しみにしている人はいないだろうから、さっさと終わらせて本編書けよ」

雨「おう。では、スタート」

### 一条要

22歳

178cm

71kg

ステータス（100%状態）

筋力・・・A+（EX）

耐久・・・A++（EX）

敏捷・・・A+（EX）

魔力・・・A++（EX）

幸運・・・C+  
宝具・・・(EX)

( )はORT解放時

スキル

アルティメットワン・・・B(EX)

武術・・・B

状況把握・・・B

心眼(真)・・・B+

気配察知・・・C+

現代兵器・・・C

New 神速・・・C

New 限界突破・・・C

( )はORT解放時

魔法

ルーフシールド・・・シールドを屋根のように折り曲げた魔法。砲撃系に対して凄まじい防御力を誇る。

シールドスライサー・・・もはや要の代名詞的魔法。シールドを薄く、端を鋭くすることによって斬撃武器として使用。脆い。強度をさらに脆くして、切れ味を上げた(改)もある。

ベールシールド・・・シールドを布のように柔らかくしたものの。強度は変わらない。相手に被せて再び硬くすることにより、バインドがわりにもなる。

二ドドルガン・・・魔力弾を針のようにしたもの。一点しか攻撃出来ないが、速度と貫通力は異常に高い。

技

抜骨・・・闇の書の夢の中で父親に教わった奥義。叩いた部分の関節を外す。名前は要が付けた。

装備

グローブ型インテリジェントデバイス「アリストテレス」・・・シールド以外の魔法が使えない要の為のサポートデバイス。男性人格。渋い声。地味。

魔導式ハンドガン・・・銃を使いたい。そんな要の我が儘によって出来た超簡易デバイスの一種。中に簡易カートリッジを内蔵しており、誰でも使える。最大弾数20発。見た目はコルトパイソン。

宝具・・・侵食固有結界「水晶渓谷」・・・自分を中心に水晶の世界を展開する。正確には固有結界ではないため、世界の修正力はほとんど受けない。固有結界内の全てのものをワンランク下げる。ものは「者」であり「物」でもあるため、ステータスも武器も魔法もワンランク下げる。

レアスキル・・・形態変化

陸戦・・・A A +

階級・・・三等陸佐

雨「まあこんな感じかな」

要「スキル等の説明は他の設定を見てくれ」

雨「じゃあ終わら《待った》！」なぬ？

久「久遠の説明がないよ！」

姐《私もだよ！》

雨「……………ならやつとく？」

久・姐「《うん！》」

雨「じゃ、スタート」

久遠

?歳

子供時

124cm

ピクグ

大人時

161cm

ピクグ

ステータス(大人時)

筋力・・・D+

耐久・・・C+

敏捷・・・A

魔力・・・A

幸運・・・A

デバース・・・A+

スキル

妖術・・・C-

これまで久遠が覚えてきた術。直接攻撃より呪いの類の威力が強い。

危険察知・・・B+

直感の一種。自分の危機に反応する。

魔法

主にフェイトの補助、射撃、砲撃魔法に加え、オリジナル魔法を使う。

オリジナル魔法

ミッドチルダ式に妖術を織り交ぜたもの。

地雷矢・・・地面から雷の矢を出す魔法。

雷爪・・・爪に雷を纏わせる魔法。今までも使えたが威力が強化された。

ヴァジュラ・・・久遠最強の砲撃魔法。短いタメ時間でSオーバー！。

デバイス

羽衣型インテリジェントデバイス「妲己」・・・女性人格で久遠と同じ口調。羽衣はオートガード機能があったり、ドリルになったりする。強度も凄まじく、シールドスライサーも防ぐ。そのため近接戦で久遠にダメージを与えることは難しい。

魔力変換資質・・・雷

空戦・・・S

階級・・・二等空尉

要「久遠は強いな」

久「エヘヘ」

姐《ねえ作者》

雨「なんだ？姐己」

姐《これだけ強いと六課に入った時リミッターってどうするの？》

要「それに関しては問題ない」

姐《なんで？》

要「俺と久遠はセミフリー魔導師という設定だからだ」

姐《セミフリー？》

要「そう。管理局に所属していても特定の部隊に所属せず、好きなように仕事をする。それがセミフリー魔導師だ」

姐《でもそんなの認められるの？》

要「俺と久遠の功績がいいから特別に認められたんだ。だから今回

六課には入るのではなく、協力するということになるんだ」

姐《協力だからリミッターは付かないってことなんだ》

要「そういうことだ。みなさんも納得してもらえましたか？」

雨「では次回、本編で会いましょう」

久・姐「《バイバイ》」

## S t S 版設定（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「みなさんお元気ですか？アリシヤの部屋の時間ですよ」

シヤ「前回反響が意外とあってびっくりです」

ア「さて今回作者が勝手に作った『セミフリー魔導師』ですが、どの部隊にも所属せず、自由に仕事が出来るといいじゃない。なんでみんなならないの？」

シヤ「それはね、アリサちゃん。デメリットが大きいかからよ」

ア「どんなのなんです？」

シヤ「まずセミフリー魔導師になるにはかなりの功績と推薦が必要なの。要くんはなのはちゃんと並ぶ管理局の顔だし、リンディさんたちの推薦もあるからそこはクリアー。次にデメリットね。セミフリー魔導師は給料が凄く低いから、危険な任務を数多くこなさないと駄目なの。だからなる人は少ないの」

ア「ならどうして要と久遠はなっただんですか？」

シヤ「要くんと久遠ちゃんは束縛を嫌うからね。それに強いから、一般的に危険な任務も軽くこなせるの。もし何かあっても翠屋で働けばいいと思ってるみたい」

ア「成る程」

シャ「じゃあ今回はこのくらいにしましょっか」

ア「次回のアリシャの部屋も見てね」

ア・シャ「バイバーイ」

## StSプロローグ(前書き)

プロローグなんでちょっと?短めです。

## StSプロローグ

要side

「よう、はやて久しぶり」

「要くん来てくれたんや」

親友に誘われて来ない奴がいるか。それに今日は期待の新人の昇級試験の日なんだから。

「スバルとティアナを推薦したのって要なんだよね」

「そうだぞ」

さあ、こんな所でつまずいてくれるなよ。それにしても……………

「何故リインが試験官なんだ？」

あの子は出来るのか？

《私の妹を信用してくれないか？》

「あー、スマンな。ディオネ」

つか久しぶりの登場だな。お前も。

《作者が出してくれないのだ》

「ドンマイ」

出しにくいだけで作者はお前のこと好きらしいぞ。

「んじゃ、俺はなのは所に行ってくる。あとから久遠も来るから」

「」「行つてらっしゃい」「」

「なのは」

「あつ、要くんどうしたの?」

「挨拶にきた」

「そつなんだ」

さて、あいつらの様子はどうか。うむ、いい感じかな。

「あの調子なら大丈夫かな?」

「まあトラブルはいつ起こるかわからんから油断は出来んが」

俺がそう言った時、いきなりトラブルは起こった。ティアナのクロ  
スファイヤー、スバルのリボルバーがスフィアを破壊したが、破壊  
しそこねたスフィアの攻撃を避けるさいティアナが足をくじいた。  
さらにティアナの撃った流れ弾でサーチャーが壊れた。

「あーあ、やっぱり」

「にははは………やっぱりって」  
まあすぐに新しい映像がくるだろう。

「早速きたな」

映像に写ったのはティアナ一人。この試験最大の難関、大型スフィ  
アの攻撃が直撃するシーンだった。

「大丈夫かな？」

「大丈夫だろ」

データではティアナは幻術の類が使えたはず。おそらくあれもそう  
だろう。

「これからどうなるかな？」

スバル side

今はティアナが囷として頑張ってくれている。私がつまくスフィアを  
破壊しないと。

「ウイングロード!!」

水色の道がビルに突き刺さる。

「いくぞ！！」

私はカートリッジをロードし、空を走る。そしてビルの壁を破壊してスフィアを確認する。

「おおおお！！！」

スフィアの障壁に拳がぶつかる。カートリッジをさらにロードし、障壁を破壊する。

「一撃・・・・・・・・必倒！！！」

私は後ろに下がり、拳に魔力を集束させる。

「デイベインバスター！！！」

砲撃がスフィアに直撃し、スフィアを貫いた。

『ティア！やったよ！』

『ご苦労様。時間もないから早く来て』

『うん！』

要side

「砲撃魔法か」

近代ベルカのスバルがよく使えたな。まだ精度は粗いが実戦でも使えるレベルだな。

「なのは、ゴールに行くぞ」

「うん」

おー、きたきた………ってあれ？大丈夫なのか？あのスピードで。

「なのは、ネットを頼む」

「そうしたほうがいいね」

スバルとティアナは予想通りゴールを越えていった。

「わあああ！？」

なのはがうまい具合にネットを張ったからよかったものの、あのままだったら落ちたぞ。

「スバル、ティアナ、久しぶりだね」

「なのはさん………」

なのはが二人に話し掛けている。ここは普通感動の再会シーンになるのだが、あんな事する子にそんな余裕は与えません。

「久しぶりだな、お前ら」

「「要さん！」」

「ティアナは足をリインに治療してもらえ、スバルは話がある」

「えつと………何ですか？」

理解出来ていないようだな。

「危険行為をしたんだ！！説教に決まってるだろ！！ティアナも治療が終わったらすぐに来い！わかったな！！」

「「ヒイイイ!?!」」

あつ、これハマリそう。

## StSプロローグ（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「みなさん、こんにちは。アリシヤの部屋の時間ですよ」

シヤ「今回ようやくStSに入りましたね」

ア「今回はみんな待ってた彼女も登場……かも？何よこの  
台本」

シヤ「作者が上手く書ける自信がないそうよ」

ア「まったくあの馬鹿作者は」

シヤ「100万アクセスの希望も待ってます」

ア「詳しくは活動報告で」

**S t S 第一話（前書き）**

一部暴走キャラがおります。

## StS 第一話

要side

スバルとティアナは案の定不合格だった。だがすぐに再試験が受けられるらしい。もし再び落ちるようなら………フッフ。

「要………怖いよ？」

「ん？何がだ？」

「あつ、戻った」

フェイトもおかしな事を言っな。

「要」

「おお、久遠」

到着したか。

「すずかの所にデバイス取りにいこう」

「あー、すずかの所か」

最近すずかは性格が変わったんだよな。昔はおしとやかな大和撫子  
って感じだったけど今は………

「すずか、来たよ」

「はい」

まあ見てもらえればわかるか。

「いらっしやい。要くん、久遠ちゃん。要くん、そろそろ結婚する気になった？」

ほらきた。いつの間にかこんなことを言うようになった。昔のすずかは何処へいった。

「すずか、デバイスのメンテナンスは終わってるか？」

「うん。それで返事は？」

「NOだ」

「えー」

さっさと受け取って帰るか。

「すずかさんそこまでです。要さん、久遠ちゃん、いらっしやい」

「よう、シャーリー」

「シャーリー元気？」

シャーリーは最近はずすかのストッパーとして頑張っている。ありがたいことだ。

「はい、アリストテレスと妲己です」

「調子はどうだ？」

《良好です》

「お帰り〜」

《ただいま〜》

ふむ、問題はなさそうだな。まあこの二人に限ってそれはないか。

「そうだ。要くんにプレゼント」

そう言っですずかがくれたのは、手榴弾だった。

「こ、これは！」

「要くんが欲しがってた『魔導式手榴弾』だよ。大変だったよ〜。破片が飛び散らないで、純粋な魔力爆発を起こすの」

「ありがとう！すずか！」

「ならこの婚姻届けにサインを」

「それはねーよ」

さて俺は今、久遠とシグナムと一緒に空港にいる。エリオとキャラロを迎えに来たのだが……

「何故エリオしかない」

「……はぐれました」

まったくこいつは、いつも手を繋げと言ってたのに。

「シグナムは向こう、久遠はあっち、エリオはそっちを捜せ」

「ああ」

「わかった！」

「……はい」

何処にいるのかキャラロは……

おっ、いたいた。

「おい、キャラ」

「あっ！お兄ちゃん」

エスカレーターの上にはいたキャラがこちらを見た瞬間、足を滑らした。

「キャラッ!?!」

「マズイ!!身体能りよ《ソニックムーブ》むっ!!」

キャラが落ちそうになった時、たまたま下にいたエリオがソニックムーブを発動させた。キャラを助けた時、キャラの胸を触ったのはスルーしてやるう。

「大丈夫か？キャラ」

「はい」

怪我ないようだな。

「フリードは？」

「キュルクー！」

靴から顔を出したフリードは元気に返事をした。こっちも問題ない

な。

「それじゃ行くぞ」

「「はい」」

数日して、ついに機動六課のスタートの日だ。とりあえず部隊長室に向かう。

「入るぞ」

中に入ると制服姿のなのは、フェイト、はやて、リイン。そして眼鏡を掛けた知的なイケメンが一人いた。

「お久しぶりです。要さん」

「ん〜？」

どこかで見たことあるような……………もしかして。

「グリフィスか？」

「はい、その通りです」

成る程、随分と成長したな。昔はチンチクリンのちびっ子で、あのまんまだと思ってたら、人間成長するな」

「orz」

「どうした？グリフィス」

「要くん……………確信犯やる」

俺知らな〜い。

はやての六課発足の話があったけど、めんどくさいからカット！今はフォワードの訓練をしよう。

「通信師兼デバイスマスターのシャリオ・ルフィーニです。シャリーって呼んでね」

「デバイスマスター兼要くんのつm「ムラー！……………月村すずかです」

「さすがはこんな所でもそんなことを言うか。」

「さすがちゃん、要くんが困ってるでしょ?」

「あれ?なのはちゃんいたんだね。てつきり要くんが指導するの  
かと思っただよ」

「フフフ」

「なのはさーん、さすがさーん、目が笑ってませんよ?」

「ガクガク、ブルブル」

「ほら新人たちも怖がってる。」

「お前ら!さっさとやれ!」

「ヴィータまで出てきたよ。」

「はい」

「スマンな、ヴィータ。お前が来なかったら大変だった」

「困ったら呼べよ。すぐに来るから」

「そう言っただけでヴィータは戻っていった。」

その時のフェイトとはやて

<ピキーン>

「今、何か出遅れたような……」

「何を言っとるんや、フェイトちゃん」

何処かで何かあったような気がしたが……

「すみません、ここで訓練をするんですか？」

ティアナがそう質問した。まあここは港だからな。

「それに関しては問題ないよ。シャーリー」

「はい」

シャーリーがいろいろ操作をすると港に街が現れた。

「なのはさん監修のバーチャル訓練場だよ」

ちなみに俺監修のバーチャル訓練場もある。だがあまりに難易度が高いため、隊長陣もあまり使用しない。俺と久遠はよく使うんだが。

「みんな頑張ってね」

「お前らなら大丈夫だろ」

「『はい！』」

俺と久遠が応援する。俺のは応援が微妙だが。

ティアナside

今私たちが相手をしているのはガジェットドローンという機械だ。AMFという魔法を掻き消す厄介なフィールドを持っている。

「ちびっ子、名前は何だっけ？」

「キャラロであります」

「キャラロ、あれどうにか出来る？」

「やってみたいことがあります」

「私も」

さて、そうなると上手くガジェットを誘導しないと。

『スバル、ガジェットを誘導して』

『わかった!!』

スバルはガジェットを追いだした。エリオは橋を破壊してガジェットの動きを止める。

「フリード、ブラストフレア!!」

「キュルクー!!」

ちび竜が炎を吐いて、さらにキャラロは追撃する。

「アルケミックチェーン!!」

無機物の召喚魔法か………たいした才能ね。妬ましい。さて残りは二体になったし、最後まではいは決めますか。

『スバル、そのまま追い込みなさい』

『了解!』

要さんのくれた戦闘資料の中にあつた、多重弾核。便利だけど魔力喰うのよねこれ。

「まあAMFを破るのはこれしかないんだけど」

「…………準備完了。射程もちょうどいい。」

「バリアブルシュート!!」

私が撃つた魔力弾は二体のガジェットを貫いた。

要side

「多重弾核か」

ヒスイには劣るが見事な一撃だったな。他の奴らもガジェットの特性をよく理解して頑張ったな。

「みんなお疲れ様。要くん、何か言っただけで」

「ふむ、初めての訓練にしてはよくやった。だがこれはまだ序の口だ。もっと精進しろ」

「…………はい!!」

「みんな。要はね、人を褒め慣れてないんだよ」

「ツンデレだね。はっ！だから私にもツンなんだね！」

「久遠にすずか、黙らっしやい」

この二人は……お仕置きしてやるっか。

「まあいい。今日は俺が飯を奢ってやるっ」

「「やったー！」」

「ありがとうございます。要さん」

「ありがとうございます。お兄ちゃん」

こうしてフォワード陣の初訓練は終わった。

S t S 第一話（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「今回で4回目。そろそろみんな慣れたかな？アリシヤの部屋です」

シヤ「えっと、これの分量は……」

ア「シヤマルさん。何してるんですか？」

シヤ「クッキーを作っているの。出来たらアリサちゃんも食べる？」

ア「……結構です」

シヤ「そう……」

ア「今回はさすがに暴走しましたね」

シヤ「なのはちゃんも暴走しかけたけど」

ア「それを押さえるヴィータ、カツコイイ!!」

シヤ「本人はあそこで言葉じゃなくて、暴力で鎮めればライバルが減ったのに。って後悔したそうよ」

ア「……」

シヤ「……」

ア・シャ「」ではまた次回！「」

## S t S 第二話（前書き）

模擬戦で一話使ってしまった。  
しかも出来びみよ〜。

## StS第二話

要side

今日はフォワード陣の訓練が終わったら、新人と模擬戦をする予定だが……

「俺がやったら駄目なのか？」

「駄目だよ。要くん手加減苦手じゃない」

「ねーねー、私は？」

「「駄目」」

「えー」

誰が新人たちと模擬戦をするのか決まらないのだ。久遠はオートガードでまともに攻撃が当たらないだろうし、俺はなのはいわく敵し過ぎるらしいし、俺から見たらなのは優し過ぎるし。どうしたもんか。

「どうしたんだよ、お前ら」

「おお、ヴィータ。いい所に来た」

俺らは軽く今までの経緯を話した。

「だったら要が魔法しか使わなければいいだろ。要は魔法をほとん

ど使えないんだから」

「うーん、それなら大丈夫かな？」

「能力も30%まで押さえるようにしよう」

これなら程よいハンデになるだろう。

「ありがとう、ヴィータ」

「この程度気にすんな」

ホントにヴィータはありがたい存在だな。

さて、フォワード陣が集まったことだし始めますか。

「これから課題を与える。俺との模擬戦だ。合格条件は5分避けきるか、俺に一撃与える。ただし、一人でも撃墜されればまた最初からだ。俺は魔法しか使わんからな」

「はい！」「」「」

ティアナside

要さんの模擬戦なんて……

「逃げ切る自信はある？」

「あんまりないかな」

「でも兄さん魔法しか使いませんから」

「お兄ちゃんが格闘しかしないのより、勝ち目はあると思います」

まあ訓練生をちぎっては投げ、ちぎっては投げしてたあの格闘よりかはマシかな。ってなんでエリオとキャロがそんなことを知ってるの？

「あんたたち、要さんの戦い方知ってるの？」

「はい」

よし、これで大分楽になる。要さんの戦闘データは少ないからね。

「要さんの魔法について教えてくれる？」

「えっと、兄さんが使う魔法はシールドと魔力弾の二種類です」

「えっ！？それだけなの！？」

「あんた忘れたの？」

訓練校に来てもらった時に教えてもらったのに。

「それをレアスキル『形態変化』で加工します」

「『形態変化?』」

そんなレアスキル、聞いたことがない。

「魔法の形を変える使い勝手が悪いレアスキル。っってお兄ちゃんは言っていました」

「それで、どんな風にするの?」

「シールドは三種類で、魔力弾は一種類ですが、内容までは……」

「………そう」

「ただシールドは凄く硬いって、フェイトさんが言っていました」

まあ少ないながらもデータが入ったのはありがたい。

『お前ら、作戦会議は済んだか?』

「もう少しです」

『3分な』

「あんたたち、出来る限り一撃入れるわよ。ただその間攻撃が当たらないようにね」

「うん！」

「はい！」

「さあやるわよ！」

要 side

あいつらがどんな動きをするのか。楽しみだな。

《主、楽しそうですね》

「そうか？」

《ええ、とても》

そついう気持ちは表に出るのかな？

『要さん、準備完了しました』

「おう。なら始めるぞ」

『はい！』

俺も準備するか。

「アリストテレス、セットアップ」

《セットアップ》

なんだか本編でセットアップしたの久しぶりな気がするな。

《主、来ます》

「わかってる」

すでに気配なら察知出来ている。エリオとスバルが突っ込んでくる。

「うおおおー!!」

「やああああー!!」

「ベールシールド」

向かって来たスバルにベールシールドをかけてやる。

「うわっ!?!」

「固定」

モロにベールシールドを被ったスバルの動きが止まる。俺はベールシールドを硬くして動けないようにする。

「ハアッ!」

「ひよいと」

エリオの攻撃を避ける。そのままエリオはスバルを担いで走っていた。

「逃がさんよ」

《スファイア》

アリストテレスが魔力弾を作り、それを加工する。

「穿て、ニードルガ!？」

俺がニードルガンを撃とうとした時、無数の鎖が襲い掛かってきた。アルケミツクチェーンか。

「ホイホイ」

全て避けるが、その間にエリオたちに逃げられた。

ティアナside

『スバル、大丈夫?』

『うん、とりあえず』

まさかシールドをバインド代わりにするなんて、あれがレアスキルかしら?それにしてもエリオはよくスバルを担げたわね。さあこれからどうしようかしら。

『あんたたちは攻撃をして隙を作って。私はそこを狙い撃つ』

『『了解!』』

要 side

今度は何処から狙ってくるかな。

「はああああ!!」

「またか」

何か策があるんだろうが、まる見えだぞ。

《シールド》

アリストテレスがシールドを作り、スバルの攻撃を防ぐ。

「やああああ!!」

《シールド》

次はエリオの攻撃を防ぐ。これで終わりか？

「ちよつと、ティア〜! 攻撃は!?!」

成る程、ティアナが攻撃する予定だったのか。何かトラブルがあったかな? しかしスバル。策をばらすのはどうかと思っぞ。

「切り裂け、シールドスライサー」

「!!?!」

今はこの二人を潰すか。

二人は咄嗟に離れるが、間に合いそうにない。しかしそこへ魔力弾が飛んできた。さつきから失敗してばっかだな、俺。

「まあいい、ティアナの居場所はわかった」

俺は空中に跳び、シールドに乗った。

「あそこか」

俺はシールドスライサー（改）を作り、ティアナがいるであろう所へ投げた。ビルからティアナが逃げるのが見えた。

「フリード！プラストフレア！」

「キュルクーー！！」

「むっ」

俺は別の所へ跳び、新しく足場を作る。

「次は何をしてくるかな？」

《本当に楽しんでますね》

そりゃ、あいつらがどんな手を出してくるか楽しみだからな。するとエリオが正面から凄まじい速さで飛んできた。キャロのブーストか。

「甘い！シールド！」

ここでさらにスバルが横から攻撃を仕掛けてきた。

「ディバインバスター!!!」

「ルフシールド!」

威力はどちらもあるが、俺のシールドは破壊出来んな。そう思った瞬間だった。

ガツン

「あいた」

俺の頭に見えない攻撃が当たった。攻撃が飛んできたであろう方向を見るとティアナがいた。成る程、幻術か。やられたな。スバルの砲撃が終わった時、俺は言った。

「合格。よくやった」

「「「「「やったー!!!」」」」」

まだまだ未熟者だな、俺も。

「お疲れ様、要くん」

「やられちゃったね」

「みつともない」

向こうで何やらスバルたちが騒いでいる。どうやらスバルのローラーブーツが焼け焦げたらしい。

「そろそろあいつらのデバイスをやる時期かな」

「そうだね」

昼食後、俺らはデバイスルームにいた。

「ここにあるのがみんなの新デバイスだよ」

「あのー、ストラダとケリュケイオンは変わってないように見えるんですけど」

確かに見た目は変わっていない。しかし中身が違う。

「まあ、それぞれ使ってみるのが一番だ」

そして全員が自分の新デバイスを手に取って、いろいろしていた時にそれは起こった。

ビーン ビーン

「警報!？」

まったく、タイミングがいいのか悪いのか。

「早速実戦だ!全員準備しろ!」

「「「はい!」「」「」

## S t S 第二話（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「ぱくぱく」

シヤ「もぐもぐ」

雨「お二方、本番始まっていますよ」

ア「えっ！？マジ！？」

シヤ「アリサちゃん！早く準備しないと！」

ア「コホン。みなさん、おはよう、こんにちは、こんばんは。アリシヤの部屋ですよ」

シヤ「レイくんのクッキー、美味しかったわ」

ア「さて今回は模擬戦だったわけだけど、フォワード陣は頑張ったわね」

シヤ「そうね。でも要くんもかなり手加減してたから」

ア「魔力弾が当たって、あいた。で済ませる所が要らしいわね」

シヤ「それにしても、ヴィータは地道に好感度を上げてるわね」

ア「出ているのは少ないはずなのに」

シャ「では次回はフォワード陣の初任務」

ア「見て下さいね」

S t S 第二話（前書き）

今回は短いですかね。

## StS 第三話

要side

今回はどうやら山岳地帯の貨物列車に乗せたレリックが狙われたらしい。ヘリにはなのは、俺、フォワード陣、そしてパイロットのヴァイスが乗っている。

「ヴァイス、頼むな」

「任せて下さい！旦那」

「なのは、フェイトは？」

「現場に直接行くって」

なら問題はないな。ちよっくら瞑想でもしようかな。いや、新人たちのケアをしよう。

「お前ら、体調は万全か？」

「」「はい」「」

「……はい」

キャラの元気がないな。どうしたんだ？

「キャラ、悩み事でもあるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「怖いか？」

そう言うとキャロの体がビクリと震えた。

「実戦か？力か？」

「・・・・・・・・力です」

成る程、確かキャロはその力で一族追放をされたんだっけか。

「なら問題ないな」

「えっ!？」

キャロだけでなく、全員驚いている。

「自分の力が怖いって事は、自分の力の危険性を理解してるって事だ。そんな力を今更暴走させる事はない。それに、フォワードの間がいる。俺やなのは、フェイトもいる。これでも心配か？」

「キョクー!」

「っと、フリードもいたな」

「・・・・・・・・ありがとう。お兄ちゃん」

うん、これでいい。

「そろそろ現場ですよ」

「了解だ。お前ら準備はいいか？」

「「「「はい！」「」「」」

「なのははフェイトと合流しろ。新人たちは貨物列車に行け」

「要くんは？」

俺？そんなもの決まっているだろうに。

「高みの見物だ」

「にゃっ！？ちゃんと働くの！！」

「冗談だ。ここでヘリの護衛をする」

流石に高みの見物なんて馬鹿な事をするつもりはない。

「ならいいけど・・・」

信用してないのか？なのはのくせに生意気な。

「到着しましたぜ」

「じゃあ全員頑張れよ」

「了解!」

「要くんも頑張つてよ」

なのはとフェイトが合流してガジェット相手に撃ちまくっている。

「ストレス貯まってたのかな?」

「さあ?どつでしょう」

フォワード陣は貨物列車でガジェットと交戦中。そして俺は……

「シールドスライサー」

「お見事!」

へりに近寄ってくるガジェットを切り落としていた。ただこうして  
るのも暇だし、ヴァイスと話でもするか。

「ヴァイス、あいつらの事どつ思つ?」

「新人つすか？たいした奴らですよ。若いのにあれだけの力を持つてるんですから」

「だよな」

「旦那もたいした人だと思いますがね」

まあ22で三佐になってれば、たいしたものと言われてもしようがないが………

「魔法が使えればなあ」

「ハハハ、旦那が魔法を使ったらそれこそ最強ですよ」

「そんなことねえよ」

そうだ。世の中には俺以上の奴らが沢山いる。魔法を使える程度でどうにかなるような奴らじゃないのがな。

「どうしました？」

「いや、何でもない」

今はフォワード陣に集中しよう。スバルとティアナは列車の中か。エリオとキャラは………

「旦那！」

「待て！」

大型のガジェットの手相をしていたエリオが崖から落とされ、キャラ口がそれを追って飛び降りた。キャラ、お前の覚悟を見せてみる。

「竜魂、召喚！」

すると崖から大きな白い竜、フリードが現れた。その背にはエリオとキャラが乗っている。

「ブラストレイ！！」

フリードの炎がガジェットに襲い掛かるが、AMFに防がれる。だがこれで終わりではない。

「一閃、必中！！」

キャラのブーストによって強化されたエリオの一撃がガジェットを貫いた。

「ハァー、よかった」

ヴァイスは安心したようだが、まだだ。

「ヴァイス、俺も出る」

「えっ？わかりました」

俺がへりから出た時、再び大型ガジェットが現れて二人に襲い掛かる。

「身体能力30%解放」

さあ、潰れる。

「オラア！！」

俺はへりから飛び降り、ガジェットのとっぺんに拳を叩きつけた。ガジェットに見事に拳がめり込んで、俺はすぐに離れた。

ドゴーン

「うわっ！？」

「きゃっ！？」

「あれ〜？」

ガジェットが爆発したのだが、もちろん拳がめり込んだからではない。俺はめり込んだ穴に『魔導式手榴弾』を置いてきたのだ。しかしここまで威力があるとは………すずか、恐ろしい子！

『要！何したの！？』

『フェイトか。すずかから貰った武器を使った。俺は悪くない』

そうだ、俺は一切悪くない。

『要さん。レリックの回収完了しましたが、さっきの爆発音は？』

『すずかのくれた武器のせい。俺は悪くない』

『はあ』

随分と広範囲に爆発音が響いたんだな。それなのに俺たちの耳に異常がないって、どんだけだよ、すずか。

「帰るぞ。エリオ、キャロ」

「「はい」「」

あー疲れた。帰って飯食おう。

## S t S 第三話（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「みなさん、アリシヤの部屋の時間ですよ」

シヤ「今回の話は……特に話すことはないですね」

ア「強いて言えば、要とヴァイスは仲がいいって事かしら」

シヤ「そういえば、作者さんがネットサーフィンしていたら、魔法少女リリカルなのはの相性占いを見つけたそうよ」

ア「へー、それでどうしたんです?」

シヤ「As版とStS版があつて、StS版の方で要くんの名前を入れてみたらしいの。そしたら」

ア「そしたら?」

シヤ「相性が1番いいのがルーテシアちゃんって」

ア「……それはなんとも」

シヤ「たしか4番にスカリエッティ、5番に騎士ゼストだったかしら」

ア「要、向こうに行った方がいいんじゃないかしら」

シャ「それは困るわね」

ア「では今回はここまで」

シャ「次回も見て下さいね」

100万企画第一弾(前書き)

香崎様からの依頼

ザファイーラの憂鬱再び

## 100万企画第一弾

はやてside

ハァー、最近は忙しくて大変やな。何や楽しい事でもないかな。

コトン

「ん？」

突然デスクの上に小箱が落ちてきた。手紙も付いとるし読んでみよ。

「何々……」

『最近お疲れの八神はやてさんへ  
今回再び性転換薬を送ります。

楽しく使って下さい

作者』

「……ふふふ」

これがあればまたあの『女ザフィーラ』が見れる。

「ふふふ」

部屋の外

「主はやてはどうなされたんだ？」

「知らねえよ」

「はやてちゃん……………」

《また良からぬ事でも考えられたのか》

「何か起こるんですか？」

ザフィーラ side

今日は実に平和だ。何事もなく時間が過ぎていく。刺激が足りない気もするが、一条と試合でもすればいいだろう。

「ザフィーラ！」

「何でしょう、主」

「クッキー作ったから味見してくれへん？」

そういうものは実家が喫茶店の高町が適任だと思つが……………  
そう主に言ってみると。

「たまにはいろんな人の意見を聞きたいんや」

成る程、一理ある。常に一定の人物の意見を聞くのではなく、沢山の人物の意見を聞く事も大切だ。

「では、いただきます」

クッキーを一つ食べる。やはり旨い。流石はあるっ!?

「ぐう!?!」

こ、この感覚は!?!忘れるはずもない。あの悪夢を!!

はやてside

私の前には苦しむザフィーラがいる。これを見ると罪悪感がちよつとあるけど、体に無害なのはわかつとるから大丈夫。

「ハア………ハア………」

「大丈夫か?ザフィーラ」

「主!あなたという人は!私に恨みでもあるのですか!?!」

そこには前と同じ『女ザフィーラ』がいた。あっ、耳と尻尾が生えとる。

「って、私?」

ザフィーラの一人称は俺やつたはずやけど………よし。

「えい！」

むに

「きゃあ!？」

きゃあって、もしかして。

「何をするんですか!?!」

「ザフィーラ、口調が女性になつたらん？」

「何を言っているのです。私……私……私？」

完全に女性口調や。説明書をもう一回確認しよ。ザフィーラが放心状態になつとる今のうちに。

「あつ、裏になんか書いてある。何々……」  
『どうせなら見た目だけでなく、口調や行動等、あらゆる所まで女性になるように改造してみました』  
成る程、成る程」

作者、グツジョブや!!

ザフィーラ side

私はどうすればいいのか。見た目だけでなく口調まで変わってしまったとは……

「ザフィーラ、大丈夫なん？」

「……………主」

元はといえば主が、主があんなクッキーを食べさせなければ…！

「うわー…！」

「ちよっ！？ザフィーラ何処行くん！？」

ハア、つい走り出してしまったが、どうすればいいのか。

「あのく、どちら様ですか？」

「ん？」

スバルか。そういえばわかる訳がないか。

「ザフィーラだ」

「……………はい？」

まあ当然の反応か。

「ザフィーラだ」

「……………嫌だな。そんな冗談笑えませんよ、お姉さん」

お姉さん、か。

「……………」

「もしかして本当に?」

「ああ」

「エエー!?!?」

スバルの悲鳴が六課に響き渡った。凄まじい声だな。

「どうした!? スバ……………ザフィーラ?」

「ヴィータか」

「アハハハハハ! ま、またか!? またなのか!? アハハハハハハ!」

……………こいつは。私の苦勞も知らずに。

「ヒィヒィ、も、もう駄目。わ、笑い死にそう。プツ、クク」

「もういい!?!」

こんな時はやはり一条の所へ行こう！あいつならこの気持ちをどっにかしてくれる……はず。

要side

「エエー！！」

何だ今の悲鳴は。スバルはどうしたんだ？

『要さん、今の何でしょう』

「さあな。まあ特に緊急性を感じる悲鳴でもないし、大丈夫だろ」

『何ですか。緊急性を感じる悲鳴って』

シャーリーにはわからんらしい。まあ経験を詰めばわかるぞ。

「訓練を続ける。AMF3倍、重力2倍だ」

『わかりました』

おお、やっぱりズシツとくるな。重力操作機能を追加してよかった。いい訓練になる。

「一条！ここへブツ！？」

ん？あいつは……何故再びいる。

『要さん、知り合いですか？』

「ザフィーラだ」

『……はい？』

「性転換薬を飲まされたザフィーラだ」

『マジですか？』

そりゃ信じられないよな。性転換薬なんて。

「本気と書いてマジだ」

「うう」

あつ、重力に潰されてたザフィーラが起きた。

「一条、何だこの重力は」

「スマンスマン。シャーリー、設定解除」

『了解です』

軽くなったし、これでザフィーラも大丈夫だろ。それにしても・・・

「またはやてか？」

「ああ」

まったくあいつは。お仕置きしてやるうか。

「ザフィーラ、試合でもするか？体を動かしたらすつきりするぞ」

「……………そうしよう」

「身体能力60%解放」

これくらいでいいだろ。

「いくぞ、一条」

「……」

「ハアアアア！！」

ザフィーラが突っ込んでくる。女性になった為か、一撃一撃の威力

は弱くなったものの、柔軟性のあるしなやかな動きになった。なに  
より……………

ポヨン ポヨン

あの胸は反則だ。ブラジャーの類を付けていないため非常に揺れる。  
目の保養にはなるが、集中しにくい。

「そこっ！…！」

「甘い！」

ザフィーラの蹴りを受け流す。ふともものラインが何とも……………  
…ってこれじゃ完全にエロ親父だ。そろそろ反撃しないと。

「せいっ！…！」

「くっ！…！」

俺は掌底を放つ。ザフィーラは避けようとしたが、中途半端に避け  
た為。

むにゅ

「あっ  
」

「！？  
」

胸に手が当たった。素晴らしい感触です。はやてが夢中になるのも  
無理はない。

「い、いやあああ!！」

「ブハツ!？」

いやあああ、だと!?!あのザフィーラが!?!まあそんなことより痛い。ザフィーラはどっかに走り去ったし。

『大丈夫ですか?』

「うん」

ザフィーラ side

「ハア」

また女のような行動をしてしまった。たかだか胸を触られた程度で悲鳴を上げてしまうとは。これ以上被害を出さない為に部屋に閉じこもろう。

そして部屋に入ると、何故かリインとディオネがいた。

「誰ですか?ここはザフィーラの《またか?ザフィーラ》へっ?」

「ああ、まただ。しかも今回はタッチが悪い」

「どういうことですか？」

《ああ、リインは知らなかったな。簡単に説明してやるっ》

ディオネが前回の事を簡略にリインに説明をした。私が性転換薬を飲まされた事や一日経たないと治らない事等だ。

「ザフィーラ、大変ですね」

「何故こんなことになるのやら」

《ザフィーラ、話をいいか？》

何だかディオネの目が怖いぞ。ホログラムのはずなのに。

《お前は何やら勘違いをしているようだ、これはいいことなのだぞ。何せ出番が貰えるのだからな。たまたま作者の思いつきで生まれた女ザフィーラが、この100万企画の一つとして読者様選ばれたのだぞ。しかも一番最初にだ。だというのに何だお前のその態度は。いろいろな奴の出番を喰ってにおいて、私が代わりにやりたいほどののだぞ。私など普段の出番が……》

「はい、はい」

何やら所々問題発言もありそうだが、ここで逆らってはいけない。絶対にいけない。

「あー、ザフィーラおつた!!」

「主!!」

よかった。主のおかげでこの説教からも解放される。

「えい!!」

むじよ

「ひゃあ!？な、何を!？」

「えいえい」

むにむに ぐにゆぐにゆ

「あつ!んっ!いやっ!だ、駄目です!あるっあん!!」

「ここか?ここがええんか?」

「だめえええ!!」

「うう」

「そんな落ち込んでも、な」

「むー」

主は自分が何をやっているかをわかっていない。セクハラだぞ、あれは。

「出ていって下さい」

「へっ?」

「リンとディオネも連れて出ていって下さい!」

「ちよっ!ザフィーラ!」

主たちを追い出した私は、その日一日部屋に引き込まれたのだった。ちなみに後日、要と主が謝りにきた。まあ試合中のトラブルだから許したが、主に関しては三日は口を利かなかった。

## 100万企画第一弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「100万記念でもやるよ、アリシヤの部屋」

シヤ「今回、セリフが一つ貰えました」

ア「おめでとついでいます」

シヤ「ふふふ、今回の100万企画の中には私メインの話もあるから頑張るわよ」

ア「それにしても、女ザフィーラ人気ありますね」

シヤ「そうね。作者の中ではザフィ子さんって呼ばれてるそうよ」

ア「へー、でもザフィーラも大変よね」

シヤ「そうだとしても、出番が貰えるのはいい事よ」

ア「それは身に染みてわかってます」

シヤ「今回は要くんはエロ親父だったわね」

ア「死ななければ33歳ですから」

シヤ「じゃあ今回はここまで」

ア「次回も見て下さいね」

100万企画第二弾（前書き）

バルディッシュ様からの依頼です。  
これでよかったのかわからない。

## 100万企画第二弾

要side

「……………何処だ、此処は」

俺は目が覚めるとただっ広い荒野に立っていた。寝てたのになんで立ってるんだろっ。

『さあみなさん、おはよう、こんにちは、こんばんは！これから要の無双が始まる……………かも』

「作者！？てめえ一体どういうことだ！！」

いきなりこんな所に呼び出しやがって。

『企画です』

「……………企画か」

ちっ、企画ならしょうがないか。

『メインの相手 comes までウォーミングアップの相手を用意しました』

メインも気になるが、こいつ言うウォーミングアップってどれくらいものだろう。まあ準備するか。

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン

発動。アリストテレス、セットアップ」

《セットアップ》

これでたいていの奴には勝てるだろ。

『では登場していただきます。バルバトス・ゲイティアです!!』

「はっ!?!」

目の前に魔方阵が現れると、そこには筋肉ワカメがいた。

「ぶるああ!!誰が筋肉ワカメだ!!」

心を読むな。アトワイトストーカー。

「貴様、余程死にたいらしいな」

「やってみな」

「ぶるああ!!」

成る程、なかなか速い。流石はボスキャラか。だがチートやバグ程でもないな。

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラア!!」

「又ウウ!?!」

全身に拳を叩き込んでやる。俗に言うオラオララッシュだ。

「おまけだ！シールドスライサー！！」

「術に頼るんじゃないやねえ！！エアプレッシャー！！」

確かに魔法の一種だが、今のを術と認識するか！つーか前から言いたかった。

「てめえのそれも術だ！！」

俺はエアプレッシャーの重力範囲から逃れ、バルバトスの頭に踵落としを入れた。

「グハツ！！」

威力があり過ぎたのか、バルバトスの頭が地面に埋まった。頭が潰れずに埋まるとは、丈夫だな。

「ほらよ。お前の嫌いなアイテムだ」

俺は埋まったバルバトスに魔導式手榴弾を投げた。

ドカーン

『お疲れ〜。ちょうどメインも来たよ』

作者の声が聞こえると同時に魔方阵が現れた。そしてそこから出てきたのは……………

「ヒスイ！シルフさん！」

「「要<sup>さん</sup>！」」

成る程、この二人がメインか。うん、納得。

「ああああー!!」

あれ？聞き覚えのあるこの声は……

ドーン

「いってーな！おい!!」

「この小説4度目の落ちご苦労、一真」

「要!？何で俺は落とされるんだ!？」

まずそれがよ。普通此処は何処だとかからだる。

『それはね、君が始めに落とされたからだよ』

「畜生!!」

哀れだな、一真。

『それでは要VSヒスイ&シルフ&一真の始まり。作戦会議スタ

ー」

「「「ちよっ!?!」」」

「要さん、本当に戦うのですか？」

「まあ試合ですから、大丈夫ですよ」

一真side

「初めまして、シルフさんはお久しぶり。御剣一真だ」

《一真のデバイスのゼロデウアイスだ》

「ヒスイ・ハーツだ。よろしく」

《マスターのデバイスのゲイルアークです》

「お久しぶりです、一真さん」

とりあえずヒスイとは初対面なので挨拶をしておく。

「まずは戦力を把握しようか」

まあ確かに、互いの戦闘スタイルを知つとかなないと戦えないからな。

「俺はデジモンの力、ってわからないか。とりあえず何でも出来る」

「俺はボウガンを使った遠距離戦が得意だ」

「私は風の術が出来ますわ」

そうなると俺は近接戦だな。要相手ならグレイソードあたりが妥当か。

「そうだ。要の実力は知ってるか？」

俺は何度か共闘したから知ってるけど、ヒスイたちはどうかかわからないからな。

「一度戦ったからな。かなりの身体能力と魔力、あと魔法も変わってるし」

「へえ、戦ったんだ」

「ああ、まさか砲撃が利かないとは思わなかったが」

要、砲撃が利かないって……やっぱりチートだわ。

「それと銃の腕も凄かったですわね」

「銃？」

あいつそんなものまで使うのか。

《一真さんの情報は？》

「だいたい同じだけど、やっぱりORTだな」

「『《ORT?》』」

あつ、知らないんだ。流石に要も人との戦いには使わないか。

《蜘蛛みたいなバケモノだよ。40mくらいあるな》

ゼロが簡単に説明してくれる。

「そんな隠し玉があったのか」

「未恐ろしいですね」

「まったくだ」

あいつこの調子だと、まだ何かありそうだな。

『そろそろ時間だよ』

此処の作者さんが言う。

「やるか!」

「ああ!」

「頑張りましょー!」

要side

あー、何であいつらと戦うんだろ。

「要！やるぞ！」

意外と早かったな。そう思い時計を見ると10分経っていた。

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン発動」

能力の解放は大丈夫。武器も問題ない。

「アリストテレス！」

《いつでも》

「よし！」

頑張りましたよ。うか。

荒野で俺たちは向かい合っている。

「いつでもこい」

「ならいくぜ!!」

黒い騎士になった一真が、剣を持って突撃してくる。

「ストリームアロー!!」

「トルネードランス!!」

一真の後ろでヒスイは10本の風の矢を、シルフさんは10の竜巻の槍を放ってくる。

《シールド》

二つの魔法はアリストテレスによって防がれる。俺は………

「撃つべし!!」

一真に銃を乱射した。

「ブレイブシールドセット!!」

《ブレイブシールド》

見せたことがないのに動揺せず防ぐか。ヒスイから聞いたな。

「喰らえ！」

「断る！」

俺は魔力放出を使って、一気に下がる。

「荒鷹！！！」

「シールド！」

俺が下がった所へヒスイの矢が飛んでくる。

バキーン

「なっ！？」

前回は輝が入ったが防げたのに、威力が上がってる。

「シールドスライサー三連！！」

それぞれ一枚ずつ投げつける。一真は剣で、ヒスイは矢で、シルフさんは風で迎撃するがこれでいい。

「悪いなヒスイ。穿て、ニードルガン二連！！」

技発動後の硬直状態では避けられまい。シールドにしても二発を防げるはずがない。そう思っていた時期が俺にもありました。

「エアスラスト!!」

ヒスイの目の前に現れた風の球体によってニードルガンは破壊された。

「それって攻撃術じゃ」

「あら、要さんこそシールドで攻撃してるじゃありませんか」

いや、確かにそうだが……つか無詠唱発動って流石風邪の精霊。

「風です!!」

空気も読めるか。

「隙ありだ!!グレイソード!!」

一真が気が付くと目の前まで迫っていた。

「槍荒鷗!!」

前回俺のシールドを破壊した六本の矢も飛んでくる。

「トルネードランス!!」

10本の風の槍を1本に纏めた一撃もくる。仕方ない。

「O R T部分解放」

俺の背中から出た2本の脚がその全てを防いだ。

ヒスイside

俺らの攻撃が当たる寸前。要の背中から出た脚がそれらを防いだ。

《マスター、あれが》

「おそらくO R Tだな」

脚だけであれほどの威圧感か。

「ヒスイ」

『どうした？シルフ』

『あれは危険ですわ』

危険？まあ確かに安全な気はしないが。

『精霊が集まっても倒せるかどうか』

『何！？』

そんなものなのか。ならどうして要は大丈夫なんだ？

『おそらく神様の力でしょ』

やっぱり凄いんだな、神様って。

『まあ、あの脚以外は要さんです。十分に勝機はあります』  
『だな』

最高の一撃を叩き込んでやる。

一真side

「成る程な、異能の拳闘士が8割ってというのがよくわかる」

「何で一真があいつを知ってる？」

そうか、要の世界で消滅したんだっけ？

「何でか知らんが、こっちに来て俺と戦った。今のお前みたいに脚2本生やしたぞ」

「あいつそんな隠し玉を」

要知らなかったのか？オリジナルなのに。

「まあいいや。喰らえ！オールデリート……」

グレイソードの力を使い、脚を切り落とそうとした。

ザク

「えっ!？」

「痛っ」

おいおいオールデリートは全てを消し去るんだぞ!!ザクってなんだザクって!!MSか!!

《避ける!—真!!—》

「くそっ!」

ORTの脚が襲い掛かってくる。異能の拳闘士のレベルより数段上の威力とスピードで。

「オメガインフォース!!」

相手の動きを予知するこれなら避けられる。だがそれも相手が自分を上回れば意味がない。

「ぐああ!？」

予知に動きが追いつかず、俺は攻撃を喰らった。ブレイブシールドで防いだものの、ブレイブシールドは砕かれ、俺は吹き飛ばされた。

「大丈夫ですか!？」

「今回復する。ファーストエイド」

傷自体はほとんどなかったからヒスイの回復魔法で全快になった。

「サンキュー、ヒスイ」

「気にするな」

それにしても厄介だ。アルファインフォースでも使うか。

「一真さん、私とヒスイが同時攻撃をしますわ。その隙に攻撃してください」

「わかった」

確実に仕留めるならそっちの方がいいかな。

「いきますわよ！ゴッドブレス！！」

「これでも喰らえ！神射鶏！！」

うわっ、スゲエ。これ喰らったら一たまりもないぞ。だけど相手は要。油断禁物だ。

「アルファインフォース！！」

俺は無数の斬撃を叩き込む。けどなんだかおかしい。斬れた感覚がない。

《おい、一真！！よく見ろ！！》

「……………こりゃ斬れん」

そこには完全なORTがいた。そりゃ斬れませんよ。

《何ぼーっとしてやがる！30秒経つぞー！》

「えっ！？もう！？」

そして……………

「Gyuaaaaaa!!」

「逃げろ!!」

あれ相手に喧嘩するほど肝が据わってない。

「おいおい、何だよあれ!？」

「ヒスイ！逃げますわよ!!」

「Gyuaaaaaa!!」

あっ、駄目。速過ぎ。

「」「わあああ!!」「」「」

全員吹き飛ばされました。

要side

「大丈夫か？」

「うん」「うん」

よかった。怪我させるつもりはなかったけど、思ったより吹き飛んだからな。

『みなさんお疲れ様。そろそろお帰りの時間です』

「だそうだ」

「もうやりたくない」

「まあ、ある意味いい経験になったな」

「疲れましたわ」

全員ホントにお疲れだな。まあしょうがないか。ヒスイとシルフさんの足元に魔方陣が現れる。

「もうか。じゃあな、要」

「また会いましょう」

そして二人は消えた。

「俺は？」

そう言った一真の足元に穴が空いた。

「ここでも落ちかー！！」

「一真、哀れな子」

今度は戦いじゃなくて遊びたいな。

100万企画第二弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「アリシヤの部屋、はっじまるよー!!」

シヤ「みなさん、お元気ですか？私は元気です。だから本編に出させて下さい」

ア「……さあ今回は要無双？です」

シヤ「アリサちゃん。無視しないで」

ア「いちいち相手にしてられません」

シヤ「酷い!!」

ア「さて今回何故が登場したバルバトス」

シヤ「作者がある意味好きだからだそうよ」

ア「イジリキャラとして？」

シヤ「多分」

ア「次回はレイ様の依頼です」

シヤ「ではみなさん、さようなら」

100万企画第三弾（前書き）

A r i s h i a 様からの依頼。

最後は俺の妄想。

## 100万企画第三弾

要side

「・・・・・・・・・・・・・・・・よし」

「要、何してるの？」

「久遠か」

ちよつどキリもいいし、少し休憩するか。

「ボトルシップを作ってたんだよ」

「ボトルシップ？」

「ビンの中に船の模型を作るんだよ」

「へー」

暇だったのでやってみたら意外と楽しかったから続けている。ちなみに

今まで三隻作っている。

「要いる!？」

「フェイトか。どうした？」

するとあわててフェイトが部屋に入ってきた。

「た、大変だよ!!」

「落ち着け。何が大変なんだ?」

「ピンクのドアから人が出てきて、なんというかいろいろ変なことして、とにかく大変なの!!」

ピンクのドア?まさかあいつがまた来たのか?

「よう要、久しぶり」

「何しに来た、レイ」

やっぱりこいつか、今度は一体何の用なのか。嫌がらせか?いたずらか?

「どちらかといえばいたずら」

「心を読むな」

「久遠。もふもふさせて」。

俺のそんなセリフを無視して久遠に抱きつこうとした。

「姐己、セットアップ」

《セットアップ》

「へぶっ!!」

レイは妲己のオートガードに弾かれた。ざまあみる。俺の許可なく久遠に抱きつこうとするからそういつ目にあうんだ。

「「「ここか!」「」」

突如そう言って現れたのは、スク水を着せられたシグナム、メイド服を着せられたヴィータ、そして再び女体化したザフィーラだった。

「レイ……お前」

「若気の至りだ」

「「「黙れ!!」「」」

シグナムたちが攻撃を仕掛けるが、全てひよいひよい避けるあたりこいつらしい。つーかどうやってこんな服着せたんだ? ザフィーラは強制的に性転換薬飲ませれば済むだろうけど……

「見つけたで〜。写真撮らせて〜」

成る程、はやての協力か。なら、お仕置きしないとな。

「久遠、ライトニングバインド」

「わかった!」

《《ライドニングバインド!》》

「へっ?」「」

二人は縛られた。レイはすぐに抜け出せるだろうが、もつ目の前にあいつらが迫っている。

「紫電一閃!」

「ラケーテンハンマー!」

「鋼の鞭!」

「ぎゃああああ!」

俺ははやてのお仕置きをするかな。

「さあはやて、お仕置きの時間だ」

「いやああ!」

さて二人のお仕置きが終わって、とりあえずみんなでお茶を飲んで  
いる。のだが

「何故私は元に戻せない!!」

「だって戻す薬がないんだもん」

「もう一度同じ薬を飲んだらどうだ？」

性別が変わったんだから、もう一度性転換薬を飲んだら男に戻るんじゃないかと思ったんだが……

「そんなことしたらどんな副作用があるかわからんぞ」

「なら一日待つしかないんだね」

なのはの言う通りだな。下手なことするより安全な方を選んだ方がいいな。

「なら私はまた一日この姿か……」

「ザフィーラ、安心しい」

「主？」

「女ザフィーラはみんな大好物や」

「うわー！そんなことだと思いましたよー!!」

ああ、ザフィーラが泣きながら走って行ってしまった。

「ザフィーラ、可哀相に」

「アルフ、同情するなら性転換するか？」

「嫌だよ！！」

「女の性転換して面白いか？レイ」

「うん」

こいつは自分の楽しさをとことん追求するな。

「レイ、私と模擬戦しないか？」

《シグナム？いくら出番が少ないからといって、無茶をするのはどうかと思うぞ》

「ディオネも出番が少ないからってわざわざ会話に入ることはないぞ」

《一条。死ぬか？》

「フェイト」。怖いよ」

「よしよし」

さて、ギャグパートはこんくらいにして。

「シグナム、どうしてだ？」

「レイは強いのだろうか？ならば戦ってみたいと思うのは当然だろう」

それは当然ではない。バトルジャンキーの思考だ。

「いいぜ。やるうか」

「でも何処でやるんだよ」

ヴィータの疑問ももつともだ。この二人が戦える場所など少ない。

「要の訓練場は？」

ふむ、確かに俺の訓練場なら耐えられるだろう。

「ならそこでやるぞ」

レィside

要と試合ならともかく、シグナムとやることになるとはな。どんな武器で戦おう。そうだ、備中青江にしよう。非殺傷効果も付けたくないとな。

「ほう、随分と長い刀だな」

「長いだけだと思っなよ」

銘は無くても名刀だぞ。

「では準備はいいか？」

「いつでもいいぞ」

シグナムが斬り掛かってくるが、それより早く首に斬撃を入れる。

「シッ！」

「くっ！？」

流石に防ぐか。やるな。

「まだまだ！！」

「はあああ！！」

二人の斬撃が飛び交う。だが俺の攻撃の方が僅かに早いため、シグナムに少しずつダメージを与える。

「ハアハア」

「どうした？この程度か？」

「……………フウ……………レヴァンティン！カートリッジ

ロード！！」

《ロードカートリッジ》

くるか。ならこっちも。

「紫電」

「秘剣」

二人の集中力が高まる。

「一閃!!」

「燕返し!!」

炎の斬撃と三つの同時斬撃がぶつかる。

「くっ!?!」

「俺の勝ちだ」

二つの斬撃で紫電一閃を無力化し、三つ目でシゲナムを仕留めた。

「流星はレイだな」

「次はお前がやるか?要」

「いいぞ」

へー、いいんだ。楽しめそうだな。

「ただし、あまり広域攻撃はするなよ。さっきの戦いじゃほとんど壊れなかったけど、俺との試合になると一気に暴走しそうだからな」

「ちえー」

せつかく楽しい戦いになると思ったのに。

要side

「頑張つてね、要くん」

「おう」

どれほどあいつに近付けたかな。

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン発動」

「もういいか？」

「ああ、やろっか」

まずはお互いの拳がぶつかった。おそらくこの動きはなのはたちに視認出来たかどうかのレベルだろう。

「らあっ！！」

「よっ」

流石に避けられるか。ならこいつはどつだ。

「パイナップルの豊作だぜ」

「ちよっ！？お前局員じゃねえの！？」

ズドーン

俺が持ってた7個の魔導式手榴弾を全て叩き付けた。

「ゲホッゲホッ。今のは魔力爆発か」

「ああ、すずか作の魔導式手榴弾だ。今ならお安くしとくぜ」

「なら後で買おうかな」

今のは不意打ちにはなったがダメージなしか。

「「おおおお！！」」

殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る殴る

殴る殴る

ただその繰り返し。こっちは魔力放出での強化もあるのに、ホントにチートだな。

「やっぱりこいつ殴り合いは俺には向かねえや。もっとスマートにやらないと」

「へー、ならどうする」

「こいつする」

すると俺の足を黒い泥のようなものが覆った。これは!!

「創世の土!!!?!」

「正解」

ネロ・カオスの固有結界があって出来るもんなのに、創ることができるとは。

「どうする?それを破壊するなら大陸破壊レベルの攻撃が必要だぜ」

ORTを使えばいけるだろうけど……

「俺の負けだ」

俺は敗北を認めた。

Leiside

はっ？何でだ？まだORTがあるだろうに。

「ORTは使わないのか？」

「ここ局内だぞ」

「あっ」

そうだったな。こんな所であればマズイな。

「あーあ、別次元でやればよかった」

「俺は嫌だね」

『マスター！何処ですか！？』

ヴィードが呼んでるな。そういえば置き手紙に遊んできます。としか書いてないな。

「そろそろ帰るわ。遊び足りないけど」

「帰れ帰れ。どうせまたすぐ来るんだろ？」

「どうだろな。それじゃあな」

そうやって俺は………帰らなかった。

「どっした？」

「いや、あの手榴弾貰ってねえな、と思ってた。1個でいいからく

れね?」「

1個あれば複製は楽だからな。

「仕方ないな。誰かすずかを呼んでこい」

「此処にいるよ」

「「うおっ!?!?」」

「一体いつの間になっていたんだ?」

「はい、これね」

「サンキュ。じゃあ今度ことまたな」

俺は魔方陣を使って帰った。

要 s i d e

やっと帰ったな。暴れるだけ暴れやがって。

「あつ、要くん。これ」

すずかが渡してきたのは2枚の紙だった。

「何だ、この紙?」

「訓練場の修理代」

「……やっべ。よく見ると意外と壊れてるな。こりゃ大分掛かるぞ。」

「ただもう一枚を書いてくれれば、私が払うよ」

「何でだ？」

「夫婦になるからだよ。夫の責任を妻が負うなら問題ないでしょ」

成る程、つまりこれは婚姻届けということか。俺は婚姻届けの方をびりびりに破いた。

「あぁー!!--」

「修理代くらい自分で払う」

まあその修理代は意外と高くて、財布がすっからかんになったけど。

オマケ

ヴァイター side

メイド服、か。はやてに着せられた時は嫌だったけど、改めて見ると悪くないよな。

「ヴィータ」

「うわぁ！？何だよはやて！」

「気に入ったん？」

「べ、別にそんなこと」

「それ要くんに見せたらどうなるやるな？」

要に……もし要がこんなのが好きだったら……

「ヴィータ、行ってき。今なら要くんは部屋におるで」

「……」

「要。いるか？」

「ヴィータか。入っていいぞ」

要はあたしの格好を見ると目を丸くしていた。

「どっ、かな」

「あ、うん。可愛いと思っぞ」

「ホントに?」

「ホントに」

えへへ、そうか。可愛いか。

「要、疲れてるだろ?マッサージしてやるよ」

「へっ?でも」

「いいんだよ。今のあたしはメイドなんだから」

昨日のヴィータは積極的だったな。マツサージした後すぐ部屋を出ていったけど。そんなことを考えながら食堂に入ると……

「……おはようございます。御主人様」「……」

メイド服を着たなのは、フェイト、すずか、久遠、スバルがいた。つて久遠とスバル!?

「何やってるんだ？久遠、スバル」

「可愛かったから」

久遠は……こう言っちゃあれだがいつも通りだな。可愛いし。

「えっと、それは／＼」

スバルは……まさか。いや、まて。子供の頃助けてくれた人に憧れるのはよくあることだ。

「要さんが、好きだから／＼」

NO!!-- 一番当たってほしくない可能性が当たっちゃまった!!  
俺はその日は一日中、5人のメイドに奉仕されるのだった。

「とうとう夢を見たのさ」

「「「「「夢じゃないよ。」  
「くん・たん」  
「「「「「」

「ですよねー」。

## 100万企画第三弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「みなさん、アリシヤの部屋の時間です」

シヤ「本日最初のニュースはこちら」

ア「スバル、ハーレム入り確定」

シヤ「作者はティアナかスバルか迷っていたそうですが、最終的にスバルにしたそうです」

ア「まあ要が助けたという設定がありますしね」

シヤ「ということと現在のハーレム要員は、なのはちゃん、フェイトちゃん、すずかちゃん、スバル、久遠ちゃん（？）、となっております」

ア「ちょっと待って下さい。（？）って何ですか？」

シヤ「久遠ちゃんは非常に微妙な位置にいます。要くんに対する好きが『Love』なのか『Like』なのか、本人もはっきりしていないんです」

ア「十年もいるのに？」

シヤ「だからです。久遠ちゃんにとって、要くんは最初は変わった人。次にいい人。次に気になる人。そして好きな人なんです。なの

はちゃんたちのように一気に好きが芽生えたのではなく、徐々に芽生えていったのです」

ア「成る程、これからの久遠にも注目ですね」

シャ「それでは今回のアリシャの部屋はここまで」

ア「次回も見てくださいね」

100万企画第四弾(前書き)

秋代様からの依頼。  
要くんフルボッコ。

## 100万企画第四弾

??? side

「本当にやるのか？」

「よいではないか。楽しめるぞ」

「まあウチも会ってみたいしな」

「私も最強種を見てみたいからな」

はあ、要も大変だな。まあ楽しみなのは俺もだけどな。

「では私が召喚するぞ」

要 side

さて、訓練も終わったし、武器の整備も済んだし、寝るか。

「！？」

何だ！？いきなり魔方陣だと！？くっ！転移させられる！！

「久しいな、一条要」

「！？ORT解放！！」

俺は即座にORTを解放させる。何故こいつがいる？それにこの何もない空間はなんだ？

「ちよつと落ち着け、要」

『貴史！？何故そいつと一緒にいる！？』

貴史とあの男以外にも二人の女性がいる。何者だ？

「まあ説明するから元に戻ってくれ」

『………わかった。ORT封印』

貴史は信用出来るからな。今は言う通りにしておこう。

「はじめましてやな。近衛薫や」

「カスミ・ヴェネーラだ」

「あの時名乗らなかつたな。魔王だ」

「一条要」

全員が全員凄まじい強さだな。こんなのが四人集まって何するつもりだ？

「一条要。我らはこれから次元世界を支配する」

「何！？」

確かにこいつらの力があればたやすい事だろう。だが何故？理由がさっぱり見つからない。

「要くんがウチらを倒せばええだけよ」

その通りだが、倒す自信が全くない。一人なら相打ちくらいに持ち込めるかもしれんが。

「それで、どうする？ 私たちに世界に支配されるのを見ているか？ それとも止めるか？」

「当然後者だ！！ OR T解放！！」

俺はOR Tを解放し、水晶渓谷を発動した。

貴史 side

まあこうなるよな。向こうは最初から全力みただけど、俺はどうしよう。

「来い！刹那！」

薫が火の竜を出す。

「キシヤアアア！！！」

「Gyuuuuuuu！！！」

怪獣対決か？凄いなあ。

「瞬炎！」

「漆黒の炎嵐！」

火竜の頭から現れた大きな目によってORTの体は燃え、カスミの黒炎による嵐がORTを包み込んだ。流石にやり過ぎじゃないか？

「Gyuuuuuuu！！！」

心配の必要はなかったな。まったくの無傷じゃんか。

「ちよつと、瞬炎を吹き飛ばさんといて！」

「すまないな」

成る程、カスミの魔法が薫の炎を消したのか。じゃあそろそろ俺も力を使うか。

「今こそ 汝が右手に

その呪わしき命運尽き果てるまで

高き銀河より

下りたもう蛇遣い座を宿すものなり

されば、我は求め、訴えたり、

喰らえ その毒蛇の牙を以て！！

汝が神に、我が身を、捧げん！！」

俺は右手の悪魔の腕を解放する。

「固有結界発動」

さらに魔王が固有結界を発動させ、O R Tの固有結界とぶつかり合い、互いが飲み込み合おうとする。

二つの固有結界が発動するところなるんだ。

「スネークジェノサイド  
蛇殺！！」

俺が攻撃したが弾かれた。これは楽しくなりそうだ。

カスミ s i d e

やはりあの程度では効かないか。最強種は伊達じゃないな。しかし、何か違和感があるな。

「エクスキューションーソード！」

相轉移させる一撃だが、軽く碎かれる。まあ確かめるためだからいいんだが、やはりそうか。

「薫、体が重くないか？」

「ちょっとな。わかるん？」

「おそらくO.R.Tの固有結界のせいだろう」

あれの能力は他のものの能力を下げるものだろう。厄介だな。

「まあいい。能力が下げられても確実に葬れる一撃を放てばいいだけの話だ」

薫 side

うーん。能力が下げられるんやったら、今のウチのステータスじゃダメージは与えれんな。

「G y u a a a a ! !」

「おっと」

危ない危ない。何やウチを狙っとるな。一番弱いとでも思ったんかな。

「舐めるんやないよ。崩！！」

ウチの周りに複数の炎の玉が出来る。

「喰らい！虚空ー！！」

炎の玉から炎のレーザーが飛ぶ。これでどつぜ。

「Giii」

「あらら」

所々焼けとるけど再生したし、固有結界も傷付いたみたいやけど直つとるじ。

「どないしよ」

BLEACHの技も効かんやろし、雷帝しかないかな。

魔王side

「ふん！」

我が魔皇剣を振るうがすぐに間合いの外に逃げおる。

「随分と逃げ足が速くなつたな」

「.....」

無反応か。我を一番の脅威として見ているようだが、他の者も甘くないぞ。

「赤い槍！！！」  
ブラッディ・ランス

「Giiiiii!?!」

貴史の血の槍がORTの脚を切り裂く。切断までにはいかなかったようだが隙が出来た。

「終わりだ」

我はORTの頭に剣を振り下ろした。だが

「甘いんだよ！」

「何!?!」

一条要はORTから人に戻りおった。40mからのがいきなり小さくなったのだ。我の剣は当たるはずがなかった。

「ORT部分解放!!」

一条要は背中からORTの脚を出し、我を吹き飛ばした。

要side

流石のバケモノ、魔王も空中で俺の全力攻撃を避けるのは無理だったか。

「クハハハハ！面白いぞ、一条要！」

「マジか」

ノーダメージかよ。骨くらい折れってんだ。

「ORT解放」

むっ！？貴史に切られた傷が治らないか。そういう類の武器か。

「その傷にならダメージを与えられるか？」『巨神ころし』！！」

「Gyuii!!」

(ぐあああ!!！)

脚が吹き飛ばされたか。かなり痛いな。だがこれで再生できる傷になった。

「再生なぞさせると思ったか？」

「Giiiiii!?!」

(がああああ!?!?)

クソッ!!あの剣に切られたせいで、また再生出来ない傷になったじゃねえか!

「さあ、どつする?」

.....自傷行為は嫌いなんだが.....  
俺は自分で脚をぶつちぎった。

(グッ)

そして脚をすぐに再生させた。

「緑の宇宙人みたいだな」

貴史黙れ。

しかし体力がそろそろキツイな。無理な封印と解放。さっきの再生方法。どれも負担が大きい。さらにこんなバケモノどもと戦っていることも精神的にくる。

「そろそろ終わりとするか」

魔王の剣の魔力が高まる。

「レク・リク・ラク・ライネック

アラストール

天壤の劫火

モドランス

形状槍」

カスミはカードから燃える槍を取り出す。

「雷帝」

薫は金髪になり、全身から雷が噴き出している。

「悪いな要。赤い槍」

ブラッディ・ランス

貴史は血色の槍を取り出す。籠っている魔力は魔王並か。

「G i i」

(守るか)

この身は防御に回れば、アルカンシエルさえ防ぎきる。だけど一つ心配なのはこいつらの攻撃の神秘の大きさ。アルカンシエルは兵器だから、魔力砲とはいえ神秘はほとんどなかった。だから膨大な神秘の塊であるORTは生き残れた。だがこいつらの攻撃には神秘がある。その神秘の大きさは間違いなくORTを越えるだろう。俺、死ぬかも。

「魔皇剣!!」

魔王が剣を振る。

「消え去れ!!」

「喰らえ!!」

カスミと貴史が槍を投げる。

「レールガン!!」

薫が巨大な雷撃を撃ち放つ。

その全てが俺に当たる直前……

『そこまで』

防がれた。

「「「「「なっ!?!」」」」」

全員が驚愕する。防がれるはずがない攻撃。防げるはずがない攻撃。それが防がれたのだから。

『悪いけど介入させてもらっつよ』

（神様！？）

何でこの人が此処に！？とりあえず人に戻ってこ。

「何者だ？貴様」

『神だよ』

「神？何で介入するん？」

こっちも驚きだよ。この人はこんなことに手を出さないと思ってたの。

『さっきの攻撃は下手すれば要くんを殺せたからね。こんな所で彼に死なれる訳にはいかないんだ』

「事情はわかるが、だからといって戦いに割り込むとはな」

カスミが再びあの槍を出す。魔王も薫も戦闘準備をするが、貴史は何もしない。

『君は戦わないのかい？』

「ダチを殺しそうだったとなると何だか」

『ハハハ、優しいんだね』

「貴史がやる気がないとなると、私もやる気がしないな」

「そやね。それに流石に疲れたわ」

貴史の行動一つであの二人が止めるとは、人望が厚いんだな。

『じゃあお開きに「断る」……………何でだい？』

「神などという面白いものと戦う機会などそうないからな」

あいつは、神様相手によく喧嘩売るな。

『なら君の中に眠っている子を起こそう』

「何！？ゲツ！きさ……………うん、あれ？此処は？」

あいつは、アキラだったか。

『さあみんな帰った帰った』

そう神様が言うと全員の足元に魔方陣が現れる。

「じゃあな、要」

「楽しかったぞ」

「ほなまたな」

「よくわかんないけど、じゃあね」

そう言っつて貴史たちが帰っていった。

『要くん。これからも気をつけてね』

「はー」

まあこんなことはもうないと思っつ、思いたい、ないといいな。

100万企画第四弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「アリシヤの部屋の時間よ」

シヤ「みなさんお元気ですか？」

ア「今回はチート軍団対要だったわけだけど」

シヤ「まあよく頑張ったと思うわよ」

ア「しかし最後に神様が出てくるとはね」

シヤ「そうしないと流石に要くんが死ぬかも、って作者が思ったからだそうよ」

ア「仕方ないわね。貴史たちは消化不良でしょうけど」

シヤ「次回は黎音様からの依頼なんだけど」

ア「この場を借りて黎音様に改めて謝罪させていただきます」

シヤ「作者の我が儘で依頼の内容を変えてしまい本当に申し訳ありません」

ア「これからはこのようないいようにします」

ア・シヤ「では次回も見て下さいね」

100万企画第五弾（前書き）

黎音様との企画。

## 100万企画第五弾

ゼファイリス side

そろそろ要との決着も着けておきたいな。ふむ、今日は何も予定はないし、要の所へ行ってみるか。

「サイファス」

私はサイファスを創り出し、要の世界へ向かった。

「要、いる……か？」

私が始めに見たのは驚愕としか言えない光景だった。

「わふう、要さーん」

「いい加減離れるにや、スバル。にや？にやにしに来たにや、ゼファイリス」

私の渡した猫セットを要が、犬セットを青髪の少女が着けていた。

詳しくは私の出ている『魔法少女リリカルなのは〜輝く月の滴〜』  
を見てくれ。

「何故それを着けている？」

「はやてに着けられたにや。まったくたいした作品だにや」

「……………そうか」

「こっちはやてちゃんもとんでもないことをやるな。」

「まあちようどいいにや。久遠とアルフとザフィーラを預かってほ  
しいにや」

「こちらとしては言ばしいことだが……………」

「要！いたか!？」

いきなりやってきたのはヴィータちゃんだった。ただしメイド服を  
着ていたが。

「誰だ？こいつ」

「俺の知り合いにや。久遠たちの相手を頼んだから俺たちははやて  
を捜すにや」

「そうか。なら頼むぞ、お前」

「あ、ああ」

何だかほとんど拍子に話が進んでく。

「いくにゃ！ヴィータ！」

「おう！」

「くうーん、要さん置いてかないで！」

行ってしまった。これでは当初の目的が果たせないな。

「ゼフィリス、行こう」

「わかった。行こうか久遠」

久遠 side

私はゼフィリスの頭の上にいる。

「アルフさんたちは何処だ？」

「念話してみる」

えつとアルフの魔力は……………

『アルフ、今どこ？』

『ロビーにいるけど、何か用かい？』

『ザフィーラも一緒にお散歩行こう』

『わかった』

「ロビーにいるって」

「そうか」

ゼフィリスが撫でてくれる。要も気持ち良いけどゼフィリスも上手だなあ。

ロビーに着くとアルフとザフィーラが待っていた。

「久遠。誰だい、そいつ」

「ゼフィリス、要の友達だよ」

「よろしく。アルフさん、ザフィーラさん」

「よろしくね」

「よろしく頼む」

そういえば何でゼフィリスは来たんだろう？要に用があったみたいだけど……

「ゼフィリス。要に何か用があったの？」

「試合でも申し込もうと思ったのだが」

「ああ、あれだもんね」

「ふむ、ゼフィリスは強いのか？」

「まあ、そこそこかな」

それは嘘だ。要は物凄く強いって言ってた。要が言うからきくと本当のことだ。

「じゃあ何処に行くんだい？」

「いつもの所でいいと思う」

ゼフィリスは動物好きだからきつと喜ぶと思うし、私たちも行きつけだし。

「ならそこへ行こうか。案内は頼むぞ」

「うん！」

ゼフィリス side

久遠たちに案内されて来た所はペット喫茶だった。

「ミッドにもあったのか」

「ゼフィリスは他の所に行ったことあるの？」

「ああ」

中に入ると様々な動物がいた。やはりペット喫茶は天国だ。

「なんかだらし無い顔になってるけど、大丈夫かい？」

「駄目だな。聞こえていないようだ」

「はふうー」

「えいつ！」

バチッ

「つつ！？」

今のは静電気？久遠か？

「お店の入口に立っていると迷惑」

「あ、すまない」

いかな。少しトリップしていたようだ。

「注文は何に致しましょう?」

ふむ、メニューが充実しているな。

「シヨートケーキと紅茶を」

「「いつもの」」

「かしこまりました」

流石ミッドのペット喫茶。動物が喋っても気にしないか。というかいつものって、常連なんだな。

「この店には使い魔もよく来るからね」

「それにしてもゼフィリス。その大量の動物はどうにかならないか? 見ているこちらが暑くなる」

ザフィーラさんがそんなことを言う。まあ毛皮に包まれているようなものだから、他人から見れば暑苦しくも見えるだろう。しかしこれは私にとって至福なのだ。

「アルフさんとザフィーラさんも触らせてくれないか?」

「ちょっとだけなら」

「まあ、いいだろう」

「ありがとう」

はあく、もふもふだく。

カランカラン

「いらっしやいませ」

ん？誰かが入店してきたようだな。

「あつ！おじさん！」

「久遠ちゃん、アルフにザフィーラもか。久しぶりだね」

知り合いだろうか？それよりもあの二匹の猫は毛並みがいいな。もふもふしたい。

「君は……誰かな？」

「ゼフィリスという者です」

「そうか。私はギル・グレアムだ。よろしく頼むよゼフィリス」  
「ちやん」

「「「あつ」」」

そうだよな。初対面の人が見たらそう思うよな。アルフさんとザフィーラさんには道中説明したけど。

「私は男です」

「あー、すまない」

「いえ、よくあることですので」

それにしてもグレアムと言ったか。確かはやてちゃんの後見人だったか？

「グレアム殿がミッドにくるなど珍しいですな」

「リーゼとアリアが久しぶりに来たいというのでな」

「あんたたちも常連だったんだね」

「まあね」

「ここはいいお店ですから」

あの猫はリーゼとアリアと言うのか。私の世界にもいるかな？ふむ。

「ちょっと二匹を触らせてもらっても？」

「私は構わないが……」

「私は別にいいわよ、お父様」

「私も構いません」

よかった。嫌われるのは嫌だからな。

「では」

「ふわぁ」

「ん〜」

あゝ、やっぱりいい毛並みだ。よく手入れされている。気持ち良い。

「手慣れているね」

「動物好きですから」

久遠side

要以外の人と初めて来たけど楽しかったな。おじさんとも会えたし。

「ゼフィリスは楽しかった？」

「満足だ。動物も沢山いたし、料理も美味かった」

「そりゃあたしたちの行きつけの店だからね」

「うむ、あそこはいい店だからな」

「当然だよ。要プロデュースのお店だもん」

「「「えっ!?!」」」

あれ?言っでなかったっけ?要が癒しが欲しいって言ってプロデュースしたのがあのお店なんだよね。

「成る程」

「要らしいね」

「一条も動物が好きだからな」

そういえばゼフィリスってこれからどうするんだろう?要と戦うのかな?そんなことを聞いてみた。

「いや、今日の要は万全な状態ではないだろう。どうせやるならお互い万全な状態で決着を着けたいからな」

「なら帰るのかい?」

「そうだな。今日はありがとう。楽しかった」

「俺たちもだ」

「またね。ゼフィリス」

そうしてゼフィリスは夕焼けの街に消えていった。

オマケ

「そこかじゃ！はやて！」

「あかん！見つかった！」

「はやて！今回は許さないぞ！」

「うっひゃあ！？ちよっ、ヴィータも要くんも落ち着き！」

「「問<sup>こた</sup>答無用！！」」

「「きゃあああ！？」」

「くうーん。要さん、何処？」

100万企画第五弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「どうも、アリサです」

シヤ「今回は私が主役よ。シヤマルです」

ア「頑張ってくださいね。応援してます」

シヤ「ありがとう。アリサちゃん」

ア「さて今回はゼフィリスと動物たちでした」

シヤ「はやてちゃんのイタズラもほどほどにしてほしいわ」

ア「しかし要がペット喫茶をプロデュースしてたとは」

シヤ「セミフリーはストレスが溜まるのよ」

ア「大変なのね」

シヤ「さあ、次回に向けて頑張るわよ！」

ア「（とんでもないことになりそうな予感）」

100万企画第六弾(前書き)

EXAM様からの依頼。  
楽しかった。

## 100万企画第六弾

それは恐怖の始まりでした。

お手本があるからと油断レシピをしていました。

まさかあんなことになるなんて……………  
チートじゃ済まない、始まります。

はやてside

今日は休暇で海鳴に帰ってきとる。

「はやて！シヤマルが料理してる！！」

ヴィータが慌てて部屋に入ってきた。

「大丈夫だよ。今回はレシピを持たせたし」

「でも……………」

まあ心配になるのもわからんでもないけど、流石にレシピ通りに作れば問題無いやろ。

《ヴィータ、慌てても仕方ないだろう。大人しく完成を待て》

「流石お姉ちゃん。大人です」

「出来ましたよ」

「大丈夫でしょうか？」

「何か起こるのでは……」

ハハハ、シグナムもザフィーラも心配症やな。まあ確かに気になりはするけど、レシピ通り作って失敗するはずがないしな。

「はい、どうぞ」

「クッキー、か」

「見た目は普通だな」

「美味しそうです！」

「ここは主として一番最初に食べるとしよか。」

「それじゃあ、いただきます」

パクリ

「うー!？」

「はやて!？」

「主!大丈夫ですか!？」

「シャマル!貴様!！」

「えっ!?!ええー!?!」

「はやてちゃん!！」

《主!》

「うまーい」

ズコー

やっぱりここはお約束やろ。みんなええずつこけやな。

「ゴメンゴメン。でもホントに美味しいで」

「よかつた〜」

やっぱりシャマルはやれば出来る子やつたな。

「ホントだ。うめえ」

「なかなかいけるな」

「上達したものだな」

「美味しいですよ」

「ありがとう、みんな。沢山作ったからおすそ分けしてきますね」

そう言ってシャルは大きな袋を抱えて家を出ていった。どんだけ作ったんやろ。……うっ!!?」

「ぐう!?!?」

「こっ、これは!?!?」

「遅延性……だど!?!?」

「きゅ」

《みんな!!大丈夫か!?!?》

八神家、全滅。

シャルside

「ふふーん」

私は今、はやてちゃんからお墨付きを得たクッキーを商店街のみなさんに配っている。

「あれ？要くんたち」

そこには要くん、なのはちゃん、フェイトちゃんがいた。

「シャマル？何してるんだ？」

「クッキーを配ってるんですよ」

「「「え」「」」

む。そんな露骨に嫌そうな顔しないでいいのに。

「大丈夫よ。はやてちゃんからお墨付きを貰ってますから」

「はやてちゃんから？」

「なら、大丈夫かな」

やっぱりはやてちゃん効果は凄いわね。

「はい、どうぞ」

「「「いただきます」「」」

「ほし」

「美味しいですよ、シャマルさん」

「うん。凄いね」

喜んでもらえてよかったわ。それじゃあ次は何処に配ろうかしら。

「ぐはっ！？」

「じゃっ！？」

「あっあっっ」

『ぎゃああああ！！？』

要、なのは、フェイト、商店街の皆様、撃沈。

「こんにちは、桃子さん」

「あらシャマルさん。こんにちは」

みんなに美味しいって言うてもらってるけど、やっぱりプロの評価を聞きたいわよね。

「クッキーを作ってみたんですけど、食べてもらえませんか？」

「ちょうどよかったわ。これからお茶にする所だったの」

ふふふ、どんな評価が貰えるかしら。

「おっ、美味そうなクッキーだな」

「シャマルさんから貰ったのよ」

「ほう、要からシャマルさんは料理が苦手と聞いていたが、十分じゃないか」

「うう、仲間だと思ってたのに」

要くんは恭也さんに何を教えてるのかしら。それにしても美由紀さんも料理が苦手なのね。

「大丈夫よ。きっと上手になるから」

「シャマルさん………ありがとう」

「それじゃあ、食べてみて下さい」

「」「」「いただきます」「」「」

やっぱり人に料理を食べてもらうのは、ドキドキするわね。

「美味しいわ」

「うん、美味しい」

「要の情報はガセだったか」

「シヤマルさん、美味しいです」

「ありがとうございます」

これでプロのお墨付きも貰えたわね。次はすずかちゃんの下にも行くところかしら。

「では私はもう行きますので」

「またおすそ分けして下さいね」

「うっ!?!」

「なっ!?!」

「か、要の……言う通り、か」

「ふふふ……やっぱり……同類」

高町家、撃破。

私は今、すずかちゃんのお家の前にいます。何度見ても大きなお家  
ね。

「シャマルですけど」

「あつ、シャマルさん。今開けます」

門が開く。初めて来た時には襲われたのよね。

「うっ!?!」

「こっち（本編）じゃ久しぶりです。シャマルさん」

「すずかちゃん、こんにちは。アリサちゃん、そういう発言は控えてね」

いつもあっち（アリシャの部屋）で会ってるからってそんなセリフはよくないと思うのよ。

「これ、作ったのだけねど」

「遠慮します」

「なんて正直！！」

酷いわ。いくらなんでもこの反応は。

「大丈夫よ。桃子さんのお墨付きが貰えたから」

「桃子さん。味覚どうしたのかしら」

「アリサちゃん。電話してみる？」

この二人はどうしてこんなに正直なのかしら？

「大丈夫よ。みんなに食べてもらったけど大丈夫だったから」

「ならーっ」

「私も」

この二人、普段いいもの食べてるから口に合うかしら？

「！！美味しい」

「上手になりましたね。シャマルさん」

「ほっ」

クッキーもそろそろ無くなってきたし、お家に帰るとしましょうか。

「ありがとう。二人とも。そろそろ帰るわ」

「さようなら」

「また今度六課で」

「あ、ぐ」

「………やっぱり………」

アリサ、すずか、撃沈。

「ただいま」

《シャマル！！》

「はひっ！？」

なんでいきなり怒鳴られたんだろう。

《この現状を見る！！》

そこにはベッドに倒れたはやてちゃんたちがいた。あれ？なんで？

《お前のクッキーは遅延性だったんだ》

「ええー！？」

「やっときたか」

「クロノくん？」

なんで彼がここに？

《私が呼んだんだ。とにかく主たちを助けないといけなかったからな》

お前には念話が繋がらなかったが、と言われて自分が念話を切っていたのを思い出した。

「シヤマル。責任は取らないとな」

えっ、何されるんですか？

「みっつ〜け〜た〜」

「ひいひい!?!」

玄関からゾンビのような要くんが入ってきた。とても怖い。

「お仕置きは任せたぞ。要」

「ひっひっひ」

「キャラが！キャラが違うわよ!?!?!」

「残りのクッキー全部食せや！この女郎!?!」

「あがあが」

口にクッキーを詰め込まれた。味以前に呼吸が……………うっ!?!?

「あー」

ボタン

そこから私の記憶は途切れた。

某月某日

海鳴市にて大量気絶事件が発生。

原因は不明。被害者は記憶を無くしているか、口を閉ざして何も語らない。故に犯人は不明。

しかし何故かこの事件はこう呼ばれている。

シャマルクライシス

100万企画第六弾（後書き）

ク「後書きでは始めまして。クロノ・ハラオウンです」

デ《ディオネだ》

ク「今回はくアリシャの部屋への二人が本編の通りだから、僕たちが出演させてもらっている」

デ《被害はどれほどだったのだ？》

ク「被害範囲は広いが、症状はたいしたことはないな。気絶時間も2時間程だ」

デ《それでも十分だが、なら要はどうして大丈夫だったのだ？》

ク「彼の場合、アルティメットワンを発動させたからね」

デ《そのようなことに使うとは……………》

ク「緊急事態だ。仕方ないだろう」

デ《まったく。シャマルには味見というものを教えんな》

ク「頼むよ」

デ《では次回予告だ》

ク「今回は海人様からの依頼だ。海人様の所のキャラが遊びにくる」

デ《是非、次回も見てほしい》

## 100万企画第七弾(前書き)

海人様からの依頼。

長くなった。

キャラがこれでいいのかわからない。違ったら修正します。

## 100万企画第七弾

要side

俺は今フォワード陣の訓練をしてやってるのだが、こいつらもそこそこ出来るようになってきたな。

「よし！今日の訓練はここまで！」

「「「「ありがとうございます！」「」「」

そろそろ能力を上げて訓練してもいいかな。 . . . . . ん？なんだあれ？魔方陣？

『要さん！何か来ます！』

「見りゃわかる」

そして魔方陣から出てきたのは . . . . . 赤髪の青年、中学生くらいの少女、すずかっぱいの、アリサっぱいの、フェイトっぱいの、だった。つかあの赤髪、エリオに似てるな。

「「「「は . . . . . 六課？」

赤髪は此处を知っているらしいが、まあいい。

「「「「よっこそ」

「あんたは誰だ？」

「一条要。歓迎するぞ、異邦人」

「「「「「!?!?」「」「」「」

何か警戒させちまったな。とりあえずあそこでは一っとしてるフオワード陣を追っ払うか。

「お前ら、戻って反省会しろ」

「えっ!? あっ、はい。あんたたち、行くわよ」

ティアナは空気が読めるね。偉い偉い。

「さて、そう警戒するな。あんたらみたいな異邦人には慣れてるんだ」

「はっ? いや、慣れてるって」

「シャーリー! お茶!」

『はい』

これまでのいろいろな騒ぎで完全に慣れたな。

「着いてきてくれ。お茶でも飲んでゆっくり話そう」

飛翔 side

俺たちはとりあえずお茶を飲んでいる。その間になのはさん、フェイトさん、この世界のすずかがきた。要は三人に俺たちが並行世界から来たと説明したが、三人の反応は

「「「へー」「」」

だった。おかしくないか？

「ホントに私なんだね」

「自分と同じ存在に会うと変な感じだね」

向こうではすずか同士が話し合っている。

「とりあえず自己紹介でもするか。俺はさっき名乗ったが、一条要だ。要でいい」

「不破飛翔だ。よろしく」

「不破鈴音です」

「アリシア・テストロッサだよ」

「えっ！？私じゃないの！？」

「フェイトさんが驚いてるな。そういえばこっちではアリシアは死んでるんだっただな。」

「フェイト。あちらさんは並行世界から来たんだから、死人が生きてることだってある」

「あっ、そうか」

「いやいや、納得するのかよ。」

「あんたたち、感性がおかしくない？」

「アリサちゃん。こっちじゃよくあることだよ」

「なのは。おかしいわよ」

「全くだ。一体こっちの世界はどうなってるんだよ。」

「なあ飛翔」

「なんだ？」

「そっちのアリサもツンデレか？」

「誰がツンデレか！！」

「へっぶっ」

要がアリサに殴られた。いくらなんでもそれは失礼だろう。まあッ  
ンデレだが……………

「あー、痛かった」

「嘘だろう」

「まあな。さて……………エリオ、何している？」

要がそう言つとエリオ・モンディアルが出てきた。

「あ……………」

「言いたいことがあるなら言え」

「……………飛翔さん」

「何だ？」

この様子だと……………気付いたか。

「あなたは……………僕ですか？」

「そつだと言えはそつだし、違つと言えは違つ」

「どついうことですか？」

わからんかな。まあこの頃は10歳だししょうがないか。

「俺はエリオ・モンディアルのクローンだが、あくまでクローンだ。

エリオ・モンディアルは名乗れん」

「……………そうですか」

理解はしたが納得出来ていない。そんな感じだな。

「お前たちはこれからどうするんだ？」

「まあ帰ろうと思えばすぐに帰れるが」

今回こっちに来たのは宝石剣の投影失敗だからな。アリシアのディエンドドライバーを使えばすぐに帰れるが。

「なら一日遊んでけ」

「いいのか？」

「暇だからな」

さっきまで訓練をしていただろう。

「なら私の研究でも見て行ってよ、私」

「それじゃあお邪魔しようかな。アリサちゃんも行く？」

「いいわよ」

「フェイトちゃん。案内してよ」

「うん、わかった」

なんか向こうでは予定がすでに決まっている。

「決定だな」

「そつだな」

すずか(チートじゃ済まない) side

私が私を案内するってなんだか面白いな。

「はい、ここが私のラボだよ」

「凄いね」

「何これ？」

アリスちゃんが触ろうとしているあれは……………

「魔導式シリーズだよ」

「魔導式シリーズ？」

「質量兵器を魔法で再現したものだよ」

「へへ。本物そっくりだね」

「よく作るわね」

アリサちゃんがそう言って棚の上のものを触った。いけない！

「逃げて！」

「えっ？」

ドカーン

ラボの外、一般局員の会話

「また月村陸曹のラボから爆発が起こったぞ」

「あの人は優秀なんだがな。もう少し周りを考えてほしいよな」

「一条三佐も大変だよな」

ラボの中

「ゲホツゲホツ」

「あいたた」

「大丈夫？」

まさかアリサちゃんが、よりもよってあれに触っちゃうとはな。  
人が来る時にはもうちょっと整理しとこ。

「（この世界の）すずか！何よあれ！」

「魔導式地雷だよ」

まだ試作品だから、下手に触ると爆発するんだよね。威力はかなり弱くしてあるけど。

「ねえ、私」

「何？」

「一緒に完成させよう！！手伝うから！」

まさかこんなこと言うなんて………流石私！！

「よし！やるよ……！」

「うん……！」

「えっ、ちょっと、あんたたち？」

私たちはアリサちゃんは無視して作業に取り掛かった。

フエイトside

さて、何処に案内しようかな。そっだ。

「ちょっと食堂に行っても行っちゃうか」

「うん」

最近スイーツが充実してきたから、アリシアも喜んでくれるだろうな。

「ここだよ」

「広いんだね」

そうかな？本局の方がもっと広いからな。あつ、スバルとティアナがいる。

「二人共、隣いいかな？」

「はい」

「ありがとう」

「あの、フェイトさん。そちらの方は？」

ティアナが聞いてくる。見た目はほとんど同じだから気になるよね。

「アリシア・テストロッサだよ。よろしく」

「はあ」

「よろしくお願いします」

上がティアナ、下がスバルの返事だ。

「それじゃあアリシア、何頼む？」

ちなみに私はイチゴのムースケーキと決めている。ティアナとスバルはここの一番人気のアップルパイを食べている。

「ショートケーキにするよ」

「そういえばアリシアって飛翔とどんな関係なの？」

私はなんとなく気になっていたことを聞いた。なんとというかとてもいい雰囲気だったし、恋人なのかな？それなら要と仲良くなるアドバイスをもらおうと思って聞いたんだけど……

「第3婦人だよ」

返ってきた答えはとんでもないものだった。

「……ええっ!?!?」「」

「ちなみにアリサが第1婦人。すずかは第2婦人だよ」

気をつけないと。飛翔は元はエリオなんだから、こっちのエリオはこんな風にならないようにしないと。

「あの、アリシアさん。聞いてもいいですか？」

「何？スバル」

「重婚っていいんですか？」

「ちよっ！？何を聞いてるの！？」

「相手がしつかり愛してくれるならいいと思うけど、あなたの相手はどうかな？」

「要さんなら大丈夫です！！」

「スバル。誘導尋問にはまってるわよ」

「あっ」

スバルは正直だからなあ。なんだかアリシアの目付きがいやらしくなってるよ。

「へへ、彼なんだ。あなたが好きなのって」

「えっとえっと、フェイトさんも要さんが好きです！！」

「この子逃げられないからって私も巻き込んだ！？」

「フェイトちゃんもなんだ。いろいろお話聞きたいな」

「どうしようどうしよう！！そっだ！！」

「ティアナたさ、無理です」「早っ!！」

「逃げられないよ」

もう、覚悟を決めよう。

要side

今俺に不都合なことが起こったような。

「どうした?」

「いやなんでもない」

まあいちいち変な予感を気にしていたらこの世界で生きていけないな。

「さあここが訓練場だ」

俺は飛翔と鈴音に頼まれて訓練場に二人を連れてきた。

「立派ですね」

「AMFに重力操作、トラップも満載だ」

「凄いな」

俺監修の特別訓練場だからな。並の訓練場と比べてもらっては困る。だからこの訓練場を使う人も少ないんだが……

「要」

「久遠か。訓練してたのか？」

久遠もこの常連の一人だ。この前まで重力1・5倍だったが、最近は2倍に挑戦しているらしい。

「うん！その人たち誰？」

「初めまして、不破飛翔だ」

「不破鈴音だよ」

「久遠だよ。よろしく」

さて、これから何するんだろうか。

「要さん。私と試合して下さい」

ああそういうことか。まあ、俺もいい訓練になるしいいか。この子

の実力も知りたいし。

「ならやるうか。トラップを解除しとくから先に準備してくれ」

「わかった」

鈴音 side

「あいつはかなり強いぞ」

「大丈夫」

私には仮面ライダーの力がある。そう簡単には負けない。

「それに局だから仮面ライダーの力は使えないぞ」

「あっ」

「忘れてたな」

「……でも、父様たちに鍛えられたんだ。きっと大丈夫……  
……かも。」

「よし、やるうか」

「よろしくお願いします」

まずは出方を見よう。下手に攻めたら駄目だ。

「こないのか？ならこっちからいくぞ」

そう言って走りだしてきたけど、思ってたより遅い。

「ふっ！」

「遅い！」

私は拳を避けて反撃をする。

「やっ！」

「くっ！」

私の一撃が腹に当たったが、腕を掴まれた。

「捕まえた」

「なっ!？」

しっかり入ったはずなのに効いていない!？

「身体能力50%解放!オラアア!！」

「キャアアア!？」

ジャイアントスイングなんて〜。

要side

たいしたダメージはないだろうが、どうだろうな。

「いたた」

「大丈夫か？」

「はい」

結構丈夫だな、この子。

「要」

「何だ？飛翔」

「全力でやってくれないか？」

厳しいね。じゃあ人として全力でやるか。

「まだ出来る？」

「もちろん」

やる気も体力も十分みたいだな。ならやるとしますか。

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン」

「！？それが全力ですか」

さて、またこっちから攻めますか。俺は一気に走りだした。

「喰らえ！！」

「ぐう！？」

俺の拳が鈴音を吹き飛ばした。

飛翔 side

想像以上だな。生身であれほどの力を出せるか。しかも今の攻撃、魔力放出も使われているな。

「おい、ノックアウトしちゃったが」

「今行く」

「鈴音、大丈夫か？」

「うっ、父様？」

特に怪我はなさそうだな。要がそこら辺は手加減してくれたかな。

「どうだった？」

「……想定外だった」

「次からは気を付けろよ」

「うん」

まだ時間はたっぷりあるよな。もう一試合くらいは出来るな。

「要、俺と試合しないか？」

仮面ライダーの力を使わずにどれほど戦えるかな。

要 side

向こうから頼んでくるとはな。まあ俺もしたかったし。

「いいぜ。やるうか」

「鈴音、下がっていてくれ」

「頑張つてね。父様」

飛翔はどんなタイプかな。遠距離って感じはしないんだよな。

「トレース・オン  
投影開始」

投影魔術！？しかも投影したのは八景じゃないか。名前から予想はついたが、御神の剣士か。

「いくぞ」

「どっからでもいい」

飛翔が切り掛かってくる。なかなかの速さだな。神速を使えばさらに速くなるのだろう。だが、俺からすれば遅い。

「ハアツ!!」

「ほいっと」

俺は攻撃を避けて、蹴りを叩き込んだ。

「ほらっ!!」

「甘い!!」

飛翔はカウンターを始めから狙っていたらしく、避けたと思ったら無数の斬撃を繰り出してきた。まあ全て弾いたけど。

「やるな、要」

「飛翔もな」

「次は簡単には避けられないぞ」

そう言った飛翔の攻撃は神速の突き。これは、射抜か。

「知ってる技ほど避けやすいものはないな」

「何!?!」

俺は飛翔の射抜を避けて、飛翔の肩を叩いた。

「抜骨」

ゴキ

「ぐあっ!？」

やっぱりまだまだ未熟だな。親父の抜骨は痛みがほとんどなかったのに。

ゴキリ

「まさか関節をこつても簡単に外す技があるとは。しかも射抜を知ってるなんてな」

飛翔は関節を治しながら言った。

「関節外すのは奥義だしな。射抜に関しては高町家に世話になってたからな」

奥義之極以外、全部知ってるぞ。

「成る程な」

「それでどうする？続けるか？」

「当然!！」

「だよな！！」

そろそろ時間もないし、決着つけた方がいいな。いつまでも攻撃、避ける、攻撃、避けるを繰り返すわけにはいかないし。

「終わりにしようぜ」

「わかった」

飛翔は抜刀の構えをとる。雑旋ではないな。

「永全不動八門一派

御神真刀流小太刀二刀術

奥義之極」

まさか、奥義之極を使うことが出来るとは。貴重な体験になるな。

「死ぬなよ。

『閃』」

その瞬間、斬撃が俺を襲った。

『閃』を試合で使うなんてな。反省しないと。だけどこれで決まっただろう。

「凄い技だな。奥義之極」

「なっ!?!」

後ろを振り向くと、平然としている要がいた。有り得ない!!あれを真正面から喰らったのに無傷だと!!!?

「咄嗟に後ろに跳ばなければ真っ二つだったな」

「後ろに跳ぶ?まさか、あの速さについてきたのか!?!」

「ぎりぎり視認出来るレベルだったからな」

あれが視認出来るだど?だがさっきの発言では傷を負ったはずだが・  
・  
・  
・

「怪我は?」

「ん?ああ、俺さ、死徒より再生早いんだ」

「.....化け物?」

「自覚してる」

要は笑いながら言った。とんでもないのの相手をしたな、俺。

要side

「もう一日経ったんだな」

「そうだな」

「ありがとうございます。いい経験になりました」

「鈴音、これから頑張るな」

「はい」

さてと、お土産でもやるか。最近暇潰しに創ったもんだが。

「これやるよ」

「これは？」

「幸運のお守り」

何となく創ったら幸運ランクがワンランクアップするのが出来たん

だよね。

「ありがたく使わせてもらおう」

「飛翔！そろそろ行くよ」

アリシアが呼んでいる。

「じゃあいくな」

「またな」

「ああ」

そうして飛翔たちは帰っていった。

オマケ1

「向こうのすずかの荷物凄かったけど、何が入ってたんだ？」

「それはね。一緒に作った魔導式地雷と魔導式RPGと魔導式手榴弾（改）だよ」

「とんでもないな」

オマケ2

「要さん！結婚しましょう！」

「スバル、頭打ったか？」

「飛翔さんだつて奥さん3人いるんですよ！」

「はっ!?!」

「それにね、要。ミッドはいろんな文化があるから、条件さえ合えば重婚出来るんだよ」

「フェイト。誰がそんなこと言ってた？」

「アリシアだけど」

「アーリーシーアー!!何教えてやがる!!」

## 100万企画第七弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「前回休みになってしまったアリシヤの部屋。今回から再開です」

シヤ「前回楽しみにしてくれた方、すみません」

ア「今回は並行世界の存在とはいえ、私アリサ、2連続の登場です！」

シヤ「今回は長くなったわね」

ア「飛翔の家族全員出すとなるとこうなると作者は言ってます」

シヤ「まあ頑張ったと思うわよ」

ア「それにしても要はやっぱり化け物ね」

シヤ「まあ飛翔くんは仮面ライダーが使えなかったし、剣しか使わなかったし」

ア「お互いが全力を出したら大変なことになりそうね」

シヤ「局が潰れるんじゃないかしら」

ア「さて次回はついに本編スタートですね」

シヤ「違うわよ」

ア「えっ？でももう依頼は」

シャ「作者が前から書きたかったことをやるそうよ。内容は要くんが……」

ア「ゴクリ」

シャ「一部の人が願ってたことになるわよ」

ア「次回はしっかり見ないとね」

## 100万企画第八弾（前書き）

一部の人が期待した要登場。  
ただ暴走が酷すぎました。

## 100万企画第八弾

要side

「ふあゝ」

よく寝たなあ。だけど肩が重い気がするんだよね。疲れがまだ残ってるのかな。まあいいか、顔洗ってこよう。

バシャバシャ

ふう、すつきり。ってあれ？顔がなんかおかしくないか？なんといつか、女のような。

そう思い、下を向くと………

ポーン

「何これー！ー！ー！ー！ー！」

なのはside

朝、要くんの部屋の方から『女の子』の叫び声が聞こえた。まさか要くんが、女の子を連れ込んだの！？

要くんの部屋の前に着くと、フェイトちゃんとはやてちゃんとヴィー  
ーたちちゃんがいた。

「なのはちゃんも来たんか」

「うん。みんなも？」

「そうなんだけど、鍵を開けたのにドアが開かなくて」

「だからあたしがいるって訳だ」

成る程、ヴィータちゃんがドアを壊すんだ。

「下がってる。うおおお!!」

ヴィータちゃんがグラファイゼンでドアを吹き飛ばした。ドアの向こうにはソファアヤベッドでバリケードが作られていたらしい。これじゃあ開く訳がない。

「ひっ!？」

瓦礫の向こうには、要くんと同じ青白い長髪で胸が大きな女の人がいた。

「あなた……誰？」

「要は何処にやったの？」

「なのは!フェイト!落ち着いて!!」

なんで私の名前を知ってるの?初対面のはずなのに……

「もしかして……要くんか？」

「そつよ!流石はやて!!」

「そか」

あれ？はやてちゃん、何でネクタイを緩めてるの？

「いただきますーす！ー！！」

「キヤアアア！？」

はやてちゃんがルパンダイブで要くん(?)を襲った。

「はやて！落ち着け！！」

「グイータ！離しい！！ザフィーラ以来のチャンスなんや！！」

「何言ってるんだよ！！」

………とりあえずこの人を連れていこう。

## 要side

私たちは今、会議室にいる。六課のメンバー全員集まってきたし。

「要可愛くなつたね」

「言わないでよ、久遠」

口調も女みたいになってきてるし、どうしよう。

「一条」

「ザフィーラ？」

「頑張れよ」

凄くイイ笑顔で言いやがった。畜生。

「とにかく、何故一条がこうなったのかを考えよう。何か思い当たることはないか？」

「うーん」

そう言われても……いつも通り仕事して、訓練して、寝る前に栄養ドリンクを飲んだだけ……まさか、それか？

「私の部屋の冷蔵庫を調べてくれない？」

「私が行ってきます!!!」

シャルが手を挙げ、走っていった。

「それにしても、要さん、本当に変わりましたね」

「スバル！そういうことは言わない！！」

何だか最近ティアナがスバルのお母さんみたいだ。

「綺麗ですよ。お姉ちゃん？」

うわーん！キャラが正直過ぎる。

「大丈夫です！何とかなりますよ！兄さん！」

「エリオありがとうー！！」

「むぐつ！？」

私はエリオを思い切り抱き寄せた。こんな状態でも兄さんって言うてくれるなんて嬉しいよ。

「要！エリオが死んじゃうよー！！」

「えっ？」

「キュ」

フェイトに言われてエリオを見ると、気絶していた。なんで？

「なんて殺人的な胸や」

シグナム程ではないと思う。

「お前は私をどう思っている」

「心読まないですよ」

いつの間に読心術なんて覚えたのよ。って女性口調が進行してる!?

「やっぱり要くんを早く治さないよ」

「すずか。ありがとう」

「だって子作り出来ないからね!」

一瞬でも感動した私が馬鹿だったよ。そうだよ、すずかだもんね。

「みなさーん!こんな紙がありましたよ!」

帰ってきたシャマルが持ってきた紙にはこんなことが書いてあった。

『お前は周りが不幸にあつてる中、一人大丈夫なことが多い。だから一部の人が望んだ女体化するように栄養ドリンクに性転換薬を入れてやった。一日女として過ごしな。』

作者』

「作者ああああ!!--!」

なんとということをして!!今度会ったらぶつ潰す!!

「まあ今回も効果は一日やる?だったら我慢しい」

「……………」

「どうしたの？要」

「……………トイレ」

「えっ？」

「だからトイレ！」

もう！何でこんな時にトイレに行きたくなるの！もう我慢出来ないよ！…

「行ってくる！」

「待て！一条！」

「何！？ザフィーラ！」

「そっちは男子トイレだ。今のお前は女だろう？」

とつてもイイ笑顔でそんなことをほざきやがりましたよ、この犬。

「わかったわよ！バカー！！！」

何でトイレまで女子トイレにしないと駄目なのよ！

「ただいま」

「にやはは、疲れてるね」

もう嫌だよ。何でこんなことになるの。

「訓練はどうするの」

「……………アハッ」

そつだ。フォワード陣をイジメればストレス発散出来るじゃん。何でこんな簡単なことに気付かなかったんだろ。私ったら馬鹿ね。

「なのは、殺つてきまーす」

「う、うん」

ふふふ、楽しみだなあ。どんな悲鳴を上げてくれるかなあ

「要くんが壊れたの」

「はい、それでは始めますよ」

「「「「よろしくお願いします」「」「」

「身体能力70%解放」

「「「「えっ!?!」「」「」

さあ、まずは………スバル!

「シッ!」

「くっ!?!」

あら、硬い防御。随分ヴィータに鍛えられたわね。

「クロスファイア、シュート!」

「ヌルイわ」

ティアナの魔力弾を弾き、スバルに向かって拳を振りかぶる。

「喰らいなさい!」

「させない!一閃必中!」

エリオのストラーダが横つ腹にぶち当たる。

「酷いわね。こちらはバリアジャケットがないのに」

この程度は効かないけどね。私がエリオに反撃しようとしたら。

「ブラストフレア!!」

「危なっ!?!」

もう!いつの間に連携が上手くなってるかしら。これはストレス発散なんて言ってられないわね。

「アリストテレス。シールド」

《了解》

さて、これを加工して……

「ベールシールド」

見せてあげるわ。布槍術を。

「うおおお!!」

「ハイハイハイ!!」

突っ込んできたスバルにベールシールドを叩き込む。インパクトの瞬間、シールドを硬化させているためダメージはでない。

「喰らえ！」

「無駄！」

ティアナの魔力弾はシールドを広げて防ぐ。む？キャロがエリオにブリストを掛けてる。

「させない！ニードルガン、二連！！！」

「うわっ！？」

「きゃっ！？」

避けたか。今度は倒してあげる！

まああれから10分くらい訓練(?)は続いた。

「あー、疲れた。お風呂行きましょ、お風呂」

「くくくく……はい」「」「」

それにしても女性口調が完全に定着したわね。なんとというか、性格

自体が変わった感じね。

エリオside

「いてて」

兄さん（？）に叩かれた所がお風呂に入ると染みるな。

ぴちゃ

あれ？誰か入ってきた、って！？

「に、に、に、兄さん！？」

「どうしたの？エリオ」

そこには裸の兄さん（？）がいた。僕はすぐにお風呂に潜ったけど・  
・  
・  
・

「逃がすか！」

「うひゃあ！？」

あうあう、胸が頭に。

「何でこっちにいるんですか!？」

「流石に女湯に入る勇氣はないよ」

「でも、問題でしょ!!…こっちにいるのは!!！」

「弟と風呂に入るのが何が問題か!それともエリオ、ムラムラしちやった?」

完全に性格が変わってるよ、この人。自分のスタイルが凄くいいことを自覚してほしいよ。

## 要side

私は何をやってたんだろう。フォワード陣をイジメたり、風呂でエリオを弄ったり。

「はあ」

女になって頭が壊れたのかな。

「要、どうしたの？」

「……………久遠」

「元気がないよ」

「反省してるの」

「？」

久遠の首を傾げる動作が凄く可愛い。気が付くと久遠を抱っこしていた。

「今日は一緒に寝ようか」

って私は何を言ってるの!？

「うん!」

……………可愛いからいつか

次の日

「ふわぁ〜」

朝、か。……………体はどうなった!?

俺はすぐに洗面所に向かい鏡を見た。

「戻ってる」

よかった……………本当によかった。

「……………うわぁ／＼／」

昨日の出来事を思い出したら物凄く恥ずかしくなった。女の時も反省したけど、さらに心にくるな。後でみんなで謝ろう。

「おはよ〜」

「おはよう、久遠。一緒に寝てくれてありがとうな」

「?」

わかってないか。まあ気にしてないならいいけど……………次はエリオたちの所に行くか。

「スバル、ティアナ」

「あつ、要さん」

「おはようございます」

特に気にしてる感じはないな。だけど謝つとかないとな。

「昨日は済まなかったな。俺に出来ることがあれば言ってくれ」

「なら私と結く「クロスファイア、シュート！」」

あつっ!?!」

「別に気にしてませんので」

「ハハハ……」

スバルがどんどんすずか化してるな。

「エリオ、キャロ」

「兄さん！」

「元に戻ったんですね」

「昨日は済まなかった。特にエリオはな」

「アハハ……」

「どういうこと？エリオくん」

そうか、キャロは知らないんだったな。

「エリオを風呂で弄っちゃってな」

「へえ」

「キ、キャロ？」

「少し、お話ししようか」

「え、え、ええー！！」

エリオはキャロに引つ張られて行った。後でもう一度謝ろう。しかし昨日の俺はあれだったな。痴女的だったな。もうこんな機会はないと思うが、次は暴走しないように理性を鍛えよう。

100万企画第八弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「みなさんども」

シヤ「久しぶりに登場企画があつたシャマルです」

ア「今回の要の女体化は酷すぎね」

シヤ「あの薬のせいね」

ア「どういふこと？」

シヤ「あの薬を飲むとバーサーク効果、つまり狂化のスキルが付く  
の」

ア「ランクは？」

シヤ「C+と言つたところかしら」

ア「ならあれもしょうがないか」

シヤ「さて次回は本編ね」

ア「違いますよ」

シヤ「えっ、でも」

ア「次回はわんこが来ます」

シャ「わんこ?」

ア「内容は次回を見て下さいね」

外伝くわふうなあの子がやってきたく(前書き)

香多詩路様とのコラボです。

外伝くわふうなあの子がやってきた>

要side

なんだ此処は、家か？

「要、起きた？」

「久遠？此処は？」

「俺が説明しよう」

そこには眼鏡の寝癖男、つまり作者がいた。こいつが呼んだのか？  
普段登場するにしても天の声に徹するこいつが。

「今回は特別ゲストが俺、お前、久遠にお届け物を持ってきてくれる」

「ゲスト？知り合いか？」

「いんや、初対面」

初対面か。どういった理由で届け物なんて持つてくるんだ？まさかチートがとんでもないの持つてくるわけじゃないよな。

ピンポン

「来たみたいだな。久遠、お出迎え頼む」

「わかった！」

久遠side

どんな人が来るんだろな。作者はとってもいい子って言ってたけど。

ガチャ

「いらっしやーい」

ドアを開けると犬耳を付けた人がいた。

「お邪魔するのです。ツカサという者です」

「久遠だよ。よろしくね」

「わふう、よろしくなのです」

凄くいい子だ。作者もたまには本当のこと言うんだ。

要side

久遠が連れてきたのは犬耳を付けた子だった。この子がゲストか。

「はじめまして、ツカサなのです」

「一条要だ。よろしくな」

「わふう」

俺は自己紹介をしながら頭を撫でてやる。これは癖になりそうだ。

「要。私も」

「はいはい」

「ク〜」

右手にツカサ、左手に久遠。ある意味最強だ。それにしても、作者が全く動かないな。

「ツ、ツ」

「「「ツ?」「」」

「ツカサちゅわーん!!!」

「わふっ!?!」

雨季の攻撃、ルパンタイプ。

「失せる!変態!!!」

要のカウンター攻撃、一・撃・必・殺。

「ゲハツ!!!」

悪は滅びた。この駄目作者は、人様のキャラクターを犯そうとするなんて。

「大丈夫？ツカサ」

「は、はい。なんとか」

怖がらせてしまったかな。

「あんなの日常茶飯事だから気にするな」

「くれないじーな日常なのです」

「そういえば、お届け物って何？」

久遠がそう言っと思って思い出した。ツカサは何かを配達してくれるんだっただな。

「そうでした。じゃがアイスを持ってきたのでした」

じゃがアイス？何その組み合わせ。あれ？3つしかないぞ。

「雨季さんと要さんと久遠ちゃん分です」

「ツカサのは？」

「ないですけど？」

むむっ、それはいかな。幸い（？）作者は死んだ（？）し、これ  
をツカサにあげよう。

「うちの作者の分を食べなさい」

「えっ？だめですよ」

「大丈夫。後で俺がO H A N A S H Iしておく」

「ん〜、わかりました」

ん〜、の所が癒されるな。作者が襲うのも無理はない。女の俺なら  
久遠と一緒に（性的な意味で）食べてたかもしれん。

「では」

「「「いただきまーす」「」」

まずは一口。これは・・・・・・なかなかイケるな。じゃがいもを  
アイスと合わせるのはいかがかと思っただが、よくよく考えれば芋のア  
イスなんて沢山あるんだ。おかしなものじゃない・・・・・・と思  
う。

「ペロペロ」

「もきゅもきゅ」

何この二人。凄い可愛いんだけど。

「ほらほら二人とも、口にアイスが付いてるぞ」

俺はハンカチで口を拭ってやる。

「「ん〜」「」」

もうこれでお腹いっぱいです。ありがとうございます。

「「「「ちそうさま」「」」」

実に美味かった。久遠とツカサの可愛さも素晴らしかった。

「それではもう帰るのです」

「もっか？」

「遊ぼうよ」

「でもお仕事は終わったので……」  
「だからといってここで帰すと一部の読者が激怒するやもしれん。おや？これは……作者め、こんなものを用意しとくとは。」

「ツカサ、これを見る」

「そ、それは……」

「さあこの『ほねっこ』が欲しいなら遊んでいきなさい」

「うー」

悩んでる悩んでる。この姿を写真に撮っておこう。

「……………わかりました」

「やった！なら遊ぼうー！！」

「あわわ」

久遠がツカサを引っ張っていった。ほのぼのだね。この光景も撮っておかないと。

「楽しかったね！」

「わふう！楽しかったです！」

素晴らしい光景だったな。犬っ子と狐っ子が原っぱを走り回る姿は一種の芸術だね。

「あっ、そろそろ帰らないと」

「クゥ、残念」

「今日はありがとうな。また遊びに来てくれ」

「わふう！ぜひきますー！」

つと、お土産をあげんな。

「ほら、このネックレスをあげよう」

「わふ？いいんですか？」

「ああ」

このネックレスには厄除けの効果が付いてある。よっぽどの厄でもない限り、この効果を突破出来ないだろう。

「ありがとうございますー！」

「気にするな」

「それではもう行きます」

「またね」

久遠はツカサが見えなくなるまで手を振っていた。

「ツカサは何処だー！」

「作者？生きてたのか」

だがもう遅い。ツカサがこいつに残したものは何もない。

「ツカサは帰ったよ」

「なん………だど？」

作者はor2のポーズをとり、真っ白になった。

外伝<わふうなあの子がやってきた>(後書き)

<アリシヤの部屋>

ア「アリシヤの部屋の時間ですよ」

シヤ「前回のわんこってこれのことだったのね」

ア「ほのぼのだったわね」

シヤ「作者は可哀相だったけどね」

ア「作者の扱いはあれでいいのよ」

シヤ「それもそうね」

ア「では次回、ついに本編です」

シヤ「ここまで長かった」

ア「では次回も見てくださいね」

S t S 第四話（前書き）

久しぶりの本編はなんだか短くなった。

## StS第四話

要side

「ホテルアグスタ？」

どうやらそこが今回の任務の場所らしい。

「そや。そのオークションに出品されるロストロギアを守るのが今回の任務や」

ふーん、オークションね。そんな所に出るロストロギアだからどうせ古美術みたいなもんだろ。

「出品リストはあるか？」

「ありますよ」

ラインが渡してくれた出品リストに目を通す。予想通りだったものは……………何！？何故これがある！？

「はやて！！俺も参加出来るか！？」

「えっ？どうしたんや？」

「出来るか！？」

「に、任務があるから難しいと思うけど」

それじゃ駄目だ！これは他人に渡す訳にはいかない！

「代わりを出す！そいつにオークションに参加させる！それならいいだろ！？」

「まあ、それなら」

よし！これはある意味任務よりも重要だな。すずかにでも頼むか。

さて、任務当日。隊長陣とすずかはオークション会場に入るためにおめかしをしている。俺は普通にスーツ、いや、防弾、防刃、その他もろもろの魔法効果も付いてるから普通ではないな。

「要くんカツコイイね。このまま結婚式を挙げちゃう？」

「すずかちゃん！これから仕事なんだよ！！」

「そうだよ！それに要と結婚するのは私だよ！！」

「にゃ！？フェイトも何言ってるの！？」

こいつらは……まあいつも通りか。下手に緊張するよりい

いか。

「要くん、何であんなもんが欲しいん？」

「あんなものつてな。価値を知ってる人からすればとんでもない品だぞ」

「ふーん」

まああれの価値を知ってるのがこの世界にいるかどうか。

「すずか、オークションは頼むぞ。いくら使ってもいい。絶対に勝て」

「わかったよ」

次はフォワード陣の相手をするか。こいつらは外で警備だが、シグナムたちや久遠もいるし大丈夫だろ。でも一言、言っとかないとな。

「お前ら、調子はどうだ？」

「問題ありません」

「大丈夫ですよ」

「準備万端です」

「いつでもいいですよ」

「キョクー」

特に気にするようなことはなさそうだな。全員いつも通りだし。

「お前ら、あんまり緊張はするなよ。あと無理はするな、出来る範囲の無茶は許す」

「了解！」「」

「久遠、頼むぞ」

「任せて！！」

なら俺もそろそろ警備につきますか。

すずか side

私は要くんの欲しがっているものをオークションカタログで確認している。

(銃……だよね)

どう見たって銃だ。カタログにはアンティークで使い物にならない

って書いてあるけど、それだったら要くんがあんなに取り乱すはずがない。

「それではオークションを始めます」

あっ、ユーノくんか。そういえば、このオークションの品の解説は彼がやるんだっけ？

「それでは次はこちらです。どの時代、どの世界、どのような材質で創られたかわかりませんが、傷一つありません。銃であるものの、質量兵器としては全く使えません」

カタログに書いてあることとほぼ同じ解説がされる。買う人も少なく、10万くらいで落とされるだろう。だが要くんが欲しがっているのだ。確実に落とさないで。

「50万」

私がそう言つと周りがざわついた。まさかそんな値段を出す人がいるとは思わなかったのだろう。

「他にはいませんね？ではそちらの方、落札です」

お仕事終了。後で要くんに褒めてもらおう  
そういえば警備はどうなったんだろ。

要side

俺はやることもないから屋上でみんなの活躍を見ている。もちろん  
肉眼で見える距離ではないので、すずか作のスコープを使っている。

「どうですか？要くん」

「悪くないな」

あつ、久遠の雷撃がガジェットに当たった。あれ魔法じゃないから  
AMFは意味無いんだよな。

「ん？」

ティアナとスバルの様子がどこかおかしい。とりあえずニードルガ  
ンでも準備するか。

「アリストテレス、魔力弾」

《了解》

加工して、さて二人は………！？何してやがる！？

「穿て！ニードルガン！」

俺はティアナが無理をして、スバルを誤射しようとしてしまった魔力弾を撃ち落とした。

『要、助かった』

『気にするな、ヴィータ』

後でしっかり言ってやらないとな。

「今日のご苦労だったな」

「はい」

「………はい」

エリオとキャラは普段通りだが、スバルとティアナは元気がないな。

「さて、スバルとティアナは話がある。六課に着いたら俺の部屋に来てくれ」

「……………わかりました」

「要くん」

「さすが、上手く落とせたか？」

「うん！この調子で要くんも落とすよ」

まあ戯れ事はいいとして、あれを落とせたか。よかった。

「いくらだった？」

「50万だよ。私はタ・ダ」

「はいはい」

50万か。想像以上に安かったな。そんなに人気が無かったのか？

しかし手に取ってみるとこいつの凄まじさが本能的にわかるな。

「ねえ、これって何なの？ただの銃じゃないよね」

「これか？これはな

『ブラックバレル  
黒い銃身』

っというんだよ」

## S t S 第四話（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「アリサです」

シヤ「シヤマルです」

ア・シヤ「アリシヤです」

ア「さあ始めましたアリシヤの部屋」

シヤ「今回はティアナの誤射と、まさかの『ブラックバレル黒い銃身』」

ア「作者の思い付きでの登場です」

シヤ「ここで『ブラックバレル黒い銃身』の説明です。どうぞ」

『ブラックバレル黒い銃身』・・・宇宙塵、通称ジンを含む生物に対して強力な殺傷力を持つ銃。

これの出る作品「Notes」では、ほとんどの生物がジンを含んでいるが、この世界にはジンを含む生物がO R Tを内包する要ぐらいしかない。

ジンが多ければ多いほど威力は上がり、アルティメットワンに対しては最強の概念武装となる。

ちなみに、メルブラに出てくるシオンが持つバレルレプリカは、寿命に比例した毒素を撃ち込む。

ア「この世界じゃ使い物にならないじゃない」

シャ「要くんはあくまで保険の為に買ったのよ。自分を殺しかねない武器だからね」

ア「成る程ね」

シャ「次回はどうなるのかしら？」

ア「見てくれないと、暴れちゃうぞ！」

S t S 第五話（前書き）

書いててよくわからない展開に……

## S t S 第五話

要side

いいな、カツコイイな、ブラックバレル。これが俺の手元にあるだけで安心感があるな。弱点が無くなるんだから。さて、そろそろティアナ達がくるかな？

コンコン

「入れ」

「失礼します」

入ってきたスバルとティアナの表情は暗い。

「スバル、ティアナ、言いたいことはわかるか？」

「あ、あの！ティアナは悪くないんです！あそこで私が上手くやれば」

スバルがティアナを庇いたいののはわかる。訓練校時代からのパートナーなんだからな。

「スバル、俺は任務の前に無理はするな。そう言ったよな？」

「……はい」

「ティアナのあれは間違いなく無理だ。無茶ではない」

無理とは出来ないこと、無茶とは確率は低いが出来ること。今のティアナの技量ではあれは無理の範囲だ。

「仲よくするのは構わん。だが傷の嘗め合いは困る」

そんなことをしてやっていけるほど部隊は、戦場は甘くない。

「……………すみません」

「まっ、次から気をつけてな」

「……………えっ？」

「あの？怒らないんですか？」

「何で怒らないといけないんだ？ティアナ」

二人とも反省しているのだから言うことは特にない。あつ、ティアナには言うことがあった。

「スバルはちょっと外してくれ。ティアナと話がしたい」

「あつ、はい」

スバルが部屋から出ていって、部屋には俺とティアナの二人だけになった。

「ティアナ、何を焦ってるんだ？」

「!?!別に焦ってなんて……………」

「今は俺とお前の二人だけだ。無礼講にしようぜ」

「……………」

言いにくいことかね。少なくとも何で焦ってるかわからないとアドバースが出来ない。

「私は才能が無いから、他人より頑張らないといけません。それに、証明しないといけないんです。兄の……………ランスターの銃は無意味でないと」

「兄？話を聞いてもいいか？」

「はい」

ティアナは簡単にだが話してくれた。兄が犯罪者に殺されたこと。葬式の時、上司に無能と言われたこと。成る程な、これなら兄の代わりに頑張りたいと思うのはしょうがないか。

「しかし才能が無いってのはないだろ。俺なんぞ魔法がほとんど使えないんだぞ」

「でも、三佐になれるほど強いじゃないですか」

「おう」

「そこは、そんなことない。とか言っんじゃないんですか？」

でも事実だからな。魔法が使えなくても戦うことは出来る。

「ティアナ、お前は何で六課にいると思う？」

「えつと……スバルのオマケですか？」

俺から見ればオマケというかお母さんだな。

「残念。運がいいからだ」

「運……ですか？」

「おう。運が良かったから俺が目を付けてたスバルとパートナーになった。運が良かったから俺に目を付けられた。運が良かったから六課に入れるだけの実力があつた。人生運なんだよ」

「はあ」

俺だって運が良かったからO.R.Tの力を手に入れたんだからな。

「ちよつと模擬戦するか。スバルを呼んでこい」

「えつ？わかりました」

スバルside

ティアがどんなお話したのかわからないけど、何故か要さんと模擬戦することになった。

「ほれ」

要さんが渡してくれたのはグローブだった。ティアには要さんの魔導式ハンドガンが渡された。

「あの〜、これは？」

「魔法で強化したグローブだが？」

「いえ、そういうことではないんですけど……」

要さんはボケてるんだろうか？真面目なんだろうか？

「真面目にボケてるが？」

「心を読まないで下さい!!」

全くもう、この人は。

「つまり、デバイスは使うな。そういうことだ」

「「えっ!?!」」

要さん相手にデバイス無しで戦うなんて……

「別に勝てと言ってる訳じゃない。気分転換だ」

「ティアく、どうしよう」

「やるしかないでしょ」

「覚悟は出来たな。じゃあ、いくぞ!」

覚悟出来てませーん!!

ティアナside

要さんが何を考えてるのかさっぱりわからない。デバイス無しで戦う?無理に決まってる。

「ほらほら!スバル、鈍いぞ!」

「デバイス無いんですよ!」

「俺だつて能力解放していない!」

嘘!?それで普段と変わらない動きなんて……違う、動きは普段より遅い。けど私達はそれ以上に遅くなってる。

「考え事は動きながらしろ!」

「きゃっ!?!?」

要さんが投げたであろう石が飛んできた。普段ならバリアジャケットが防いでくれる。でも今はそんなものはなく、石一つでも怪我を負いかねない。

「デバイスに頼りすぎなんだよ、お前ら!!」

「くっ!!」

耳に痛いわね。確かにデバイスに頼りすぎてる面もある。だけど・・・

「自分の力でどうにか出来ないほど、私は弱くない!!」

「っつ」

私の撃った弾を要さんは簡単に避ける。

「はああああ!!」

「ほいつ」

スバルの拳も受け流される。やっぱり技術も経験も段違いだ。弾幕を張れば一発は当たるだろう。だけどこの銃は一丁で20発。二丁あるものの、さっき4発撃ったから残り36発。無駄弾は撃てないし、何より魔法で強化されていない私の体にはこの銃は反動が大きすぎる。いったいどうすれば・・・

『ティア』

『何よ、スバル』

『頑張ろう!』

「……………全く、私が一生懸命策を考えてるのに。もう考えるの止めた。勝ち負けが関係ない勝負ならあれこれ考える必要はないわね。」

「いきます!!」

「来い!」

「スバル!やるわよ!!」

「任せて!!」

「はああああ!!」

要side

「お疲れさん」

「ぜえ……………ぜえ……………」

「はあ………はあ………」

疲労困憊ってか？まあよくやったよ。慣れない状況であそこまで……

「お前ら、今までで一番いい動きだったぞ」

「ありがとうございます………」

「下手な小細工使うより、基礎を大切に、パートナーを信頼して自分の思うように行動するのも悪くないぞ。ティアナ」

「そう………ですね」

すっきりした顔になったな。憑き物が取れた感じだ。

「じゃあ次は座学でもやろうか。資料はお」「おい！」「ヴィータ？」

「何勝手に模擬戦なんてやってやがる……！」

「これはティアナのたま」「着いてこい……！理由はどうあれ許されることじゃないんだぞ……！」「痛い痛い……！」

耳を引っ張って引きずるのは止めてくれ……！

「二人とも、俺の部屋のDVDでいろいろと勉強してくれ」

「早く行くぞ……！」

「だから痛いって〜！」

この後こっぴどり絞られました。自分が悪いから反論出来ないよ。

ティアナside

なんというか、締まらなかったわね。

「ティア、見に行く？」

「そうね」

「うわー、これ訓練校時代に貰ったのとレベルが違うよ」

「確かにね」

「こんなの出来るかな〜」

DVDに収録されていたのはどれも一見高度なものばかりだった。でもどれも基礎が出来ていれば出来るものばかりだ。なのはさんが

普段の訓練で基礎ばかりやるのはこういうことだったんだ。

「明日から頑張りましょう、スバル」

「もちろんだよ！」

この日から私は無理な事は止めるようにした。無駄はするけどね。

S t S 第五話（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「アリシヤの部屋、スタート」

シヤ「さあ今回はティアナ撃沈をさせないため作者が無茶をしました」

ア「無理じゃないの？」

シヤ「作者的には無茶らしいわよ」

ア「ふーん、しかし要もデバイス無しで戦わせるなんて酷なことするわね」

シヤ「デバイスが無ければただの人間。そのことを教えたかったんじゃないかしら」

ア「そして最後のDVDで基礎の大切さを理解させる、と」

シヤ「まあヴィータちゃんが連れてったけどね」

ア「任務の後にやってるんだもの、怒られるわよ」

シヤ「ちなみに作者の能内ではティアナを地球の紛争地帯に連れて行って、覚悟を持たせる話を考えていたそうよ」

ア「それはなんとも」

シャ「まあ考えてるうちに無理だと思ったよね」

ア「では次回も見てくださいね」

シャ「バイバイ」

S t S 第六話（前書き）

月村の科学は次元世界ー！！

## S t S 第六話

要 s i d e

今日は休日だ。なので……………

「要くん、遊びに行こ！」

「なのはちゃん、要くんは私と魔導式の材料を買いに行くんだよ」

「何言ってるの？要は私と一緒に出かけるとだよ」

「要はあたしと映画見るんだ！」

「要、遊ぶよ」

この状況はどうしよう。というか殆ど捏造だろ。

「要くんはモテモテやな」

「モテモテです」

「その二人は黙らっしゃい」

明らかに楽しんでいるな。人の苦勞も知らずに……………オ・シ・オ・キが必要かな？

「「ビクッ!!」」

そういえばそろそろ昼だな。飯でも食いながらこいつらの対処方を考えるか。ってエリオとキャロがないな。スバルとティアナは出かけているのを知っているが。

「フエイト、エリオとキャロは？」

「二人で出かけてるよ」

子供二人でか、まあ普通の大人の何倍も強いから問題ないだろう。

飯を食っているとテレビにレジアス中將が写っていた。アインヘリアルとやらの話らしい。

「このオッサンまたこんなこと言ってんのか」

「もうちょっと穏便にいけばいいのにね」

「全くだ」

俺自身はこの人は嫌いでない。ただやり方が過激なだけだ。でも穏便にとか言ってるすずかのほうが過激な気がしないでもないのは何故だろう。

「なあに？要くん」

「な、何でもないぞ」

いちいち心を読むんじゃないよこいつは。まったく心臓に悪すぎる。

「二人とも、中将の肩を持つんやね」

「会ったことがあるからな」

「魔導式を褒められたからね」

「えっ！？そうだったん！？」

「「うん」」

地上の部隊でも魔導式は採用されている。まあ使われているのは魔導式ハンドガンだけ、しかも俺が使うのより威力も低いが……・とりあえず採用されたということで、俺は発案者として、さすがは開発者として、レジアス中将に会っている。お堅いイメージがあったが、実際会ってみるとそんなこともなく、以外と話ができる人だった。

「人間会ってみないとわからんことも多いよ」

「そやね」

もうすぐ飯も食い終わりそつだ。どうやってあいつらから逃げよう。

「要くん。逃げようなんて考えないほうがいいよ」

「ナノハサン、ナンノコトデシヨウ」

どうして人の心を読むんだ！？プライバシーの侵害だぞ！

「要にプライバシーなんてないよ」

「フェイト、どういうことだ？」

「ふふふ」

怖いよ！何してるのこの人！？俺の部屋に監視カメラや盗聴器の類はないはず……………

『マスター、更衣室という可能性も』

『……………いくらなんでもそれは犯罪だろう』

でも絶対にやっていないという確証はない。もしかしたら本当に……………

「あれ？私と出かけないの？」

「すすか……………銃を押し付けるな」

久しぶりに言わせてもらう。昔のすすかはどこへ行った。

「要、ガオガ○ガーの映画見に行くんじゃないのかよ」

「上映来週だからな」

ヴィータは気が早いな。ハンマーが武器のあれを見たいのはわかるが。

「要、私とは」

「先週出かけただろう」

遊びたいのはわかるが、たまには我慢してもらわんとな。俺一人の時間がないんだ。そろそろボトルシップの新作も作りたいのに・・・  
その時だった。

『こちらライトニング4！緊急事態により全体通信！』

『！！？』

普段ならナイスタイミングと褒めてやりたいとこだが、かなり重大なことらしいな。

「よし、いくか！！」

「随分と嬉しそうだな、一条」

「気のせいだ、シグナム」

いかんいかん。顔に出ってしまったか。

現場に着くとスバルとティアナも来ていた。そしてそこには金髪の幼女がいた。

「どれどれ」

呼吸、問題なし。脈拍、多少乱れがあるが問題なし。

「疲労はかなり溜まってるが問題ないぞ」

「よかった」

「久遠はこの子をへりに乗せてシャマルの治療を受けさせてくれ」

「わかった！」

俺らは下水道に残っているレリックを拾いに行くか。

「レリック回収に向かうぞ」

「「「「了解！」「」「」」」」

今は使われてない所だからか下水道も悪臭はしないな。ん？あそこにいるのは誰だ？

「あつ！ギン姉！」

「スバル！」

「知り合いか？」

「姉です！」

成る程な。よく見れば見た目は似ている。見た目はな。

「なんか酷いこと言われた気がする……………」

「あの、一条三佐ですよね」

「そうだが」

「ギンガ・ナカジマ陸曹です！妹や父から話は聞いてます」

「ゲンヤさんからもか」

あの人が俺のことを娘に話すとはな。いったいどんなことを話しているんだろう？

「スバルの婿に相應しい、と」

「マジか？」

「本気で本当と書いてマジです」

あの人は娘に何を吹き込んでいるのか……まあいい。

「レリックを探すぞ。ガジェットが沢山いるようだが」

蹴散らしながら進めばいいか。

久遠side

なのは達が空中でガジェットと戦っているけど、幻覚が混ざっているみたい。あつ、はやてが魔砲撃った。

「凄いね」

「そうだね」

今いるへりの中には、私とすすかとシャマルと女の子がいる。

「俺もいますぜ」

「ゴメンゴメン」

ヴァイスももちろんいるよ。

「あれ？」

「どうかした？　さすがちゃん」

「……………マズイ！　魔力集束を確認！！」

じゃあ誰かがへりを狙ってるの！？……………よし！

「ヴァイス！　扉開けて！」

「気をつけて下さい。怪我されたら旦那に殺されますから」

「うん。旦那！　セットアップ！！」

《久しぶりの出番だね！　セットアップ！！》

敵は……………いた！！

「悪しき竜を滅せし雷よ」

《我らの敵を撃ち砕け》

向こうの砲撃が飛んでくるけど、こっちも準備は終わった。

「《ヴァジュラー!!》」

二つの砲撃がぶつかり爆発する。相殺されちゃった。あつ！逃げられる！

「久遠ちゃん！どいて！」

すずかが大きな銃を持ってきた。

《スナイパーライフル？》

「私専用の魔導式スナイパーライフルよ」

なのはとフェイトが敵の二人を追い込んだけど、姿を消して逃げられたっばい。

「そんなもので私のスナイパーライフルからは逃げられないわよ！」

すずかの魔力弾が何も無い所に飛んでいく。ただその魔力弾が確実に弾かれている。

「サーモグラフィスコープから逃れられると思わないことね！！月の科学は次元世界ー！！」

なんだかすずかの性格がおかしいよ。

「あつ」

「《どうしたの》」

「ちっ、転移されたわ」

「さすがが怖いよ。」

要side

何か酷いことが起こったような……

「お兄ちゃん。封印終わりました」

「しっ苦労さん」

まあリック回収が終わったからいいか。……はあ、ここらはガジェットが出て来ないと思ったのに……

「そこにいる奴ら、出てこい」

暗闇から出てきたのは紫の髪の少女とマフラーを着けた変な人？とちっさい赤い少女だった。

「あれ、召喚獣です」

「成る程」

道理で変な人だと思った。赤い少女はユニゾンデバイスかな。

「それ」

「へっ?」

「貰っ」

「ええっ!?!」

随分と口数が少ない子だな。

「あとあなたも連れていく」

「俺?」

「ドクターが会いたがってる」

ふむ、ドクターというのがジェイル・スカリエッティだとしたら、チャンスだな。俺も会ってみたかったし。

「そうだな、じょう「ダメー!!」はあ」

「要さんを連れていくなんて絶対にダメー!!」

「ちよっとスバル!落ち着きなさい!!」

「離して！ティア！」

向こうはティアナに任せるか。そう思った時、壁を砕いてヴィータがやってきた。

「大丈夫か！？」

「わりい、交渉中だわ」

「あっ、ゴメン」

ヴィータはしょんぼりしてしまった。そこまで反省しなくてもいいのに。

「さて、条件次第ではそちらの要求を飲む」

「条件って？」

「何故レリックを集める、か」

「………言えない。だけど大切なこと」

スカリエッティに脅迫されているのではなく自分の意思、そんな感じだな。

「ではレリックはいくついるんだ？」

「数じゃない。N O ・ X I がいる」

特定の番号で何かを起こすというところか。ジュエルシートと違うな。

「キャラ、それはX-Iか？」

「違います」

「だそうだ」

「ならあなただけでも」

「いいぞ」

『えっ？』

全員が頭の上に？を浮かべている。向こうはこっちの条件に对应してくれたんだ。だったらこっちも応えないとな。

「だ、駄目ですよ！要さん！」

「三佐、賛同出来ません！」

「どつという考えですか！？」

「兄さん、何で！？」

「お兄ちゃん！？」

なんだか反対されてばかりだな。そんなに信用ないのか？それも異常行動と思われたか？後者だろうな。

「……………要」

「ヴィータも反対か？」

「……………ちゃんと帰ってこいよ」

『！？』

いやはや、ヴィータはよくわかってるね。俺がこういう場面で止まらないこと。好感度がうなぎ登りだよ。帰ってきたらアイス買ってやる。

「なら……………行く？」

「ちゃんと着いてこいよ」

紫の髪の少女と赤い少女がそう言うが、気になることがあるんだよね。

「おう。ただその前に……………ふん！！」

俺は震脚を使った。今は70%解放状態だからかなり揺れる。そして

「きゃん！」

地面からエメラルドグリーン髪の髪をした女の子が飛び出してきた。物質透過の類かね。ただ気配が消しきれてない。

「はいはい、君も案内してくれよ」

「あいたた」

「じゃあ、転移する」

そして俺はスカリエツティのアジトに飛んだ。

オマケ

な「何で要くんを連れていかせたの!？」

ス「要さんが勝手に決めたんです!」

す「役に立たないね」

フェ「ヴィータも一緒だったんでしょ!？何で止めなかったの!？」

ヴィ「…………お前らさ、要を信じたらどうだ?そんなんでよく結婚とか言えるな」

な・フェ・す・ス『うっ』

久「久遠は信じてるよ」

ヴィ「あたしと久遠だけだな」

な「そんなことない！私も信じてるよ！」

フェ「わ、私だって！」

す「私が一番だよ！」

ス「私は信じてたからいかせたんです！」

ヴィ「手の平返したな」

## S t S 第六話（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「後書きのアイドル、アリサです」

シヤ「どんなことにもめげません。シャマルです」

ア「次回。一条要が、ジェル・スカリエッティに、出会った  
（ウルルン風）」

シヤ「次回予告が早過ぎよ!!!」

ア「今回はさすがに暴走したわね」

シヤ「スナイパーライフル、凄まじいわね」

ア「確かクアットロのシルバーカーテンって機器にも影響及ぼすん  
じゃ」

シヤ「それを無視するから次元世界一なんですよ」

ア「成る程」

シヤ「では次回も見て下さいね」

ア「バイバイ」

S t S 第七話（前書き）

要とスカリエッツィがだべります。

## S t S 第七話

要side

さあ転移してきたが、ここにあのジェイル・スカリエッティがいるんだな。

「お前が一条要か？」

「ん？そうだが、お嬢ちゃんは？」

そこには銀髪で眼帯を付けた少女がいた。

「チンクだ。武器を渡して貰おうか」

「はいよ」

俺はアリストテレスと魔導式シリーズを渡した。武器なんぞなくてもこの肉体があれば十分生き残れる。そうだ、身体能力は100%にしとこ。

(身体能力100%解放)

これでよし。いざとなったらO R Tで破壊すればいい。

「確かに預かったぞ」

「帰りには返してくれよ」

「わかっている。ではドクターの所へいくぞ。ルーお嬢様達は部屋に戻っていて下さい」

ついにご対面か。人は会ってみないとわからない。悪の科学者って感じだと面白いけどな。でもチンクは結構人間的だから、意外と人格者かも。

「ドクター、一条要を連れてきました」

チンクが扉を開けたそこには

ピチューン

「ああ！また負けた！！」

「ドクターは未熟ですね」

「ウーノ！もう少し手加減したらどうだね！！」

花塚をやっている男女がいた。そして扉は静かに閉じられた。

「少し、待ってくれ」

「苦労してんな」

「お前程ではない」

何で俺の日常を知っているのだろう。監視されてたのかな。

きっかり3秒、再び扉を開けると、さっきの面影が全くない男女がいた。

「よく来てくれた、一条要」

「来てやったぞ、ジエイル・スカリエッティ。それで、何故花塚をやっていた？」

「気分転換だ」

そうか、気分転換か。でも負けてばっかじゃストレスが溜まるだろうに……

「ウーノとチンクは退室しててくれ」

「しかし、危険です」

「構わないよ」

二人は渋々退室していった。

「さて、君に幾つか聞きたいことがあるのだが、いいかい？」

聞きたいことね。まあO R Tだろう。俺に聞きたいことなんてそれしかないだろうし。

「答えられる範囲であること。それと俺の質問に答えてくれること」

「それで構わないよ」

「なら先にどうぞ」

「では、O R Tとはなんだい？そして君は何者だい？」

ほらきた。確かにあれを一目見れば誰しもが疑問を持つ。しかし詳細はなのは達にも教えてないんだ。敵に教えられるわけがない。しかし俺が何者か、か。

「答えられんな」

「だろうね。なら私が考察を聞いてもらえるかな？」

スカリエツテイ side

一条要。こうして目の前にしてみると意外と普通の青年だな。だがやはり質問には簡単に答えてくれないか。なら私の考察を言ってその反応で様子を見てみるか。

「O R Tは確かタイプ・マーキュリーとも呼ぶのだったね」

「そうだな」

「あれはどう見ても君の出身世界、地球の生命体ではない。ならばマーキュリー、水星の生命体ではないか」

「ふむふむ」

動揺もないか。この程度は予想がついていたということか。

「だが水星に生物など住めるはずがない」

「そうだな」

「だからまず君が何者か、それから考えることにした」

わからない問題があるのならわかりそうな問題から解かないとね。

「君は12歳以前の記録が存在しない。それは何故か」

「さあな、俺も12歳以前の記憶なんてないな」

「嘘だね」

そんな可能性はない。もし彼の言う通りだとしても多少なりとも記録が残るはずだ。

「そこで私は考えた。記録が残らない可能性はどんなことがあるか。一つ目、発見されていない世界出身である。しかしその場合、地球の言語が使えることがおかしい。

二つ目、違う時間軸、未来から来た。君はPT事件の時、多少だが未来を知っているような行動をした。だとしたら君の出身はPT事件の記録が残っている近未来のはず。そんな短い間にあのような生物が誕生するとは思えない。

三つ目、私はこれが一番有力な説と考えるが、並行世界から来た」

すると彼の眉が僅かに動いた。やはり並行世界か。しかしそれはそれで疑問が残る。彼が並行世界から来たとしたら何故この世界の出来事、それもPT事件のみを知っているのか。

「並行世界なんてあると思っっているのか？」

「確認はされていないが、理論上十分ありえる話だよ」

「そうか……」

彼の様子だと、まさかその答えが出てくると思っていなかったようだ。

「他に聞きたいことは？」

切り替えが早いな。そうでもないと管理局ではやっていけないか。しかし他の質問か……

「そうだ。質問というかただ話してみたいんだが、いいかい？」

「話してみたい、か。面白そうだな」

「とある文献にあったんだが、空に浮かぶ巨大な十字架が世界を滅ぼす。とね」

何故かこのことを彼に話したくなった。これは実はアルハザードの文献の一つなんだが、彼に話すべきだと思った。

「何？もう少し教えてくれるか？」

おや？随分と食いついてきたな。そんなに気になることだったかな？

「詳しくはわからないが、何か巨大な兵器の類ではないかと私は考えている」

「……そうか。では次はこちらの質問、いいか？」

「もちろんだとも」

「あんたの所に戦闘機人は何人いる？」

戦力把握かな？まあこっちは向こうの戦力は知っているし、人数を教えても能力を知らなければたいした情報にならないかな。

「12人だよ」

「ふむ、さっきの二人に震脚で飛び出てきた女の子。紫の髪の子は違うのか？」

「ルーテシアかい？彼女は人間だよ」

そういえば、彼の技でディープダイバーをしていたサインが引つ張り出されたんだったな。もう少し改良するかな。

「そうか。では次に、あんたはレリックを持っている金髪の少女の情報を知っているか？」

「知ってはいるが……」

「言えない、か？」

「その通りだ」

ここで聖王の情報が言えるわけがない。もし彼がORTの情報を提示していたらわからなかったが。

「俺の質問はこれだけだ。なかなか楽しかった。敵でなければよか

ったのにな」

「確かに、そうだったら面白そうだ」

彼が退室しようとした時、立ち止まり、こちらを向いて言った。

「言い忘れていた。俺の仲間を殺すことは許さん」

「普通そこは傷付けるな、とかじゃないかい？」

「訓練でも傷付くんだ。戦場で傷付くのは日常茶飯事だ」

現実を常に見ている。だが優しいな。

「じゃあな」

一条要。本当に面白い男だ。彼が友人だったら楽しいだろうな。

要 side

部屋を出るとチンクがいた。

「もう帰るのか？」

「ああ」

「そうか。ならこっちだ」

改めて見るとやっぱり人間的だな。こういう所で育ったからもっと機械的かと思ってたんだけどな。

「ほら、武器だ」

「サンキュー。じゃあ今度は戦場かな？」

「だろうな」

そうして俺は六課の近くに転移した。

帰ってきたぞ。もう周りも暗いし、夕飯食って寝よう。そう思って六課の隊舎に入ると……

「おかえり、要くん」

わー、部隊長のお出迎えだー。

「ダッシュー!!」

一条要は逃げ出した。

「鋼の軛ー!!」

しかし捕まった。さらに逃げようともがいている。

チャキ

「無駄だ」

首に剣を突き付けられた。一条要は目の前が真っ暗になった。

「はいはい、現実逃避はええからOHANASHIしよな」

「いゝやゝ!!」

俺は一晚みっちり絞られた。俺、セミフリーだから命令に従う必要はないのに。

ちなみに夕飯は久遠が確保しといてくれた。ええ子や。

S t S 第七話（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「みんな、元気？アリサだよ」

シヤ「今日も元気だ、出番が欲しい。シヤマルです」

ア「さあ今回はスカリエッティとの対談でした」

シヤ「何で花 塚なんて持つてるのかしら？」

ア「要について調べる時、たまたま見つけたらしいわよ。ちなみに、本当にストレス発散するときは 国無双をやるらしいわ」

シヤ「どっちかわからないわね」

ア「さあ次回は日常編」

シヤ「適当に短編をまとめるそつよ」

ア「みんな、見てね！」

日常く短編集？（前書き）

一 応三本仕立てです。一つ短いけど。

## 日常く短編集？>

ヴィヴィオがやってきた

要side

スカリエッティの所から帰ってから地上から任務の依頼がきた。普通なら断るんだけど、六課にくる前によく仕事の手伝いをしてくれた人からの依頼だったからな。

「一条、仕事です」

これが口癖のあの人だ。まあそれはいいか。帰ってきたんだし、のんびりしようかな。

「ただい「イヤーーー!!」「ま?」

あの子は前回の、いつから六課は託児所になった。

「あつ! 要くん、ヴィヴィオお願い! ヴィヴィオ、パパの言うことちゃんと聞くんだよ」

「.....うん」

ちよっ!?! パパって何!?! 父親ってこと!?! その子、ヴィヴィオも何納得してるの!?!

「誰か説明してくれ」

「すぴー」

「……………やっと寝たか。はやて、説明頼むぞ」

「わかったわ」

はやての簡単な説明はこうだ。病院に連れていったヴィヴィオが脱走。なのはが発見。なんかママになる。フェイトもママになる。なのはとフェイトが俺をパパと教え込む。

「ということか？」

「そういつことや」

はあ、何で俺が子守なんて……………

「ん〜」

「っつ」

ヴィヴィオが起きそうになったので、軽く叩いて安心させてやる。

「ん〜」

「慣れとるな」

「先生の所のミアの子守をやらされたからな」

スターズと地球に行こう

「スバル、ティアナ、地球にいくぞ」

「「はい？」」

久しぶりに先生に会いに行くのに、ついでにこの二人を鍛えて貰おうと思つて二人を連れていくことにした。

「準備しろ」

「「は、はい」」

翠屋で待ち合わせなので、今はお茶をしている。

「このシュークリーム美味しいです!!」

「スバル、もう7個目じゃない」

「ハハハ、なのはと要の生徒なら気にしないでいいよ」

「父さん、甘やかすなよ」

翠屋特製シュークリームをスバルがぱくぱく食べる。見ていて気分はいいが、お客さんに出す分が無くなるじゃないか。

カランカラン

お客がきたのかと思って入口を見ると、そこにはアストン一家がいた。

「要」

「ミーア、久しぶり」

ミーアが走って俺に抱き着いてきた。今年で10歳か、大きくなったな。

「先生、カレンさん。お久しぶりです」

「久しぶりだな」

「ミアを妻にする覚悟は出来た？」

「私はいつでもいいよ」

「黙れ、駄母娘」

ミアもカレンさんに毒されてきたな。

「さて、こいつらか？」

「ええ、お願いします」

「オレンジは俺、水色はカレンだ」

「オレンジ……………」

「水色……………」

指導は夫妻に任せて俺はのんびりしてますか。

ティアナside

「ほらよ」

私が渡されたのは拳銃、あれ？前にもあったような……

「ゴム弾だから安心しろ」

「はあ」

「ならやるぞ」

そう言うと要さんの先生、確かミックさんはいきなり撃ってきた。

「きゃっ!?!」

「そらっ!」

さらに懐に入られて蹴られた。

「戦場じゃ足を踏み込んだ瞬間に戦いだ。覚えとけ」

この人本当に40代!?! 要さんより容赦ないじゃない!!

スバルside

「それじゃこの『中国武術を組み込んだシューティングアーツ指南書』っていうのに沿ってやっていくわよ」

「はい！」

前、気が付いたら部屋にあった本だけど、こんな所で役立つなんてな。

「じゃ、やってみて」

「はい！」

要さんは恐いって言ってたけど、優しそうな人じゃん。少なくともティアの練習相手の人よりは良さそうだ。

「こつですか？」

「腰が甘〜い」

スパアン

「痛っ!？」

突然竹刀で叩かれた。っていうかいつの間持ってたの!？

「はい、もう一度」

「うう、ううですか？」

「もっとえぐるように。それじゃ誰も殺れないわよ」

スパアン スパアン

「痛い痛い!!」

要さんの言う通りだ。この人怖いよ。

「他事考えなさい」

スパアン

「もういやあ!!」

「始まってすぐに弱音を吐かなさい」

スパアン

要side

約半日、二人はボロボロになって帰ってきた。

「お疲れ様です」

「なかなか筋はよかったぞ」

「浸透勁は完全にマスターさせたわよ」

二人ともよく頑張ったようだ。特にスバル。半日で浸透勁をマスターするとはな。

「どうだった？二人とも」

「………帰りたい」

ハハハ、まだまだ未熟だな。

『ばーさーかー要ちゃん』再臨

朝起きたらまた女になっていた。寝る前に飲んだドリンクのせいかしら？まあいいわ、二回目にもなると慣れたもんだわ。

「みんな、おはよ〜」

「ヒッ」

『……………また？』

エリオだけ怯えて、他のみんなは呆れていた。しかし怯えるなんて酷いな〜。

「エ〜リ〜オ 怯えなくていいよ」

「えっ、あっ、助け」

「誰に助けを求めるのかな〜」

そんな子にはオシオキね。

というところで女装させてみました。服はキャロのなんだけど、上手に出来ました〜

「くくくく」

「あんまりいじつたらあかんで」

「はい」

でも暇よね。これから何しよつかしら……

「おはよう……」

あら、ヴィヴィオが起きてきたわね。

「おはよう、ヴィヴィオ」

「お姉ちゃん、誰？」

「要よ」

「パパは男だよ」

「今は女なの」

「??？」

混乱しちゃったかしら？まあヴィヴィオもそのうち理解するようになるわ。たぶん。

「みなさん、おはようございます」

ヴァイスもきたわね。そうだ

『ねえはやて』

『なんや?』

『ヴァイスで………で………って………って………って………って………って………って………って………』

『おk』

部隊長の許可も出たし、作戦決行

ヴァイスside

「はじめまして、ヴァイスさん」

「えっと、君は?」

どこかで見たとのことのあるような女性だけど………誰だ?

「いつも兄がお世話になっています」

「兄?………もしかして、旦那、一条三佐の妹さん?」

「はい 一条<sup>く</sup>楔です」

旦那も人が悪い。こんな可愛い妹さんがいるなら紹介してくれてもいいのに。それに

ボーン

シグナムの姉さんにも引けを取らない胸の持ち主とは。

「あの……ヴァイスさん？」

「あつ、何ですか？」

胸を見ていることに気付かれたか？

「ミッドチルダに来るの初めてでして、案内をして欲しいんですけど……」

「俺が？」

確かに今日は休みだけど、旦那にばれたら殺られるかもしれん。

「ヴァイスくん、ヴァイスくん」

「なんすか？八神隊長」

「実は楔ちゃん、写真で見たヴァイスくんに一目惚れしとんよ。要くんもヴァイスくんなら構わないって」

「マジすか」

「マジマジ」

これはまたとないチャンス！上手くいけばムフフな状況に。

「わかりました！このヴァイス・グランセニックにお任せを……！」

「ありがとうございます。では行きませう。」

『哀れな』

全員の声である。

「ここが最近人気のスイーツ店です」

「ヴァイスさんは女性の好きなものをよくご存知ですね。モテるんじゃないありませんか？」

「いやあ、妹がいるんで」

本当はナンパの為に調べただけ、役に立ってよかった！

気が付くともう夜になっていた。あのあと、洋服を見たり、映画に行ったり、食事をしたり、かなりいい雰囲気になったんじゃないか？

「今日は楽しかったです」

「俺もですよ」

「そうだ。お礼がしたいので、ちょっと来て下さい」

そう言っつて楔さんが俺を連れてきたのは路地裏だった。

「……………目を閉じて下さい」

これは……………まさか!!

「早く」

「はい!!--」

キスの前フリじゃないのか!?俺にも春が来た!!さあさあさあ、いつでもどうぞ!!

「目、開ける」

「・・・・・・・・はい？」

あれ？この聞き慣れた声は。俺が目を開けると旦那がそこにいた。

「な、ななななな」

「スマンなヴァイス。女の俺がお前をおちよくって」

「女の・・・・・・・・俺？」

意味がわからない。旦那は何を言ってるんだ？

「俺な、性転換薬飲まされると変な人格が出て来るらしくてな」

「じゃあ、楔さんは」

「俺だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ノオオオオオ！！！！」

その夜、悲しい男の悲鳴がミッドチルダに響き渡った。

次の日からヴァイスはこれをネタに、はやてにしばしば遊ばれることとなる。

日常く短編集?>>(後書き)

<アリシヤの部屋>

ア「アリサです」

シヤ「シヤマルです」

ア「今日からアリシヤの部屋に新しい住民が増えます」

シヤ「魔界のオジギソウの『まーくん』です」

キルキルキル

ア「今はまだ20cm程のまーくんですが、これが終わるころにはどれくらいの大きさになっているんでしょう」

シヤ「ほら、今日の分のお肉よ」

キルキルキル

ア「さあ今回は短編集?でした」

シヤ「ヴィヴィオちゃんとの出会い。ティアナとスバルの強化。そしてばーさーかー要ちゃんね」

ア「ヴァイスさん、哀れね」

シヤ「はやてちゃんも自重させないと」

ア「では次回はコラボ企画になるかも」

シャ「楽しみにして下さいね」

外伝くバグな魔銃士>>(前書き)

白銀の騎士様の「バグはバグでも、チートじゃないぞ?」とのコラボです。

外伝くバグな魔銃士>

ソウヤside

最近刺激が少ないな。ラカンが襲ってきた時は楽しかったけど。

「そうだ、オルタを喚ぼう」

久しぶりに稽古をつけて貰おうとしよう。俺は『TYPE・MOONの鍵』を使った。

「現れよ！！セイバーオルタ！！」

すると俺の下に魔方陣が現れ、その魔方陣が光り輝く。そして

「久しぶいな、ソウヤ」

「久しぶり、オルタ」

黒いドレスに白い肌の美人、上手くオルタの召喚に成功したな。

「今日はどうしたのだ？」

「稽古をつけて貰おうかと」ソウヤ「あっ、ゼクト」

ちょうどゼクトがやって来たが

「」「」むっ  
「」「」

オルタとの雰囲気なんだか険悪なんだが……どうしよう、止めるべきだろうか？止めた瞬間に倒されそうだけど……

「貴様、いつまでソウヤに引っ付き続ける気だ？」

「おまこそ、ソウヤの師匠の一人だからといって少し調子に乗っているのではないかの？」

ああ、どうしよう！このままでは周辺が焦土と化してしまつう。

「待て待て！！とりあえず抑えろ！！！」

「……ソウヤが言うなら」

「……仕方ないのお」

あつ、意外と止まってくれた。

「なら今日はソウヤを二人じめということだよいな」

「そうじゃの」

エエッ！？なんでそういうことになるの！？というか俺の意見は！？

「しかしそうになるとナギ達が邪魔じゃの」

「ならソウヤ、宝石剣を出せ。並行世界に飛ぶぞ」

「……わかった」

反論したら間違いなくやられるし、なるべく安全な世界に飛ぶようにしよう。俺は世界の創造主でワールド・オブ・クリエイター宝石剣を創り出し、世界を飛んだ。

## 要side

今日は休暇を取ってワーカーホリックその2、フェイトと一緒にいる。俺が休むからお前も休めと言ったらあっさり休暇を取った。なのはより楽だ。ちなみに今は俺、フェイト、アルフで公園に来ている。

「ほーら、取ってこい」

「わん！」

ボールを投げると完全に犬となりボールを持ってくるアルフ。和むな。

「楽しそうだね、二人とも」

「フェイトもやるか？」

「見てるだけでいいよ」

楽しいのにな。ん？魔方陣？

「要、フェイト、あれって」

「まただな」

「まただね」

今度は誰がくるんだろうな。そう思って見ていると、魔方陣から出てきたのは、銀髪の男と銀髪の美少女、金髪の女、ってあの金髪の方ってセイバールタじゃねえか。

「やべっ、人に見られた」

「あっ、気にしないでいいぞ。慣れてるから」

「ならよかった」

「よくないじゃろ」

「未熟だからこんなことになるのだ」

銀髪少女とセイバールタはまともっぽいこと言ってるけど、男の腕に抱き着きながらだと説得力ないな。それにしても

「フェイト、何故引っ付く」

「向こうだってやってるよ？」

向こうがやるからこっちがやるってのはおかしいだろ。

「アルフ、どうにかして」

「自分でなんとかしな」

むむっ、アルフがこんなこと言う子だったとは……。……。おやつ抜きだな。しかし本当にどうしよう。向こうを見ると、男と目が合った。

(この状況、どうする?)

(そうだな。試合でもすれば離れるんじゃないか?強いだろお前)

(いい考えだ。よし、やるか)

この間、0.2秒。

「銀髪!勝負だ!」

「やってやるよ!」

「フェイト、アルフ、下がってる!」

「オルタ、ゼクト、手を出すなよ!」

なんかフェイトを離したいあまりに戦いを選んだけど、もしかしてもっと面倒な方を選んだかも。

ソウヤside

目と目の会話で戦いを選んだけどよかったかな？まああいつは強そうだしいいか。

「俺は蒼神双夜。ソウヤでいい」

「一条要だ。要って呼んでくれ。ああそうだ、結界張ってくれないか？俺は出来ないからさ。出来るなら魔力とか完全に漏れないやつ、結界を張れないのか？もしかしたら張れないって言ってるだけで、俺を試しているのか？とりあえず俺は王の財宝ゲート・オブ・バビロンから双銃『陰陽』を取り出す。

「一言魔法、『結界』」

地面に銃弾を打ち込む。ん、成功。これなら十分だな。

「凄いな。統一言語ユニバーサルの一種か？その銃の力か？」

「いや、俺のオリジナル魔法。つか統一言語ユニバーサルを知っているのか」

飛ぶ時に型月世界に設定しなかったのに。

「気にするな。身体能力100%解放、魔力100%解放、アルテイメットワン発動、アリストテレス セットアップ」

《セットアップ》

おー、なかなかの魔力量だな。雰囲気も変わったし。

「よし！俺もやるぞ！」

俺は銃を構えて戦闘体制に入った。

フェイトside

二人が戦うちよつと前

なんでか要がああの銀髪の人と戦うことになった。とりあえず私とアルフは向こう側の女の人二人と一緒にいる。

「はじめまして、フェイト・T・ハラオウンです。フェイトでいいです」

「フェイトの使い魔のアルフだよ」

「セイバーオルタ、オルタで構わん」

「ワシはフィリウス・ゼクトじゃ。ゼクトと呼んでくれ」

二人とも美人だな。オルタさんは人を寄せ付けない感じだし、ゼクトさんは普通に綺麗だ。

「フェイトとやら」

「何ですか？オルタさん」

「あの男は何者だ？」

あの男って、要のことだよな。どうしてそんなこと聞くんだろう。

「あの男からは異形の気配がする」

もしかして、ORTのことかな？オルタさん、一瞬で見抜いちやうなんて何者なんだろう。でも見抜いたとしても教えれないよね。

「すみませんけど、教えれません」

「……まあよい。ソウヤが引きずり出してくれるだろう」

「あの人、そんなに強いんですか？」

たとえ人の状態であっても、要は管理局最強クラスの間人だ。そう簡単にORTを出させることなんて無理だと思っ。

「ソウヤはバグキャラじゃぞ。あんな男に負けるわけなからう」

「ならば要はチートだね。そっちのなんかに負けやしないよ」

「よく吠える犬じゃの」

「あたしは狼だ!!」

でも実際どうなるんだろう。あつ、結界が張られた。

「ほう」

「なかなかの魔力じゃな」

要が力を解放した。この魔力量は、要の全力だ。これならきつと負けない。

「始まるぞ」

オルタさんのその言葉を合図にするように、二人の戦いは始まった。

要 side

双銃か。俺も魔導式ハンドガン持ってきてくりゃよかった。

「喰らえ！」

「アリストテレス」

《シールド》

ソウヤの撃った銃弾がシールドに当たり輝を入れる。

「硬いな」

「やるな」

いきなり輝を入れられるとは………楽しい戦いになりそうだ。俺はシールドを破棄し、ソウヤを中心に走り回る。

「逃がすか！一言魔法、『追尾』！」

「おおっ!?!」

弾が追ってきやがった。俺はシールドで防ぐ。

「防いでも逃げてても駄目なら、攻撃だ！！シールドスライサー！！」

「一言魔法、『防壁』」

銃を撃つて創った防壁に防がれる。あの魔法は銃を触媒にしないと出来ないか。

「なら近接戦だ！！」

「きたな！！」

ソウヤは近接戦を想定していたようでナイフを取り出した。

「シッ！！」

高速の斬撃が俺の首に叩き込まれた。

ソウヤ s i d e

あつれ〜？斬った感覚がないんですけど。あつ、腕掴まれた。

「びつくりしたな」

全然無傷じゃん。なんでさ？

「俺はBクラス以下の攻撃は効かないんだ」

「それなんてヘラクレス？」

「悪いな、抜骨」

要が掴んでいる俺の腕の肘を叩いたと思うと、骨が外れた。

「いつ!?!」

骨を外す技かよ。超回復力はいくまで自然治癒の延長だからな。このまま腕を掴まれたままだとマズイし、蹴り飛ばす!!

「らあっ!!」

「うおっ!?!」

これで骨をはめて

ゴキ

いてて、骨をはめるのって意外と痛いよな。しかし迂闊に近接戦は出来んな。もう外されたくない。でも陰陽はC++だから要の能力に防がれるかも。でも++だから大丈夫か? いやいや、不確定なことはやりたくない。なら

「究極装填、かな」

約束された勝利の剣エクスカリバーを究極装填すれば、まず負けないだろう。でも流石に約束された勝利の剣エクスカリバーは酷いかな? よし、太陽剣ゲラムでいこう。俺は王の財宝から太陽剣を取り出し

「究極装填」

体に取り込んだ。

オルタ side

ふむ、太陽剣グラムを取り込んだか。これでソウヤは竜に対して最強になり、通常攻撃も A + の威力になるな。

「あの人、何したんですか？」

「剣を、取り込んだよね」

「ソウヤの究極技法アルテマ・アートじゃ」

「「？」」

そのような説明ではわからんだろう。

「武器の力を取り込む魔法だ」

「「へえ」」

むっ、戦闘が再開されるな。これであの男の異形を引きずり出せるか？

要 side

「おいおい、何だよそれ」

武器を取り込んだ？どんな技だよ。魔力量も増えてるし、さっきの剣の分だけ強くなったってことか？

「これならいけるぜ」

そう言ってソウヤは突撃してきた。さっきまでとは段違いの速さだ。

「オオオオオ！！」

「クソッ！！速い！！」

ソウヤの蹴りを受け流し続けるが、途中で間に合わなくなった。

「オララララ！！」

「ぐうう！？」

一撃一撃が確実にダメージとなっている。蹴りがBクラスより上ってことか！？

「ラスト！！」

「ガハッ！！！！」

最後の蹴りが思い切りクリーンヒットする。内臓が幾つかやられたな。もうやっつけてしまえ。

「ORT………解放」

ソウヤside

いやね、さっきの蹴りで勝負は決まったと思ったよ。だけどさ

「何？このバケモノ」

「G y u a a a a ! !」

これもしかしてあれですか？タイプ・マーキュリーですか？周りは水晶渓谷だよね。なんか体が重いんだけど。

「ソウヤ！！逃げるのじゃ！！」

「！？一言魔法、二重詠唱『防壁』！！」

「G y u i i i i ! !」

急いで陰陽を取り出して創った防壁もあっさり破壊され、ORTの脚に吹き飛ばされました。バグじゃ勝てねえよ。そんなことを思いながら意識が飛んだ。

「うん」

「ソウヤ！！」

あれ？俺って……

「起きたか？」

ああそつだ。負けたんだ。

「大丈夫か！？ソウヤ」

「どこか痛い所はないかの！？」

「大丈夫」

ハア、あれはないよな、ホントに。

「なあ要」

「なんだ？」

「あれつて、ORTか？」

「ああそつだ。どうだった？」

どうだった？って言われてもな。

「魔王より、マシ？」

「ああ、あれと比べるな」

「要も戦つたのか！？」

「最近一撃入れた。無傷だったけど」

「いやいや、あの人に一撃入れたのかよ。要も大概バケモノだな。」

「そろそろ夜だが、どうする?」

「ん、帰るわ」

「そう言うと思って、俺の家、翠屋のシュークリームだ。持ってけ」

「マジで?サンキュー」

「いいもん貰ったな。それじゃ、帰るとしますか。俺は宝石剣を取り出した。」

「じゃあな、要」

「またな、ソウヤ。ゼクトとオルタは薬の用法と用量は守れよ」

「」「うむ」

「えっ?」

「ちよっ!?何渡したの!?ああっ、間に合わない!!」

要side

「いったな」

「いったね」

「あの二人に何渡したのさ」

アルフがそう聞いてくる。まあ気になるよな。

「あの二人、体があればから1日だけ大人になれる成長薬と惚れ薬」

まあ惚れ薬の方は俺が以前飲んだ、飲んだ人を好きになるやつなんだけどね。

「可哀相に」

「見れないのが残念だ」

きつと楽しいことになるだろうな。

外伝<バグな魔銃士>（後書き）

<アリシャの部屋>

ア「アリサです」

シャ「シャマルです」

キルキルキル

ア「まーくんです」

シャ「さて、早速貰った成長剤を飲ませてみましょう」

ぐくぐくぐくぐく

ア「いい飲みっぷり」

シャ「次回が楽しみね」

ア「今回はどうだったでしょう？」

シャ「白銀の騎士様、気になる所があれば言ってみなさい」

ア「では今回はここまで」

シャ「さようなら」

外伝く飛翔ファミリー再び>(前書き)

八八八 ついに連日更新が途切れたぜ

## 外伝＜飛翔ファミリー再び＞

飛翔side

「飛翔、デバイスの調子はどうだ？」

「アインスカ。悪くはないぞ」

「ならば使用時のデータが収集したいのだが」

使用時のデータ、か。そうになると本気で戦ったほうがいいだろうが、誰と戦うか。

「飛翔、魔導式シリーズはもうないのですか？」

「それで全部だ。もし欲しいなら要の世界に行くしか……  
……そうだ、要がいるじゃないか」

要なら本気、それどころか全力で戦っても問題ないし、リニスは魔導式シリーズの見学が出来る。ついでに鈴音の訓練も出来る。

「アリシアと鈴音を呼んでこい。世界を飛ぶぞ」

要side

「やああああ!!」

「ほいつ!」

俺はエリオと個別訓練をしている。ストラダに組み込んだパッチのテストの為だ。

「その心臓、貰い受ける!!!!」

《ゲイボルグ》

ストラダが紅く染まり、俺の胸を狙ってくる。正確には心臓ではなくリンカーコアを自動追尾するようになってる。

《シールド》

ストラダがシールドに阻まれるが、シールドを破壊する。だがそれと同時に威力が弱まり、俺は素手でストラダを掴む。

「ソニックムーブと併用した方がいいな」

「そうですね」

ソニックムーブ走り回りながらのゲイボルグ。ストラダが自動追尾してくれるので、間合いから離れないように走り回ればいい。ゲイボルグだからもう一つの使い方もちゃんとあるんだが、そっちは

エリオ自身が考えた方がいいだろう。

『要さん』

「どつしたシャーリー」

『転移反応がありました』

「………またか」

今度は誰だよ。あんまりチート過ぎるのは困るぞ。

『えっと、照合したら飛翔さん達なんですけど』

「そうか！よかった！」

比較的まとまな集団だ。胃に穴が開かなくて済みそうだ。

「となれば、迎えに行くか」

飛翔 side

ここは……訓練場か。これだけでは要の世界かわからんけど、アリシアがミスするはずもないか。

「おーい、久しぶり」

「久しぶり、要」

「久しぶり〜」

成功だな。これでいろいろと計画が実行出来る。

「あれ？そっちにいるのって」

「はじめまして、リニスといいます」

「リインフォース・アインスだ」

そういえば前回二人はいなかったな。

「飛翔、すずかとアリサは？」

「実家に帰っている」

「へえー」

そろそろ本題に入らないとな。

「実は要達にくっつか頼みがあるんだが」

「いいぜ。とりあえずお茶を飲みながら聞こうか」

要 side

のんびり話を聞くために会議室にきたのだが、何故か六課の主要メンバーが揃っていた。

「……………リニス？」

「久しぶり？それともはじめまして、でしょうか？」

「うーん、はじめまして、かな」

何やらフェイトとリニスさんは知り合い、いや、並行世界だから初対面か？ややこしいな。

《ふむ、体があるのは羨ましいな》

「なに、ただ私の運が良かっただけだ」

《是非ともその運を分けて欲しいな》

向こうじゃディオネとアインスが話している。

「さて、そろそろいいか？」

「おう」

そうそう、飛翔の頼みを聞くのが俺の仕事だった。

「頼みは三つあるんだ。一つ目は俺のデバイスの使用データの収集を手伝ってほしい。二つ目は鈴音を訓練に参加させてほしい。三つ目はリニスに魔導式シリーズの製造を見学させてほしい」

成る程ね。そういえば飛翔はデバイスを持ってなかったな。最近創ったのかな？まあ俺もいい訓練になる。

鈴音の訓練参加はこっちが頼みたいくらいだ。フォワード陣にもいい刺激になるしな。

ただ三つ目はさすがに聞かないとな。

「前者二つはOKだぜ」

「三つ目もいいよ」

「さすが、いつの間に……………」

「まあそういうことだ。フェイトはフォワード陣を呼んでこい。さすがはリニスさんと研究室に。シャーリーはデータを収集する手伝いだ」

「「「了解」」」

シールドの新しいバリエーションを使おうかね。

飛翔 side

こつもあつさりOKが貰えるとはな。

「さあ飛翔、俺は100%だぞ」

「なら、バルディッシュ・エテジアン、セットアップ」

《セットアップ》

こいつはリニスに手伝ってもらい、バルディッシュを元に創ったデバイスだ。オリジナルとは違いカートリッジシステムはないが、片手でも扱える。

「ほー、バルディッシュか」

「オリジナルと別物と考えた方がいいぞ」

「なら俺も創るか」

《シールド》

シールドをどうするんだ？

するとシールドが棒状に丸まり、先端が尖った。

「シールドランス。まだ試作段階なんだが」

よく考えるよな。シールドを槍にする奴なんてあらゆる世界の中で  
もないだろう。

「行くぞ、要」

「こい、飛翔」

長斧と槍がぶつかり合う。お互い始めからトップスピードだ。

「うおおおおー！！」

要の突きを払いながら切り込もうとするも、さらに突きを放つてく  
る。さすがにランサーには程遠いが、こちらも武器を使いこなせて  
いるわけではないので対応が難しい。

「ならライオットザンバーだー！！」

《ライオットザンバー》

バルディッシュ・エテジアンを巨大な双剣にし、手数で攻める。

「オラララアアー！！」

「ぬづううう!?!」

これだけやっても防ぎ切るか。それなら……

「こいつだ!?!」

「何!?!」

双剣をガンムのソードンパルスのように連結させる。

「ハアアアア!?!」

バキィ

俺の一撃が要の槍を破壊した。

「あーあ、負けちまった」

「まだもう一つあるからな」

「マジか」

そんなこと言いながらも要は楽しそうだった。

要side

やっぱり慣れてない槍じゃ上手く戦えないな。飛翔も慣れてないからあれだけやれたけど。

「次はこれだ。レヴァンティン・サラマンデル」

「成る程」

アインスの協力で創ったのかな？

俺はどうやって戦おうか………

「やっぱり拳だな」

自分の体が1番信用出来るな。うん。

「やるぞー！」

「おうー！」

飛翔の剣術は凄いからな。ちょっとでも隙を見せたら斬られるかもしれない。

「セイツー！！」

「シツー！！」

剣と拳がぶつかる。速さも威力もある。流石だな。だけど速さなら素手のこっちの方が上だ。

「オラオラオラオラー！！」

「ぐうう！？」

さっきは向こうのペースだったが、次はこっちのもんだ。

「舐めるな！！炎を纏い舞え、剣刃！！」

《ダンシングフォーム》

ん？連結刃だよな。なのにシュランゲフォームじゃなくてダンシングフォーム？

そんなことを思った時、連結刃が柄から離れて襲い掛かってきた。

「何だと！？」

俺は刃を殴って落とそうとするが避けられる。そして刃に斬られる。

「熱っ！！」

斬られた痛みよりも、刃が纏っている炎の方がキツイ。

「爆発しろ」

「なっ！？」

ドカーン

「ゲホッゲホッ」

まさか刃が爆発するとは、壊れた幻想ブローケン・ファンタズムじゃあるまいし。

「終わりだ！」

再び刃が飛んでくる。もうあれを使おう。

「限界突破！！身体能力120%解放！！神速！！」

最近使えるようになった能力の100%越えと神速の併用。

「ラアッ！！」

「ぐっ！？」

俺は一気に飛翔の前にいき、飛翔を殴った。

「今度は俺の勝ち」

「神速使えるなんて……聞いてないぞ」

「習得したの先週だもん」

いや、長かった。本格的に習得しようと思って5年だもん。

「二人とも、ご苦労だったな。飛翔、何故二つ同時に使わなかった？」

何？二つ同時？それが正しい使い方なのか？

「一つ一つの性能を確かめたからさ」

『そうか』

しかし連戦は疲れるな。しかも限界突破と神速使っちゃったし。

「休憩するか。疲れた」

「そつだな。連戦は疲れる」

「シャーリー、データを纏めといてくれ」

『了解です』

確かちょうど翠屋のケーキが残ってたよな。

リニス side

やっとあの魔導式シリーズの製作現場を見学出来るのね。

「リニスさん楽しそうですね」

「当然ですよ。ずっと見たかったんですから」

この研究室であれが造られてると思うとドキドキするわ。あの武器は本当に凄いのよね。リンカーコアがない人でも戦えるようになるし、下手な魔法より威力もある。

「これが最新の魔導式ハンドガンですよ」

「これが……」

見た目は普通の質量兵器だけど、中身は全然違うのだから凄いわよね。

「これは簡易カートリッジが要らないんですよ。大気中の魔力をかき集めて溜め込みますから」

「成る程ねえ」

よく考えるわね。あれ？これは……

「あつ、それ設計図ですよ。いります？」

「いいの!？」

思い切りマル秘って書いてあるけど。

「いいんですよ。並行世界に行ったら情報流出なんてないですから」

「それなら、貰うわね」

早速設計図に目を通してみる。すると部品は全て既存の物しか使っていないのがわかった。

「新しい部品は使わないの？」

「新しい部品なんて造るの面倒じゃないですか」

アハハ……面倒つて。

「それじゃこれから造るので、手伝って下さい」

「わかったわ」

エリオside

『鈴音！頑張つて！』

『みんな、負けないでね』

理由はよくわからないけど、鈴音さんと僕達フォワード陣が試合をすることになった。アリシアさんとフェイトさんが応援をしている。

「あっ、そうそう。要から変身の許可でだから」

「わかりました。母様」

変身？レアスキルか何かかな？

「変身」

《カメンライド・・・ディケイド》

えっ、えっ!?!なにあれ!?!

「カッコイイ!」

凄くカッコイイ!!スバルさんも同じ意見みたいだ。

「はいはい、カッコイイのはいいからやるわよ」

ティアナさんがもうデバイスを構えてる。この前地球に行ってからなんか変わったな。

「いくよ」

鈴音さんがカードを取り出した。

《アタックライド・・・ブラスト》

そして銃を撃ってきた。ちょうどいいからあのパッチを試そう。

「破魔の紅薔薇!」

《ゲイジャルグ》

ストラーダの穂先が紅く染まり、弾を弾いた。

「あれ?」

魔法じゃないのあれ？魔法ならゲイジャルグパッチで掻き消せたりするの。ちなみにゲイジャルグパッチは穂先にAMFを纏わせることにより魔法を消すのだ。兄さんとすずかさんが造ってくれた。ゲイボルグパッチは誰が造ったか知らないけど。

「まだまだ！」

「うわわっ!?!」

魔法じゃないなら普通に戦うしかないよ。

鈴音side

父様から言われて戦っているけど、意外と楽しいかもしれない。仮面ライダーで魔導師と戦うことなんてあんまりないし。

「下がちなさい！エリオ！」

《バリアブルシュート》

ティアナが撃った魔力弾を撃ち落とそうとしたけど

「アルケミックチェーン！」

下から飛び出てきた鎖が腕に絡み付こうとした。私はそれを右に跳んで避ける。

「やるね。なら次はこれ」

《アタックライド・・・イリュージョン》

私は4人に分身して一人一人に向かってく。

「甘いわよ!!」

ティアナはダガーで対抗し

「一撃必倒!!」

スバルはディバインバスターを放ち

「ハアアアア!!」

エリオは連続突きを放つ。しかし、本体である私はキャロを攻撃している。

「喰らいなさい!!」

「フリード、お願い!!」

「キュクー!!」

フリードが炎によってキャロを守るようにする。竜相手ならやっぱり龍かな。

「変身」

《カメンライド・・・リュウキ》

「！？姿が変わった！？」

「姿だけじゃないよ」

《アタックライド・・・アドベント》

「竜魂召喚！！」

私が出した真紅の龍とフリードがぶつかり合う。

「キュ〜」

「フリード！？」

私の技の方が上だったみたいだね。フリードが気絶したのを見届けて、キャラを攻撃しようとした時

「こつちを忘れてない？」

私の体、正確には体内に凄まじい衝撃が叩き込まれた。

スバルside

まさかフリードがやられるとは思わなかったけど、隙だらけになっている。私達がまだ分身と戦っていると思っっているみたい。

「こつちを忘れてない？」

全身の魔力を拳に集める。そのためバリアジャケットをぎりぎり張れる程度しか体には残っていない。でも、これだけじゃ足りない。

足から体に、体から腕に、全身の運動エネルギーを集中させ、浸透  
勁を叩き込んだ。

「大丈夫？キャロ」

「吹き飛んだけど、鈴音さん大丈夫ですかね」

「大丈夫じゃない？カッコイイもん」

「ハハハ……」

でも思ったより飛んだな。

「いたた、ライダーじゃなかったらやられてた」

えっ！？今ので倒せなかったの！？マズイな。魔力あんまり残って  
ないよ。

「スバルさん、下がって。キャロ、ブーストお願い」

「「エリオ（くん）？」」

いったいどうするんだろう。

エリオside

『エリオ、何する気？』

『ティアナさん、フォローは頼みます』

僕は四肢を地面に付ける。

「その構えは、まさか!？」

鈴音さんはこれを知っているらしい。知らないのならよかったのに。

「ブースト終わったよ」

「ふー。いくよ、ストラダー!！」

《了解です。ソニックムーブ》

僕は高速移動魔法で一気に後ろに跳び、そこから一気に走って上に跳んだ。僕がやるのはゲイボルグパツチの使い方の一つ。心臓を突くのではなく投げる。ただ僕の腕力ではたいした威力は出せない。

「ならこうする!！」

魔力を使いストラダーを足の裏に張り付け

「その心臓、貰い受ける!！」

《ゲイボルグ》

ストラダーを蹴り飛ばした。

鈴音 side

まさか本当にゲイボルグを真似てくるなんて、でもぼーっとしては  
いられない。

《アタックライド・・・ストライクベント》

ティアナの魔力弾が飛んでくるけど、右手のドラグクローで弾く。  
そして私も攻撃を放つ。

ドラグクロー・ファイヤー  
「昇竜突破！！！」

紅い槍と火炎がぶつかり合い、相殺された。

『はい、そこまで』

「母様？まだ勝負はついてません」

『これ以上やっても貴女の勝ち揺るがないわよ』

確かに全員かなり疲労が溜まっている。まだ体力にも技にも余裕がある私が勝つだろう。

「わかりました」

『みんなもお疲れ様』

「はい」

要side

今日は充実した日だったな。俺自身の訓練にもなったし、いいデータも取れた。フォワード陣の訓練もだいぶよかったらしいな。

「要、今日はありがとうな」

「気にするなよ飛翔。こつちもいい訓練になった」

「私からも礼を言う。いいデータが手に入った」

おっ、みんなも戻ってきたな。

「さて、もう帰るかな」

「なんだ、もうか」

久しぶりだったのに、まあいつでも来れるだろうからいいか。

「すずかさん。今日はありがとうね」

「いえいえ。そうだ！魔導式スナイパーライフルをあげますよ」

「いいの？」

「はい！」

あっちでなんか物騒なプレゼントの受け渡しが行われてるな。

「お前ら、訓練はどうだった？」

フォワード陣に聞いてみる。鈴音との戦いはいい経験になったろう。

「聞きたいんですが、エリオのあの力はなんですか？」

「あの力？」

「ストラダーが紅くなるあれです！！」

そういえばパッチのことは言っていなかったな。

「特別なパッチだ」

「………私達には？」

「ない！！」

「そんなにきつぱり言わなくても」

とは言われても、まあそのうち造ってやるか。

「飛翔、帰る準備出来たよ」

「わかった、アリシア。そういうことだよ」

「ああ、じゃあな」

そして飛翔達は帰っていった。

外伝<飛翔ファミリー再び>(後書き)

<アリシヤの部屋>

ア「こんにちは、アリサです」

シヤ「アリサちゃん。まーくんが……………」

キルキルキル

ア「デカツ!!! 2mはあるじゃない!!」

シヤ「この前の成長剤じゃないかしら」

ア「あれ凄いわね」

シヤ「さて、ついに連日更新が途切れたわね」

ア「作者が仮面ライダーをよく知らなかったせいね。調べまくってたら時間が掛かったもの」

シヤ「さあ次回はそろそろ本編かしら」

ア「日常編かもしれないけどね」

シヤ「では次回をお楽しみに……………しちや駄目よ」

日常？＜子供の相手は大変です＞（前書き）

tk様から貰った退化剤が事件を起こします。

日常？<子供の相手は大変です>

フェイトside

「終わった」

これで書類の処理は終了。

「フェイトちゃん早いね」

「今日は母さんが来るから」

そう、今日はリンディ母さんが六課を見に来るのだ。まあエリオとキャロに会いたいただけだろうけど。何故か溺愛されてるんだよね。

リンディside

ふふふ、今日は久しぶりにエリオとキャロに会えるわ。あと、フェイトの恋の進み具合も確かめないとね。もしまだやってないような手取り足取り腰取り教えてあげないと。

「リンディ提督、お久しぶりです」

「今はプライベートよ、フエイト」

「そっだね、母さん」

今エリオとキャロは訓練らしいからフエイトとお茶をしている。飲み物は緑茶ね。ミルクも砂糖も用意されてるし。

「最近クロノが健康に悪いからってミルクと砂糖を出してくれないのよ」

「このことは秘密だよ」

我ながらいい娘を育てたわ。そんなことを思いながらお茶を飲んだ時だった。体が急に熱くなり、地面に倒れそうになった。

「母さん！？どうしたの！？」

「……………！？……………」

なんとか返事をしようとするけど、そのまま気絶してしまった。



「ダメー」

こんな時は……そうだ！要だ！！つて要は竜退治の仕事が入っていないんだ。なら……

「つていない!？」

早く捜さないと大変なことになっちゃう。もう私は大変だけど。

すずか side

「ふふーん」

もうすぐ魔導式スナイパーライフルの改良が終わる。この間は弾かれたからもつと威力と連射性を高めないと。

「すずかさーん」

「ん？」

ラボに入ってきたのは緑の髪の少女だった。これだけなら迷子で済

む。でもすすかさんと呼んだということは、少なくとも私を知っている。これもありえないことではない。なのはちゃん達ほどでもないけど私も取材を受けたことがある。だからこの子が私を知っていることもおかしいことではない。ただこの少女の額にある星、これって……………

「リンディさん？」

「うん！」

今度はリンディさんが餌食になったんだ。可哀相に、慣れてないのに……………

「いまね、フエイトとかくれんぼしてるの！だからかくれさせて！」

「母さ〜ん、何処〜？」

「あっ！きちやったからいくね！」

「あっ！」

行っちゃった。どうしよう。

「すすか！母さん来なかった!？」

「今出てったけど……………」

「遅かった……………次見たら連絡して!!！」

「う、うん」

要くんがいればな。

なのはside

「ブラッククロウ!!」

「五雷指!!」

「くっ!？」

ティアナはダガーモードでの斬撃、スバルは雷の爪で攻撃をしてくる。確か要くんのデバイスパッチだっけ？本当にとんでもないもの造るよね。

「すごい!!」

誰？子供？なんでこんな所に……

「リンディ……さん？」

エリオ、確かに似てるからってそれは……ありえる。今ま

での経験からして十分ありえる。

「ねえ、あなたのお名前は？」

「リンディだよ、忘れたの？」

やっぱり、今度は誰の仕業なの！？

「エリオ、キャロ、げんき？」

「あっ、はい」

「えっと、元気です」

そうだ、フェイトちゃんに念話をしよう。そう思った時だった。

「母さん、何処にいるの？」

フェイトちゃんが来てしまった。

「フェイトがきちゃった。じゃあね」

「待って！！」

想像以上に速いスピードで逃げて行ってしまった。絶対魔法で強化してるよね。

「なのは！！」

「あっち！」

「わかった！」

10年親友をやっているから、目を見れば言いたいことがわかる。

「今のは関係ないかと」

ティアナ五月蠅いの。

はやてside

• なんや騒がしいな。何かあったんかな？部屋を出てみると……

「ザフィーラ、頑張れ！」

「いつけー！」

「何故俺がこんなことをー！！」

ヴィヴィオと緑の髪の子を乗せたザフィーラが走っていた。つかあの緑の髪の子、リンディさんに似とらん？

「あっ、主！助けて下さいー！！」

「無理や」

私にはそんな子供の相手は出来ん。ザフィーラに頑張ってもらおう。

「頑張りや」

「それでも主ですか！？」

私は私に出来ることをするだけやもん。

『フェイトちゃん』

『何？はやて』

『リンディさんっぽい子がおるんやけど………』

『何処！？』

『私の部屋の前や』

『すぐ行くー！！』

この焦りようやとホンマにリンディさんやな。次は………

『要くん、聞こえる？』

『なんだ？はやて』

『緊急事態や。リンディさんが縮んでもうた』

『・・・・・・・・・・・・・・・・了解した。すぐに帰る』

話が早い。流石は我らがトラブル処理班の班長やな。ちなみにトラブル処理班ちゆうんは、六課内でよく起こる世にも奇妙なトラブルを解決するスペシャルや。班員は要くん一人やけど。

「見つけた!!」

「ザフィーラ逃げて逃げて!!」

「走ってザフィーラ!!」

「くそお!!」

おー、逃げとる逃げとる。フェイトちゃん相手にどれだけ逃げられるかな？

「見つかったらかくれんぼは終わりだよ!!」

「じゃあおにじっこ!!」

さあ書類整理せんとな。

要side

今回は幼児化か。10年前は年齢詐称薬を飲んだことがあるが、そのレベルではないようだな。

おや？ザフィーラに乗っているのはヴィヴィオと……………

「要！止めて！！」

ターゲット、リンディさんか。成る程、確かに子供だ。

「二人共！おやつ時間だぞ！」

「っはーい」

二人はザフィーラから降りた。やっぱり子供にはおやつだな。

「美味しいか？」

「うん！」

二人は翠屋のケーキを食べている。しかしどうしてこうなったんだろっな。

「要くん！リンディさんがお茶に入れたミルクから薬が検出されたわー！」

「ご苦労さん、シャマル。で？成分は？」

「動物や植物を退化させる薬」

これはまた厄介な。

「どうにかなる？」

「安心して、フェイトちゃん。たまたま成長剤を持ってるから」

何故持っている。何に使ったんだ？シャマルは。

「それじゃあ取ってくるわ」

今回は締めだけだから楽だったな。

「ねえねえ、フェイト」

「何？母さん」

「要くんとチューしたの？」

「なっ!?!何言ってるの!?!」

ちっさくなってもリンディさんはリンディさんだな。そういえば何しに来たんだろう?

「持ってきたわよ」

「早いな」

早い方がいいのは確かだが、そんなに早く出たかったか?

「はい、母さん。これ飲んで」

「うん」

ぐくぐく

「はふう」

あっ、リンディさんが目を回した。少しすると体が光って元に戻った。

「うーん」

「母さん!?!」

「フェイト?私.....//」

ん?なんで頬を染めてるんだ?

「母さん、もしかして……」

「恥ずかしい／＼」

あー、全部覚えているわけか。なら仕方ないな。

「大丈夫だよ、リンディママ。パパなんて美人さんになったんだよ」

ヴィヴィオ、それはフォローにならない上に俺にダメージがあるぞ。

「ふふふ」

「母さん！戻ってきてー！！」

ああ、リンディさんがトリップしてしまった。  
現実に戻ってきたのは10分後だった。

日常？<子供の相手は大変です>（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「アリサと」

シヤ「シヤマルと」

キルキルキル〜

ア「まーくんです」

シヤ「今回はリンデイさんに犠牲になってもらいました」

ア「なんで作者はこんなことばかり考えるのかしら？」

シヤ「あとティアナとスバルのパッチが出てきたわね」

ア「ティアナは黒猫パッチ、スバルはバルディッシュ様の五雷指パッチね」

シヤ「キャラのパッチも待ってます」

ア「次回はほぼ140万アクセス記念、ボツネタ集」

シヤ「150万になったらまた企画を募集するかもしれません」

ア「みなさんの希望があれば間違いなくやりますんで、やって欲しいという人は感想にでも書いて下さい」

「シャ」では次回も見て下さい

140万企画くボツネタ集く(前書き)

何故かチャツチャと書いてしまった。

140万企画くボツネタ集

雨「みなさんどーも」

要「今回は流石の作者でも駄目だこりゃ。と匙を投げたネタだ」

雨「いろいろとツッコみたいでしょうけど、ボツネタということだ」

雨・要「」では、どつぞ「」

もしも、要に養子が出来たら

要side

さて、俺は今奴隷市に来ている。現地調査の一環だな。

「相変わらず酷いな、ここは」

薬に溺れる奴、犯罪に手を染める奴、まあこんな所だから当然か。

「てめえふざげやがって!!」

バキィ

「あっ………」

怒号のする方を見ると小太りの男が少女を蹴り飛ばしていた。男の近くには真っ二つになった宝石があった。

「たかだか奴隷の癖に俺の宝石を割りやがって!!」

あの少女が宝石を？信じられんな。

「おい、あんた」

「!？管理局!？」

「少しその娘と話がしたい。いいか？」

「へ、へい!」

ふむ、少女は長い白髪に左目に大きな傷、おそらく左目は見えないだろう。

「………お兄さん」

「なんだ？」

「ラクガキがほとんどないね」

「何？」

ラクガキ・・・・・・・・まさか、な。

「これのラクガキをナイフでなぞってみろ」

そう言っただけ俺はナイフと魔導式ハンドガンを渡した。

「？わかった」

少女がナイフで魔導式ハンドガンをなぞると見事に解体された。

「直死の・・・・・・・・魔眼？」

まさか、この世界に存在するとはな。

「点は・・・・・・・・見えるか？」

「？うん」

「何にでも？」

「そうだよ」

「頭、痛くないか？」

「全然」

完璧のコントロールしているのか。この娘はこんな所に置いていてはいけない。もし、他の誰かにばれたらマズイからな。それに彼女自身も危うい。異能は異能を呼ぶからな。

「店主！」

「へい！」

「この娘はいくらだ？」

「はっ？もつといい娘もいますが……」

「いくらだ？」

「………10万で結構です」

「ほらよ」

俺が財布から出した10万を投げるとすぐに飛び付いた。餌に飛び付くゴキブリだな。

「いくぞ」

「何処へ？」

「新しい家だ。そうそう、お前さん、名前は？」

「………ない」

まあなんとなく予想はついていたが、さて、どんな名前を付けてやるか。

「ルナ、だ」

「？」

「お前の名前だよ」

「ルナ………わかった、私はルナ」

よかった。即興で考えた名前だが気に入ってくれたらしい。

「これからは俺の娘だからな」

「うん！」

その時のルナの笑顔はとても綺麗だった。

雨「はい。もしも、要に養子が出来たら。でした」

要「流石に直死の魔眼はどうかということでは止めたらしい」

雨「ちなみにルナという名前は思い付き」

要「では次のボツネタだ」

もしも、要の妹が来たら

ヴォルケンリッターとの第二戦あたり

要side

なのはとフェイトが新デバイスを起動させた時、そいつは現れた。

「お久しぶりです。お兄様」

「………楔、か？」

「はい」

なんでこいつが此処にいる!？

「何故私が此処にいる、ですか？簡単なことですね。私も転生したからです」

「何!？」

だとしたら何か力を得たのか？厄介だな。いったいどんな力なのか。

「私の力を知りたいんですか？」

「さつきから心を読むんじゃねえ」

随分的確に当ててくるな。そんなに表情に出ていたか？

「いいえ。お兄様はポーカーフェイスのままですわ」

「なっ!?!」

今回ののは完全に読んでいる。心を読む力？いや、神様から貰える力  
は一つのはずなのに、楔がそんな力を望むわけがない。

「わかりませんか？では一つ」

恋符『マスタースパーク』

「!?!?ルーフシールド!?!」

マスタースパークだと!?!?ということとは、まさか!?!?

「マスタースパークを防ぐとは、流石はお兄様ですわ。それに気付いたようですわね。そう、私の力は『幻想郷の全ての能力を使いこなす程度の能力』ですわ」

我が妹ながら厄介な能力を……つかこいつオタクだったか？超名門の学校の中でも最優秀生徒に選ばれる奴だったのに。

「お兄様の遺品を整理していたら見つけましたの。あれほど素晴らしいものがこの世にあるなんて」

こっちの考えが読まれるのは嫌だな。

「私は嬉しいですわよ。お兄様の心が読めて」

「俺は嫌なの」

もういい。さっさと叩き潰す。

「身体能力100%解放！！魔力100%解放！！アルティメット  
ワン発動！！」

「これが、お兄様の全力……素晴らしいですわ！！私も全  
力でお相手させていただきます！！」

楔はスキマから二本の刀を取り出した。

「参ります」

獄界剣『二百由旬の一閃』

「兄を舐めるな！！」

ここに、壮絶じゃ済まない兄妹喧嘩が始まった。

雨「もしも、要の妹が来たら。でした」

要「あいつがあんな力を手に入れたら嫌だな」

雨「楔は一条の歴代最高の天才です」

要「武術は圧倒的に向こうが才能があったな。努力は俺が上だけだ」

雨「次が最後のボツネタです」

もしも、要がスカリエツティ側だったら

要 side

俺が出掛ける準備をしているとノーヴェエが部屋に入ってきた。

「要兄!!! 今日勝負だ!!!」

「駄目。今日は買い物」

「えー、だったら買い物終わったら……」

「駄目。先客がいる」

第一ノーヴェはほぼ毎日試合をやっているのによく飽きないな。

「誰だよ、先客って」

「ルーテシア」

「……マジ？」

俺も最初は驚いたさ。まさかルーテシアから試合の申し込みがあるとは。

「要！」

「どうした？チンク」

今度はチンクが部屋に入ってきた。

「オットーとディードが鍋を焦がした！」

「何！？」

いったい何やってるんだか。

「おーい」

「あつ、要兄つす」

「要兄、こつちこつち」

キッチンには既にセインとウエンディがいた。

「さて、どうして料理なんてしたんだ？オットー、デイド」

戦闘が本職の二人が慣れない料理をするなどある意味危険だ。

「……………今日は兄様が此処に来た記念日だから」

「……………僕達、兄様の国の作って喜んでもらおうと思って」

俺の国のもの？何かと思って鍋の中を見ると、じゃがいも、肉をメインにいろいろ入ったこれは……………

「肉じゃが、か？」

「「コクリ」」

二人同時に頷く。全く、こいつらは。

「ありがとつな」

「「えっ?」「」

「お前らのその気持ちが嬉しいよ。次は一緒に作るつな」

「「はい(うん)!!」「」

さて、まだ焦げていない部分は使え<つつん>ん?  
振り向くとPSPを持ったセツテが居て、一言

「「狩りいこつぜ」

と言った。

「クアットロか!!まったく知らないことを教えたのは!!」

この間は「やらないか?」だったし、その前は「お前はもう死んでいる」だ。もう許す気はない。確かに前のやつよりマシだが、いい加減放っておくわけにもいかない。

「此処か!クアットロ!!」

そこにはモン　ンをやるクアットロとスカリエッティの姿が。

「てめえも共犯か!!」

「ど、どうしたの!?!要ちゃん!?!」

「お、落ち着きたまえ!!」

「問答無用！！シールドスライサー！！」

「「ギヤアアア！！」」

このあとセツテに聞くと、本当にただモンンがやりたかっただけらしい。悪いことしたかな、セツテに。

雨「もしも、要がスカリエツティ側だったら。でした」

要「スカリエツティ側とはだいぶ前から交流がある設定です」

雨「これでボツネタ集は終了」

要「150万企画の依頼、楽しみにしています」

140万企画<ボツネタ集>(後書き)

<アリシヤの部屋>

ア「アリサですよ」

シヤ「シヤマルですよ」

キルキルキュル〜

ア「4mくらいになったまーくんですよ」

シヤ「大きくなったわね」

ア「そろそろ進化かしら？」

シヤ「進化なんてするの？」

ア「さあ？」

シヤ「まあいいわ。今回はボツネタ集」

ア「使われなかったネタを三つ紹介しました」

シヤ「実は他にもアリサちゃんがメインヒロインとか、要くんとか、  
イーちゃんか×××するとかあったそうよ」

ア「何故私がメインヒロインのを書かない!?!」

シャ「さあ？」

ア「150万企画の依頼はお待ちしております」

シャ「どしどし応募して下さいね」

ア・シャ「私達に光を！！」

キルキルキュルキュル

(ではまた次回お会いしましょうね)

特訓くパッチを使おうく(前書き)

みなさんから貰ったパッチをいろいろ試します。

よく考えるとパッチなんて使ってるのうちの小説だけだよな。タグに追加しようかな。

## 特訓くパッチを使おう

要side

えつと、今日の予定は……パッチテストだな。いろいろ貰ったし、俺的にいいのを使わせよう。

「失礼します」

「失礼するなら帰って」

「……………八神部隊長にも言われました」

ちっ、流石ははやて。先を越されたか。

「で、今日が配属だったか。ギンガ・ナカジマ陸曹」

「はい！よろしくお願いします！一条三佐」

うん。お硬い。これじゃあストレスが溜まるぞ。特にこの職場では。

「俺のことは要でいいぞ。ギンガ」

「はい、わかりました」

「あとスバルを頼むぞ。ほっとくとティアナの胃に穴が開くかもしれない」

「アハハ……………」

最近はマシらしいが、いつそうなるかわからんからな。姉のギンガがいるのは安心だ。

「これからパッチテストをするんだが、見るか？」

「パッチ……………何です、それ？」

「面白いもの」

あいつらが何処まで扱えるかな。

スバルside

「ティア、また新しいパッチ貰えるって！」

「私は黒猫だけで十分だけどね」

もー、ティアナだって本当は欲しいだろうに。ツンデレだな。

「エリオくん！やっと私もパッチが貰えるよ！！！」

「よかったね、キャラ」

そういえばキャラだけパッチがなかったな。でも召喚師のキャラがどんなパッチを貰えるんだろ。

「お前ら、ニューパッチを持ってきたぞ」

あつ、要さんが来た。

「あれ？何でギン姉がいるの？」

「今日から配属って伝えたじゃない」

そうだったっけ？

「まあいい。デバイスを貸してくれ。パッチを組み込む」

「「「「はい」」」」

要 side

よし、組み込み終了。これでいいはず。それにしても皆さんいろいろ

ろくれたな。

「ほれ」

「「「「ありがとうございます」」」」

「よし、試合するぞ」

「「「「はい!!」」」」

「いきなりですか？」

ギンガの所じゃこうしなかったのか。まあ普通は新しい能力を手に入れたら試してみるのが当然だからな。

「実戦で覚えるのが一番だからな」

「そうですね」

さあ準備準備。

さて、今はギンガには見学をしてもらい。フォワード陣は目の前に

いる。

「試合開始!!」

「了解!!」

そう言うと全員即座に散った。ちなみに今の俺は身体能力、魔力共に70%だ。

「おっ？」

召喚魔方陣か。いつも通りアルケミックチェーンか。ただいつもよりデカイな。そして召喚魔方陣から尋常じゃない数の鎖が出てきて竜の形になった。

「アルケミックドラグーン、てか」

とりあえずぶった切るか。

「シールドスライサー」

シールドスライサーで正面から真つ二つに切り裂いた。しかし竜が2匹に増えてしまった。

「鎖だから当然か」

まあいい細かく切り刻めばいい。俺はシールドスライサーを2枚取り出し、手に固定したまま切り刻んだ。

「これでよし」

次は何がくるかな？

ティアナside

キャロの攻撃じゃ捕まえられなかったか。

『スバル！やるわよ！』

『任せて！！』

早速新しいパッチを使わせてもらいますか。

「カートリッジロード」

《ロードカートリッジ》

「タイトバレット！！」

私の撃ち出した弾が地面に当たり水流を発生させる。

「むっ！？」

要さんが水流に巻き込まれる。けどダメージはなさそうだ。まあ別にこれで倒すつもりはないんだけど。

「頼むわよ、スバル」

さあ私は他の準備をしますか。

スバルside

ティアの攻撃で要さんは水流の中にいる。近付いたら私まで巻き込まれちゃうけど、近付かなくても攻撃は出来る。

「五雷指!!」

雷の爪で水流を触る。どうなるかは予想がつくと思う。水流全体に電気が走り、要さんを感電

「危なっ!?!」

出来なかった。要さんは五雷指が水流に触る前にジャンプしてシールドの上に乗った。

「ならウィングロード!!」

《ウィングロード》

要さんに向かって水色の道が出来る。そこを走って拳を叩き付ける。

「シールド」

案の定シールドで防がれるけど、これでは終われない。

「その幻想、破壊する!!」

《イメージブレイカー》

私の拳がシールドを無力化し、要さんに当たった。これが新しいパ

ツチ、幻想殺し（イマジンブレイカー）。拳にAMFを纏わせることよつて魔法を無力化する。これのおかげでシールドを無力化して、上手く攻撃が決まったと思つたけど……

「もつと自力を鍛えろ!!」

「キヤアアア!?!」

腕を掴まれて投げられた。

キヤロside

ああっ!スバルさんが投げられた!よく見る光景だけど。

「よし、私達もやろうか」

《そうですね、マスター》

そうだな。あのパッチを使おう。

「竜魂召喚」

《ブルーアイズ・ホワイトドラゴン》

召喚魔方阵から青い目をした白い龍が現れる。お兄ちゃんもそれに気付いた。

「いつけー!!滅びのバースト・ストリーム!!」

「グオオオオ!!」

ブルーアイズの砲撃がお兄ちゃんに飛んでいく。さらに横から電気を纏った砲撃、確かティアナさんのレールガンがお兄ちゃんにぶつかる。

「竜魂召喚！フリードリヒ！」

まだ煙で見えないけど、お兄ちゃんだからきつと防ぎきっている。だから攻撃を止めてはいけない。

「いくよ！フリード！」

「キュイイイ！！！」

《ベルレフオーン》

私のもう一つのパッチ、ベルレフオーンパッチを使ってフリードで突進する。

ズドオオン

「グッ！？」

「やった！！！」

お兄ちゃんをビルまで吹き飛ばした。なんだかまともに攻撃が成功したの初めてな気がする。

《マスター！！》

「えっ？」

ビルから3枚のシールドが飛んできて襲われそうになった瞬間

「破魔の紅薔薇！！」

《ゲイジャルグ》

エリオくんがシールドを消してくれた。

「大丈夫？」

「うん、ありがとう」

エリオside

ふう、危ない危ない。なんとかキヤロを守ることが出来た。

「やるな、エリオ」

「そんなことはないですよ」

それにしても、あの突進をまともに喰らってピンピンしてる兄さんは凄いな。その時、スバルさんがウィングロードで兄さんに突撃した。

「ハアアアア！！」

「おっと」

兄さんとスバルさんが格闘戦をしている今のうちに。

「エネルギー全開!!」

《サンライトハート+》

カートリッジを半分以上使って新しいパッチの準備をする。

「ケリユケイオン！」

《ブースト》

キャラがブースト魔法を掛けてくれる。これでいける!!

『スバルさん、どいて!!』

『わかった!!』

兄さんと戦っていたスバルさんが後ろに下がる。

「喰らえー!!」

超高速の突撃を兄さんに喰らわせる。速さだけならフェイトさん以上だ。だけど

「惜しかったな」

避けられていた。

「俺の三重シールドを破ったことは褒めてやるが、少々真っ直ぐ過

「なる」

ギンガ side

「凄い……」

バリアジャケット無しであそこまで戦える要さんもそうだが、フォード陣もとても新人とは思えない。パッチとやらのおかげもあるんだろうけど、さっきのスバルの格闘なんかは完全にスバルの技術だ。シューティングアーツとは全く違う。だけど私以上だ。いつの間にあんなに強くなってたんだろう。

「おっ、やってるな」

「ヴィータ副隊長」

この人なら何か知っているだろう。

「あの、パッチって何ですか？」

「ああパッチか。よくは知らねえけど、デバイスに組み込むことでレアスキル並、もしくはそれ以上の力を発揮するんだってよ」

そんなものがあるなんて聞いたことがない。

「なんでも特殊過ぎるから要が認めた奴にしか渡さないんだって」

「ヴィータ副隊長は、何かパッチを持っているんですか？」

「あたしは『大槌小槌パッチ』だ。まあ隊長陣で持っているのはあ  
たしくらいだけだ」

「ならフォワード陣の戦闘技術は？」

「要が教え込んだやつだな。特にティアナとスバルはよく地球に連  
れてかれては、ボロボロになって帰ってくる」

「いったいどんな訓練をしているんだろう。地球には魔法技術がない  
のに。」

「終わったみたいだぞ」

あのあと全員スタミナ切れになるまで戦った。エリオのサンライトハート+パッチは危険だな。実はあの時、身体能力100%にしてたんだよね。

「お疲れ」

「ん？ヴィータも見てたのか」

「まあな」

おや？なんだかギンガがぼーっとしてるな。

「どうした？ギンガ」

「いえ、想像以上で」

まあ初めてパッチを見れば驚くよな。なのは達も驚いたし。

「お前ら、飯にするぞ」

「「「「はい」」」」

「ギンガとヴィータも来るか？」

「では、ご一緒にします」

「ゴチになるぜ」

このあとギンガの食欲を見て、ああ、スバルの姉だな。と再確認した。

特訓くパッチを使おうく(後書き)

<アリシヤの部屋>

シヤ「アリサちゃん！大変よ！！」

ア「シヤマルさん、挨拶がまだですよ」

シヤ「それはいいから！まーくんが大変なの！！」

ア「はあ？いったい何・・・・・・・・が？」

スー、プハア

ア「タバコ吸ってる？」

シヤ「そうなの！！反抗期になっちゃったの！！どこで教育を間違えたのかしら」

ア「(この空間にいる時点でいろいろ間違ってる気がする)」

シヤ「どうしようー！」

ア「落ち着いて下さい。反抗期なんて一時的なものです」

シヤ「そうかしら？」

ア「そうです。だから私達はいつも通りにやりましょう」

シヤ「・・・・・・・・わかったわ」

ア「ほつ、さて今回はみなさんから貰ったパッチを使いました」

シャ「ありがとうございます」

ア「使い切れなかったパッチもありますんで、それは後日使う予定です」

シャ「150万企画の時ね」

ア「150万企画、何故か人気なばーさーかー要ちゃん、楔と女ザフィーラことフィーラもちゃんと出しますよ」

シャ「あの二人も大変ね」

ア「では次回も楽しみにして下さい」

スー、プハア

シャ「もう、植物なのに」

ア「魔界の植物に常識は通じませんよ」

日常くばったりナンバーズ>(前書き)

本編が書けない。

150万企画まで日常を書き続けようかな。

## 日常くばったりナンバーズ

要side

今日は貴重な休日を使って買い物をしている。いやね、なのは達に  
ヴィヴィオの日用品を買ってこいって言われたんだよ。お金が余っ  
たら好きなもの買っていいよ。って言われたけど、俺はおつかいに  
出た小学生か！  
買い物が終わって帰ろうと思った時

「おっ、久しぶり」

「むっ、久しぶりだな」

ばったり街中でチンクとその他5人に会った。軽く挨拶してお互い  
そのまま歩いていこうとしたら

「いやいや！待てよ！」

オレンジ髪の少女に止められた。

「なんだ？」

「敵のくせに何普通にスルーしてんだよ……！」

そんなこと言われてもな。

「だっってお互い休日だろ？」

「一条の言う通りだぞ。ノーヴェ」

「チンク姉まで何言ってるんだよ!!」

チンク姉？チンクは姉なのか。しかしこの娘はどうしたいんだろう。  
！そうか、わかったぞ。

「反抗期か」

「そうなのか？姉は悲しいぞ」

「ちげえよ!!チンク姉まで参加するなよ!!」

そうでないとするとはだ？

「あー、いいかな？」

「ん？確か………セインだったか？」

「うん。たぶんノーヴェは敵なのになんで戦わないんだ。って言い  
たいんだと思う」

なんと。つまりこの娘は………

「バトルジャンキーだったか」

「………もうツツコまねえ」

なんだ、つまらん。せっかく楽しくなったのに。ちなみに俺は最初  
から気付いてたぞ。ただ休日に戦うのが嫌だったし、楽しかったか

らやってただけだぞ。言い訳じゃないぞ。

「スマンな一条。せつかくの休日を妹が邪魔して」

「気にすんな」

お互い苦勞人だからな。

「謝罪としてお茶でも奢ろう」

「チンク姉!？」

「敵だから嫌。などという理由は受け付けんど、ノーヴェ」

見た目は小さいが本当にお姉さんだな。なんかヴィータみてえ。

「ならいただくか」

「うむ」

たまたま近くにあった喫茶店でお茶をしている。ついでに自己紹介をしてもらうことになった。

「改めて自己紹介する必要もないが、チンクだ」

「おう」

「自己紹介は初めてかな？セインだよ」

「俺の対策は出来たか？」

「アハハ……」

まだ出来ていないか。さっさと対策しないと俺以前にフォワード陣に負けるぞ。

「ウエンディッス。よろしくッス！」

「よろしくな」

赤毛を後ろで纏めて、語尾にッスを付けるのがウエンディッと。

「……ノーヴェだ」

オレンジ髪でツンデレどころかツンツンなツッコミ少女がノーヴェ  
と

「誰がツンツンなツッコミ少女だ！！」

やっぱりツッコミだね。うん。

「オットー」

「ディード」

「この二人は双子なんだ」

「ほー」

短髪で少年のようなのがオットー、逆に長髪でボンキュンボンなのがディードと。とても双子には見えんが、顔と無表情なのは一緒だな。

「俺は知っていると思うが、一条要だ」

「要さん要さん」

「んだ？ウエンディ」

「鍛えてほしいッス」

「はあ！？何言ってるんだよ、ウエンディ！！」

この娘は俺が敵と思っているのだろうか？

「今はプライベートなんでしょう？だったら大丈夫ッスよね？」

「むむっ」

プライベートを出されるとなんとも言い返せん。確かにプライベートで俺が何しようとする自由だしな。

「なら試合ってほしい」

「私も」

「オットーにデイドまでかよー!!」

何故こんなことになってるんだ？

「実はな一条。ドクターがお前の戦闘映像を格闘の参考資料にしていてな」

「スカリエツティめ」

勝手に人の戦いを資料にしゃがって。

「ちなみにあんた自身が作った戦闘資料も使わせてもらってるよ」

「あつ、それはいいぞ」

「いいのかよ!!」

流石ツツコミのノーヴェ、でも戦闘資料なんて見てもらうために作ったんだぞ。それにしてもいつの間持っていかれたんだろう。

「参考になったか？ノーヴェ」

「えっ？まあ、そこそこ」

「ノーヴェはいつも見ているッスよ」

「ウエンディー!!」

ツンツンじゃなくてツンデレだったか。いや、ツンツンツンデレくらいか。

「僕らと試合つてくれないの?」

「うーん、そうだな」

そんな期待の眼差しを向けられると困るんだよな。無表情なんだけど眼は感情豊かだよな、意外と。

「お前達、あまり一条を困らせるなよ」

おお、流石は姉。しっかりしてるな。だけどやっぱり悪いよな。

「ショッピングに付き合ってるので勘弁してくれ」

戦闘とは全く関係ないが、これが今出来る最大限の譲歩だ。

「わかったッス」

「まああたしはどっちでもいいけど」

「………わかった」

「悪いな」

「………ふん」

ノーヴェ side

全くなんなんだよあいつは。あたしをおちよくったり、チンク姉と妙に仲が良かったり。しかも今は……

「ウエンデイ、こんな服はどうだ？」

「着てみるツス」

なんで女性物の服を平然と選んでるんだ！？男はこつこつの苦手だろ！？

「ノーヴェもなんか着てみるよ。ほらこれなんかどうだ？」

「はあ？なんだよこのフリフリ」

「いいからいいから」

全く、こんなもんいきなり押し付けやがって。こつこつのはあたしより、もつと女らしい奴が着るべきだろ。

「ほら、満足か？」

着ちまったもんはしょうがねえ。笑いたければ笑え。

「おお」

「似合うな」

「意外ッス」

「ノーヴェもイケるね」

「「似合う」」

何言ってるんだよ。こんなのあたしに似合う訳無いのに。

「よし、それ買ってやるよ」

「何勝手に決めてんだよ」

「似合うんだから気にすんな」

こいつは何言っても無駄だろうな。自由にさせた方が被害は少ないか。

「じゃあ次はこれだな」

「まだ着るのかよ!？」

セインスide

ノーヴェも女の子だったんだね。あんな服が似合うなんて思わなかったよ。

「ほれ、セイン」

「ありがとう」

今はアイスクリーム店に来ている。ん、冷たくて美味しい。それにしても……………

「ん？俺の顔になんか付いてるか？」

「いや、そんなベタなことはないけど、ドクターの言ってた通りの人だなあ。つて」

「ほう。どんなのだ？」

「変な人」

「……………変」

あれ？自覚なかったのかな？まあこんな人と一緒にいる時点であた

し達も変かもね。

「ちょっといいだろ？」

「うるさい」

あっ、ディードが絡まれてる。いくら知らないからってなんて命知らずか。

「全く」

「あの程度ほつといても……」

「それじゃあ男が廃る。何より、お前らに少し技を見せるいい機会だ」

へー、データじゃ何度も見たけど、生で見るとなるとまた違うんだろな。

「おい、お前」

「あゝ？」

「邪魔だぞ」

「はあ！？いきなり出てきやがって、潰してやるっか！？」

いきなり殴ってきたよ。嫌だね、ああいう男は。その攻撃を要はあつさり避けて、要は上段蹴りを放ったけど、

スパアン

速っ！！あれが生身の人間の蹴り！？あんなの油断してたらあたし達でも大ダメージだよ！！

「武術家舐めんな」

地球の武術って凄いな。

「やっぱり試合して」

「うんうん」

「オットー、デイド。お前らもバトルジャンキーか？」

その二人は戦闘に特化してるとうか・・・・・・・・・・・・・・・・ま  
あ一種のバトルジャンキーなの、かな？

チンク side

「今日はいろいろ付き合わせて悪かったな」

「気にすんなって言ったろ？お互い苦労人なんだから」

「違うない」

だがしかし、本当にいろいろやらせてしまったな。私も服買って貰ったし。

「オットーとディードはもっと笑顔を出せるようにな」

「わかった」

「やってみます」

あの二人がかなり懐いたな。なにかそういう雰囲気でもあるんだろうか。だが一条がわからなかっただけで、今日は二人共よく笑っていた。

(チンクの言う二人の笑いとは、常人にはとても理解が出来ないものである)

「ウエンディとセインはどうだったよ」

「楽しかったツスよ」

「こづいづのもいいよね」

この二人は、まあいつも通りかな。基本的に普段から遊ぶのが好きな性格だからな。

「ノーヴェは？」

「……………別に」

全く素直じゃないな。内心はしゃいでいただろうに、姉の目はごまかせんぞ。

「じゃあ帰るわ」

そう言っただけで一条は歩いて行ったが、途中突然振り返って戻ってきた。

「いかにいかに。言い忘れてた」

「なんだ？」

私がそう聞くと、一条は笑顔でとんでもないことを言った。

「戦場じゃ潰す」

ゾクッ

「じゃあな」

一条は今度こそ帰って行った。

はつきり言っただけで、さっきのは悪寒がした。殺気も敵意も何もこもっていないただの言葉。故に恐怖を感じた。一条にとって日常と戦場は水と油、決して混じり合わないもの。日常では私達は知り合い、もしくは友人程度の認識だが、戦場ではただの敵。それ以上でもそれ以下でもない。恐ろしい奴だ。

「ぶふふ」

「ノーヴェ？」

どうしたのだろう。さっきのが恐ろしすぎて、逆に笑いが漏れたか？

「おもしれえ、やれるもんならやってみやがれ！！チンク姉！！アジトに戻って修行しよう！！」

「ふっ、そうだな」

確かに一条は恐ろしい。だが私たちも簡単に負けるわけにはいかない。次に戦場であった時、勝つのは我々だ。

要side

結構楽しかったな。特にノーヴェいじり。そういえばノーヴェってスバルとギンガにどことなく似てたよな。

「おかえり、要くん」

「なの？？」

どうして六課の玄関前に立っているのでしょうか？それに怖いですよ。

「ヴィヴィオの日用品買うのに随分と時間かったね。どうしたのかな？」

「……やばい。どう言い訳しよう。」

「「要」」

「ヴィータ？フェイト？」

この二人もなんか怖いぞ。

「要くん、情報が入ってきたの」

「……ナンデスカスズカサン」

ヤバイ。すずかの情報は絶対にヤバイ。間違いなく俺の命に関わるような。

「要くんが女の子数人と一緒にいたって」

誰だ！そんな情報を流した輩は！

「ひどいな、要さん。私という存在があらながら」

「スバルまでか」

この状況をどうやって抜け出そう。……そうだ！逃げよう！そう思って走り出そうとした。しかし

「バインド!?いつの間に!?!」

俺は何重ものバインドに足を縛られていた。気付けなかったぞ!

「要くん。O H A N A S H Iしよう」

「いいいやあああ!?!」

今回の反省。おつかいが終わったら真っ直ぐ帰りましょう。

日常くばったりナンバーズ>(後書き)

<アリシャの部屋>

シャ「アリサちゃん！アリサちゃん！」

ア「どうしたんですか。まーくんがまだ反抗期ですか？」

シャ「いえ、反抗期は直ったのだけど………と  
りあえず見て！！」

キルキルキュル

ア「デカ！！30m越えしてんじゃない!？」

シャ「貰った白い粉(肥料)とユグドラシルの細胞を与えたら」

ア「ちょっと!!前者はいいとして、後者は何よ!!貰ったらなんでもかんでも与えたらいいってもんじゃないわよ!!魔界の植物が神性を持つちゃうじゃない!!」

シャ「う、ごめんなさい」

キュル

ア「はあはあ、もういいわ。済んだ事だし。じゃあ始めましょう」

シャ「今回はナンバーズとの日常でした」

ア「ナンバーズと関係がないのはヤダ。という作者の考えから始まりました」

シャ「ほのぼのだったのに、潰す発言で台なしね」

ア「要にとつては、日常では敵でも関係ないけど、戦場では敵なら潰す対象なんでしょう。どんな相手であれ」

シャ「それにしても要くんの戦闘資料とか戦闘映像を使ってるとはね」

ア「格闘に関してはミッドにある資料を参考にするよりよっぽどいいんですよ」

シャ「次回もたぶん日常になります」

ア「本編考えるのが面倒らしいからね」

キルキルキルキュル

(それではみなさん、また次回お会いしましょう)

日常くそつだ久遠に任せよう>(前書き)

久遠がフォワード陣の指導をします。

日常くそつだ久遠に任せよう>

久遠side

今朝いきなり要に呼ばれた。

「なあに？要」

「さつき突然仕事の依頼が入ってな。頼みたいことがあるんだ」

要が私を頼ってくれるなんて、エへへ、頑張ろう。

「いいよ、何？」

「フォワード陣の訓練の相手をしてほしいんだ。どんな指導をするかは久遠に任せる」

「わかった！」

頑張って指導するぞ！

「と、いうことだからよろしくね」

「「「「はい！」「」「」」

「要がみんな強くなったって言ってたし、私の自由にしていって言うってだからな。」

「シャーリー、重力2倍ね」

「「「「はい？」「」「」」

『いやいや、久遠ちゃん。まだ重力増加も経験していないみんなに2倍はキツイよ』

「あれ？まだ経験してないんだ。」

「なら1.5倍ね」

「まあ、それくらいなら」

「ん、ちょっと重くなった程度かな。えっと、みんなはどうかな？」

「大丈夫？」

「「「「「……はい」「」「」」

「「……は、ひ」」

「キャラが厳しそうだけど、まあいっか。訓練してるうちに慣れるよね。ちなみに、要は4倍、私とヴィータとシグナムは3倍、なのは」

とフェイトは2倍で訓練をすることが多い。たまに要が5倍でやっている。

「じゃあやるよ。姐己、セットアップ」

《わかった。セットアップ》

さあ、頑張るぞ〜。

ティアナside

きつつ。よく隊長達はこれをやってられるわね。

「いくよ」

《フォトンランサー》

くっ、いきなりね。でもたいして威力もなさそうだし、撃ち落とす！

「ハアツ！！」

これで……………！？久遠さんがいない！？

「ティアア！！後ろ！！」

スバルに言われて後ろを見ると、雷の爪を振り下ろそうとする久遠さんがいた。

「それ！！！」

「クロスミラージュー！ダガーモード！！」

《了解、ダガーモード》

ぐっ！！なんとか防いだけど、重力のせいもあるのか攻撃が重い。

「うおおおお！！」

「はああああ！！」

《オートガード》

スバルとエリオの同時攻撃も羽衣によって防がれる。

「なら、その心臓、貫い「フィッシュ」えっ！？」

《ノリ・メ・タンゲレ》

「うわー！！」

エリオがゲイボルグを放とうとした時、羽衣に捕らえられて投げ飛ばされた。重力増加の中よく飛ぶわね。

「ぼーっとしたらダメだよ」

《プラズマランサー》

「くっ！！」

久遠さんは要さんより絶対に厳しい。しかもそれを自覚してない。

助けて要さん。

久遠side

うーん、思ったよりもレベルが低いね。こっちもリミッター掛けた方が良かったかな？

「五雷指!!」

「雷爪」

スバルの雷の爪と私の雷の爪がぶつかる。威力は互角。だけど

「ヤッ!タッ!」

「うわわっ!!」

手数はこっちの方が上。スバルが片手なのに対し、私は両手。さらにスピードもこっちが上。

「ファントムブレイザー!!」

《ソニックムーブ》

ティアナの砲撃を高速移動魔法で避ける。そういえばキャラロはどうしたっけ？

キャラロside

「キユク」

「大丈夫、だよ」

本当はあんまり大丈夫じゃないけど、気持ちだけでも大丈夫でいいと。それにしても、みんな頑張ってるな。私もやらないと。

「フリードリヒ!! 竜魂召喚!!」

「ギユアアア!!」

私ができるのはあくまでサポート。フリードやみんなを手伝うなら私自身が重力で動けなくても大丈夫。

「ブラストレイ!!」

フリードの炎が久遠さんを飲み込んだ。と思ったら……

「こっちだよ」

「えっ!?!」

いつの間にも後ろに!?!

《プラズマランサー》

「きゃあああ!!」

見せ場が欲しいよ。

エリオside

ああ！キャラロがやられた！久遠さん、容赦なさすぎるよ！

「仕方ない。カートリッジロード！！」

《ロードカートリッジ》

今回使うカートリッジは、すずかさん特製のEXカートリッジ。通常カートリッジの3倍の魔力で負担は半減する代物だ。

「エネルギー全開！！」

《サンライトハート+》

一気に決める！！

「うおおおお！！！」

僕の一撃は久遠さんの体を貫いた。……………手応え一つなく。

「エリオ！幻術よ！！！」

久遠さん、幻術まで使えたの！？どれだけ反則なんだ！

「ティア！エリオ！上！！！」

スバルさんがそう言うので上を見るとそこには、羽衣を広げ、帯電した大量の魔方陣を展開した久遠さんがいた。

（イメージとしては、Fateのキャスターのヘカティックグライアー）

「危なかった。仕返したよ！雷光百華！！」

《ライトニンググレイン！！》

魔方陣から無数の雷が降ってきて、僕らはやられた。

久遠side

終わった終わった。指導って難しいな。

『久遠ちゃん、やり過ぎだよ』

「そうかな？」

でも要は自由にやっていいって言ってたし。別にいいよね。ちとどみんなを起こそう。

「みんな、起きて」

『いやいや、久遠ちゃん。もうちょっと寝かせといてあげてよ』

ん、それじゃあそうしよ。なら私も休憩しよつと。

次の日

フォワード陣はなのはの訓練を泣いて喜んだという。

「久遠、何をした？」

「要に言われた通り指導したよ」

「そうか。俺の言った通りか」

日常くそつだ久遠に任せよう>>(後書き)

<アリシヤの部屋>

?「みなさん、こんにちは。アリシヤの部屋の時間です」

ア「ちよつと!!誰よあんた!!」

シヤ「私達の舞台を取らないで!!」

?「酷いですね。僕ら一緒にやってきたじゃないですか」

ア「一緒につて、あんたみたいな緑の長髪のイケメンなんて本編にも出てないじゃない!!」

シヤ「……………もしかして、まーくん?」

ま「そうですよ」

ア「え、えー!!」

ま「オジギソウにもなれますからご安心を」

シヤ「それって安心できるの?」

ま「では始めましょうか」

ア「ちよつと、まーくんて男でいいの?」

ま「女にも子供にもなれますよ」

ア「……………そうなんだ」

シャ「今回は久遠ちゃんが指導をしたわね」

ア「あれはちょっと可哀相だったわね」

ま「そうですね？あの程度捌けないとこの先やってけませんよ」

シャ「辛口ね」

ア「ではそろそろ終わりにしましょうか」

ま「次回も是非見て下さい」

150万企画第一弾(前書き)

エリオの性転換ですよ。

上手く書けなかったけど。

## 150万企画第一弾

エリオside

「いい湯だ」

「そうだね、兄さん」

今は訓練終わりで兄さんと風呂に入っている。こうして見ると兄さんって意外と細いよな。なのにあんなに強いなんて。

「そろそろ出るか」

「うん」

風呂から出たあとは牛乳を飲むのが恒例となっている。地球の文化らしくて兄さんから教わった。

ゴクゴクゴク

「うっ!？」

「どうした?」

なんだか牛乳を飲んだ瞬間に体の調子が悪くなったような。傷んだのかな。

「腹が痛いならトイレに行ってい」

「うん……」

「いったいどうしたんだろ。そう思ってトイレに行ったら……」

「うええええ!!?」

「あるはずのものがありませんでした。」

「今回はエリオか」

「うう」

「なんで僕が『女』にならないといけないんだ。兄さんとザファイラさんの専売特許だろ。」

「エリオ、大丈夫だよ」

「……フエイトさん」

「凄く可愛いから」

「うわぁぁん！！」

何となく予想はついたよ！フェイトさんの目、キラキラしてたもん。

「「エリオ」」

「兄さん、ザフィーラさん」

「「こちらの世界へようこそ」」

「嫌だー！！！！」

物凄いイイ笑顔でそんなこと言わないでほしい。僕は二人みたいになりたくない。

「でも目がちょっと大きくなって、髪も少し伸びた以外変わつたらんな」

「元々素質があつたのかも」

はやてさんもなのはさんも何を言うんですか。特になのはさん。そんな素質はいりません。

「まあ風呂上がりで良かったじゃねえか。風呂に入る前だったら男湯か女湯か、どっちに入るか大変な問題になってたぞ」

それは確かに。でも兄さんは男湯に入ったよな、あの時。

「とりあえず今日一日、エリオはその姿であるしかないなあ」

「そんな〜」

## 要Side

今はヴィータの訓練が行われている。最近はフォワード陣も重力1・5倍で訓練をしていて、ある程度は慣れたのだが……

「エリオ！動きが鈍いぞ！」

「す、すみません……」

やっぱり、か。

「要、エリオどうしたんだろ？」

「女になったからだろ」

男と女では筋力が違う。子供ではその差は少ないが、その影響は確かに出る。

「オラァー！！」

「きゃあああ！！」

あっ、エリオがぶつ飛ばされた。叫び声が女の子になってるな。精神汚染が始まったか。

エリオside

うう、もう嫌だよこの体。思うように動かないし、言葉遣いも女の人っぽくなってるし。

「大丈夫？エリオくん」

「……………キャロ」

「今日一日なんだから頑張ろう！」

「……………うん」

キャロだけが僕の味方だよ。本当に嬉しいよ。

「じゃあ一緒にお風呂入ろ」

「……………はい？」

「今は女の子だから大丈夫」

前言撤回。キャロ、君も僕の敵だったよ。僕は敵から逃げるべく走り出した。

「待って、エリオくん！！」

「嫌だ!!」

この状況で誰が頼れる……よし!あの人の所へ行こう!

「助けてシグナムさん!」

「どうした、エリオ」

頼れそうな人はこの人しかいない。でも他にも誰かいたようないないような。そんな不確かな人はどうでもいいか。

「とりあえず話を聞いて下さい」

シグナムside

うーむ、ザフィーラの様に周りに抗える力もなく、一条の様に受け入れ、いや、諦めることも出来ない。そう考えるとエリオに今の状況は厳しすぎるな。

「わかった。しばらく匿おう」

「ありがとうございます〜」

「泣くんじゃない。ほら、涙を拭け」

「はい」

精神が大分弱っているな。一条は強くなる気がするが、やはり諦めた人間とは違うな。

「シグナムさんて、お母さんみたいですね」

「は？」

お母さん？私が母だと？何を言っているのだ？

「お前達の母はテストロッサだろ」

「そうなんですけど、フェイトさんと違って厳しいけど優しいみたいな」

母、か。悪い気はしないんだが……少し、恥ずかしいな。

「なら今日一日、お前の母でいてやるっか？」

「え、ええっ!？」

「冗談だ。私も恥ずかしい」

このような反応をするのを見ると、皆が遊ぶのがよくわかる。実にかわいらしい。

エリオside

あれからしばらく、シグナムさんに匿ってもらった。途中何人が訪れたけど、シグナムさんがどうにかしてくれた。

「そろそろ行きます」

「そうか」

もう騒ぎも収まりつつあるし、外に出ても大丈夫だろう。それに風呂に入りたい。

「ありがとうございます」

「気をつけるよ」

えっと、男湯と女湯、どっちに入ろう。どっちも危険な気がするけど……六課には男の人が少ないし、男湯の方が安全かな。そう思って風呂に入ると、中に誰かいた。

（あわわ、どうしよう）

とりあえず隠れて外に「エリオか？」……兄さん？

「何してんだ？」

ドキッ

えっ？なんでドキドキしてるんだろ。少なくとも体はタオルで隠してるから恥ずかしいということでもないはず……

「どうした？調子が悪いのか？」

「あうあう／＼／」

なんだか兄さんがカツコイイよ。どうしてだろ、顔が熱い。

「ストラーダ!!!」

《ソニックムーブ》

僕はもしもの為に持ってきたストラーダの高速移動魔法で逃げ出した。

「?どうしたんだ?」

次の日

「戻ったー!!!」

良かった。無事に男に戻れた。

「エリオ、おはよう」

「あっ、兄さん。おはようございます」

「おっ、戻ったな」

「はい！」

「一回でもあんな目に合うと、平和の大切さがよくわかる。まあもう性転換はしたくないけど。」

「そついえば昨日なんで逃げたんだ？」

「……………なんででしょう？」

あの時の事はよく覚えていない。逃げ出した時、とにかく恥ずかしかつたということは覚えてるけど、なんで恥ずかしかつたのかは覚えていない。

「まあいつか」

きつとたいした理由じゃないだろう。

## 150万企画第一弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ま「みんな〜、元気〜？まーくん（10歳女）だよ〜」

ア「（あくまでまーくんなんだ）」

シヤ「今回はエリオの性転換でした」

ま「あんまりそれらしい描写がなかったよね」

ア「作者にとってエリオは男の娘だからね〜」

シヤ「でも今回要くんが恐ろしかったわね」

ア「エリオにとって要は憧れの対象。女エリオにとっては恋愛対象とは」

ま「要さんはタラシだね」

ア「じゃあそろそろ終わりにしましょうか」

シヤ「ようやく（？）始まった150万企画、次回も見てくださいね」

ま「みんな〜、またね〜」

150万企画第二弾(前書き)

シャマルが植物を育てます。

## 150万企画第二弾

### シヤマルの植物観察日記

○月 日

今日から薬用の植物を育てることにした。  
はやてちゃんに許可を貰い、六課敷地内に植物の為のスペースを造る。ここではどのような植物でも育つようになっていく。頑張つて育てよう。

○月×日

今日はキャロが出身世界の花を育てたいと言ってきた。どうも育てるのが非常に難しいらしい。  
私は育ててみることにした。キャロのために頑張ってみよう。

○月 日

キャロに頼まれた花が上手く育っている。最近は何つか蕾も確認される。いつ咲くのだろうか。今から楽しみだ。

○月 日

キャロの花が咲いた。そして私の植物はほぼ全滅した。どうやら食草植物だったようだ。キャロは知らなかったようなので何も言えない。

また最初から頑張つて育てよう。

月×日

今日はすずかちゃんかサボテンを育てたいと言ってきた。サボテンならば前回の様にならないだろうから許可した。サボテンを育てる際の肥料をすずかちゃんが用意してしてくれた。ただその時、

「これでアンバーに近付ける」

と言っていたがなんのことだろう。

月○日

サボテンにはすずかちゃんから貰った肥料を毎日あげている。サボテンは植木鉢に入っているのだが、とても大きく成長しており、左右から一本づつ、太い腕の様に枝、でいいのかな？とにかくそれが出ている。これからの成長が楽しみだ。

月 日

私の植物がほぼ全滅した。原因はすずかちゃんのサボテンだ。朝私が見に行くと、ボクサーの様にシャドーをし、植物を全滅させているサボテンがいた。すずかちゃんに連絡するとすぐに来て、サボテンを見て一言

「ジョニーー!!」

そう言ってサボテンを連れて行った。文句を言つとサボテンにやられそつだから言わない。

月（笑）日

今日は要くんが薬用の植物を育てたいと言ってきた。遂に仲間がきたため、ついつい泣いてしまった。あたふたする要くんにも今までの経緯を話すと同情された。

要くんのためにも頑張って育てよう。

月 日

要くんが植えた植物が順調に育っている。葉っぱはあんまり見たことがない。珍しいものだろうか？要くんは最近中国漢方にはまっているからその類かな？

月 日

耳が痛い。

要くんが育てていた植物を収穫した。人参の様なものかと思っていたが、そこには人の様なものが付いていた。そしてそれが凄まじい声で鳴いた。それを聞いた要くんが走つて来て言った。

「スマンスマン。マンドラゴラなんだそれ。はい、耳栓」

どうせなら育てる前に言つてほしかった。

？月 日

今日はヴィータが植物を育てたいと言ってきた。花の名前は枝垂桃しだれもも。なんでか聞いたか教えてくれなかったので、自分で調べてみた。すると枝垂桃の花言葉が『私はあなたのとりこです』だって。キャー！！ヴィータも乙女ね！！頑張つて育てないと。

?月×日

枝垂桃が早く咲くようにいろいろな肥料を用意した。中にはいつ手に入れたかわからないものも幾つかあったけど、きつと大丈夫だろう。それらの肥料を与えると、目に見えて成長していた。これならすぐに花が咲くわね。

?月 日

枝垂桃がうによつによ動く奇妙な生物に成長した。それを見たヴィータに枝垂桃ごと『雷霆回天 天判』を叩き込まれた。わざわざ要くに貰ったパッチを使って攻撃しなくてもいいのに……

月×日

今日は久しぶりに自分用の植物を育てたいと思う。何を育てよう。漢方系でも育てようかな。

月 日

今日は肥料を与えたいと思う。前ヴィータの枝垂桃に与えた肥料は危険なので、また別の肥料を用意した。ちゃんと育つかな？

月 日

大変です。私の育てた植物達が蔦や根を振り回し暴走しています。あの肥料がいけなかつたんでしょうか？枯れかけた植物でも元気になるという素晴らしい代物だったのに。あっ！バリケードが破……

月 日

昨日は大変だった。あの時シグナムが来てくれなかったら間違いな  
くやられてました。あれ以来植物の飼育を禁止されました。悪いの  
は私じゃないのに。

オマケ

ヴィータの日記

?月〇日

今日はやてに花言葉というものを教えてもらった。どんな花にも意  
味があるらしい。

枝垂桃っていうの花言葉は『私はあなたのとりこです』らしい。  
たぶん知らないだろうけどこれを要に渡そうと思う。知らなくても  
ただあたしの思いを伝えたい。ちょうどシャマルが植物を育ててい  
るし頼んでみよう。

そうそう、トリカブトの花言葉は『騎士道』らしい。シグナムにピツタリだな。

?月 日

シヤマルに育ててもらうのを頼んだ。理由を聞かれたが、快く承諾してくれた。なんでもまともな植物を育てるのは久しぶりらしい。いったい今までどんなのを育てたんだ？

このあと少ししてシヤマルが

「恋っていいわね」

なんて言い出した。まさか、気付いたのか？

?月×日

枝垂桃の様子を見に行った。大分大きくなっていた。これなら花が咲くのももうすぐだろう。シヤマルに感謝だな。

?月 日

今日も枝垂桃の様子を見に行く。するとうにようによ動くわけのわからない物体になっていた。間違いなくシヤマルの仕業だ。あたしは大槌小槌パッチの技の一つ、『雷霆回天 天判』を謎植物ごとシヤマルに叩き込んだ。要への花、どうしよう。

?月 日

なんとはやてが枝垂桃の花を用意してくれていた。昨日のアレを見て急遽仕入れてくれたらしい。早速これを要に渡そう。  
要に枝垂桃を渡すと

「綺麗な花だな。大事にするよ」

って言うてくれた。えへへ、今度はあたしが育てた花を渡そう。その時には  
(黒く塗り潰されている)

150万企画第二弾（後書き）

<久遠とまーくんの屋敷>

久「今回はアンケートトップだったから後書きを貰ったよ」

ま「ふう、貴女のような子供がここに参加するなんて」

久「まーくんより年上だし、大人にもなれるよ」

ま「心は私わたくしの方が上ですわ」

久「流石ツンデレお嬢様バージョン。負けず嫌いだね」

ま「だ、誰がツンデレお嬢様ですか!」

久「頼まれたからその姿（18歳でドレス）で、その性格でしょ？」

ま「違います!ただ私がやりたいから……誰ですか!?ほほえましく見ているのは!べ、別にあなた達の為にこんな姿をしているわけではないんですからねノノ!」

久「今回はシャマルの植物観察日記だね」

ま「よくもまああんなもの作りますこと」

久「ヴィータ最後はよかったね」

ま「私の手に掛かれれば、植物なんて一瞬で成長しますわ」

久「そうだね。まーくんは凄いね」

ま「べ、別に褒めても何も出なくてよ」

久「次回も150万企画だよ。私の後書きも続くよ」

ま「次回は見てくれると嬉しい、て、撤回撤回!!見てくれなくても構いません!!.....やっぱり、見て／＼／」

**150万企画第三弾（前書き）**

なんとなくR15を追加。

## 150万企画第三弾

要side

「うーん、よく寝た」

今日もいい天気、訓練日和ね。

「ってあら？」

口調も思考も変わってるわね。あら、体も変わってる。

「ということではエンジ！」

要改め楔side

とりあえず着替えましょう。うーん、なかなか私に合う服がないわね。まあ要は男だからしょうがないけど。私になる可能性もあるんだから女性物も用意してほしいわ。

「そっだ」

ないなら持ってくればいいじゃない。

「なのは、いる」

今はなのはの部屋の前にいる。なんでなのはかって？近いからよ。

「ん、あれ？楔お姉ちゃん？」

ドアを開けて出てきたのはヴィヴィオだった。

「おはよう、ヴィヴィオ。なのはママはいる？」

「うん。フェイトママもいるよ」

フェイトもいるんだ。まあなのはの服じゃ胸の辺りが心配だったからラッキーかな。

「あらあら」

部屋に入るとダブルベッドになのはとフェイトが向かい合って寝ていた。これだけならちょっと危ないけど、二人の間に子供一人分のスペースが空いている。ヴィヴィオも一緒に川の字で寝ていたのだらう。

「写真撮ろう」

「なんで？」

「ピ・ミ・シ」

金になるからなんて言えやしないよ。

なのはside

ガタゴト

「ん〜？」

朝起きるとクローゼットの方から音がした。なんだろ、フェイトちゃんかな？

「あっ、なのは起きた？」

「なのはママ、おはよう」

「えっ？」

ヴィヴィオが起きてるのはいいけど、なんで女の子になった要くんがいるの！？

「ちょっと、要くん」

「楔って呼んでね」

「あっ、うん」

「って違う！そんなことじゃない！」

「おはよ〜」

「フェイトおはよう。服借りるわよ」

「うん」

「ちよっ！？なんでそんなに自然体なの！？おかしいよね！？どう考えても………おかしくないか。六課だもんね。よくあることだよね。」

「何故だあああ！……！」

「あっ、悲鳴だ。今度は何だろう。」

ザフィーラ side

ちよっとは戻る

「む〜」

「朝か。日を見ると随分と寝ていたようだな。やはり一条との訓練は体にくるな。顔でも洗ってさっぱりするか。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ？」

人型になり、顔を洗うために洗面所の前で鏡を見ると、そこには見慣れない、いや、ある意味見慣れた顔があった。そう、女の自分である。

「何故だあああ！！！！」

天よ！！私が何をした！？

ザフィーラ改めフィーラside

私の悲鳴で皆が起きたので、とりあえず会議室に集まっている。

「せっかく女の子になったんに、なんで狼になつとるんや？」

「恥ずかしいからです！！」

第一、ツッコミ所はそこではないでしょう、主。

「ヴィヴィオ、リイン、遊びましょう」

「わーい」

「そこお！真面目に考える！！」

全く一条は、他人事ではないというのに。

「今まで通りなら一日だろ？どうせなら楔みたいに諦めるよ」

「ヴィータ、自分の性別が変わったらそんなことは言えんぞ」

しかし一条は何故あんな風にしてられるのだ？確か虐待を受けた子供は多重人格になることがあると聞いたことがあるが、それに近いのか？

「フィーラ、フィーラ」

「フィーラと呼ぶな。それで、何の用だ？一条」

「買い物行きましょ」

何を言っているのだ？今はいろいろ大変だというのに。

「そのうちまた女の子になる時に服がないと困るじゃない」

「女になる気はない！！」

「無駄よ、世界の意味だもん」

くっ！恨むぞ、世界の意味とやら！

「なら買い物してき。今日は休みにしといたるで」

「主!?!」

「さっすがはやて!じゃあ行きましょ」

そして私は一条に引つ張られていった。買い物だけで済めばいいんだが………

楔 side

どんな服にしようかな?服も服屋も多くて迷うわ。とりあえず此処にしましょ。

「いらっしゃいませ」

よく考えたら精神は女でもファッションはわからないのよね。どうしよう。

「フィーラ、何かいい服ある?」

「私ができる訳ないだろ」

だよ。ファイラがわかったらある意味怖いよね。

「どうなされました？」

あつ、ちょうどいい所に店員さんが来てくれた。

「どんな服が似合うかな？って思って」

「お客様はお二人共お綺麗ですから、どんな服でも似合うかと」

ん、それが困るんだよね。しょうがないか。

「なら適当にコーディネートしてちょうだい」

「畏まりました」

ちなみに作者のファッションセンスは赤ん坊以下だからみんなで想像してね

ファイラside

「楽しかったわね」

「………疲れた」

何故女性というものはあのようなことを楽しめるのか。………  
今は私も女性だったな。

「次は何する？」

「のんびりしたいが」

「ならお昼にしましょ」

昼食か。それなら確かにゆっくり出来るな。

「ではそうしよう」

「ならいいお店を知ってるわ」

何故一条が女性向けの店を知ってるのかはこの際無視しよう。

「いっのお店よ」

「ほっ」

店構えはなかなか立派だな。男性でも問題なく利用出来るな。

「予約していた一条だけど」

「お待ちしております。こちらへどうぞ」

予約制の店とは……いつの間に予約した？

「かんぱーい」

「昼間から酒か？」

「気にしないの」

まあいいか、今は飯を食べるか。ふむ、美味しいな。

「びっしょっ」

「美味しいぞ」

「よかった」

「……なんだろう、一条の笑顔を見ると何か胸の奥から込み上げる気がする。そんなもやもやした気持ちを抱えながら私は昼食を食べた。」

楔 side

お昼も食べて、そのあとは何もなく街をぶらぶらしていた。途中何度か声を掛けられたけど。

「そろそろ六課に帰りましょうか」

「そうだな」

そろそろ計画を実行しないとね

「どうした？ 一条。いきなりにやけて」

「な、なんでもないよ」

危ない危ない。顔に出ちゃってたか。

フイールside

今日はまだマシだったな。女になったのに遊ばれず、ゆっくりと過ごせた。

「それにしても」

何故一条の笑顔がこつも心に残っているのだろう。私はどうしてしまっただんだ？

「フイール、いる？」

噂をすれば、か。

「いるぞ」

「お邪魔します」

そう言って一条が部屋に入ってきた。

「どつしーん？」

いきなり一条が私を押し倒した。いったい何なのだ!?

「フィーラ、好き」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はっ?」

私は一条が何を言っているのか理解出来なかった。好き?普通は異性に対して言う言葉だ。いや、友人同士で言うこともあるが、この状況で言うことではない。そして私は何故ドキドキしているのだ!?

「ーじょ「楔つて呼んで」・・・・・・・・楔」

一条を楔と呼んだ時、なんとなくこの気持ちがあった。私は楔に・・・・・・・・恋をしたのだ。

「キス、しよ」

「ああ」

クチュクチュ、チュパ

所謂ディープキスを私達はした。

「フィーラ、私、もう」

「ああ、私もだ」

楔 side

深夜、フィーラはぐっすり眠っている。フィーラって意外と上手だったな。

「ん……くさ、び」

「おやすみ」

私は静かに部屋を出た。すると頭の中に声が響いた。

（少しやり過ぎじゃないか？俺（楔））

「あら私（要）、起きたの？」

（そろそろ交代だ）

もうか、早かったな。出来ればあと一日遊びたかった。

（我慢しろ）

「はいはい、じゃあ部屋に帰ってからね」

深夜のある一定時間、私（楔）は私（要）と話す事が出来る。やる

ことはその日あった事の報告みたいなこと。でもこの時は意外と楽しみだ。なにせ自分と違う自分に話しをすることが出来るから。

次の日

楔改め要 side

「よう、ザフィーラ」

「一条、昨晚の事は……………」

あれか、あの時にはもう起きてたからな。さてはて、なんと言っか。

「あれは楔がやったことだ」

「……………お前は覚えているか？」

「……………スマン」

非常に気まずい空気になったことは言うまでもない。

150万企画第三弾（後書き）

<久遠とまーくんの屋敷>

久「みんな、久遠だよ」

ま「前ははとも、まーくんです」

久「今回は楔×フィーラだって」

ま「作者はなんとなくR15を追加したそうですよ」

久「そういえば作者から手紙があるよ。『詳しく見たい人は、ワッフルワ』言わせませんよ!!」『』どうしたの?」

ま「それは絶対に駄目です」

久「ふーん」

ま「そういえば楔さんは、自分が楔だと気付くのに遅れてましたね」

久「朝起きた時はあいまいなんだった」

ま「成る程」

久「今回も見てくれてありがとう」

ま「ではまた次回」

150万企画第四弾(前書き)

これでいいのかな？  
俺にはわからない。

## 150万企画第四弾

飛翔side

「どうしたもんか」

俺は今ある悩み事を抱えている。長い間会っていなかった機動六課のみんなに、どんな風に会えばいいのかわからないのだ。

「どうしたの?」

「アリシアか」

なんでもない、って言っても聞かないんだろうな。まあ別に話して困るようなことでもないし、いいか。

「実は……………」

「成る程。確かにそれは困るね」

「ああ」

いきなりいなくなつてた人物が現れてもな。

「そつだ！だつたら本人達に聞いてみればいいよ」

「………どういふことだ？」

本人達に聞く？そんなことが出来るなら悩んではない。

「だから、この世界の本人じゃなくて、並行世界の」

「そついうことが」

確かにそれならこつちの事情も知らないから相談しやすい。しかしいきなり俺みたいのが現れても相手が困る………。要の世界があつたな。俺みたいのが日常茶飯事なあの世界なら気軽に相談に乗ってくれそつだ。

「ありがとう、アリシア。行つてくる」

「ちよつと、飛翔だけで行くの？」

俺だけで、つて。これは俺の問題なんだが。

「妻である私達が着いて行つてもいいでしょ？」

まあそつなんだが、迷惑にならないかな？

「今更一人行くのも十人行くのも一緒よ」

「仕方ない。行くか」

これ以上何か言っても絶対に無意味だ。なら連れて行くしかない。

「じゃあみんな呼んでくるわね」

スマン、要。また迷惑掛ける。

要side

ん？何か今言われたような。まあいいか、今はギンガのパッチテストをしよう。

「よし、はい！」

「いきます！！衝撃のファーストブリット！！」

肩の辺りに生える三枚の羽のうち、一枚を消費して放たれる拳。羽のエネルギーのおかげで膨大な推進力を得ることが出来るが

「技量が足りん」

ギンガ自身が使いこなせていない。これでは宝の持ち腐れだ。そして三発までしか放てんのもいかな。いくら二発目が1・5倍、三発目が2倍になるからといってもそこまで脅威ではない。

『要さん、転移反応です』

シャーリーから連絡が来る。またか、出来ればツカサ。もしくは飛翔、一真でもOK。

「誰だ？」

『飛翔さん達です』

よしてきた。大人数でも胃に優しいあの一家なら大歓迎だ。

「お迎えに行くぞ。ギンガ、訓練中断ね」

「はい、わかりました」

今回は何の用かな。あいつらのことだから大変なことではないだろうけど。

飛翔 side

「着いたな」

俺達は要の世界に飛んできた。

「いざっしやい」

「シャーリーさん」

まさかお迎えがあるとは、流石は要の世界。

「いちばんいざっしやい」

俺達はシャーリーさんに案内されて客間に来ている。

「緑茶でよかったですか？」

「ありがとうございます。シャーリーさん」

対応が随分手慣れてるな。流石と言うのかなんと言うか。

「待たせたな」

おっ、要が来たみたいだな。

「一家総動員か」

「スマンな」

「別に迷惑だなんて思っちないな。歓迎するぞ」

それはありがたいな。流石に家族全員で来て大丈夫かと思ったが。

「それで、今日はどうしたんだ？鈴音の特訓か？魔導式の新作入手か？」

「どれも魅力的だが、今回は俺の用なんだ」

「お前の？デバイスか？」

「とりあえず話を聞いてくれ」

俺は俺の世界の機動六課のみんなにどうやって会えばいいかわから

ないから、この世界の機動六課のみんなに相談に来た事を話した。

「成る程ね、了解した。なのは達には勝手な会ってくれ」

「わかった」

「シャーリー、すずかと久遠を呼んでくれ」

ん？何故その二人を呼ぶんだ？

「アリシア、すずか、アリサ。あと鈴音も試合しようぜ」

「別に私はいいけど」

「4対3でやるの？」

「あんまり仮面ライダーを舐めない方がいいわよ」

「頑張ります」

成る程。アリシア達と試合するためか。正直かなり気になるが、俺でやらなきゃいけないことがあるからな。

「じゃあ私とリニスはどうすればいい？」

「アインスとリニスはシャーリーと一緒にデータを取ってくれ」

「わかりました」

あとでそのデータを見せてもらおう。じゃあ会ってくるか。

なのは s i d e

私はフェイトちゃんとはやてちゃんと一緒にお話をしている。O  
H A N A S H I じゃないよ。

「今日は誰が来たんだっけ？」

「飛翔くん達だったはずだよ」

「久しぶりにはっちゃんけた人がこうへんかな」

はやてちゃん、みんなが迷惑するからそんな事は言わないでほしいの。噂をすれば、なんて言葉もあるんだから。

コンコン

あっ、誰か来た。

「すみません、飛翔です」

飛翔くん？どうしたんだろ。

「入ってええよ」

入って来た飛翔くんの顔はどこか暗かった。何かあったのかな？

「少し、お話を聞いて下さい」

「……………ということなんですが」

そういえば飛翔くんはエリオだったっけ。ずっと六課にいたわけじゃないんだ。

「難しいね」

「そやね」

いなくなっていた仲間が帰ってくるのは嬉しい。だけど凄く成長して、強力な力を持っていたら疑ってしまう。本当に本物なのかと。

「……………私は」

ずっと黙っていたフェイトちゃんが口を開く。

「私は嬉しい。例え姿が変わっていても、名前が変わっていても、帰ってきてくれたら嬉しい」

「フェイトさん……」

「やはは、フェイトちゃんらしいな。」

「そうだ、飛翔くん。フォワードのみんなと会ってきたら？」

「そうですね」

「たいしたアドバイスは出来へんけど、ありのまままで頑張ってみ」

「ありがとうございます。はやくさん」

飛翔くんならきつと大丈夫だよな。それに並行世界の私達はそんなに器小さくないよね。……O H A N A S H I しな  
いよね？

今日は並行世界から人が来たので自主練になった。なのでフオワードとギンガさんで1.5倍の重力下で自分達の技を磨いている。

「おっ、随分キツイ訓練をしてるな」

「あれ？」

飛翔さん？なんでこんな所に。

「少し話を聞いてもらいたんだが、いいか？」

「いいですよ。みんな、訓練中止！！」

ティアナさんの一言で訓練が中断される。いったいなんだろう？

「すまない。実は・・・・・・・・・・・・・・・・」

飛翔さんが話してくれたのは六課の人達にどうやって接すればいいかという相談だった。正直言って凄く難しい。みんなが悩んでいる中、キャロが口を開いた。

「飛翔さんの気持ちはどうなんですか？」

「俺の気持ち？」

「そうです。六課の人に本当に会う気はありますか？」

「……………ある」

飛翔さんがそう言うとキャラロはニッコリ笑って言った。

「なら大丈夫です。大切な仲間が帰ってきて喜ばない人はいませんよ。名前や見た目が変わっていても心が変わってないんですから」

「……………ありがとう、キャラロ」

そう礼を言っつて飛翔さんは戻っていった。

「キャラロよくあんな事が言えたね」

スバルさんがそう言う。確かにあんなセリフそうそう出ない。

「なんででしょう。ただ飛翔さんもエリオくんなんだな、って思いました」

どう会って話せばいいかばかり考えて、自分がどうしたいのかを忘れてかけてたな。これじゃあ駄目だな。

そういえば要達の試合はどうなったろう。そう思い訓練場へ向かうと凄まじい光景が広がっていた。

様々な所が破壊され、鈴音とこの世界のすずかは倒れ、久遠とライダーに変身したアリシア、アリサ、俺らの世界のすずかはボロボロ。そして要は

「どうした？もう終わりか？」

服が所々破けているものの、実に元気であった。

「リニス、アインス。何があった」

「……………あとでデータを見ればわかります」

「……………凄まじかった」

どんな試合だったんだ。つかこの世界のすずかは魔導師でもないのに何故参加した。

要side

いや、いい訓練になった。強キャラとまともに戦うのもたまにはいい。

「疲れたよ」

「お疲れ様、久遠。寝てていいぞ」

「うん」

久遠は子狐になってすぐに寝た。ちょっと無理させたかな？ちなみにすずかはあのあと起きて、試合のデータを持ってラボに籠った。

「今日はいろいろと参考になったよ」

「そうか、うちの六課が役に立ってよかった」

「ただ、試合はやり過ぎじゃないのか？」

「………ソナコトナイヨ」

気付いてるよ、そんなの。でもね、楽しかったからしょうがないよ。

「じゃ、頑張れよ」

「ああ、本当にありがとう」

そして、飛翔達は帰っていった。  
さて、訓練場の修理でもしますか。

150万企画第四弾（後書き）

<久遠とまーちゃんの屋敷>

久「久遠だよ。今回は疲れたよ〜」

ま「全く、何故また私<sup>わたくし</sup>が出ないといけないのです」

久「でも素直に出てくれるんだね」

ま「こ、これはあくまで仕事だからで、別に頼まれたからではあり  
ません!〜」

久「ここは素直じゃないね。さっきまで出れるって喜んでたのに」

ま「な、何を言っているのです!?!」

久「舞台裏で言ってよね。『もう一度出してもらえるなんて、うれ  
しい〜』さ〜いさ〜いさ〜いさ〜い!〜!』『むー、ちゃんと  
言わせてよ』」

ま「そんな事より本題を始めますわよ!」

久「わかったよ〜」

ま「今回はキャロの活躍でしょうか?」

久「そうだね」

ま「久遠さん、貴女達はどんな試合をやりましたの？」

久「凄かった」

ま「……………そうですね」

久「次回もまだまだ続くよ、150万企画」

ま「締めの前に一つ、皆さんに作者からアンケートがあるそうですね」

久「あつ、あれだね」

ま「この『チートじゃ済まない』が終わったら新しい作品を書くことが迷ってるそうですね。よければ意見を送って下さる？」

久「もしやっただ方がいいが多い場合は活動報告で別のアンケートを取るって」

ま「では、さよなら」

150万企画第五弾(前書き)

ゼフィリス対パッチフォワード陣+

オリ宝具も出るよ

## 150万企画第五弾

要side

「訓練終わり」

「「「「「ありがとうございます!」「」「」」

最近はみんなパッチの扱いにもなれてきたな。ギンガが加わっても乱れはないし。そろそろ俺達やガジェット以外との戦闘経験も必要かな。さてはて、どの部隊に頼もうか。

「パパ」

そんなことを考えているとヴィヴィオが飛び付いてきた。

「っと、ヴィヴィオか。どうした?」

「遊園地行こう」

「そうだったな」

今日訓練が終わったのならのはやフェイトと一緒にヴィヴィオを遊園地に連れて行くんだった。

「じゃあ今日は解散」

「「「「「はい」「」「」」

ゼフィリス side

ふむ、そろそろ要との決着を着けよう。前回は何故かゼフィーラさん達の散歩でごまかされたし。

「行くか」

「何を意気込んでおるのだ？ゼフィリス」

「ギルガメッシュか。少し決着を着けようと思ってな」

「ほう、どのような輩だ？」

「タイプ・マアキュリーを内包した奴だ」

「………はっ？」

ギルガメッシュがほうけてるなか、私は世界を飛んだ。

さて、到着したな。要は……………いたな。

「おーい、かな、め？」

「ん？ゼフィリスか。どうした？」

それはこちらの台詞だ。何故そのような少女を肩車している。

「パパ、このお姉さん誰？」

ぱ、パパだと！？いつたいつの間にも娘が出来たのだ！？

「強敵だ。ちなみに男だぞ」

「へ。はじめまして、ヴィヴィオです」

「あ、ああ、ゼフィリスだ。よろしくなヴィヴィオちゃん」

金髪だからフェイトちゃんとの娘か？いや、だとしたら年齢が高いし……………そうか、養子だな。うん、納得だ。

「おーい、ゼフィリス？どうした？」

「あつ、いや、なんでもない」

「そうか。で、今日は何の用だ？これから遊園地なんだが」  
むっ、それでは試合を申し込むことは出来んな。

「そうか。では帰ると」ちよっと待った「なんだ？」

「どうせ暇だろ？なら頼みがある」

暇とは酷いな。まあこの世界で用事がないのは確かだが。

「うちのフォワード陣と試合をしてくれないか？」

「構わないが」

部外者である私がそんな事をしても構わないのか？

「なら六課の受付に行ってくれ。たぶん通る」

通るのか？それでいいのか機動六課。

「じゃあ頼むぞ」

「ああ、わかった」

とりあえず行ってみるか。

実際に来てみたが、どうするか。とりあえず話を聞いてもらうか。

「すみません。要に言われて来たのですが」

「一条三佐にですか。お名前は？」

「ゼフィリスです」

「……はいOKです。どうぞ」

通った！？いったいどうなっている機動六課！！

「えっと、何故OKなんですか？」

「一条三佐のデバイスに残っている魔力データと照合しているんですよ。異世界や並行世界から来る人も多いですから」

「そうですね」

納得したんだが、異世界や並行世界から来る人が多いって、どうなっているんだこの世界。

「こちらが八神部隊長の部屋です」

「ありがとうございます」

今ははやてちゃんに訓練の許可を貰うか。

「失礼するよ」

「あつ、ゼフィリスさん。久しぶりやな」

「ああ、久しぶり。今回は」

「大丈夫。要くんからもう連絡来とるから、訓練OKや」

早いな。もう少し悩むとかはしないのか？

「そのかわり、面白い薬とか用意してくれん？」

「ハハハ、考えておくよ」

なんだか下手な物渡したらとんでもないことになりそうな気がするけど、いいのか？

「ほなりイン、ゼフィリスさんを訓練場に案内して」

「わかりました。こっちですよ」

まあ今は訓練を頑張らせてもらおうとしようか。

スバルside

なんだか今日は特別講師の人がいきなり来たからフォワード陣とギンガ姉が呼び集められた。いったい誰だろう。

「みなさ〜ん、特別講師の人を連れて来ましたよ」

「今日訓練を頼まれたゼフィリス・エーデルフェルトだ。よろしく」

「……………あー!!」

ライン曹長が連れて来たこの人、見覚えがある。確か犬耳付けられた時に要さんに会いに来た人だ。

「スバルちゃんは覚えていたのか」

「はい、お久しぶりです」

「ちょっとスバル、知り合い？」

「えっと、要さんの知り合い」

「成る程」

これだけで納得される要さんて凄いな。そつえばゼフィリスさんも違う世界から来たのかな？

「ゼフィリスさんも並行世界から来た人です。ちなみに男の人ですよ」

「……………ええー!!?」「……………」

びっくりだ。この見た目で男の人だったなんて。

「では後はよろしくです!!」

「わかった」

要さんの知り合いだから強いと思うけど頑張らないと。

「じゃあ始めるぞ」

ゼフィリスさんはデバイスも用意せずに立っている。たぶんデバイスを使わない人なんだろう。

『スバル、いつものアレやるわよ』

『了解、ティア』

パッチを手に入れてから使うようになったコンボ。ゼフィリスさんの実力を確かめるにはちょうどいい。

「タイトバレット!!」

「五雷指!!」

ティアの弾で水流を起こし、私の雷撃で仕留める。そうなる予定だったけど

「断水、雷切」

「「えっ!?!」」

ゼフィリスさんが何処からともなく出した二本の剣によってティアの水流と、私の雷撃は切られた。あれは剣の力?それともゼフィリスさん自身の力?

「まっいつか」

いちいちこんなことに驚いていられないよね。今は倒すことだけを考えよう。

エリオside

うわー、凄いな。あんなことが出来るんだ。なら接近戦で攻めてみよう。

「ハアアアアア!!秋沙雨!!」

「シッ!！」

僕が放った連続突きも、ゼフィリスさんの剣によって全て防がれる。

「なら、ソニックムーブ! その心臓、貫き受ける!！」

《ゲイボルグ》

ソニックムーブで後ろに回り込み、ストラダがゼフィリスさんの心臓めがけて突きの方向を曲げる。しかし、掴まれて止められてしまった。

「悪いが、このパッチを創ったのは私でな。対応くらい知っている」

「ええ!？」

ゲイボルグパッチを創ったのってゼフィリスさんだったの!？ だったら意味ないじゃないか! というかこの人、ソニックムーブを目で追ってたよね。

「エリオくん、どいて! 衝撃のファーストブリット!！」

「うわっ!！」

「むっ」

ギンガさんの一撃がゼフィリスさんに叩き込まれる。凄い威力だけで、受け止められた。

「まだまだ！！撃滅のセカンドブリット！！」

「ぐっ！」

「これで終わり！！抹殺のラストブリット！！」

ズドーン

ギンガさんの三連撃にさすがに耐えきれなかったのか、ゼフィリスさんはビルに突っ込んだ。ちょっとやり過ぎ感もあるけど、兄さんの知り合いならたぶん大丈夫だよな。

「なかなかよかったぞ」

「無傷！？」

ゼフィリスさんが無傷だったことにギンガさんは驚いていたけど、僕は、いや、僕らは別に驚かなかった。あの攻撃で無傷でも、兄さんの知り合いだからとか、違う世界から来たとかで済まされるから、でもどうやって勝とう。

ティアナ s i d e

うーん、強いわね。並の攻撃じゃ効かないか。だったら並で済まない攻撃をするしかない。さっきのギンガさんの攻撃も並で済まないけど。

「キャロ、やるわよー！！」

「わかりました！！竜魂召喚！！」

《ブルーアイズ・ホワイトドラゴン》

「グオオオオ!!」

相変わらず凄い迫力ね。威力が高いならいいけど。

「充電完了!!」

《レールガン》

「滅びのバーストストリーム!!」

「グアアアア!!」

私と竜の一撃。そう簡単には防がせないわよ。……そう思っていた時期が私にもありました。

「スファイア・ブレイク!!」

ゼフィリスさんが拳を突き出すと青い砲撃が放たれ、まず私のレールガンを、もう一度突き出すとまた砲撃が放たれ、バーストストリームを相殺した。さらにゼフィリスさんは高く跳び

「スライダー!!」

足から砲撃を撃ってきた。何その反則。最後の一発に関しては一番強いじゃない。って早く逃げないと!!そう思った時、誰かに抱えられた。

「大丈夫？ ティア」

「スバル！ 助かったわ！」

キヤロはエリオに助けられたらしい。危ないところだったわ、本当に。でもあれが相殺されたとなると、今私たちの中で一番突破力のあるエリオのサンライトハート+に頼るしかないわね。

「エリオ、サンライトハート+いける？」

「時間があれば」

「ティアナ、私も試したいことがあるんだけど」

ギンガさん、何か奥の手でもあるのかな。でも試したいということはあるからゼフィリスさんにダメージを与える自信があるということだし、こちらとしても倒す可能性を高めるために何かもうひと押し欲しかったところだ。

「わかりました。お願いします」

さあやるわよ。

ゼフィリス side

スフィア・ブレイク・スライダーを使ってしまおうとは、彼女らを少し舐めていたかもしれんな。次はどんな手で攻めてくるのか。

「竜魂召喚！！」

《バハムート》

新しい竜の召喚か。しかしバハムートとは、随分なものを召喚したな。

「ベルレフォーン!!」

さらにベルレフォーンの追加か。かなり負担が大きいだろうに。だがここまでされたらこちらもしっかり対応しないと。

「竜をも殺す聖者の剣」アスカロン

聖ジョージの振るった竜殺しの剣。これでお相手しよう。

「いつけー！ー!!」

「ハアアアア!?!」

切り裂いたと思ったら手応えもなくすり抜けた。まさか幻術か？私を騙すとは。

「エネルギー全開!!」

《サンライトハート+》

「第二解放!!」

《シエルブリット・バースト》

後ろか!!

「オオオオオ!!!」

突撃だからアイアスでは防げないか。仕方ない、アレを使おう。

ギンガside

決まった。私とエリオの攻撃が見事に直撃した。しかし煙が晴れたそこには、盾を出して私の拳とエリオの槍を防いでいるゼフィリスさんがいた。

「災厄払う女神の盾イージスを使うことになるとは、やるな」

ハハハ……これが要さんの知り合い。勝てる訳がない。

「まだまだ!!!」

えっ？エリオ、まだやるの!?

「いきますよ!!!」

スバルも!?

「ギンガ姉!やらないなら下がって!!!」

「あー、もう!やるわよ!!!」

諦め悪すぎでしょ。

要 side

遊園地の帰り、ヴィヴィオは俺に背負われて寝ている。

「すー、すー」

「にゃはは、ぐっすりだね」

「いっぱい遊んだもんね」

「子供は元気が一番だからな」

そういえばゼフィリスはどうしただろう。ちゃんと訓練やってくれたかな？

「おかえりです」

「ただいま、リン。ゼフィリスは？」

「さつき訓練を終えて休んでるですよ」

そうか、随分と長いことやってくれたんだな。

「ゼフィリス、おつかれ」

「ああ、要か。なかなか楽しかったぞ」

「そりゃよかった」

ゼフィリスを楽しませるとは、あいつらも成長したんだな。

「今度はお前と戦いたいな」

「また今度な」

こっちもヴィヴィオの相手で疲れてるからな。今やったら間違いく負ける。

「ではな」

「おう。またな」

そうだ。あいつらの様子でも見に行くか。ゼフィリスの相手をしたからだいぶ疲れてるだろうな。

フワード陣とギンガは医務室で泥のように眠っていた。どうやら過労らしい。

「お疲れ様」

俺はお土産を置いてその場を静かに立ち去った。

## 150万企画第五弾（後書き）

<久遠とまーくんの部屋>

久「みんな、アンケート答えてくれてありがとう」

ま「今回は男のまーくんです」

久「今回の話はゼフィリスが訓練をやってくれたね」

ま「要さんと戦いに来ているのに、毎回毎回戦えませんね」

久「仕方ないよ」

ま「では今回出てきたオリ宝具の説明を少し」

断水・・・中国の靈劍の一つ。これによって断たれた水は二度と交わることはないという。

雷切・・・雷を切った日本刀。千鳥とも言つ。

竜をも殺す聖者の劍アスカロン・・・聖ジョージの使った竜殺しの劍。

災厄払う女神の盾イージス・・・あらゆる災厄を防いだ女神アテネの最強の盾。

久「ランクは書かないの？」

ま「特に必要ないからだそうです」

久「それじゃあ終わりだね」

ま「たぶん次回はまーちゃん（シンデレレ）で登場すると思います」

久「またね」

150万企画第六弾（前書き）

ナンバーズにケモノ装備のはずが新武装お披露目に。

## 150万企画第六弾

要side

「これ、どうしよう」

この前ゼフィリスが来たことで思い出したケモノ装備。下手に捨てると大変なことになりそうだし、かといって捨てないとそれはそれで大変だし。

「山にでも埋めるか」

それが一番マシだよな。流石に戻ってくることもないだろうし。そうと決まれば早速行動開始だ。

ルーテシアside

山は気持ちいい。自然もいっぱいあって虫もいっぱいいる。でも最近は何を捨てる人が多い。

ザク　ザク

「まただ。懲らしめないと。」

「その人、何してるの？」

「ん？」

「あっ」

「確かこの人はこの間の。」

「一条、要？」

「おう。確かルーテシアだったか？」

「うん。何してるの？」

「危険物をどうしようかと思ってたんだ」

「危険物？この箱かな？何が入っているんだろう？ちょっと見てみよう。」

「動物の耳？」

「作り物だけどよく出来ている。あっ、尻尾もある。もったいない。」

「捨てるの？」

「ああ」

「ならちよっだい」

「……………気をつけるよ。取説をじっくり見るよ」

「うん」

どう危険かわからないけど、まあ言われた通り説明書を読んでおく、後で。

アギトside

「旦那、ルールは？」

「山だろっ」

またか。ルールも好きだな、ホントに。

ガチャ

あっ、帰ってきた。

「ルールおかえ」にゃー「うわぁ!?!?」

な、なんだ！？いきなりルーラーが猫みたいに飛び掛かってきた！？

「ゼストの旦那！助けて！！」

「ルーテシアが……」

駄目だ。いきなり過ぎる出来事に思考を放棄してる。

「もう、どうしたのよ」

「クアットロ！？」

よりもよってこいつかよ。でも誰もいないよりマシだ。

「助け「にゃー」「ギャー！！」」

「えっ？えっ？これはいったいどういふことなの！？」

「ルーラーを捕まえて！！」

早くしないとあたしが食われる。

「ルーお嬢様、落ち着いて！」

「にゃ？クアットロ？」

今だ！隠れよう！！

クアットロside

えっと、何故かルーお嬢様に猫耳と尻尾が付いてて、アギトちゃんを襲っていて………とりあえず猫耳を外しまし  
よう。

「はい、この猫耳を外しましょうね」

「にゃー、これ着けた人じゃにゃいと外せないの」

いったいどんな技術ですか。面倒ね。

「クアットロ、外した」

「あつ、どうも。こんなもの何処で？」

「一条要に貰った」

彼ですか。能力だけじゃなくて持つてる物もわけがわからないわね。  
でも、面白いわね。

「これ譲ってくれませんか？」

「いいよ」

ルーお嬢様は猫以外にも大量に持ってきた。これならいろいろ楽し  
めるわね。ふふふ。

スカリエッテイ side

「ふう」

「ドクター、コーヒーです」

「ありがとう、ウーノ」

ナンバーズの新しい武装がだいぶ完成してきたな。とりあえずノーヴェのトンファーはこれでいいかな？

「あまり根詰めないで下さいね」

「いやいや楽しいからね」

機動六課があんな夢のような技を使っているんだ。私達も対抗しないとな。

「ギャー！！何すんだクア姉！！」

ん？今のはノーヴェか？

「少し見てきます」

「ああ、頼むよ」

なんだろう。私の心が楽しい事が起こっていると叫んでいる。

ウーノside

まったく、あの子達は騒がしいのだから。ドクターがどれだけ頑張っているかも知らずに。

「貴女達、何して……………」  
「わふう！？ウーノ姉！助けて！！」  
「ごめんなさい」

私は静かにドアを閉め「待つて！！」……………はあ。

「何してるの貴女は」

ノーヴェに犬耳を着ける趣味があるなんて知らなかったわ。

「クウーン。クア姉が〜」

「……………はあ。外せないの？」

「……………」

クアット口ったら、またこんな事をして。今回はしっかりお仕置きしないと。

「ウーノ姉様」

「チンク……………貴女は猫？」

「にゃあ、油断しました」

まさかチンクがやられるとは、クアットロはシルバーカーテンでも使ったのかしら？いえ、もしかしてこの前ドクターが作ったあの試作品だとしたら……マズイわね。

「二人共！！クアットロを捜すわよ！！」

「わん！！」

「にゃー！！」

二人共染まってるわね。

クアットロside

ふふふ、楽しいわ。次は誰に着けましょう？

「見つけたわん！！」

「あら？」

もう見つかったわ。流石は犬ね。

「バイバイ」

「わふっ！！逃がすか！！」

廊下の角を曲がって私はあるものを被る。

「わふう？いない？臭いもない」

素晴らしいわ、このダンボール。ドクターが最強のステルス装備つて言っていたけど、まさにその通りね。チンクちゃんにも一切気付かれなかったし。

「何処だわーん」

行ったわね。でも念のためにこれを被っていきましょう。

「見つけたにゃー！！」

「そこか！！」

えっ！？なんで見つかるの！？

「クアットロ、それは試作品でな。ある程度時間が経つとただのダンボールになるんだ」

な、なんですってー！！くっ、早く逃げないと。

「「待てー!!」」

ヒィー、運動は苦手なのよー。角を曲がると、その先にはドクターがいた。

「ドクター！捕まえて下さいにゃー!!」

ふふふ、チンクちゃん。いくら運動が苦手でも私も戦闘機人の端くれ。もやしっ子のドクターには負けないわ。

「任せたまえ。武装錬金!!」

ドクターが六角形の金属を使い、全身銀のコートを着て、帽子を被った姿に変身した。

「両断！ブラボチヨップ!!」

「へぶっ!?!」

ど、ドクターにやられると………は………。

ウーノside

全く期待していなかったドクターがクアットロを倒した。あの姿は  
いつたい？

「ドクター、それはにやんですか？」

「シルバースキンだ。防御力が凄まじいバリアジャケットみたいな  
ものさ。私のような力がないものでも強力な技が使えるようにして  
あるがね。それにしても、なんだいその耳は」

「うにゃ、これは」

そうだった。今はチンクとノーヴェの耳をどうにかしないといけな  
かったんだわ。

「クアットロを縛って下さい」

「うん？わかったよ」

このあとクアットロはチンクとノーヴェの新武装の実験台とされ、  
ウーノにみっちり説教され、食事が抜きにされたそうです。

「うーむ、試作品だったかなかなかよかったな、ダンボール。早く完成させるか」

「ドクター、私達にはわかるようにして下さいね」

150万企画第六弾（後書き）

<久遠とまーちゃんの屋敷>

久「みんな〜、始まるよ〜」

ま「また私の出番ですわね」

久「よかったね」

ま「別によくありませんわ。無理して出番は欲しくありませんもの」

久「謙虚だね。好感度アップだよ！」

ま「そ、そのようなつもりは……」

久「照れなくてもいいよ。そんなのだと思いは伝わらないよ」

ま「お、思い？ いったいなんのことでしょう？」

久「だって好きなんでしょ？ ゆ「アーツ！！アーツ！！」ゴメンね、  
そういうのは秘密だよね」

ま「ハアハア」

久「えつと今回はケモノ装備の話だね」

ま「ええ、途中からおかしかったですけど」

久「みんなの応募のおかげだね」

ま「こういうのはおかげとは言いませんわよ」

久「感想でも活動報告でもナンバーズのネタ武器、ネタ技を募集するよ」

ま「もちろん機動六課のパッチも募集してますわ」

久「そういえば作者も考えてるって」

ま「へえ、あんな作者でもちゃんと考えるのですわね」

久「うん。ゆりかごをロスト・ユニバースに出てくるロスト・シップに改造するって」

ま「古っ！！作品が古いですわよ！！しかもロスト・シップって、リップ・レールガンでも使わせるつもりですよ！？」

久「どうだろ？」

ま「まあいいですわ」

久「今回は座談会だね」

ま「ようやく終わりかしら？」

久「じゃあ次回も見てね！！」

150万企画第七弾(前書き)

150万企画のラスト!!

ゲスト総出演の座談会です!!

## 150万企画第七弾

雨季「第二回座談会、始まるよー」

要「あれ？なんでフルネームなんだ？いつも「雨」だろ？」

雨季「人が多過ぎるから今回は全員フルネームだ」

要「へー」

雨季「今回は今まで「チートじゃ済まない」に出てきたゲストキャラを順番に出すぞ」

要「大変だな」

雨季「そうでもない。じゃあ後は頑張って」

雨季が退出しました。

要「さて最初は……………」

ピンポーン

要「あいよ」

ガチャ

アキラ「こんにちは」

s i x 「来てやったぞ」

要「おう、入れ入れ」

ここで紹介

「闇の六王権に愛されし者」出演

アキラ・シュヴァイアー

t h e d a r k s i x

要「お前達がこの作品初ゲストだったな」

アキラ「懐かしいね」

s i x 「あの後から私は出ていないがな」

要「ハハハ、作者に言っておこう。そういえば魔王は？」

アキラ「戦闘じゃないなら興味ないって」

要「あいつらしい。さて、次は……」

ビュー ドカーン

一真「いてて」

要「相変わらず落ちてきたな」

ここで紹介

「魔法少女リリカルなのは 黒い聖騎士」 出演  
御剣一真

一真「落ちないように出来ないのか？」

要「落ちなかつたらお前じゃない」

一真「なんだよそれ」

要「人数が多いから巻くぞ」

一真「へいへい」ピンポーン

要「いらつしゃい」

ガチャ

ゼフィリス「失礼するぞ」

ここで紹介

「魔法少女リリカルなのは 輝く月の滴」 出演  
ゼフィリス・エーデルフェルト

ゼフィリス「そこにいるのは、六王権か？」

s i x「ふむ、会ったことがあったか？」

ゼフィリス「知っているだけだ」

s i x「そうか」

要「おーい、進めるぞ」

ゼフィリス「ああ、頼む」

要「えつと次は……」

ピンポーン ガチャ

レイ「きたぜ！」

ヴィード「お邪魔します」

要「お前らかよ」

ここで紹介

「神様の力で異世界へ〜チートつてありますか?」 出演

桜井怜 (レイ・ツアイベル)

ヴィード

要「お前のせいでこっちがどれだれ苦労してると思ってる」

レイ「人の不幸ほど面白いものはないぞ」

要「まあ確かに(チラッ)」

一真「おい、何故俺を見た」

要「べっつに」

ピンポン

要「はいはい」

ガチャ

貴史「オイツス！」

カスミ「久しぶりね」

薫「元気やった？」

要「貴史一人じゃないんだな。先に貴史一人が出たからてっきり二人は後でくると思ったぞ」

貴史「同じ作品なら一緒に出たほうがわかりやすいだろ？」

ここで紹介

「魔法先生ネギま」三人の転生者」出演

南武貴史

カスミ・ヴェネーラ

近衛薫

カスミ「ぱつと見だが、凄い面子だな」

薫「世界征服できるんとちゃう？」

要「まだまだこれから来るぞ」

ピンポン

要「ほらな」

ガチャ

百合姫「久遠いる？」

鈴「楔はどこだー！」

要「第一声がそれかよ」

百合姫・鈴「じゃあフィーラは？」

ここで紹介

「転生夫婦の並行世界旅行」出演

御神百合姫

神北鈴

百合姫「いないなら帰る」

鈴「そうだな」

要「待て待て、今言うのもあれだが、作者がサプライズを用意しているから我慢してくれ」

百合姫「面白いの？」

鈴「満足出来るよな？」

要「間違いなく」

ピンポーン

要「ハイペースだな。どうぞ」

ガチャ

ヒスイ「150万アクセスおめでとつ」

シルフ「おめでとついぞいます」

要「ようやくその言葉が聞けたよ」

ヒスイ「そうなのか？」

ここで紹介

「魔法少女リリカルなのはStrikerS」天を撃ち抜く烈風」  
出演

ヒスイ・ハーツ

シルフ

要「比較的常識人が来てよかったよ」

ヒスイ「ここにいるのは常識人じゃないのか？」

シルフ「私は比較的という言葉に引っ掛かりますわね」

要「気にするな。今は巻かないといけないんだ」

ピンポーン

要「ほらね」

ガチャ

飛翔「要、来たぞ」

鈴音「こんにちは」

アリシア「やつほー」

アリサ「失礼するわよ」

すずか・リニス「お邪魔します」

アインス「これは、凄まじいな」

要「よく来たな、飛翔ファミリー」

ここで紹介

「魔法少女リリカルなのは Strikers」Sweet Songs Forever」出演

不破飛翔

不破鈴音

アリシア・テストアロツサ

アリサ・バニングス

月村すずか

リニス

リインフォース・アインス

要「多いな」

飛翔「そうだな。家族全員だからな」

鈴「ユリ、あそこにリア充がいるぞ」

百合姫「そうね。一真もリア充だし、ここはリア充のたまり場かしら」

要「そこうるさい」

アリサ「ねえ、私たちの出番あるの?」

要「一回はセリフを与えられるぞ」

ピンポーン

要「今度は誰だっけ?」

ガチャ

ツカサ「お邪魔します」

要「ああ、ツカサだったか」

百合姫「ツカサですと!?!」

要「あんたは黙ってる」

ここで紹介

「フラグをたてたいっ!」出演  
ツカサ・K・ストレガー

百合姫「ああ、ツカサ。可愛いわ」

ツカサ「百合姫さん、苦しい」

百合姫「ごめんね。でもツカサが可愛いからよ」

鈴「この間は理性が崩壊しかけて、犬耳ツカサを愛でられなかったから、もう一度犬耳になってくれないか？」

ツカサ「あれは作者の力があつたから、僕一人では」

ゼフィリス「犬耳ならあるが」

百合姫・鈴「「ナイス!!!」」

要「もう勝手にしてくれ」

ピンポーン

要「入ってくれ」

ガチャ

ソウヤ「おーす」

オルタ「ほう、面白そうな輩が集まっているな」

ゼクト「来たぞい」

要「やっとラストだな」

ソウヤ「なんだ、俺らで終わりか」

ここで紹介

「バグはバグでも、チートじゃないぞ？」 出演  
蒼神双夜

セイバー・オルタ

フィリウス・ゼクト

貴史「なんだ、そっちのゼクトは性転換してんのか」

ソウヤ「ああ、そうなんだ。えっと」

貴史「南武貴史だ。よろしく」

ソウヤ「蒼神双夜だ」

ゼクト「なんじゃ、わしのことを知っておるのか？」

貴史「一応」

要「さて全員集まったところで「ちょっと待った!!」なんだ？レ  
イ」

レイ「実は一人呼んでてな。出て来い」

優「お邪魔します」

要「誰？」

ここで紹介

「魔法少女リリカル……なんとか！」 出演

暁優

レイ「うちの作者がとある子のために用意した秘密兵器だ」

一真「なんだか同じにおいがする」

百合姫「ならリア充で不幸キャラね」

優「酷いな!!」

まーくん「そろそろいいですか？」

要「ああ、あいつらの準備はどつだ？」

まーくん「二人ほど嫌がってましたが、説得されました」

要「そうか。では頼む」

まーくん「わかりました。ではみなさんご注目。我らが「チートじや済まない」が結成した美少女アイドルグループの登場です。どうぞー!!」

突如舞台が出現する。そこにはフリフリの服を着た4人がいた。

楔「イエーイ、みんな元気ー?」

久遠「やつほー、久遠だよ」

フィーラ「……………(くっ、楔の頼みでなければ逃げているぞー」

まーちゃん「皆さん、こんにちは。(キヤー!生の優が私を見てる!!!)」

楔「私たち4人揃って」

4人「 Valkyrie Witchess!!!」  
ヴァルキリーウィッチェス

まーくん「それでは歌ってもらいましょう。どうぞー!!」

4人「 パンナコッタ〜 パンナコッタ〜 パンナコッタ〜  
yes!!

パンナコッタ〜 パンナコッタ〜 パンナコッタ〜 yes!!  
プリン〜 「」

要「ちょっと待てい!!!それは作者の先輩がテンション上がったと

きに歌っていた某48人アイドルグループの歌の替え歌じゃないか  
！！」

久遠「気にしちゃ駄目」

鈴「いいぞ」

百合姫「もっとやれ」

要「ええい！まーくん、止めなさい！！」

まーくん「えっ、わかりました」

楔・久遠「「えー」」

要「黙らっしやい」

s i x「ふむ、ゼフィリスとやら」

ゼフィリス「なんだ？」

s i x「お前もやったらどうだ？」

ゼフィリス「何故だ？」

s i x「よく似合うのではないか？」

アキラ「アハハ、s i x無茶言っちゃ駄目だよ」

百合姫「犬耳ツカサも可愛いわ」

ツカサ「わふう」

シルフ「百合姫さん！次は私ですわよ！」

鈴「あんな楔もいいな」

アリス「あれ要なんじゃないの？」

鈴「女なら問題ない。おっ、俺があげたロザリオ付けてる」

すずか「女としてあの体型は羨ましいな」

レイ「なんか薬でもやるうか？」

すずか「遠慮しとくよ」

レイ「そうか」

アインス「お前もユニゾンデバイスなのだな」

ヴィード「性能はこっちが上です」

リニス「そうなのですか？」

ヴィード「神様に創ってもらいましたから」

アインス「それは凄いな」

リニス「ちょっと調べさせてもらっても」

ヴィード「駄目ですよ」

一真「凄いな、ここは」

飛翔「ああ、とんでもない奴らばかりだな。しかしザフィーラさんが女になるとああなるのか」

ヒスイ「まったくだ。性別が変わるとああも変わるものか？」

一真「いや、要だけだろ」

飛翔「そうだな。ザフィーラさんはどう見ても乗り気じゃないしな」

ヒスイ「そう考えるとあいつはとんでもないな」

飛翔「これだけの交遊があるしな」

一真「あいつの一言で世界が滅ぶんじゃないの？」

3人「ハハハ……（有り得る）」

鈴音「ザフィーラさん……」

楔「違うわよ、鈴音ちゃん。今はフィーラよ」

アリシア「大変だね。フィーラ」

貴史「いやはや、まったくだ。苦労してるな」

フィーラ「そう思うなら代わってほしい」

アリシア・貴史「無理！」

鈴音「母様、貴史さん。きつぱり言い過ぎです」

フィーラ「うう」

楔「あらあら、泣かないの」

オルタ「お前は直死が使えるのか」

カスミ「戦ってみる？」

オルタ「面白い」

ゼクト「やめんか。お前が傷付いたらソウヤが悲しむじゃろ」

ソウヤ「そうだぞ、悲しいぞ」

オルタ「傷付かなければいい」

カスミ「私相手に無傷で戦えとでも？」

薫「はいはい、そこまでな」

ゼクト「そうじゃぞ」

久遠「何してるの？」

ソウヤ「危ないから下がろうな」

久遠「？」

まーくん「頑張っつてね、まーちゃん」

まーちゃん「何の事ですか？」

まーくん「僕は君、何をしたいのかわかるよ」

まーちゃん「そんな事、知ってますわ」

まーくん「なら、ね」

まーちゃん「……………わかりましたわ」

レイ「行ったか？」

まーくん「あの二人の周りに結界お願いします」

レイ「おう、そつちも頼むぞ」

まーくん「出演権ですね。わかっています」

レイ「そういえばなんでまーちゃんに協力するんだ？」

まーくん「彼女は僕です。彼女が幸せなら僕も幸せです」

レイ「デカイね」

まーちゃん「あの、優さん」

優「ん？何？」

まーちゃん「少しお話しですか？」

優「いいよ」

まーちゃん「優さんは、私の事をどう思います？」

優「可愛いと思いますよ」

まーちゃん「……………そうですか／＼／」

百合姫「あーもう！じれったい！！」

ツカサ「わふう、百合姫さん。のぞき見はいけないと思うのです」

一真「だけどあれはな」

アリシア「一気にいけばいいのに」

アキラ「でもまーちゃんって生まれて少ししか経ってないんでしょ？なら頑張ってるんじゃない」

ゼフィリス「ふむ、手伝ってやりたいが」

ゼクト「そうもいかんじやろ」

ヒスイ「ただあっちみたいにはなってほしくないな」

楔「鈴」

鈴「ん、どうした？」

楔「呼んだだけ」

鈴「こいつ」

楔「きゃ」

ゼクト「お主、妻ではないのか？」

百合姫「そうだけど？」

すずか「浮気じゃないの？」

百合姫「鈴だからいいのよ」

薫「それは器が大きいとみるべきなんか？諦めとみるべきなんか？」

オルタ「私なら間違いなく殺っているが」

久遠「仲がいいんだね」

百合姫「久遠はよくわかってるわね。撫でたげる」

久遠「クゥ」

まーくん「レイさん、結界は？」

レイ「いや、よく考えたらここに結界が通用する奴なんてほとんどいないわ（なでなで）」

まーくん「なんでフィーラさんを撫でてるんです？」

レイ「気持ちいいから。フィーラも嫌じゃないだろ？」

フィーラ「まあな。ただ楔の方がいい」

レイ「何！？」

まーくん「フィーラさんは楔さんLoveですもんね」

フィーラ「な、何故それを！？」

まーくん「僕は後書きの住民ですよ」

要「そろそろ解散だぞ」

貴史「早くね？」

レイ「もつと遊ばせろ」

要「スマンな。作者がこれだけのキャラを使うのに疲れたそうだ」

アインス「なら、仕方ないか」

リニス「沢山ですからね」

雨季「そついうこと」

要「作者、来たのか」

雨季「見送りくらいしようと思ってね」

要「ということだ。全員に土産渡すから。まずはアキラ、s i x」

アキラ「どんなのかな？」

s i x「くだらないものではないだろうな」

要「正直二人に何渡せばいいかわからなかったから、この指輪で勘

弁な」

アキラ「これは？」

要「転移の指輪。魔力を籠めれば、短距離だが転移出来る。必要な  
いなら婚約指輪にでもしとけ」

アキラ「アハハ、ありがとう」

s i x「まあ婚約指輪としてなら使えそうだな」

要「じゃあな」

アキラ「またね」

s i x「今度このメンバーで戦ってみるのもいい」

アキラとs i xが退出しました。

要「次は一真」

一真「まともなもん頼むぞ」

要「わかってる。ほら」

一真「なんだこれ。チップ？」

要「ああ、デバイスの処理能力を数倍に上げてくれるな。こいつが  
あれば今まで使えてても威力が落ちてた魔法がしっかり使えるぞ」

一真「そうなのか。というか今まで魔法の威力って落ちてたのか？」

要「デバイスの処理が追いつかずに魔法が発動されりゃ威力も落ちるだろ？完成されてない魔法なんだから」

一真「成る程。ありがとう。じゃあな」

一真が退出しました。

要「次はゼフィリスだな」

ゼフィリス「私にはどんなものをくれるんだ？」

要「お前も何がいいか迷うんだよ。迷った結果がこいつ」

ゼフィリス「これは、ポーチか？」

要「ああ。ただ空間屈折を使って容量がばかでかくしてあるけどな」

ゼフィリス「空間屈折なぞ使えたのか？」

雨季「それは俺の作者権限さ」

ゼフィリス「そうか、ありがたく頂こう。ではな」

ゼフィリスが退出しました。

要「今度はレイ達な」

レイ「俺には何を献上してくれるんだ？」

要「献上って……」

レイ「冗談だ」

ヴィード「それで、何をくれるんです?」

要「出演権だよ」

レイ「おっ、やったね」

要「まあいつになるかわからんが」

レイ「出れることを確実に約束されればいいさ」

要「そうか」

レイ「そうだ。ではまた会おう!」

ヴィード「さようなら」

レイ、ヴィードが退出しました。

要「えっと、次は貴史とカスミと薫か」

貴史「俺らには何をくれるんだ?」

要「魔導式シリーズをやるよ」

薫「貴史の血で強化したらだいぶ使えるかもな」

要「あとカスミにはこれ」

カスミ「これは、薬？」

要「前作っただの強化版でな、一分だけ幸運がAになる」

カスミ「それは本当か!？」

要「お前が不幸と聞いたことがあったからな」

カスミ「感謝する」

貴史「じゃあな要」

薫「ほなまたな」

カスミ「ではな」

貴史、薫、カスミが退出しました。

要「お次は百合姫、鈴コンビ」

百合姫「はいはい」

鈴「いいものくれよ」

要「Valkyrie ヴァルキリーウィッチーズ Witchesのグッズだが、これでいいか？」

百合姫・鈴「「おk」」

楔「待つて！鈴！」

鈴「なんだ？楔」

楔「このお札あげる。これでいつでも私を呼べるからね」

鈴「おお、さんきゅ」

百合姫「私も久遠を呼びたい」

要「使い捨てならあるが」

百合姫「全然ok。久遠、また会おうね」

久遠「うん！！」

要「フィーラはいいのか？」

百合姫・鈴「「是非」」

フィーラ「ちよつと待て！私の意見は！？」

要「聞く耳ない！」

百合姫「じゃっあねっ」

鈴「またなっ」

フィーラ「ああ！待て！」

百合姫、鈴が退出しました。

要「はい次、ヒスイとシルフ」

ヒスイ「今まで何気に凄いものだよな」

要「お二人にはこれ」

シルフ「これは、フェアイリングではありませんか」

要「作者が頑張ったそうだ」

ヒスイ「サンキュー、いいものくれたな」

要「記念だからな」

ヒスイ「今日は楽しかった」

シルフ「また呼んでください」

ヒスイ、シルフが退出しました。

要「次！飛翔ファミリー」

飛翔「もう俺らが、早いな」

要「お前らにはこれ」

アリシア「なんだろ」

アリサ「結構大きな箱ね」

すずか「危なくないよね？」

飛翔「プレゼントでそれはないだろ」

要「開けてからの楽しみだ（中身はケモノ装備セットだけだ）」

鈴音「何か不穏な感じがしました」

アインス「そうか？」

リニス「私たちは感じませんでしたか」

要「（勘が鋭いな）」

飛翔「まあいい。今日はありがとな」

鈴音「楽しかったです」

アリシア「またこっちで遊びたいな」

アリサ「今度はあんたと戦って勝ちたいわね」

すずか「アリサちゃん、この前の試合まだ根に持ってるの？」

アインス「その時はまた戦闘データを取らせてくれ」

リニス「私はそっちのすずかさんとまた魔導式の研究をしたいですわ」

飛翔ファミリーが退出しました。

要「さあ次はツカサだぞ」

ツカサ「何がもらえるんでしょう?」

要「ツカサには俺が作った戦闘資料だ。俺の今までの戦いから何までいろいろ入っているぞ。もちろん今日来た奴らとの戦闘もな。これで勉強して、今度は真正面から一本とってもらいたいな」

ツカサ「うう、それはハードルが高いです」

要「大丈夫だよ」

久遠「そうだよ!頑張って!」

ツカサ「うん、ありがとう。よし、早速頑張るぞ」

ツカサが退出しました。

要「さて、次はソウヤとオルタとゼクトか」

ソウヤ「期待した方がいいか?」

オルタ「私は期待しよう」

ゼクト「くだらないものでなければよいよ」

要「オルタにはバーガー150個」

オルタ「おお!!」

要「ゼクトには男の心をつちりつかめる料理本」

ゼクト「ふむ」

要「ソウヤには小型重力発生装置だ」

ソウヤ「これは鍛錬に使えるな」

オルタ「なかなかよかったぞ」

ゼクト「お主はバーガーをもらったからであろう」

ソウヤ「また遊びに来るぜ」

ソウヤ、オルタ、ゼクトが退出しました。

要「最後は優なんだが、正直何もない」

優「なんで!？」

要「お前が来るなんて知らなかった。あるとしたら俺が普段つけてる耐久がワンランク上がるタリスマンの予備だな」

優「じゃあそれでいいよ」

まーちゃん「あの、私からも」

優「何かあるの？」

まーちゃん「楔さん達と同じですが」

優「へえ、つまりまーちゃんをいつでも呼べるわけか」

まーちゃん「はい。いらぬなら結構ですが」

優「いやいや、もらっておくよ。ありがとう」

まーちゃん「……………はい／＼／」

要「たらしめ」

優「は？」

要「まあいい。じゃあな」

優「ああ、じゃあな」

優が退出しました。

雨季「あー終わった」

要「お疲れさん」

楔「ご苦労だったわね」

久遠「頑張ったね」

雨季「まあ楽しかったからいいよ。それに」

まーくん「あれちゃんと渡せてよかったね!!」

まーちゃん「でも、使って下さるでしょうか？」

まーくん「大丈夫だよきっと」

雨季「ちょっといいことした気がする」

要「そうかもな」

雨季「さあ締めるぞー!」

要「150万企画に参加して下さいました皆さん」

楔「そして見て下さった皆さん」

久遠「本当にありがとうございます」

まーくん「これからも「チートじゃ済まない」は続いていきます」

まーちゃん「この先もぜひ応援して下さい」

フィーラ「それでは皆さんまた次回会いましょう」

雨季「ありがとうございました!!」

150万企画第七弾（後書き）

<久遠とまーくとまーちゃんの屋敷>

久遠「今回は最後だから二人に出てもらおうよ」

まーくん「どうも」

まーちゃん「二人で出て問題ないのでしょうか？」

久遠「二人は完全に別個体になってるもん」

まーくん「そうなんだ」

まーちゃん「成る程」

久遠「今回は座談会だったけど、どうだった？」

まーくん「楽しかったよ」

まーちゃん「それなりですわね」

まーくん「そんなことないでしょ？素直にならないと」

久遠「そっだよ。嫌われちゃうよ？」

まーちゃん「う、五月蠅いですわよー!!」

まーくん「くくっ」

まーちゃん「何を笑ってますの!?!」

まーくん「何でもないよ」

久遠「次回はお待ちかね、ようやくの本編です。みんな、見てね」

S t S 第八話（前書き）

あれ？本編がほとんど進んでないぞ？

## StS第八話

要side

「公開意見陳述会？」

「そや、要くんも護衛としてきてくれへんか？」

なんか局のお偉方が集まるからスカリエツティが何かするかも、って考えらしいけど、あいつがそんな事するかね。可能性があるとすれば、ヴィヴィオを狙うか、俺を狙うか。

「断る」

「えー」

「えー、じゃないの」

本音を言えば、そんなめんどくさい所に行きたくないのだ。

「じゃあない。無理に連れていってもやる気ないと邪魔やしな」

「俺は大人しくお留守番しとくよ」

大人しくするかはわからんがな。そうだ。今のうちに六課自体を強化しとこ。

ディオネ side

「ディオネさん、調子はどうですか？」

《良好だ。ありがとう、シャリオ》

「いえいえ」

今日は定期整備の日だ。私もデバイスの一種とされているからな。デバイスマスターのシャリオがいつも整備してくれる。

「でも裏方は大変ですね」

《まあやり甲斐はあるが、出番がないからな》

私の普段の仕事は六課のシステム面の整備だ。六課のシステムは全て私とリンクしているから、異常があればすぐに直せるし、いろいろなシステムをすぐに使える。

「ディオネはいるか？」

《一条？》

「いたな。頼みがある」

むっ、一条の頼みか。いつもの書類整理の手伝いか、戦闘データのまとめか。書類整理だとしたら、いい加減自分一人でやってもらいたいものだ。まあこれは主にも言える事だが。

「実はな、六課の警備システムを強化しようと思って」

《ふむ》

確かに今はスカリエツティ対策が必要だな。

《わかった。月村も呼んできてくれ》

「私も手伝います」

ふふふ、どんな風に改ぞ、コホン、強化しようか。

《さあ始めるが、何故ラインもいる？》

「ラインだってお姉ちゃんのお手伝いしたいです!」

我ながら可愛い妹を持ったものだ。だがこれだけの人数なら作業も

たやすい。

《まず月村、武装の準備は出来ているか？》

「大丈夫ですよ」

「武装つて、要塞でも目指すのか？」

要塞？つまりそれは……

《機動要塞六課？》

「何故そうなる！？」

「やりましょう！！」

「カツコイイです！！！」

「すずかさん、リイン、自重して下さい」

多数決ならこちらの方が上なのに。残念だ。

《しかし外の警備は大切だぞ》

「わかっている。敵を入れないことが一番の防衛だからな」

なんだ、わかっているではないか。まあ、一条だからわかって当然か。

《なら始めようか》

《対空武装は必要か？》

「ガジェットは飛ぶからな」

「AMFに負けないように強力にしな」と

「これはどうするんですか？」

「リン、あんまり触ると危ないよ」

ドカーン

《「「「「「ぎゃあああ！」「」「」「」》

先程はいろいろとあったが、とりあえず外の警備システムは万全の  
はずだ。センサーもこれでもかというくらい張り巡らせたからな。  
これを突破出来るとしたら、電子機器をどうにか出来る輩か、よく  
来る異世界の住民くらいだろう。

《次は中だな》

「といっても外のような武装は出来んだろ」

「ならシャッターとかかな？」

「無難ですけど、それくらいしかありませんよね」

特に意見は無し、か。まあ仕方ないな。外は攻めの防衛。中は守り  
の防衛だからな。

「ならラインにいい考えがあるです！」

《ほう、なんだ？》

「落とし穴ですう！！」

ふふっ、落とし穴か。子供らしい可愛い考えだな。

「落とし穴か」

「なら下に槍が必要だね」

「天井が落ちてきたら確実にですよ」

あれ？なんだか採用されそうだなぞ。

「なら上から檻が落ちてくるとか」

「それなら左右の壁が狭くなるとか」

「部屋に閉じ込めてガス攻めとか」

どンドン案が出てくるが、どれも危ないような気がするが。それでいいのか？

「ディオネさん、何迷ってるんです。目指すは機動要塞六課でしょう」

「いやいや違うだろ、すずか」

《………そうだったな》

「ディオネ！納得しちゃ駄目だ！！」

む、一条はいちいち五月蠅いな。せつかくいい感じだったのに。

《とにかく作るぞ》

「檻にはAMFでいいか」

《落とし穴はどうやって発動するようにする？》

「壁の仕掛けが完成したよ」

「これですか？」

「リイン！触ったら」

ゴゴゴゴ

《「「「「ぎゃあああー！」「」「」》

とりあえず完成したな。途中トラブルもあったが。

「あー疲れた」

「なら私とベッドで休もう」

「すずかさん、休ませる気ありませんよね」

「お姉ちゃん、何するんですか？」

《リインは知らなくていい》

まったく、子供がいるというのに。

「じゃあ寝るわ」

「だから私と一緒に」

「はいはい、すずかさんはこっちですよ」

月村はシャリオに引っ張られていった。

《私達も部屋に戻るか。リイン、悪いが運んでくれ》

「了解です!!」

明日はどうなるんだろうな。

要 side

今日から公開意見陳述会とか言う堅苦しいもんが始まるそうだな  
のは達はよく行くな。

「パパ、お届け物」

「ありがとう。えっと差出人は……如月刹那とな」

何故か会ったことがないのに会った気がするな。

「中身は、腕輪か」

「キレー」

これは、ミスリルか？一回しか見たことないから判断出来んが。それにこの宝石はなんだ？凄まじい力を感じるが。

「おつ、説明書がある。何々………反則だな」

「なんて書いてあるの？」

「詳しくは後書きだ」

「ブー」

とりあえず付けとこ。うん、ピッタリだ。

「要さん、ヴィヴィオ、なのはさん達が行きますよ」

「お見送りにいくー」

「なら俺が連れて行ってやるっ」

着いた着いた。もう出発直前だな。

「なのはママー」

「ヴィヴィオ？どうしたの？」

「お見送りにきたの」

「そう、ありがとう」

親子のほほえましい光景だな。俺もヴィヴィオの親だけど。

「ちゃんとアイナさんとパパの言う事聞いていい子にしてるんだよ」

「うんー！」

「帰ってきたら、キャラメルミルク作ってあげるね」

「やった！」

あー、あれか。あの異常に甘ったるいやつ。リンディ茶に比べたら全然美味いけど、俺は苦手だな。いっつもヴィヴィオと一緒に飲もうって誘われるけど。

「ヴィヴィオ、あれ飲んだらちゃんと歯を磨けよ。そうしないと生まれたばかりのバイキ マンが来るからな」

「生まれたばかりのバ キンマン？」

むっ、二人には通じんかったか。俺にとっては軽いトラウマなんだが、あれ。なんというか、キモイ。

「じゃあ私は行くね」

「いってらっしゃい！」

「気をつけてな」

この時なのははこんなことを考えていた！

(これってすごく夫婦みたいだね。ふふふ、この調子で本当の夫婦に………)

「この妄想は本当に叶うのか!？」

「ん?」

「どうしたの?」

「……………気のせいだ。部屋に帰るぞ」

「はい」

なんか電波がきた気がしたんだよな。まあいいか。今は六課やヴィオを守ることを考えよう。

S t S 第八話（後書き）

<アリシャとまーくんの部屋>

ア「シャマルさん！遂にタイトルにまーくんの名が！..！」

シャ「これは由々しき事態ね。どうにかしないと」

ま「なんと今日はゲストが来てます」

ア「勝手に進めるな！..！」

シャ「ゲストですって！？私達の出番をさらに奪つつもり！..？」

ま「あの二人はほつといて、この方です。どうぞ」

ディ《失礼する》

ア「ちよつと！今回本編に出まくったじゃない！..！」

シャ「それなのに私達の居場所を奪おうとするの！..？」

ディ《あの二人は.....》

ま「ほつといて下さい」

ディ《そうか》

ま「それにしても、ディオネさんて六課のシステムの中枢だったんですね」

デイ「まあ一応な。私がいなくても六課は十分動くが」

ア「むむっ！？勝手に進んでいるわー！」

シャ「そうだわ！腕輪の説明しなきゃ！」

ア「そうでした！ではどうぞ」

デイ「あの腕輪はマジックキラーと名付けられた」

ま「マジックキラー、魔法殺しですか」

デイ「ああ、効果は、魔力吸収、反射、そして吸った魔力による対<sup>アン</sup>チ・マジックシールド魔力結界だ」

ま「それぞれの詳しい効果は？」

デイ「魔力吸収は一度に大量の魔力を吸収すると壊れるが、その量はSLB10発分だ。」

魔力反射は魔力攻撃を弾くが、10分のインターバルが必要だ。  
アンチ・マジックシールド  
対魔力結界は、魔力吸収後2秒以内に新しい魔力攻撃を受けた際に発動する。結界は固定化されるから破魔の紅薔薇<sup>グレイ・ジャルグ</sup>でも壊れない。壊すならレイのSLB2発分の威力が必要だ」

ア・シャ「へー」

ま「よく知ってますね」

デイ《台本通り読んだだけだ》

ア「はっ！しまった！！」

シャ「説明まで取られてしまったわ！！」

ま「七つ夜&夜つ七様、刹那さん、腕輪ありがとうございます」

デイ《次回も見てくれると嬉しい》

ア・シャ「締めも取られた！！」「」

**S t S 第九話（前書き）**

二、三部構成になりそうな予感。

## StS第九話

要side

あー、暇だ。ヴィヴィオはザフィーラで遊んでるし、アイナさんは洗濯してるし。

《なら溜まってる書類をどうにかしたらどうだ?》

「それは嫌」

《主、たまにはデスクワークをしてください》

五月蠅い五月蠅い。なんでこいつらこんな事を言つかね。テレビでも見てよ。

「おっ、地上本部だ」

確か公開意見陳述会の会場だからな。テレビでも注目されてるな。

「ヴィヴィオ、ここにママ達がいるんだぞ」

「凄いね。なんでパパは行かないの?」

「面倒だから」

絶対堅苦しいよ。呼吸困難になるって。そういつ所に行けるなのは達は尊敬出来るわ。

「つてあれ？」

《襲撃されているな》

地上本部に大量のガジェットが現れた。狙いは向こうだったのか？

「大丈夫かな？」

「大丈夫だ。ヴィヴィオは心配しなくていい」

この程度で混乱するような六課メンバーはいない。ほら、一緒にテレビ見てたグリフィス達なんてポテチ食ってる。

「グリフィス、俺にも」

「どうぞ」

あっ、ピンクの砲撃。流石なのは。

ビーン　ビーン

ん？警報か。やっぱり六課を狙ってきたな。

《防衛システム発動する》

「グリフィス」

「わかってます。管制塔で指示出てきます」

さて、俺達も戦闘準備をするか。

すずか side

警報だ。攻めてきたんだな。とりあえず映像で見てもよ。えっと、ガジェットが沢山に、あの子は召喚師だったかな。あつ、戦闘機人もいる。

「すずか、戦闘準備しろ」

「了解」

吸血鬼と戦闘機人どっちが上かな。前からやってみたかったんだよね。

「なら殺ろつか」

「漢字が危険だな」

「そうかな？」

ディオネ side

ガジェットの数がかなり多いな。まあいい、数が多いなら減らせばいい。

《対空魔導式ミサイル発射!!》

ミサイルは見事にガジェットの群れの中心に当たり、かなりの数を減らした。

《オーバーSランクの魔力を感知?.....あそこか》

そこには大砲を構えた戦闘機人が一人。確かへりを狙った輩だったか。あの時より威力は高そうだが。そして敵は魔砲を撃った。

《ディストーション・フィールド》

しかしこちらがその程度の対策をしていないと思ったか?

《機動要塞六課を舐めるなよ?》

「すずか side」

うんうん、いい感じだね。流石私達が作った防衛システムだね。

「すずか、いるぞ」

「ホントだね」

そこにはよく似た顔の茶髪の戦闘機人と、ピンクの髪をした戦闘機人の3人がいた。全員無表情だな。

「オットーにデイドか。そっちは知らんな」

「セツテといます」

「そうか」

むっ、要くん知り合いなの？まあこの間スカリエッティの所行ったからな。

「すずかはデイドの相手を頼むぞ」

「彼女はデバイスマスターでしょう？私に勝てるだけでも？」

私の情報も知ってはいるんだ。管理局員の私の情報は。

「要くん」

「吸い過ぎるなよ？」

「はい。じゃあいただきますーす」

そうやって私は要くんの首筋に噛み付いた。

かぶっ

「くくえっ」「く」

あの子達は驚いてるけど気にしない。私は吸血鬼なんだから血を吸えば能力が上がる。血を吸う相手によっても上昇率は変わる。相手の魔力量の類にもよるけど、やっぱり相性の問題もある。その点で言えば、お姉ちゃんと恭也さんはピッタリだし、もちろん私と要くんも。

「ケプッ、ごちそうさま」

「ちょっと飲み過ぎじゃないか？」

さて……………殺るよ。

「くく！？」

私の殺気に驚いたね。デバイスマスターがこんな殺気を出せるとは思わなかったみたいだね。だけどそんなのじゃ駄目だよ、隙だら

け。

「ハアツ!!」

「くっ!? ツインブレイズ!!」

要side

始めたな。俺の血を飲んだずずかは手ごわいぞ。

「彼女は、何者?」

「そんなものはどうでもいい。やるぞ」

既に俺は100%だからな。二人も構えたな。

「ほら」

俺は早速魔導式手榴弾(改)を8個投げ付けた。

「はっ」

「ふっ」

そりゃ簡単に避けるよな。

「ならこいつ!」

俺は魔導式ハンドガン(改)を乱射する。

「IS、レイストーム!!」

しかし全てオットーの攻撃により相殺された。なかなかやるじゃないか。

「IS、スローターアームズ」

「おっと」

ブーメランか。面白い武器を使うな。制御も出来るし、威力もありそうだ。俺のシールドスライサーとどっちが上かな。

「シールドスライサー、二連!」

俺のシールドスライサーとセットのブーメランがぶつかり、ブーメランが落とされた。まあシールドスライサーも壊れたが。

「やるじゃないか、二人共」

「まだ本気でないでしょう?」

「俺か? いや、常に本気だ。ただ全力ではないな」

俺の目的は捕獲。全力で殺したら大変だ。

「やっぱり、強いんだね」

「ですが、負けません」

「いい心意気だ」

お互いが構えて、再び戦闘を再開しようとした時だった。

「ガッ!！」

「「デイド!?!」」

デイドが吹き飛ばされてきたのだ。

デイドside

時は少し遡る。

はっきり言って舐めていた。まさか非戦闘要員がここまで強いとは。

「どっしたの!?!この程度!?!」

「舐めるな!！」

彼女は何者だ?血を吸ったかと思えば、爪で私のツインブレイズと渡り合うなんて。

「ヤッ!！」

「っ!?!」

僅かに腕が裂かれた。彼女は爪に付いた私の血を舐めていた。さっきの血を吸う姿といい、今の血を舐める姿といい、それはまるで・

・・・

「吸血鬼・・・・・・・・」

「ご名答。私は吸血鬼だよ」

吸血鬼。そんな幻想の生き物が存在するなんて。いや、ORTなどというバケモノが存在する時点でそういうものの存在も認識しなければ。

「まだいくよ」

「IS、ツインブレイズ」

突っ込んでくる彼女を高速移動で避けながら、後ろに回り込み、切り付けようとした。だが、彼女は突然視界から消えた。

「神速きつっ」

その言葉と同時に、私は後ろから蹴り飛ばされた。

要side

「やったよ」

少しぎこちない動きですずかが歩いてきた。

「すずか、神速使ったろ」

「アハハ・・・・・・・・わかる？」

当然だ。いくら俺の血を飲んで、肉体が強化されたといっても、あれはそう簡単に来るものじゃない。脳の問題だからな。すずかの動きがぎこちないのは、神速を使った後か、三徹した朝くらいだ。

「まあいい。後は俺がやるから」

「お願い」

とりあえず気絶させるかな。

《主！魔力反応です！！》

「むっ」

振り返ると大砲をこちらに向けている少女がいた。

「イノームスカノン」

「ルフシールド、三重」

些か過剰防御だが、過剰防衛に比べたらマシだろう。砲撃もしつかり防げたし。

「ここは引いてほしい」

「それは無理な相談だ」

「貴方の娘が危なくても？」

何？どういうことだ？あの防衛の中六課に入れる奴が……

「しまった！セインを忘れてた！！すずか、いくぞ！！」

「えっ？きゃあ」

俺はすずかを横抱きにして走ろうとしたが、先にあいつらに言う事があった。

「おい！もしヴィヴィオを誘拐しても絶対に痛い事させるなよ！！痛い事させたらORTになって破壊するからな！！」

「わかった。約束する」

これでよし！早くしないと！！

「ヴィヴィオ！待ってる！！」

オマケ

今回のクアットロさん

クアットロside

「おい！そっちはどうなってる！」

「ガジエットの対応に……」

あらあら、大変ね。管理局員の皆さんは。ああ、読者の皆さんこんにちは。クアットロです。今私は最高評議会の破壊を行う為、ダンボールで移動しています。本来この任務はドゥーエ姉様の仕事なんですけど、私に回ってきました。

（まさかデートで任務拒否なんて）

そう、ドゥーエ姉様はある局員と付き合っていて、今日はデートだから任務を拒否したんです。しかもドクターはOKを出すし、私に回ってくるし。そうだ、ここでドゥーエ姉様のお相手を公表しちゃいましょう。なんと、ユーノ・スクライアです！！びっくりです！！と、そんなこんなで最高評議会の部屋の前に着きました。

「失礼します」

あっ、ちょうどいいですね。私も入りましょう。あらあら、脳みそが三つ並んでますね。これが管理局トップなんて、三提督ならどんなにいい組織になっていたことが。

「」報告致します」

はいはい、そんな報告なんて私は無視して腕時計型爆弾を置いていきますよ。とある怪盗アニメ映画で同じく脳みそを吹き飛ばしたアレです。皆さんも再放送で見た事ありませんか？

「失礼しました」

おっと、私も出ましよう。ではでは最高評議会の脳みそ、さようなら。

三分後、脳みその部屋は爆発により崩壊した。

## S t S 第九話（後書き）

<まーくんとアリシヤの部屋>

ア・シヤ「取られた!?!」

ま「皆さんこんにちは」

ア「あんた!なんでアリシヤとまーくんが逆になってるのよ!?!」

ま「作者さんが、前は誤字だったと」

シヤ「何が誤字ですか!?!」

ま「今回もゲストを呼んでいます。久しぶり過ぎる登場。裏で何してやがる。ユーノ・スクライアさんです」

シヤ「無視した!?!」

ユ「どうも」

ま「いきなり聞きます。ドゥーエさんとはいつからそんな関係に?」

ユ「初めて会った時は彼女が無限書庫に資料と集めに来た時でした。その時手伝わたらお礼にお茶に誘われて、そこで気が合ってお互いの連絡先を交換して、よく連絡し合っては会って話すうちに、気が付いたら」

ア「あんた、まだ主人公が付き合ってもいないうちに何してんのよ」

シャ「私も彼氏が欲しい」

ま「今回のゲスト、ユーノ・スクライアさんでした」

ユ「出来たらまた呼んで下さい」

ア・シャ「嫌!!」

ま「さあ今回は地上本部に向かったメンバーと、六課に残ったメンバーの戦いをご覧下さい。ヴィヴィオちゃんはどつなるのでしよう」

ア・シャ「またね」

S t S 第十話（前書き）

シリアス3：ネタ7くらいかな？

## S t S 第十話

なのはside

やっぱりガジェットが攻めてきたね。まあ予想通りだけど。

「なのはさーん、フェイトさーん。デバイスです」

「スバル、ティアナ。お疲れ様」

「こっちは八神部隊長達のです」

「それは私が持っています」

シスターシャツハがそう言って、ティアナからデバイスを受け取った。なら任せよう。そういえばギンガがない。

「スバル、ギンガは？」

フェイトちゃんも気になったのかそう聞いた。

「あれ？ギン姉、ギン姉」

『うるくガガツ>今戦くガガツ>』

「戦闘中だそうです」

「そつだね」

「いやいや、何ほのほのしてるんですか!?!」

シスターシャツハは慌ててるけど、この程度で慌てたら六課じゃ生活していけないよ。

「レイジングハート セットアップ」

《セットアップ》

「いくよ」

《了解。ディバインバスター》

私はガジェットの群れに向かってディバインバスターを放つ。うん。今日も調子がいいね。

『<ガガツ>なのはさ<ガガツ>』

「グリフィスくん? 聞こえないよ」

『・・・<ガガツ>あれ? <ガガツ> 音声が<ガガツ> 妨害されてるよ』

「あっ、いつこ 堂だね」

フェイトちゃんよく知ってるな。地球の文化に染まってるね。

『えっと、六課が襲撃されてます』

「妨害されてないじゃないですか!?!」

『あの程度六課クオリティの前には無意味です』

うんうん、まったくもってその通り。六課には凄い人材が揃ってるんだから。

「じゃあ頑張つてね、グリフィスくん」

『了解です』

「スターズはギンガの手伝いと敵の殲滅」

「ライトニングには六課に向かうように言つてね」

「了解」

さあ私達も仕事しないとね。頑張つて倒すぞ。

スバル side

えっと、ギン姉はどこにいるかな。確か魔力反応はこっちだったはずだけど。

「スバル、いたわよ」

「あつ、ホントだ。ギン姉」

ギン姉は戦闘機人二人と戦っていた。一人は眼帯をつけた銀髪の女の子。もう一人はボードをもった赤い髪の女の子だった。

「遅い!!」

「ゴメンゴメン」

ギン姉がシエルブリットパッチを使ってるってことはだいぶ強敵かな。

「おらぁ!!」

「うわっ!?!」

突然横から蹴られそうになった。何とか避けたけど、危ないな。

「じゃあ私はギンさんの手伝いするから頑張りなさい」

「ええ〜」

ティアが冷たいよ。二人一緒に戦えば早いのに。

「倒してやるよ!!」

「すぐに終わらせてギン姉の手伝いしなきゃ」

お互いが構える。あれ?あの構えって。

「ムエタイ?」

「そっちだって中国拳法だろ」

むむ、確かにそうだけど。普通私達みたいなタイプの魔導師ならシ

ユーティングアーツじゃないの？なんで立ち技最強のムエタイなのさ。

「まあいつか」

この程度で驚いてたら六課で生活してけない。

「「はああああ！！！」」

私の拳と相手の足がぶつかり合った。

ティアナside

「大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとう」

あつちの赤髪は大したことなさそうだけど、問題は銀髪ね。かなり強いわ。

「お前がティアナ・ランスターか」

「ええ、そうだけど」

「ティータ・ランスターの死について知りたくないか？」

兄さんの！？いったい何を知っているっていうの？

「お前の兄、ティータ・ランスターは上官の命令で勝てるはずもない犯罪者と戦わされて殺された」

.....

「つまりお前の兄は管理局に殺されたのだ。そんな管理局にいる必要があるのか？」

.....今更ね。

「私がいるのは起動六課。そんな腐った部分、私が叩き直す」

「.....そうか」

「やっぱり通用しないッスね」

「は？通用しないってわかってて言ったの？」

『いやいや、通用したら面白いな〜、と思って言わせただよ』

「あつ、ドクターッス」

突然モニターが現れた。こいつがスカリエッティ？何平然と出てきてんのよ。

「あなたがスカリエッティなの？」

『ああ、そうだよ。ギンガ・ナカジマ』

「何の用？」

そうそう、それを聞かないとね。というかギンガさんぴりぴりし過

ぎじゃない？

『いやね、チンク達に君とスバル・ナカジマを捕まえるよう言ったんだけど、もう別にいいかなって思ってたね』

「……はい!?」「」

随分と唐突に計画変更したのね。彼女達も驚いてるじゃない。

「隙あり！ダイバインバスター!!」

「ぎゃあああ!!」

「スバル、空気読みなさい」

ちゃんと空気読めないとクロノ提督みたいになるわよ。

<僕はKYじゃない!!>

なんか電波が飛んできたけど無視しましょ。

『おやおや、ノーヴェがやられたか』

仲間がやられたのに冷静ね。何か策でもあるのかしら？

『チンク、ウエンディ。逃げろ!!』

「ラジャー（ツス）!!」「」

そう二人が返事をしたと思ったら、ボードに乗ってる方がスバルに

倒された方を捕まえて飛び出した。

「逃がすか!! 荒鷹!!」

「甘いツス!!」

ちっ、全部避けられたか。けどまだ一人いる。こっちを捕まえればいい。

「悪いが私も引かせてもらう。ソードバレル・フルオープン!!」  
そう言うといきなり空中に無数のナイフが現れて、私達に飛んできた。

「くくわわっ!!」

「ブローク……ランブルデトネイター」

飛んできたナイフが全て爆発して辺りが煙に包まれた。

「衝撃のファーストブリット!!」

そんな中、ギンガさんが拳を地面に叩きつけて跳び上がった。

「ギン姉、どう?」

「駄目、逃げられた」

はあ、まあ追っ払えただけいっか。

エリオside

えっと六課に行くよう言われて、一応来たけど……

「凄いね、キャロ」

「うん」

六課自体がガジェットの軍勢を壊滅させていた。いったいどういうことだろう。

「その人」

「ん？」

振り返ると一人の少女がいた。確かヴィヴィオを保護した時にいたな。

「貴方には着いて来てもらう」

「ええっ!?!」

そんないきなり、兄さんじゃないんだから着いていかないよ。

「一条要は着いて来たよ？」

「そつだよ、エリオくん。男ならあれくらい大胆にならないと」

「キャロ！？」

なんでキャロまでそんなこと言うの！？とりあえず落ち着いて！な！

『ルーテシア、ご機嫌よう』

「ドクター？どうしたの？」

空中にモニターが現れる。あの人がジェイル・スカリエッティか。

『彼、もう必要ないよ』

「だって」

いや、だってと言われても、僕にどうしろと？

「よかったね、エリオくん」

「あっ、うん」

さっきまであんな態度とってたのに。

「またね」

「うん、またね」

なんか仲良くなってるし。

??? side

ん、五月蠅いな。いったい何が起こってるんだろ。

「……………これは」

窓から外を見ると、大量のガジェットが攻めてきているのが見えた。

「大変だ」

僕も動かないと。

ザフィーラ side

外は問題がなさそうだな。

「ザフィーラ、大丈夫かな？」

「問題ない」

怯えるヴィヴィオを安心させるため、狼形態になる。こっちの方が安心するだろう。

「ヴァイス、警備はどうだ？」

「問題ありませんぜ」

ふむ、なら大丈夫か。

「ヴィヴィオ、お菓子食べる？」

「うん！ありがとう、アイナさん」

ヴィヴィオが俺から離れていった瞬間だった。

「ゴメンね」

「ふえ？」

「なっ！？」

突然地面から出てきた女にヴィヴィオが掠われた。くそっ！！戦闘  
機人に無機物に潜り込める能力を持つものがいたのを忘れていた！  
！

「ヴィヴィオ！！」

その時一条と月村が入ってきた。

「ザフィーラ!! ヴィヴィオは!?!」

「.....スマン」

「探すぞ!?!」

「ああ!?!」

早く見つけなければ!?!

セイ n s i d e

ふー、作戦成功。ただあそこにルールーがいる予定だったけど、あんな要塞みたいな防衛じゃ入れないよね。

「脱出!?!」

ここまでくれば流石に要塞の攻撃も届かないよね。

「ねえねえ」

「ん？」

突然呼ばれたので聖王様の方を向いた。そしたら

「てい！」

眼潰しされた。

「眼が！眼がー！！！」

「成功！！！」

まさかこんなアグレッシブな行動をとるなんて！！

「ちょっとその人」

「ん？」

そこには緑の長髪をした男が立っていた。

「ヴィヴィオちゃんを返してもらおうよ」

「誰？」

「みんなからはまーくんと呼ばれてるよ」

その瞬間、地面から根が飛び出してきた。

まーくんside

やっと僕の出番だよ。早く仕事を終わらせよう。

「シッ！！ハッ！！」

「うわぁ！？」

避けるのがあまり上手くない。戦闘が得意じゃないんだろう。

「貫け！」

「イタツ！！」

無数の根を槍として突き出す。直撃はしなかったけど、何本かは掠っていた。

「これで、終わり！！」

無数の根を纏めて一本にし、叩きつける。さっきまでの攻撃で僅かに動きが鈍っている今なら確実に当たる。

「潰れる！！」

「うわぁぁぁ！！」

勝った。そう思ったけど

「ライドインパルス」

「えっ？」

僕の驚きは攻撃が避けられたこと。相手の驚きは攻撃が当たらなかったこと。その要因を作り出したのは紫のショートヘアの女性だった。

「トーレ姉!？」

「逃げるぞ」

「させない!!」

僕は根を伸ばす。せめてヴィヴィオちゃんだけでも、そう思ったけど、相手はあまりに早過ぎた。

要side

さっきかなり大きな音がしたので向かうと、まーくんが立っていた。

「まーくん!!」

「……………要さん、逃げられました」

「……………そうか」

結局ヴィヴィオは救えなかったか。くっ!なんて、未熟。

「要さん、僕はそろそろ戻ります」

「ああ、ありがとう」

「あの……あんまり自分を責めないで下さい」

とは言われてもな。仕方ない。今は俺に出来る事をするか。

「スカリエツティ、見てるんだろ？」

『おやおや、気付いていたかい』

モニターが現れスカリエツティが映る。

「お前ならこんなイベントは見逃さんだろう？」

『まったくだ。いいものを見させてもらったよ』

ふん、言ってくれる。

「知ってると思うが、ヴィヴィオに痛い事するなよ？」

『もちろんさ。誓おう』

「何に？」

『私と娘達の命に』

随分と大きくでたな。まあいい。約束を破ったならO.R.T.になって破壊しつくすのみ。

「その約束、守れよ」

『ああ、流石に命は惜しい』

そう言ってスカリエッティは消えた。戦いは俺らの敗北で終わった。

S t S 第十話（後書き）

<まーちゃんとアリシヤの部屋>

ま「皆さんどうも」

ア「なんでまーちゃんなのよ!？」

シヤ「まーくんが本編に出たからですか!？」

ま「そのようなことを気にしているから本編に出られないのです」

ア・シヤ「うっ!？」

ま「まあ安心なさい。私はゲストは呼びません」

ア・シヤ「ほっ」

ま「さあ今回、ヴィヴィオが掠われましたね」

ア「ついにね」

シヤ「うう、役立てなくてすみません」

ま「別にシヤマルさんは責めてませんわ。何もしてないんですもの」

シヤ「うえーん!?!」

ア「ちよっ!?!ホントの事でも言っちゃ駄目よ!?!」

「シャ」……………」

「ま」トドメを刺しましたわね」

「ア」そ、そんなつもりは……………」

「ま」まあいいですわ。では次回も見てくださいね」

StS第十一話(前書き)

所々やつちまったぜ。

## S t S 第十一話

なのはside

「本当に？」

「ああ、スマン。なのは」

まさか、ヴィヴィオが掠られるなんて。油断しすぎたかな。

《すみません、主。私達がしっかりしていれば》

「別にディオネ達は悪ない。それに要くんが安全は保証させたんやろ？」

そつだよね。流石にスカリエツティもアルカンシエルを喰らって大丈夫な相手と戦う気もないだろうし。何か奥の手があるなら別だけど。

「そんなに気にしないで、要」

「そつだよ。それにヴィヴィオは私達の娘なんだから」

「フェイト、なのは………ありがとう」

ちょっと元気が出たみたい。きっとヴィヴィオは大丈夫。信じないと。

その頃のヴィヴィオ

「五光！！」

「グハッ」

「ドクターが5連敗！？なんて強さ」

「なんで花札が出来るんスか？」

うん、大丈夫な気がする。

「なあ要、あたしと試合しよつぜ」

「なんで？」

「一回思いっきり体動かした方がいい」

「やはは、体育会系のやり方だね。私もよくやるけど……」

「はやてちゃん」

「どうしたんや？リイン」

「新しい予言が追加されたって聖王教会から連絡があったです」

「なんやて!?!」

「予言、カリムさんのレアスキルだったね。でも予言に追加なんてるの？」

「リイン、どんなのなん？」

「えつとですね。」

『全てが終演する時、宇宙より十字架現れる。』

「彼のものの前では王の翼も古き遺産も無意味と化し、ただ世界を破壊するのみ」

「だそつです」

「なんだろう。とにかくこれからわかる事は、世界の破壊。前の予言では管理局の崩壊だったけど、もっと夕チが悪い。」

「何かのロストロギアやるか」

「違うな」

「要くん？」

ヴィヴィオの時より深刻な顔してる。どうしたんだろう。

「ロストロギアは古き遺産だろう。十字架は別だ」

「何か知つとるん？」

「以前スカリエツティの所に行った時、あいつがとある文献について話したんだ。それが十字架」

ということとは十字架はだいぶ前にも存在したということ？なのにロストロギアじゃない。

「ヴァイスに連絡しろ。拳銃の訓練をしるとな。もちろん質量兵器の方だ」

なんでいきなり。

「ええよ、連絡しとくわ」

「ありがとう。ヴィータ、シグナムも呼んでこい。特訓だ」

「お、おう」

いきなり凄いやる気になったの。

## 要side

ヴィヴィオを守れなかった事に落ち込んでたが、そんな事態じゃなくなつたな。十字架？ふざけるなよ。スカリエッティのは文献だったが、こっちはよく当たる予言。マジで出てくるんじゃないか？

「一条、こちらの準備はいいぞ」

シグナムとヴィータの準備が整つたようだ。やるか。

「よし、全力でこい」

(身体能力100%解放)

「後悔すんなよ」

ヴィータが攻撃をしてくる。前より動きが速く、洗練されている。自主練もだいぶやっていたな。

「ラアッ!!」

「フンッ!!」

アイゼンを蹴り飛ばそうとしたが、上手くいかなかった。技の威力も上がってるな。

「こちらも忘れるな。紅蓮剣!!」

空中で、シグナムがレヴァンティンから火球を放つ。簡単に避けられるが。

「鳳凰天駆!!」

「っと、シールド」

追加で炎を纏って突進してきた。これは防ぐしかないな。

「隙ありだ!!ゴルディオハンマー!!」

「シールド、二重!!」

結論を言おう。防げるわけないじゃん。

「くっ!!」

なんとか着地。ダメージは少な……い?

「轟天爆碎!ギガントシュラク!!」

いやいや、確かに全力って言ったよ。でもこれ試合だよな。死合じゃないよね。

「限界突破!身体能力120%解放!!神速!!」

なんとかかこの馬鹿でかいハンマーの攻撃範囲から逃れないと  
当たる当たる当たる当たる。セーフ！！！避けたぞー！！！！

「ご苦労だったな。秘剣」

「マジで？」

「燕返し！！！」

「シールド、三重！！」

シグナムはまだ使いこなせていないから、ただの高速三連斬だけど、  
当たるとマズイ。

「チツ」

「危ない危ない」

二人共強くなってるな。少し舐めていたな。

「ギアを上げるぞ！ついてこれるか！？」

「越えてやるよ！！！」

「切り伏せてみせよう！！！」

疲れた。凄い疲れた。試合だったのになんでこんなに疲れるんだろ  
う。

「はあはあ」

「も………駄目」

二人も疲れてるな。そりゃそうだよな。3時間もやってりゃ。

「お疲れ様やな」

「はやて？」

「ドリンクやで」

「おお、サンキユ」

「主、ありがとうございます」

「ありがとう、はやて」

気が利くな。流石は部隊長。

「ごくごく、プハー」

あー、生き返る。でもやっぱり疲れてるから寝よう。

「じゃあな、寝るわ」

「うん、おやすみ」

はやて side

ムッフ、要くんは寝てくれたし、ヴィータには上手くアレを飲ませ  
れたし。

「はやて〜」

「どうしたん？ヴィータ」

「なんか、体が熱い／＼／」

もう媚薬の効果が出てきたんか。ドリンクに混ぜたから効果が出る  
のは遅い思ったんやけど。

「要くんがどうにかしてくれるで〜」

「うん、わかった」

ヴィータ、頑張りや。こんな後押ししか出来んけど、私は応援してるぞ。

要side

コンコン

「ん」

誰だ？人が寝てるというのに。

「誰？」

「ヴィータだけど、入っていいか？」

ヴィータか。何の用だろうか。さっきの試合についてかな。

「入っていいぞ」

そう言うとヴィータが入ってきたが、暗くて顔がよく見えない。

「今電気点け「別にいい」そうか？」

「要、体が熱いんだ」

「……………はい？」

ヴィータは俺を押し倒した。

えっと、どどういう事でしょうか。もしかして……………

「抱いて／＼／」

ですよー！！嫌な予感って当たるね。

というかヴィータさん。落ち着いて。

「もう、我慢出来ないんだ！！／＼／」

もう、逃げられないね。

朝起きると、隣に裸のヴィータがいた。やっちまった。

「要くん、朝だよ」

ヤバイ!!なのはが来た!!隠れないと!!

「かな・・・め／＼／」

ヴィータさん!!腕を離して下さい!!

「入るよ」

「ちよっ!?!」

なのは、入るの早いよ。

そして入ってきたなのはは、ヴィータを見てから俺を見て言った。

「要くん?」

「ナンデシヨウ」

「O H A N A S H Iだよ」

いいいやああああ!!!!!!

その後、俺はなのは、フェイト、すずか、スバル、久遠からO H A N A S H Iを受けた。

「ヴィータ、一歩リードやでー!」

「あつあつあつ／＼／＼」

その頃のヴィヴィオ

「おはよう、ウーノさん、チンクさん」

「おはよう、ヴィヴィオ」

「ああ、おはよう」

「ヴィヴィオはウーノ姉とチンク姉が好きッスね」

「ウーノさんはアイナさんみたいだし、チンクさんはパパみたいだもん」

「パパ？私は女だが」

「違うよ。苦勞人なのが一緒」

「苦勞・・・人」

「チンク姉！元気出して」

S t S 第十一話（後書き）

<まーくとアリシヤの部屋>

ま「はい、始めました」

ア「よろしく」

シヤ「もう諦めてまーす」

ま「今回ついに要さんがヴィータさんと」

ア「はやて、媚薬って」

シヤ「それよりなんでヴィヴィオちゃんは花札が出来るの？」

ま「要さんがやってるのを見て覚えたそうです。他にも将棋、囲碁、麻雀が出来ます」

ア「渋い……………」

シヤ「子供の前で何やってるの」

ま「今回は外伝だそうです」

ア「なんで？」

ま「これ以上本編を進めたら外伝を挟む時期がないそうです」

ア「ふーん」

シヤ「じゃあ次回も見て下さいね」

外伝くとある旅人一家>(前書き)

八神カイト様の「無限にして無窮なる旅人」とのコラボです。

外伝くとある旅人一家

要side

今日は何するか。昨日はO H A N A S H Iで一日死んでたし、鍛錬でもしようかね。

『要くん要くん』

ん？この声は。

「神様？どうしました？」

『実は、【宇宙そらの救世主メシア】が遊びにきたって』

……誰？そんな大層な名前知らんが。

『ああ、忘れてた。八神カイトのことだよ』

「おお、あの人外か」

あれが来るのか。正直面倒だな。胃に穴が空くじゃないか。

『まあ暴走しないようには頼んでおくよ』

「お願いします」

前回、向こうに行った時みたいなのんびりほのぼののでお願いします。

カイトside

「カイト兄ちゃん」

「どうした？鋼牙」

「久遠ちゃんと会ってみたい」

久遠、か。確か要の所にいる妖狐の娘だったな。まあ要の世界は異様に介入者が多いし、俺らが行っても大丈夫だろう。まあ一応連絡しておくか。

「おい、最高神<sup>ゼウス</sup>」

直接より要の世界の神を使う方がいいな。楽だし。

『何か妖怪？』

「くだらんシヤレは止める」

『ゴメンゴメン。それで？』

「要の世界に行くから連絡しておけ」

『いいよ〜』

あっさりだな。少しくらい愚痴るかと思ったんだが。

「行けるかな？」

「大丈夫だろ」

もし断るようなら無理矢理行けばいいし。

『暴走しないならOKだって』

「そうか、こっちもトラブルを起こす気はないから問題ない」

なら早速行くとするか。

「主殿、何をしているんだ？」

「黄宇か。鋼牙の為に要の世界に行こ「駄目だ!!!」「はっ？」

「あそこには鋼牙を狙う変態（雨季）がいる！！そんな所に行くなど」

「俺は変態じゃない！例え変態だとしても、変態と言う名の紳士だ  
！！！」

「変態だろ、それ」

おつといけない。つい電波にツッコんでしまった。しかし黄宇がここまで反論するとは、いや、当然のことか。

「なら黄宇お姉ちゃんも一緒に行こう」

「えっ？」

「そうだな。いつその事全員で行こう」

ならさつさと龍斗と水雫、紅蓮を連れてこないとな。

「さあ行くぞ」

「「「「「おー」」」」」

まあ自分の力で飛ぶのは面倒だから最高神ゼウスにやらせるけど。

『じゃあ行ってらっしゃい』

要 side

『要さん、転移「知ってる」なんで?』

いや、なんでって言われても教えられたからな。でも流石に神様の事は言えん。

おっ、魔法陣だ。

「「「「「到着!」」」」」

「多っ!」

カイトだけじゃないのかよ。胃がキリキリしてきた。

「久しぶりだな。ヴィヴィオが大変だな」

「ああ、久しぶり。ヴィヴィオの事をやっぱり知ってたか」

「まあ『全てを知りし者』オール・ノウレッジだからな」

はー、大層な名前だな。でもそれなら俺を知ってた事も納得だな。

「要兄ちゃん!」

「ん?君は?」

白髪金眼の少年。久遠みたいに癒し系だなこりゃ。ここに作者が居たらと思うとぞっとするな。

「鋼牙————!!!」

「マジで出てくるな!!!限界突破、身体能力120%解放!!!」

「ブハツ!!!!」

全力で吹き飛ばしたけど戻って来ないよな？

『僕が封印しとくよ』

「すみません、神様」

まったく、本編にまーくん出したら自分も出ていいと思うなよ。

「ありがとう!要兄ちゃん」

「気にするな」

それでこの子は誰だよ。

「そついえば前回こいつらとは会ってなかったな。お前ら自己紹介しろ」

「僕は鋼牙だよ。よろしく〜」

「ああ、よろしくな」

ふむ、鋼牙か。見た目に似合わず結構ごつい名前だな。

「黄宇だ。鋼牙を守ってくれて感謝する」

「ありや守るぞ」

シグナムみたいな姐御肌だな。それにしても女性にしては背が高いな。俺と同じくらいあるんじゃないか？

「俺は紅蓮だ。どうだ？一試合」

「やらんよ」

バトルジャンキーかよ。俺も戦いは好きだが、強すぎる奴とはやる気がない。こいつは俺より確実に強い。

「私は水雑です。よろしくお願いします」

「こちらこそ」

比較的まともな分類だな。まあ少しはまともなのがいないと大変か。

「龍斗と申します。シャマルさんはどちらに？」

「はっ？シャマル？」

「彼女は植物を薬品で蹂躪しました。制裁を与えないといけないのです……！」

おいおい、何この人、植物愛好者？まあシャマルの名前を久しくまともに言ってくれたんだ。

「許可しよう！あちらだ！！」

「感謝します！！では！！」

そう言っただけで走っていった。

そつえばこいつら何しに来たんだ？あれが用とは思えないし、ただ遊びに来たのか？

「鋼牙が久遠に会いたいらしくてな」

「あと楔お姉ちゃんにも」

「そうだったのか？」

うーむ、久遠はいいとして楔もか。

（要、ロザリオを使いなさいよ）

（楔、お前な）

（私に会いに来てくれてるのよ）

仕方ない。出してやるか。

俺はロザリオを取り出し首に掛けた。すると体が二つに別れた。一人は俺、一人は楔だ。

「私参上！！」

「ふう」

この感覚はどうも慣れんな。

「楔お姉ちゃんだ〜」

「はじめまして、鋼牙」

鋼牙が楔に抱きついていた。和むなこの光景は。さて次は久遠だったな。念話を使って呼ぶか。

『久遠、聞こえるか？』

『何？』

『お前に会いたいってのがいるから来てくれ。場所は……………』

『わかった。すぐ行くね』

これでよし。これで鋼牙の目的は果たされたわけだし、何しようかな。

「来たよ」

「早いな」

まだ1分しか経ってないぞ。

「君が久遠ちゃん？」

「うん、そうだよ」

「僕鋼牙、よろしくね」

「えへへ、よろしく」

戦闘において1+1≠2ではない。様々な要因により、3にも4にもなり、逆に1・5など下がる事もある。これが癒しにも言える事だったとは。胃に優しい。

「要、遊んできていい？」

「おう、気をつけてな」

「「はい」」

癒されるわ〜。

「要、俺達は飯にでもしないか？」

「料理は私が作るっ」

「ん、じゃあそっしよっ」

龍斗side

私の前に今シャマルさんが倒れている。もちろん制裁したためだ。

「あゝ」

「おや？貴方は」

そこには先程までいなかった青年がいた。

「あつ、まーくんと言います。はじめまして」

「これはこれは、龍斗です。よろしくお願いします」

彼からは植物の気配がしますね。しかもただの植物ではない。魔界の植物？いや、ユグドラシルの感じも。しかしここまでしっかり人型の植物とは。

「龍斗さん？」

「あつ、なんでしょう」

「何故シャマルさんは倒れているんです？」

「ああ、それはですね。……………」

私はまーくんに簡単に説明してあげました。まあ彼も植物なら何か思うところがあったでしょう。

「少しやり過ぎじゃないですか？まあ気絶してるだけですけど」

「そうですね？」

「シャマルさんは僕の育ての親ですから」

ああ成る程。それならそうも思いますか。

「それはすみません」

「構いませんよ。シャマルさんがやり過ぎたのも事実ですし。あっ、これから食事でもどうです？」

「食事、ですか」

私は構いませんけど、彼はいったい何を食べるんでしょう。人型になってるなら人が食べるものを食べるんでしょうが。

「まーくんは何が好きなんですか？」

「僕は元魔界のオジギソウなんで、ベジタリアンです」

「おかしいでしょ！？」

「冗談です。鮭の塩焼きが大好物です」

それでもいくらか違和感が……

鋼牙 side

えへへ、久遠ちゃんも楔お姉ちゃんも要兄ちゃんもいい人だな。

「鋼牙、こつちだよ」

「うん!!」

ここの六課っているいろいろあるな。あれ?この部屋は何だろう?

「久遠ちゃん、この部屋は?」

「すずかのラボだよ」

ふえ、こんな所もあるんだ。

「入ろつか」

「いいの?」

「大丈夫!!」

なら入ってみよう。いったい何があるんだろう?

「お邪魔しまーす」

あれ？誰もいないぞ。すずかお姉ちゃんがいるんじゃないの？

「ごつちだよ」

そうやって久遠ちゃんは床を開けた。そこには階段があった。地下室か。

「すずかー！いるー？」

「いるよー！」

「じゃあ行こっ」

「うんー！」

うわー、広いなあ。秘密基地みたい。

「えっと、君は？」

「僕は鋼牙だよ」

「ああ、今回転移して来た人達の一人だね。私は月村すすかだよ」  
「やっぱりカイト兄ちゃんの言ってた通り、この人は違う世界から来る人に慣れてるんだ。」

「すすか、今は何してるの？」

「ふふふ、今日はゲストもいるし、特別に見せてあげる」

「「やったー！」」

どんなの何だろう。

「ほらこれよ」

「すぐかお姉ちゃんが連れて来てくれた先にあったのは巨大なロボットだった。」

「これぞ機動六課と異世界の技術をかき集めて造り上げられた魔導兵器。」

魔導式戦術機『六華』！！」

「カッコイイ！」

「凄い凄い！こんなの造れるんだ！この六課ってホントに凄いな。」

「はい、おしまい。そろそろお昼食べに行こうか」

「はい」

「もうちょっと見ていたかったけど、まあいつか。」

食事は黄宇が作ってくれるらしい。なんでも料理が得意だとか。まあ野菜炒めだけは負けん。しかし……

「それですね、マスターったら」

「ああ」

「ちゃんと聞いてますか？」

「ああ」

水旋の惚気話が長い事長い事、そんなの興味が無いっての。俺に話して何がしたいの？

ちなみに向こうでは紅蓮と楔が話している。

「紅蓮っていい体してるわね」

「そうか？」

「ええ、食べちゃいたい」

「気持ち悪い事言うな！男だろテメエ！」

「身も心も女の子よ」

仲がいいな。それにしても楔よ。どれだけ手を出せば気が済むんだ？

「要さーん」

「おや、まーくと龍斗じゃないか」

なんでこの二人が一緒にいるんだ？

「カイト様、制裁してきました」

「いや、俺に報告されてもな」

シヤマル、セリフがなくても今回お前は頑張ったよ。

「カイト兄ちゃん」

「要」

癒し系コンビのご到着だ。鋼牙はカイトに、久遠は俺に抱き着いた。

「すずかも一緒か」

「うん、久しぶりに外に出たよ」

最近ラボに籠りっぱなしだったからな。目の下に隈はないから眠ってはいるみたいだな。

「カイト兄ちゃん、凄かったんだよ！」

「そうだよ要、凄かったよ！」

「「そうかそうか」」

何やら凄いものを見たようだな。まあ今は癒されよう。

「食事が出来たぞ」

黄宇が完成した料理を持って来てくれた。こりゃ美味そうだな。

「美味しそうだな」

「はやて、いつの間に」

気が付くと、カイトの隣にはやてが座っていた。

「初めまして、八神はやて言います」

「八神カイトだ。よろしくな」

「おんなじ苗字なんやね」

「ああ」

そういえば気にしなかったけどそうだな。なんか関係があるのかな？

「まあいつか。それじゃあいただきます」

『いただきます』

実に美味かった。翠屋のお店の味とは違うが、家庭の味、お袋の味を極めた感じだな。

「さて、そろそろ帰るか」

「早いな」

「目的は済んだからな」

ああ、鋼牙の事か。こいつ自身は本当に何もやる事がなかったんだな。

「主殿、要。鋼牙と久遠の写真を撮っても」

「いいんじゃない？」

「焼き増ししてくれ」

あの癒しは写真でも効果を発揮しそうだ。

「なら鋼牙、久遠、並んで。1+1は？」

「「こー」」

カシヤ

これは絶対にいい写真だ。ありがたやありがたや。早く焼き増しが

欲しいぜ。

「ならやり残した事はないな。じゃあ帰るぞ」

「「「「「おー」「」「」「」

「つとそうそう、はやて」

「なんや？」

「好きな相手には積極的にな。今いるんだろっ?」

「な!？」

「何故つて顔だな。何たつて俺は『全て知りし者』オール・ノウレッジだからな」

へー、はやてに好きな奴がいるんだ。シグナム達が聞いたら取っ捕まえようとするんじゃないか?その相手。

「じゃあな、カイト」

「この先そこそこ大変だが頑張れよ」

そしてカイト達は帰って行った。

そこそこ、か。あいつの基準はいったい何なんだろうな。まあいい。俺達はやれる事をやるだけだ。

外伝<とある旅人一家>（後書き）

<まーちゃんとアリサの部屋>

ア「あれ？シヤマルさんは」

ま「本編であれですから」

ア「成る程ね」

ま「今回はゲストの登場ですわよ。『魔法少女リリカル………  
なんとか！』出演、暁優さんです」

優「むー！むー！」

ア「ちょっと！縛られてるわよ！？」

ま「今外してあげます」

優「ぷはっ、ありがとう」

ま「いえいえ」

優「あつ、これ俺の文化祭映像ね。渡さないと殺られるから」

ま「ありがとうございます」

ア「まーちゃん、向こうに部屋があるから、食べなさい」

ま「……………ではお言葉に甘えて、イキましよう」

優「えっ！？ちよっ！？待っ！！」

アーーーーッ

ア「さあ優が美味しく頂かれてる間に次回予告。次回はあの暴走迷惑少年の登場。みんな、見てね」

ま「優さん！もっと！！！！」

優「も……………無理……………」

外伝<こいつが胃痛の元凶だ>(前書き)

みんなご存知、暴走迷惑少年のレイが登場です。

外伝<こいつが胃痛の元凶だ>

要side

あー、癒されるわー。久遠と鋼牙の写真は。

『要さん、転移反応ですよ』

「誰？」

『レイさんです』

………何？レイ？

「俺は引きこもる……！」

『はい？』

だってあいつに会ったら俺の胃に負担がデカイ……穴が開くかもし  
れん……！！

レイ side

「来たぞー」

ここに来るのも久しぶりだな。最近本編が更新されないからな。他で遊ばないと。

「いらっしゃい、レイさん」

「おお、まーくん」

やっぱりコラボはいいな。お迎えがあるし。

「はやてさんの所にも行きます?」

「おお」

責任者には会わないとな。うん。

「はやて久しぶり」

「レイくんやないか。どうしたん?」

「出演権を使った」

「へー」

流石な対応。この機動六課は面白いね。そういえば要に会ってないな。一応主人公にも会わないと。

「要は？」

「引きこもつとるよ」

「何故に？」

「胃痛が酷いんやて」

むむっ、それはいかな。ちゃんと治してやらんと、なあ？皆さん。

「じゃあ行ってくる」

「引っ張ってきてな」

ふふふ、どっしてやるつか。

要side

ゾクッ

「ぶるぶる」

なんだ今の悪寒は。体が振るえだしたぞ。間違いなく嫌な事が起きる。

「どうしたの？要」

「寒いのか？大丈夫か？」

看病してくれているフェイトとヴィータが尋ねてくる。ちなみになのはとスバルもやると言ったが、じゃんけんで負けて、この二人が看病ということになっている。正直仮病みたいなもんだから心苦しかったけど、本当に病気になるかもしれん。

「要！お見舞いませ！！」

「………きやがった」

レイが扉を開けて入ってきた。胃が痛い。

「何しに来たんだよ」

いいぞ、ヴィータ、言ってやれ。

「お見舞いだよ。そうだ、ヴィータにお赤飯」

「はっ？なんで？」

「ヤツたんだろ？」

「！？／／／」

ヴィータが顔を真っ赤にして出て行った。何故に知っている。仕方ない、フェイト、頼むぞ。

「フェイトにはこれをやろう」

「何、この箱？」

「一時的に空間を切り離す道具だ。誰にも邪魔されず要とやれるぞ」

「要、また後でね」

フェイトも部屋を出ていった。いともたやすく買収されおつて。

「さあ要、薬をやろう」

「何の薬だよ」

「狼になる薬だ。ちょっとノクターン行きになるだけだ」

要するに強力な媚薬だろ。とにかく逃げ出さないと、って体が動かない！？

「痺れ粉だ」

くっ、用意周到だな。このままではやられる。

「要、おやつだよ」

「「久遠!?!」」

ナイスタイミング！久遠好きのレイなら飛び付くはず。

「久遠、モフモフさせて」

「姐己、セットアップ」

《セットアップ、オートガード》

「へブツ!?!」

いい加減学習しろよ。久遠はいきなり飛び付かれるのが苦手だって。

「久遠、モフらせてやれ。そしてレイを外に連れ出してくれ」

「わかった」

そう言って狐になってくれる久遠。ありがたい。

「モフモフ」

「ク」

「フィーラもモフっていいから」

「マジか！じゃあな！！」

あー、ようやく出ていったか。胃がいてえ。

レイ s i d e

ザフィーラは何処にいるかな。

「あっ、いた」

「むっ！？」

ザフィーラは逃げ出した。しかし回り込まれた。

「逃げるなよ」

「止める！！！離せ！！！」

「てい！！！」

プスッ

俺は性転換薬入りの注射器をザフィーラにぶっ刺した。するとポフンという軽快な音と共に、ザフィーラはフィーラに進化した。

「うう」

「泣くな」

「泣くわ!」

「いいからモフらせる」

そう言うとフィーラは大人しく狼になった。あー、気持ち良い。

「何故女にならといかん」

「だって雌の方が毛並みいいもん」

雄は硬いんだよな。やっぱり撫でるなら雌だよ。

「あー!レイくんずるいで!」

はやてがきやがったか。

「要から許可貰ったもんね」

「ザフィーラはうちのや!」

「フィーラは楔んだ!」なら要から許可貰えばOKだ!」

確かにザフィーラははやてのだが、フィーラは楔のだ。楔は要だから、要の許可が出たならそれでOKのはずだ。

「むむっ、屁理屈を」

「屁理屈は理屈で返せないと理屈なんだよ」

そんな時、とある来客が来た。

「はやて、久しぶり」

「ユーノくん？久しぶりやな」

こいつが噂に名高い淫獣か。なかなかの好青年じゃないか。……  
・・あれ？隣にいるのって確か。

「ほっほー、そっちが噂の彼女、ドゥーエさんかいな」

「まあ、ね」

「よろしくお願いします」

やっぱりドゥーエだよ。ISで姿変えてるけど、アニメで見た通り。って。

「彼女!？」

似合わねえよ!!ユーノには勿体ないよ!!

「えっと君は？」

「要の友人のレイ・ツァイベルだ」

「僕はユーノ・スクライア、よろしく」

「私はユーノの恋人のドゥーエです」

マジかよ。あれか？罰ゲームの一環か？クアットロにやらされてんのか？

「何しに来たん？いちゃつきに来たん？」

「たまたま近くに来たから寄っただけだよ。それにしても、はやてはまだ告白してないの？」

「うっさいわ。まだ忙しいんです」

この世界は俺が思っている以上にはちゃめちゃだったな。久遠とフイーラを撫でながらそう思った。

夕飯にお呼ばれたからなのは達も交えて飯を食ってるんだが・・・

「はい、アーン」

「アーン」

このバカップルはどうかにならないのか？手作り弁当まで持ち込んでよ。

「ええ加減にしいやー!!」

はやてが遂にキレた。彼氏がいないはやてからすれば羨ましい限りだもんな。そしてあっちも……

「要くん、アーン」

「要、アーンして」

「ほら要、口開ける」

「要くん、食べて。どうせなら私も」

「要さん、どっぞぞ」

なのはにフェイトにヴィータにすずかにスバルか。ハーレムだな、要。

「もっええわ」

あっ、諦めた。

要side

今日の夕飯もストレスが溜まったな。

「そんじゃ帰るわ」

「おう」

レイもようやくやくお帰りか。今日は比較的マシだったな。

「おーい、はやて」

「何や？」

「なのは達にこれ渡してくれ」

レイがはやてに渡したのは紅い布？……………まさか!？

「マグダラの聖骸布と言ってな。『我に触れぬ(ノリ・メ・タンゲレ)』って言うつと男を問答無用に拘束する。はやての分もあるぞ」

「……………へえ」

はやてがイイ笑顔をしている。逃げるか。

「『我に触れぬ（ノリ・メ・タンゲレ）』」

「ぎゃー！ー！」

やっぱり捕まえますよねー。レイめー！！

「じゃな、要」

レイはさっさと帰っていった。畜生、やっぱりお前が俺の胃痛の元凶だー！！

外伝<こいつが胃痛の元凶だ>(後書き)

<まーちゃんと優の愛の部屋>

優「何このピンク空間!？」

ま「あら? 私達だけの部屋ですよ?」

優「なにそれ」

ま「いちゃいちゃするだけです。予告もアリシヤがやります」

優「まーちゃん、顔が近い」

ま「うふふふ//」

チュツ

優「な、ななな//」

ま「ではやりましょう」

優「ちよっ!？」

アーーーーッ

<アリシヤの部屋>

ア「・・・・・・・・」

シヤ「・・・・・・・・始めましょう」

ア「今回はレイの登場です」

シヤ「次回はあの夫婦の登場です」

ア「あの二人って座談会にしか出てないわよね？」

シヤ「そうだったかしら？まあいいわ。では次回もお楽しみに」

外伝く変わり者夫婦の遊びく(前書き)

疲れたぜ。

座談会では扱い易いキャラなのに。

そついえば100話目なんだよ。

外伝<変わり者夫婦の遊び>

百合姫 side

なんか面白い事ないかなあ。そういえばこの間要とヴィータがヤツちやったのよね。お赤飯届けなきや。それに一回要と死合ってみたかったし、久遠にも会いたいし。

「鈴〜」

「どうした？ユリ」

「要の世界に行きましょ」

「いいぞ。あそこいろいろと面白そうだし」

ムフフ、待ってなさい。今会いに行くからね。

要 side

ゾゾッ

なんか悪寒がしたな。せつかく薬やらなんやら貰って胃の調子もいっていろいろの。

『要さん、転移反応です』

「誰？」

『データ無しです』

ふむ、また新しい奴か。さっきの悪寒からしてあまりいい感じはないな。

「何処に転移してくる？」

『要さんの部屋です』

何？俺の部屋だと？その瞬間、頭の上に黒い穴がぽっかり口を開け

「」とうちゃーく！！」

「ぎゃっ！……」

上から落ちてきた二人の着地台にされた。

鈴side

俺らが降り立った時、何かを踏んでしまったようだ。

「あれ？要じゃん」

「あつ、ホントだ」

「………退け」

あー、怒ってるな。まあいきなり潰されたもんね。

「何しに来た、馬鹿夫婦」

「「遊びに」」

此処に来るほとんどの奴がそれが目的だろ？

「久遠は何処？」

「楔を出せ」

「とりあえずあんたらを紹介せんといかん。着いて来てくれ」

へー、そんなルールがあったのか。

「初めまして、八神はやてです」

「御神百合姫です」

「夫の神北鈴です」

あつ、ザフィーラがいる。後でフィーラにしてやるつ。

「ほな自由にしていって下さい」

「はい」

早かったな。流石は要の世界の機動六課。噂通りだ。

「鈴」

「おお、楔」

部屋に突然楔が入って来て俺に抱き着いた。

「ほれ、満足か？百合姫には久遠だぞ」

「クー」

「ありがとう！要。あつ、私はユリでいいよ」

準備しておいてくれるとは、なんだかんだ言ってもいい奴だな。

「じゃあ俺は帰「待って！」何だ？」

「私と死合って」

そういえば俺達って直接要が戦ってるのって見た事ないよな。ユリと要の死合か。まあユリが勝つだろうけど。

「……………いいぞ」

「やったね」

百合姫 side

死合をする事になったらギャラリーがかなり集まってきた。試合じゃないのに。あっ、ヴィータがいる。お赤飯渡してなかった。

「要、ちょっと待ってて」

「ああ」

私はヴィータの前に移動した。

「はい、どうぞ」

「なんだよ、これ」

「お赤飯だよ」

「……………お前もかー!!」

ヴィータが顔を真っ赤にして走っていった。顔を赤くしたヴィータも可愛かったな。

「あんまりヴィータをからかうな。俺も恥ずかしい」

「そう?」

私としては楽しいんだけどね。

「まあいいや。死合を始めましょう」

「わかった。身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン発動。アリストテレス、セットアップ」

《セットアップ》

「非殺傷解除」

《了解》

うんうん、死合をよくわかってるね。そんな邪魔なものはしっかり取り払わないと。

『要くん!!!なんで非殺傷設定を!?!』

「なのは、黙ってる」

あらあら、なんか性格変わってない？

「やろうか。最近ストレスは溜まるし、全力でやれる相手がいないか  
つたんだ」

「じゃあ私は全力でやれるって事？」

「全力でやっても勝てるかわからん。だからいろいろいる玩具を使わせ  
てもらおうよ」

「上等」

やってあげようじゃない。どんな手で来ても叩き伏せてあげるわ。

「いくぞ！ー！ー」

そう言っつて要は地面を叩いた。するとそこから出て来たのは……

「ガトリング砲！？」

「魔導式だ」

そんなの聞いてない！！

ダダダダダダダダッ

って撃ってきた！

私は当たらないように魔力弾に干渉し、軌道を反らす。

「なんでそんなのがあるの!?!」

「ここ(六課)は俺のフィールドだ!」

要side

ちっ、避けるではなくずらすか。矢避けの類か? まあいい、次はこいつだ!!

「喰らえ!!」

俺は魔導式手榴弾(改)を投げ付けた。

「当たらない!」

爆発を高速移動で避けたか。あれは、瞬動か? 知識でしか知らんからなんとも言えんが。

「このっ!」

ユリが殴り掛かって来るが、そこは危ないぜ。

カチッ

「えっ?」

ドガン

「……やっただか？」

「あつぶないわね！！何よ今の！？」

「魔導式地雷だが」

あのタイミングで回避出来たのかよ。チートめ。

「正々堂々やる気ある？」

「悪い悪い。そっちの実力を強いとしか知らなかったからな。今から真面目にやるよ」

「むー」

あー、完全にふて腐れたな。どうしよう。

「終わったら久遠とフィーラを撫でさせてやる」

「……わかった」

やっぱり久遠とフィーラは偉大だ。あんな機嫌が悪い人すら言う事を聞くようになる。

「ねえ、トラップってまだある？」

「あるが」

「そう……」

そんなの聞いてどうする気だ？トランプの破壊でもするのか？

「……………はい、此処のトランプを機能停止させたよ」

「何？」

試しに地雷を踏んでみる。アルティメットワンを発動してるから爆発しても大丈夫だが。

「爆発……………しない」

「でしょ？トランプが発動しないように干渉したからね」

干渉、それがユリの能力か。厄介な力だ。

「なら本番開始だね」

「ああ」

そうだな。地雷すら避けるなら、初っ端からトップギアで行くか。

「うおおおおー！！」

ジャブの連打。とにかく速く叩き込む。だがユリはたやすく受け流す。

「流天掌！」

カウンターで掌底を喰らう。だがこの程度どうという事はない。

「まだまだ！飛天掌！！」

「ぐっ！？」

顎に掌底を喰らい、空中に投げ出される。

「封天掌！！」

「カハッ！！」

両肺に掌底を喰らい空気を吐き出さされる。

「崩天脚！！」

「っ！！」

吐き出す空気も残っていない胸に鋭い蹴り上げが決まる。

「ラスト！墮天脚！！」

クルリと華麗に一回転しての踵落とし。もちろん避けられるはずもなく、俺は地面に叩き付けられた。

「ゲホッ！ゲホッ！！」

「意外とたいしたことないのね」

（ざけるな！！限界突破！！身体能力120%解放！！神速！！）

俺は倒れている状態から一気に飛び掛かり、蹴り飛ばした。

「くっ！やるじゃない！！」

「ハアッ！！」

追撃として右ストレートを放つ。

「甘い！流天掌！！」

受け流され、再びカウンターの掌底を放たれるが、それが俺の狙いだよ。

「フッ！」

「なっ！？」

俺はユリの腕に抱き着いた。腕挫ぎ十字固めだ。

「オラア！！」

ボキッ

「アアアアア！？」

折れたな。やっぱり骨は外すより折る方が楽だ。まあ後味が悪いが、とりあえずしばらく腕は動かせないはず。

「いったあ」

「……………おいおい、もう治したのか？」

「そっちだって。私の連撃の傷が全部治ってるじゃない」

「まあな。で、まだやる？」

「もちろん」

こんなに長いこと限界突破と神速を使い続けた事ないのにな。

鈴  
side

「頑張るわね」

楔が腕に抱き着きながらそう言った。確かに、ユリが武器とか使っていないからってよくやるよ。

「凄まじい、な」

「ほんまやね」

「シグナム、はやて。ユリの全力はあんなもんじゃないぞ」

『えっ！？あれで！？』

六課のギャラリー全員が驚く。この六課じゃあれくらいよくあるんじゃないの？

ああ、チート同士のぶつかり合いは見た事ないのか。

「あっ、骨折られた」

痛そうだな。要が得意なのって骨を外すのじゃなかったっけ？まあすぐ治してたけど。

「そろそろ決着かな？」

「そうね」

最後はどんな終わり方になるかな？

それにしても楔、流石に暑くなってきたんだが。

百合姫 side

さっきはまだやるって言ったけど、要ったらきつそうじゃない。

「ニードルガン二連」

「ほいほいつ！」

要の攻撃を弾くと、要がその隙を狙ったのか突撃してきた。

「オラア！！！」

流天掌じゃまたカウンター返しを喰らうかもしれない。それに一話に同じ技三回つてのもね。

「ならこれよ！碎天掌！！！」

要の拳に掌底を叩き込む。普通なら相打ちだけど、碎天掌は二重の極みの原理で放つ掌底。ただのパンチごとき軽く砕く。

「グアツ！？！」

要の拳から血を噴き出した。次は顔面に叩き込んで終わり！！

「150%だあ！！！！！」

「嘘っ！？！」

限界って120%じゃないの！？

「オラオラオラオラオラア！！！！！」

「無駄無駄無駄無駄無駄あ！！！！！」

ちよっとヤバイかな。単純な殴り合いなら向こうの方が得意っぽい

し。なら力を使って……………

「はあはあ、もう、駄目」

「……………あれ？」

なんで要が倒れているの？スタミナ切れ？

「あらら、ダメダメね。使った事がない150%なんて使うからよ」

楔が来て言った。

えっ？使った事ないの？

「ユリ、お疲れ様」

「あっ、うん」

なんだか呆気ない終わりだったわね。

要 side

「……………うーん」

何故寝てる？・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、負けたんだ。

「よいしょ・・・・・・・・あれ？」

「かな、め・・・・・・・・さん」

体が妙に重いと思ったら、椅子に座ったスバルがのしかかっていた。

「あつ、起きた？」

「オハヨ」

「ユリ、鈴」

窓際の椅子にユリと鈴が座っていた。ユリは寝てる久遠と、寝てるフィーラを、鈴は楔を撫でていた。つか楔、いい加減鈴から離れる。

「強いな、ユリ」

「要だつて結構頑張ったじゃん」

「お互い異能を使ったらどうなったかね」

「ミッドチルダが減ぶんじゃない？」

「違うない」

俺は笑いながら言った。そんな中、スバルが目を覚ました。

「ん〜、あれ？要さん？」

「おう、起きたか？」

「……体は大丈夫ですか！？」

そう言っつて飛び付いてきた。いきなりだったので押し倒される体制になってしまった。

「『ヒューヒュー』」

「その三人、黙れ」

こいつらは……楔もそろそろ俺に戻りやがれ。

「あっ、そろそろ帰るわね」

「楽しんだしな」

「私も鈴とイク〜」

「楔は戻れ。そしてカタカナにするな」

でももう帰るのか。いや、夜だし帰るか。あっ、そうだ。

「頼みがあるんだが」

「何？」

「10年バズーカが欲しい」

「10年バズーカ？なら俺が創ってやるよ」

そう鈴が言つと、鈴の手の上にバズーカが現れる。

「こんなはどうするんだ？」

「それはこれからのお楽しみだ」

思い付きだが、きっと楽しい事になるはず。

「じゃあ楽しみにしてるわね」

「じゃあな」

「行かないで」

「お前はこっち」

鈴に着いて行こうとした楔を引つ張つて、鈴達の転移を邪魔しないようにした。そして鈴達は帰って行った。

「ふえー、転移ってあんなに簡単に出来るんですね」

そういえばスバルがいたな。

「しくしく」

楔は泣くなよ。みつともない。

「俺寝るわ」

まだ疲れてるし。

「なら私も一緒に」

「駄目」

「え〜」

こいつは、最近出番が少ないからって。

「しくしく」

楔はいい加減泣くな。

外伝＜変わり者夫婦の遊び＞（後書き）

＜まーくとアリシヤの部屋＞

ア「あれ？ピンクは？」

ま「今回はいろいろとあるので無しだそうです」

シヤ「あら、そうなの」

ア「いつもあんな事やられても困るけどね」

シヤ「今回は座談会の常連、百合姫さんと鈴さんだったわね」

ま「最後の10年バズーカ、どうするんでしょう」

ア「さあね。それでやる事って？」

ま「えつとまず報告です。次回作は主人公は要さんで、世界はネギ  
まです」

ア「そうね」

ま「要さんのアーティファクトが決まったそうです」

シヤ「あらよかつたじゃない」

ま「そして皆さんにアンケートです。この作品では本来リリカルに  
いない久遠ちゃんがいるわけですが、ネギまでも本来いないキャラ

を出してもいいでしょうか？」

ア「具体的には？」

ま「作者さんは、妖怪退治に山に行った要さんが封獣ぬえを拾うとか考えた事があるそうです」

シャ「そうなの」

ま「それで皆さんには本来いないキャラを出して構わないか、出すならどんなキャラがいいかを聞きたいと思います」

ア「アンケート期間は次回作が出るまで」

シャ「長いからじっくり考えてね」

ま「ではまた次回」

StS第十二話(前書き)

ラスト間近。

エリオ&キャロVスルーテシアもあるよ。

## StS第十二話

要side

俺らはスカリエッティ対策の会議中。まあ俺はスカリエッティより十字架の方が気になるが。

「とりあえずヴィヴィオの奪還、ナンバーズと召喚師の少女の保護、そしてスカリエッティの逮捕。異論はないな」

「はやて、確かゼストってのもいたよな」

確かベルカの騎士で槍使いだったか。惜しいな、エリオの指導をしてもらいたかった。

「私が相手する事になっている」

シグナムか。最近、燕返しをアレンジしたって聞いたが、さてはてどうなるかな。

「召喚師の子は僕とキャラ口がやります」

「ん、無茶しんようにな」

「「はい！」」

他のナンバーズだが、確か人数は12人、そのうち確認されたのは11人。後一人はいつたい。

「ユーノ、ほっぺにクリームがついてる」

ペロッ

「ん、おいし」

「ハハハ、参ったな」

なんだろう。無視していい気がした。

「とにかくみんな怪我しんように。帰ってくるまでが任務ですよ」

『はい』

最後は纏まったな。六課のこういうノリが大好きだ。

「フォワードとギンガ、集まれ」

「……はい」「」「」

こいつらに一言づつ言っておこう。こんなデカイ仕事は初めてだろ  
うしな。

「エリオ、アレを使ってさっさとやってこい」

「わかったよ」

アレを使えばすぐに終わるだろうな。

「キャラ、ヴォルテールは従えたか？」

「うん、大丈夫」

この前ブルーアイズでベルレフォンやって挨拶せてたからな。

「スバル、突っ込み過ぎるなよ」

「アハハ……はい」

正直心配なんだよな。無事帰って来て欲しいもんだ。

「ギンガ、スバルのストッパーとして頑張ってくれ」

「言われなくとも、やらないと大変な事になります」

確かに。スバルのストッパーはギンガがティアナだけだが、ギンガの方が安心出来る。

「ティアナ・・・・・・・・・・・・・・・・頑張れ」

「ちよっ!？」

だって今更言う事ないもん。ティアナだもん。

「皆さん！大変です!!！」

「グリフィスくん、どうしたん？」

「スカリエツティが、演説っばい事してます」

『っばい事?』

グリフィス、そこはっばい事はいらんと思うぞ。

なのはside

モニターを見るとスカリエツティが映っていた。この人がヴィヴィオを・・・・・・・・

『管理局の皆さん、ご機嫌よう。私がジェイル・スカリエツティだいきなり現れて、いったい何をする気？正直スカリエツティの行動は読めない。要くんは子供みたいな天才って言ってたけど。』

『まずはこれを見て貰おう』

映像が変わり、アインヘリアルが映る。そして、そこにあったアインヘリアルの全てが爆発した。……うん、だから？

『まあこれは前フリだ。次はこれを見て貰おう』

また映像が変わる。そしてそこには……

「ヴィヴィオー!!」

『なのはママ！フェイトママ！パパ！助けて!!』

よくわからない椅子に座らされているヴィヴィオがいた。いったい何をするつもり？

『彼女にはゆりかごの動力となってもらう』

ゆりかご？何、それ。

『助けてー!!』

『黙りなさい!』

『ひっ』

眼鏡を掛けた戦闘機人が怒鳴る。ヴィヴィオ、我慢して、すぐに助けるからね。

「スカリエッティ、聞こえるか？」

『ああ、要くんか。何かね？』

「ヴィヴィオと話させる」

『・・・・・・・・いいだろう』

流石要くん。ヴィヴィオを安心させるつもりだね。

「ヴィヴィオ」

『パパ!? 助け「カンペ読んでるだろ」・・・・・・・・シラナイヨ、ヴィヴィオシラナイヨ』

・・・・・・・・はい? カンペ? ヴィヴィオの反応からして本当だろうけど。

「カメラをガン見しすぎ、棒読みすぎ。カンペがあるのがまるわかり。しかもそこに麻雀牌が転がってる。大方さつきまでやってたんだろ?」

あっ、本当だ。ヴィヴィオばかり見てて気付かなかった。つまり、ヴィヴィオは協力してたの?

「どうせピーマンをどうにかしてやるとか言われて協力したんだろ?」

『・・・・・・・・パパのデリカシーがない所が嫌い!!  
ゆりかご起動!』

「ちよっ!?! ヴィヴィオ!?!」

「今のは要くんがいけないよ」

「あかん、あかんでー」

「流石にさっきのはどっかと思っよ、要」

はやてちゃんもフェイトちゃんも同意見だし、やっぱり要くんが悪いの。

キャロside

外に出てみると、沢山のガジェットがいた。まあ六課の攻撃で落とされてるけど。

《メガ粒子砲、ファイアー!!!》

ディオネさんはっちやけてるな。

『ハハハ!!--魔導式戦術機『六華』のお披露目よ!!--』

「カツコイイ!!」

すずかさん。巨大ロボットって、自重して下さい。エリオくんも落ち着いて。

「待って」

あっ、この子は……

「ルーちゃん」

「久しぶり」

「うん、久しぶり」

確かルーちゃんは保護しないといけないんだよね。

「ここであなた達を倒さないといけない」

「私達もあなたを捕まえないと」

そっいえばエリオくんは何してるんだろ。

「よいしょ」

エリオくんは何処からかバズーカを取り出していた。……  
まあいつか。

「なら、いくよ」

「こつちだつて」

「白天王!!」

「ヴォルテール!!」

私もルーちゃんも巨大な召喚獣を出す。

「キャロ、下がって」

「えっ?」

そうエリオくんが言ったので、エリオくんの方を見ると、砲身を自分に向けて引き金を引いた。

ドガン

「「えっ!?!」」

私もルーちゃんも驚いた。当然だ。自分で自分を撃つなんて。そして煙が晴れると……

「……此処は何処だ?」

大人になったエリオくんがいた。

（（カツコイイ））

私とルーちゃんは同時にそう思った。

10年後エリオサイド

突然煙に包まれたと思ったたらよくわからん所にいた。いや、見覚えがあるな。JS事件の時か。そこに落ちているのは10年バズーカ・  
.....成る程。

「把握した」

「えっと、エリオくんだよな？」

「ああ、10年後、と付くがな」

昔のキャロにルーか。懐かしい。アルバムを見ているようだ。

「さあ、時間がない。さっさとやろうか。ストラダ、セットアップ」

《セットアップ》

手始めに、ガリユーの相手をするか。

「俺は強いぞ」

「.....」

無言で構えるガリユー。まあガリユーの言葉を理解出来るのなんてルーくらいだが.....

《ソニックムーブ》

縮地を組み合わせたソニックムーブでガリユールの背後に回る。

「その心臓、貰い受ける」

《ゲイボルグ》

そして一撃で勝負を決める。ガリユールは地に倒れ伏した。

「ガリユール!？」

「大丈夫だ。半日もすれば起きる」

「凄いね、エリオくん」

「俺は10年後の未来からやってきたんだ。この程度出来ないと未来じゃ生きていけないよ」

「どんな未来ですか」

ルーのツッコミもこの時代じゃもともたな。だが俺の時代は凄まじい。うん、この時代で生活したい。

「いきなり泣いてどうしたの!？」

「いやね、俺の時代の事を考えるとつい」

兄さんの友人にいろいろな世界に飛ばされたな。キャロは金銀の火竜を従えるし、ティアナさんはT・ウィルスが撒き散らかされた世界を制覇するし、スバルさんは背中に鬼の文字が浮かぶ格闘家に勝利するし、……みんな凄いな。俺は何したっけ?ああそう

だ。使い魔をやったんだ。

「少し話でもしようか。デカブツの喧嘩も済んだみたいだし」

「………忘れてた」

哀れだな、ヴォルテール、白天王。

「そろそろ10分だな。楽しかった。じゃあな」

そう言って俺は元の時代に戻った。

キャロside

未来のエリオくんが帰った後、この時代のエリオくんが戻ってきた。気絶してたけど………

「ルーちゃん、投降してくれる？」

「うん、そのかわり」

「二人で育てよう!」

私とルーちゃんでエリオくんをさっきみたいな立派な男に育てよう  
と誓いました。

S t S第十二話（後書き）

今回、まーくとアリシヤの部屋は休止とします。何故かって？この前アンケートしましたよね。その・・・意見を受けるのは嬉しいんですが・・・選べないんです！！

ここまでの意見で既に22個。これは自分で選んでよいのか。それともこれも皆さんの意見で選んだ方がいいのか。

とりあえず出すなら男キャラ、女キャラ、それぞれ二人が限界です。皆さんの貴重なご意見お待ちしております。

ちなみに現在の意見は

遠野志貴 アルクエイド・ブリュンスタッド シエル ネコアルク  
衛宮士郎 遠坂凜 アーチャー ランサー カレン・オルテンシ  
ア 間桐慎二 カナン 大沢マリア アーエンネルベ一行 死徒二  
十七祖 ロイド・アーヴィング クラトス・アウリオン アスベル・  
ラント クレス・アルベイン ミント・アドネード 藤林すず パ  
チユリー・ノーレッジ 射命丸文

以上です。

StS第十三話(前書き)

スバル、ギンガ、ティアナの戦いです。

## StS第十三話

スバルside

外には大量のガジェットがいた。六課の攻撃や、すずかさんのロボットの攻撃で数は減ってるけど、まだまだいっぱいいる。

「大変だね」

「「あんたも働け!!」」

なんだよ、ティアもギン姉も。二人ほどじゃないけど頑張ってるじゃん。

「見つけたぞ!!」

あつ、この人、確かこの前ディバインバスターで吹き飛ばした人だ。

「ここで倒してやる!タイプゼロ・セカンド」

何そのよくわからない名前は。まあいつか。

「ティア、ギン姉。あの人は私狙いみたいだから先に行つて!!」

.....あれ?返事は?

「あの二人ならもう行つちまったぞ」

「ええー!?!」

酷いよ二人共。

「まあこれで一騎打ちだな」

そうあの人、確かノーヴェが言って、箱のようなものを取り出した。

「デスマッチの始まりだ!!」

ノーヴェの指、いや、指輪から炎が出て、箱に指輪を突っ込んだ。すると箱に輝が入り光が漏れる。そして……

「何、ここ」

ドームのような空間に閉じ込められた。ドームの壁には炎の灯った針が無数に生えている。

「裏球針態。完全に閉じ込められた空間だ。針の炎で酸素がどんどん減るぞ」

へえ、そんな空間なんだ。確かにデスマッチだね。でもあの力を使えばきつと負けない。絶対に勝つて要さんに頭撫でてもらうんだ!!

「行くよ! 相棒!!」

《やりましようー!》

ギンガ side

スバルを置いてきちゃったけど大丈夫かしら？まあ機動六課でしごかれたし内心そこまで心配はしてないのだけ。

「ギンガさん、敵です」

そこには三人の戦闘機人がいた。一人は前回私と戦ったボードに乗った戦闘機人、ウエンデイ。あとの二人は要さんと戦った戦闘機人、オットーとデイードだったかしら。

「シエルブリットパッチ起動」

《シエルブリット》

最近こればかり使ってる気もするけど、使えるんだからしようがないよね。

「双子っぽいのは私がやります。ギンガさんはボードをお願いします」

「あら、二人も相手できるの？」

「舐めないでください」

なら任せようかしら。さつさと済ませてティアナの手伝いをしないとね。

そう思ったとき、地面から出た手に足を掴まれた。……だからどうしたの？

「衝撃のファーストブリット!!」

前回にもやったように地面に拳を叩きつける。すると衝撃で体が跳ね上がり、足をつかんでいた手ごと上空に跳ぶ。私の足を掴んでいたのはヴィヴィオちゃんをさらった戦闘機人だった。子供を攫うような人にはお仕置きをしないとね。

「はああああ!!」

「ぎゃああああ!!」

ガスッ ドゴオ ビシィ プニョ ズドン ボコッ バシン ミシイ ピチューン

「よつと」

「……………」

上空でやり過ぎたのか、着陸した時には虫の息だった。

「セ、セイン〜!?!」

さあ残りは三人よ。

「くっ、セインの仇ッス!! エリアルショット!!」

ボードから魔力弾が放たれるが、大したスピードでもないの簡単  
に避けられる。しかし、魔力弾が地面に触れた瞬間爆発を起こして  
砂煙が舞った。

「そこっ！！エリアルバスター！！」

この魔力量、砲撃ね。例え見えなくても、察知は出来る。

「甘い！撃滅のセカンドブリット！！」

砲撃と拳がぶつかった時、砲撃が爆発した。相手の攻撃は爆発する  
と考えた方がいいわね。まあこの爆発のおかげで砂煙が晴れたから  
敵を捕捉出来たけど。

「抹殺の……ラストブリットオオオ！！」

「ぐうっ！？」

ボードごときでこれを防げると思わないことね。とはいえ、なか  
か丈夫ね、輝が入ってるけど。

「壊れなさい！！」

バキーン

そんな音と共にボードは真っ二つに割れ、拳が相手にめり込んだ。

「ぐぶう！？」

終わった。ゼフィリスさんに比べたら柔ね。さて、ティアナはどうなってるかしら。

ティアナside

ギンガさん、容赦ないわね。空中フルボッコって。まあいいわ。

「私達もやりましょうか」

「……………」

二人共無言って、そんなに話したくないのかしら。

「IS、レイストーム」

「おっと」

危ないわね。魔力レーザーかしら？

「IS、ツインブレイズ」

「クロスミラージュ」

《了解、ダガーモード》

接近戦は得意じゃないっての。要さんにいくらしごかれても接近戦のスペシャリストには敵わないのよ。

「魔神剣！魔神剣・双牙！！魔神連牙斬！！！」

計6発の地を走る斬撃。狙うは後方の短髪。

「遅い」

んな事は使う私が一番わかってるっての。

「ブラツククロウ!!」

「効かない」

長髪にダガーを叩き込むけど防がれる。しかもその瞬間、またレーザーが飛んできた。

「ああ、もう!!」

避けるのは簡単だけど、ダメージを与えるのがね。アレが使えればすぐなんだけど……

「壊れなさい!!」

「ぐふう!?!」

「?!?!」

ギンガさんが勝った。そのおかげで、相手二人が気を取られた。チャンスは今!!

「ハアツ!!」

「！？甘い！！」

ダガーで切り掛かったが防がれ、腕を掴まれた。

「IS、レイストーム」

「IS、ツインブレイズ」

そしてレーザーと斬撃が私の体を貫いた。でも残念それは私じゃない。

「！？消えた！？」

「こっちよ」

「レイストーム！！」

違う場所に現れた私にレーザーが飛んでいく。でもそれもハズレ。

「こっちこっち」

「何処見てるの？」

「ジュジュ」

さらに無数の私が現れる。

「有り得ない！！全てに質量がある！？」

「なら、幻術じゃないの！？」

混乱してるわね。じゃあこっちも終わりにしましょうか。

「ルインド・ベイン・ウィツシュ!!!」

「わあああ!?!」

空から無数の火球のようなものが落ちてきて二人を倒した。

「凄いわね、ティアナ。あの分身は何？」

「質量のある残像ですよ」

便利よね。使う時に隙が出来るけど、発動したらこっちのもんだし。

「そつえばスバルは大丈夫かしら？」

「さあ?」

負けたらお仕置きされそうだし、大丈夫じゃないかしら？

スバル side

「はあ、はあ」

「ぜえ、ぜえ」

あれから少ししか経ってないけど、酸素の減りが早い。いくら高地トレーニングをした事があるといえ、これはキツイ。それに吹き飛ばされると針が刺さるし。実際、私も向こうも何度か針が掠った。

「うおおおー!!」

「ふっ!!」

とりあえず攻撃を受け流す。後の先を狙うつもりだけど、トンファ一搦きが意外と凄い。

「いい加減やられる!!」

「嫌だ!!」

さーて、どうしようかな。……力を使って終わらせよう。

「オーバードライブ」

その瞬間、体中から力が溢れ出した。

ノーヴエ side

なんだ!?いきなり魔力が跳ね上がって、眼の色も金に変わった。これって暴走モードじゃねえか!?

「終わりにしようか。これ3分が限界だからさ」

「暴走を……制御出来るのか」

「要さんがね、力に振り回されるなって。何十回も制御を手伝ってくれたんだ」

暴走は制御出来ないから暴走なんだよ。畜生、かなりマズイ。

「行くよ」

「速っ!?!」

あいつからすればただ走っただけだろうが、凄まじい速さだ。とにかく攻撃を防がないと!

「シッ!!!」

「ぐうっ!?!」

防御の上から衝撃がきた。浸透勁か。しかも今の一撃でトンファーがイカレちまった。

「ほらっ!!!」

「うわっ!?!」

足払いを受けてこけそうになる。そう、こけてはいない。何故なら後ろから抱えられているからだ。

「せー、の！！！」

「ぐえっ！？」

ジャーマン……スープレックス、かよ。

スバルside

ノーヴェを倒したらドームが消えた。よかった。気絶で消えてくれて。オーバードライブを停止させよ。

「あいたたた」

これ使った後、体中が凄く痛むんだよね。あー、痛い。

「みんな大丈夫かな？」

きつと大丈夫だよな。早く終わらせて、みんなでご飯食べたいな。

S t S 第十三話（後書き）

<まーくとアリシヤの部屋>

ま「こんにちは」

ア「忘れてない？」

シヤ「流石にそれはないんじゃない？」

ま「今回はあの三人の戦いでしたね」

ア「セインが残念ね」

シヤ「ボッコボコだったわね」

ま「さあアンケートの中間発表です」

ア「まず男キャラ部門」

1票・・・アーチャー   ランサー   クレス  
3票・・・クラトス   衛宮士郎   遠野志貴

シヤ「次は女キャラ部門」

1票・・・カレン   遠坂凜   シエル   藤林アルトルージュすず  
2票・・・パチュリー   射命丸文   二十七祖  
4票・・・アルクエイド

ま「ちなみに二十七祖はアルトルージュをメインに他のキャラをちよこちよこ出すそうです」

ア「例えば？」

ま「数学のワラキア先生とか、生物のネロ先生とか」

シャ「複数回票があつた時は、作者が独断と偏見で決めるわよ」

ま「では次回も楽しみにして下さい」

ア「アンケートはまだまだ募集しています。投稿してない人はしてね」

S t S 第十四話（前書き）

あれ？何がしたかったんだろう？誰か教えて。

## StS第十四話

ユーノside

さつきいきなりドゥーエに呼び出された。こんな忙しい時にどうしたんだろう？

「おい」

「あっ、ユーノ……………」

普段と違って表情が少し暗い。何か悪い事があったのかもしれない。

「どうしたの？」

「……………貴方に、伝えないといけない事があるの」

伝えないといけない事？それは今じゃないといけないのだろうか？いや、ドゥーエが言うんだ。今伝えないと駄目なんだろう。

「これを見て」

そう言うと、ドゥーエの姿が変わった。髪は少しくすんだ金髪になり、他にもいろいろと変わった。

「驚いた？私ね、戦闘機人なの」

戦闘機人、今事件を起こしているスカリエッティが所有する生体兵器と言っているような存在。ドゥーエが、その一人だったとは。

「なんでそれを今？」

「貴方には知っていて欲しかった。私が愛した貴方には」

なんだよそれ。そんな言い方じゃあ今から死ぬみたいじゃないか。

「もう別れましょう」

「なんで!？」

「私は戦闘機人よ!貴方とは一緒にいられない!!それに、貴方が付き合っていたドゥーエとは姿が違うのよ!？」

「だからなんだ!!僕はドゥーエを愛している!!」

戦闘機人でもいい。姿が違ってもいい。心が変わらないのなら、僕はドゥーエを愛し続ける。

「ユーノ……………」

僕は懐から小さな箱を取り出した。いつ渡すか迷っていたもの。でも今決心がついた。

「それって」

「僕と、結婚して下さい」

箱を開いて、中の指輪を見せて言った。ドゥーエは少し呆然としてからしっかり頷いて言ってくれた。

「喜んで」

「……よかった。物凄い心配だったけど成功してよかった。」

「あつ、今ドクターに連絡繋ぐわね」

ドクター？ああ、スカリエッティの事か。あの演説の時は変わった人だと思っただけど、実際どうなんだろう。

『なにかね、ドゥーエ』

「ユーノと結婚する事になりました」

『ほう！それはおめでとう！ユーノくん。娘を頼むよ』

「あつ、はい」

話してみると意外と普通な人だな。

『そうそうドゥーエ、君に伝える事があった』

「なんです？」

『今回の任務に参加しないでいいよ』

どうしてだろう？ドゥーエも戦闘機人なら貴重な戦力のはず。

『妊婦に戦えなんて言えないよ』

「……ええっ!?!」

に、妊婦って!?!つまり、子供がいるって事!?!

「ちょっと待って下さいドクター!?!お腹に仕込まれたドクターのクローンはどうなったんです!?!」

『あんなもの1年前に外したよ。やるなら私自身の手でやり、見るなら眼で見た方がよっぽど楽しい』

「えっと、スカリエッティさん。ドウエは妊娠何ヶ月なんです?」

『私はお父さんでいいよ?ドウエは今月で妊娠4ヶ月になるかな』  
流石にお父さんなんて呼べやしないけど、妊娠4ヶ月か。

『ドウエ、君は多分捕まらないよ。何か犯罪をしたわけじゃないからね』

「スパイって犯罪じゃないかしら?」

『ちっちゃい事さ』

ちっちゃくないと思うけどな。まあ僕もドウエには捕まってほしくない。

『では私はまだやる事があるからこれで』

そう言ってスカリエッティが映っていたモニターは消えた。

「ユーノ」

「何？」

「拳式、いつにしよつか？」

「この事件が終わったらすぐにでも」

シグナムside

確か騎士ゼストはレジアス中将与同期か何かだったな。ならば中將の所に行ってみるか。私は中將の部屋をノックした。

「入れ」

「失礼します」

私が入ると中將が一人、椅子に座っていた。

「闇の書の騎士がなんの用だ？」

「夜天、です。用は騎士ゼストについてです」

「ゼスト、か。残念だな。あいつが犯罪を犯すなど」

ふむ、やはり知り合いか。

その時、扉が開いた。そこには騎士ゼストが立っていた。

「ゼスト!?!」

「久しいな、レジアス。烈火の将よ、後で相手をする。今は席を空けてくれないか？」

「……………いいだろう」

あの眼は敵から逃げるような眼ではない。それに部屋の外にいれば気配くらいわかるからな。

レジアス side

まさかゼストが直接やってくるとはな。

「犯罪に手を出すとは、堕ちたものだな」

「それはお前もだろう」

ふっ、確かにな。この地位に至るまで随分いろいろなものに手を出したな。

「ゼスト、何故スカリエッティに協力する」

「ルーテシアのため、そしてお前に聞きたい事があるからだ」

ルーテシア。メガーヌ・アルピーノの娘だったか。それに俺に聞きたい事、か。まあ先にアルピーノの娘の話題からで構わんか。

「ルーテシアは既に保護されているぞ」

「ああ、知っている。だが、俺はやらなければならない」

ふん、堅物め。まあ人の事をどうこう言える人間ではないが。

「保護されているのは、あの忌ま忌ましい機動六課だ」

「あそこには元犯罪者がいたな。成る程、お前が忌ま忌ましいと言うのも納得だ」

「ああ、だが信頼出来るバケモノがいる」

「一条要か」

あやつのは力はバケモノだ。ロストロギア以上だろう。だが人としてあやつ程信頼は出来る奴は少ない。

「で、聞きたい事とは？」

「俺の部隊が全滅させられたあの事件。あれはお前が手を出したのではないか？」

随分と面白い事を言ってくれるな、ゼストは。

「ふざけるな！！例えどんなに手を汚そうとも、仲間を犠牲にするような事はせん！！」

「そうか、安心した。では俺は烈火の将と戦ってくるとしよう」

「せいぜいやられてこい」

「ふっ」

ゼストは最後に鼻で笑い部屋を出ていった。何と無くだがわかる。おそらく今回の戦いがあやつにとって最後の戦いになるだろう。それをあやつもわかっていたのかもしれない。

シグナムside

部屋の外に出て数分。騎士ゼストが部屋から出てきた。

「やるか、烈火の将」

「ええ」

実力の程、見せて貰いましょうか。

私達は外でお互いデバイスを構え、向かい合っている。  
あちらにいる小さいのはユニゾンデバイスか。

「アギト、ユニゾンだ」

「了解だ。旦那」

「「ユニゾン・イン!!!」」

髪や眼の色が変わり、魔力も増えるが、そこまでではないな。ユニ  
ゾン率が低いのか。

「いくぞ」

「こちらこそ」

「「はあああああ!!!」」

剣と槍がぶつかり火花を散らす。動きがなかなか速いが、私はそれ  
以上に速いぞ。

「シッ!!!」

「ふんっ!!!」

何度か斬撃を放つが全て防がれる。技量とユニゾンにより増加した  
魔力の力か。ならばそんなものでは防ぐ事の敵わない一撃をお見舞  
いしてやるぞ。

「レヴァンティン!!」

《ボーゲンフォーム》

レヴァンティンを弓にし、矢をつがえる。ただしその矢は普段使うものではなく、以前一条がゼフィリスから貰ったものだ。

「喰らえ!! 偽・螺旋劍!!」  
カラドホルグ

力を解き放たれた剣と言う名の矢は、空間をねじ切りながら飛んだ。そして騎士ゼストがいる空間を貫いた。

「……外れたか」

僅かに狙いがそれたのか、直撃はしていなかった。ただ、全身に無数の傷を負わせる事が出来た。

「恐ろしい矢だ。避けたというのにこの様とは。狙いが正確であったなら避けても当たっていただろう」

こちらとしては傷を負わせただけで十分。僅かとはいえ、確実に動きを鈍らせる事が可能だろう。

「レヴァンティン! カートリッジロード!!」

《ロードカートリッジ》

「紫電一閃!!」

私が最も得意とする一撃。これで決めれるとは思ってはいないが、

ある程度のダメージは与えられる。そう思っていた。

「フルドライブ!!」

だが突然騎士ゼストの能力が跳ね上がり、紫電一閃が弾かれた。

「ぬおおおお!!」

「ぐうう!!?」

更に連撃を叩き込まれる。これは、マズイな。

「レヴァンティン!!アレをやるぞ!!」

《しかし今の主には無茶です!!》

「限界は越えるものだ」

ここでやらないでどうするといふのだ。必ず決めてみせる!!

「ほう、まだ策があるか」

「策?いや、ただの技だ。いくぞ!!」

《ロードカートリッジ!!》

全てのカートリッジをロードし、レヴァンティンが炎に包まれる。そして剣を構え、必滅の型をとる。

「火剣」

「・・・・・・・・」

避ける事も防ぐ事も敵わぬこの一撃、受けてみよ!!

「燕返し!!!!」

「又ンツ!!!!」

ゼストside

烈火の将が剣を構えた瞬間、まるで全てが止まったように感じた。これは危険だ。

『旦那!マズイ!あれはマズイよ!!!』

そのような事、対峙している自分が一番わかっている。俺は槍を構える。

「火剣」

「・・・・・・・・」

技でも何もなただの突き。だが、負けん!!

「燕返し!!!!」

「又ンツ!!!!」

烈火の将より放たれた一撃。いや、三撃が俺の槍より更には速く、

そして同時に俺の体を切り裂いた。

シグナムside

「はあはあ」

何とか放てたが、反動が大きすぎるな。少し休まなければならないな。

「烈火の将よ」

「なんだ？」

「アギトを頼みたい」

「旦那！？」

融合騎をか。あの一撃を喰らったうえに、かなり無理をしていたのだろう。おそらく騎士ゼストの体はもう持たないであろうな。ならば最後の頼みくらい聞こう。

「了解した」

「感謝する」

そう言つて騎士ゼストは息を引き取った。

「旦那……………」

「ついてくるか？」

「旦那の最後の願いだからな。別にお前を認めたくはないからな！！」

ふっ、愉快的奴だ。ラインとの相性はさほど良くなさそうだがな。

「名を聞こうか」

「烈火の剣精、アギトだ」

「烈火の将、シグナム。よろしく頼むぞ、アギト」

「ふん！！」

さて、皆はどうなったかな。

オマケ

すずかの戦い

私は六華に乗り、ガジェットを殲滅している。

「アハハ！！圧倒的じゃない！！」

誰か私を止める敵はいないの！？

『すずかさん！大型ガジェットが来ます！！』

へえ、ちゃんと用意してるじゃない。いいわ、遊んであげる。

そして目の前に現れたのは人型で、色は赤く、角が生えたガジェットだった。

『かなり速いので気をつけて！』

「大丈夫！！」

そう簡単にやられはしない。ただ速いか。どれくらいかしら？

私は魔導銃を撃ち込んでみた。すると凄まじい速さで避け、こっちに突っ込んできた。

「このっ！！」

魔導剣を使い、切り裂こうとしたが、これまた避けられ、反撃のミサイルを撃たれた。

「シールド！！」

ミサイルを防ぐが、これはかなりマズイわね。ここまで速いとは。

「仕方ない。六華！！高速機動モード！！」

私がそう言つと、六華の装甲が落ち軽量化される。そして武器も日本の魔導短刀に変更される。

「はあああああー!!」

斬る斬る斬る斬る!!とにかく斬る!!相手も斧で防ぐけど、機動性が同じ今なら、手数が多いこっちが勝つ!!

「そこ!!」

足の関節を斬る。一瞬動きが止まった時、足払いをし、こけさせる。

「最後!!」

巨大ガジェットに馬乗りになり、短刀をコアに突き刺した。

「………勝った」

なかなかいい戦いだつたわよ。

## S t S 第十四話（後書き）

<まーくとアリシヤの部屋>

ま「ユーノさん、結婚おめでとう」

ア「妬ましい妬ましい」

シヤ「ごっすんごっすん五寸釘」

ま「えー、皆さん予想外だと思います。僕もです」

ア「何よアレ！！ふざけてるの!?!」

シヤ「私にも愛を!?!」

ま「あの二人は無視しましょう。さて、今回出たものの紹介をしましょう。」

まず、シグナムさんの『偽・螺旋剣』カラドボルグ。これは本編でも言っていた通り、お父さんから貰ったものです。

次に『火剣・燕返し』。これは秘剣・燕返しに炎を追加しただけの技です。

最後にすずかさんの魔導シリーズは、ぶっちゃけ非殺傷ビーム兵器です」

ア「そうだ！暗殺しましょう!?!」

シヤ「ナイスアイデアよ!?!」

ま「新しくアンケートが来たため、ランキングに変動が出ました。アーチャーが2票に、ランサーが2票に、凜が2票に、射命丸文が3票になり、新しく琥珀とさっちゃんが追加されました」

ア・シャ「ユーノ、コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス」

ま「最後に一言、ヴィヴィオはチートにしていいいかな？」

SetS第十五話(前書き)

やうじやゆりかいじせ。

## StS第十五話

要side

俺は今、なのは、フェイト、ヴィータ、久遠というメンバーでゆりかごへ飛んでいる。まあ俺は跳んでだけど。

「そつえばはやてはどうしたっけ？」

「はやてちゃんならあそこだよ」

少し離れた空を見ると、空中で体操座りしてのの字を書いているはやてがいた。

「私が華麗にガジェットを倒す予定やったのに。なんや、すずかちやんもデイオネも」

何を言っているかはこの距離じゃ聞こえなかったが、哀愁漂う今はそつとして置こう。

「ねえ要、何処から入るの？」

「うーむ」

見た感じ開いてる所はなさそうだし、魔法で攻撃しても無意味そうだし。俺が殴って穴を開けるか。

「おい！あそこ開いてるぞ！」

ヴィータが言った方向を見る。成る程、確かに開いてるな。

「畏……かな」

「違うな。純粹に招き入れている」

スカリエッティの事だ。自分の楽しみのためにはやるだろう。例えそれが敗北に繋がろうとも。いや、もう敗北を確信しているだろうな。さつきルーテシアと戦闘機人5人の保護、そしてゼストの死が報告されたからな。

「入るぞ」

「」「」「了解」「」

さて、どうなるかな？

ふむ、中は思ったより普通だな。まあそれは置いて……

「最初はお前か。チンク」

「ああ、久しいな。一条」

「俺を「指名」かな？」

「ああ、是非そうしてもらいたいな」

ならその提案に乗ってやるわ。

「お前ら、先に……」

なんで、なんでそんな不満そうな顔してるんだ？殺気すら感じるぞ。

「要、そいつとはどういう関係？」

「知り合いだ。戦場じゃ意味がない」

「………なら信じるよ」

女は嫉妬深いつてのを忘れてたな。特にこいつらは。

「愛されてるな」

「うっせ」

チンクめ。同じ苦勞人ならそこんどこ配慮しろよ。

チンクside

こうして一条と直接対峙するのは初めてだな。しかしさっきの面白かったな。たまには他人の苦勞を見るのも悪くない。

「さあ、やるか」

「意外とせつかちなのだな」

「こちらはヴィヴィオが捕まってる………捕まってる?」

「そこに疑問を持つな」

まあ私から見てもあれは捕まってるではなく、託児所に預けてある感じだが。

「とにかく早くしないとなのは達にとやされる」

「お前も大変だな」

「お互い様だろ」

「ハハハ」

全く、敵で無ければどれほどよかった事か。だが、今は別だ。

「やるぞ、一条」

「ああ」

私の技がどれほど通用するか試させてもらっぞ。

要side

確かデータではチンクはナイフを使った戦いをするんだったな。それにナイフを爆発させるんだっけ？厄介だよな。

「喰らえ！..!」

「ほっ」

ナイフのスピード、正確性。どちらも一級品だな。

「だからどうした」

そんなもので止められる程、俺は優しくないぞ。

「ソードバレル・フルオープン!!」

次は物量勝負か。そう簡単に当たるつもりはないが、爆発に気をつけないとな。

「ブローケン・ファンタズム!!」

「おっと、ベールシールド」

ベールシールドで体を包み爆風から身を守る。ふむ、自重しなくなつたな。

「やるじゃないか」

「やはり倒せんか」

「この程度で倒せると思ったか？」

「まさか」

なら何か策か、強力な技でも用意してあるのかね。

「これならどうだ!!ソウルスカルプチュア!!」

「うおっ!?!」

チンクがナイフで斬撃を放ってきた。手数も範囲も桁違いだが。

「隙有り!!!殺人ドール!!!」

「危なっ！！」

無数のナイフが飛んできた。それを避けると二撃、三撃と飛んできた。

「掛かったな」

「!?!」

俺の周りには無数のナイフ。やられた！軽く見積もっても100、これだけのナイフが爆発したらシールドでは防ぎきれんぞ！！

「ブローケン・ファンタズム」

そしてナイフは爆発した。

チンク s i d e

流石の一条であってもこれだけの爆発は防げんだろう。そこそこ距離を離していたというのに、私のシェルコートが使い物にならなくなってしまった。それにしても生きているのか？自分でやっておいてなんだが。

「確認するか」

「その必要はない」

「!?!」

私は地面に押し倒された。あの爆発で大丈夫だったのか!?!

「どう防いだ」

「この腕輪のおかげでね」

腕輪？そんな物の情報はなかったのに。

「こいつはマジックキラー。魔力を吸収、反射し、そして吸収した魔力で対魔力結界を張る事が出来る」  
アンチ・マジック・フィールド

「爆発は魔法ではないはずだ」

「先に魔力を吸収させといた」

成る程な。あちらの方が用意周到だったわけか。残念だ。勝てたと思っただのに。

「んじゃ、縛らせてもらっせ」

次は勝ちたいな。

久遠 side

私とヴィータは動力の破壊に向かっている。AMFが発動してるから少し魔法が使いにくいけど、これくらい想定して普段訓練してる。

「よっ！」

「やっ！」

途中沢山いるガジェットを壊しながら突き進む。すると一人、ピンの髪の毛の戦闘機人の人が立っていた。確かセツテだっけ？

「先手必勝！！雷爪！！！」

私が得意とする技。しかし雷爪の雷が無効化された。

「残念ですが、対電撃コートの前に雷など無意味です」

「ふーん」

雷が効かないんだ。でも武器は雷だけじゃない。私はただ魔力を纏った爪を振るった。すると目の前の戦闘機人の頬に赤い爪痕が残った。

「!?!」

「私の爪は鋭いよ」

「そのようですね」

二人で倒してもいいけど、足止めはな。

「ヴィータ、先に行つて」

「勝てよ」

「任せて！」

ヴィータが走つていった。よし、絶対に負けないよ。お互いが構えた時、後ろから声が聞こえた。

「あら、私も混ぜて下さらない？」

「誰です！？」

あれ？この声って……

「まーちゃん！！」

「お久しぶりですわね」

なんでこんな所にいるんだろう？でもこれで楽になつたね。

「2対1ですが、卑怯とは言いませんよね？」

「ええ、二人共倒してみせます」

セツテside

……失敗しましたね。一人相手でも勝てるかどうかかわからないのに二人相手にするのは……

「スローターアームズ!!」

「無駄です」

私のスローターアームズが植物の蔓によって叩き落とされる。植物を操る力ですか。

「姐己!!」

《羽衣ドリル!!》

「くっ!?!」

羽衣でここまで強力な技を出せますか。確かこの羽衣にはオートガードの機能があったはず。彼女にまともにダメージを与えるのは難しいですね。

「ならば!」

もう片方の女性を倒す! デバイスも何も持っていない彼女なら一撃で沈める事も出来るはず。

「ハアツ!!」

スローターアームズを投げずに切り掛かる。植物で防げるものなら防いでみなさい!

ザンツ

「あら危ない」

なっ!?! 体を切り裂いたというのに、効いていない!?!  
よく見ると、傷口が緑の何かでどンドン塞がるのが見えた。

「人では、ない?」

「それを言ったら、貴女も、久遠も、すずかさんも、そして要さんもですわ」

つまりここには人外しかいないという事ですね。

「それより後ろを見なさい」

「何?」

後ろを見ると、羽衣を着た女性が、周りに蒼い炎を従えていた。

「雷が効かないならこつちだよ。狐火・業火陣」

蒼い炎が狐の形をして私に襲い掛かってきた。排除しなければ。

「スローターアームズ!!」

スローターアームズを投げ付けるも、炎を掻き消す事なくすり抜けた。

「!?!」

「狐火は呪い。武器なんか効かないよ」

呪い？そんな非科学的な。そんな間に炎の狐は私の周りを取り囲んだ。

「ボーン」

「アアアアア！！」

熱い熱い熱い熱い熱い！！！！

炎の狐が爆発を起こし、私は炎に包まれた。

まーちゃんside

流星は妖狐。妖術は天下一品ですわね。

「終わったね」

「さっき呪いと言ってましたが、大丈夫ですか？」

「うん。呪いじゃないもん」

呪いじゃない？ならばさっきのはハッターリ？

「狐火はただ熱さを与える幻覚。呪いはもつと強烈だよ」

「……………そうですの」

笑って言えるこの子が恐ろしいですわ。

ヴァイタ side

久遠の奴大丈夫かな？久遠が傷付くと要が悲しむし。

「まあ今はガジェット退治だ」

にしても数が多いな。一気に蹴散らすか。

「いくぞ！グラーファイゼン！！」

《了解です》

よし、あれをやるか。

「ゴルディオン……クラッシュャー！！」

巨大ハンマーでガジェットの群れを吹き飛ばす。やっぱりこれいいな。

ただ私は気付いていなかった。後ろから姿を消したガジェットが近付いているのに……

ガタッ

「後ろ!？」

「マズイ!! やられる!!」

その時、壁が突然、ガジェットごと吹き飛んだ。穴の開いた壁の向こうにはよく見馴れた姿があった。

「はやて! シグナム! ザフィーラ!」

「怪我ないか?」

「手伝いに来たぞ」

「.....」

みんな.....やっぱり頼りになるな。

「ありがとう」

「外におつてもガジェット退治の役に立てんからな」

「ユニゾンの調子確かめたかったからな」

「六課を守る必要性を感じんかったからな」

みんな照れ屋だな。素直にあたしのために来たって言えばいいのに。

(全員本音です)

「さあ、夜天の騎士達よ。私に着いてきい!!」

「了解!!」

ちっちと終わらせてやるぜ!!

「あつれー？私出番を逃したような」

「シャマル先生！怪我人です！」

「はいはい」

S t S 第十五話（後書き）

<まーくとアリシヤの部屋>

ま「皆さんこんにちは」

ア「今日も始まったわよ」

シヤ「出番が……」

ま「本編を引きずらないで下さい。今回は僕だってまーちゃんが出たんですから」

ア「そういえばまさかのまーちゃんだったわね」

ま「作者の思い付きだそうです」

シヤ「出番……」

ア「いい加減になさい」

ま「さあそろそろ終盤」

ア「いろいろ決まってきたわね」

ま「ヴィヴィオちゃんのチート化に次回作の設定もね」

シヤ「出番……」

ま・ア「いい加減にしなさい!」

StS第十六話(前書き)

なのはが魔王。

フェイトはまとも。

## StS第十六話

なのはside

えっと、ヴィヴィオは何処にいるんだろう？乱暴な事はされてないはずだけど……………

「邪魔!!」

ガジェットが多いな。やっぱり敵の本拠地って感じだよね。アクセスルシューターでさっきから潰してるけど、邪魔なものは邪魔。

「レイジングハート、何かわかった？」

《いえ、敵が多いという事しか》

だよな。AMFが強くて上手く魔法も使えないし、厄介だな。っと広い部屋に出たね。ガジェットが一体もないけど、何の部屋だろう？

《マスター、人がいます》

あっ、本当だ。あの大砲持ってるのって確か戦闘機人のディエチって人だっけ？

「高町なのは。此処で私と戦ってもらおう」

「……………いいよ」

《マスター？やるのですか？》

私だって譲れないんだよ。同じ砲撃少女なら私の方が上なんだよ！！

《遂に魔法少女から魔砲少女、そして砲撃少女ですか。ただ少女はそろそろキツイかと》

「そうだね。少女は私に譲った方がいい」

「二人共、五月蠅いの」

もうすぐ20歳だよ！自分でも少女は卒業しないとなって思う事もよくあるよ！！

「さっさとやるの！！」

「はいはい」

絶対に倒してやるんだから！！

デイエチ side

相手は管理局のエース・オブ・エース。油断は出来ない。だけどこ  
つちには武器があるんだ。今まではイノーマスカノンしかなくて1  
対1は苦手だった。でもドクターが造ってくれた装備のおかげでそ  
れも可能になった。

「私の新しい力、見せてあげる」

「それはこっちのセリフ」

「いけ！ファンネル！！ってええっ！？」

私がビットを出すと同様に、そのビット同士がビームを出して相殺した。

「まだまだ！」

「こっちも！」

お互い再びビットを出す、また相殺する。くっ、こんな事になるなんて。これじゃあ決着が着かない。

「仕方ない。イノームスカノン、モード・パニッシャー」

するとイノームスカノンが巨大な十字架の形になった。

「喰らえ！！」

十字架の長い方から無数の魔力弾は発射された。秒間100発、並以上の防御ですら破壊する。

「甘いの！デイスティオンフィールド！！」

あれは機動六課の防御フィールド！？個人であれを使うか。

「デイベインバスター・ガトリング！！」

「なっ！？」

砲撃魔法の連射！？なんて規格外。でもこちらにも負けていない。

「ボソソジャンプ」

1回限りの瞬間移動を使い、高町なのは後ろに回る。そしてパニッシャーの短い方を向ける。

「受け取れ」

そしてパニッシャーからミサイルが発射される。

「！！？」

気が付いたようだが、もう遅い。ミサイルが直撃し巨大な爆発を起こす。そして部屋の殆どが炎に包まれた。これなら倒しただろう。だがそこには七枚の桜色の花弁を盾として立っている高町なのはがいた。

「ふー、ロー・アイアス間に合ってよかった」

「今を防ぐか」

マズイな。さっきのは一発限りなのに。

「次は私の番だよ！！」

なのは side

さて、どうせやるなら予想外の攻撃をしないとね。

「やあっ！！」

「えっ！？」

私は一気に近付いて棒術で戦いを挑んだ。まさか私が近接戦をしてくるとは思わなかったはず。

「やああああ！！！」

「はああああ！！！」

向こうも十字架を振り回して対抗してくる。あんな重そうなのに凄  
い早さで振り回している。

「吹き飛べ！！！」

「うぐっ！？」

十字架に殴られて飛ばされた。けどこれだけの距離ならあれが使  
える。

「ファンネル！！！」

「何！？」

私が使ったのはさっきと変わらないファンネル。ただ数が多い。7  
0はあるかな。

「有り得ない！！これだけの数、脳が焼き切れる！！！」

「うちの一族の技にね、神速っていうのがあるの。脳のリミッターを外すね」

私じゃ神速を使ってもお兄ちゃんや要くんのような動きは出来ない。ただ脳のリミッターを外すという事は、魔導師として処理能力が上がるという事。

「じゃあね」

「うああああ！！」

70ものファンネルが一斉にビームを出した。でもこれで終わらせるつもりはない。

「スターライト」

《ブレイカー》

確実に倒す為に放ったスターライト・ブレイカーがファンネルごと相手を貫いた。あっ、壁まで貫通しちゃった。まあいっか。

その頃とある部屋

「チンクちゃんもセツテちゃんもやられちゃったわね。

あら、ディエチちゃんもマズイわね。って更にスターライト・ブレ  
イカーまで撃つ?!?どんなドSよ!!

あら?この方向って、この部屋ああああ.....!!!!」

クアットロ、高町なのはがディエチに放った悪魔の追撃に巻き込ま  
れる。

フエイトside

こっちの方にスカリエツティはいるかな?というかさっきから壁に

《こちら、スカリエツティラボ》

って矢印付きで書いてあるし。畏なのかな?

《ここ、スカリエツティラボ》

あっ、この部屋だ。うーん、どうやって入ろう?.....よし。

「お邪魔します」

「どうぞー」

普通に返事が返ってきた。……うん、入ろう。  
部屋に入るとスカリエッツィと女の人二人がいた。

「随分とお早い到着だったね」

「貼紙がありましたから」

「……貼紙？」

あれ？スカリエッツィが用意したんじゃないの？

「迷わないよう私が用意しました」

「ウーノ！？君はいつの間にそんなギャグをするようになったんだい！？」

スカリエッツィも予想外だったんだ。というか部下の管理くらいし  
っかりしようよ。

「まあいい。トーレ、やるよ」

「了解です。ドクター」

この人は確かまーくんから逃げ切った人。速さなら私といい勝負だ  
ね。ってなんでスカリエッツィまで前に出てくるの？

「では、武装錬金！！」

そう言うとスカリエッティが銀のコートと帽子を装備した。もしかして、スカリエッティも戦うの？でもちよつどいい。一緒に倒してみせる！！

トレシデ

はあ、私達は止めたというのにドクターは何故言う事を聞いてくれないのか。

「いくよ！ブラボチョップ！！」

「遅い！！」

ああ、勝手に突っ込んで、全く、フォローするのはこっちだということ。

「ライドインパルス」

高速で斬撃を加えようとするが避けられた。速いな。流石は機動六課最速だな。ん？一条要が最速か？

「シッ！！」

「フッ！！」

「あら？」

フェイト・T・ハラウンと高速戦闘を始める。ただドクターは着いてこれていないけど。

「速いですね」

「そちらこそ」

「二人共々、速過ぎるよ〜」

「ドクターはこっちで見えていきましょうね」

「シヨボーン」

結局ドクターは不参加になったか。まあ当然かな。

「プラズマランサー!!」

「無駄」

対電撃コートの前に電気の類は無意味。この隙に決める!!

「セイツ!!」

「真・ソニックフォーム!!」

なっ!!?更に速くなった!!ただそのバリアジャケットは……

「破廉恥だな」

「は、破廉恥じゃありません!!//」

「いや、破廉恥だね」

「ええ、破廉恥ですね」

「違うもん！！／／／」

ならばこれからは速くなる為に脱ぐ以外の方法を考えた方がいいな。とはいえ、速くなられるのは嬉しいな。ならばアレを使うか。

「ミラージュコロイド」

「消えた！？ハルディツシュ！！」

《探知出来ません》

当然だ。この状態のステルス性はクアットロのシルバーカーテン以上だ。まあダンボールには勝てんが、十分だ。私は声を出さず、ただただ切り続ける。

「くっくうう！！」

とにかく動き回って逃げようとするが、ただ無意味に動くだけでは避ける事は出来ない。このまま終わらせる！！

フエイトside

姿を消すなんて、音は僅かに聞こえるけど速くて意味がない。どうする。

「くっ！？」

また攻撃を喰らった。もう考えてる暇はない。姿が見えない今、見る必要はない。目を閉じて、他の感覚に、特に触覚に集中しよう。そして、敵の攻撃が私に触れた。

「ヤッ!！」

「!?!」

少し切られたけど、間違いなく私の攻撃も敵に当たった。一発でも当たればこちらのもの。

「雷速瞬動!!!」

超高速移動。これで移動をし、私の魔力の残り香が動いている所へ攻撃しまくる。

「はああああ!!!」

「くうっ!?!」

私の攻撃はさつきプラズマランサーが効かなかった時から、電気変換してないただの魔力攻撃にしてあるので効くはず。そして遂にステルスが消えた。

「いける!!!」

「まだまだ!!!」

「はああああ!!!」「」

再び始まる高速戦闘。でもスピードならこっちの方が上になっている。徐々に私が押し始める。

「今だ！チエーンバインド！！」

「しまった！？」

チエーンバインドで動きを止める。疲弊している今なら抜け出す事は難しいはず。

「これで、終わり！ジャツジメント！！」

「うわあああ！！」

無数の光の柱が降ってきて敵を飲み込んだ。これで残るはあの二人。

「ウーノ、どうしよう。私勝てる気しない」

「知りません。私は戦闘用ではないのですよ」

「……………とりあえず捕まえよう。」

「貴方達を逮捕します」

「ああどうぞ。私達では勝てない。ただ、少しヴィヴィオの様子を見てみないかい？」

「えっ？」

ヴィヴィオの様子？確かに気になるけど、逃げ出さないよね。

「君から私達が逃げれると思うかい？」

「ないですね」

「ちょっとは考えてくれても……」

そう呟きながらスカリエッティはコンピュータを操作した。そしてモニターには要とヴィヴィオが映っていた。

### 要side

何処にいるのかヴィヴィオは。親をこんなに心配させるなんて……

「アリストテレス。ヴィヴィオは？」

《私に聞かれましたも》

だよな。もう直感に任せよう。それじゃあ……この部屋……！

「あつ！パパ！」

あつ、当たった。

「ヴィヴィオ、帰るよ」

「嫌」

何ですと！？反抗期なのか！？少しパパと離れていたうちに反抗期になったのか！？

「ヴィヴィオ、何で？」

「だってパパ、ピーマンを野菜炒めに入れるもん」

「なっ！？ピーマンは健康にいいんだぞ！！」

「他ので補えるもん！！」

むむ、いつの間にこんな事言う子になったのか。パパは悲しいぞ。

「ええい！とにかく帰るぞ！ママやアイナさんだって心配してるし」

「うっ！でも嫌！！どうしてもって言うなら力づくで連れて行って！！」

そう言うとヴィヴィオの体が突然光り出し、そして大人の姿になった。

「・・・・・・・・スカリエツティ！何した！！」

俺が叫ぶとモニターが現れ、スカリエツティが映った。

『私はただこんな事が出来るよってアドバイスしたただけさ』

「どんなアドバイスだよ!？」

『今の彼女は強いから気をつけてね』

はっ！娘に負ける親がいるかってんだ。俺自身のプライドとかはねえが、親としてのプライドはあるんでね。

「お仕置きの時間だ」

「パパを倒してピーマンを無くす!!!!」

俺を倒してもピーマンは消えんぞ。

S t S 第十六話（後書き）

<まーくんとアリシヤの部屋>

ま「どうも」

ア「なのは怖いなのは怖い」

シヤ「惨い」

ま「なのはさん神速使えたんだね」

ア「あんまり長くは使えないし、あんな異常な動きも出来ないけどね」

シヤ「でしょうね」

ま「でも酷いよね」

ア「恐いわね」

シヤ「魔王ね」

?「少し、黙ろうか」

ま・ア・シヤ「」「はい?」「」

ジュッ

？「みんなもあんまり言つよつなら、  
O H A N A S H I I なの

「

S t S 第十七話（前書き）

先に謝ります。すみません。

ヴィヴィオをチート化させたら、みんなの技を使うように……

・しかもグダグダ

## StS第十七話

要side

ヴィヴィオが大人になりました。びっくりです。

「いくよ！パパ！！」

「大人しく帰ってきなさい！！」

ヴィヴィオの拳を捌き続ける。下手に殴るわけにはいかないし、上手く気絶させるしか……

「閃鞘・七夜」

「はっ？」

ヴィヴィオの姿が消えたと思ったら、目の前で小太刀を振るおうとしていた。

「無駄」

ガキッ

アルティメットワン発動状態ではそんな攻撃は効かない。ただ、何故この技が使える？しかもあの小太刀は、八景？

「雑旋！！」

何だと！？止めないと。

「させん！！！」

八景を殴りつけて砕いた。するとガラスのように砕け消滅した。投影魔術か。

「む〜」

「閃鞘・七夜に八景、御神の技に投影魔術？節操無しだな」

「パパだって節操無しじゃん」

「失礼だな。何がだ」

「女性関係」

ぐっ！言ってくれるな。まあ確かにそうなんだが。娘にまで言われるとは……………

「ええい！そんな事はどうでもいい！！！」

「そうだね。ここでパパを倒す！！！」

そう言ってヴィヴィオが取り出したのはボウガンだった。ってあれは！！！！

「ゲイルアークだと！？」

「槍荒鷗！！！」

ヴィヴィオが六本の矢を放った。  
それはヒスイのдар！？なんでヴィヴィオが使える！？とりあえず避けるか。

「逃がさない！！一言魔法、『追尾』！！」

「ハアツ！？」

今度はソウヤだと！？おかしいだろ！？

「シールド、三重！！」

とりあえずシールドを張る。すると六本の矢は二枚目で防ぎきれた。オリジナルよりかなり劣化してるな。

「パパのデバイスと六課入っているデータから技を出してるんだよ」

「反則だろ」

「ならピーマンどうにかしてよ」

まだ言うかこの子は……………流石にパパも怒るぞ。

「喰らえー！！」

右手に狼の形をした大砲を付けた。今度は一真か。

「ガルルキャノン！！」

「ルーフシールド、三重」

オリジナルよりも弱い砲撃なぞ怖くもなんともないわ。まあそれでもシールド二枚破られたけど。

「ニードルガン、二連！！」

「よっ」

ちっ、避けるか。まあ想定内だが……

「そこまで節操無しだと読者の皆さんから批判がくるぞ」

「それを受けるのは作者だもん」

ふむ、正論だな。とはいえどうしたもんか。

「来ないならこっちからいくよ！！昇竜突破！！」  
ドラッグロー・ファイヤー

「危なっ！？」

何！？今の火炎放射！？誰の技だっけ？……ああ、鈴音がフォワード陣と試合した時に使った技だっけな。

「当たってよ！！」

「焼肉にしたいのか！？」

いったいいつの間にこんな危ない子になったのやら？なのはの教育が悪かったのか？

「なら接近戦だよ!」

「俺に勝てると思ったか?」

「勝つよ!」

何も持っていないって事は、格闘か。どれほどの強さか確かめてやる  
う。

「碎天掌!」

「いきなり!」?

これは当たったらマズイって。ユリにやられて拳砕けたじゃん。

「スネークバイト  
蛇咬!」

「えぐれるって!」

貴史がよく使った技だな。尾獣ですらえぐる一撃。いくら劣化して  
ても人をえぐるくらい軽いだろう。あつ、でもアルティメットワン  
があるし大丈夫か?

「いい加減にしないで!」

ビシィ

「あいた!」?

ヴィヴィオにチョップを喰らわせてやる。やっぱり避けられないか。いくら達人達の真似をしても、体がついていけない。それもそうか、あのチートどもは異常な身体能力があるしな。

「全く。いつまで駄々をこねる」

「パパの野菜炒めからヒーマンが消えるまで」

ちっ、いったいどうすれば……

《主!?!》

「ん?」

アリストテレスが慌てるので何かと思ったら、ヴィヴィオが魔力を溜めていた。

「スファイア!!」

「うおっ!?!」

「ブレイク!!」

「ひゃー!?!」

「スライダー!!」

「なんとおー!?!」

危ない所だった。よく避けた俺!自分で自分を褒めてやろう。

「びつくりするじゃないか!！」

「パパの避け方の方がびつくりだよ!！」

そんなに面白い避け方したかね。自覚がないって嫌だね。

「そろそろ終わりにしようか」

「いいよ。勝つのは私だけだ」

そう言つてヴィヴィオが取り出したのは紅い布。 . . . . . ちょっ!?

「我に触れぬ(ノリ・メ・タンゲレ)」

「ぬあああに!?!」

何故にマグダラの聖骸布をヴィヴィオが!?!例えデータがあつてもヴィヴィオの劣化投影じゃオリジナルと同じ性能は出せないはず!

「何処でこれを!?!」

「はやてさんから借りた」

はやくて!?!なんというものを!?!こうなつたらORTの部分解放をして . . . . .

そう思つた時、ピンクの奔流が壁を貫きヴィヴィオを飲み込んだ。

「ぎゃああああ!?!!」

「はい？」

これって、なのはだよな。

なのはside

うーん、ヴィヴィオは何処だろう？よくわかんないな。そうだ、捕まえた二人に聞こう。

「ねえディエチさん、クアットロさん。ヴィヴィオって一直線ですっちな？」

「「あっち」「」

最短で行くならやっぱり壁が邪魔だよな。ちょっと貫こうかな。

「レイジングハート」

《任せて下さい》

さあいくよ。カートリッジを幾つかロードする。

「スターライトブレイカー」

《フルバースト》

ドゴオオオン

よし、成功。じゃあ行こうかな。

「行くよ〜」

「……………」

ヴィヴィオは大丈夫かな？

あつ、要くんだ。ヴィヴィオは倒れてるけど、要くんがやったのかな？

「なのは！なんださっきの一撃は！？」

「ふえ？」

なんで怒ってるの？あつ、もしかして当たりそうになったのかな？

「……………もういい、帰るぞ」

「おっ」

何だったんだろ？

要side

あの砲撃の後、スカリエツティが連絡してきた。どうやら大人ヴィ  
グイオは聖王の鎧なるものを常時発動しているらしい。その聖王の  
鎧は大概の魔法なら無力化するらしいが………

『何故彼女は聖王の鎧を無視出来るんだい!?!』

そんな事を言ってきた。そう言われても、なのはだからとしか言え  
んな。なのはは自覚してないし………

「要〜!?!」

「要さ〜ん!?!」

「おっ、久遠。それにまーちゃん?」

なんでまーちゃんが此処にいるんだ?どうやって来たんだ?……  
……まあいつか。

「要、大丈夫か?」

「おーい、要くーん」

「一条、無事か?」

「問題なさそうだな」

ヴィータはいいとして、はやて、シグナム、ザフィーラが何故いる  
?まーちゃんと同じで気にしたら駄目か。

「要！スカリエツティを捕まえたよ！」

「お疲れ、フェイト」

あっさりと全員集まったな。じゃあ帰りますか。

「帰って飯だ！！」

『おー！！』

出口に行くと、ヘリコプターが待っていた。

「お疲れっした！」

「ご苦労、ヴァイス」

ナイスタイミングだ。流石はヴァイス。クロノと違い空気の読める男だ。

「全員乗るぞ」

まず俺から乗って、そのあとどんどん乗ったが、よくこの人数が乗れたな。

「そういえば十字架出んかったなあ」

ああ、そうだった。十字架がいたな。でも出ないなら出ないでいいんだが………

ゾクッ

………来やがった。畜生め。

「ヴァイス！全速力で飛べ！！」

「えっ？」

「早く！！」

すると突然後方で大きな音がした。みんなが振り返ると、そこにはゆりかごが墜ちる光景が見えた。

「なんだよ………あれ………」

上を見たヴィータが声を震わせながら言った。上を見ると、そこには

巨大な十字架

がいた。

「タイプ………サターン」

S t S 第十七話（後書き）

<まーくんとアリシヤの部屋>

ま「ヴィヴィオちゃん節操無さ過ぎ」

ア「これまで出演してくれた人の技だもんね」

シヤ「要くん負けてるし」

ま「要さんは勝とうと思えば勝てたそうです。実際にチョップを簡単に当ててるでしょう?」

ア「今回は遂にラストバトル」

シヤ「姿を表した土星のアルティメットワン、『タイプ・サターン』にどう立ち向かうのか」

ま「皆さん、お楽しみに」

StS第十八話(前書き)

ラストバトル。主役はあの人。

## StS第十八話

要side

来やがったな、タイプ・サターン。しかしデカイな。流石は3000m級のバケモノだ。

「要くん、なんやあれ!？」

「土星のアルティメットワン、タイプ・サターン、通称十字架。そうだな、ORTの仲間とでも思えばいい」

「ORTの……」

とはいえ、全アリストテレスのリーダーとされる奴だ。ここで潰しておかんと大変な事になりかねん。ここで逃げて他のアリストテレスを呼ばれたりしたら、間違いなくミッドチルダは消滅するな。

「ん？あれは……」

淡く輝いていたタイプ・サターンが僅かに光った。もしかしたら、あれか？マズイな。

「ヴァイス！逃げる!!あいつの下にいるなよ!!」

「了解!!」

ヴァイスがへりを飛ばす。するとタイプ・サターンが十字架の雨を

降らしたした。

「何あれ!?!」

「当たるなよ!電磁衝撃で消滅するぞ!」

あいつの十字攻撃には2種類ある。さっきの単純に相手を消滅させるもの。そして地面に刺さり、地震を誘発させるもの。しかしあいつ、こっちに向かってくるな。狙いは俺らか。それとも俺か。

「俺は外に出る。お前らは逃げろ」

「駄目だよ!」

「ならなのは、お前は勝てるのか?」

「それは……………」

「安心しろ、必ず帰ってくる」

俺はそう言って空に飛び出した。しかし高い所にいるな。どれくらい掛かるかな。

「要!」

「ヴィータ!?!出てくるな……………」

「飛ばしてやるよ」

するとヴィータがアイゼンをギガントフォームにした。全く、こいつは……………

「頼んだ！」

「任せろ！！ハアアアア！！」

ヴィータがアイゼンをおもいきり振って、俺はアイゼンに乗って飛ばされた。

「O R T解放」

そして俺はO R Tになりタイプ・サターンに張り付いた。

ディオネ s i d e

なんだアレは！？ここまで感じるあの威圧感、まるで一条がO R Tになった時のように……………

「ディオネさん！？なんですあれは！？」

「ロウランか。私もあんなものは知らん。だが間違いなく敵だ。撃

ち落とすぞ!!!」

「はい!!!」

とにかく距離が遠いが撃たなければ、へりがあそこから逃げるまで足止めをする。ん？あれは……………

「要さんがアンノウンに向かっていきます!!!」

やはりか。だが向かうのは一条のみか。

《少し様子を見るぞ》

「えっ？でも……………」

その瞬間、一条の姿が変化した。ORTになったか、ではやはりあれは闇の書の闇か、それ以上か。

「な、なんですか!？」

「手を出さない方がよかつたな」

頼むぞ、一条。

エリオside

「えっ？」

突然舟を墜とした巨大な十字架。なんだあれは……

「エリオくん……」

「怖い……」

「大丈夫、大丈夫だから」

ここには男は僕しかいないんだ。僕がしっかりしないと……

「あっ！」

「キャロ？どうしたの？」

「あそこ、人が飛んでる」

確かに目を凝らすと、小さいが人らしきものが飛んでいるのが見えた。そしてそれが光り、巨大な蜘蛛のようなものになった。十字架のせいで小さく見えるが、十分に大きい。

「頑張つて」

ルーがそう言った。あれが何かはわからない。でも僕も応援しようと思った。

「頑張れ！」

「負けないで！」

キヤロも一緒に応援する。僕はただただ応援をし続けた。

スバルside

ギン姉達と合流して少しした時、突然大きな音がしたので振り返ると、巨大な十字架が浮いていた。

「何アレ!？」

「知らないわよ!！」

「凄い威圧感ね」

よくわからないけど、絶対に良くないものだ。絶対に危険だ。

「あれ?人？」

何か人のようなものが飛んでいるのが見えた。何だろう？

「クロスミラージュ、スコープ」

《了解》

「今確認するわ。……………要さん!?!」

「「ええっ!?!」」

確かにあの人ならしそうだけど、無茶だよ。そう思った時、要さんが光り、巨大な蜘蛛になった。

「要さんまで!?!」

「どうなってるの!?!」

ティアもギン姉も混乱している。もちろん私もだ。でも、何も出来ない。だから……………

「見守ろう」

いったい何が起こっているのかはわからない。でも今は見守るしかないと思った。

要side

さて、張り付いた方がいいが、このままじゃ十字架を撃たれるかもしれないな。上に登らないと。

ボンッ

「Giii!？」

(くっ!?)

早速やられたな。ダメージは少ないな。やはり絨毯爆撃の攻撃だから。しかしそんな技でもORTがダメージを受けるとなると、他の生物は一撃死だな。

「Gyuaaa!！」

(オオオオオ!！)

登れ登れ!！さっさと登って時間稼ぎをしないと!！

(よし!登った!！)

しかし広いな。小さな土地が浮いてるようなもんだからな。ああ、タイプ・ジュピター、黒いアリストテレスの方がデカイな。全長数十kmだっけ?まあそんな事はいい。

「Gyuiiii!！」

(オラオラオラア!!)

タイプ・サターンの淡く輝く鉱石の体を殴りつける。なかなか硬いが、ORTの前では無駄だ。どんどんえぐっていく。

「—————!!?」

よくわからないが叫んでる事は間違いないな。40mのORTの攻撃でも痛いんだな。ん?タイプ・サターンがさっきより輝いてるな。すると俺は光に飲み込まれた。

なのはside

要くんがORTになって大きな十字架の上に乗っちゃったけど、大丈夫かな?

「あれ?」

「どうしたの?フェイトちゃん」

「なんかさっきより光ってない?」

確かに、十字架の光がどんどん強くなってる気が……

カッ

『わああああ!!?』

十字架が突然膨大な光を放ち、その後物凄い衝撃波が飛んできた。要くんは大丈夫なの!? もう見てられない!!

「ヴァイスくん!! ハッチ開けて!!」

「駄目です! 旦那も言ってたでしょう!？」

「ならここから撃つ!! それならいいでしょ!？」

「……………絶対に出ないで下さい」

「ありがとう」

さあやるよ、私が考えた最強の一撃。多分魔力が殆ど無くなるけど、要くんの為だ。

「レイジングハート、アレを撃つよ」

《了解です、マスター》

全カートリッジをロードして魔力を高める。その魔力を全て、突き出したレイジングハートの前に集める。ここまではスターライト・ブレイカーと同じ。でもその魔力を圧縮して小さな魔力弾にする。

「ビッグバン」

《ブレイカー》

小さな魔力弾はゆっくりとした速度で飛んでいき、十字架に触れた。

ドゴオオオーン

魔力弾は巨大な爆発を起こした。殺傷設定で撃ったんだ。効いていないはず。でも流石に全ての魔力を使ったから疲れたな。

「なのは……………」

「魔王やな」

「魔王で、いいよ。要くんの為なら、魔王にだってなる」

煙が晴れてきた。そしてそこには……………

「う、そ……………」

僅かに表面が剥がれているものの、ほぼ無傷と言っている十字架が悠然と飛んでいた。

要side

危なかった。さっきの光は上にいる奴に対する攻撃か。魔力を防御に回したからダメージはほぼ無かったが……

(舐めやがって!!)

俺が殴りつけようとした瞬間……

ドゴオオオーン

突然の爆発でタイプ・サターンが揺れた。なんだ!? 今一瞬見えた爆発の色はピンクだったという事は、なのはか!!

(とんでもない事やるな)

ただ魔導師の攻撃では現象と変わらないアリストテレスにダメージを与える事は難いだろう。アルカンシエルなら別だが……

「Gyuaaa!」

(さあ再開だ!!)

俺は再び殴り始めた。だがダメージは与えられても、この巨体をORTで墜とすにはどれだけ掛かるやら……やっぱり頼むか。

『ヴァイス、頼む』

ヴァイス side

『ヴァイス、頼む』

『了解です』

旦那からの念話があった。やっぱりやらなきゃいけない時があったか。まあその為に特訓をやらされたわけだが……

「悪いつすけど、誰か操縦できますか？」

「ウーノ、君は出来たよね？」

「ええ」

戦闘機人か。まあこの際構わないか。

「ならお願いします」

「待て、ヴァイス。どういう事だ？敵に操縦を任せるなど」

「シグナムの姉さん、今はそんな事言ってる場合じゃありません」  
今は一秒でも早くあれを墜とさないといけないのだ。敵であろうと今は任せるしかない。

「大丈夫です。こんな状況では敵も味方もありませんから」

「……いいだろう」

ふう、シグナムの姉さんも頑固なんだから。さあ、撃つか。

「あれ？ヴァイスくん、それって要くんがオークションで手に入れた……」

「黒い銃身つすよ。ハッチを開けます」

改めてあれを見ると緊張するな。俺が本当に墜とせるのか？いや、墜とすんだ。思い出せ、旦那との会話を……

「よう、ヴァイス」

「旦那？なんか用ですか？」

「おう、こいつを渡しとくわ」

旦那が渡してくれたのは黒い銃。これって質量兵器じゃ。確かに最近拳銃の練習をやらされてたけど、もしかしてこいつを使う為に？

「バケモノが出た時にこれを撃つてくれ」

「バケモノ？」

旦那がバケモノって言うようなのっていったいなんだ？でも……

「俺は天才でもなけりゃエースでもありません。他の人に「馬鹿野郎」はい？」

「誰もお前をヒーローにする気はない。お前がミスしても六課が負担する。逆にお前が成功したら六課の功績にもなる。ヒーローはお前じゃない、六課だ」

「……そりゃ楽だ。失敗しても俺の責任にはならないなんて、そんな楽な仕事はない。」

「あつ、安心しろ。別にお前の功績を全部六課が持つてくわけじゃないからな」

そんな事する部隊じゃないってわかってますよ。

「ヴァイス・グランセニック、了解しました」

「ハハッ」

そうだ、何を緊張する事がある。俺はただただ撃てばいい。

「喰らえ、バケモノ」

エネルギーは旦那が入れてくれた。俺は照準を定め、引き金を引くだけ。そして……

「シュート、ブラックバレル」

一発の銃弾が十字架を貫いた。どうだ？

「……駄目、か」

そう諦めかけた時だった。

「……………!!!!!!……?」

何やら十字架が悲鳴を上げたように思えた。そして、十字架は砂となりながら墜ちた。

「……………終わった？」

誰が言ったのかわからなかった。だが次に放たれた言葉はよくわかった。

『ご苦労みんな！！全部終了だ！！』

旦那の念話が届く。ハ、ハハツ、ハハハハツ！！！！

『やったーーーー！！！！』

敵味方関係なく、みんなが歓喜の悲鳴を上げた。

## 要side

あつぶねー。さっきの一撃、タイプ・サターンを貫通して俺に掠ったぞ。当たらなくてよかった。まあそれはともかく。

「終わったんだな」

人に戻り、大地に大の字に寝そべりながらそう呟いた。

後にこの事件は『十字架異変』と呼ばれ、ミッドチルダの歴史に名を残す事となる。

## S t S 第十八話（後書き）

<まーくとアリシヤの部屋>

ま「やっとここまで来ましたね」

ア「次回がS t Sのエピローグよね」

シヤ「その後は『完結&200万企画』よ」

ま「意外とまだ続きますね」

ア「今回の話、ヴァイスが活躍したわね」

シヤ「十字架を出すと決めた時から決まっていた結末だそうよ」

ま「そうなんですか」

ア「作者の中では、彼の見せ場が楔に弄ばれるだけじゃ可哀相と思っていたそうよ」

シヤ「そんな話もあったわね」

ま「では今回は本編の終了となります」

ア「要ラバーズの恋の行方は!？」

シヤ「最後の後書きに私達は出れるのか!？」

ま・ア・シヤ」「」お楽しみ」「」

## StSエピソード（前書き）

これで『チートじゃ済まない』の本編は完結。  
今まで応援して下さった皆さん。本当にありがとうございます。

## StSEピローグ

要side

タイプ・サターンが墜ちた後、六課のみんなから歓迎を受けた。・・・ヴァイスが。武器を調達したのは俺だぞ。ん？オークションで落としたのはすずかか。なら俺は指示しただけ？まあいいか。

スカリエツィは逮捕をされ、ナンバーズは更正施設に送られた。ナンバーズの何人かは反発をしたが、ウーノが叱ったら黙った。流石は長女。そして俺自身は・・・

「終わらねえ・・・」

昨日の報告書みたいのを俺一人で書いている。十字架がどのやら、ORTがどのやら、ブラックバレルがどのやら。真実を書くつもりは一切ないけどね。

「もう適当でいいか」

どうせ見るのは三提督だし、大丈夫だろ。

そういえばナンバーズの残り一人はユーノの恋人のドゥーエさんだったようだ。ただ特に何かしたわけでもないし、ユーノと結婚するし、お咎めも何にもない。つーか妊娠もしているって・・・

「どんだけやねん!!!」

つてはやてが言ってたぞ。幸せバカップルめ。

ああ、保護されたのにはルーテシアって子もいたな。エリオやキヤ口と仲が良かったな。そのせいか俺をお兄さんと呼んでる。にしても最近エリオは気付いてないようだが、二人のエリオを見る目が異常だ。エリオ、お前はその歳で二つの鎖に縛られているぞ。

「これでよし」

どうでもいい事を考えながら適当に書いた報告書だが、大丈夫だろ。

「要」

「どうした？久遠」

「パーティーの時間だよ」

もうそんな時間か。なら行くとしますか。

パーティー会場は普通に六課の食堂。広いから構わないけど。

「はい、要くんも来たので始めたいと思います。みんな！グラスの

用意はええか？では、カンパニー！！」

『カンパニー！！』

六課は未成年が多いので、酒を飲むのはごく一部だ。俺はそのごく一部の一人なんだが……

「なんだお前ら、もうギブアップか？」

「一条三佐、酒、強すぎ」

全く、一升瓶10本だけなのに。情けない。

「要、ザルだな」

「お前飲んでいいのか？ヴィータ」

「見た目で飲める飲めないを判断するな」

とはいえ、な。ヴィータくらいの見た目の女の子が酒を飲むのはどうなんだ？

「まあいいか」

今は祝いの席だ。そんな事気にしたら駄目だな。楽しまないと。

「楽しみ過ぎて局員全部潰すなよ」

「ごもっともです。」

「そうそう、ヴィータ。終わったら俺の部屋に来てくれ」

「いいぞ」

「なのは、フエイト、すずか。楽しんでるか？」

「うん、楽しいよ」

「お酒注ごうか？」

「お酒より私を」

楽しんでるみたいだな。そしてすずか、自重しろ。

「そんな！私が自重したら何が残るの！？」

何も残らないのかよ。昔のすずかならいろいろと残るものがあったぞ。ああ、昔が懐かしい。

「そういえば、なのはが遂に魔王になったって？」

「そうなんだよ要。怖かったよ」

「にやつ!？要くんもフェイトちゃんも酷いの!！」

いやいや、フェイトは昔その身で魔王の一撃を喰らってるからな。怯えてもしょうがないだろ。魔法少女が魔砲少女に、悪魔少女から遂に魔王少女か。長い進化だったな。

「」「酷くない酷くない」「」

「すずかちゃんまで!？」

ハハハ、なのはは面白いな。さて、次はフォワード陣の所にも行こうかね。

「ああ、三人共。終わったら俺の部屋に来てくれ」

「いいよ」

「わかった」

「まさか、4P!？」

すずかの思考はどろにかならんだろうか。

「飲んでるか？」

「飲めません」

流石ティアナ。いいツッコミだ。

「要さ〜ん」

「おっと」

「えへへ〜」

スバルがいきなり抱き着いてきた。この臭い、酒の臭いだな。しかも犬耳着けてるし………とりあえず撫でよ。

「よしよし」

「ん〜」

犬だな完全に。誰だ？こんな事したのは………癒されるじゃないか。

「エリオ、キャラ。楽しんでるか？」

「「はい！」」

うん、元気がいいな。ちゃんと飲んでるのもジュースのようだし。となると、いつ、誰がスバルに酒を飲ませたのか………

「要さん！飲んでますか？」

「ギンガ、か」

こいつも未成年だろ。何やってんだか。まあ今日は無礼講だからいいか。

「そうだ、スバル。終わったら俺の部屋に来いよ？」

「はい」

「きゃー！大胆！」

ギンガの脳内はさすがと同レベルなのか？

パーティーから先に抜けて、俺は自分の部屋にいる。ああ、これは緊張するな。黒ORT？タイプ・サターン？これに比べたら楽だな。

「要くん、いる？」

「おっ」

始めに入ってきたのはなのはだった。その後ろにはフェイトとすずかもいた。

「用は何なの？」

「やっぱり4P？」

「フェイト、もう少し待ってくれ。すずか、もう少し自重しろ」

こいつはいい加減自重という言葉を教えた方がいいな。いや、呼べるなら昔のすずかを呼んで自分を見直させるか？

「要、入るぞ」

「ヴィータか、いいぞ」

ヴィータが入ってくると、先に来た三人の雰囲気少し変わった。

「5Pだったとは」

「「すずか（ちゃん）！？」「」」

こいつは馬鹿なのか？天才だからか？

「なんでこの三人もいるんだ？」

「もう一人来るから待ってくれ」

まだスバルがいるからな。

「失礼します」

つと噂をすればだな。何だかテンションが低いが、大丈夫か？

「あいたた、頭が痛い」

ああ、さっき酒を飲んでたからな。二日酔いみたいなもんだな。

「全員揃ったな。じゃあ話をしようと思う」

まずは……あれからでいいか。

「実は俺は元々この世界の人間じゃない。並行世界の人間だった」

「……………へ……………」

まあこの六課の面々だから驚くような事でもないな。

「次なんだが……………」

いかん、やっぱり緊張してきた。落ち着け、俺。今までのイメージを思い出せ。

「みんなが俺を好いてくれるのは知ってる。だからここは誰か選ばなきゃいけないんだと思う」

「…………………………」

「でも俺は誰かを選ぶなんて出来ない。だから、俺はみんなを平等

に愛する」

「要くん、それはどうだろう」

「普通は一人だよな」

「戦いじゃあんなに大胆なのにヘタレだな」

ぐっ！やっぱりそうだよな。俺って情けないよな。なんでこんな性格なんだろうな。

「でも私は要さんが好きです」

「それも含めて私達は要くんを好きになったんだよな」

……えっ？じゃあそれって……

「……」よろしくお願いします／／「……」

ハ、ハハハ。そーか、そうなのか。

「よかった」

ああ、俺って幸せ者だよな。本当に生きててよかった。

「でも重婚になるんじゃないか？」

「ヴィータ、その点は問題ない。リンディさんやニ提督がどうにかしてくれるらしい」

あの人達に相談したら、ミッドチルダは多文化だから重婚程度問題ない。って言ってたからな。多分大丈夫だろ。

その時、とある場所。

はやてside

あかん、今になって緊張してきた。でもここで頑張らんといつ頑張る。

「ちよつとええか？」

私はとある人の部屋の前で言った。ちゃんとおるやるか？

「どうぞ」

よかった。でもここからが正念場や。私は部屋に入った。

「八神隊長、何かご用ですか？」

「えっとな、グリフィスくんにお願いがあるんやけど……」

「何でしょうっ？」

ふー、呼吸を整えて……………よし！八神はやって、いくでー！！

「私と、付き合って下さい」

「……………えっ？」

うー、恥ずかしい／＼。聞き返さんといてや。

「本気ですか？」

「……………（コクリ）」

私はゆっくり頷いた。グリフィスクんの返事はどうやる？もしかして……………あかん！悪い事考えたらあかん！！

「八神隊長」

「……………」

「僕も好きでした」

「……………ほんまに？」

「ええ」

「やったー！！」

もー、両思いやったなんて、早く気付けばよかった。これで私も行

き遅れずに済む！！

神 side

ふむ、これで彼の物語は一区切りついたね。彼ならこれからもきつといろいろな事に巻き込まれるだろうけど、愛する人達がいるならきつと大丈夫だろう。

「一条要、君に幸あらんことを」

「ゼウス様、お仕事です」

「はいはい」

ああそうだ。次の物語の準備をしないと。どうせなら、彼にまた頑張ってもらおうかな。

## StSエピソード（後書き）

<久遠とまーくんとアリシヤの部屋>

久「こんにちは」

ま「今日は久遠ちゃんも来てます」

ア「ハーレムエンドだったわね」

シヤ「はやてちゃんもお付き合いを始めたわね」

ま「そういえば久遠ちゃんもヒロインの一人だったよね？」

久「そうだけど、やっぱり私は要の家族なんだよ。要の妹、それが私なんだよ」

ア「そうなんだ」

シヤ「一つ気になったんだけど、はやてちゃんがお付き合いする必要はあったの？」

ま「正直ありません。でもどうせならはやてさんにも幸せになって欲しかったそうです」

久「次回からは『完結&200万記念企画』だよね」

ア「本編は終わったけどまだちょっと続くわよ」

「シャ」では皆さん、また次回

**完結&200万記念企画第一弾(前書き)**

キャラが多くて扱えませーん。

料理なんてわかりませーん。

## 完結&200万記念企画第一弾

要side

ただ今お昼時、今日は休暇なので、家で俺が料理を作ったのだが・  
・  
・

「なんで野菜炒めにピーマン入ってるの!?!」

「レギュラーだからだ!?!」

ヴィヴィオと口論をしています。俺の野菜炒めにピーマンは必須なのだ。それにヴィヴィオにもちゃんと食べてもらいたいしな。

「要くん、それくらいに……………」

「そつだよね!なのはママ!?!」

「なのは!甘やかしたらヴィヴィオが付け上がる!?!」

他の食材で栄養を補えばいい?否!断じて認めん!?!そんなものは逃げだ!?!

ピンポーン

ん?誰だ、こんなお昼時に……………

「はい」

玄関を開けるとそこにいたのは……………

「元気か？」

「おお！飛翔ファミリー」

「その一括りなんだな」

だっていちいち全員紹介は面倒だろ？それにみんなこれで通じるし。

「何しに来たんだ？生憎こっちは休暇なんだが」

「このチラシを見てな」

飛翔が見せてくれたチラシにはこう書かれていた。

『ヴィヴィオのピーマン嫌いを治そう！！』

腕に自信のある料理人募集。

by雨季』

なんじゃこりゃ。とりあえず作者がヴィヴィオのピーマン嫌いを治すためにいろんな奴にこれを配ったんだな。まあ今回は感謝してやるわ。

「なら上がってくれ」

『失礼しまーす』

……………なんか声が多かったような。数えてみるか。飛翔、アリシア、アリサ、すずか、鈴音、リニス、アインス、レイ、優って。

「後ろ二人！！」

「あつ、バレた」

「当たり前だろ」

何勝手に入ってきてんだか。もしかしてこいつらも参加者か？

「当然」

「俺はストッパー」

いくら優が成長してもレイのストッパーが務まるとは思えんのだが、まあいいよりマシか。

「では私も入っていいのか？」

「ゼフィリスもか」

まあこいつはなんとなく来そうな予想はついてたから驚くこともないけど。しかし嬉しいね、わざわざヴィヴィオのためにこれだけの協力者がいてくれると。

ピンポーン

「はいよ」

また来たのか。今度は誰だろな。

「ヤッホー」

「ピーマン嫌いがいると聞いて」

「遊びに来たぜ」

「ユリに鈴、貴史もか」

この三人って料理出来たのか。ユリは一応奥さんだから出来るか。というか貴史、遊びなら帰れ。

「要、リア充になったって？」

「別に構わないだろう」

いったい何処からそんな情報を仕入れてくるのか疑問でならんな。しかし参加者が増えてきたな。まだまだ増えそうな気がする。

ピンポン

やっぱり。

「ヴィヴィオの好き嫌いを治しに来たぞ」

「次はカイトと黄宇、鋼牙もか」

黄宇の料理は美味かったからな。このメンバーは期待出来るな。

「まだいるぞ」

「ん？」

カイト達の後ろには一組の男女が立っていた。

「手伝いに来たぞ」

「僕もいるよ」

「吼太とリームか」

こいつらがこの世界に来るのは初めてだな。俺は向こうに行ったけど……しかしこれで七組か、まあ多い方がいい。それだけピーマン料理のレパートリーが多いからな。

ピンポーン

………流石に多過ぎないか？

「よう、来てみたぜ」

「失礼します」

「ソウヤにシルフか」

この二人も参加者なのか。シルフは何となく出来そうな気がするが、ソウヤはどうなんだ？

「安心しろ、アーチャーもいる」

「そうか、お前の能力には型月キャラを出せるのがあったな」

ならばよし。でもここまで来るとは……作者も予想外だっただろう。

ピンポーン

もう何も言わん。

「お邪魔します」

えっと、この二人は誰だっけ？……思い出した。恭介と優奈の林兄妹だ。

「恭介、この前はうちの作者が迷惑を掛けたみたいで悪いな」

「ハハハ……気にしてないさ」

絶対気にしてるだろ。性転換なんてされたら一種のトラウマになるからな。

「俺もいるぞ」

ん？確かこっちは……朝倉貴哉だな。こいつも性転換被害者の一人だった気がする。

「んじゃ入ってくれ」

「おう」

もう十分だろ。流石にこれ以上こられたら家が狭い。

「おい、要、来たぞ」

「……………今度は刹那か、あの作者はどれだけ配ったんだ。まあ刹那に関しては腕輪の礼も言いたかったからいいんだが。」

「腕輪ありがとな、助かった」

「それはよかった」

とにかくこれ以上料理人は来ないだろう。うん、そう願いたい。

「あー、これ見て来たんですけど」

「やっぱり来るよね、そうだと思ったよ。なんだか少し胃が痛くなってきた。」

「どちらさん？」

「七宮亮っていうんですけど」

「ああ、聞いた事があるな。まあとりあえず上がってもらって全員で話をしよう。そうしないと始まらない。さてはて、ヴィヴィオの好き嫌いはちゃんと治してくれるのかな？そうだ、どうせだからあいつらも呼ぼう。俺はケータイを出して電話した。」

「もしもし、フェイトか？ヴィータとすずかとスバルは……………いるんだな。なら連れてきてくれ。料理の勉強になる。後できるならまーくとまーちゃんも頼む。ああ、そうだ……………言うのか？あれ……………わかったわかった、愛してるよ、フェイト」

ト

あいつも好きだね、ホントに。いちいち確認する必要もない事実なのにさ。振り返るとニヤニヤしてる奴らがいた。

「お前らさっさと準備しろ!!」

『わー、怒ったー』

人が恋人と話しているのがそんなに面白いつてのか？

フェイト達も到着して全員がリビングに集まった。よくもまあ家に入ったもんだな。

「お父さん、久しぶりです」

「お久しぶりですわ」

「元気そうだな、まーくん、まーちゃん」

そういえばゼフィリスはまーくんとまーちゃんの親だったな。二人も嬉しそうだな。

「まーくとまーちゃんには頼みたい事があるんだ」

「何ですか？」

「ピーマンを量産して欲しい」

ビクッ

今ヴィヴィオがびくついたらな。そしてバレないように逃げないようにしているが……

「はい、逃げちゃ駄目だよ」

「いやー!!」

スバルに捕まった。このメンバーから逃げる事自体無理なんだよ。

「じゃあみんな、協力してピーマン料理を作ってくれ」

『了解』

ここからはキャラが多いため台本形式になります。

では料理スタート

優奈「ピーマン料理ってそんなにありますか？」

百合姫「工夫次第でどうにもなるわよ」

亮「そうですね。まずは苦さからどうにかしますか」

貴哉「ワタをしっかりと取って湯がくか」

刹那「塩揉みしてレンジでチンもいいぞ」

シルフ「やっぱり見た目の問題もあるのでは？」

恭介「ピーマンというだけで嫌いな子もいるからな」

貴史「幻覚でピーマンと友達にしてやれば」

優「駄目だろう！無理に食べさせたら！」

アーチャー「ピーマンは4個で一日のビタミンCが取れるくらい栄養があるのだぞ。子供には是非食べさせたいが」

ソウヤ「流石アーチャー、よく知ってるな。じゃあどんな料理にするか」

リーム「カレーに入れたら？」

鈴「駄目だろ。多分避けて食べるぞ」

吼太「ピーマンで完熟すると甘いって聞いたぞ」

ゼフィリス「確かにそうだが、それで解決するだろうか？」

黄宇「難しいのではないか？完熟したものはいえ食べるかどうか」

飛翔「そうだな。ピーマンは美味しいと思わせないと」

アリシア「ならピーマンを隠さずに出そうか」

レイ「いろいろ考えてもしょうがねえし、作ろうぜ」

全員「おー！！」

フェイト「みんな凄いね」

なのは「手際が良すぎるよ」

スバル「美味しそう」

ヴィータ「勉強になるな」

すずか「一流シェフなんて目じゃないね」

その頃のリビング

鋼牙「ピーマン美味しいよ?」

鈴音「体にもいいですし」

ヴィヴィオ「嫌!」

カイト「ありや重症だな」

すずか「大変だね」

要「申し訳ない」

アリス「あんたのせいでもないけどね」

リニス「とはいえ、今のうちにしっかり治さないと」

アインス「ここは同年代の鋼牙に任せた方がいいだろう」

ここからいつも通り

要side

料理が始まって2時間程してみんなが料理を持って戻ってきた。随分いろいろと作ったな。細切れにして炒飯に混ぜたやつだったり、ポタージュにしたやつだったり、流石としか言いようがないな。

「じゃあヴィヴィオ、食べてみようか」

「う〜」

物凄い嫌そうな顔をしてるな。だからといって食べさせないなんて選択肢はないけどな。

「やっぱり無理に食べさせるのは……………」

優の奴は甘いな。そんなだからハーレムを作るんだ。人の事は言えんけど……………」

「まーちゃん」

「いただきます」

「えっ？ちよつ、待つ！？」

アツーーーーー！！！！

優はまーちゃんに別室へと連れ去られていった。さあ食事を再開しよう。まずヴィヴィオは炒飯を食べだしたが、見事に細切れピーマンを除外していた。

「こらー！！ちゃんと食べなさい！！」

「無理！！」

ならばスープはどうだ？これならピーマンが見えないし、除外するという選択肢はないはず。

「スバルお姉ちゃんにあげる」

「わー、ありがとう」

「ちよい待て！！」

まさか人に譲るだど！？スバルも平然と食べるな！！

その後もヴィヴィオは必死にピーマン料理を回避していった。そして残るはサラダのみ。

「ちよつとみんな集まってくれ」

そう言つて俺はみんなを集めた。そこで俺はある作戦を伝えた。

「鋼牙にピーマンを食べてもらいみんなで褒める。多分ヴィヴィオはそれを見て嫉妬するはずだ。そうしたらきつと自分に注目を集めようとしてピーマンを食べると思う。協力してくれ」

『了解』

さて、どうなるかな？とにかく作戦実行だ。

「ヴィヴィオが食べないなら鋼牙に食べてもらおう」

「いいよ」

「いただきます」

鋼牙はあっさりとピーマン入りのサラダを食べる。ヴィヴィオにもこうなつて欲しいな。

「流石は鋼牙だな」

「黄宇お姉ちゃん、ピーマンくらい食べれるよ」

「いやいや、偉いぞ」

みんなが鋼牙の周りに集まる。これでヴィヴィオは嫉妬するはず。

しかしヴィヴィオの頭にあったのは嫉妬ではなくある方程式だった。

（みんな鋼牙に注目〓目立ってない〓地味〓出番無し〓アリシヤ）

「私も食べる！！」

おおっ！作戦成功だ！

（違います）

そしてヴィヴィオはピーマンを食べた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・美味しい」

やったー！！ようやくヴィヴィオがピーマンを食べた！！しかも美味しいときたもんだ！！

「私の子であるまーくん達が作った新鮮なピーマンだからな」

「ゼフィリスさんって、親バカ？」

フェイト、そんな事言つもんじゃないぞ。とにかくよかったよかった。

「みんな、ありがとう」

「気にするな」

「そうそう」

鈴とユリがそう言う。するとみんなの下に魔法陣が現れた。もう帰るんだな。そう思った時、全員が同時に言った。

『また今度』

……えっ？また来るの？

ヴィヴィオがピーマンを克服した喜びと同時に、僅かな胃痛を感じた俺であった。

## 完結&200万記念企画第一弾（後書き）

<まーくとアリシヤの部屋>

ま「ヴィヴィオちゃん、ピーマン克服おめでとう」

ア「そんなに私達が嫌!？」

シヤ「酷いわ!！」

ま「ハハハ、フォロー出来ません」

ア「もういいわ。気にしたってしょうがないし」

シヤ「そうね。そういえばお知らせがあるんでしょう?」

ま「ええ、模擬戦に関してですが、トーナメント形式になりました」

ア「なんでもキャラが多い。チートどもが乱戦したら世界が壊れるなどの理由だそうよ」

シヤ「それと次回作の出演キャラは、遠野志貴、クラトス・アウリオン、アルクエイド・ブリュンスタッド、射命丸文でほぼ決定だそうよ」

ま「では次回もお楽しみに」

完結&200万記念企画第二弾(前書き)

卒業試合ですよ。

ちよっとな長いですよ。

魔王ですよ。

## 完結&200万記念企画第二弾

要side

さあ今日で機動六課の解散だ。そういう事なので、フォワード陣の卒業試合が行われる。思えばここまで長かったな。フォワード陣を訓練で鍛えて、実戦で鍛えて、パッチで鍛えて、スカリエッティに勝ったんだよな。

「よくやったよな」

あいつらがあそこまで強くなるとはな。いや、勝てるとは思ってたよ。ただあんな圧勝をするとは思わなかったんだよな。少し昔の事を思い出してみるか。

初めてフェイトがエリオとキャロを連れて来た時は驚いたな。その若さで母親かよ！？って感じでさ。まあ二人共いい子だったよな。

スバルは空港火災で助けたのが始まりだったな。あの時から俺に憧れてたって聞いたな。憧れから恋人か。一気に飛んだな。

ティアナは訓練校で会ったのが初めてだったな。あの頃から十分実力も苦勞もしてたな。スバルの相方なんてしてたからツツコミ上手だし。………戦闘に関係ないな。まあ一番の努力家だな。

「さあそろそろ時間だな」

最後の試合だ。あいつらを揉んでやるとしますか。

訓練場に着くと、既にみんなが集まっていた。

「遅いよ要くん」

「悪い悪い」

5分前に来たんだが、みんなやる気があるな。セツトアップも済んでるし、俺もさっさと準備しないとな。

スバル side

遂に卒業か。もつとこのメンバーでいたいけど、しょうがないよね。でも要さんとはこれからも……

「エへへ」

「スバル、そのだらし無い顔はやめなさい」

ティアがそんな事言うけど、好きな人と一緒にいるのを想像すると楽しくて楽しくて。

「エへへ」

「これは重症ね」

そういえばなのはさん達に勝てるのかな？私達もそこそこ強くなっただけど、正直勝てる自信がないんだよね。

「フォワード陣にはギンガと久遠ちゃんに入ってもらうからね」

あつ、そうなんだ。なら少し安心出来るかな。だからといって油断は全然出来ないけど。

「じゃあ始めようか」

なのはさんがそう言ってみんなが構えた。勝てないまでも絶対に追い込んでみせる。

要side

こうして改めて見ると、全員成長したな。構えや雰囲気も初めて訓練した時とはレベルが違うな。

『では、始め！！』

シャーリーの相手で全員が行動を始める。まずは久遠が仕掛けてきた。

「地雷矢・極！！」

地面から巨大な雷が出てきて俺達を飲み込んだ。だがなのはがディストーションフィールドを地面に展開させて雷を防いだ。だがその

間に姿をくらまされた。

「んじゃ、捜しますか。アリストテレス」

《了解。サーチ開始》

「お前らも適当に捜してくれ」

「」「」「了解」「」「」

なのは、フェイトは上空へ。ヴィータ、シグナムはビル群へ走っていった。さて……………

「久遠、出てこい」

「バレてたんだ」

《流石は要だね》

魔力も気配もしっかり抑えていたが、戦場だと今くらいのはいたからな。

「やろつか」

「うん」

《プラスマランサー！！》

まずは避け続けるか。それで隙が出来たら叩けばいい。……………  
……………そういう訳にもいかな。

「シールドスライサー（改）！」

何もない空間にシールドスライサー（改）を投げると、何かに弾かれた。まあその何かはわかってるんだが。

「やっぱり気付きましたか」

「ちょっと距離があったから気付きにくかったが、気配が隠せてないぞ」

しかし俺に二人ぶつけてきたか、しかも万能タイプ。これは面倒だな。

「グアアアア！！！」

おっ、あれはヴォルテールとブルーアイズか。戦ってるのはなのとフェイトか。

「ヴァジュラ！！」

「ファントムブレイザー！！」

「っと、ルーフシールド」

左右から飛んできた二つの砲撃を受け流す。

「危ないな」

「余裕ですね」

まあ常に心には余裕を持たないとな。でもチートもとの戦いは例外だけだ。

「ん？」

久遠の姿が消えた？幻術を使ったのか。気配を感じるとはいえ厄介だな。

「うおっ！？」

向かってくる気配を感じたので避けたのだが、僅かに切り裂かれた痺れもある。雷爪か。しかし姿が見えんとやりにくい。ならば先にティアナを……

「って、あれ？」

ティアナの姿も消えていた。面倒だな。どうしよう。

「ほいつ」

俺は自分の周りに魔導式手榴弾を投げた。そして爆発を起こし、砂煙が舞う。これなら多少はわかりやすいだろ。そして煙から何かが飛び出してきた。

「ちっ」

《シールド》

シールドにぶつかったのは狐火であった。小癩な。これじゃあ煙の

意味がないだろ。もしかして自分を自分で追い込んだ？

ティアナside

砂煙の外から久遠さんと攻撃を続ける。向こうにはこちらを攻撃する手段がない。なら今のうちに倒さないと。

「ティアナ、終わりにするよ!!！」

「了解です!!！」

ならやっぱりあの攻撃が一番いいかな。

「充電完了」

《レールガン》

「雷光百華」

《ライトニングレイン》

私と久遠さんの同時攻撃。これだけの威力なら要さんでも倒せるはず。煙が晴れた中心には倒れた要さんがいた。

「やったね!!！」

「はい!!！」

もう姿を消す必要はないので幻術を解く。

あの要さんが倒せるなんて、よし、次はなのはさん達を倒す……  
・・わよ？

「ティアナ!？」

久遠さんの声を聞きながら私は意識を手放した。

要side

危ないな。あんな攻撃を受けたら死ぬるぞ。非殺傷だから大丈夫だ  
けど。

「なんで!？あそこに倒れてるのに!！」

「あれ偽物」

あれは俺に似せて作られた人形だ。俺が喚べば一瞬で転移するよう  
になっている。すずかが作ってくれた便利アイテムだ。転移は人形  
以外にも魔導式シリーズはほぼ可能だ。ちなみにティアナはサイレ  
ンサー付き魔導式ハンドガンで倒した。

「さあ、終わりにするぞ」

「簡単に終わらせないよ」

お得意のオラオララッシュでもやるか。姐己のオートガードを破っ  
てやる。

「オラオラオラオラオラオラア!！」

《無駄無駄無駄無駄無駄無駄あ！！》

くっ！ノリのいいデバイスめ。しかも全て防ぎやがって。

「狐火！！」

《シールド》

久遠の狐火をアリストテレスが防ぐ。これじゃあじり貧だな。姐己が防げない攻撃をしないと。……よし。

「ほいつ」

ポフン

俺がある玉を投げると、玉が破裂して白い煙が出た。すると……

・

「zzzz」

《久遠！？》

久遠が寝た。俺が使ったのは催眠ガス玉。俺はすっかりガスマスクを付けたから大丈夫。しかしやっとな勝てたな。なのは達はとうなつたかな。

フェイス side

まさかキャラロが竜を2体同時に使役出来たなんて。

「なのは！後ろで砲撃の準備して！」

「わかった！」

なのはの砲撃なら多分倒せる。私はそれまで時間稼ぎをしないと。

「ソニックムーブ」

高速でヴォルテールに近付き、切り裂こうとした。けどその攻撃は受け止められてしまった。

「エリオ！？」

「させません！！！」

そうだよね、キャラロが一人で戦うわけがない。エリオが近くにいるのは当然だ。

「秋沙雨！！！」

「遅いよ！！！」

エリオの連続突きを間合いを離して避ける。私はフォトンランサーでエリオを攻撃する。

「破魔の紅薔薇！」

《ゲイジャルグ》

だけどストラダに掻き消される。要のパッチは本当に厄介だ。親代わりとして負けない。

「ソニックフォーム！！雷速瞬動！！！」

超高速移動でエリオの後ろへ回る。そのままバルディッシュを振り下ろす。

「ハアッ！！！」

「くっ！？」

《ソニックムーブ》

ぎりぎりの所で避けられたけど、右腕を斬ることが出来た。これでまともにストラダは振れないはず。

「私の勝ちだよ」

「まだです！！！」

《ソニックムーブ》

逃げる！？いや、違う。ある程度距離を離れたら止まった。何をするつもり？

「その心臓、貰い受ける！！！」

《ゲイボルグ》

エリオは上に跳び、ストラーダを脚で投げた。速いけど、軌道が直線的だ。これなら簡単に避けられる。私が横へ飛ぶと、ストラーダは追跡してきた。くっ、この速さで追尾されたら避けられない。

「なら、墜とす！！！」

バルディッシュをザンバーフォームにし、巨大剣を作る。

「ライオットザンバー・カラミティ！！！」

剣と槍がぶつかる。凄い衝撃が腕にくる。こんなに強くなってたんだね。だけど勝たせてもらっよ。

「ハアアアア！！！」

バキーン

ザンバーが折れたけど、打ち落とした。

「今度こそ勝ちだね」

「そうですね」

でもザンバーが折れるなんてショックだな。もっと強くならないとすぐに追い抜かれちゃうな。そういえばなのはどうなったんだろ？

「「ギユアアアア！？」」

「「えっ？」」

2体の竜がピンクの砲撃に撃ち抜かれていた。なのははまだ余裕みたいだ。

「ベルレフォーン！！」

「グオオオオオ！！」

キヤロが別の竜、バハムートに乗ってなのはに突撃している。なのはは一つの魔力弾を作っていた。ってあれは！！

「ビッグバンブレイカー」

ドゴオオオン

「「キヤローー！？」」

あの時より威力が全然低いとはいえ、真っ直ぐ突撃してくる相手にそれはないよ！！だから悪魔だの魔王だの冥王だの言われるんだよ！！

ヴァイタ side

ドゴオオン

「……………シグナム」

「言っな」

なのはの奴、卒業試合で殺す気か？後で要にお仕置きしてもらわねえと。

「やああああ！！！」

「おつと」

スバルが後ろから殴り掛かってきたが、シールドで受け止める。だけどシールドは砕かれた。振動拳とかいうのか。

「セイツ！！！」

「あめえ！！！」

スバルの拳をアイゼンで受け流す。まともには受けたらちょっとマズイな。

「シグナム!!」

「悪いがこちらにはこちらの相手がいるようだ」

ギンガがビルの影から出てくるのが見えた。ちっ、手伝わってもらおうと思ったのに。

「まあいい、さっさと終わらせるぞ」

「そうですね。私の勝ちで」

言ってくれるな。どっちが上かしっかり教えてやる。

「大槌小槌、劫火灰燼・火判!!」

地面にアイゼンを叩き付けると、マル火の字が現れ、そこから炎蛇が飛び出してきた。

「獅子戦吼!!」

だけどその炎蛇もスバルが放った獅子の形をした魔力で掻き消された。

「やるな!!」

「ここからですよ!!」

あの構えは、中国拳法か？詳しくはよくわからんからなんとも言えんが。

「私が得意な太極拳をお見せします」

太極拳？あの中国で朝に爺さん達がやってるあれか？

「ハアツ！！」

「なっ！？」

速い！？太極拳って名前から油断した。拳が少し掠ったけど、まとも当たったらやられてたぞ。

「ラケーテンハンマー！！」

「デイバインバスター！！」

あくまで相殺してくるか。なら相殺出来ない攻撃をしてやる。

「アイゼン！！」

《ゴルディオンハンマー》

これをどうにか出来るならどうにかしてみやがれ！！

「オーバードライブ！！」

スバルの魔力が一気に上がる。あれが制御した暴走モードか。

「ゴルディオン……クラッシュャー！！」

「発勁！！」

スバルが放った拳があたしのハンマーとぶつかる。ハンマー越しか  
らも伝わる衝撃。ゴルディオオンクラッシュャーでもないと負けてたな  
でも……………

「あたしの勝ちだ!!」

スバルを吹き飛ばした。

シグナムside

ギンガは既にデバイスをシェルブレット・第二形態にしている。

「行きます」

「来い」

ギンガが殴り掛かってくる。型もすっかり出来ているし、威力もあ  
る。見事だ。

「だが私も負けん!! 夢幻!!」

私はレヴァンティンによる連撃を放つ。これもパッチによる技だが、自身の技量で威力が変わる。だがギンガは全て防ぎきる。

「ならば、殺劇舞荒剣!!」

「ぐう!?!」

炎を纏い、斬撃と打撃の連撃を加える。流石にこれは防ぎきれず、ギンガが吹き飛ばされた。

「そこだ! 鳳凰天駆!!」

「シエルブリット・バースト!!」

くっ、相変わらず凄まじい威力だな。押し返されてしまった。

「ここからです!! 破山砲!!」

「ガッ!?!」

ガードをしたというのに吹き飛ばされてしまった。マズいな、今のをもう一度打ち込まれたら負けるやもしれん。

「これで最後です!!」

「こちらもだ」

「崩山彩極砲!!」

「火剣・燕返し!!」

三つの斬撃のうち二つは掻き消されたが、最後の一撃でギンガを沈めた。

「これで終わったな」

ヴィータは終わったようだが、他は済んだだろうか？

要side

結局隊長陣の勝利だったが、苦戦したな。一部魔王という例外もいたが。

「うー」

「そのまま正座してろよ」

全くなのはめ。キャラのトラウマに間違いなくなったな。可哀相に。

「まあこの馬鹿はほっといて、結果を発表する」

「」「」「」「」「」

そんな緊張するような事でもないだろうに。

「合格だ」

「「「「やったー!!」「」「」

ハハハ、こいつらは卒業試合で落とすような事はしないっての。だ  
けどまあこいつらの成長が本当によくわかった。これなら他の部隊  
でも恥じない働きが出来るだろう。

完結&200万記念企画第二弾(後書き)

<まーちゃんとアリシャの部屋>

ま「今回は私ですわ」

ア「最近更新遅くない？」

シャ「作者がerror toh にはまり出したそうよ」

ま「最低ですわね」

ア「書きなさいよ」

(申し訳ありません)

シャ「今回は卒業試合でしたね」

ア「なのはが魔王だったけど」

ま「あれは酷すぎますわ」

シャ「次回は慰安旅行」

ア「要がハーレムを引き連れて温泉へ」

ま「ゲストもいますわよ」

**完結&200万記念企画第三弾(前書き)**

目立てないキャラが何人もいます。

先に謝ります。すみません。

## 完結&200万記念企画第三弾

要side

卒業試合も終わって、暇になったな。久しぶりだな、こんな時間があるのは。温泉かどこかにでも行きたいな。

「要くん、いる？」

「なのはか。どうした？」

「エへへ」

なんだかにやけながらなのはが部屋に入ってきた。どうしたのだろうか。

「ジャシャン！！」

「おお！それは！！」

なのはが出したのは温泉の割引チケットだった。どこで手に入れたかはしらんがよくやった。

「みんなで行くこうぜ」

「えっ？あ、うん」

ん？なんか戸惑ったけど、まあいっか。

さあ来たぞ、温泉旅館。やっぱりこの日本の雰囲気はいいね。ミッドも最近こういうの増えたよな。

「要、早く行こー!」

「そうですね!」

「お前ら少し落ち着け」

一緒に来たのは、なのは、久遠、スバル、ヴィータ、フェイト、すずかだ。他の奴らはなんか辞退した。みんな、休んできて下さい。って言ったな。

「あそこに温泉卵がありますよ!」

スバルの奴、はしゃいでるな。まだ受け付けを済ませてないっての。ん?温泉卵は外で売ってるからいいのか。

「とりあえず受け付け行ってからな」

「はい」

「すみません、予約した者ですが」

「はい、お名前を」

「一条要です」

「………ありました。一条要様ですね。人数は20名」

「はい？」

20？俺となのは達を合わせても7だぞ。何となく嫌な予感がしたので振り返ると………

ゼフィリス、吼太、リーム、飛翔、ソウヤ、オルタ、ゼクト、カイト、黄宇、鋼牙、紅蓮、龍斗、水籬の計13人がいた。お前ら何してやがる。胃が痛くなってきた。

「どうした？要」

「何故いる。何故予約が書き換えられてる」

「それは俺が説明しよう」

そう言ってきたのはカイトだった。こいつだな、絶対。つーかこいつ以外出来んだろ。

「別にいい。全部お前だろ？」

「よくわかってるな」

レイ以上のチートなくせに何言ってるやがる。もういい。温泉に入ろう。

「なのは、温泉に行ってる」

「うん」

ゆっくりしてえ。

なのはside

要くんが胃を押さえて温泉に向かって行った。大丈夫かな？

「なのは、説明してなかったの？」

フェイトちゃんがそう聞いてくるけど、忘れてたんだよね。

「にははは………」

「しっかりしろよ」

「だったらヴィータちゃんが言うてくれれば………」

「お前が連絡受けたんだろ」

うつつ、確かにそうだけど………実は要くんに伝えた後、カイトさんから連絡があつて、いろいろな人が来る事になつたんだよね。

「では私達も温泉に入るか」

「ゼフィリス大丈夫？」

「久遠ちゃん、それは何が言いたいんだい？」

「………何でもない！鋼牙、遊ぼう！」

「うん！」

久遠ちゃん、言いたい事凄くわかるよ。ゼフィリスさんどう見ても女の人だもんね。男湯に入ったら大変な事になりそう。

「貴様は女湯に入る方が自然だな」

「こらっ！オルタ！」

「気にするな。私も理解している」

そう言いながら米囁をびくびくさせてるゼフィリスさんが怖い。

「俺も入るかな」

「だったら僕と一緒に」

「ここは混浴じゃないの」

リームちゃんの気持ちもよくわかるよ。私だって混浴なら要くんと・

「デヘヘ」

「なのは、戻ってきて」

「とりあえず全員温泉に入ろうじゃないか」

カイトさんがそう言う。まあ温泉旅館に来たんだから入らないとね。

要 side

あー、胃が痛い。あいつらが何をしたいのかわからん。

「よし」

「カイト、か」

こいつのせいなんだよな。くっ、絶対に勝てないから何も言えない。というか男性陣みんな来たな。そういえば飛翔が一人なんて初めてだよな。

「飛翔、何で一人なんだ？」

「俺だってたまには一人になりたいさ」

うーむ、こいつも苦労してんだな。

「早く入ろうよ」

「そうだな、鋼牙」

まあのおんびりするか。

温泉はいろいろとあり、俺らは露天風呂に入っているのだが・・・

「ああ、気持ち良いな」

「ゼフィリス、現実逃避はやめろ」

さっきからゼフィリスを見る人がどんどん前屈みになっている。まあ理由はわかるが、前屈みになりながらもじろじろ見るのはどうかと思うがな。

「大変だな」

「なら代われ」

「吼太に頼め」

「何!？」

まあ流石に冗談だが、俺に女っぽいのは似合わんだろ。吼太ならまだ子供だし、もしかしたら似合うかもしれんぞ。

「ねーよ!?!」

「心を読むな」

全く、最近の子供は礼儀がなっていないな。

「おつ、酒あんじゃねえか」

「紅蓮、はしたないですよ」

「構わんよ。酒など飲むものだ」

ああ、ゼフィリスの酒だったか。誰が持ってきたかと思ったが、しかしこの温泉で酒飲んでもいいのか？まあ飲むけど。

「ソウヤとカイトも飲むか？」

「貰おうかな」

「何処の酒だ？」

「月の都のと鬼の瓢箪だ」

おいおい、大層じゃ済まない酒じゃないか。よく持ってるな。漫画の世界のもんだと思っただが。……この世界がアニメだったな。

「なら宴会だ！」

「飲むぜ！」

「鋼牙と吼太は飲まないようにして下さいね」

「はい」

「俺も飲みたかった」

そついや吼太も転生者だったな。元は何歳だったんだろうか。まあこの場では関係ない事だが。

「ソウヤはどうするよ」

「飲むよ。珍しいしな」

やっぱり珍しい酒は飲みたいよな。あれ？さつきから飛翔が参加してないな。どうしたんだ？

「飛翔は何処だ？」

「さつきサウナに行ったぜ。汗を流したいんだとさ」

誘うべきか、否か。手っ取り早く念話で聞いてみるか。

『飛翔、聞こえるか？』

『聞こえるが、どうした？』

『これから露天風呂で酒飲むんだが、参加する？』

『………させてもらおう』

これで未成年以外全員参加だな。さあ飲むぞ。

酒を飲み始めて少しすると、まずは飛翔がダウンした。

「グウ」

「飛翔は弱かったのか」

「いやいや、お前らの短時間での飲酒量が異常だからだろ」

吼太がそう言うが、たいしたことないと思うが。確かに鬼の瓢箪を回し飲みした時はちょっと飲み過ぎかと思ったが、今思うとたいした量じゃないし。

「でも弱いのになんで飲んだのでしょうか？」

「飲まなきゃやってけないんだろ」

何があつたかは聞く気はないんだが、苦労してんだよ。きっと。

「大変だな、お前らは」

「カイト、他人事だな」

「他人事だもん」

まあカイトらしいっちゃ、カイトらしい答えだな。ゼフィリスは何してんだろ。

「あんだ強いんだろ？なら俺と戦えよ」

「……………ハア」

紅蓮に絡まれていた。お疲れ様。なのは達も楽しんでるのかな。

なのは side

ふう、たまにはのんびり温泉もいいね。なんだかおばさん臭いけど。

「久遠は髪が綺麗だね」

「ありがとう、黄宇お姉ちゃん」

向こうはのんびり髪を洗ってる。久遠ちゃんの髪は確かに綺麗だね。

「皆さんに聞きたいのですが」

ん？水薙さんどうしたんだろう。

「皆さんは交際は順調ですか？」

「へ？」

まあそりゃ順調だけど、なんでそんな事を聞くんだろう？

「ハーレムなんて珍しいですから」

「そうだよな。吼太もハーレム作りそうだし、参考に僕も聞きたいな」

リームちゃんもか。でも参考になるのかな？

「みんな愛されてるよ」

「でも要って意外と激しいよね」

「一人だときついかな」

「要さん体力あるもんね」

「夜について話してどうすんだよ」

ヴィータちゃんにツッコまれたけど、そう言う話をするものじゃないの？女の子同士なんだから別に問題もないだろうし。

「要もやるのぉ」

「ソウヤももつと大胆になっても良いのだが」

「やはは、やっぱり女の子はリードして欲しいよね。」

「クー」

「おや？お眠かい？」

久遠ちゃんが眠そうにしている。そういえば結構長い間温泉に入ってるもんね。

「じゃあそろそろ出ようか」

要side

「「「「あゝ「「「「」

俺とゼフィリスとソウヤと龍斗は温泉から上がってマッサージ機に座っている。気持ち良いわ。

「鋼牙は牛乳でいいか？」

「うん」

向こうではカイトと鋼牙と紅蓮と吼太が風呂上がりの一杯を飲んで  
いる。カイトと紅蓮はラムネ、鋼牙は牛乳、吼太はコーヒー牛乳だ。  
ああ、飛翔は部屋送りだ。

「みんな上がったんだ」

おつ、なのは達も上がってきたな。全員揃ったな。

「さて、何する？」

「解散でいいだろう。それぞれやりたい事もあるだろうし」

『賛成』

ん〜、俺は何しようかな。

(面倒なのでカットします)

あ〜、疲れた。温泉に入って疲れ取ったのに買い物に付き合わされ

て疲れた。だから現在部屋で休んでいるんだが……

「エへへへ、要く〜ん」

「誰だ、なのはに酒飲ませたの」

こいつ酒癖悪いんだよな。いきなり部屋に入ってきて抱き着きやがって。嫌じゃないけどな。

「もう寝ような」

「あ〜い」

可愛いな、もう。

朝起きるとなのは以外にも、フェイト、ヴィータ、すずか、スバルが引っ付いていた。暑い。

「うーん」

「おはよう、すずか」

「オハヨー」

ハハハ、眠そうだな。まあまだ朝早いしな。

「チュー」

「んぶっ!？」

いきなりキスされた。こいつ、まだ寝ぼけてるな。

「起きろ!」

「へブッ!？」

目覚めのチョップをかましてやった。

旅館を出て今から帰るわけなんだが……

「なんでお前らもついて来る」

『別に』

まあいつか。今更こいつらがついて来て困るような事はないしな。

「ただいま」

『おかえり』

はっ？なんだ今の返事は。随分と沢山の声が聞こえたが、ただ六課全員が集まってるだけだよな。そうだよな。そう希望を持ってドアを開けた。そこには………

なんかいろいろと異世界メンバーが集まっていた。

ズキィ

「又オオオオオ！！？」

突然胃が異常に痛んだ。胃痛どころの騒ぎじゃないぞ。

「要くん！？」

「なのはちゃん、下がって」

ゼフィリスが俺に触れているようだ。とにかく痛くて堪らない。

「これは……………胃に穴が開いてるな」

『遂に！？』

てめえら、覚えてろ……………

このあと俺は病院送りになってしまった。もちろん病院でなのは達の争いがあったのは言うまでもない。

完結&200万記念企画第三弾（後書き）

<まーくとアリシヤの部屋>

ま「こんにちは、お元気ですか？」

ア「最近3日更新ね」

シヤ「それで頑張ってるそうよ」

ま「今回は温泉でした」

ア「総勢20名、多いわね」

シヤ「仕方ないわよ。作者が了解しまくったんだもの」

ま「あんまり出れなかった人、すみません」

ア「今回は遂にお楽しみの模擬戦よ」

シヤ「何部分か分かれると思うわよ」

ま「ではお楽しみに」

完結&200万記念企画第四弾 その1(前書き)

うっへ、難しいよ。

結局3試合しか書けなかったよ。

## 完結&200万記念企画第四弾 その1

### 要side

病院から帰ってくると、そこは不思議空間だった。

『皆さんこんにちは、全コラボキャラ集合!!模擬戦の時間ですよ』  
この声、神様か。何やってんだこの人は。というか模擬戦って、聞いてないぞ。六課メンバーも一部いるし。

『今回はトーナメント形式でコラボキャラの皆さんに試合をしても  
らいます。勝利条件は、相手が意識を失うか、敗北を認める事。万  
が一死んでも魂がある限り死者蘇生が行われるからご安心を。では  
注目のトーナメント表はこちら!!』

### 第一回戦

暁優 VS シグナム

### 第二回戦

ヒスイ・ハーツ VS 南武貴史

### 第三回戦

カスミ・ヴェネーラ VS フェイト・テストロッサ

### 第四回戦

朝倉貴哉 VS 蒼神双夜

第五回戦

吉谷吼太 VS スバル・ナカジマ

第六回戦

ゼフィリス・エーデルフェルト VS 高町なのは

第七回戦

アキラ・シュヴァイアー VS ティアナ・ランスタール

第八回戦

御神百合姫 VS 如月刹那

第九回戦

御剣一真 VS エリオ・モンディアル

第十回戦

不破飛翔 VS ヴィータ

第十一回戦

一条要 VS レイ・ツアイベル

第十二回戦

神北鈴 VS 近衛薫

第十三回戦

久遠 VS 林恭介

シード席

七宮亮

『という組み合わせになっております』

ちっ、いきなりレイかよ。相手が悪いな。他もとんでもない組み合わせも多いな。

『これは作者のあみだクジで決まったから文句は言わないでね』

これが全て偶然の組み合わせなんだよな。運がいい奴、悪い奴がいるもんだ。そっぴや何人か出てない気がするんだが……

『解説には、飛翔ファミリー、カイト組、林優奈、ツカサ・K・ストレガーにやってもらいましょう』

ああ、解説をやるのか。まあいいと思うぞ。うん。

『では早速第一回戦から、スタート……!』

優side

いきなりレイに連れてこられたと思ったら、なんでこんな事をしないといけないんだろう。

「ではやるつか、暁とやら」

「ハハハ……」

まあいくら世界が違うからってシグナムの実力が大きく変わるなんてないだろ。

「ナイトハート」

「レヴァンティン」

「「セットアップ……」」

どうやって攻めるか。向こうは剣、俺は大剣。機動性なら向こうが上だから、カウンターでもするかな。

「来ないのか？ならば、こちらからいくぞ……」

距離は10m程離れている。この程度ならすぐに間合いを詰められるかな。

「魔神剣!!」

「おっと!!」

地を走る斬撃か。こんな技が使えるんだな。思わず俺は避けるために上に跳んでしまった。それをシグナムは見逃さなかった。シグナムはレヴァンティンを弓にし、矢をつがえた。

「翔けよ、隼!!」

「くっ!?!」

放たれた矢をなんとか受け流す。だがその間にもシグナムは近付いてきて、攻撃を仕掛けてくる。

「殺劇舞荒剣!!」

「こんのお!!」

シグナムの連撃に合わせて攻撃を打ち込んで相殺する。

「喰らえ!!」

「むっ!?!」

空中に剣を創り、シグナムに降らせる。全て捌ききられるが、その

間に大剣から銃へとデバイスを変形させる。

「イミテーション……バスター!!!」

直撃！これで決まった。そう思ったが、煙が晴れると、そこには緑の球体に包まれたシグナムがいた。流石に無傷ではないが、この距離で砲撃を受けたとは思えない程、ダメージが少ない。

「粹護陣。相変わらずパッチは役に立つな」

なんですか、パッチって。やっぱりこの世界はなんかおかしい。

「終わりにしようか。火剣」

この感じ、マズイ！！シグナムがどんな技を使うかわからないけど、とにかく放たれるより速く潰す！！

「バルディッシュュ!!!」

《ソニックムーブ》

「なっ！？バルディッシュュ!?!」

俺がバルディッシュュを使うなんて思いもしなかったのが、シグナムの集中が途切れた。その瞬間、俺は顎を殴り付けた。

「うっ……」

顎を殴られたシグナムはそのままダウンした。これで勝ったよな？

『勝者、暁優』

あー、よかった。でもまた試合をしないと駄目なのか。

### 解説席

神『では皆さん、今の戦いはどうでしたか？』

アリサ「男でフェイトのバリアジャケットが似合っるのはどうかと思  
うわ」

アリシア「同感ね」

龍斗「それは置いといて、まあ予想通りでしたね」

紅蓮「スペックがちげえしな」

ツカサ「お二人共凄かったですよ」

カイト「だが、優は手札を一つ晒したな」

すずか「それが次の戦いにどう影響するかだね」

神』では第二回戦に移りましょう』

貴史 side

俺の相手はヒスイか。座談会とかじゃ会った事はあるが、実力は知らんからな。楽しみだ。隣にはシルフもいるな。二人一組なのか？

「いくぞ、シルフ」

「ええ、では」

「「ユニゾン・イン！！」」

ほおー、ユニゾンデバイス代わりか。精霊って役に立つな。ヒスイの武器はあの両手にあるボウガンか。となると、遠距離タイプかな。なら俺も……………

「さあいくぜ」

「それは……………要の銃か」

要から貰った魔導式の銃を俺の血で強化したやつだけだな。

「ほら」

「なっ!？」

銃から魔力弾ではなく、魔力砲と言っていい程の一撃が放たれた。ヒスイは咄嗟に避けたが、まだまだ弾数はあるぜ。

「ちゃんと避けるよ」

「くっ!ゲイルバスター!!」

流石に本当の砲撃には勝てんか。俺は銃を撃ってその反動で避ける。リボーンのザンザスみたいな感覚だな。

「槍荒鷗!！」

「当たらねえよ」

このまま一気に勝負を決めるかな。

ヒスイside

さっきの戦いでも思ったが、こんなレベルがごろごろいるのか。成る程、要も胃痛になるな。

「唸れ!風念!！」

《《ストリームアロー》》

無数の風の矢が貴史に向かっていくが、銃の反動を使った高速移動で避けられる。

「そりゃ！」

「ぐっ!？」

貴史が蹴りを繰り出してきた。接近戦に持ち込んできたか。一撃一撃が重くて速い。分が悪すぎる。

「風刃脚!！」

真空を巻き起こす蹴りを放つが、軽く避けられ、銃による反撃を受ける。

『シルフ』

『なんですか?』

『ゴッドブレスを撃てるか?』

『!?!?そんなものを放つては相手が』

『貴史は俺らが思う以上の敵だ。おそらく問題ない』

『………わかりました』

しかしそうになると動きを一瞬でも止めなければ………

「歌え、火の思念!!」

《フレアボム》

火球による爆発で視界を妨げる。

「バインド 槍鷗・縛!!」

バインドとデイレイの効果も追加した六本の矢を放つ。矢が通った時、一瞬煙が晴れ、貴史に当たったのが見えた。

「今だ!!」

『いつでもいけます!!』

「『ゴッドブレス!!』」

巨大な空気の塊が落とされた。いくらシルフとユニゾンしているからと言ってもゴッドブレスはきついな。でもこれで貴史も……

カチャ

「残念でした」

「………はっ?」

後ろから頭に銃を突き付けられた。あれを抜け出したのか?

「どっやって」

「お前が倒したのは赤い分身フレッディ・アバターっていう俺の分身だよ」

分身か。ここから反撃する方法も思いつかないし、俺の負けだな。

「まいった」

『勝者、南武貴史』

解説席

神『どうでした？』

優奈「貴史さんが余裕でしたね」

黄宇「最後はそうでもなかったぞ」

カイト「あの分身は貴志と同じくらい有能力だ。あれがやられたという事は貴史もやられる可能性があったという事だ」

水雉「まあ貴史さんも本気ではなかったでしょうけど」

リニス「ヒスイさんもよくやったという事ですね」

神『では第三回戦を始めましょう』

カスミside

まさか感想で言っていた事が実現するとはな。

「よろしくお願いします」

「ああ」

同じ顔だというのに反応が薄いな。つまらん。だがまあ要の世界のフェイトだからな。こういうのは耐性がないので試すのが一番だな。

「バルディッシュ、いくよ」

《イエス、マスター》

「どこからでも来るといい」

そう私が言うとフェイトは高速で接近してきた。まあ私達からすれ

ばたいした速度ではないが。

「魔法の射手・連弾・闇の50矢」

無詠唱だからそこまで強くはないが、この程度防いでくれよ？

「遅い！！」

ほう、全て避けるか。まあ追尾式だから避けても無駄だぞ。

「ラウンドシールド」

ある程度離れてから防いだか。では追加するか。

「闇の吹雪」

「サンダースマッシュャー！！」

私とフェイトの魔法がぶつかり合い、爆発を起こす。煙の中からバルディッシュをザンバーフォームにしたフェイトが飛び出してきた。

「ネオ・ライオネットザンバー・カラミティ！！」

「エクセキューションソード！！」

ザンバーごと斬るつもりで振ったが、鏝ぜり合いに持ち込まれた。ネオと言っただけあるな。

「サンダーブレイド！」

「氷盾」

フェイトが出した雷の剣を氷の障壁で防ぐ。しかし壊れてしまった。

「やるじゃないか！」

「そちらこそ！」

しかしそろそろ決めた方がいいな。

「レク・リク・ラク・ライネック、来れ、虚空の雷、薙ぎ払え」

「プラズマザンバー」

「雷の斧！！」

「ブレイカー！！」

二つの雷がぶつかる。なかなかの威力だが、私に届くにはまだ遠いな。私の雷の斧がフェイトのプラズマザンバーブレイカーを押し切った。しかしザンバーに押されたせいか、僅かに狙いがずれてフェイトには当たらなかった。

「私の負けです」

『勝者、カスミ・ヴェネーラ』

解説席

神『なかなかの勝負でしたね』

龍斗「魔力量の違いですね」

鈴音「ごり押しが出来ますからね」

カイト「とはいえ、技量もかなり違っぞ」

アリシア「でもフェイトちゃんも頑張ったよね」

紅蓮「格上相手によくやったろ」

ツカサ「僕もあれくらい戦えたらな」

神『では今回はここまで、次回からは5試合づつ進めていきます』

完結&200万記念企画第四弾 その1（後書き）

<まーくとアリシヤの部屋>

ま「こんにちは」

ア「多いわね」

シヤ「それだけ皆さん出てくれたという事ね」

ま「ありがたいですね」

ア「でも5試合づつってかなり時間がかかるでしょ?」

シヤ「調子がよければ増やすそつよ」

ま「では皆さん、お楽しみに」

ア・シヤ「さようなら」

完結&200万記念企画第四弾 その2(前書き)

みんな、待たせてゴメンね。

## 完結&200万記念企画第四弾 その2

神『皆さんこんにちは。早速ですが、第四回戦を始めていきましよう。朝倉貴哉VS蒼神双夜です』

貴哉 side

蒼神双夜か。よく知らないけど、ここにいるってことはチートなんだろうな。

「貴哉だったか？よろしくな」

「ああ、よろしく」

双夜が出したのは双銃だった。あれがあいつの武器か。

「アテナ、いくぞ」

「はい！！」

アテナをセットアップし、デュエルディスクを装備する。

「遊戯王か。懐かしいな」

「懐かしいのか？」

「不老不死だからよ」

ああ、成る程、不老不死からすれば昔の遊びか。だけどそれなら都合がいい。カードの効果なんていちいち覚えてないだろうしな。

「よしいくぜ！！カードを2枚伏せて『エルフの剣士』召喚！！攻撃！！」

「一言魔法、『爆発』！！」

エルフの剣士が双夜に切り掛かるが、銃から放たれた弾が当たり爆発した。

「避けられるか？一言魔法、『拡散』！！」

「甘い！トラップカード発動！！『聖なるバリア・ミラーフォース』！！」

双夜の拡散弾をミラーフォースで弾き返す。いくら威力が高くてもこいつなら全てを弾ける。

「ふん、一言魔法『追尾』」

双夜が一言呟くと、弾が曲がり、再び俺に飛んできた。

「ちっ、トラップカード発動！『攻撃の無力化』！！」

仕掛けておいたカードで弾を掻き消すが、やっぱりカードだと限界があるな。まてよ？あのカードならば……………イケる！！

「動きを止めさせてもらう！『光の護封剣』！！」

「ん！？」

3本の光の剣が双夜の周りに突き刺さり、双夜の動きを止める。準備を始めないと、もしかしたら護封剣も破られるかもしれない。

「『リビングデッドの呼び声』発動！墓地から『エルフの剣士』を特殊召喚！！更に手札よりカードを1枚、守備表示で召喚！！」

ここで光の剣が1本消える。双夜は抜け出そうと頑張ってるみたいだ。だけどこっちの準備はもうすぐ整う。

「手札より『クリボー』を召喚！！守備表示モンスターを攻撃表示に！！『メタモルポッド』のリバース効果発動！！手札を捨て、5枚引く」

来た！しかも豪華なオマケ付きじゃないか！！これなら勝てる！！護封剣の効果も後1ターン。でもこれで終わりだ！！

「知ってるか？昔、社長と呼ばれた人が言っていた台詞があるんだが……………貴様に神を見せてやる！！『邪神アバター』召喚！！！！」

フィールドにいる3体を生贄にして俺が召喚したのは黒い球体。こ

いつが召喚されて少しの間は相手は魔法もトラップも使えないし、こいつの攻撃力と防御力はフィールドの1番高い攻撃力+100だ。負ける事はまずない。

「更に『ミストボディ』と『レアゴールドアーマー』を装備!!」

ミストボディは装備したモンスターが戦闘では破壊されず、レアゴールドアーマーはこれを装備したモンスターしか攻撃出来ない。

「行け! 『邪神アバター』!!」

ソウヤside

貴哉の召喚したあの球体。少しマズイな。こっちは動きが封じられてるし、いきなり魔法が使えなくなった。とりあえず防御だな。

「くっ!?!」

ナイフでなんとか受け流したが、なんて攻撃力だ。そのおかげか、もしくは時間の為か光の剣が消えた。これで動ける。

「ハアツ!!」

ナイフで球体に切り掛かるが、弾かれてしまった。硬いな。ナイフじゃどうしようもないな。

「無駄だ。こいつは破壊出来ない」

破壊出来ない、か。なら『破壊』しなければいい。あいつも召喚してるんだから、俺も召喚していいよな。

「TYPE・MOONの鍵、発動」

魔力を使う道具だが、魔法でないから大丈夫だよな？まあやってみないとな。魔力を込めて……

「現れよ！！両儀式！！」

すると魔法陣が現れ、そこから式が現れた。

「ん？ソウヤか。どうした？また鍛えて欲しいのか？」

「力を貸してくれ」

「……いいよ」

そんなやり取りをしている間に球体が向かってきた。そろそろ魔法使えるかな。

「一言魔法、多重詠唱、『防壁』！！」

弾を放つと半透明の防壁が現れ、球体がぶつかった。

「やるぞ！式！！」

「ああ！」

「究極装填！！！！」

「なっ！？」

式を俺の体内に取り込んだ。その影響により俺の髪が黒くなり、眼は蒼くなった。貴哉はそれを見て驚いていた。まさか人を取り込むなんて考えもしなかったんだろう。

「神、と言ったな。いいだろう。生きているなら神様だつて殺してみせる」

「やれ！『邪神アバター』！！」

再び球体が攻撃を仕掛けてきたが、よく見えるよ。お前の『死』がトスッ

球体に存在する死点をナイフで突いた。すると球体は砂のように崩れて消滅した。

「そんな！？」

「隙ありだぞ」

「しまっ！？」

俺は貴哉を頭から地面に叩き付けた。普通ならこれで終わりだが、念には念をいれないと。

「一言魔法、『睡眠』」

「づぐ……………」

『勝者、蒼神双夜』

解説席

黄宇「ほら鋼牙、あーん」

鋼牙「あー、ん！」

神「そこの二人、お弁当は解説をしてからにして下さい」

すずか「でもこのお弁当美味しいですから」

アリシア「これ作ったの刹那だったよね。後で教えて貰おうかな」

龍斗「解説に戻しましょう。紅蓮はソウヤの勝因はなんだと思います？」

紅蓮「制限があるか、ねえかだろ」

カイト「貴哉は身体能力は高いが、あくまで主戦はカードだからな。身体能力も化け物というレベルでもない」

水籬「貴哉さんが武術を使えば結果は変わったでしょうね」

神『では第五回戦に参りましょう』

吼太side

俺の出番か。なんで参加しちやってるんだろ。まあ相手はチートじゃないからマシか。

「よろしくね！」

「よろしく〜」

まずは実力が知りたいからな。軽く仕掛けてみるか。

「鉄!!」

巨大な鉄球がスバルに向かって飛んでいく。どう対処するかな。

「どっせい!!」

バガアン

「んなっ!?!」

鉄を砕いた!?!どんな拳だよ!?!流石は要の弟子ってか?

「五雷指!」

「おっと」

スバルが放った雷を避ける。さて、どうするか。殴られたらマズイよな。

「やあっ!?!」

「シッ!?!」

スバルの攻撃をスバルが放った雷を避ける。さて、どうするか。殴られたらマズイよな。

「フラガラック!?!」

「ぬおっ!?!」

そんなものを出してくるのか!?!びっくりしたじゃねえか。

「今度はこっちの番だ!?!トウード!ダウロード、ナルガクルガ  
リアライズ  
!武装召喚!?!」

《了解。ナルガクルガ両手、両脚部を実体化。武装召喚》  
リアライズ

俺の両手足がナルガクルガのものとなる。

これで機動力はさっきまでとは比べものにならないレベルになった。

「いくぜ!!」

「速っ!?!」

一気にスバルに詰め寄り、ブレード状になっている腕の一部で切り裂き、駆け抜ける。

「ヤッ!!」

「ぐっ!?!」

上手くいったな。このまま体力を切れさせるか。そう思い俺は何度も切り続けた。一撃一撃は小さいが、積み重ねによりスバルも大分弱ってきた。だがしかし……

「オーバードライブ!!」

「んなっ!?!」

スバルの魔力が一気に跳ね上がり、駆け抜けようとしていた俺の脚を掴んだ。さっきまで全くだったのに、今は明らかに俺の速さに対応出来ている。

「捕まえた」

「ハハハ……」

「10倍返し!!」

「ぐあっ!？」

そう言つてスバルは俺の脚を掴んで、俺を地面に何度も叩き付けた。何度か叩き付けられた時、魔力の高まりを感じた。

「デイバイン……」

ちよっ!?!マジかよ!?!

「バスター!!」

スバルはデイバインバスターを地面に倒れている俺に叩き込んだ。

スバル side

ふう、ちよつとやり過ぎたかな。でもまあ要さんの知り合いだし大丈夫でしょ。

「審判さん、終わりました」まだ、だ」へっ?」

下を見ると吼太くんが私の脚を掴んでいた。よく見るとさっきまでとはまた姿が違う。何と言うか、岩?

「グラビモスのダウンロードが間に合つてよかったぜ。さあお返しだ」

「ハハハ……受けないと、駄目？」

「もちろん。バオウ・ザケルガ！！！」

巨大な雷に私は飲み込まれ、意識を無くした。

『勝者、吉谷吼太』

ツカサ「スバルさん、怖い」

アリサ「あれは酷いわね」

優奈「でも吼太さんの勝ちでしたね」

カイト「あそこでグラビモスの武装召喚が間に合ったのが勝因だな」  
リアライズ

紅蓮「だけど手札を隠さず出したらもつと余裕だったろ」

リニス「まだ手札があるのですか！？」

龍斗「詳しくは知りませんが」

神『ではお次は第六回戦。どうぞ』

ゼフィリスside

私はなのはちゃんとか。さて、この世界のなのはちゃんはどれほどの実力かな。

「ゼフィリスさん、行きますよ」

「どこからでも掛かってくるといい」

なのはちゃんはまず魔力弾を数発放ってきた。今更私に様子見か？

「ブレイク！」

バァン

「ぬっ！？」

私の近くで魔力弾が大きな音と光を放ち、爆発した。視覚と聴覚を潰しにきたか。だが私にそんなものは効かない。魔力を辿ればいい。

「・・・・・・・・上空か」

かなりの魔力が集まっている。スターライトブレイカーか？いや、それ以上だ。しかもまだ集めている。っと、感覚が回復してきたな。

「ビッグバン・・・・・・・・ブレイカー!!!」

あれは、魔力弾？その割に魔力は異常に多いし、速度は遅めだな。だが何があるかわからんからな。防ぐとするか。

「熾天覆う七つの円冠<sup>ロー・アイアス</sup>」

魔力弾がアイアスに触れた瞬間、先程とは比べものにならない巨大な爆発を起こした。

ドゴオオーン

「ぐぬ!!!?」

さつき事もあったから感覚が狂わないようにしていたが、まさかアイアスが全壊させられるとは・・・・・・・・私を中心に直径数kmを越えるクレーターが出来てるし。

「まだです!!!」

なのはちゃんは何処からかビットを出した。その数は軽く見積もっても100はありそうだ。

「シューティングスター!!!」

ビット一つ一つから砲撃クラスのレーザーが放たれる。それらを避けながら私は思った。なのはちゃんの魔力は確かに多い。だがこれほどまであったか？よく調べれば先程から魔力の減りが少ない。まるで誰かから供給されているかのように……

「要か!！」

なのはちゃんと要の間にラインが繋がっているのなら納得だ。要が一度に出せる最大魔力はA++だが、保有魔力はそれ以上だ。今のなのはちゃんに魔力切れはないと考えた方がいいな。

「これほどの魔力を扱いきる君の才能には脱帽だよ」

「エへへ、ありがとうございます」

「だからこそ、人である君と超越者である私の違いを教えてあげよう」

そう言っつて私はナイフを投げ付けた。もちろんなのはちゃんは簡単に避ける。だが……

「取った!！ブラウニング・スターマイン!！」

「きゃあ!？」

私はなのはちゃんの背後に現れ、ミスブルーが得意とするレーザー状の魔術を放った。なのはちゃんは地面に墜ちる途中で体制を立て直した。ダメージは少ないようだな。

「ナイフを媒介とした瞬間移動ですか？」

「一回で見破るか」

「純粹な瞬間移動は出来なくもないが、魔力を大量に消費するためこの方法を取ったが、これは驚いた。後数回は気付かれんと思ったが、これは油断ならんな。」

「シッ!!」

私はもう一度ナイフを投げる。なのはちゃんはさっきのを警戒して魔力弾で落とそうとしたが、ナイフを投げる時、鉄甲作用を使ったため容易に魔力弾を貫通した。なのはちゃんはなんとか避けるが、私は後ろに転移する。

「くっ!?!」

「ほら、がら空きだぞ」

「デイストーションフィールド!!」

ふむ、今度は防いだか。だが甘いよ。

「切り裂け! 絶世の名剣!!」

「そんな!?!」

その程度の防壁、たやすく切り裂ける。そして私は鎖を創りだし、なのはちゃんを縛った。

「ここから逆転する手はあるかい？」

「……………ありません」

『勝者、ゼフィリス・エーデルフェルト』

## 解説席

神『転移なんて使えるかどうかわからないのに使わせてよかったの  
ですか？作者さん』

雨『ゼフィリスだから大丈夫さ。さあ鋼牙、ツカサ、ベッドへ行こ  
うね』

カイト組（鋼牙除く）『消えろ！変態！！』

雨『ギャオス！？』

ツカサ『アワワ』

鋼牙『ぐちゃぐちゃ……………』

リニス「こんなもの見てはいけません」

アリサ「……………なのは、魔王だったわね」

すずか「アイアス破壊したね」

アリシア「アイアスって核にも耐えられるって記憶が……………」

優奈「十字架戦より強化されてますよね」

神『……………さあ次の試合、結果見え見え第七回戦に参りましょう』

アキラside

「ちよっ!?!?なんですか、それ!?!」

ティアナちゃんが神の発言にツッコむけど、ゴメン、フォロー出来ない。せめていい勝負になるよう加減をする事しか……………」

「アキラ、手加減するなよ?しよつものなら……………」

「イエッサー!!全力で行かせて貰います!!」

「そんなっ!?!」

ゴメンよ、ティアナちゃん。sixには逆らえないんだよ。もし逆らったら……ブルッ。

「ゴメン!」

「うわーん!レールガン!!」

ティアナちゃんの撃った電撃を剣で切り裂き一気に近付く。

「せいっ!?!」

「くっ!?!ダガーモード!!」

結構いい反応するな。だけどやっぱり近接戦は苦手みたいだね。悪いけど勝たせて貰うよ。

「隙あり!?!」

「あっ!?!」

ザンッ

剣がティアナちゃんの体を切り裂いた。……はずだったが……

「消えた?」

何かの魔法かな。見てみると三人に増えてるし。

「タイトバレット!!」

「レールガン!!」

「おおっ!?!」

二人のティアナちゃんが同時攻撃を仕掛けてきた。軽く避けたけど、二人共本物に見えるな。じゃあ残る一人も本物?

「ブラッククロウ!!」

「よっ!!」

ザンツ

三人、いや、さっきのを合わせて四人か。まあ同時に相手をすればいいだけの話だ。

「行くよ!!」

「マズッ!?!」

ザンツ

これで残るは一人。残ってるのが本体だな。

「ちあぶつするっ」

「まだ死にたくないんですが……」

「大丈夫、生き返らせて貰えるから」

という事で締めますか!!

「ハアツ!!」

「ぐうつ!?!」

……へえ、ランサー並の速さで近付いて斬ったのに防げたんだ。流石に武器が耐え切れずに切れたけど。

「僕の勝ち」

『勝者、アキラ・シュヴァイアー』

解説席

神『予定通り』

アリサ「まあ仕方ないわね」

黄宇「よく頑張ったではないか」

ツカサ「凄かったと思いますよ」

龍斗「格上相手によくやりましたよ」

優奈「そういえばあの分身したのは何？」

カイト「フォーオブアカインドだな。自分と同じ実力の分身を創る技だ」

神『では今回最後の試合、第八回戦を始めましょう』

刹那 side

姉貴との戦いか。でも今までの戦いを思い出すと、レベルが高すぎないか？

「さあやるつね、刹那」

「おう」

とは言ったものの、正直姉貴に何が通用するか。小細工よりかは暴力かな。となると、殴るか、暴食か、憤怒なんだが……

「憤怒の太刀!!」

やっぱり戦闘特化の能力が付くこいつかな。まだ暴食の鎌より使いやすいし。

「はあああ!!」

「いよっ、と!!」

高速で近付き首を狙うが、一瞬で後ろに回られる。そして掌底を放ってきた。

「穿天掌!!」

「甘い!!」

太刀を背中に回し受け止める。

「やるねえ」

「今のくらいは軽いさ」

俺達はもう一度間合いを離す。どうしたもんか。下手に攻めても駄目だし、大技つっても特にないし。

「いつくよ、斬天脚!!」

「ふっ!!」

蹴りから放たれる真空刃を太刀で切り落とす。武器を変えて戦いやすくするか。

「<sup>グライド</sup>強欲のナイフ」

正直素手が一番戦いやすいんだが、太刀に比べたらナイフの方がいい。それにこいつの効果、願いを叶える力と想いをカタチに変える力も便利だしな。

「願いを叶える。姉貴以上の身体能力を寄越せ」

「そんな面倒な事はさせないよ」

ちっ、願いに干渉してきたか。なら想いをカタチに変えさせて貰うか。俺の想いは……

「いかなるものも切り裂け」

これでなんでも切れるナイフになったはず。流石に姉貴もこれに干渉しないか。勝負がつまらなくなるもんな。

「今回は勝つ!!」

百合姫 side

刹那も大分強くなったな。動きのキレも良くなってるしね。でも戦

うからには負けられないよ。それにしてもあのナイフ便利だな。願いを叶えるのと、もう一つ別の力もあるね。

「まあいつか」

今あのナイフがなんでも切るなら触れなければいいだけだし。

「セイッ!!」

「ほいつ!!」

おお、速い速い。さっきの太刀とは比べものにならないね。

「殺人ドール！」

「効くか！」

殺人ドールを全て切り落とすとは。やるね。だっただけ切れない攻撃ならどう？

「旋律の戒めよ！ネクロマンサーの名の下に具現せよ！ミスティック・ケージ!!」

空間に大爆発を起こすこれを切れる訳がない。案の定、刹那はボロボロの状態になっていた。

「さあどうするかしら？」

「………あんたの弱点を突かせて貰う」

私の弱点？そんなものがあると思ってるのかしら？

「強欲<sup>グリード</sup>、いや七罪<sup>なつみ</sup>、獣状態になってくれ」

「んなつ！？」

刹那のナイフが姿を変え、小人になる。問題なのはその姿だ。

「ッ、ツカサ？」

ちっちゃいツカサだ。ちっちゃいツカサがいる！！

「スマン！七罪！！」

「ひゃあー！！」

な、投げおつたー！！あのガキヤー！！ふざけた真似を！！

「キャッチー！！」

チビツカサを空中でキャッチした。ちっちゃいツカサもいいな。

「隙あり！！」

刹那が私に殴り掛かってきた。普段の私ならこの体制で回避は出来ないだろう。駄菓子菓子！！もとい、だがしかし！！今の私はチビツカサを捕まえた喜びと、チビツカサを投げた刹那への怒りで出来ない事すら可能だ！！

「来い！黒百合！！」

「へっ？」

私は黒い野太刀、黒百合を出し、チビツカサを抱えたまま振りかぶった。

「破天斬いい！！！！！」

「ギヤアアアア！！！！！」

悪は滅びた。

『しよ、勝者、御神百合姫』

解説席

ツカサ「あれ？僕？」

カイト「作戦はよかったんだがな」

リニス「投げなければよかったですね」

水籬「あそこで献上して、その隙を突くべきでしたね」

アリサ「なんでギャグに走ったのよ」

アリシア「これだけやればストレスも溜まるんじゃない？」

神「では次回は第九回戦からです。さようなら」

完結&200万記念企画第四弾 その2（後書き）

<まーくとゲストの部屋>

まーくん「今回はゲストを喚んでいます。『魔法少女リリカル・・・ラジオ！（仮名）』より、優さんとラジオ三人娘です！！」

優「どうも」

なによは「よろしくなの」

ヘイト「三人娘と一括りにしないで下さい」

ふあやて「よ、よろしくお願いしましゅー！！」

まーくん「では先に、緋水様、切札全部出せませんでした。すみません」

ヘイト「他のキャラを使い切れない癖にコラボをするし、私達を襲うこの作者が嫌いです・・・hateだけに」

優「前半は言っちゃ駄目だけど、後半はな」

なによは「今回も本編中に襲おうとしてたの」

ふあやて「いないでしゅよね！？あの人いないでしゅよね！？」

優「大丈夫だからお前ら全員俺の後ろに回るな」

まーくん「愛されてますね。次回でようやく全員一試合終わる予定です。皆さん、見て下さいね」

完結&200万記念企画第四弾 その3(前書き)

長い長い。

いろいろみんなの期待を裏切るよ。

## 完結&200万記念企画第四弾 その3

神「さあ始まりました。最初は第九回戦、一真くんVSエリオくんです」

一真side

エリオ、ねえ。今までの戦いを見る限り、少しレベルが高い程度に見てたら足元を掬われるな。

「ゼロ、セットアップ」

《おう、セットアップ》

「ストラーダ」

「《セットアップ》！」

さて、武器はどうするか。カムイはもう少し隠しておきたいし、向こうが槍だからこっちも槍にするか。



「くっ、ソニックムーブ!!」

エリオの脇腹に突きを放つと、高速移動魔法で逃げられた。まあ掠ったんだけどな。

「はあ、はあ」

「どうした?もう終わりか?」

「まだです!!」

そういつとエリオの槍が電気を帯だした。

「紫電………放出!!」

「くっ!?!」

槍に溜まっていた電気が放出され、視界が白く染められた。やられた。まさか攻撃ではなく目潰しをしてくるとは。

「エネルギー全開!!!!!!」

《サンライトハート+》

「そこか!!」

目はよく見えないが、声で十分判断できる。だけど正確にわかる訳ではないから、なるべく広範囲攻撃がいいな。ならあれでいいか。

「ファイナル・エリシオン!!」

俺のイージスからエネルギー波が放たれる。

「オオオオオオオオ！！！！！！」

エネルギー波がエリオにぶつかり拮抗しているのがわかる。なかなかしぶといな。

「吹き飛ばええええ！！！！」

「ぐうううう……わああああ！！！！」

『勝者、御剣一真』

解説席

神『今回、解説席には(21)のヒスイくんが来ています』

ヒスイ「誰が(21)か！！」

カイト「そんなのはどうでもいいが、鋼牙と黄宇とツカサは？」

ヒスイ「どうでもいい!？」

優奈「その三人ならあっちに」

<ゼフィの屋台>

ゼフィリス「どうだ？私の作ったラーメンは」

鋼牙「凄く美味しい!!」

黄宇「いやはや、これほどの腕前とは」

ツカサ「アチチ、でも美味しいです」

龍斗「いつの間に……」

紅蓮「でも随分美味そうじゃねえか」

カイト「なら食うか」

優奈「なら私も」

ヒスイ「ちよつ！？お前ら解説は！？」

神「負け犬（21）くん、今回の解説書いておいたから頑張ってる」

ヒスイ「誰が負け犬（21）だ！！全く、今回は圧倒的な能力差だな。経験にも差があるしな。エリオが10年後の姿なら結果は違っただろうな」

解説組「ラーメンウマー！！」

ゼフィリス「では次は第十回戦だ。お楽しみに」

ヒスイ「それ俺のセリフ！！」

飛翔 side

俺の相手はヴィータさんか。下手にとんでも人間(?) 当たるよりよっぽどいい。

「飛翔、ユニゾンはどうする?」

「まだいいよ」

向こうだってユニゾンしないんだ。ならこっちもユニゾンしないよ。まあ相手が強すぎる場合は別だけど。

「こっやって戦うのは初めてだな」

「そうですね。バルディッシュ・エジアン、レヴァンティン・サラムンデル、セットアップ」

バルディッシュとレヴァンティンをモデルとしたデバイス。以前要に手伝ってもらい実戦データも十分ある。まあそれはあちらにも言える事だが。

「ハアツ!!」

右手に持った斧状態のエテジアンを振り、ヴィータさんの首を狙うが避けられる。そこで俺は左手に持ったサラマンデルで切り上げた。

「効くか!!」

しかしヴィータさんはそれをシールドで防ぎ、後ろへ跳んだ。ある程度離れると鉄球を打ってきたが、それらを全て切り落とした。

「やるな」

「そちらこそ」

俺はエテジアンをライオネットモードにし、大剣の形になる。ヴィータさんは一撃は重いが、そこまで速くないからな。手数が多さで攻めさせてもらうか。

「ハアアアア!!」

「舐めるなああ!!」

両手の剣で様々な斬撃を放つが、そのほとんどが防がれる。何発か当たりはしたものの、致命的なものは一つもなかった。しかしここまで対応出来るとは。フェイトさんの訓練したのか?.....いや、要だな。あいつ神速が使えるし、剣より拳の方が速いからな。だけど.....

「神速!!」

「ぐっ!? 速い!?!」

神速の精度でいえば俺の方が圧倒的に上だ。いくら見慣れているとはいえ、完成度の高い俺の神速が見切れるか?

「セイツ!?!」

「うわっ!?!」

俺の切り払いでヴィータさんが吹き飛ばされた。いや、あれは自分で跳んだのもあるな。いったん間合いを離れたか。

「炎を纏い舞え、剣刃!?!」

だがそこも俺の間合いだ。俺はサラマンデルをダンシングフォルムにする。すると連結刃となり、その一つ一つが分かれた。

「囲え、灯れ」

宙を舞っていた刃がヴィータさんを囲み、刃の一つ一つに炎が灯った。そしてヴィータさんを襲撃した。

「んにゃろっ!?!」

ヴィータさんはアイゼンを振るい、刃を叩き落とそうとする。だけど上手く当たらず、シールドでなんとか防ぐ状況になっている。

「そろそろか」

刃が一斉にヴィータさんに突撃した。そして……

「破ぜろ!!」

ドゴオン

全ての刃がヴィータさんに当たった瞬間、爆発を起こした。

「……………やったか？」

だがその瞬間、煙の中から巨大なハンマーを持ったヴィータさんが飛び出してきた。さっきまでとは比べものにならないくらい速い。これは防ぐしかないな。

「ゴルディオーン……………クラッシャー!!!!」

「ライオネットザンバー!!」

双剣でヴィータさんのハンマーを防ぐが、凄まじい衝撃が叩き込まれた。

「光にいいいなれえええ!!!!」

「うおっ!?!」

俺は防御ごと吹き飛ばされた。くっ、かなり遠くまで飛ばされたな。ダメージも思ったよりあるな。ここで追撃されたらマズイ。

「ってあれ？」

ヴィータさんの方をみると、そこには倒れているヴィータさんがいた。力を振り絞った最後の一撃だったのかな？

『勝者、不破飛翔』

解説席

神『皆さん、デザートに入るのはいいですが、試合が終わりました』  
『よ』

カイト「ん？そうか」

黄宇「ほら鋼牙、あーん」

鋼牙「あー、ん！美味しい〜」

優奈「このアイスクリームも手作りですか？」

ゼフィリス「もちろんだ。昔の製法で作ったのだぞ」

ヒスイ「解説はいいのか？」

神『では今回も君に任せましょう。はい、資料』

ヒスイ「またかよ!!」

鋼牙「頑張つてね」

ヒスイ「……………今回は手数之差だな。ヴィータが高速戦にある程度慣れていたとはいえ、飛翔はそれ以上だったな。更に遠距離戦においても強力な技があったというのも飛翔の勝因の一つだな」

ゼフィリス「次は要か」

神『ようやく主人公の登場。勝てるかな？第十一回戦です』

要 side

はあ、レイか。これまで勝ってないこいつに勝てるかな。

「久しぶりだな」

「勝ち譲ってくれよ。恋人達も見てるしさ」

「だが断る」

まあそんなので勝ちを譲る相手じゃないってのは知ってるけどな。さて、どう攻めるか。

「身体能力100%解放、魔力100%解放、アルティメットワン発動、アリストテレス、セットアップ」

《セットアップ》

「ヴィード、ユニゾンだ」

「わかりました。ユニゾンイン」

まずは軽くやりますか。

「文字通り骨抜きにしてやろうか？」

「チートとcheatの違いを見せてやるよ」

俺が関節に向かって攻撃を仕掛けると、レイはそれらを捌き、蹴りを頭目掛けて放ってくる。それを受け止め、脚の関節を外そうとすると、レイは至近距離で魔力砲を撃つ。俺はそれをルーフシールドで防ぎ、間合いを離す。

「なんか強くなってね？」

「そうか？」

自分では自覚はないんだが、レイが言うなら多分当たりだろう。な

んだかんだ言ってもこんな事で嘘はつかんからな。まあいつか。

「シールドランス」

「おっ、新作か？」

「お前に見せた事がないだけ、だ！！」

シールドランスを思い切りレイに投げ付ける。レイは軽々と避けるが………

「まだまだ！！」

「おっと」

「もう一本！！」

「ほいつ」

「更に！！」

「ていつ！！」

二本、三本と避けられたが、四本目は砕かれた。四本目は避けられなかったというより、強度を確かめたって感じだな。ふむ、どうするか。………やっぱり掀伏せるか。

「限界突破！身体能力120%解放！！神速！！ORT部分解放！！」

俺の背中から二本、ORTの脚が飛び出す。そして俺はレイを潰しに掛かった。

レイside

「当たれよ〜」

「嫌だよ〜」

会話はドッジボールをやっているようなものだが、実際は当たれば死ぬような一撃を何発も放たれて、避けてんだけどな。でもそろそろ反撃しないとな。

「ボソソジャンプ発動」

俺は要との距離を一気に離す。そして魔砲の準備をする。その間にも要は向かってきたが、こっちのチャージの方が断然早い。

「とっておきだぜ。Wファイナルマスタースパーク!!!」俺の両手から放たれるファイナルマスタースパーク。込められた魔力は通常の5倍だ。要は右腕を前に出すと、腕輪が魔力を吸収した。だが全てを吸い切った所で、腕輪が壊れてしまった。

「ちっ、刹那の腕輪が壊れるとはな」

「俺としては全部吸われた事がショックだな」

刹那もなかなかマジックアイテム作るな。もっと威力を上げて撃てばよかった。

「じゃあ再開、だ!!」

「よっ!!」

また要の攻撃が再開される。今度は脚だけでなく、本人も魔法を使ってくるから厄介だ。

「だけど甘え!! 約束されし勝利の剣<sup>エクスカリバー</sup>!!」

「いつっ!?!」

約束されし勝利の剣<sup>エクスカリバー</sup>の真名開放をする。本来光の斬撃が飛ぶが、その力を放出せずに剣に込めて、ORTの脚を二本とも切り落とした。

「チイツ!! ORT解放!!」

要が光に包まれORTへと姿を変える。ようやく本番だな。

「G y u a a a!!」

「速い!?!」

以前より更に速くなっている。ORTでも成長するのか!?

「G i i i i!!」

「んなる!!」

避け続けながら攻撃をしようとするが、隙が見当たらない。しかも水晶溪谷のせいで体が少し重い。リミッターを外すか? うん、そう

するか。

「リミッター解除だ!!」

すると一気に体が軽くなる。久しぶりに外すと全然違うな。ORTの動きも遅く、とは言えないがさっきより大分マシに見える。

「ジゴスパーク!!」

「Giii!？」

地面から出た巨大な雷がORTを飲み込んだ。さあ反撃の開始だ。

要side

レイのいきなり動きが良くなりやがった。今まで力を抑えてやがったのか。さっきの雷も無詠唱であれだけの威力とはな。まあダメーシはないが。

「オラッ!!」

「Giii!!」

(セイツ!!)

レイが振るうエクスカリバーを避けて反撃をする。だがそれも受け流される。

「燕返し!!!!」

「Gyuaaa!!!」

(甘え!!!)

三つの斬撃を受け流す。ORTは脚が何本あると思ってやがる。

「そんなら、メテオスオーム!!!」

「Gyuii!?!」

(隕石!?)

前は惑星っぽいのを飛ばしてきたけど、あれより明らかに威力が高いな。だけど月落としに比べたら可愛いもんだ。

「Giii!!!」

(壊れる!!!)

降ってくる隕石を砕ききり、レイの方を見るとエクスカリバーを左手で持ち、高く掲げ、左手を右手で支えるような構えを取っていた。これは、ヤバイ!!!

「是、射殺す百頭」  
ナインライフズ・ブレードワークス

「Gyuaaa!!!」

(やられてたまるか!!!)

八つの高速斬撃を防ぐため、こちらも同等の速さで脚を振るう。結

果は俺の脚三本が使い物にならなくなった。

「天地乖離す（エヌマ）」

なっ！？まだ攻撃は終わらんのか！？止めなければ！！

そして俺はレイに向かって脚を振ったが、レイはその場から消え去った。

「前は駄目だったけど、零距离ならどうかな」

「Giiii!?!」

（後ろ！？）

「開闢の星<sup>エリシユ</sup>!!!!」

零距离から乖離剣の攻撃を受けた俺の体は右半分が吹き飛ばされた。そして俺は強制的に人に戻った。

「どーだ」

「ゲホツ、ぐつ、ちょっとは……………ゲホツ……………加減しろ」

アルティメットワンを発動していても、宝具で半身を吹き飛ばされたらそう簡単には治らない。この野郎。仕返ししてやる。

「じゃあ俺の勝つズドツ……………ち?」

「は……ざまあ」

レイの腹からはORTの脚が飛び出していた。その脚は俺の左手が変化したものだった。

「こんの、死に掛けて……カハツ……よくも」

「誰が……死ぬか」

「くつ、死者すら蘇らす医神の杖」  
アスクレピオス

レイは脚を引き抜くと一匹の蛇が巻き付いた杖を取り出し、真名開放をした。するとレイの傷はみるみるうちに塞がった。さっきので随分デカイ穴が出来たのにな。

「よーし、今度こそ勝ちだ」

「ああ……」

『勝者、レイ・ツァイベル』

解説席

神『では要くんを治してきます』

カイト「ほつといても大丈夫だろ」

刹那「俺の腕輪が……」

ツカサ「えっと、落ち込まないで下さい」

鋼牙「材料なら僕があげるよ」

黄宇「鋼牙は優しいな」

鋼牙「エへへ」

紅蓮「しかしこれでこの作品のメンバーは久遠だけだな」

龍斗「要くんを勝たせると思ったんですが」

優奈「そうですね」

雨季「今の要がレイに勝てるかよ」

ヒスイ「それでいいのか？」

雨季「俺の中では要　レイだ」

水雉「なら勝てる可能性も無きにしもあらずという事ね」

ヒスイ「最後頭を狙ったら勝てたんじゃないか？」

雨季「ないね。頭を狙うとどうしても殺意が出るからばれるし、要は仕返しという感覚で敵意も殺意も何も出さずにやったからね。例えるなら授業中、友人に消しカス投げる感じ」

優奈「それ、悪意はありますよね」

雨季「なら彼女に頬を突かれて、突き返す感じ？」

ヒスイ「なんで疑問系だよ。それにその例えにレイと要を当て嵌めると凄く嫌だな」

ゼフィリス「そろそろ次の試合ではないか？」

雨季「あつ、そうだね。豚骨ラーメンー丁」

ゼフィリス「了解した」

ヒスイ「進めろよ。次は第十二回戦。これまたチートVSチートだな。早く強くなりたい」

よづやくうちの番やね。でも相手が鈴つて運がええんか悪いんか。

「準備はええか？」

「おk」

「ランサ・デル・レランパーゴ雷霆の槍！！！！」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！！！！」

霊力の槍と魔力の槍がぶつかり爆発を起こす。結構な力を込めたんやけど相殺されるとは流石やね。にしても煙が晴れたっちゅうに攻めてこんな。ならこっちから行くしかないな。

「斬月！！月牙天衝！！」

斬月から何発もの霊圧による斬撃が飛ばされる。鈴はどこからともなく先に水晶玉の付いた小さめのステッキを取り出し、自分の前でくるくる回した。すると半透明で半円の膜のようなものが出来て、月牙天衝がそれに当たると……

キンキンキン

という軽快な音と共に弾き返された。

「危なっ！？」

実際はそんな危ないけど……しかし何やあれ。斬撃を弾き返すって。ん？よくよく見たら昔見た事あるような……

「シミ　　や！シ　　ラのステッキや！！」

「」名答」

まさか星のカー　　イの武器とは．．．．．しかも二作品にしか出  
とらんようなマイナー能力を。

「俺に遠距離攻撃は効かんぞ」

「ならこれや！崩！！」

うちの周りに火球が現れる。

「虚空！！」

そして火球からレーザーが発射される。反射出来るならしてみい  
や！！

「崩、虚空」

「んなっ！？」

まさかそのままそっくり同じ技を使ってくるとは。いや、流石にあ  
のステッキで反射しようとはせんやろな、とは考えとったよ。で  
も同じ技で相殺なんてな。

「ずるいやろ！！」

「あんなの弾けるか！！」

まあ自分でもそう思うんやけど……さて、どないしよう。

鈴side

咄嗟に同じ技で相殺しようとしたけど、ちょっと火傷しちゃったな。斬魄刀は何か出来そうだけど、向こうの技全てがわかった訳じゃないからまだ心配だけど。

「喰らい！大紅蓮氷輪丸！！」

「舐めんな！禁忌『レーヴァテイン』！！」「うぐぐぐぐつ！！」

「ぐぬぬぬつ！！」

氷の剣と炎の剣がぶつかる。相性的にも破壊力的にもこっちが上なのに、随分と頑張るな。でも、負けん！！

「碎ける！！」

「うぐつ！？」

俺のレーヴァテインが斬魄刀を破壊した。このまま破壊してやろうか。

「こんの！！雷帝！！」

「！？」

薫の髪が金髪に変わり、体が帯電する。俺は直感に従いスキマで距

離を離す。

「雷帝モード、だと？」

厄介な。近付いたら人間電子レンジでチンツ、じゃないか。なら遠距離攻撃だ。

「鈴雲」

銀色を下地に装飾を施した銃を取り出す。『流転』は………駄目かな。あれは強化魔術とかの類じゃなくて異能だから多分効かないと思う。

「つと」

何発も雷が落ちてくる。それを避けながら銃を撃つが弾かれる。やっぱり無駄か。雷帝を解かせるか、それすら吹き飛ばすか。

「もち後者だろ」

面倒な事よりそっちの方がいい。

「よし、決着を着けようぜ。主人公なチートと、過去話を略されるチートの違いを見せてやる」

「（ムカツ）それを………言うな——！！！」

薫の帯電が凄まじくなる。先程とは比べものにならない力を感じる。やべえ、やっちまったかも。

「消し飛びいいいいー！！！！」

「だが断る！！断罪ノ光塵ジャッジメントレイ！！！！」

雷撃がこちらに飛んでくる。俺は銃から巨大なレーザーを発射する。威力は僅かにこちらの方が上らしく、少しづつ押していた。しかし最初からこんな大技を使わされるなんてな。

「オオオオオ！！！！」

「ハアアアア！！！！」

魔力を更に込める。すると威力が一気に上がる。そして……

「ラストオオオオ！！」

「ひゃああああ！！？」

レーザーが薫を飲み込んだ。レーザーが消えた後には気絶した薫がいた。傷が一切ないのは雷帝モードで一瞬で治ったためだろう。気絶したのは蓄積された疲労とダメージのせいだろうな。傷は治ってもダメージまで消えるわけじゃないしな。

『勝者、神北鈴』

解説席

神『今回の試合で転生夫婦二人共勝ち上がったね』

カイト「鈴の力は『創造する程度の能力』だったか？」

龍斗「そうですね。使い方によつては最強でしょう」

紅蓮「戦つてみてえな」

水籬「やめなさい」

ゼフィリス「それなら私も」

ヒスイ「お前も鈴も決勝まで行けばあるな」

神『今回の勝因は？』

鋼牙「えっと、能力の差です。鈴お兄ちゃんは創造のおかげで薰お姉ちゃんに出来る事はほとんど同じ事が出来るし、男と女、大人と中学生の体力差もあるからです」

黄宇「偉いな。良く出来ました」

鋼牙「えへへ」

神『それとこれ以上秋代様勢が勝つのはどうか、と作者は思ったそ

うだよ  
『

ゼフィリス「次はようやく一区切り、第十三回戦だな。恭介負けろ」  
優奈「えっと、お兄ちゃん頑張って」

恭介 side

あーあ、なんで相手が久遠なんだ。やりにくかったらありやしない。  
ゼフィリスさんもあんな事言うし、今も……

『久遠、ファイト〜』

『恭介なんてフルボッコ!』

誰だよ。そんな事言う奴らは。

「よろしくね」

「ああ」

「フォトンランサー・ファランクスシフト!」

「いきなりかよ!?!」

でもまあ予想は出来てたしな。雷切もいいんだが、まだこの量を捌く自信はない。超マイナーな宝具を使うか。

「出る、子狐丸」

俺は王の財宝からゲイト・オラ・バビロン一本の刀を取り出した。それを振るうと、フォトランサーは俺を避けて行った。

「!?!」

「驚いたか？」

こいつは名刀のわりに名が知られていない。だがこいつの雷を反らす能力は素晴らしい。久遠のような雷を使う相手の天敵だな。そういえばこれを作らせたのは一条天皇だったな。どんな縁だろな。

「むむつ、狐火・瞬!!!」

「おっ!」

かなりの速さの狐火が俺の周りを走り始める。ここからどうするんだ？

「爆!!!」

「ちっ!」

狐火が爆発し、視界が防がれる。狐火の爆発によるダメージは全くと言っていいほどなかったが、さて、どこから来る？前か？後ろか？横か？上か？すると横から何かが飛び出してきた。俺は子狐丸を振ってそれを斬ったが、それは狐火だった。そんな時、俺は直感的に後ろに子狐丸を振った。

「やあっ！！」

煙の向こうから飛び出してきた大人になった久遠の爪と刀がぶつかった。直感に従って正解だったな。

「せいっ！やっ！！とっつ！！！！」

「ふっ！はっ！！とりゃ！！！！」

久遠は爪を、俺は刀を振るう。実力はほぼ互角、いや、久遠の方が速いため徐々に俺は押され始めた。このままだとやられる。少なくとも負けないようにしないと。そうだ！！

「異能復元 - - フルンディング 赤原獵犬」

Fateでは必中の剣として有名だが、こいつの能力は必中ではない。

「守りきれ、フルンディング 赤原獵犬」

俺がそう言っていると剣が勝手に久遠の攻撃に対応し始めた。こいつの能力は『失敗をしない』。アーチャーはその力を『外す』という『失敗をしない』という事に使ったんだろうが、俺は『攻撃を受ける』という『失敗をしない』という事に使っている。だから反撃は出来

ないが、攻撃が当たるということはない。

「凄いね」

「久遠こそ」

さあ反撃をするか。さっき反撃が出来ないって言ったのは剣による反撃は出来ないっていう事。もちろんこんな状況では集中が必要な魔法は使えない。だけど一つだけ、剣を使わず、そして集中も大していらぬ攻撃がある。それは……

「ゲート・オブ・バビロンの財宝!!!」

「うわわっ!?!」

何かに向かって発射するならともかく、ただ闇雲に目の前に乱射するならこれ以上の攻撃方法はない。事実久遠は攻撃を止め下がっていった。ここで俺はフルンディングを破棄し、バビロンによる攻撃に集中する。そしてついに久遠の片足に武器が当たった。これで機動力は削げた。

「いたた」

「さあどうする?」

「………使いたくなかったけど、奥の手だよ!狐火・大炎陣!!!」

俺と久遠を囲むように無数の狐火が現れる。一匹一匹が意思をもつたように複雑な動きをする。ただそれは俺への攻撃ではなかった。

地面に炎の軌跡を残しながら走る。………まさか！！

「呪法陣・八寒地獄」

俺らの周りに、正確には先ほど狐火たちによって作られた陣に半透明のドームが張られる。いったい何をするんだ？

「ルールは簡単。恭介が耐えたら恭介の勝ち、耐えれなかったら私の勝ち」

そう言うと久遠は蜃気楼のように消えてしまった。それと同時に周りが寒くなり体中に鳥肌が立つ。

『一の地獄、？部陀地獄』

どこからともなく久遠の声が聞こえる。だがそんな事はどうでもいい。今はこの寒さをどうにかしないと。そう思った時、鳥肌が潰れ、あかぎれが出来た。

『二の地獄、刺部陀地獄』

痛い痛い痛い痛い痛い痛い。あかぎれによる痛みではない。純粹な寒さによる痛み。なんだよこれ！？俺はバビロンからレーヴアティンを取り出したが、さっぱり暖かくならない。それどころか寒さは増すばかりだ。

『無駄だよ。三の地獄、？听陀地獄』

くっ、これに耐え続けろってのか！？寒さはさらに増すばかり。我

慢しなければ自然と悲鳴が出てくる寒さだ。

『どう？四の地獄、??<sup>かかは</sup>婆地獄は。後半分だよ』

まだ半分も残ってるのか！？早く終わってくれ。もう人が耐えられる寒さではない。

『五の地獄………虎々<sup>こしくま</sup>婆地獄』

久遠の声が少しおかしかった。これほどの寒さを創っている久遠にもそれ相応の負担はあるって事だ。だが俺の体はかなりマズイ状態にあった。全身は凍傷で罅割れ、皮膚が青く変色し、めくれ上がっていた。

『六の………地獄、?鉢羅<sup>びはろ</sup>………地獄』

全身がとにかく痛い。さっきまでとは比較にならない寒さが襲ってきた。そしてついに、俺の皮膚は裂け、流血した。

『七の………地獄……鉢特摩<sup>はつとま</sup>………地獄』

俺は意識を手放しそうになったが、皮膚が裂ける痛みで気絶するこ  
とが出来なくなっていた。そしてさらに寒さは強さを増す。まるで  
液体窒素を浴びせられているような寒さ。俺、死ぬのかな。そう思  
った時、俺の体は折れ、大出血を起こした。

『八………の………地獄………摩訶<sup>まか</sup>………鉢特摩<sup>はつとま</sup>………  
………地獄』

久遠 side

ハア、ハア、呪法は・・・・・・・・キツイな。

全てを解くと、そこには全身から血を流し倒れている恭介がいた。先程久遠が行った呪法というのは一種の幻術。だがその精度は幻術とは比べものにならない。だが久遠のそれは幻術を越えている。

「恭介・・・・・・・・大・・・・丈夫？」

「・・・・・・・・」

恭介はピクリとも動かない。幻術とはいえ地獄をその身に受けたのだから当然といえは当然だ。そして久遠も呪法のせいで体をまともに動かす事が出来ない。だが、恭介は気絶しており、久遠はしていない。つまり・・・・・・・・

『勝者、久遠』

解説席

優奈「お兄ちゃん!？」

神『大丈夫、すぐ治します』

ヒスイ「……………なんだ、あれ」

ゼフィリス「八寒地獄、だと？いや、それよりあれは幻術か？世界すら騙されかけてたぞ」

カイト「ほとんど空想具現化だな」

龍斗「あそこまで強くなつてたとは」

紅蓮「ダークホースだな」

ヒスイ「なあ、呪法陣てなんだ？」

カイト「幻術の魔法陣に呪術を組み込んだんだろ。ただあそこまで  
の精度とは、あっぱれだな。まあ自分への負担をさらに減らせば完  
璧だが」

黄宇「恭介はまだまだ未熟だから対抗する術を持たなかったな」

ゼフィリス「しかしこれでようやくシードを除く全員の試合は終わ  
ったな」

鋼牙「どうなるんだろ」

水籬「大変な戦いになりそうね」

神『では次回もお楽しみに』

完結&200万記念企画第四弾 その3（後書き）

<アリシャとゲストの部屋>

ア「皆さん久しぶり!!」

シャ「私達の事を忘れてた人、素直に感想の悪い点でハイイって言うてね」

ア「今回はゲストがいます!!」

シャ「この小説のために本編で隠れた力が現れたのに、シードになって運がいいのか悪いのかわからない、七宮亮くんです」

亮「えっと、どうも」

ア「後書きだけど我慢なさい」

亮「俺は別にいいですけど」

シャ「しかし要くんが負けたわね」

ア「そして久遠がチートね」

亮「あんなの耐えられないだろ」

シャ「そういえばなんでレーヴァティンが無駄だったの?」

ア「無駄じゃないけど、あれは魂から冷えたから効かないように感

じたんですって」

亮「ならあれは全部思い込みのせいなのか」

ア「という事でもないのよ。ほとんど空想具現化とカイトが言ったように、あれは地獄が出来かけてたのよ、実際に」

シャ「聞けば聞くほど恐ろしいわね」

亮「次、俺が戦うんだよな」

ア「頑張りなさい」

シャ「大丈夫よ、きっと」

亮「……………はい」

ア「じゃあ次回も見てね」

シャ・亮「バイバーイ」

完結&200万記念企画第四弾 その4（前書き）

やっとなんか書いてたぞ。

気に入らない所があれば言って下さい。直します。

完結&200万記念企画第四弾 その4

神「遂に始まります。トーナメント第二幕。トーナメント表はこちら！！」

第一回戦

暁優 VS 南武貴史

第二回戦

カスミ・ヴェネーラ VS 蒼神双夜

第三回戦

吉谷吼太 VS ゼフィリス・エーデルフェルト

第四回戦

アキラ・シュヴァイアー VS 御神百合姫

第五回戦

御剣一真 VS 不破飛翔

第六回戦

レイ・ツァイベル VS 神北鈴

## 第七回戦

久遠 VS 七宮亮

神『という事です』

鈴音「改めて見ると凄いメンバーですね」

すずか「本当だね」

紅蓮「あー、死合ってみてえ」

龍斗「我が儘言わない」

要「俺も勝ちたかったな」

カイト「おっ、要じゃないか」

アリサ「敗者が何でいるのよ」

要「解説席なら問題ない」

アリシア「まあ確かに」

黄宇「そうだな」

神『ハハハ、一応主人公の要くんはここから解説に参加だよ』

鋼牙「よろしくね」

ツカサ「お願いします」

要「おうよ」

優奈「次は優さんと貴史さんですか」

カイト「愉快的な戦いになりそうだ」

神『では、スタート』

優side

えっと、相手は貴史か。正直勝てる気しねえ。でもしっかりやらな  
いと。エクスカリバーを使ってでもな。

「ナイトハート！セットアップ！！」

《セットアップ！》

俺はナイトハートを大剣状態にして構える。

「よし、準備はいいな。なら行くぜ！！」

貴史が物凄い速さで突っ込んで来た。でも対応出来ない速さじゃない。俺は大剣を使って拳を受け止めるが……

「くっ!？」

なんて重い攻撃だ。耐えられない程ではいが、これが人間の出せる攻撃か? いや、この場ならこれくらいが当たり前か。

「おっ、耐えたな。ならもつと威力を上げるぞ」

「何!？」

貴史がそう言うのと更に速さと威力が上がった。ここからまだ強くなれるのか。

「負けるか!!」

だけでもこっちだって勝ち残っている以上、そう簡単には負けられないんだよ。俺はナイトハートを槍にして地面を突いた。

「イミテーションバスター!!!」

穂先から砲撃が出て、地面を吹き飛ばした。

「ぬおっ!？」

吹き飛ばした地面が貴史に飛んでいく。これで僅かに動きは封じた。

「レイジングハート、セットアップ」

《セットアップ》

よし、反撃開始だ。

貴史 side

ぺっぺっ。土が口に入っただろうが。全く、どんな事をするつもりだ？

「アクセルシューター!!」

「おっ!」

まだ煙が舞う中、魔力弾が何発か飛んできた。全て弾いたが、これはなのはの攻撃か。前回の試合でフェイトのバリアジャケット着てフェイトの技使ってたから、今回はなのはか。

「ん?」

なんか大量の気配を感じるが……

「喰らえ!! シューティングスター!!」

「うおおおい!?!」

これこの世界のなのはの技だろ!?! ビットの数は本物程じゃないけど、囲まれてるから避けにくいなの。なら吹き飛ばす!!

「起きろ! 赤い乖離剣!!」  
フラッシュ・エテ

俺は赤い乖離剣フラットディ・エアの刀身を回転させる事で起こる魔力波でビットを吹き飛ばした。その瞬間、背後に殺気を感じた。

「フツ！！」

ガキーン

後ろにエアを振るうと優の大剣とぶつかった。奇襲はよかったが、殺気はちゃんと隠さないと。まあ声を出さないだけいいか。

「オラア！！」

「ぐうつ！？」

エアを振り切り優を飛ばした。そろそろ終わりにするか。エアの刀身が回転しだし、魔力が高まる。

「ちつ、アルトリア、セットアップ」

《了解です。セットアップ》

優が新しくデバイスをセットアップし、剣を取り出す。あれは、向こうの奥の手か？面白い。その力、見せて貰おうか。

「天地乖離す（エヌマ）」

「エクス」

「開闢の星エリシユ！！！！！！」

「カリバーー！！！！！」

赤い魔力波と黄金の斬撃がぶつかる。

「グギギギギッ！！！」

「……………ほお」

まさかここまで拮抗するとはな。かなりの出力を出してるんだがな。

「いいだろう。エアの全力を見せてやる！！！」

俺はそう言っただけでエアに籠めた魔力を更に増やした。するとエアの回転数が増し、魔力波が巨大化した。

「終われええ！！！」 「グッ、わああああ！！？」

魔力波が優を飲み込んだが、かなり威力が削られたからな。死んではいないだろうな。

『勝者、南武貴史』

解説席

神『はい、終わりましたね』

要「最後は力技だったな」

鈴音「ですが威力が……」

カイト「ここの試合じゃあのくらい出せないとな」

優奈「そうですか」

黄宇「まああれだけの力が出せるからこそ我々がいるんだが」

ツカサ「？」

要「ストッパーだよ。チートが暴走しても止められるな」

神『では次、第二回戦を始めましょう』

ソウヤside

さて、カスミはかなりのチートだからな。カスミに勝てればあいつにだって勝てるはず。

「全力で来るといい」

「言われずとも」

俺は陰陽を取り出し、乱射した。外れるような軌道の弾も跳弾となりカスミに襲い掛かる。

「ふん」

だがその全てがカスミの魔法障壁に防がれる。普段から展開している魔法障壁でこの防御力かよ。

「ならば貫く！一言魔法、多重詠唱『貫通』！！」

陰から放たれた一つの弾がカスミに向かって飛んでいく。幾つもの魔法を重ね掛けたこいつなら障壁を貫くのはたやすい。だがその考えは易々と砕かれた。

「悪くない。だが効かん！！」

カスミは腕を振るっただけで弾を砕いた。魔法で強化もされているのだろうか、それにしても非常識だ。

「次はこちらから行くぞ」

カスミがそう言うと無数の闇属性の魔法の射手が浮いていた。

「魔法の射手・連弾・闇の500矢」

「んにやる！！一言魔法、多重詠唱『防壁』！！」

俺は自分を囲むように防壁を造る。そこへ魔法の射手が当たる。一発一発がかなり重く、防壁に輝が入った。だがなんとか防ぎきった。

「まあまあだな」

「そりゃどうも」

「だがまだ力を隠しているだろう？全て見せてみる！！」

ちっ、確かにあれを使わなければ勝てないな。まあここでの試合の情報元の世界に漏れる訳でもないからいいか。「なら見せてやるよ。後悔するなよ？」来れ（アデアット）『」

そう言った瞬間、俺は黒く、紅い模様が入った鎧に纏われ、赤い紅い朱いアカい剣、覇極を持っていた。

カスミside

「……あれはマズイな。鎧はともかく、剣には死が見えん。魔力も貴史の『赤い乖離剣』フラッティ・エア並じゃないか？」

「ハアツ！！」

「何！？」

先程とはまるで動きが違う。まだ私の方が上とはいえ、いきなりだから驚いたぞ。

「エクセキューションナーソード!!」

とりあえず今はあの剣の力を確かめるのが先だな。エクセキューションナーソードはあくまで牽制だ。エクセキューションナーソードはアカい剣とぶつかった瞬間に斬れた。やはりか。

「喰らえ!!」

「遅い!!」

幸いにも幸運以外のステータスは私の方が上だ。ならば実力で決着を付けるのみ。

「闇の吹雪!!」

「そりゃ!!」

闇の吹雪も易々と斬り裂かれる。だがその隙に私縮地で近付き、拳を叩き込んだ。

「セイツ!!」

「ぐっ!?!」

ダメージはほぼないか。あの鎧のせいか。さてはて、どっしたものが。

ソウヤ side

勝てる。相手の動きに気をつければ間違いなく勝てる。

「……………ソウヤ」

「ん？」

「そろそろお互いの全力をぶつけ合って終わりにしないか？」

ふむ、何かの作戦か？ だけど正直今の状態はキツイ。まだ覇極は使い慣れてないからな。さっさとケリ付けるにはいいかな。

「ならいくぜ」

「レク・リク・ラク・ライネツク、天壤の劫火形状槍」  
アラストー地ードランス

カスミが本からカードを取り出し始動キーを口にする。その手には燃え盛る槍が握られていた。俺も覇極に魔力を籠める。

「おおおお！！ 『霸道を極めし究極の剣』  
ロード・ブレイド！！！！！！」

俺が覇極を振るうとアカい斬撃が飛んでいきカスミを飲み込んだ。手応えはあった。だが……………

「ぐっ」

慣れないせいか反動が少し大きかったらしい。体がかなりだるい。だがまあ勝ったからいいか。その瞬間だった。

ゾクッ

殺気を感じ俺は上に跳んだ。だがさっきの反動のため体がうまく動かないため僅かに動きが遅かった。そして俺の体は胸から下が吹き飛んだ。

「ガハアッ!!?」

空中で何とか動く首を後ろに回すと、俺の影から左腕のないカスミが出ていた。畜生、影を使った転移魔法か。再生出来ないことはないが、その間に間違いなくやられる。俺の……負けた。

『勝者、カスミ・ヴェネーラ』

解説席

神『さあ再生してきますか』

カイト「ほっといても治るだろ」

恭介「それって人か？」

優奈「あつ、お兄ちゃん」

要「ここにいるのは人の前に『チート』が付くからな。お前らもだろ？」

恭介「まあそうだけど……」

龍斗「さて解説をしましょう。今回のキーワードは『慣れ』ですね」

アリサ「慣れ？」

紅蓮「どんな強力な力を持ち、それを扱う力があっても力に慣れなきや意味がねえ」

鈴音「そうですね」

黄宇「更にはカスミが自らの腕を犠牲にし、ソウヤを油断させたのもあるな」

アリサ「腕を犠牲にしないと駄目だったの？」

カイト「ソウヤには直感スキルがある。カスミがそれを知ってたかどうかは知らんが、ダメージを与えた手応えを感じさせる事により、多少油断する。それにより僅かなりとも直感スキルが鈍るからな」

アリシア「へー」

神『では第三回戦を行いますか』

吼太 side

ゼフィリス、か。正直どれくらい強いかは知らないんだよな。ただ前の戦いを見る限り、戦い慣れているのはわかった。

「吉谷吼太」

「なんだ？」

「悪いが次の戦いに向けて体力を温存したいのでな。早々に終わらせて貰う」

そう言ったゼフィリスの手には羽が付いた小さな魚のようなものいくつかが乗っていた。なんだあれは？

「喰え、かこてん花狐貂」

「!?!」

ゼフィリスがそれを宙に投げると、突然家程の大きさになり俺に向かってきた。

「んなろっ!!!ギガドリル、ヒック百鬼夜行、クロスオーバー相乗掛合!!!ギガドリルピ

ツクー！！」

俺はドリルの付いた百鬼夜行<sup>ヒャクキヤウ</sup>で魚のようなものを貫いていく。貫くと魚のようなものは風船のように割れていった。

「面白いな。二つの技の組み合わせか？」

「後ろ！？」

後ろからゼフィリスの声が聞こえたので、振り返ると同時にビームサーベルを振り抜いたが……

「いない！？」

「雷公鞭<sup>ライコウペン</sup>」

今度は上！？そこには片手に剣、もう片手には鞭のようなものを持ったゼフィリスがいた。そして鞭のようなものからは巨大な雷が放たれた。避けるのは間に合わない。なら防ぐしかない。

「ダウンロード、エヴァンゲリオン！武装召喚<sup>リアライズ</sup>！！A・T・フィールド＋理想を現実に変える能力！！」

以前俺の世界で要との戦いにも使った理想的なA・T・フィールドだ。これなら何とか防げるはず。

「ぐぎぎぎぎぎー！！」

だがあの雷撃は俺の想像以上の攻撃だった。A・T・フィールドはすぐに罅が入り、そして……

「ぐわっ!?!」

砕かれてしまった。とっさに後ろに跳んだため何とかダメージはほとんどなかったが、恐ろしい攻撃だな。

「私も少し組み合わせというものをしてみるか」

「何?」

クロスオーバー  
相乗掛合は俺のレアスキルだし、だったらさっきのA・T・フィールドみたいな感じか?どちらにしろ油断は出来ないな。

「偽・螺旋剣 + 射殺す百頭!」  
カラドホルグ ナインライブス

「はあ!?!」

ゼフィリスは螺旋状の剣を弓で放った。すると剣は九本のドラゴンレーザーとなって俺に飛んできた。防ぐにしても全部違う軌道で飛んでくるから難しいなんてレベルじゃない。避けるにも見た感じ、ホーミング性能もあるから無理だ。

「これなんてムリゲ?」

だからといって諦める訳にはいかない。俺は十ツ星神器『魔王』(ロベルトタイプ)を出した。そしてレーザーは魔王に直撃した。

ゼフィリスside

「………やり過ぎたか?」

やった事がないから手加減が難しかったからな。まあ手加減などしていないわけだが。

「……………ほお」

砂煙が晴れると、そこにはかなりの怪我をしているが、まだ動けそうなのな。吼太がいた。

「ぜえ、ぜえ」

「よく生きてたな」

当たる直前に出した巨大な物体のおかげか？よくもまああれを耐えたものだ。

「もう、終わりにしてやる！！」

「見せてみるがいい。お前の本気を！！」

私はそう言うとサイファスを取り出した。ちなみにさっき吼太の後から声をかけて上に転移した時に使ったのもサイファスだ。

「うおおおお！！レムリア・インパクト・改！！！！」

吼太が何をするかはわからんが、何やら嫌な予感しかしないな。サイファスの力を使うか。

「昇華！！！！」

そして吼太のその言葉と同時に膨大な熱が発生した。私の横で。

「熱っ！？当たったら私でもまずかったぞ」

「……………なんで当たらないんだよ。お前の座標に直接当たるように次元連結砲を使ったのに」

「ふむ、その次元連結砲とやらがどのようなものか知らんが、次元を操るものなのだろう？私のサイファスも次元を操る剣なのでな。ちよちよいと次元を歪ませただけさ」

「ちっ、そうかよ。あゝあ、負けた」

『勝者、ゼフィリス・エーデルフェルト』

## 解説席

神『さあ終わったけど、作者。次元連結砲がサイファスに負けるなんて設定作っていいの？』

雨季「正直どつちが上かなんてわからないよ。まあこころへんは大目に見て貰えるとありがたいな。そして俺がツカサと鋼牙を食べるのも大目に」

みんな『死ね!!!』

グシャ

雨季「グハア!!!?」

鋼牙「サイテーだね」

ツカサ「あわわ」

カイト「二人共、もう大丈夫「まだだ」」しぶといな

雨季「俺は………ノクターンに………行くんだ!!!」

黄宇「一人逝ってこい!!!」

ジュッ

鈴音「じよ、蒸発した?」

すずか「さあ二人共、汚い空気を吸わないようにガスマスク付けようね」

雨季「酷くない!?!」

アリサ「生き返った!?!」

龍斗「遂に変態を超越しましたか」

アリシア「かゝえゝれ」

水籬「かゝえくれ」

みんな「かゝえくれ」

雨季「みんな、酷い!!」

雨季がログアウトしました。

神「さて今回の試合はここまで、残りの4試合は次回。お楽しみに」

完結&200万記念企画第四弾 その4（後書き）

<まーくとアリシヤの部屋>

ま「皆さんこんにちは」

シヤ「私達忘れてたわね……」

ア「みんな随分と正直だったわね」

ま「ハハハ……」

ア「今回もいろいろな戦いがあったわね」

シヤ「作者がいろいろオリジナルもやったしね」

ま「反省してるらしいよ」

ア「後悔は？」

シヤ「してないんじゃないかしら」

ま「そうそう、作者が聞きたい事があるそうだから」

ア「活動報告に書くそうだから見てね」

シヤ「あと、後書きに自分のキャラを出して欲しい人は感想に書いてね。ただし、負けたキャラ限定よ」

ま「共演したい後書きキャラも書いてくれると嬉しいな」

ア「もちろん私よね」

ま「自意識過剰はどうかと……」

ア「ああん？」

ま「ごめんなさい」

シャ「じゃあ次回も見てね」

完結&200万記念企画第四弾 その5(前書き)

そろそろ終盤。残りは六試合。

完結&200万記念企画第四弾 その5

神『さあ始まりました。第四回戦はアキラVS百合姫。これまた凄まじいチート対決だね』

アキラ side

百合姫さん、ね。前回の試合だと最後はギャグになって特に考えなかったけど、あの斬撃は凄まじい威力だったな。負けるつもりはないけど。もし負けでもしたら……

「ブルッ」

怖い。想像しただけで怖い。絶対に勝たないと。

「どうしたの？震えてるけど」

「あつ、大丈夫だよ」

いけないいけない。試合に集中しないと。

「じゃあやるわよ」

「どござ」

向こうは始めからあの黒い刀を出す。本気なんだね。僕も魔力剣を作り出す。

「ハアッ!!--」

「フッ!!--」

僕が近寄り魔力剣を振り下ろすと、百合姫さんはそれを受け流し反撃をする。僕は後ろに下がってそれを避け、また斬撃を繰り出す。

「やるじゃない!!--」

「そちらこそ!!--」

向こうの攻撃は後の先が中心だ。ならそれを打ち崩そう。

「喰らえ!!--」

「甘、い!!--?」

僕が右手に持った魔力剣を振るうと百合姫さんは受け流そうとしたが、僕は魔力剣を掻き消した事により百合姫さんに隙が出来た。そして左手に再び魔力剣を作り出し、斬り上げた。

「くっ、剃!!--」

だけどその攻撃も高速移動によって避けられる。今は、地面を何  
度も蹴つてたな。そんな方法もあるんだ。

「ねえ、そろそろ本気出さないの？まだ出してないのあるんでしょ  
？」

「……………じゃあやりますか」

このままやつても決着が着かないのは見えている。ならさっさと終  
わらせてしまおう。僕は漆黒の森に黒い塔が建つ固有結界、『魔皇  
剣を収めし魔界』を展開した。

百合姫 side

これがアキラの固有結界ね。森からは何かの気配がする。それにア  
キラの武器もさっきまでの魔力剣じゃなくて、黒い柄に赤い刀身の  
剣になっている。魔力も凄いし。

「いくわよ」

私は体勢を低くして黒百合を構える。野太刀でも出来るかな。

「閃鞘・七夜」

「おっ！」

簡単に受け止めるとは、やっぱり天然チートは凄いわね。

「ふい、しょ……」



「偽・螺旋剣！！」  
カラドボルグ

偽・螺旋剣を叩き込んでやった。これで魔獣は潰したわね。

「シッ！！」

「！？」

気が付くとアキラが斬撃を放っていた。少し斬られたけど、何とか避けた。

「危ないわね」

全く、本当に危ないわ。それに、傷の治りが悪い。

「それ！閃鞘・八点衝！！」

「ハアアアア！！」

私達の斬撃がぶつかり合う。だけど、向こうの方が僅かに疾く、私に傷が付き始める。

「くっ！？」

これ以上やったら負ける。こうなったら全力で固有結界ごと斬る！！

「ハアアアア！！！！」

黒百合に限界まで神気を注ぎ込む。

「受け取りなさい！！破天斬！！！！」

巨大な黒い斬撃がアキラに向かって飛んでいく。このまま斬撃はアキラを斬ると思った。

「オオオオオ！！！！」

だがアキラの剣の一撃により、私の斬撃は真っ二つにされた。何それ、反則？

「さあどうします？」

「……………止めるわ」

これ以上やっても勝てる気しないし、無理に勝つつもりもなかったし。

『勝者、アキラ・シュヴァイアー』

解説席

神『はい、終了しま「ツカサー！！」ちよつ！?』

百合姫「うりうり〜！！！！」

ツカサ「むきゅー」

ゼフィリス「私の相手はやはりアキラになったか」

カイト「まあ百合姫にも勝つつもりがなかったからな」

要「だからといって追い詰めたら魔王が出てくるだろ」

鋼牙「なのはお姉ちゃん？」

なのは「違うよ!! 私魔王じゃないよ!!」

レ○「嘘だ!!!!」

龍斗「……………今何か」

神「気にしたら負けですよ?」

紅蓮「なんだこの空間は……………」

ゼフィリス「次は第五回戦だな。楽しく観戦させて貰おう」

飛翔 side

一真か。何度も会った事はあるが、戦う機会はなかった。負けるつもりはないが……

「ゼロ。グレイソード、セットだ」

《おう。グレイソード、セット》

一真は龍の口から剣が出ている剣を取り出した。

「変身」

【OPEN UP】

俺は仮面ライダーブレイドに変身しておく。これなら十分迎え撃てるはずだ。醒剣ブレイラウザーを持って斬りかかった。

「セイツー!!」

「ソリヤッ!!」

剣と剣がぶつかる。力は向こうの方が上だが、疾さはこっちが上だ。耐久は……関係ないな。一撃必殺を狙うだけ。

「流石にやるな!!」

「そっちもな!!」

このまま剣だけの戦いでは決着が着くのは大分掛かるだろう。元々剣だけで済ませるつもりはないが。俺は「ABSORB」「FUSION」の2枚のカードを取り出しジャックフォームに変身した。剣も長剣に変わる。

「おっ、変わったな」

「さっきと同じと思うなよ」

「なら俺も、ベレンヘーナ、セット」

《了解。ベレンヘーナ、セット》

一真が取り出したのは二丁拳銃だった。遠距離戦に持ち込む気が。

「よっ」

「逃がすか！」

一真が空に飛び上がり、俺はそれを追いかけるようにオリハルコンウィングで空を飛んだ。

「受け取れ、ダブルインパクト！！！」

「ちっ！！！」

【METAL】

俺より早く上上がった一真が銃を乱射してきた。俺は【METAL】を使い体を硬化させながら一真に向かって飛んで行った。途中

何発か掠ったが、硬化したおかげでダメージはなかった。

「オオオオオ!!!」

【TACKLE】

【MACH】

「テンセグレートシールド、セット」

【TACKLE】と【MACH】、そしてさっき使った【META  
L】で【SONIC CHARGE】を発動させ突進した俺は、一  
真に向かってブレイラウザー突き出した。一真は盾を出したが、ブ  
レウラウザーは盾を破壊した。しかしそれは罠だった。

「メガデス!!!」

「しまっ!?!」

一真は盾の裏で砲撃の準備をしており、盾を破壊した瞬間、それは俺に向かって放たれた。

一真side

ふう、まさかテンセグレートシールドが破壊されるとはな。本当なら受け止めて、テンセグレートシールドの裏からメガデスをぶっ放す予定だったのに、驚いて少しタイミングずらすし、右肩も少し貫かれるし。とりあえずメガヒールで治しておくか。

《おい一真、まだ終わってねえぞ》

肩が治った時、ゼロがそんな事を言ってきた。何となく気付いてはいた。さつき手応えがなかったからな。煙の中からは金色になり、胸には紋章が付いたライダーがいた。剣も二本になってるな。

「ハア、ハア、危なかったぞ」

「よく避けたな」

「速さには自信があるからな」

成る程な。だけど速さに自信がある程度で避けられたらたまらんな。

「冗談だ。少し時間を止めただけだ」

「……………へえ」

飛翔も時間を止めれるのか。俺のアルファインフォースみたいなもんか。

「いくぞ」

「ゼロ。カムイ、セットだ」

《わかった。カムイ、セット》

もしものために俺はカムイを出しておく。飛翔は一枚のカードを取り出した。

【MAGNET】

「うおっ!?!」

体が引き寄せられる!?!ならこの勢いを利用して、叩き斬る!?!俺はカムイを振りかぶり飛翔に突撃した。

「オオオオオ!?!」

「御神流、虎乱」

飛翔はそんな俺に対して連撃を放ってきた。二刀において連撃なんて当たり前だろう。だが飛翔のそれは疾さが違った。

「ぐあっ!?!」

斬ろうとしていたうえに引っ張られていた俺は防御が間に合わず、連撃をまともにくらってしまった。

「終われ!?!」

「ちっ!メガブラスター!?!」

とっさにメガブラスターを放つことによって飛翔の追撃を何とか抑えた。これ以上やるとマズいな。負ける気はないが、怪我したくないもんな。

「飛翔、終わりにしてやるよ」

「何?」

俺はカムイに魔力を籠める。飛翔はそれに気付いたのか五枚のカードを取り出す。

「喰らえ！！天羽々斬あまのはばきり！！！！」

「負けられるか！！ロイヤルストレートフラッシュ！！！！」

カムイから伸びる光の斬撃と飛翔の持つ剣から放たれる光の斬撃。似たようなものだが本質は全くの別物。飛翔はおそらく圧倒的な力で相手を飲み込むもの。それに対し俺のは相手を斬り裂くもの。

「なっ！？」

「斬れる！！」

そう、斬り裂くのだ。たとえ物でも概念でも、こんな斬撃であろうとも。俺の斬撃は飛翔の斬撃ごと飛翔を斬り裂いた。

『勝者、御剣一真』

神「さて、治してきますか」

アリシア「ちゃんと治してよ!!!」

アリサ「早くしなさい!!!」

神「大丈夫ですよ。軽く見積もって重傷レベルですから」

貴哉「それって大丈夫なのか？」

要「あつ、貴哉きたのか」

貴哉「勉強をしに」

ゼフィリス「勤勉なのは良い事だな」

貴哉「ハハハ、ありがとう」

カイト「じゃあ解説するか。恭介よろしく」

恭介「俺!? まあいつか。えっと、今回は総合的に見れば二人共レベルは近い。一真はデジモンの能力を取得すれば飛翔を十分に越えられるけど、今回は使わなかったな。だから最後の技の性能差で能力は決まったな」

要「カムイには布津御霊剣と黒いエクスカリバーが使われてるからな」

飛翔「あー、痛かった」

すずか「大丈夫？」

鈴音「怪我はありませんか？」

飛翔「治ったから大丈夫だ」

神「肩から腰までスッパリだもんね。治らないと大丈夫なんて言えないよね」

リニス「さつき重傷とか言っていました、それどう考えても重体でしょう」

優奈「次は第六回戦になります」

鈴side

レイ相手に勝てるかね？まあ正直負けても解説席が面白そうだからいいけど。無理に勝たなくていいか。いや、解説席にはツカサもいるし、次の試合で久遠が負けたら久遠も来るかもしれないからな。寧ろ負けるか？

「やるぞー」

「おう」

まっ、やるだけやるか。とりあえず俺は銃、鈴雲を取り出した。

「吹っ飛べー!!」

「だが断る!!」

俺が砲撃を撃つと、レイ同レベルの砲撃で相殺してきた。

「フハハハハ!!」

俺らはただただ乱射する。だけど全ての砲撃が相殺し合い、相手に当たる事はない。

「じゃあそろそろ、マジになるぞ!!」

そう言ったレイが視界から消える。気配を探ると無数に感じた。

『ウオラアアア!!』

「墜ちろ!!」

突然現れて飛び掛かってきた無数のレイを鈴雲の弾で撃ち落とす。すると全てのレイが煙のように消えた。影分身か。

「ん？」

地面に僅かながら振動を感じた。地震が起こる訳ないから、レイだ

な。少しづつ強くなる振動に注意しながら俺は立っていた。そして震源が足元にきた瞬間後ろに跳んだ。

「ちっ！」

「当たり！」

地面からドリルを付けたレイが飛び出してきた。俺はそんなレイに向かつて鈴雲を向けた。

「ファイナルマスタースパーク！！！」

「聖なるバリア・ミラーフォース！！！」

レイはミラーフォースを出すが、ファイナルマスタースパークを反射しきれず壊れた。

「リミッター外すぞ！！！」

「見せてみる！！！」

レイのスピードが一気に上がる。流石に鈴雲で近接戦はあれなんで、幽香の傘で対抗する。レイが出したのは斬馬刀だった。

「オラララララララララッ！！！」

「ドリヤリヤリヤリヤリヤッ！！！」

バキーン



アハアハアハアハアハアハアハアハアハアハアハアハアハ  
アハアハアハア

「ふ、フェイト!？」

フェイト(トラウマ)が現れたからだ。

何故いる!？確か鈴が何か使ったが、そのせいか!？ならばこれは偽物だ。それに俺は克服したはず……

「レ〜イ〜くん」

「やっぱり無理!！」

あれはフェイトの恥ずかしい映像がこっちにあっただからだが、この偽フェイトにはそれがない。

「そうだ!！ヴィード、助けて!！」

『無理です!！』

この薄情者め!！主人が可哀相と思わないのか!！

「ライトニングバインド!！」

「しまっ!？」

何故か俺には解けないバインドを掛けられてしまった!！偽フェイトのくせにこんなとこまで真似するなんて。

「ふふふふふ、レイくん。いい事しようね」

「嫌だ！！助けてくれ！！」

「そんな事言ってもダメ」断罪ノ光塵<sup>ジャッジメントレイ</sup>！！！！！！」

「!?!」

偽フェイトを貫いて巨大なレーザーが俺に飛んできた。そこで俺の意識は飛んだ。

『勝者、神北鈴』

解説席

神『はい終了』

要「なんだあのフェイトは」

カイト「レイのトラウマだろ。レイの奴、最後障壁で気絶程度に抑えたな」

ゼフィリス「女性の狂気、いや、あれは狂喜か？まあともかく恐ろ

しいな」

紅蓮「そうだな。フェイトのあの胸は凶器だな」

黄宇「紅蓮、ちょっと来い」

紅蓮「えっ？いや、ちょっとしたじょうだ、ギャアアアアア！！！！」

貴哉「口は災いの元。体言する奴がいるんだな」

百合姫「あれ？鈴が勝ったの？」

ツカサ「ふみゅ〜」

水籬「何処に行ってたの？」

百合姫「ホテル」

優奈「あんまりそういうのは言わない方が……」

要「この夫婦はどうしてこうなんだろうな。ユリも一戦目はギャグ勝利だし、鈴も今回はな」

ゼフィリス「愉快でいいではないか」

恭介「次は久遠と亮だな」

鋼牙「久遠ちゃんに頑張って貰いたいな」

アリサ「というより久遠が勝たないと亮が大変よね」

百合姫「久遠を傷付けたら許さない」

要「いやいや、試合だからな」

ゼフィリス「とはいえ要も久遠に勝って貰いたいのだろ？」

要「もちろん」

神『では第七回戦、スタート』

亮side

やっと俺の試合が始まる。相手の久遠ちゃんが強いのは前の試合で明らかだ。それになんだか解説席からの視線が痛い。

「どうかした？」

「何でもないよ」

久遠ちゃんが心配しているようだ。というかちゃんでもいいのか？前

の試合で大人にもなつてたし。

「いっくよー!!!」

あつ、大人になった。まあくだらない思考はここまでにして、やるとするか。武器は虚空ノ双牙でいいな。

「セイヤツ!!!」

「フツ!!!」

一瞬で間合いを詰めてきた久遠ちゃんの雷の爪による攻撃を受け流す。やっぱり速いな。

《私も忘れないでよ》

「くっ！デバイスか!!!」

羽衣が意思を持って俺を攻撃してくる。そういえばこれは飾りじゃなかったな。久遠ちゃん自身の攻撃と合わさって反撃の隙がない。

「姐己！一氣にやるよ!!!」

《うん！ヴァジュラ!!!》

砲撃か。これならまだ防ぎやすい。

「リーフガード!!!」

俺の目の前に盾が出現し、久遠ちゃんの砲撃を防いだ。砲撃を防ぎ

きると同時に盾は壊れた。しかしなんでまた砲撃なんて撃ってきたんだ？あのまま押し続ければ十分に勝機はあったはず。久遠ちゃんだってそれを分かっているだろうに……まさか。

「いくぞ！！愛の紅雷！！」

「狐火・散！！」

無数のバラの花弁が久遠ちゃんに向かってビームを放つ。久遠ちゃんは花弁に向かって狐の形をした炎を放つ。しかし迎撃しきれず、久遠ちゃんはビームを避けていた。

「ハアハア」

久遠ちゃんの息がだんだん切れ始めた。やっぱりだ。多分久遠ちゃんはスタミナが少ない。そうじゃないとしても、前回あんな大技を出したんだ。スタミナが減っていてもおかしくない。ならシラードによる重量級の攻撃でスタミナを削ってやる。

「オオオ！！奥義・甲冑割！！」

俺はシラードで突きを放つ。たいていの防御なら簡単に貫く威力の突きだ。そこそこ速いから、避けるのも難しい。

《舐めないで》

「マジか！？」

しかし羽衣に防がれてしまった。どんな強度の羽衣だよ。しかも今のは完全に羽衣の意思だから久遠ちゃんのスタミナが減った気配が

ない。

《ほらいくよ!!》

「ちっ!」

羽衣がドリルになって攻撃してきた。完全にデバイス任せの戦闘かよ。しかもなかなか強いから性質が悪い。

「こんの、飛べ!!」

「わっ!?!」

俺はシラードの腹を叩き付けて久遠ちゃんを空中に飛ばした。さあ、次の攻撃は防げるか？

「秘奥義・重装甲破!!!!」

「くうう!?!」

《マズッ!!》

俺は空中でシラードを振り回し、久遠ちゃんに叩き付けた。空中では防ぐ事は出来ても威力を下げるなど出来ない。俺がシラードを振り抜くと久遠ちゃんは地面に叩き付けられた。

「かはっ!?!」

『ブーブー』

『亮ふざけるな』

外野が五月蠅い。久遠ちゃんにファンが多いのはわかってたが試合中にヤジを飛ばされるとは。とりあえず剣を突き付けて。

「俺の勝ち、かな」

「えへへ、負けちゃった」

『勝者、七宮亮』

解説席

神『試合終了』

要「おいおい、久遠疲れてんのによ」

百合姫「亮空気読みなさいよ」

ゼフィリス「体力を回復させてあげるべきだったか？」

貴哉「過保護じゃね？」

鈴音「うん」

カイト「こいつらの思考はカワイイは正義、なんだよ」

要「違う！親馬鹿なだけだ！！」

龍斗「自分で言いますか？」

アリサ「でも今回は亮の運が本当によかったわね」

優奈「久遠ちゃんはお兄ちゃんとの戦いで疲れてたし、亮さんはシードで体力温存出来たもんね」

貴哉「運も実力のうち、っていうからな。」

ツカサ「それでも凄かったよ」

神『では次回もお楽しみに。次はトーナメントの都合上、第六回戦の勝者と第七回戦の勝者、つまり鈴と亮の対決からスタートだよ』

完結&200万記念企画第四弾 その5（後書き）

<まーちゃんと詩音と優の教室>

まーちゃん「皆さんこんにちは」

詩音「こんにちは」

優「何処どこ？」

まーちゃん「教室ですわ」

優「一体何の？」

まーちゃん「詩音ちゃんに私達で授業をするのですわ」

詩音「どんな授業をするんですか？」

まーちゃん「優さんを使った実践保険体育ですわ」

優「ちよつと待てい！！」

まーちゃん「待ちません」

優「うわっ！？植物が絡まってきた！？」

まーちゃん「では詩音さん、好きにしていいますよ」

詩音「それじゃあ、えい！！」

優「ちょっと！…それは………」

「見せられないよ！…」

優「シクシク」

まーちゃん「どうでした？」

詩音「ふわ〜、凄かった」

まーちゃん「もっと凄いプレイもありますが、それは10年後のル

「テシアさんをお呼びしてからにしましょう」

優「まさかアレか!？」

まーちゃん「では次回もお楽しみに」

詩音「ねえ、もっとしよ」

まーちゃん「ふふっ、ではもう少し優さんには頑張ってもらいまし  
ょうか」

優「嫌だー!!」

完結&200万記念企画第四弾 その6(前書き)

更新時間は伸びてる。

でもクオリティが下がってる。

そんな気がしてならない。

完結&200万記念企画第四弾 その6

神『さあ始まりました。まずはトーナメントの都合上、鈴VS亮です。どっぞ』

亮side

なんか鈴さんから物凄い殺気を感じる。あれか？久遠ちゃんに勝つたのがそこまでいけなかったのか？

「よくも久遠に勝ってくれたな」

「いやいや、試合だし」

「五月蠅い！！久遠に勝つ。それだけで罪だ！！」

なんという理不尽。しかしどんな形であれ本気なものには違いない。油断するな、相手は俺は遥かに超える者だ。

「……………喰らえ」

「消え「六王銃」ガハツ!!!?」

見えなかった。速過ぎて目に映りもしなかった。気が付いたら目の前に居て凄まじい衝撃を喰らっていた。

「どうした? 終わりか?」

「ゲホツ、ゲホツ!!!ぐっ」

咳込む度に血を吐く。内臓をやられた。畜生、憑神の力を使うしかねえ。

「スケエエエエエエイス!!!!」

俺は憑神空間を発生させる。ここでなら思う存分戦える。手には万死ヲ刻ム影を持っている。

「うおらっ!!!」

「ふん」

万死ヲ刻ム影を振り回し鈴さんを斬ろうとするが、全て避けられる。間合いの中で避けられるような速度で振っていないのに。

「これならどうだ!!! 極刑の聖杭!!!」

鈴さんの上に光の杭が現れるが、それすらも避けられる。

「もついいか?」

「なっ!？」

気が付くと鈴さんは再び目の前にいた。万死ヲ刻ム影を振るおうとするが、鈴さんの方が圧倒的に速く蹴りを繰り出した。

「ゴフツ!？」

さっきやられた内臓に更なるダメージが加わり、大量の血を吐きながら飛ばされた。倒れた俺に鈴さんは近付いてきた。

「さっきからお前が疑問に思っていたであろう事を教えてやる」

「何………ですか？」

「俺はほとんど自分で動いていない。お前との距離を操ってただけだ」

「距離………」

成る程、それじゃあ当たらない訳だ。座標を指定するとかでもない  
と当たらないな。鈴さんがトドメを刺そうとしている。それを見て  
『俺』の意識は飛んだ。

鈴side

最後、倒れた亮に踵落としを決めてやろうとした俺は、無意識のうち  
に亮から離れていた。

「ありゃ、逃げちゃった」

「……………何だ、お前」

亮とは明らかに違う。ユリの中にいる『殺人姫』に近い気もするが、全くの別物だろう。

「何、か。僕は『七宮亮』。カミサマだよ」

「神様？」

「うっん、『カミサマ』」

カミサマ……………よくわからんが、こいつはヤバイ。それだけは確かに言える。

「フツ!!」

俺はさっきと同じく距離を操り『七宮亮』を攻撃しようとした。

「閃鞘・八花鏡」

だが無数の斬撃によって遮られた。

何で七夜の技が使える!?!いくらなんでも亮が知らない技を使えるはずがない。亮が隠していた?

「考え事は駄目だよ。投影開始」

トレース・オン

「投影魔術!?!」

『七宮亮』がその手に創り出したのは干将莫耶。恐れるような宝具ではないが、俺は混乱していた。考え事の最中に攻撃されたからで

なく、亮が今まで使う事のなかった投影を使ったからである。さっきの七夜の技といい、投影魔術といい。こいつ本当に何だ？

「とにかく、潰れる！！偽・螺旋剣！！」  
カラドホルク

「危ないな。熾天覆う七つの円環」  
ロー・アイアス

今度はアイアスまで。しかも強度もかなりのもの。カミサマって名も伊達じゃないってか。

「禁忌『レーヴァテイン』！！！！」

「それは……………」

どんな投影であろうと問答無用に破壊してやるよ。

「ハッ！！セイツ！！」

「当たらないよ」

どれだけ速く振っても当たらない。俺のように距離を操り間合いから逃れている訳ではない。完全に避けているのだ。ただ俺が振るう前から避けているように見える。まさか……………

「未来視まで使えるのか！？」

「ピンポーン」

……………いくら未来視が使っても避けるには俺以下の身体能力では無理だ。あいつは俺並か以上って訳だな。なら世界そのもので

攻撃してやる。

「使うなら決勝戦辺りだと思ったんだがな。『クリエイト・オブ・ワールド創造世界』」

俺を中心に何も無い世界が広がる。

「固有結界……違うね。心象風景を展開している訳じゃない。創って新しい世界を創ってる」

「ああ、その通りだ。この世界に固有結界のような制限はない。そして何だって可能だ。こんな風にな」

俺がそう言つと『七宮亮』は地面に倒れ伏した。

「がつ!?!」

「どうだ?重力1000倍は?」

『七宮亮』のいる所の重力を1000倍にしてやった。しかしこの重力で潰れないとはな。だけでもこれで俺の勝ちだな。

「ねえ……鈴お兄ちゃん」

「まだ喋れたのか」

「モノを殺すって……どんなのか……教えてあげようか?」

「まさか!?!」

「これが、モノを殺すという事だ」

俺は『七宮亮』にトドメを刺そうとしたが、それより速く『七宮亮』はナイフで地面を突いた。その瞬間、俺の創った世界が死んだ。

「俺の世界を殺すレベルの直死、だと？」

「隙あり。閃鞘・一風」

「しまっ!？」

気が付いた時には目の前にいた『七宮亮』に地面に叩き付けられた。そして首に虚空ノ双牙を突き付けられ、そうになった。

ドサッ

「ありや、亮の体が耐え切れなかったか」

「……………そうかい。で、お前は動けないと？」

「うん。流石に重力100倍の後に七夜の技はきつかったね。お休み」

そう言って『七宮亮』は完全に意識をなくしたようだ。なんとも締まらない終わりだったが、勝ったから良しとしよう。

『勝者、神北鈴』

神『さて亮くんを治しますか』

ゼフィリス「あれは、抑止力？………違うな」

一真「やっぱり出てきたな」

要「知ってるのか？」

一真「まあ一回戦ったからな」

カイト「だが今回は遊びすぎだな。いくら表に出れたからって亮の体が既にやばかった事ぐらいわかるだろうに」

龍斗「内臓へのダメージに加え、未来視で視えていただろうに重力を喰らっては………」

リアン「ソフトにハードが着いていけなかったという事かな」

一真「………ちょっと待て、何でリアンがいる」

要「うちの作者が呼んだそうだ」

リアン「初めまして、要くん」

要「よろしくな」

貴哉「しかし強かったな。なんとかわかる程度だったよ」

百合姫「ヤムチャ視点ですね。わかります」

神『次は第三幕、終わりも近いね』

第一回戦

南武貴志 VS カスミ・ヴェネーラ

第二回戦

ゼフィリス・エーデルフェルト VS アキラ・シュヴァイアー

第三回戦

御剣一真 VS 神北鈴

要「チートの塊だな」

貴哉「今更だろ」

刹那「というかこのトーナメントが一部を除いてチートの塊だろ。じゃあみんな、弁当配るぞ」

鋼牙「わーい」

神『では試合も始めましょうか』

貴史 s i d e

「本気でやるぞ、貴史！」

「もちろんだ」

カスミ相手に本気出さずにやれるかってんだ。そんな事したら瞬殺されかねんわ。

「フツ！！」

「ハツ！！」

互いの拳がぶつかる。威力も速さもほぼ同レベルだな。

「魔法の射手・闇の10矢！！」

「遅い！！」

カスミの魔法の射手を打ち落とす。その僅かな間にカスミは更に魔法を放つ。

「影よ!!!」

「効かん!!!蛇咬!!!」  
スネークバイト

カスミが操作した影を蛇咬で打ち砕いていく。そして俺は赤い槍を  
フラッディ・ランス  
創り出し、カスミに投げ付けた。

「無駄だよ」

しかしカスミに届く前に、赤い槍は掻き消された。  
フラッディ・ランス

「血液操作か。そんな能力もあつたな」

「そろそろ、力を使ってもいいんじゃないか？」

「そうだな。」

今こそ 汝が右手に

その呪わしき命運尽き果てるまで

高き銀河より

下りたもう蛇遣い座を宿すものなり

されば、我は求め、訴えたり、

喰らえ その毒蛇の牙を以て!!!

汝が神に、我が身を、捧げん!!!」

悪魔の腕も解放したんだ。勝たせて貰うぞ。

カスミside

やはり凄まじい威圧感だな。まあそうでもないところもないのだが。

「殺す」

私も直死の魔眼を解放する。これで私の視界にしばらく入ったものは死んでしまう。もちろん貴史もそれを知っているからすぐに私の視界から消えた。でもこれでいい。これで貴史は死角から攻撃するしかない。何処からくるかわかっている攻撃ほど避けやすいものはない。

「後ろか」

無言で攻撃してきた貴志の攻撃を避ける。さっき避けやすいと言ったが、油断したらえぐられるな。

「無言で攻撃するのは小説的にどうなんだ？」

「奇襲で声かける奴がいるか。小説的には知らん」

奇襲の後、すぐに死角に入った貴史に声をかけるとそんな返事が返ってきた。まあ確かに奇襲で声を出すなんて以っての外だ。

「では」

私は壁とも言っていない程の魔法の射手の弾幕を後ろに張った。威力は低いが、足止めくらいには………

「ならんよな」

魔法の射手が掻き消された。この魔力波はおそらく乖離剣の衝撃波だろう。

「天地乖離す（エヌマ）……………」

「……………」

「開闢の星<sup>エリシユ</sup>！！！！」

貴史が乖離剣の真名開放をする。私はそれが届く前に影に沈み、貴史の影から出た。

「残念だったな」

私がエクセキューシユナーソードを振るう。しかし斬ったのは貴史<sup>フラッテイ・アバター</sup>の赤い分身だった。

「そっちが残念。裏だよ」

貴史の蛇咬<sup>スネークバイト</sup>が私の胸を貫く。だがしかし……………」

「裏の裏だ！！」

「ちっ！！」

貴史が貫いたのは私の幻影。本物の私は本物の貴史の後ろでエクセキューシユナーソードを振りかぶっていた。直死の魔眼では間に合わないしな。

「この！！ってうわっ！！？」



解説席

神『終わりました』

要「ラッキースケベだな」

ゼフィリス「何だ、貴史の幸運は低いのか？」

カイト「寧ろ低いのはカスミなんだが、くくっ」

貴哉「しかしこんな決着でいいのか？」

要「よくある事だ。リアンも気をつける」

リアン「ええっ!？」

一真「ああ、確かに」

リアン「僕ってそんなのかな？」

刹那「アイス美味しいか？」

久遠・鋼牙「うん!!」

貴哉「そこは話聞いてないな」

神『そんじゃ第二回戦、始めるよ』

ゼフィリス side

遂にアキラとの戦いだ。心踊るな。

「いくよ」

いきなり固有結界を張るか。まあいい、以前やった事があるように空想具現化で私の場所まで届かないようにするか。

「固有結界が……」

「ふむ、要の、ORTの侵食固有結界より楽だな」

私はサイファスを、アキラは魔皇剣を構える。

「斬る！！」

サイファスを振って魔力斬撃を飛ばす。しかしアキラは魔皇剣でそれを落とす。この程度では効かんよな。

「なら、偽・黒い銃身ブラックバレル」

「黒い銃身ブラックバレルだと!?!」

知っていたか。まあオリジナルとは別物だが、破壊するならこっちの方がいい。両手に持ったそれを乱射する。しかし無意味に撃つのではなく、足元のみを狙う。

「くっ!?!」

こうしていれば剣しか攻撃方法がないアキラは反撃出来ないだろう。

「宝石剣!?!」

「なっ!?!」

宝石剣の斬撃が偽・黒い銃身ブラックバレルの砲撃を掻き消す。確かに剣だが、宝石剣を持っていたとは。だが………

「そうでなくては面白くない!?!?!」

サイファスを使いアキラの後ろに回る。

「ハアアアア!?!?!」

「ウオオオオ!?!?!」

サイファスと魔皇剣がぶつかり、火花を散らす。互いの剣がどんどん加速していく。

「そこ!?!」

「させない!?!」

私が隙を見て偽・黒い銃身を撃とうとしたが、弾かれてしまった。

「ブラックバレル」

アキラの固有結界に入ったためか、二匹の魔獣が襲い掛かってきた。斬るか。

「止める!!!」

しかしそれはアキラが止めた。

アキラside

「.....どういう事だ？」

僕があのだ二匹を止めるとゼフィリスが聞いてきた。

「僕は自分だけの力で貴方に勝ちたい。ただそれだけ」

魔獣、いざとなれば魔王に頼れば十分勝てるだろう。しかしそれは自分の力とはいえない。目の前の壁は自分で越える。

「そうか、ならば再開しよう」

「.....」

僕らは再び構え直す。ゼフィリスは強い。広く深く、様々な技術が使える。剣術ではこちらが有利だとしても、手数で負ける可能性は十分にある。

「星の息吹よ」

「くっ」

地面から鎖が伸びてくる。空想具現化か。さっき固有結界を途中で止めたのもこれの仕業か。

「セイツ！！」

鎖を全て断ち斬る。そしてゼフィリスに向かって突撃する。

「喰らえ！！」

「遅いよ」

斬ろうとした時、無数のレーザーが飛んできた。ミス・ブルーの魔術か。僕は魔皇剣を振るい、掻き消す。

「プルト・ディ・シュヴェスタア」

「月………落とし」

空想具現化がここまでの精度とは。とにかくどうにかしないと。僕はそう思い宝石剣を取り出した。だが月落としに気を取られすぎた。

「隙だらけだ」

「しまった！！」

身体に鎖が巻き付く。引きちぎろうとするもびくともしない。

「それは真祖すら縛り付ける鎖だ。たかが一介の死徒では「舐めるなああああ！！！！！！」なっ！！！！？」

僕は自分の身体をボロボロにしながらも鎖を引きちぎる。大丈夫、すぐに再生する。そして魔皇剣を月に叩き付けようとして……

スカッ

空振った。

「えっ？」

月が突然消えたのだ。ああそうか、あの月は空想。偽物なんだ。創る事が出来るなら消す事だって出来る。後ろから気配を感じる。直感でこのままだと斬られると判断した。

「まだまだ！！！」

空振った状態から無理矢理踏み止まり、剣を後ろに振った。

「ガッ！？」

ゼフィリスを持っていた剣ごと斬り裂く。

「ヤアッ！！！」

「させん！！！」

魔皇剣を振り下ろそうとすると、剣を蹴り飛ばされた。これで互い無手となる。

「オオオオオ！……！」

「ハアアアア！……！」

ドゴッ

「グッ……！」

「ガハッ……！」

互いが拳を突き出して、互いの顔面を殴って吹き飛んだ。僕が立ち上がりゼフィリスに立ち向かおうとすると、ゼフィリスが一言言い放った。

「私の勝ちだ」

その瞬間、僕は光の檻に閉じ込められた。中にはスフィアが飛び交っている。逆行運河・創世光年とは。

「宝石剣よ……！」

手元に魔皇剣がないため宝石剣で無理矢理引き裂く。そして抜け出そうとしたが、間に合わず下半身が消し飛んだ。

『勝者、ゼフィリス・エーデルフェルト』

神『………治さなくっていつか』

カイト「死徒だしな」

要「アキラだしな」

貴哉「それでいいのか？」

要「魔王出なかつたな」

龍斗「彼にもプライドがあつたんでしょっ」

カイト「今度お前と戦うんだろ？そのためじゃね」

要「成る程」

リアン「戦うのか、あれと」

要「うむ、ゼフィリスともな」

水雉「楽しそうだね」

要「実に楽しみだ」

リアン「楽しめるんだ……………」

貴哉「楽しめるらしいな……………」

一真「次は俺だな」

神「今回は終わりだよ」

一真「えっ？」

神「トーナメント的に君の試合は準決勝なんだ。しかも相手の鈴は今回試合ったばかりだしね」

一真「ならしょうがないか」

黄宇「では終わりだな」

久遠・鋼牙「またね」

雨季「いただきます……！」

要・カイト「死ね……！」

グシャ

完結&200万記念企画第四弾 その6（後書き）

<まーくとゲストとアリシヤの部屋>

ア「遂にゲストの後ろ!？」

シヤ「酷いわ!！」

ま「そうですね。今回のゲストはリアンさんです」

リ「よろしくお願いします」

ア「帰れ!！」

リ「いきなり!？」

シヤ「私達の出番を取らないで!！」

ま「落ち着いて下さい。じゃあリアンさん。今回の試合どうでした?」

リ「凄かったです。いつもあんなのだと思うと、とても着いていけないなと」

ア「まあ、あれは異常よ」

シヤ「いくらうちがおかしいと言ってもね」

リ「そういえば、これ優勝したら何か貰えるんですか?」

ア「いい質問ね」

シャ「実は知らないのよ」

ま「僕は知ってますよ」

ア・シャ「えっ？」

ま「次回作の最初のコラボ権だそうです」

アシャリ「へー、って一つに纏められた!？」

ま「ではまた次回も見てください。不平不満は作者にお願いします」

完結&200万記念企画第四弾 その7(前書き)

終わった.....

もうゴールしてしまふぞ？

完結&200万記念企画第四弾 その7

神『遂に最終回！！では準決勝第一回戦スタート』

一真side

まさか準決勝までこれるとは。どうせなら優勝したいが、今回はやはり相手恵まれなかったな。

「ゼロ、カムイセット」

《最初から全力だな。カムイセット》

俺はカムイを構える。鈴はすでに銃を持っている。どうするか、相手は格上。しかも能力も馬鹿げてる。世界を創るなんて反則だろ。隙を見て最大の攻撃を叩き込むか。

「どうした。来ないのか？」

「今やってやるよ」

《メルクリモン、能力取得成功》

俺は高速で鈴に近付き、カムイで斬り刻んだ。

「痛っ！！」

鈴を傷付けはしたもののすぐに回復する可能性がある。俺は更に連撃を放つ。

「斬り裂け！！ブラットロットクロイツ！！！」

「傷魂『ソウルスカルプチュア』！！！」

俺が高速の十字斬りを放てば、鈴は更に速く無数の斬撃を放ってきた。いつの間にナイフ創りやがった。

「ほらよ、ファイナルマスタースパーク！！」

「ちっ、ゴーストムーブ！！」

鈴の砲撃を避け、再び斬り掛かる。銃相手に間合いを開けはしない。だが鈴の手に収まる朱い槍を見た瞬間、その考えは消えた。

「刺し穿つ（ゲイ）……………」

「くっ！！」

俺は急いで鈴から離れる。速くあれの有効範囲から離れなければ！！

「死棘の槍<sup>ボルク</sup>！！！！」

鈴が突き出した槍は俺の心臓を貫く事なく空を突いた。

「突き穿つ（ゲイ）……………」

鈴はそこから一気に後ろに下がると、こちらに走って来て跳び、槍を振りかぶった。

「死翔の槍<sup>ホルク</sup>！！！」

連続真名開放か。ならこっちだってリミッターを外すか。

「ゼロ、フルドライブにカムイのリミッター50%解放だ！！！」

《わかった！フルドライブ！！カムイ、リミッター50%解放！！》

「うおおおおお！！！！」

ガキイン

「うおらっ！！！！」

カムイとゲイボルクがぶつかり、俺がカムイを振り切るとゲイボルクは弾かれ地面に落ちた。

鈴side

ゲイボルクを打ち落とすとは。まあ想定内の出来事だが。

「しかし速いな」

さっきの傷は治ったが、あのスピードで斬られ続けたらマズいな。あれを超える速度を出さないと。

「あっ」

速さといったらあれがあるじゃないか。俺の、いやみんなの速さの象徴が。

「一真！！」

「なんだ？」

「お前は強い！！魔力、剣技、経験、才能、努力、全てにおいて一級と言っても過言ではないだろう。ゲイボルクを打ち落としたもの見事と言える。あんな事が出来る者はそうそういない。誇ってもいいだろう。だがしかし！！お前はまだまだ、速さが足りない！！！！ラディカル・グッドスピード！！！！！！」

「・・・・・・・・・・は？」

俺はあのクーガの兄貴のアルター『ラディカル・グッドスピード』を身に纏う。そして世界も創っておく。これなら速さで負ける気はしないぜ。気分的に。

「いくぜー！！」

「なっ！？ガハッ！！！！」

俺は一気な一真に近付き殴り付けた。やっぱり速い。兄貴は偉大だ。



《おつよー!!》

ふむふむ、ここで全力か。その力見せてもらおうか。

「アルファイネフォーアス!!!!」

その瞬間、俺は斬り刻まれていた。

「ガッ!!?」

しまった。あれを忘れていた。速さじゃどうにもならないってのに。だけど……………

「ここは俺の世界だ!!」

俺がある事をする、空中に黒い穴が現れた。その穴は凄まじい勢いで全てを吸い込み始めた。

「何だ!?!」

一真は飲み込まれまいと必死に踏み止まっている。

《一真!!これはブラックホールだ!!》

「なら、あれだな!!ウイングドラモン、能力取得!!」

《ウイングドラモン、能力取得成功》

ん?一真が普通に立ってるな。なんかでブラックホールの超重力を

無効にしたか。じゃあブラックホールは消しとくか。さて、あれの準備はブラックホールを創った後に出来たから必殺技を使わせないと。となると……

「天竜斬破!!!」

一真が脳天に剣を振り下ろしてくる。ラディカル・グッドスピードはさっきのアルファインフォースによる攻撃を受けた時に解除されているが、避ける事は可能だ。しかし俺はそれを敢えて左肩に受けた。

「ガアアアツ!!!」

俺の左腕が飛ぶ。激痛が走るがこれでいい。

「偽り写し示す万象ヴェルグアウエスター」

「うああああ!!!」

《一真!?!》

一真が左肩を押さえて苦しみだした。当然だ。俺と痛みを共有してるんだからな。

「一真、そんなので、俺に勝てるか?」

「舐める、な。腕が、ないくせに」

「なら、その力見せてみる!!!」

「ああ！！ゼロ！！」

《ちっ、言っても聞かないんだろ。スサノオモン、能力取得成功》

一真の剣に魔力が集まり光り輝く。そうだ、それでいい。

「<sup>アメノ</sup>天」

「後より出でて先に断つもの（アンサラー）」

俺は先程用意しておいた鉄球を構える。鉄球は小さな剣となる。

「<sup>ハバキリ</sup>羽々斬！！！！」

一真の斬撃が向かってくる。このままでは間違いなく斬られる。このままでは、な。

「<sup>フラガラック</sup>斬り決る戦神の剣！！！！」

「……………え？」

俺が剣を放った瞬間、斬撃は消え、一真の胸には小さな穴が開いていた。そして一真は倒れた。

『勝者、神北鈴』

解説席

神「蘇生蘇生」

アリサ「ねえ、あのラディカル・グッドスピードってあんなに速いの？」

百合姫「それは鈴の世界だからよ」

リニス「どつという事でしょう？」

百合姫「鈴があれより速いものはないって言ったでしょ？鈴にとつてそれが真理なら、当然鈴の世界においても真理なのよ」

アリシア「世界の修正力ね」

アインス「嫌な修正力だな」

紅蓮「おーい、侵入者を捕まえたぞ」

？「つ、強い……」

要「あつ、それ今回のゲストの遙だ」

紅蓮「はっ？ゲスト？」

黄宇「ゲストを傷付けて連れてくるとは、仕置が必要だな」

紅蓮「いや、知らなかっただけで、許し、アッーーーー！！！！！」

要「大丈夫か？水飲め」

遥「ありがとう」

ポフン

要「今回の真のゲスト、はるかちゃんです」

はるか「てめえ！！性転換薬入れやがったな！！」

シルフ「キヤー！！可愛い！！」

はるか「ギヤー！！離してー！！」

シルフ「だが断ります！！」

カイト「また愉快なのが増えたな」

すずか「相変わらずだね、ここは」

貴哉「そうだな」

久遠「そういえばなんで一真はブラックホールに吸い込まれなかったの？」

吼太「ウイングドラモンの力だな。あれの翼は重力を遮断するから

な」

神『では準決勝第二回戦始めましょうか』

カスミside

ゼフィリスは強いからな。アーティファクトを使わねばならんかもしれん。正直あの姿を晒したくはないが。

「準備はいいか？」

「もちろんだ」

私は闇の魔法で強化する。そして魔法を撃ち放す。

「漆黒の炎嵐！！」

「スファイア・ブレイク！！」

二つの攻撃がぶつかり相殺する。流石にこの程度では駄目か。なら質より量でいかせて貰おう。

「魔法の射手・連弾・闇の1000矢!!」

「むっ」

さあこの弾幕をどうするかな。

「たいしたことないな」

ゼフィリスは魔法の射手を全て打ち落としていく。これでいい。これで動きが抑えられた。

「受け取れ!!千の雷!!」

「ちっ!!」

弾幕の処理に追われ動きが鈍っているゼフィリスに雷が落ちる。その雷がゼフィリスに当たる瞬間、ゼフィリスは消えた。

「転、いつ!?!」

「ほっ」

私は咄嗟に身を屈める。すると私の上を斬撃が通り過ぎていった。私は前に転がり後ろを振り向いた。そこには剣を振り抜いた姿のゼフィリスがいた。

「サイファスだったか。いつの間持っていた?」

「雷が当たる直前だ。しかしよく避けたな」

「運はなくても経験はあるからな」

「成る程」

さて、どうしたもののか。さっきまでのように魔法で攻撃をしていてはまた後ろに回られるかもしれんし、近接戦闘では向こうに分があるし。

「いつまで考えてもしょうがないか。」

レク・リク・ラク・ライネック

天壤の劫火  
アラストール  
モドランス  
形状槍

私は天壤の劫火アラストールの槍を取り出す。これならサイファスに打ち負ける事はないだろう。

「槍か。ではこちらもリミッターを外すか」

ゼフィリスから膨大な魔力が溢れる。

「いくぞ!!」

私は槍で何度も何度も突いた。ただ槍をゼフィリスに突き刺す事のみを考えて突いた。しかしゼフィリスはそれを不可視の剣で防ぐ。無駄のない完璧な守りだ。

「ハアアアアアアア!!」

私は更に速く槍を放つ。少なくとも今はゼフィリスは反撃出来ない。ならば守りを打ち崩し勝つ。だがここで想定外の事が起きた。

「なっ!?!」

槍が空を切った。ゼフィリスは防御の体制で、剣があるだろう所突いたというのに、見えない刃が無くなっていた。その隙にゼフィリスが踏み込んでくる。槍では間に合わない。障壁を強化したが、ゼフィリスの魔力を籠めた拳は容易に私の体に届いた。

「セイツ!?!」

「ガツ!?!」

崩拳とは、かなり吹き飛ばされたな。内臓にダメージもあるが気にしてられない。ゼフィリスは斧剣を手に持ち近付いて来ていた。

「射殺す百頭!?!」  
ナインライフズ

「くっ!?!」

是、射殺す百頭とは違ナインライフズ・ブレードワークスうオリジナル。百の斬撃を繰り出すそれを避けるのはほぼ不可能。

「来れ（アデアット）」

しかし私はアーティファクトを使いそれから逃げた。

ゼフィリス side

仕留めたと思ったが、消えた? 違うな。僅かに影が見えたという事は高速移動の類か。やれやれ、凄まじい速さだな。

「ぐっ!?!」

捜そうとした次の瞬間、私の体が爪により傷が付いた。その場に留まるのは危険だ。

「つつ!?!動いても来るか!?!」

走りながらも私の体に傷が付いていく。だが徐々に目が慣れてきた。

「そこっ!?!」

「!?!」

再び創り出したサイファスを振るうと、一瞬ではあるがカスミの姿が捕捉出来た。フェイトちゃんのような大胆な格好だったな。全く、若い娘が肌を露出するなどけしからん。

「しかしどうしたものか」

捕捉出来たとはいえ一瞬の事。ふむ、姫にでもなるか。そうと決まれば早速。

「これでよし、っつ」

「……………はあ!?!」

カスミが何故が固まっている。そうか、この姿を見せるのは初めてだからな。

「ほらほら、そんな風に固まったら斬り裂くわよ」

「……………」

あっ、無言で消えた。まあいいか。さっきに比べたらよく見える。

「ハアツ!!」

「何!?!」

惜しい。爪が掠ったな。もう少しだから朱い月でも創ろうか。いや、向こうも真祖だったな。

「よっ!ほっ!」

さっきよりも攻撃が激しくなってきた。防げるけど、これじゃあこっちが攻撃出来ない…………捨て身で捕まえるかな。

「ぐう!!」

私はわざと防ぎ切れないふりをする。すると無数の攻撃が私の体をえぐっていく。そして私が膝を付いたとほぼ同時にカスミの腕が私の胸を貫いた。

「ガハツ!!」

「私の勝ちだ」

「そう、いつ訳には……………いかない、のよね」

「！？抜けな「アアアアア！！！」ゴフツ！！？」

私の胸を貫いているカスミの腕を引きちぎり、カスミを殴り飛ばした。流石に体がきついな。元に戻るか。

「これで……………五分だな」

「馬鹿……………言うな。穴の開いた、そちら方が……………マズイだろ」

まあ、そうかもしれん。だが……………

「お前を屠る体力くらいはある！！約束されし（エクス）……………」

私は自分の姿で相手に剣が見えなくなる程振りかぶる。

「今更約束されし勝利の剣か！！天壤の劫火！！！」  
エクスカリバー アラストール

カスミが槍を取り出す。確かに約束されし勝利の剣ではあれには届かんかもしれん。だがこれならどうだ？

「オオオオオオオ！！！！！」

槍が投げられる。迎撃してみせよう。

「勝利の双剣！！！！！」  
カリバーズ

私の振り下ろした二本の約束されし勝利の剣が槍を飲み込み、そして……………

「キヤアアアア！！？」

カスミを飲み込んだ。二本の約束されし勝利の剣はそれと同時に碎け散り、光の斬撃が消えた後にはカスミが倒れていた。

『勝者、ゼフィリス・エーデルフェルト』

解説席

神『治療だ』

アリサ「まさかの二刀流」

アリシア「そりゃ威力あるよ」

カイト「しかも約束されし勝利の剣が碎けるくらいの魔力を籠めてたしな」

せつな「キレーだったね」

かなめ「へっ、たいしたことねーよ」

リニス「この子達は？」

龍斗「子供になった刹那と要ですね」

一真「こんな時代があったのか」

遥「あー、やっと戻った」

シルフ「まだ愛でたかったのに」

すずか「じゃああちらの子供でも「頂きます!!」「速っ!?!」

せつな「きゃー」

かなめ「は〜な〜せ〜!!」

遥「はっ、ざまあみろ」

久遠「鋼牙、何キヨロキヨロしてるの？」

鋼牙「またあの変な人（雨季）が来ないよね」

貴哉「大丈夫」

黄宇「私達が仕留めておいた」

アインス「存分に遊んでいいぞ」

雨季「……畜生」

久遠・鋼牙「わーい」

水雉「子供はいいわね」

雨季「……………皆さ〜ん。カイトってグリーンピースが食べれな  
いんですよ」

カイト「なっ！？貴様！！」

刹那「それは駄目だな」

シルフ「戻った！？」

亮「大人なんだから」

優奈「子供に示しが付きませんよ」

鈴音「直しましょう」

ソウヤ「大丈夫、ヴィヴィオを直した実績があるからな」

カイト「あんなもん食えるか！！」

刹那「逃げるな！！」

貴哉「追え！！」

神『では決勝戦を始めましょう。救世主メシアの弱点はグリーンピース <  
ドスツ> ロン……ギヌス、だと？』

ばたり

鈴 side

俺もゼフィリスも連戦だな。まあ神のおかげで完全回復してるけど。

「じゃあやろうか、ゼフィリス」

「いつでもいいぞ、鈴」

「では早速、クリエイト・オブ・ワールド『創造世界』！！！！」

俺は世界を創造する。全力を持って倒す。そしてユリに優勝賞品をプレゼントしてやる。

「……………あれ？」

ゼフィリス何処だ？ちょっと探知してみるか。

「……………あれれ？」

いない。この世界にゼフィリスがない。まさかあの野郎、サイフアスで抜け出したか。世界を一度消すとゼフィリスがいた。

「おいこら！！逃げんな！！」

「あんなにお前が有利な土俵で戦えるか」

まあそうだが、戦闘ってそんなもんだろ。せつかくの決勝戦なのによ。しかしゼフィリスの魔力が増えてるな。リミッターを外したか。

「まあいつか。消える！！」

俺は鈴雲から砲撃を撃つ。ゼフィリスはそれを迎撃しようとサイフアスを振り下ろしたが。

「散れ！！」

「むっ！！」

砲撃はゼフィリスの剣が当たる直前に無数のレーザーに分かれた。そしてレーザーは四方からゼフィリスに向かっていく。

「ハッ！！」

しかしゼフィリスは干将莫耶でそれを叩き落とす。

「次はこちらだ」

ゼフィリスはそのまま斬り掛かってくる。近寄せたらマズイかな。

「オラッ！！」

「フツ!!」

俺は方天戟を創造して迎え撃つ。手数は向こうの方が上だが、破壊力と間合いはこっちが上だ。その程度の差で勝てる訳がないんだが。

「ウオオオオオオ!!」

突き、薙ぎ払い、叩き潰す。単純故に効果が高い。事実ゼフィリスも攻めあぐねて……

「ハアツ!!」

なっ!!? 弾かれた!?

「喰らえ!!」

次の瞬間、干将莫耶の姿が変わる。まるで翼のような大剣。オーバーエッジ状態か。

「フンツ!!」

「ラアツ!!」

方天戟と干将莫耶・オーバーエッジが火花を散らす。オーバーエッジは本来無理な強化で壊れやすいが、ゼフィリスが強化したそれは壊れる気配はない。寧ろ壊れるのは……

バキィン

俺の方天戟だ。

「そこだ!!」

「くそっ!!」

オーバーエッジを鈴雲でなんとか受け止める。しかし俺は吹き飛ばされてしまった。

「んなろ! レールガン!!」

「くっ!?!」

俺の撃ったレールガンがゼフィリスの干将を吹き飛ばした。

「もう一発!!」

「効くか!!」

さらに撃つが今度は避けられてしまった。流石に何度も当たってはくれないか。

「クリエイト・オブ・ワールド  
創造世界!!!!」

俺は再び世界を創り出した。

「またか」

ゼフィリスはサイファスを取り出し抜け出そうとした。だがそうはいかない。俺は世界を移動出来ないように弄った。

「むっ、転移出来ん」

「二度目はねえよ」

「そうか。ならそれでも構わん。ここで打ち倒す!!」

そんな事言つてられるのも今のうちだ。俺は先に陰陽玉の付いた棒を創り出した。

「それは!!」

「やっぱり知ってるか。さあいくぞ!!太極図!!」

世界中の力が俺に集まる。さあ倒してやろう。

ゼファイリス side

鈴の魔力が一気に上がる。魔力のみならずステータス全てが有り得ない程になっているだろう。

「ならば」

私は光に包まれ真祖の姫の姿となる。そして互いが踏み出した。

「ウオオオオオオ!!!!」

「やあああああ!!!!」

鈴の拳と私の爪がぶつかる。威力も速さも向こうが僅かに勝っているようだ。このままでは押し負ける。

「準備運動終わり」

「嘘っ!?!」

「全力いくぜ!!」

「速っ!!?!」

鈴は先程より更に速く、そして重い攻撃を放ってくる。仕方ない。あまり使いたくはなかったが。

「貴公の全力。我に届くか？」

「はっ、姫アルクにまでなれるか」

真祖の姫状態の私の髪は長くなり、服も純白のドレスとなる。ここまでしたのだ。勝たせてもらう。

「そら」

「フンッ!!」

私と鈴がぶつかり合う。力は拮抗している。そうではなくてはな。

「そこ」

「甘い!!喰らえ!!」

私の攻撃に対し、鈴はカウンターを入れてきた。だがそれを軽く受

け流す。

「フツ、その程度か？」

「なら、ギアを上げるぞ！！！！」

ここにきて鈴の力が更に上昇する。

「そろそろそろそろ！！！！どうした！防戦一方じゃないか！！」

「ちっ！あまり調子にのるな！！」

「うおらっ！！」

爪による斬撃を放つが、鈴は拳で打ち砕く。

「死ねえ！！！！オオオオオオ！！！！」

「砕けよ！！！！ハアアアアア！！！！」

互いの打ち合いが激しさを増す。爪がえぐり、拳が粉碎する。超再生のおかげで互いに倒れる事はない。だがその攻防も終わりを告げる。

「ハア・・・ハア・・・」

「ゼエ・・・ゼエ・・・」

タイムリミットだ。私も鈴も力に耐え切れず姿が元に戻った。とはいえ戦えない訳ではない。私は約束されし勝利の剣を創り出した。エクスカリバー

そして過剰な強化と魔力を籠める。

「おいおい、そりゃねーよ」

約束されし勝利の剣は強化と魔力に耐え切れず、輝が入り碎け散った。だが碎けたのは器。膨大な力は光の塊となり、私の手に収まっている。

「禁忌『フォーオブアカインド』」

鈴が四人になり銃に力を籠めている。

「秘剣」

「断罪ノ（ジャッジメント）」

「燕返し！！！！」

「光塵！！！！」

三つの光の斬撃と四つの巨大なレーザーがぶつかる。しばらく拮抗していたそれは、徐々にこちらが押していき、最後には全てを飲み込んだ。

「………やったか？」

鈴の力は感じられない。斬撃の跡にもその姿は見られない。もしかからも残っていないとしたら、神でも蘇生出来るのか？

ピシッ

「ん？」

何かに輝が入る音がした。音源であろう上を見ると、世界に輝が入っていた。それを確認した瞬間、世界は爆発した。

「あ……………ぐっ」

私は地面に倒れ伏している。なんとか生きてはいるな。まさか、世界が爆発するとは。鈴が死んだらああなるようになっていたのか？

カチャ

「チエックメイト」

「生きて……………いたのか」

「ああ、咄嗟に脱出したんでね」

鈴が私の後頭部に銃を突き付けながら言う。鈴の世界だから自分は出入りも破壊も自由という事か。

「私の……負けだ」

『勝者、神北鈴』

解説席

神『優勝は鈴くんです！おめでとう！！』

百合姫『キャー！！鈴、愛してる！！』

楔『鈴サイコー！！』

一真『ゼフィリスが負けたか』

カイト『あそこが鈴の世界じゃなけりゃ勝者は変わってたな』

遥『最終回のみ参加だったが、凄かったな』

要『戻ったら試合終わってるじゃないか』

龍斗『ドンマイ、ですね』



鋼牙「そっだよ！」

カイト「むう」

黄宇「二人共いい子だな」

シルフ「やっぱり愛でたい」

ヒスイ「ここにいたのか。帰るぞ」

シルフ「離して下さい」

遙「巻き込まれなきゃ面白い空間だな」

神『ではトーナメントは終わり。みんないい経験になったね。ではさようなら』

完結&200万記念企画第四弾 その7（後書き）

<秘密の植物園>

まーくん「家族集合ー!!」

アイラ「イエーイ!!」

リリ「わー!!」

まーちゃん「元気ですわね」

まーくん「こうして会うのは初めてですね、姉さん」

アイラ「そうだね。家族全員と会うのは初めてだもんね」

まーちゃん「なんだか不思議な感覚ですわ」

リリ「うん。姉妹なのにね」

まーくん「男は僕一人か」

アイラ「だったら昔ロリッ娘になったみたいに姿変えたら?」

まーくん「あれは僕とまーちゃんが一人じゃないと出来ません」

リリ「一人?どういう事?」

まーちゃん「私とまーくんは一つのオジギソウから別れた存在。—

人にならないと本来の力は出せません」

アイラ「なら一人になったら強いのか？」

まーくん「そこそこですよ。ちなみに次回作では一人になった僕らと要さんが戦う計画があるそうです」

リリ「凄そうだね」

アイラ「その時は私も父様も招待してね」

まーちゃん「もちろんですわ」

まーくん「次回のお話は要さんとお父さんのバトルだよ」

アイラ「父様が勝つよ」

リリ「どうだろね」

まーちゃん「結果は決まっているそうですが」

まーくん「では終わります。鈴さん、優勝賞品は次回作になったらいつでも使ってくださいですよ」

完結&200万記念企画第五弾（前書き）

要 VS ゼフィリス

ちなみにゼフィリスsideは黎音様が書いてくれるそうです。

## 完結&200万記念企画第五弾

神side

「ゼウス様、お茶が入りました」

「ありがとう」

書類整理も大変だな。要くんも同じような事してるのかな。

『神様、聞こえますか?』

おや、噂をすればか。彼から連絡とは珍しいけどどうしたんだろ。

「何か用かい?」

『ゼフィリスの世界に飛ばして下さい』

「………いいよ」

遂に決着か。ふふふ、これは面白い。早速飛ばしてあげよう。

要Side

「平和だ」

最近は非常に平和だ。事件も特になく、妻達との仲も良好。強いて言えば、最近の新人は根性無しという事か。しかしそれ故に。

「暇だ」

なんか面白い事あったけな。刺激があるような事は……

「そうだ、ゼフィリスだ」

あいつとの決着がまだだったな。ならやらないとな。こっちから出向くとするか。

「神様、聞こえますか？」

『何か用かい？』

「ゼフィリスの世界に飛ばして下さい」

『………いいよ』

これでよし。服も変えるかな。流石に陸士の服はマズイから、私服でいいか。

『いっくよ〜』

「お願いします」

俺の下に魔法陣が現れる。どんな事になるかな。

で、到着したはいいんだが……

「ゼフィリスに会わせろ!!」

「いきなり来て困ります」

まさか受付嬢が最初の壁とは。うーむ、うちの感覚でいたから油断したな。

「お前、一条ではないか？」

「ん？おお、シグナムさん。お久しぶり」

「久しぶりだな」

こっちの世界のシグナムだ。よかった、知り合いがいて。

「しかし、随分成長してないか？」

あつ、前会ったの俺時間で大分前だったな。

「ゼフィリスの知り合いだから」

「そうか。そういう事にしておこう」

納得してもらえたな。では早速。

「ゼフィリスに会いたいんだけど」

「あいつにか。今は任務だからな、しばらくすれば帰ってくる」

「なら待たせてもらっても？」

「構わんだろう」

よし、最初の壁突破だ。

「一条、私と試合する気はないか？」

「ゼフィリスとのケンカがあるから、すみません」

「そうか……」

休憩所に連れてこられて一時間したくらいだろうか。こっちのシグナムがゼフィリスを連れてやってきた。フェイトも付いてるな。

「よっ」

「お前からとは珍しいな」

「気にすんな。早速だが殺し合い（ケンカ）しようぜ」

「いいだろう。約束だからな。だが場所はどっする？」

「ここでは駄目なのか？」

あー、シグナムは俺の戦いを知らなかったな。

「俺らが戦うと大変だから」

「大変って、ゼフィはわかるけど……」

「要は私と同じような感じなんだよ」

「そっという事。場所なら用意してある」

というか神様が用意してくれたからな。俺らが全力を出しても問題ないだろう。

「なら行こうか」

「あつ、私も」

ゼフィリスと外に行こうとしたらフェイトがそんな事を言ってきた。

「駄目だ」

「えっ？」

俺とゼフィリスが同時に言う。神様の世界に連れて行くのは問題だし、それ以前に力のないものが俺らの戦いを観戦しようなどすると大変だ。何か防壁を張ってあるならともかく、俺らの攻撃が誤って当たると死にかねない。まあ俺の場合他の世界の人にあまり力を見せたくないというのがあるんだが。

「大丈夫だよ、フェイトちゃん。ちゃんと戻ってくる」

「………うん」

おうおう、熱いね。まあうちに比べたら負けるけどな。

「しかし一条はそれほどまでに強いのか。ますます戦いたくなっ  
たな」

「ははは、また機会があれば」

シグナムはどこでもバトルジャンキーだな。

俺とゼフィリスは人通りの全くない裏通りにいる。ここなら転移しても大丈夫だろう。

「神様、お願いします」

『お願いされました』

俺らの足元に魔法陣が現れ、俺らは転移した。転移先の世界は何もない荒野。神様が昔創った生物のいない失敗世界らしい。

「成る程、確かにここなら大丈夫だ」

「だろ。じゃあやろうぜ」

「いいだろう。行くぞ地べたす……………いや、もう地べたすりとは呼べないか。行くぞ、一条要。持ちうる力全て引き出す準備出来ているか？この身はお前の知らぬ奇跡で出来てると知れー！」

「言うね。お前の奇跡どころはわからん。ただ俺は全力を持ってゼフィリス・エーデルフェルトという存在を潰すー！」

こうして俺の人生最高の殺し合い（ケンカ）は始まった。

「身体能力100%解放！！魔力100%解放！！アルティメットワン発動！！アリストテレス、セットアップ！！」

《セットアップ。非殺傷設定解除》

流星は俺のデバイス。よくわかってるじゃないか。ゼフィリスはサイファスを持っているようだな。

「行くぞ。神速！！」

俺は真つ正面から近付き、拳を突き出した。予想通りサイファスで受け止められた。

「いい拳打だ」

「そうかよ。フッ！」

「っつと」

俺はあらかじめ口の中に用意しておいたニードルガンをゼフィリスの顔目掛けて吹いたが、顔をずらすだけで避けられた。一旦間合いを離そう。

「口の中に魔法とはな」

「口からビームみたいなもんだよ」

とはいえ、さっきには自信があったんだがな。なら次はこいつだ。

「ミニスライサー、四連！！」

「ほお」

俺が放ったのは十円玉程度の小さなシールドスライサー。殺傷能力は低いけど、斬撃能力は変わらず、当たり所によっては十分に人を殺せる。

「ハッ！！」

だがゼフィリスはそれをいともたやすく打ち落としてみせた。

「鍛練は怠っていないようだな」

「当たり前だ。俺にはO R Tがある。だが逆に言えばO R Tしかないからな」

そう、俺の強さはO R Tだ。O R T以外に特別な強さがないから俺は鍛練を続ける。

「では、次は私からだ」

ゼフィリスが走ってきてサイファスを振り下ろす。シールドを使い受け流すが、シールドは壊れてしまった。ゼフィリスはそこから切

り返し、胴を狙ってくる。

「限界突破、120%!!」

俺は身体能力を限界突破し、バク宙でなんとかそれを避けた。

「よく避けた。そうでなくてはつまらん」

「全力じゃなかったくせによく言う」

ただやっぱり人のままじゃ勝ち目はないな。

「ORT解放」

「出たな」

やはり水晶渓谷は空想具現化で食い止められた。

「Gyuaa!!」

（オラッ!!）

俺は脚で地面をえぐる。そして宙に舞った岩盤をゼフィリスに向かって吹き飛ばした。

「Gyuii!!」

（ほらよっ!!）

更に直感に従い後ろに脚を振る。そこには転移したであろうゼフ

イリスがいた。

「ぐっ!?!」

ゼフィリスは防いだようだがかなり吹き飛んだ。するとゼフィリスの魔力が増大した。リミッターを外したな。

「暴れ狂え!禁鞭!?!」

ゼフィリスが創り出した鞭を振るうと、鞭が周辺数kmを無差別に破壊し始めた。その光景は暴風のような。だが暴風程度にORTは止められん!!

「Gi?」

(ん?)

鞭が脚に絡み付いた。そして……

「Giiii!?!」

(おおお!?!)

一気に引きずられた。ORTを引きずれる鞭ってどんなだよ。

「Gyuuuuuu!?!」

(ならこっちから行く!?!)

俺は脚に絡まっている鞭を無視してゼフィリスに飛び掛かった。

「G y u a a a ! ! !」

(喰らえええ!!!)

「フンツ!!!」

だがゼフィリスは鞭を破棄し、新たに銃を創り出した。つて黒い銃ブラック身バレルじゃないか!!!

「撃ち抜く!!!偽・黒い銃身!!!」  
ブラックバレル

「G i i i i ! ! !」

(危なっ!!!)

俺が避けると地面から鎖が伸びて絡まってきた。この鎖は吸血鬼を縛るやつか。

「さあどうする?」

どうするって言われてもな。こつするしかないだろ。

(O R T 封印)

「むっ、戻るか」

さてと、O R Tになればまた縛られる。人のまま突っ込むしかない。とはいえ100%じゃ無理だ。120%でもキツイし、150%でも届くかどうか。多少無茶するしかないな。

「限界突破！！身体能力200%解放！！神速！！」

鎖を足場としてゼフィリスに向かって跳んだ。膝蹴りを叩き込んだ。

「くっ、重いな」

「防ぐ、な！！ORT部分解放！！」

「ちっ！」

腕をORTの脚に変化させて振り落とした。流石のゼフィリスもこれは避けた。

「ORT解放」

再びORTになっておく。これなら対応しやすいからな。

「もう鎖は意味なさそうだな」

『いんや、何度も解放と封印してたらこっちの体力が尽きるからな』

「そんなつまらない結末は嫌だな」

『同感だ』

ちなみに会話は俺は念話だ。

「では、再開するか」

『おつよ』

そつだ。最近気付いた事試してみるか。

「G y u i i i i i ! ! !」

(ニードルガン、八連!!)

「何!?!」

俺が使ったのはいつものニードルガンとは全くの別物。本来二連が限界だったのに八連。更にニードルガン自体の大きさも針どころか槍だ。

「ハアアアアア!!!」

ゼフィリスは一本の剣を創り出してニードルガンを斬り落とした。

「O R Tは魔法を使えないのではなかったか?」

『そつだぞ』

《私は使えますがね》

「デバイスか」

その通り。第一ニードルガンはアリストテレスがいないと全く使えないしな。ちなみにアリストテレスは俺に取り込まれた状態だ。

「斬る」

「G i i」

(潰す)

俺とゼフィリスが踏み込む。俺は脚を振り落とし、ゼフィリスは剣を振り上げた。結果は……

「G y u a!？」

(グアッ!?)

俺の脚が飛んだ。だがゼフィリスの剣も砕けた。

「布都御魂を砕くか」

布都御魂だと?どんなものでも断てるっていう剣か。まあいい、脚を再生するか。

「G i i i!？」

(再生出来ん!?)

「そうそう、再生の概念ごと斬らせてもらった」

どんだけ厄介だよ。再生の概念って事は傷をえぐっても無意味か。それにこれから受ける傷も治らんのか。

「まだまだやるぞ」

「G y u i i i i i ! ! !」

(絶対に負けるかよ!!!)

ゼフィリスは宝具の雨を降らせながら自らも攻撃してくる。俺は宝具は無視しながらゼフィリスの放つ攻撃のみに集中する。斬撃は極力避け、砲撃は当たる部分に魔力を集中させる事により防ぐ。

「耐え切れるか？逆行運河・創世光年!!！」

「G i i i ! ! !」

(チィ!!!)

俺はすぐに全魔力を防御に回し、守りの体勢に入る。だがスフィアが来ない。

「G i i i i ! ! !」

(囧か!!!)

俺は周りを囲む檻を破壊しようとした。だが攻撃ではなく捕縛を想定して創られたのか、想像以上に堅固で破壊に手間取ってしまった。手間取ったといっても数瞬の事。しかしゼフィリス相手には大きすぎる隙だ。

「終わりだ。約束されし勝利の剣<sup>エクスカリバー</sup> + 射殺す百頭<sup>ナインライブス</sup>!!!!」

「G y u a a a a a ! ! ! ! !」

(うおおおおおお!!!!)

九つの光のレーザーが俺に向かって飛んでくる。俺は体を削り、脚を飛ばしながらもゼフィリスに突進する。そしてゼフィリスの体に直接攻撃を叩き込んだ。

「ガハツ!!?」

「Gii.....」

(はあはあ.....)

ゼフィリスが吹っ飛んで砂煙が立っていた所の煙が突然晴れた。そこには長い金髪、白いドレスの女性。朱い月のブリュンスタッドが立っていた。

「見事だ一条要よ。その力に免じて我が全力を見せてやろう」

『お断りしたいがな』

「そう言うな。偽りの月よ」

朱い月、ゼフィリスが手をかざすと赤い、紅い、赤い月が落ちてきた。ゼフィリスが普段やるプルート・デイ・シュヴェスタアとは別物。破壊は、不可能。全快ならともかくボロボロの今ではやる気すら起きない。全ての力を守りに回す。

ドゴオオオーン

月が俺に直撃した。

生きている……ORT状態は解け、右腕は消滅。左腕も辛うじて皮で繋がっている程度。左足の骨も粉碎しており、体の至る所に穴が開いている。だが生きています。

《主！！》

『五月蠅い。生きています。さっさと補助しろ』

《まだやる気ですか！？》

「要、もう止めておけ」

元に戻ったゼフィリスが言う。悪いがただで引き下がるのは嫌ななでな。

『アリストテレス、やれ』

《………了解》

アリストテレスが俺の肉体を魔力で補強する。これで立つ程度なら可能だな。

「立つのでちつとではないか」

「う……………せ」

ゼフィリスが立っている場所。あれのある場所。問題ない。

「……………やれ」

ドストドストドス

「ガッ!?!」

ゼフィリスの体にくっつかの脚が刺さる。さっきの戦いでちぎれた  
ORTの脚だ。

「ぐっ……………遠隔、操作だと」

「はっ、自分の……………体の一部……………くらい、操れる」

ORTは脚がちぎれた場合、何故か俺が元に戻っても脚だけ残る。  
そしてその脚は単純な操作なら離れていても可能だ。

「あ……………も、駄目」

「まさか……………こうなる、とは」

俺とゼフィリスは同時に倒れた。ゼフィリスの場合脚が邪魔で倒れ  
ようがないんだけど……………

「あーあ、君達やり過ぎだよ」

パチン

神様が指を鳴らすとゼフィリスに刺さっていた脚が消え、俺とゼフィリスの傷は一瞬で治ったそうさ。なんでそうだかと言うと、俺は気絶していてアリストテレスに聞いたからだ。この後俺とゼフィリスはそれぞれ元の世界に帰されたそうさ。まあとりあえず

いい戦いだった。

完結&200万記念企画第五弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「アリシヤの部屋、はっじまるよー」

シヤ「今回は要くとゼフィリスさんの戦いだったわね」

ア「これで一勝一敗一分ね」

シヤ「凄い戦いだったわね」

ア「まあ要は最後なんてかなり無茶してたしね」

シヤ「そういえば、私達の仕事もそろそろ終わりね」

ア「まだ少し残ってるわよ」

シヤ「そうだけど……」

ア「シヤマルさんの言いたい事はわかるわ」

シヤ「次回作の後書き、どうなるのかしら」

ア「それは作者が考えてるわ。どうせまた本編で目立ってないキャラがやるわよ」

シヤ「そうね。私達は私達の仕事を頑張りましょう」

ア「次回の後書きで私達の仕事は最後だしね」

シャ「全力でやるわよー!!」

ア「おー!!」

完結&200万記念企画第六弾(前書き)

なんとか書いたぜ・・・

## 完結&200万記念企画第六弾

要side

「今日はここまで、解散」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

訓練が終わったのに返事もなしか。それ以前に立ててもないとは、情けない。

「一条陸将補、やり過ぎでは・・・・・・・・」

「やり過ぎ？又ルい事言っでんじゃねえ。あいつらが将来相手するのは犯罪者だ。人殺しをなんとも思わん凶悪犯を相手にするかもしれんのだぞ」

「そうですが・・・・・・・・」

「まっ、そんな奴はそうそうくビー　ビー>・・・・・・・・」

「し、侵入者？」

「うるたえるな」

全く、人がいい事言っでんの誰だよ。俺が出てさっさと倒してやるか。

「何処にいるかな」

《主、お気をつけて》

「大丈夫「むっ、そこにいたか」帰れ!!」

隊舎の中を侵入者を捜して歩いていると、角から一組の男女が出てきた。そいつらを見た瞬間ついつい帰れと言ってしまった。

「帰れ、とは大層な挨拶だな」

「ハハハ……」

「なんでお前らがいる。アキラ、six」

こいつらとは関わりたくないんだよ。絶対死にかける。

「実は僕と戦って欲しいんだけど」

ほらやつぱり。

「断ったらお前の彼女さんが怖いからな。やってやるよ」

「よく見ているではないか」

よく見ているも何も、殺気びんびんだぜ。断ったら半殺しにしてでも連れていったら。

「で、場所は？」

「神にでも頼め」

「よろしく」

「おいおい、神様をそんなパシリみたいに『いつくよ』おい」

この神様、始めから見てやがったな。まあいい、場所の確保は出来たし、治療要員も出来た。

『飛んでけ』』

足元に魔法陣が現れ、俺達は飛ばされた。場所はこないだゼフィリスと戦った荒野だ。

「身体能力100%解放。魔力100%解放。アルティメットワン発動。アリストテレス、セットアップ」

《セットアップ》

ゼフィリスとの戦いからそんな時間経ってないのにまた全力勝負をする事になるとは、だがやるからには勝つ。

アキラside

(本当に我の力はいらんのだな)

(うん。僕だけで勝ってみせるよ)

(泣きついてきても助けんからな)

そう言ってもう一人の僕の意識はなくなった。これでいい。最初は

ORTに手も足も出ずにもう一人の僕が終わらせた。二度目は出さ  
せてももらえなかった。今回は僕の力で勝つ。

「さあ行くよ」

「まだ仕事があるんでな。さっさと潰す」

僕は魔力剣を創り出し、斬り掛かった。要はそれを避け、針のよう  
な魔力弾を撃つ。

「ニードルガン、二連!!」

「甘い!!」

この程度なら簡単に落とせる。

「なら、120%解放!!神速!!」

要の動きが一気に速くなる。対応しきれない速度ではないけど。

「!!」

「ふっ!!」

要の拳を魔力剣で受け止める。

「150%!!」

ピシ

要の攻撃の威力が更に上がる。魔力剣から嫌な音が鳴る。

「200%!!三!!!!」

バキィ

「ちっ!!」

魔力剣が完全に折れる。

「ついでだ!!ORT部分解放!!」

「ぐあっ!?!」

要の背中から生えたORTの脚が僕を襲う。魔力剣二本を創り何とか防いだけど、吹っ飛ばされた。

「まだまだ!!」

「させるか!!」

追撃してきた要の攻撃を避けながら、要の体を斬り裂いて駆け抜けた。

「つつ!!?!」

そこから更に斬ろうとしたものの、ORTの脚が邪魔をして出来なかった。その間に要の体は再生していた。

「痛いな、おい」









「Gyu a a a a ! ! ! !」

そういえばこいつの眷属の中にいるって聞いたっけ？まあそんなものはどうでもいいか。

「Gyu a a a a a ! ! !」

敵のORTが攻撃を仕掛けてくる。ただただ暴力を振り撒くだけのそれは……邪魔だった。

「Gii ! ! !」

(失せる ! ! !)

「Gyu i i i i i ! ! ?」

俺の脚が敵のORTの体を貫く。同じORTでも俺の場合攻撃や防御の時、その部分に魔力を集中させる。ただ暴れているだけの獣と変わらん敵のORTはそんな事はせず、常に魔力を全身に回している。その差だ。

「Gi ?」

(む ?)

周りから突然鎖が出てくる。空想具現化か？だがゼフィリスのそれに比べたら虚言にも届かん。

「Gyu i i i i ! ! !」

(ハアアアアア!!)

ORTを投げ捨て、鎖を薙ぎ払う。

「やはりただ暴れるだけのORTと出来損ないの真祖では無駄か」  
脚を引き抜き、傷も再生した魔王が言う。

『やっとお前の出番か?』

「くくっ、いいだろう。力の差を見るがいい」

『あんまり舐めんなよ。三度目の正直だ。今回は勝つ』

「二度ある事は三度ある、だろう」

魔王が走り出す。アキラとは桁違いの速さだ。

「フンッ!!」

「Giii!!」

(オラッ!!)

魔王の剣を避けながら脚を振るう。だがそれをあっさり受け流され、脚を斬り落とされた。

「Giii!!」

(いけ!！)

俺は今落ちた脚とさっきアキラに刺した脚の二本を操作して魔王に飛ばす。

「遅い」

しかし脚は魔王に細切れにされた。相変わらず厄介な奴だ。俺から離れたとはいえ、ORTの脚をあもたやすく斬るとは。とりあえず斬られた部分をえぐって再生出来るようにする。

「Gi」

(いて)

やっぱり痛いな。とにかく再生っと。

「準備は済んだか？」

『待つてくれてご苦労さん』

どうしたもんかな。一点集中で攻撃すれば貫くのも不可能じゃないだろうけど。

「ボサツとするな」

「Gi!?!」

(ぬおっ!?!?)

あいつ魔力で斬撃飛ばしやがった。もう少しで当たったぞ。

「G y u i i i i ! ! ! ! !」

(シールドスライサー、10連!!!)

俺が創り出したのは直径数十mの円盤。それを十枚。斬撃能力も強度も数倍になっている。

「面白い。だが、脆い!!!」

魔王が剣を一振りすると、そこから放たれた魔力波で吹き飛ばされた。その間に俺は後ろに回り脚を突き出す。

「G y u a a a a a a a ! ! ! ! !」

(うおおおおおおお!!!)

「ハッ!!!」

しかし魔王は振り向き様に剣を振るってきた。

(ORT封印!)

俺はそれに合わせて人に戻る。当然魔王は空振り、俺はその隙に攻撃しようとしたが………

「二度も通じんわ!!!」

「ゴフッ!!!?」



(神速でいけるか?)

感覚を引き延ばすあれなら死徒の反応速度にも着いていけるだろう。しかし、ただの神速では駄目だ。神速の『二段掛け』。これなら魔王にだって対抗出来るはず。問題はO R T状態での神速の未使用と、二段掛けの初挑戦って事だ。

(やるしかない)

「終わりにするぞ」

魔王が構える。覚悟を決めるしかない。

(神速二段掛け!!)

魔王 s i d e

我が魔皇剣を振るう。しかしO R Tはそれをあっさりと避けおつた。何故突然? いや、確かに固有結界を他の能力に回したO R Tはそれだけの動きが可能だろ。だが人である要の脳が私の動きに対応できるのか?

「G y u a a a a a ! !」

「ハアアアアア!!」

迫ってくるO R Tの攻撃を避け、連撃を放つ。O R Tはその連撃を見切り避けている。間違いない。完全に反応速度が上がっている。

「そうでなくはな!!」

「Giiiiiii!!」

ORTの脚と我の魔王剣が何度もぶつかると。本気で斬っているためか、ORTの脚も耐え切れず外殻が砕けていつている。

「Gyuaaaaaa!!」

だがそのような事にせずORTは脚を振るいつける。受け流し続けるうちに、一瞬だが動きが鈍った。我がそんな隙を見逃す訳もない。

「よく頑張った」

我は賛辞を送りながら魔王剣を正眼に構える。そして神速の踏み込みで全力で振り下ろした。ORTは守りに入ったが、その守りごとORTを両断した。

「.....やり過ぎたか？」

あまりに威力があつた為か、我の固有結界も斬れたようだ。それ故固有結界は砕けてしまった。

「ああ、やり過ぎだよ」

「神か」

「どいたどいた。そこでスプラッタしてる要くんを治すんだから」

うーむ、確かにこれは治さんといかん。肩から股下までバツサリだ。そうだ、戻っておかんな。

神side

全くもう、加減が出来ないのかね。……よし、治った。

「さて、どうだった？アキラくん」

「えっと、まだ未熟だなって」

「ハハハ、そうかい」

しかし彼も頑張ったね。ただ剣術のみでよくORTを斬ったもんだ。

「お疲れだな、アキラ」

「six……結局僕じゃ勝てなかったよ」

「何言っておる。見事な剣術だったぞ」

「そうかな」

「ああ」

そう言ってアキラくんを抱きしめる六王権。アツアツに見えるけど、僕の直感が叫んでいる。アキラくん逃げてく、と。

「だがな」

ミシミシ

「痛い痛い!!! Six痛い!!!」

「あの脚程度も避けれないとは、修行が必要か？」

「いやー!!!ごめんなさい!!!」

ああやっぱり。まあ仕方ないよ。今の彼の實力じゃあORTの相手はキツイし。第二魔法を使おうと眷属を使おうと無駄だったろうしね。

「じゃあ飛ばすね」

「ちよっ!?! 助けて!!! 神様でしょ!?!」

「六王権の相手をしると? 断る!?!」

「えー!?!?」

そりゃ普段通りの六王権と戦えば勝つ自信はあるよ。でも今の六王権相手じゃ死ぬよ?

「さよなら!?!」

僕は魔法陣を削って二人を飛ばした。

「行きました？」

「起きてたの？」

もう意識を取り戻してたんだ。早いね。

「なんで寝たフリなんか」

「いや、なんか、アキラの不幸が心地よかった」

「……」

いやらしい趣味だね。

「いやらしくないですよ」

「神の心を読まないですよ」

## 完結&200万記念企画第六弾（後書き）

<アリシヤの部屋>

ア「皆さんこんにちは」

シヤ「今回で<アリシヤの部屋>も最終回です」

ア「次回の後書きは作者の感謝の言葉だからね」

シヤ「さあ今回は、やっぱり負けた、一条要」

ア「作者の中じゃどう頑張っても勝てなかったそうよ」

シヤ「ちなみにアキラくんは勝たせようと思えば勝たせれたそうよ」

ア「魔王が出したかったんですって」

シヤ「次回は座談会ね」

ア「更新は何時かしら？」

シヤ「さあ？」

ア「気長に待って下さいね」

シヤ「じゃあ最後の挨拶ね」

ア「今までこの<アリシヤの部屋>を読んでいただきありがとうございました」

ございました」

シャ「地味で本編に出れない私達でしたが、皆さんのおかげで後書きの顔としてやってこれました」

ア「次回作の後書きはどうかかわりませんが、どうか私達の事は忘れないで下さい」

シャ「今まで、本当にありがとうございました」

ア・シャ「さようなら!!」「」

**完結&200万記念企画第七弾(前書き)**

多分全員出演してると思います。

皆さんありがとうございました。

## 完結&200万記念企画第七弾

飛行機内

神『始まりました、最後の座談会。皆さん元気ですか?』

遙「元気は元気だが」

貴哉「なんで飛行機の中?」

神『それは目的地がハワイなのと、一真くんが関係あります』

一真「俺?」

要「手紙を作者から預かってる。そこな新キャラ。読んでくれ」

ライト「新キャラ言うな。確かにここの出演は初めてだが」

百合姫「とりあえず読んでよ」

ライト「えっと」一真へ。今まで君を出す度に落下させてごめんなさい『』

一真「気にしてたのか」

ライト「『だから飛行機を消してみんなにも同じ気持ち味わって貰います』って、なんだこ、りゃー!?!?」

ヒスイ「マジで消えやがった!?!?」

刹那「飛行機いきなり消滅ってどんな原理だよ!？」

優奈「お兄ちゃん!！」

恭介「しっかり掴まってる!！」

要「ゼフィリス、ここ上空何mだ？」

ゼフィリス「さあな」

遙「何平然と話してる!！」

百合姫「鈴、怖い」

鈴「びつくり体験だな」

カスミ・薫「貴史」

貴史「動きにくい」

オルタ「ゼクト、離れろ」

ゼクト「それはこちらの台詞じゃ」

ソウヤ「こんな所で喧嘩するな!！」

黄宇「鋼牙、ツカサ、しっかり掴まれ」

鋼牙「うん!！」

ツカサ「ひええ〜!!」

カイト「愉快だな」

一真「俺のせいか？俺のせいなのか？」

一同『うん』

一真「orz」

紅蓮「ここがハワイか」

飛翔「よく全員無事だったな」

吼太「魔法とかで飛んだりしたしな」

水雞「一部根性で生身着地だけどね」

優「生きてて、よかった」

レイ「んだよ、情けないな」

ヴィード「これが普通じゃ……………」

龍斗「彼らに普通はありませんよ」

アリシア「そういえば今回キャラと作品紹介ないね」

要「もう疲れたそうだ」

鈴音「手抜き？」

アリサ「そうね」

神『皆さん、無事ですね？無事ならコンサート会場にお越し下さい』

リニス「コンサート？」

すずか「もしかして」

アインス「前回のあれ、だな」

遙「あれ？」

鈴「見りゃわかる」

優「まさか二回目とは」

まーくん「レディース&ジェントルマン&チーターズ、今回も始まりました、あの伝説ユニットによるコンサートが」

久遠「みんな、元気？」

元気〜！！

フィーラ「た、楽しんでる〜？（またこんな事をするとは）」

楽しんでる〜！！

まーちゃん「最後まで見てくれる〜？（キヤー、キヤー、優さんが私見てる〜！！）」

見る〜！！

楔「じゃあいくわよ」 四人揃って

四人「 Valkyrie ヴァルキリーウィッチーズ Witchess!!!」

うおおおおおおおおおおお！！！！

six「この五月蠅い声は何処から聞こえるのだ？」

アキラ「気にしたら負けって言われたよ」

吼太・リーム・刹那・恭介・優奈・亮・遥・ライト「……」

シルフ「前回いなかった組が固まっていますね」

要「流石にカイト組は大丈夫か」

紅蓮「いや、驚いてはいるぜ」

鋼牙「楔お姉ちゃん可愛い」

楔「ありがとう」

要「吼太、詩音になってやったらどうだ？」

吼太「断る!!」

飛翔「俺、ちょっと出てくる」

鈴音「いってらっしゃい」

飛翔「街は普通だな」

ライト「そうみたいだな」

飛翔「なんている？」

ライト「あんな所にいたらおかしくなりそうで……」

貴史「そんなんじゃないこの作品とコラボは出来ねえぞ」

亮「確かにトーナメントは異常だったけど」

飛翔「お前らもか」

貴史「酒を買おうかと」

亮「料理の食材を」

飛翔「飯が楽しみだな」

カイト「なかなか面白い催しだったな」

s i x「少々騒がしかったがな」

アキラ「前はあんな歓声なかったからね」

ゼフィリス「慣れれば大丈夫だろう」

s i x「慣れる時がない」

一真「s i xがそんな所に行くのは想像出来ないよな」

カスミ「確かに」

薫「そやね」

鈴「いいライブだった」

百合姫「そうね」

ツカサ「凄かったよ」

鈴「………ちよっ、なんでツカサを抱えてる！ずるいぞ！」

百合姫「渡さないわよ」

ツカサ「あわわ、喧嘩は駄目ですよ」

百合姫「ほら、ツカサもこう言ってるし。吼太あげるから」

吼太「そこで俺!？」

鈴「ちっ、なら詩音にして」

吼太「詩音ならいけないけど」

鈴「なら女装で着せ替え人形だ!!」

吼太「嫌だー!!」

遥「哀れだな」

水籬「あんたも性転換する?」

遥「なんでだよ!？」

紅蓮「似合うだろ?」

遥「黙れ!!」

まーちゃん「優さーん」

詩音「優お兄ちゃん」

優「ちよつと、二人共。暑いんだけど」

まーちゃん「いいではないですか」

詩音「うんうん」

ソウヤ「リア充だな」

貴哉「お前も二人に引っ付かれて、っっていない？」

ソウヤ「買い物に行った」

アリシア「魚は眼が生き生きしてるのね」

オルタ「難しいな」

アリサ「何がよ」

すずか「ほら、葉物はこういふのだよ」

ゼクト「……………わからん」

リニス「二人共しっかり勉強して下さい」

オルタ・ゼクト「むう」

刹那「ほら、俺も手伝うから。ソウヤに美味しい飯作るんだろ？」

フィーラ「主婦（夫）だな」

アインス「ふーむ、苦労してるのだな」

龍斗「ええ、まあ」

黄宇「何を話してるのだ？」

龍斗「いえ、たいした事ではありませんよ」

鋼牙「黄宇お姉ちゃん、遊ぼう」

久遠「早く早く」

黄宇「うむ、わかった」

アインス「ちゃんとした姉ではないか」

龍斗「ずっと一緒にいればわかりますよ」

カイト「飯だ!!」

貴史「お前そんなテンションのキャラだっけ？」

カイト「ノリだ」

一真「ノリなら仕方ない」

貴哉「仕方ないのか？」

アリシア「ねえ、あそこのテーブルの空気があれなんだけど」

飛翔「あそこ、って……」

要「お前らと酒呑んで話すのは初めてか？」

ゼフィリス「アキラを含めては初めてだな」

アキラ「そうだね」

要・ゼフィリス・アキラ「……」

要「次の戦いでは潰す」

ゼフィリス「ほざけ若造。私をあまり舐めるな」

アキラ「斬り刻むよ。徹底的にね」

要・ゼフィリス・アキラ「……」

鈴音「凄く……怖いです」

刹那「何あれ」

遥「地獄？」

ライト「あれには近寄りたくないな」

亮「料理出来ましたよ」

要・ゼフィリス・アキラ「「ありがとう」「」

鈴・百合姫「「勇者だ!!」「」

すずか「……料理は偉大だね」

アリサ「その考えもどうかしら」

吼太「あれもこの座談会のデフォ？」

レイ「いや、あんな事は初めてだ」

まーくん「お父さん……」

神『せつかくの座談会なのにな』

薫「ほら貴史、あーん」

カスミ「酒を注ぐから、ほら」

貴史「あーんは止めてくれ。酒は頼む」

薫「うちの飯は食えんのかー!!」

貴史「酔っ払いだよ」

オルタ「ああいうのがいいのか？」

ゼクト「やってみるか」

ソウヤ「そんな事しなくても俺は一人が好きだからな」

オルタ・ゼクト「／／／／」

恭介「タラシだな」

優奈「そうだね。お兄ちゃんもあんなにならないでね」

恭介「ああ」

一真「わからんぞ。そういう奴程、な」

恭介「おい!？」

ヒスイ「誰か角煮食べるか」

遥「じゃあ貰う」

シルフ「いっぱいありますからね」

優「これはなんの肉なのさ」

ヒスイ・シルフ「アクティブタ」

まーちゃん「なんですか、それ？」

ヒスイ「別名ブウサギだ」

ライト「ふーん」

久遠・鋼牙・ツカサ「うまうま」

黄宇「和むな」

刹那「ああ全く」

貴哉「いいな。数少ない癒しだ」

神『そろそろ記念撮影しようか』

亮「でへへ／＼／」

鈴音「先生、亮くんが酔っ払ってます」

神『子供の体でお酒呑むからだよ』

飛翔「しかもう記念撮影か」

要「前回の半分だな」

まーくん「作品紹介がなかったですからね」

吼太「まあやつか」

リーム「配置はどうする？」「貴史」主役が中心だろ」

久遠「私、要の隣」

楔「少なくとも私達『チートじゃ済まない』キャラはメインポジね」

ソウヤ「それが決まれば後は適当に」

フィーラ「では楔の隣だな」

一真「なら俺ここな」

ゼフィリス「ではここで」

アキラ「s i x、ここでいいかな？」

s i x「アキラと一緒になら何処でも構わん」

カスミ「私は貴史の右で」

薫「うちは左な」

貴史「ならそれでいいか」

遥「ここでいいかな」

ライト「新参だから少し後ろに」

ソウヤ「オルタ、ゼクト、ほらこっち」

オルタ「うむ」

ゼクト「人数多いのお」

まーちゃん「優さん、一緒に」

詩音「優お兄ちゃん、隣いい？」

優「うん、いいよ」

レイ「俺は、適当に前で」

ヴィード「マスターの肩に乗ってます」

貴哉「この場所でいいか」

カイト「ならここ」

水籬「私隣ね」

龍斗「私は後ろで」

黄宇「では私も隣かな」

鋼牙「僕黄宇お姉ちゃんの隣」

紅蓮「俺適当でいいわ」

飛翔「俺らどうする？」

アリシア「ここでいいんじゃない？」

すずか「そっだね」

アリサ「飛翔の周りは私達ね」

鈴音「では私はここに」

リニス「私達は適当に近くに」

アインス「それで構わんかな」

吼太「ここでいいな」

リーム「うん」

亮「ここで」

優奈「お兄ちゃん、こっちこっち」

恭介「おう」

百合姫「鈴、ツカサ、一緒に撮りましょ」

鈴「もちろんさ」

ツカサ「はい」

刹那「俺ここな」

ヒスイ「ここがいいかな」

シルフ「そうですね」

まーくん「僕はここに」

神『じゃあ要くん、合図お願い』

要「あいよ。はい、チーズ」

カシヤ

## 完結&200万記念企画第七弾（後書き）

皆さん、今まで『チートじゃ済まない』をご覧頂き誠にありがとうございました。ございました。

始めた時はここまでこれるなんて考えてもいませんでした。正直10万アクセスいけばいいな。なんて考えてました。

初めてコラボして以来、様々な方とコラボして頂きました。コラボ数だけはこの作品の自慢です。

皆さんに支えられてここまで来れました。コラボして下さった皆さん。感想を下さった皆さん。そして最後まで読んで下さった皆さん。本当にありがとうございました。

ただ『チートじゃ済まない』は終わりません。次回作『チートじゃ済まないinnネギま』があります。是非ご覧下さい。

雨「さて、終わった」

要「感慨深いな」

雨「ただ最後にやらないといけない事が」

要「ああ、あれか」

雨「おうよ。そこでいじいじしてる二人!!」

ア「何よ」

シャ「私達に用ですか？」

雨「次回作の後書き、やるの？」

ア・シャ「……へっ？」

雨「正直今更後書きキャラ変えんの面倒なんだよ。前回感動のラストなんかやってたが、次回作まで着いて来るのか？」

ア「し、仕方ないわね!! 私達の力が必要なんですよ!!」

シャ「そ、そうですね!! 仕方ないですね!!」

要「そのわりに笑顔だな」

雨「ならいざ行かん! 次回作へ!!」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2102/>

---

チートじゃ済まない

2010年10月17日19時49分発行